
星のない夜空の下で

広瀬 龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星のない夜空の下で

【Nコード】

N2442E

【作者名】

広瀬 龍

【あらすじ】

何かを守るために、何かを捨てることは正しいのか。誰かを護るために、誰かを悲しませることは間違っていないのだろうか。迷いながら、苦しみながら。彼らはそれでも前に進み続ける。それは少年たちの、少し歪な物語。

〔零話〕 始まりの夜（前書き）

気づかなかった世界の広さ。

気づかなかった、仲間の心地よさ。

〔零話〕 始まりの夜

漆黒の闇の中、それに溶け込むほど真っ黒な髪を風になびかせて少年はただ目の前に広がる神秘へと意識を向けていた。

そこには今までの人生において一度として見る事がかなわなかったもの、海が広がっている。月明かりさえない水面は本来の海とはかけ離れたものに変わっていたが、海を知らない少年はこれが海なのかとただ感動に心を震わせるばかりで、別段違和感を抱かなかった。

「……何してるの、真紅。さっさと行くよ」

不意に背後から声をかけられ、少年は首だけを動かし、振り返る。機嫌が悪そうに眉をしかめた少女。腰ほどまで伸びた長髪と闇の中でもよくわかる白い肌はその存在を認識していなければ幽霊であるかのような、不可思議な感覚を少年に与えていた。

「わかってる。そう急ぐなよ」

暗闇の慣れない砂浜に足をとられながら、それでも少年はしっかりと彼女に向かって歩き出した。

少年の瞳は少女を見据え、少女もまた少年を見つめたまま動かない。少年の緩慢な動きを見守っているのか、ただ彼を待っているのかは少年にはわからないが、彼は彼女の前にたどり着くとそっと右手を差し出した。

「……なんて言えばいいのかわからないけど、これから、よろしく頼む。愛美」

少女はさほど困っていないような、けれど心底面倒くさそうなため息をついて、けれどしっかりと彼の右手を握り締めたのだった。

肌に張り付く熱は、一言でいうと鬱陶しい。今まで夏というものは風が暑く日差しが強いただけだと思っていた真紅にとって、都会の夏、というものは実に憂鬱なものだった。

都会は彼が今まで住んでいた場所に比べ、圧倒的に緑が少ない。白く高いビル、ガラス張りの店。知識としては知っていたはずのものだが、実際に見てみるとすごく興味をそそられた。

しかし夏の鬱陶しさが彼の好奇心をどこか遠いところへと連れ去ってしまう。

「そんなに違和感あるもんか？ お前だって七年前まではこっちに住んでたじゃねえか」

隣を歩く学生服の少年は同じ視線で片目をつぶり、思い出したようにあくびを漏らした。

線の細いその男は真紅にとって旧知の友だった。いつ頃からの付き合いなのかと問われれば、わからない、と答えてしまうほど古い付き合い。それゆえに互いのことはよく知っている。

「あっちでの生活が長かったからな。慣れの問題だと思う」

ふむ、と興味深そうに首をかしげ少年は片手に携えていた鞆に手を突っ込む。真紅がその行為を問おうと思うより先に、少年は手を突き出しその手に握ったものを差し出した。

「ほれ、団扇。二つあるから貸してやるよ」

奇抜なキャラクターが描かれた小さな団扇に真紅は一瞬、動きを止めてしまった。その前衛的なデザインもさることながら、それを差し出した少年の悪戯っ子のような表情も真紅の手を止めた原因になっていた。

つまりは暑いほうをとるか恥ずかしいほうを取るか選べ。そう言いたいのだろう。

気まぐれのようにやってくる茶髪の悪戯に小さく苦笑して、真紅は彼の差し出した団扇を受け取った。

「お、思った以上に簡単に取ったな」

「お前の思い通りに行動してやるのが、少しむかついただけだ」

正直な気持ちを告げると、少年は可笑しそうに笑い、自分も団扇を取り出した。

その団扇は太陽と向日葵が描かれた、いたって普通の団扇だった。気まぐれな親友の背に苦笑を向けて真紅は歩き出す。普通の学生として学校に通えるなどは夢にも思っていなかった彼にとって、この一時はとても重要なものでもあった。

真紅の望んだことでは、いや、誰一人として望んだことではないとしても、この学生生活はきつと、とてもすばらしいものになるとだろう。

本当に見つめなくてはならない問題からは目をそむけ、今だけはただ普通の学生として歩こう。そう心に決める、深紅であった。

〔零話〕 始まりの夜（後書き）

これだけではさっぱり内容がわからないと思います。実は作者自身、どういってお話にしようか迷っていたり……。

ですが持ちうる限りの力を出し切って、お話を作っていきたいと思えますのでこれからもご覧いただけたら嬉しいですよ。

「一話」 隠された里（前書き）

友達がいる、仲間がいる。

それがどれだけ救いになったのか、少年はまだわかっていなかった。

【一話】 隠された里

事の発端は今から三ヶ月前、ある山の奥深くから始まった。

都道府県なんてさっぱりわからない真紅はともかく、ほかの誰に聞いたところでその場所がどの都道府県にあるのかわからない。一種の秘境と化していたその場所に、真紅は暮らしていた。

「おい、爺さん。蒔き割り終わったぞ」

額に浮かんだ汗をぬぐって、真紅は背中森へと声を投げかける。深い森のおかげでさほど日差しを気にする必要がないが、運動後の体は正直なもので少しだけまぶしく感じられた。

「……そこら辺につんでおけ〜」

遠くから少しエコーをもって伝わる老人の声。半径五十メートル程度にはいるとは思ったが、音の反射がひどく前からなのか後ろからなのか判断ができないほどだった。

言われたとおり適当に薪を積んでおいて、真紅は硬くなった体をほぐすように大きく伸びをする。真上以外はほとんど空が見えないけれど、その隙間からのぞく空があまりにも澄んでいて、真紅は自然と空に向かって手を伸ばしていた。

手を伸ばしたところで何が手に入るわけでもない。そこにあるのは空気だけだ。そんなこと無学の真紅にだってわかつている。

それでも何故か、手を伸ばしたくて仕方がなかった。

「……もし、この手もつと大きかったら」

大切なものを守ることができたのだろうか。

感傷に浸りそうになった自分を振り払うよう、真紅は手を下ろす。自然と力がこもる手は、いつの間にか硬く拳を作っていた。

少し冷たい風が吹き抜ける。三月に入ったばかりの風は汗をかけた肌には心地よく、疲れていた体にはほどよい活力が戻っていた。

「ほお、ずいぶんと大量に斬ったではないか。これだけの量があれば十分だ」

「……自分は力仕事しないで、何をやってたんだよ、爺さん」

ようやく姿を現した老人に苦情を訴えるが、老人は真紅の苦情などどこ吹く風。薪をひとつ取り上げると、質を確かめるように眺めた後、満足そうに頷いた。

腰が曲がっているわけではないのに背の高くないその老人は、腰まで届く白髪をひとつに束ね、垂れ気味の目をやさしく細める。

「しっかりとした断面だ。筋肉の使い方をちゃんと考えているようだな」

「そんなこと、考えてもいねえよ」

謙遜ではなく、本当に何も考えず斧を振るっていただけだった。子供のころから続けていた薪割りには、いつの間にか鍛錬の一環となり、何を考えるでもなく筋肉がついてしまった。

外見的には肉付きがいいとは言えない。むしろ少し線が細いと言われている。

「引き締まった体、といえば聞こえはいいが、お前の場合は生まれつきのものだからなあ」

「うるさい。あんたの背が小さいから、それが遺伝したんだよ」

「背は関係がないと思うのだが……まあいい。そういうことにしておこう」

真紅と老人はこの世にいる唯一の家族だった。

真紅の両親は七年前、彼が十歳の頃に亡くなっている。それからというものは老人、祖父に引き取られ、山の奥深くにある隠れ里で生活を送っていた。

元は都会の中心部に住んでいただけに、初めの頃は違和感を感じていた。それが一年、二年と経つうちに澄んだ空気と綺麗な自然に感化され、次第とこの隠れ里に溶け込んでいった。

今では里の老人たちに絶対の信頼を置かれている。

「ところで、今日は嬢ちゃんたちが来る日だったと思ったが、間違っていたかな？」

「……あ」

大事なことをすっかり忘れていた孫を楽しそうに眺めて、老人は薪の山に腰を下ろし、懐から小さな水筒を取り出した。

「ほら、行ってこい。すっぱかしたらわしらにまで厄介ごとが回ってくるだろうが」

その恐ろしさを思い出したのか、祖父は小さく身震いしてもう一度真紅を促した。

真紅としても、わざわざ地獄を見るつもりはない。お許しが出たのだから急いで出迎えに行くつもりだった。

脱ぎ捨ててあった上着を羽織り、走らない程度の速さで森を駆けしていく。靴越しに感じる土の感触は、まだ完全に目が覚めていない草木の息吹みたいで、とても安心する。

森を抜けていくとおよそ現代のものとは思えないような、木製の住居が立ち並ぶ集落があった。整えた土の道路、その左右を五つずつの民家が囲んでいる。民家の先には森がなくなり、人間が生活しているとわかる場所は、この一帯以外は存在していなかった。

そんな環境だけに、外部との交流などないに等しい。やってくる人間は祖父たちが依頼した卸売業者か、もしくは

「おっそいぞ、真紅。待ちくたびれちゃったじゃない」

怒っているのか拗ねているのか、判断しかねるその声に真紅はかすかな眩暈を覚えた。

「べつにいいじゃないか、愛美。真紅が時間にルーズなのは今に始まったことじゃないし、なによりここに住んでたら時間の感覚なんてすぐなくなっちまうって」

「なによ、空。真紅が遅れてきたのは確かなんだから。それに、時間の感覚をつけさせるために腕時計を買ってあげたんだからそんな理由にならないわよ」

擁護してくれる親友に心の底で感謝の意を述べ、真紅はその二人の来訪者へと歩を進めた。

片方は背が小さく、髪の毛が長い色白の少女。大きな黒い瞳は彼女のチャームポイントで、怒ったときには恐怖とは何なのかを改め

て教えてくれる、一種の兵器とも言えた。

もう一人は少女よりも頭ひとつ分ほど大きい、茶髪の少年。ロザリオの付いたネックレスをつけ、若者風のファッションを着こなす彼は、見た目だけは格好いい。

二人とも真紅の幼馴染であり、それぞれ間野^{まの} 愛美^{まなみ}、御子柴^{みこしば} 空^{そら}という名前だった。

「久しぶりだな、愛美、空。元気だった……かは、聞かなくてもわかるな」

「む、どういう意味かな、真紅？」

片目をつむり、悪戯っぽく笑う愛美。いつまでたっても子供っぽいその仕草に嘆息して、真紅はもう一人の友人へと視線を向けた。

空は愛美の相手に疲れたのか、これ以上巻き込むなどでもないいたげに肩をすくめたまま、助け舟を出そうともしない。

厄介な二人だ、と心の中で深いため息をついて、真紅はじゃじゃ馬姫様の機嫌を直すべく奮闘するのだった。

集落から少し離れた場所に真紅の家はあった。

家といっても掘った立て小屋のようなもので、床は木の板で作られている。さほど広くないその場所に、真紅と空、そして愛美が三角形を作るように座っていた。

部屋の中には数年間のうちに彼らが持ってきた、あまり必要でもないものがあふれかえっている。真紅も睡眠のために戻ってくる以外はほとんど使っていない。そのため自分のものといえる物は、ほとんどなかった。

「ほら、お土産だ。爺さんに頼まれてた焼酎と保存食。あと、お前にと買ってこれも買ってきたぞ」
「……何だよこれ」

空が風呂敷から取り出したのは土で作られた奇抜な人形だった。土偶の一種かとも思ったが、まず土偶を手に入れること自体が難しいし、目の前のそれはどこか現代の人間のような形をしていた。

「ふふ……聞いて驚け、これはなあ今巷で話題のフィギュアで……」
「絶対だましてるよな、てめえ」

人間の頭ほどある土人形はお世辞にも人気が出るとは思えなかった。むしろその奇抜さゆえに呪いの人形とでも称されていそうな雰囲気である。

「わっかかりやすい嘘だよ。流行に疎い真紅でも、これが流行るはずがないことくらいわかるわよ」
「ちえ……面白くないなあ」

空は心底面白くなさそうにため息をつき、土人形を鞆に戻した。人里はなれた場所なだけに真紅に外の情報を与えるのは、もっぱらこの二人の役目になっていた。だから悪戯癖のある空は事あるごとに嘘をつき、真紅をからかって楽しんでいるのだった。

真紅も馬鹿ではないので嘘はすぐに見分けられるのだが、からかわれていい気分はしなかった。

「まったく、いいかげんに直せよ、その悪戯癖」
「嫌だよ。俺から生涯の楽しみを奪おうとするな」

趣味が悪い。少なくとも真紅には彼の考えを理解してやることが出来そうになかった。

もっとも、彼の考えを理解できる人間などこの世界に存在しているとは思えないのだが。

「……ちょっと同情するわ、真紅」

どうやら愛美も同じ意見のようで、溜まった疲れを吐き出すように深々とため息をついたのだった。

〔一話〕 隠された里（後書き）

思った以上に進行が遅い……。
もっとテンポよく話を進められるように精進したいと思います。

〔二話〕 漆黒と紅（前書き）

漆黒の闇と紅の炎に彩られ、少年の世界は変わり始める。

〔二話〕 漆黒と紅

夜の帳が降りはじめた森の中に、老人は座っていた。

この森の中では時間など正確にわかるはずがないのだが、真紅が去ってから数時間を、老人は積んだ薪の上に座ったまま、何をすることもなく空を見上げていたのだった。

流れ行く雲を見つめていると、昔のことを思い出す。まだ彼の息子と、その妻が生きていた頃の記憶。

時折真紅をつれてやってくる彼らは、老人の退屈な生活の中で唯一の刺激であり、同時に心安らく時間だった気がする。妻に先立たれ、山奥の隠れ里にこもってしまった自分を息子たちが心配してくれたことも、その時は痛いほど感じたものだ。

しかしその時間すら、七年前に失った。

息子たちは、殺されたのだ。

ある企業の重役として勤務していた息子は、会社の不正に気づき、それを公にしようと活動していた。根っからの正義感、というわけでもないが間違った行為を続けることに違和感を覚えていたのだろう。

結果、息子は死んだ。表向きは自動車事故となっているが、老人は確信を持っていた。

息子は、殺されたのだと。

それは現場にいた真紅も同じ。両親を殺したものたちも、すぐ近くで目撃していた。

もし老人がこの山奥に真紅を連れてこなかったら、真紅は今頃復讐の鬼に変わっていただろう。

物理的に戦う力を手に入れた今の真紅なら、なおさらだ。浮世に戻ってしまったら、何をやらすかわからなかった。

「戦う力をつけさせてしまった……わしがいけないのかも知れん」

森には危険が溢れている。それに対抗するため、真紅に戦う力を与えた。間違いだっと思いたくはないが、少しだけ後悔していた。

「もう、残された時間が少ないのかもしれない」

いつの間にか、空は闇に包まれていた。いつもなら空いっぱいに散りばめられている星たちは、今日は漆黒の闇にとらわれている。月すらもその輝きを封じ込められている。

雲はない。漆黒に包まれた、不思議な世界。

老人の脳裏に嫌な想像が膨れ上がる。瞬間、手元にあつた斧を取り、跳ねるように薪から離れる。

何かが、漆黒の中に隠れていた。研ぎ澄まされた感覚の糸がそれを捉え、鍛え抜かれた筋肉が反射的に動き回る。

「あれ、お爺さん？ そんなところで何を」

唐突に背後から声がかけられた。三十代ほどの女性の声で、それは集落で真紅の次に若い女のものだった。

だが老人の感じた違和感は、それではない。違和感の正体は正面、深く恐ろしい森の中から。

それに気づいたとき、老人は背後に向けてあらん限りの声を放った。

「 集落に戻れ！ 皆に逃げろと 」

全てを伝えきる前に、背後で奇妙な音が聞こえた。何かか勢いよく噴き出すような、肉が抉られるような不快な音。それが何を意味するのか知ったとき、老人は健康な歯が軋むほどに強く歯を食いしばった。

怒りに震えたその瞳は全ての災厄を切り払うべく、強く細く輝いていた。

最初の異変に気づいたのは、真紅だった。

電気など通っているはずもないから、蠟燭を使って部屋を照らし談笑していたのだが、森の静寂を破る奇妙な音を彼の耳は敏感に聞き分けた。

「 ? しんく? 」

少し眠たげな愛美の声を無視して、真紅は部屋の隅にある竹刀袋を手に取り、部屋の外へと飛び出した。

外に出た瞬間、鼻腔をくすぐる焦げた臭い。火元を探そうと思う

必要すらなく、その原因はすぐに見つけることが出来た。

集落の方向から夜の闇を切り裂くような紅く禍々しい光が、屋気楼のように揺らめきながら放たれている。小火、というにはあまりにも規模が大きい。森が燃えているのかとも思ったが、どうやらそれは、根本から間違っているようだった。

「真紅！ なにが」

突然の行動に驚いた空が真紅の後を追って出てきたが、その光景を見て絶句した。

「……空、愛美を頼む。何か嫌な感じがする」

それは小さな違和感。住民の誰かが誤って火事を起こしてしまったのなら、消火活動をするか逃げるかをするはずである。だが遠目に見ても人の気配が全くない。

ここで生活している真紅に言わせてみれば、『ありえない』ことだった。

この集落に暮らしているのは大半が老人だったが、元気のよさと体の丈夫さは折り紙つきだった。

足場の悪い森を一直線に突っ切る。右手に握った竹刀袋が、何故だか酷く重たかった。

「はあ……はあ……っ！」

集落にたどり着いたとき、真紅はこの大きさを改めて実感することとなった。

赤々と燃える民家、地に転がっている血まみれの人々。人為的に

出来上がった地獄は、胃の中身を吐き出しそうになる。
地面に転がっている人々は、直視したくないほど無残な姿に変わっている。

「くっ……何が、あつたんだ？」

答えが帰ってこないと知りながら、吹き付ける熱風を無視して地獄へと進んでいく。

親しい人たちの亡骸。その光景に過去の記憶が蘇る。

血まみれで横たわる両親。その腕に抱かれ、無傷で生き残った自分。何も出来ない子供だった真紅は、恐怖に震えることしか出来なかった。

もう何も失わないために力を手に入れたはずだった。全てを振り払うために、毎日鍛錬を繰り返していたはずだった。なのに

うなじをゾクリ、と不快な感触が駆け抜ける。真紅は無意識のうちに体を捻り、右手に持った竹刀袋を突き出していた。

直後にやってきたのは重たい衝撃。右腕に握ったものを通してそれがやってきた時、すでに真紅は次の動作に入っていた。

体の回転を利用して繰り出す左足の蹴り。背後にいた者は反撃を予期していなかったのか、真紅の左足には人のアバラを折った嫌な感触が残った。

「いきなり襲ってくるとは……無作法なやつだな」

小さく舌打ちして、真紅は一步後退する。しっかりと蹴り抜いた

はずだったが、喰らった相手は痛みすら感じていないように、悠然とそこに立っていた。

現れたのは漆黒の衣服を纏い、サングラスをかけた男。スーツのような動きにくい服ではないが、闇に解けるようなその黒は否応なく、真紅の悪夢を刺激した。

「暗殺部隊、ナイトメア」

かつて、彼の両親を殺し、彼の命を救った部隊。

部隊の特徴は構成員全てが黒の戦闘服を纏っていることと、星と月が姿をなくすこと。

どういう原理かわからないが、彼らが活動する範囲、時間、全ての星々が漆黒の闇に囚われてその姿を失ってしまふ。そうして作られた闇は彼らの住処となり、彼らの狩場に変わる。

「なんで……ここにいるんだ」

本来ナイトメアはある企業の要人護衛、ならびに暗殺をする部隊だ。人里はなれた集落にやってくる理由が、わからなかった。

いや、一つだけ思い当たる節があった。

俺のせい、なのか？

暗殺者の右手に握られた短剣が炎の揺らめきに合わせて光を放つ。戸惑っている時間も迷っている時間もなかった。真紅は竹刀袋の紐を解き、封じていたそれを解き放つ。

炎のように紅い柄、闇のように漆黒の鞘。色鮮やかな金の鍔は解

き放たれた喜びに震えるかのごとく、ゆらゆらと不規則な光を放っている。

両親が残した、たった一つの形見。かなりの業物だといわれているその日本刀は、真紅の手に不思議とよくなじんでいた。

左手を鞘に、右手を柄に添える。戦うことへの迷いは、少しだけあった。誰かを傷つける、その行為に抵抗があったのだ。だが、それよりも強い怒りが真紅の手に力を与えていた。

暗殺者の姿が、一瞬だけ消失する。それに合わせ真紅の刀が解き放たれた。

振りぬかれた刃には肉を抉る手ごたえと骨を切り裂く重たい感触が残る。一瞬で背後に回っていた暗殺者は、真紅の人間離れした反射神経の前になすすべなく折れた。

「……………後味が悪い……………っ！」

刀を納め、真紅は周囲を見回す。炎の中に他の敵意は感じられず、同時に生きている者の気配も感じられなかった。

結局、どれだけ力をつけようと、何も守れないのか。

暗殺者の亡骸を見下ろしていると、怒りがこみ上げてくる。逃がしようのない怒りの炎は自分自身を焼き、憎しみの詰まった心は全ての敵を殺したいと悲鳴をあげる。それでも、真紅は必死に全ての衝動を抑え込もうとしていた。

住民たちの亡骸をその場に残し、真紅はきびすを返す。
吊つてやりたい気持ちはある。だが今はまだ、その時ではない。
炎に焼かれた地面を踏みしめて、もう一度、真紅は刀に手を添え
た。

「……朝風、真紅くんですね」

低く腹の底に響いてくるような声が炎の中を木霊する。
炎の道の向こう側に、三人の暗殺者が佇んでいた。

「お前たちは……ナイトメア、か」

「よく知っているますね。そのとおりです。我々は、ナイトメア。
君を……殺しにきました」

中心に立つ少し背の高い男が恭しく頭を垂れ、口の端を吊り上げ
るように笑っていた。

その笑みはどこか作り物じみっていて、感情から溢れてくるそれと
は違う何かを真紅の本能に伝えていた。

「一人、殺したようですね。結構。その男程度を殺せないようでしたら、我々が出てくる必要すらないというもの……期待を裏切らないで下さり、感謝しておりますよ」

「……よく喋る暗殺者だな」

三人から注意をそらさずに、真紅は周囲へと神経を向ける。暗殺者が堂々と、などという戦法は論外だ。必ず真紅の隙をつくように、何かの罠が張り巡らされているだろう。

三対一という状況を考えても、真紅にとっては不利な状況だった。

「いえ、私などはまだ静かなほうですよ。私の上官など、どんなと

きでも豪快に笑ってしましてね。あれを見ていると、自分はまだまだともなのだと実感できます」

「そうか。だが、俺に言わせればお前ら全員、いかれてる」

男は満足そうに頷き、両手を前に突き出した。

突き出した両手には、黒く光る二丁の拳銃が

「そうですね　私たちは、確かに狂っています」

男が何かを言い終えるより早く、真紅は転がるように横へと移動した。

耳をつんざく銃声。狂ったような笑い声をあげるその男は、さっきまでの態度が嘘のように、銃弾の雨を吐き出し続けている。

「飛び道具か……」

どうやって対処するか考える暇すらなく、今度は両足に力をこめて後ろへと飛びのいた。

残った二人の暗殺者が真紅の命を奪おうと同時に攻撃を仕掛けてきたのだ。二人の手には先ほど倒した暗殺者と同じく短剣が握られている。個々はそれほど強くなさそうだったが、同時に攻められるのはまずい。

銃弾の雨をかわしながら、同時に二人の攻めもしのご。さらには炎の進行が早いたため少しずつ動ける範囲が減っていく。

真紅の額を、一筋の汗が伝った。

「　ちよつとやばそうだな。加勢しようか？」

怪我の一つでも、と覚悟したとき脱力するほど軽い声が真紅の耳に届いたのだった。

〔二話〕 漆黒と紅（後書き）

もう少し日常風景も書いてみたかったんですが、なんとなくグダグダになる気がしたので省略。

真紅にとっては忘れることが出来ない敵、ということでも早めに出してみました。

容姿とかがあやふやなのは過去の話だからとか勝手に理由をつけてます。

ホントは描写が苦手なだけですが……

〔三話〕 懐かしき世界へ（前書き）

唐突過ぎる日常の終わり。

予期していなかった帰還。

目まぐるしく変わっていく、彼の世界。

〔三話〕 懐かしき世界へ

駄目だとわかっていながら、真紅は思わず脱力してしまった。

三人の暗殺者も現れた何者かを警戒するかのように、攻撃の手を休めている。

「意外と苦戦してるな、真紅。流石のお前でも三対一は厳しかったってことかな」

両手に銃を持った男の背後には見慣れた少年が立っていた。

「……愛美のお守りを頼んだはずだけど？」

「ああ、でも我らがじゃじゃ馬姫様はじっとしてるのが嫌いらしくてさ」

両手をポケットに突っ込んだまま少年、空はふてぶてしい笑顔を浮かべ、言葉を続けた。

「もうちょっとしたらこっちにくるよ。集落の外に荷物を取りにいってる」

「そこまで一緒にいってやればよかっただろ」

「いいのか、そんなこと言って？ 結果論だけど、助けられたことになってるんだぜ？」

してやったりと満足げな表情を見て、真紅は深々とため息をついた。空に助けられたことなど、長い付き合いの中でも今回が初めてだった。悪戯好きの彼に借りを作ることが、どれだけの危険を孕んでいるか真紅は理解していた。だからこそ自分を律し、出来るだけ助

ける側に回ろうとした。

空の表情を見る限りではその考えはあながち間違っていないようだった。

「……ちっ……感謝してる」

「一つ貸し……って言ってやりたいけど、借りがありすぎるから今回はチャラな。ついでにここからは自分の安全を守るために戦うんで、お前に貸しは作れない」

予想外の反応にさらに脱力。普段は真紅を気遣うことすらしないはずの彼が、今は無償で真紅に手を貸してくれるという。

親友の優しさを感じて、自然と笑みがこぼれていた。

「どちらさまか存じませんが、彼の味方ということならば排除させていただきますよ?」

「勝手にするといさ。出来るんならな」

暗殺者よりも、はるかに早く

空はポケットからそれを取り出し、引き金を引いた。

空の両手には暗殺者と同じように二丁の銃が握られている。さほど長くない砲身と硝煙にまみれた黒いリボルバー。

空曰く、”こいつは世界に二丁しかない最高のリボルバーなのだ”という。

銃声は二つ。その快音が響いた直後、暗殺者の銃が暴発し、二丁の拳銃は炎の中に飲み込まれていった。

「ぎ……ぎいあああああ　　「!」

両手を焼かれた痛みにも男はおよそ人間の上げられる声とは似つかぬ悲鳴を放ち、くず折れるように膝をついた。

正確無比な射撃。一瞬で狙いをつけられるその腕前は、真紅の反射神経と同じくらい稀有な才能だった。

「ほら、こっちは片付いたぞ」

二丁の銃をしまい、空は満面の笑みを浮かべていた。凶太い神経に少しでも敬意を払い、真紅も負けじと二人の暗殺者に向けて刃を振るう。

鞘から引き抜いた刃を右の刺客に、鞘を左の刺客に向けて二つの攻撃を防ぐ。上官がやられたにもかかわらず、二人は正確な連携をもって真紅を攻め立てている。

普通の人間なら多少は持っている”動揺”というものを、この二人は持っていない。いや、もしかしたら感情そのものを持っていないのかもしれない。

俺たちは、いちゃいけない存在なんだよ。

唐突に、とても懐かしい声がどこから聞こえた気がした。

きっと、間違いなく空耳だったのだが、真紅はその言葉をもう一度心の中で繰り返した。

存在してはいけない存在。

かつて真紅を救った男が、悲しそうに呟いていた言葉だった。

彼はナイトメアに所属し、たくさんの命を奪ってきたのだという。真紅の両親とも面識があった彼は、真紅たちを助けるべく組織を裏切り戦った。

救われたのは真紅一人だけだったが、それでも真紅は彼に感謝していた。

彼のために、彼の残した願いのために戦ってやろうとも、心に決めていた。

俺たちの悪夢を、終わらせてくれ。

彼の遺言はその一言だけだった。

その言葉が具体的に何を指していたのか、真紅にはわからないけれど

「……おせえよ」

二つの凶器を弾き、刀を一閃する。風を切り裂く銀色の刃は刺客の胴体を真っ二つに両断し、血飛沫を浴びながら真紅は刀を納めた。

戦い続けていればいつか彼の願いがわかる。それだけを信じて真紅は剣の腕を鍛え、復讐心を隠し続けていたのだから

頬を滴る紅い雫を拭おうともせず、屍となった暗殺者を乗り越えて真紅は空と共に最後の一人を見下ろした。

「お前で最後だ」

両手を焼かれ、苦痛に歪む表情の奥には未だ枯れない敵意がある。

勝機がないのは彼自身が一番わかっているだろうから、きっとこれは最後の強がり過ぎなかった。

「最後に聞いておこう。どうやってこの場所を知った？　ここは隠された里。情報源は多くないはずだ」

真紅の問いに男は辛そうな笑みを浮かべるだけで口を動かすそぶりすら見られない。

暗殺者というものは死んでも口を割らないものなのだと聞いたことがあったが、命乞いすらしないというのが真紅にとっては意外だった。

いや、それがナイトメアにとっては当然の反応なのだろう。人間らしい感情は薄れてしまっただ、そういう話を聞いたことがある。

空と目配せをして互いにならず。

殺す必要はないのだ。自由を奪ってどこかで拷問でもすればいいかは口を割るだろうと、二人ともそう思っていた。

「　甘いな、君たちは」

そうつぶやいた瞬間男の体が、跳ねた。

およそ人体の構造上不可能な動き。何の初動作もなく、跳んだ彼はそのまま空の首目がけて口を開き、その鋭い牙で空の命を奪おうとする。

真紅も空も、反応が一瞬だけ遅れた。

「空！」

人間の反射速度を遙かに超えて、真紅は刀を引き抜こうとする。それでも、まだ遅い。筋肉がちぎれることすら覚悟して、さらに力を込めた。

それでも、それでも間に合わない。

不意に視界の端に蒼い物体がちらついた。

蒼く、弾丸のような軌道を描くそれは一直線に暗殺者へと飛び、二人が反応し切れなかった穴を埋めるように暗殺者の脳漿を深々と貫いた。

暗殺者の頭に突き刺さったのは蒼穹のように澄んだ蒼い薙刀だった。長さは握り手部分がメートルほど、刃の部分が三十センチほどもあり、刃と握りの結合部分には羽のような形をした純白の装飾が施されている。

限界を超えた反動に眉をしかめるが、その痛みを感覚の外に押しやって真紅は視線を薙刀の持ち主へと向けるのだった。

「おいしいところを持っていくなよ、愛美」

得意げに発展途上の胸を張る少女は、彼らとは炎の壁をはさんだ向こう側にいた。さほど近いわけでもないため、彼女の正確なコントロールがなければ誤って二人のどちらかにあたる可能性もあった。

「あと、危ないからなれないことはするな。寿命が縮む」

「結果的にあたらなかったんだからいいじゃない。事前に気づいたのは私だけだったみたいだし、あれくらいの賭けをしなきゃ空が死んでたわよ……って、空？」

炎を乗り越えてやってきた愛美が一言も発しない空をいぶかしみ首をかしげる。真紅もつられて見ると、空は引きつった笑みを浮かべたまま微動だにしていなかった。

少しだけ、本当に少しだけ意外だった。

放心状態の空など真紅だけではなく、愛美にとっても予想外のものだっただろう。付き合いの長い彼らにとっては、まさに幻を見ているようなものでもあった。

「大丈夫か、空？」

無駄かもしれないと思いつつ、真紅はそつと問いかける。

ようやく二人の視線に気づいたのか、空は機械のように硬い動きで首をひねり、金魚のように何度か口を開閉した後、ようやく言葉を紡いだ。

「あいつ……すっげえ歯並びがよかった」

「「「どうでもいいわ！」」」

炎の海の中、まだ燃えていなかった住民の亡骸を一箇所に集め、吊ってから三人はその場を離れた。

周りが森だったためか火の足が速く、消火作業すら困難を極めていたのだ。焼け残った住民を吊ったのは、真紅の、せめてもの罪滅

ぼしともいえた。

火が回る前に家から必要なものだけを持ち出して、集落を背に森へと進む。しつかりとした道があるわけではないが、森を抜ければそこからは空たちが何とかしてくれるはずだった。

森を少しだけ進むと開けた場所に出た。

大量に積まれた薪。不自然に踏みしめられた大地。そこは元々真紅が鍛錬するために切り開いた場所。

「おい……なんだこりゃ？」

しかし、そこは今や別世界に変わっている。

空がそう呟いてしまうのも仕方がないほど、その場所は荒れていた。

周囲には十近くの死体とむせ返るような鉄の匂い。そこで何があったのか、詳細こそわからないものの、大まかなところはこの惨状を見るだけで理解することができた。

「どっかの化け物が暴れまわったんだろ。この様子だと、無事みたいだな」

唯一の家族が生き残っていることに、心の底から安堵した。

「でも、ここまで気性の荒い人だっけ？　なんか、力任せに破壊していったみたいに見えるんだけど」

足元の死体は手足が千切れ、頭はかるうじてつながっている。よほど非情な殺し方をしなければこんな死体が出来上がるはずがなか

った。

「よかつたな、愛美。暗いからよく見えなくて」

空の挑発に愛美はすぐ食らいつく。

「なによ。確かにこういう血なまぐさいところは嫌いだけど、このくらい……」

「あんまり強がらなくていいぞ。空の思う壺だ」

小さく震えている愛美に声をかけ、真紅は星のない空を見上げた。祖父がどこに行ったのか真紅には見当がつかない。それにわかっていたところで彼は真紅の行動をよしとはしないだろう。

「空、頼みがあるんだ」

「なんとなくわかるけど、言ってみ」

「お前の家の力で、俺を助けてくれないか？」

それがどういう意味なのか、愛美だけはよくわかっているのか小さく首を傾げていた。

にやりと、不気味にも思える笑みを浮かべて親友はさっさと歩き出した。

「とりあえず新しい世界に旅立つ景気づけに、行きたいところへつれてってやる……どこに行きたい？」

振り返った空の瞳には暗闇の中でも十分にわかるほどの喜びが浮かんでいた。

真紅は思案し、けれどすぐにその答えを導き出した。

「そうだな　海が見たい」

こうして彼らの物語は幕を開ける。

ただ一人、彼らの会話に追いついていない少女を除いて。

〔三話〕 懐かしき世界へ（後書き）

かなり投稿が遅れてしまいました。

忙しかった、ということももちろんなのですが、どうにもうまくまとめられないです。

さて、とりあえずは零話の所まで戻ることができました。事前に考えていたものよりちょっと長くかかりました。

もうちょっとコンパクトにまとめることができたらなあ……。

〔四話〕 神風学園（前書き）

暖かいのか、冷たいのか。よくわからないその世界の中で、少年は新たな生活を始める。

〔四話〕 神凧学園

真紅は生まれてこの方、これほど緊迫した雰囲気の中に立ったことがない。

幼いころからいくつかの死線を乗り越え、ある程度の事象は享受することができると思っていた。

だが、真紅の認識を超える事象がこの世にはまだ数多く存在しているのだと、彼は改めて自分の無知を確認することとなった。

教卓に立ち、すらっと背の高い女教師が優しげに声を上げる。

「えー、今日からこの神凧学園^{かなぎ}二年四組に編入してきた、朝凧真紅くんです」

転校生がやってきた。世間一般ではどういう反応がなされるのか、常識というものをよくわかっていない真紅にはわからないことだったが、この学園は特殊なのだということだけは容易に理解することができた。

はつきり言うのと彼らは皆、真紅を歓迎してはいなかった。

突き刺さる冷たい視線。友好的な雰囲気など欠片ほどもなく、クラス内にある六十個以上の瞳はほとんど、敵意以外の何物も溜め込んではいない。

「伝統ある我が学園では初めて、外部からの転入を認めたとのことですが、皆さん、どうか特別視することなく接してくださいね。では朝凧くん、自己紹介を……」

小さくため息をついて真紅は促されるまま、教卓へと足を進めた。

森を抜け、漆黒の海を目にした後、真紅はその足で空の実家へと向かった。

実家といってもそんなじよそこの家ではない。豪邸、そういつても過言ではないほど大きな洋館。後方には馬鹿でかいほどの敷地があり、山すらも彼らの所有物なのだという。

屋敷の中に招かれて、パーティーなどが開かれるほど大きい広間へと案内された真紅たちは、そこでオーケストラが演奏しているような重厚な音楽と優雅に踊る一組の夫婦を目にすることになった。

純白のドレスを身にまとった女性は髪を上品にまとめ、男性のリードにあわせるかのように踊る。男性は男性で、タキシードを着こなし、彼女を気遣いつつダンスを楽しんでいるようだった。

「……何やってんだよ、この馬鹿夫婦」

頭を抱えて深々とため息をつく空。その表情には疲労の色が濃く、茶番には付き合いたくないという気持ちがありありと感じられた。

「あら、馬鹿とはひどいわね、空。真紅くんが戻ってくるっていうから盛大に盛り上げようと思ったんだけど、いろいろな人たちに止められたのよ。だから代わりにダンスでお出迎え。真紅くん、お帰りなさい」

「お帰り、真紅くん！ 七年ぶりだね、元気だったかい？ お父さ

んに似て、りりしく育ったようだね」

ダンスをする夫婦、空の両親は親しみやすい朗らかな笑みを浮かべ、ダンスを再開した。

彼らは真紅の死んだ両親と旧知の仲だった。真紅の両親もそうだったが、空の両親も社会的に成功した人物で、真紅たちも親のおかげで友達になった。

彼ら夫婦は真紅にとっても懐かしく、安らぎを覚えることができない数少ない人たちだった。

「ご無沙汰しています、早苗さん、光義さん」

小さく頭を下げると二人はまた満面の笑みを浮かべた。

音楽が終わると同時に二人はダンスを終え、三人へと歩み寄った。踊っている最中は気づかなかったが、光義は真紅たちより頭一つ大きく、早苗は愛美と同じくらい小さい。

「話は聞いているよ。どこから情報が漏れたのか、僕たちなりに調査を進めていこうと思っている」

「お手数をおかけして、申し訳ありません」

「なに、気にすることはない。君は僕たちにとってももう一人の息子のようなものだ。遠慮せず、何でも言ってくれたまえ」

その細い体にどれだけの度胸と優しさを蓄えているのか。真紅には計り知れないほど彼の度量は大きいものだった。

「ありがとうございます。早速ですが、ひとつ、お願いを聞いてい

ただけませんか？」

「かまわないよ。なんだい？」

「俺を、この家でかくまってくれませんか？ あいつらを、ナイトメアを根絶やしにするまでのたれ死ぬわけにはいかないんです」

光義は一旦、思案するよつに目を閉じた後、意を決したよつに口を開いた。

「それは、復讐のためかい？」

真紅の両親を殺した部隊がナイトメアだということは彼もすでに知っていた。そもそも真紅がナイトメアに殺されることを恐れて、祖父のところへ連れて行つたのが光義だったのだ。

両親を殺された恨み。それを晴らすためにナイトメアを滅ぼそうとしている。そうやって考えるのは当然のことだ。立場が違えば真紅も同じ答えにたどり着くだろう。

けれど真紅は首を振り、確固たる意思を自らの言葉に詰め込んだ。

「いえ、両親を殺されたことは、恨んでいないと言えば嘘になるけれど、正直関係ないんです」

「それは、どういうことかな？」

「約束、したんです。ある人と。彼らの悪夢を終わらせるつて。そのためにも、俺は彼らを、彼らの頭を潰さなきゃならないんです」

今の真紅にとってそれは絶対に優先すべき誓いだつた。それが自分の平穩を壊してしまうと知っていても、誰かを悲しませてしまつと知っていても。立ち止まるわけには、いかない。

翌日、というよりはその日の夜中にはこの「神凧学園」への編入が決定していた。

光義曰く『まずは普通の生活に慣れなきゃいけないね。というわけで、空たちが通ってる学園への編入手続き、済ませてきたよ』らしい。

ただでさえ世間から隔離された生活を送っていたのだ、少しの間は空の屋敷にとどまり社会情勢を理解する時間がほしかった。

昨夜の疲れもあって、真紅は覇気のない表情のまま教卓へと歩み出た。

敵意溢れる瞳を冷ややかに眺めながら、真紅は威嚇するでもなく、できるだけ穏やかに言葉を発した。

「朝凧真紅です。よろしくお願いします」

内容は簡潔に。というよりは面倒くさかったので考えてすらいなかった。

「えっと……他に何かない？」
「特にないです」

わざわざ歓迎されていない場所で長話をするつもりなど毛頭なか

った。

「え〜、それでは皆から何か質問はない？」

間が持たなかったのか困惑気味に言葉を投げかける教師。

伝統があるのか知らないが、この学園で外部の人間が快く思われていないのはよくわかった。ただでさえわからないことだらけだというのに、この状況は正直にいつて堪える。

誰にも気づかれないようにため息をついて、さてこれからどうしようかと考え始めたとき、唐突にそれはやってきた。

「はいはい！ 昔から気になってたんだけど、どんな女の子がタイプなんですか？」

「俺も質問。こいつは守備範囲外なのか？」

一瞬、地面がぬかるんだような錯覚に襲われた。

能天気な二つの声は、今までいっただいどこに隠れていたのか生徒たちの中から発せられた。敵しかいない、暖かい視線などないものだと思っていたがそれらは確かに、存在していた。

「……お前ら、もうちょっとまともな質問にしろよ」

「ええ〜、いいじゃん気になってたんだから。真紅は女の子に興味ないのかなあ、ってさ」

「気になっていつも寝不足気味なんだとさ」

「ちよっ……そこまで言っていないでしょ、空！」

一番後ろの席に愛美と空は並んで座っていた。窓際、向かって右側の席に頬杖をついてニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべる空と、その隣で頬を真っ赤に染めている愛美。慣れ親しんだ顔があっただけで、敵地だと思っていたその場所に、何故か居心地のいい空気が流れ始めた。

「御子柴たちの知り合いか……」

「怪しい人じゃないみたいね」

「それに、よく見ると素敵な方ですわ」

途端に教室内の空気自体が変わりはじめた。

敵意を含んだ視線は好奇の詰まったものへと変わり、あるものは問いかけ、あるものは面白そうに真紅を眺める。

いつの間にか、教師が仕切っていたはずの教室内は生徒たちの独壇場へと変わっていたのだった。

〔四話〕 神風学園（後書き）

すごく都合主義になってきたような気がする今日この頃。

実際は裏で空の両親が動いたため、クラスが同じになったという裏設定があるんですが、本編で出すことはないでしょう。

さて真紅の新生活が始まります。新生活、いい響きだ……。

〔五話〕 戦う意思と少女の想い（前書き）

少年にも、少女にも、願いや想いはそれぞれある。
幸せを願う心、安らぎを願う気持ち。

それら全てが必ずしも叶うものだとはいえ、限らない。

〔五話〕 戦う意思と少女の想い

クラスメイトたちの急変した態度を理解できぬまま、真紅はクラスに迎え入れられた。

昼休みになって教室を抜け出し、空に連れられるまま屋上へと上った後も、その疑問は尾ひれを引いたまま、真紅の思考を捕らえ続けている。

愛美はクラスの女子と一緒に昼食をとるのか、空と一緒にではなかった。

「納得いかないって顔してんな、真紅」

空が購買で買ってきた缶コーヒーを受け取って、真紅は頷いて返す。

「ああ、何で皆、あんなに態度が変わったんだ？」

プルトップを開けてコーヒーを一息で飲み干した空は、屋上のタイルでできた床に缶を放置して大きく伸びをした。快晴の空は実に心地よく、眠気を誘う。

「簡単だ。この学園はな、外部の人間ってのを快く思っていないんだよ」

「どうして？」

「この学園に入学してくる生徒は大半がどこかの金持ちの子息、令嬢だ。俺が知る限りではあのクラスの人間のうち、半数がそれに当てはまる。残りの半分はその護衛ってところかな。ほら、何人が口調が上品なやつがいただろ？ ああいうのが前者だ」

神風学園はそもそもそういった上流階級の子供たちを育成する場所として設立された場所なのだという。創立から四十年。その長い歴史の中で、そういった子供が入学しなかった年はないらしい。

「俺の知り合いならどこかの子息か、俺たちのためのボディーガードってことで納得がいくんだろう。実際、この学園の生徒は警戒心が強くてね。そう簡単には馴染めない。ま、お前は別に誰かと親しくなろうとか思っていないだろうけど、気をつけるよ。積極的に話しかけてくるようなやつらはほとんどが将来のためのパイプ作りだ」

空はそうやって真紅に注意を促すものの、真紅からしてみればあまりにも的外れのように思えて、首をかしげた。

「俺が気をつける必要なんてないだろ？」

真紅はどこかの企業に人脈があるわけでも、莫大な財産があるわけでもない。空に比べれば真紅などただの学生だった。

「はあ……あのな、真紅。それ本気で言ってるのか？」

「あれ、俺、変なこと言ったか？」

眩暈を抑えるような仕草を見せて、空は人差し指を真紅の額に押し付けた。

全力で指を押し付けているのか、額が鈍い痛みを訴えている。

「お前なあ、朝風家はまだ没落したとは言いがたい状態にあるんだぞ」

「……は？」

「朝風家の椅子は未だにあの会社に残っている。家の親父も確認し

たことだから間違いない。朝風 白羽^{はつゆ}。お前の親父が残したのかはわからないけど、お前の生存が確認されれば、お前は企業の重役として招集されるんだ」

真紅は一瞬、自分の耳を疑った。それが正常だと気づくと、今度は空を疑う。しかしこういつた真面目な話のときに限って、空の言葉は真実なのだった。

「つまり、それは……」

自分の声がかすれているのがわかる。それは怒りのせいなのか、それとも別の何かなのか、今の真紅には到底判断できなかった。

「そうだ。お前の生存が知られてしまえば、お前はお前の両親を殺した会社にとらわれることになるんだ。永遠にな」

会社が朝風の席を残しておいた理由はおそらく、真紅の身柄を確保して七年前の真相を外に漏らさないようにするためだろう。会社の中に取り込んでしまえば、後は思惑通りに操ることができる。

操り人形になる自分を想像して、背筋に冷たいものが走った。

会社のために真実を隠し通す。そんなことを許すつもりは到底なかった。

光義には恨みなどないと言ったが、まったく存在しないはずがなかった。真紅とて人の子だ。親を殺された恨みを忘れられるはずがない。

封を切つてすらいなかった缶コーヒーを握りつぶす。鈍い音と共

に数箇所から黒い液体が逃げていくが、それは真紅の意識の外側で起こっていることだった。

絶対に許してはいけない。絶対に、屈してはいけない。

「……どうする、真紅？」

確信を持っているような空の視線を、確固たる意思を持って見つめ返す。

「決まっている。俺を狙っているのなら、こっちから攻めてやるまでだ」

具体的な手段など、学のない真紅にも、空にも見当がついていなかった。けれど意思だけは、確固たる決意だけはそうして言葉に出しておかなければいけないような、焦燥感に似た感覚が真紅の口を動かしていたのだった。

フローリングの床を踏みしめる四つの足。軽やかに、しなやかに、流動する水のごとくとどまることのない音楽は、しかし決して心休まるようなものではなかった。

「ほら！ 足が止まってんぞ、真紅！」

「……どっちが」

交差する二つの足は、拮抗し、数瞬の後に反動で跳ね返る。空気

すら振動させる衝撃は二人の少年によって生み出され、その空間にだけ全く異なつた空気を作り上げていた。

神凧学園から帰宅した二人は着替えもそこそこに、御子柴家のダンスホールを借りて久しく行っていないかつた組み手を始めた。

最初の数分こそ型どおりに拳を交え、間合いを取り、いかにも訓練だといった光景を拝むこともできていた。しかし、それも本当に数分だけしかもってはくれない。

何が楽しいのか、二人は互いの表情に笑みを浮かべ、本気で拳を交え始めていた。

組み手では使っていないかつた足までも絡めつつ、実践のように殺意をこめて。

二人は生と死の狭間を楽しんでいるようだった。

「相変わらずすごいわね、あの二人は」

「あ、早苗さん。こんばんは」

二人の戦いをダンスホールの入り口付近で眺めていた愛美は、隣にやってきた女性に会釈して壁に寄りかかった。早苗は昨夜のドレスとは違い、紺色のスーツを身にまとっている。

年齢に比例しないほっそりとした体型に、こういったスーツはよく似合う。一見して十七歳の子供がいる人だとは誰も思わないだろう。

「あの子達、何をあんなにムキになっているんです？」

「さあ？ きつと、本気でやりあってどっちが強いのか確認したいんじゃないでしょうか」

「そう、ですか。あの子達らしいというか、なんというか。困った

子ね」

社交上の都合で仕方がないのだが、早苗はいつも愛美に対してだけは敬語を使っている。

愛美は苦笑をもらし、彼女の瞳を横目で見つめる。

「公の場ではないのですから、昔どおりでかまいませんよ、早苗さん」

「……そう。そうね、ごめんなさい。かえって気を使わせてしまったかしら？」

軽くお辞儀をして、彼女は愛美に微笑みかけ、直後、愛美の視覚は彼女の豊満な胸に封じ込められていた。

「ちよっ……！ 早苗さん！？」

「ん〜……やっぱりこの感じよね。柔らかくて、ちっちゃくて。

もう我慢するの大変だったんだから」

「や、ちよつと、早苗さん！ うひゃあ！ 変なところ触らないでくださいよ！ ちよ……待って！ そこだめですって！」

「やあ、スベスベ。やっぱり若い子はいいわねえ」

オヤジのような早苗に弄られながら、愛美はほんの少しだけ昔のようでいいと言ってしまったことを後悔していた。彼女は昔から、空や真紅よりもなお、愛美を可愛がっていた。色々な意味で可愛がっていた。もちろん、二人へも大いに愛情を注いでいたのだが、愛美への愛情表現は異常なまでのボディランゲージで示されているのだった。

ひとしきり弄ばれた後、もう抵抗する力すらなくなりかけたころようやく愛美は彼女の魔手から解放された。体中に変な感覚が残っ

ているが、それを少しだけ懐かしんでいる自分に気づいて、背筋に寒いものが走る。

早苗が愛美へのボディランゲージを封印していたのにはちゃんとした理由がある。愛美が嫌がったから、などという理由では彼女が思い止まってくれるはずがない。愛美の立場がここ数年で大きく変わったからだった。

間野家当主、間野 愛美。

戻ってきたばかりの真紅はまだ知らないが、三年ほど前に愛美の父親は病死していた。愛美の母は彼女を産んだ直後に他界していたため、一人っ子だった愛美が家を継ぐこととなった。

といっても、間野家は財産こそあれ、重要な役割を担っているわけでもない。家も御子柴家と同じくらい大きいが、使用人たちに大半のことは任せており、愛美自身は悠々自適な学生生活を送っている。

お前の好きなように生きなさい。

生前の父は常々そう言っていた。

彼女を見放していたわけではなく、彼女が本当にやりたいことをすればいいのだと、父親としての優しさと、せめてもの励ましかつたのだろう。そのための資金も十分すぎるほど残してくれていた。

物思いにふけっていると、一際大きな振動がホール全体を揺さぶった。

二人同時に中央へと視線を向ける。そこには二人の少年が、ある程度の距離を保ち、悠然と立っていた。

「どっちが勝ったのかしら？」

早苗はわかっていないようだったが、愛美のほうは確信を持ってどちらが勝ったのかを当てることができた。

「……やっぱ、本気を出されるとかなわねえな」

片膝をついたのは、空だった。大きく息を吐いて、痛みをこらえるように胸を押さえるその姿は、普段の活発な彼とはかけ離れすぎていて、学園に存在している空の隠れファンが見たら卒倒してしまうだろう。

「一瞬のうちに六発、か。反則だって、その反射神経」

「それが見えてるだけでも、十分だろ。半分は止めやがって」

見ると真紅も右手をひらひらと宙で振り、眉をしかめていた。

「まったく、今までの刺客がカスに思えてくるよ」

もう回復したのか、一度大きく息を吐いて空は軽やかに立ち上がる。真紅も既に回復していたようで、右手を差し出し、二人は硬い握手を交わしていた。

「男の子って単純でいいわね。喧嘩しただけで分かり合えちゃうん

だから」

正確に言えば喧嘩ではないのだが、愛美はそれを指摘しようともせず、二人の姿を見守った。

自分も男に生まれればよかったかなと、微かな願望を押し殺して。

〔五話〕 戦う意思と少女の想い（後書き）

ちょっと場面が飛びましたが話はしつかりとつながってますよ）
たぶん）。

これからのお話は一応「学園編」といったところでしょうか。空
たち以外の同年代と久しく接していなかった真紅。どうなってしま
うかは、作者にもさっぱりわかりません。

〔六話〕 隣の美少女（前書き）

再会は唐突にやってくる。

それが互いに認識できるものでなかったとしても、少年にとってこれほど嬉しいことはないかもしれない。

〔六話〕 隣の美少女

転入二日目。後ろから二番目、窓際の席になった真紅は退屈のあまり頬杖をついて、ぼおつと外を眺めていた。

「あ、あの……朝凧、くん？」

「ん……？ 何だ？」

隣の席に座る女子生徒の控えめな声に、真紅は緩慢な動きで首を動かし、振り返った。

少女は腰ほどまでかかる美しい黒髪と小さめな顔が印象的な子だった。他人にあまり興味のない真紅でも彼女を美しいと感じるほど、その容貌は常人のそれとは異なっている。身に纏っていることな上品な雰囲気も美しさに拍車をかけているのだろう。

顔立ちも整っていて、一見すると人形のように。人形と違うところは、しっかりと感情があるところだろうか。

『お前の隣に座ってる女の子、可愛いよな。外見は可愛いのに、ちよつと引つ込みじあんって言うか。俺のタイプなんだよなあ、ああいうの』

登校してくる道すがら、無駄話の途中で空は笑いながらそう言っていた。愛美とはちがった可愛らしさに惹かれたのかとも思っていたが、真紅の目から見ても彼の意見を否定する余地は存在しない。

「えつと……後ろから、朝凧くん宛てにって」

「ああ、ありがとう」

彼女は持っていたノートの切れ端を真紅に渡し、すぐに黒板へと視線を戻してしまう。ほんのりと頬を朱に染めているが、真紅は暑いのかな？　と思う程度で、特に気にとめもしなかった。

手のひら大に千切られたノートの切れ端には三行、鉛筆で書かれたメモがあった。

『御子柴から朝風へ』

ちよっとくらい隣と喋りやがれ

PS・昼休みは外で食おうぜ』

何のリアクションもせずに真紅は首だけをひねって真後ろの親友へと恨みのこもった視線を投げかける。

空は自分のやることは終わったとでも言いたげに、両腕に額を預け、気持ちよさそうに寝息を立てていた。

前方へ首を戻し、真紅は深々とため息をついた。

真紅にメモを渡すだけが目的ならば、そのまま手渡しでいいはずだ。つまりこのメモは経由した彼女にも読ませることが目的だと考えることが出来る。

空はきつと真紅を早くこのクラスに馴染ませたいのだろう。その手始めとして隣に座っている子とくらは話せるようになれというのだ。気をつけると言ってみたり、話しかけるとけしかけてみたり、

どっちなんだと言いたくなる心を真紅はちゃんと抑えつけていた。

隣の少女も時折こちらを見ては、すぐに視線を戻すという行動を繰り返している。

もう一度、今度は小さくため息をついて、真紅はさっきまでつかっていた右手ではなく、左手で頬杖をついた。

「……そういうこと、らしいんだけど」

「あ、は、はい……そうですね」

互いに何を話せばいいのかわからずに、初めての会話はなんとも気の抜けたものとなってしまった。

本来ならば話しかけた側から積極的に話題を振らなければならぬのだろうが、空と愛美以外の同世代とはほとんど話したことがない真紅にとって、それは無謀にも等しい行為であった。

それでも何とか、真紅は次の言葉を紡ぎだす。

「とりあえず……改めて自己紹介だ。俺は朝凧 真紅。君の名前は？」

隣の生徒の名前すら覚えていないというのは失礼だったが、転入してきて間もないのだから仕方がないだろう。彼女もそれを理解しているのか、小さく頷いて見せた。

「私は、高嶺。高嶺 京です」

「……たかみね……みよこ……？」

「はい……えっと、何か……変でしょうか？」

真紅の戸惑いを察して、京は視線を彷徨わせ、申し訳なさそうに目を伏せた。

あわてて真紅は首を振る。

「あ、いや。すまない。よろしく、高嶺さん」

平静を装って、真紅は微笑を浮かべそつと右手を差し出した。

京は一瞬、おびえたように視線を震わせたが、すぐに優しい笑みを浮かべ真紅の右手に自分の右手を重ねた。

真紅にとって握手はとても大きな意味を持つ。親愛、友愛などはもちろんのことで、彼は心から興味をもった人間に対してそういう行動を見せるのだ。

相手が自分を受け入れてくれるのならばもつと知ろうと努力し、拒絶されたのなら完全に興味を失ってしまう。

当たり前前のように思えるが、他人と関わる際に真紅が絶対譲らないもの。

彼女の右手はちょっと力を込めれば壊れてしまいそうなほど小さく、柔らかな温もりを持っていた。

神風学園の中庭は、言うだけのことはあつてなかなか大きい。

校舎をはさんで校門とは反対側の敷地に造られたその庭は、芝生が青々と茂り、真新しい白いベンチがいくつか設置されている。日当たりのいいため授業をサボるときなどに使えそうだったが、空はお

勧めしないという。

一年の頃にそれをやって、教師陣にそうとう怒られたらしい。呆れて何も言えなかったが、空は懐かしそうにその時の話を教えてくれた。

両手に食料を持って、校舎から一番遠いベンチに腰掛ける。

「空、知っていて俺をけしかけたな？」

購買で買ったカレーパンとメロンパンを早々にベンチに置いて、真紅は空を軽くにらんだ。

「当たり前だ。お前とは大半の人生を一緒に歩んできてるんだ。知ってるに決まってるだろ？」

大して悪びれもせず、空は意地の悪い笑みを浮かべていた。人々からかう悪い癖も今回はかりは性質が悪い。

真紅は微かに走った頭痛を必死でこらえなければならなかった。

「入学した直後に気づいてたよ。あつちはまったく気づく気配がないけどな。お前もこっちに帰ってきたんだし、顔合わせくらいはすべきだろうと思ってさ」

空の言葉を見無視して、真紅は手に持ったままだった缶コーヒーを開け、ようとして失敗した。空が見本を見せてくれて、ようやくプルトップを開けると、中の液体を一息で飲み干す。

「……にがい」

口の中に広がる苦味は嫌なものではなく、どこか懐かしい感覚を真紅に与えてくれた。

家を離れる前、まだ家族みんなが元気だった頃は、父の飲むコーヒーにも興味があつて一度だけ飲ませてもらったことがある。その時は苦味をただ苦いと思うだけだったが、今は少しだけその旨みもわかる気がした。

「高峰 京、か。見違えるほど変わってたな」

昔を懐かしむなど自分には似合わないと思つていた。必要のないものまで思い出してしまいそうで、怖かったというのも本音のひとつだ。もう戻れない安らぎを、思い出してしまいそうで。

それでも彼女のことは、簡単に思いだすことができた。

まだ十歳にも満たない頃、真紅はある屋敷に入り浸つていた。

自分の家でも、空の屋敷でも、愛美の屋敷でもない。そこは真紅の父、白羽の友人の屋敷だった。

始めてその屋敷に行ったとき、真紅は一人の少女を見つけた。

部屋の中で独り、虚空を見上げて黙っている彼女は一見すると人形のように可愛らしく、同時に生氣を感じさせないその瞳は当時の真紅に危機感を与えるほどのものだった。

だからだろうか。放っておくことができなかつた真紅は彼女を部屋の外へ連れ出した。空や愛美たちとも引き合わせ、毎日のように顔を見せに行った。そのおかげか、数ヶ月のうちに彼女はちゃんと

人間として笑えるほどになっていた。

だがそれも過去の話。両親を失い世間を追われた真紅は、その後の彼女がどうなったのか知らない。

だから彼女の変化を目の当たりにして、すぐに同じ人物だとは思えなかった。

「あいつ、あんなにしつかりと喋れたんだな」

「そうだな……確かに昔の彼女と照らし合わせるのは無理かもしれない。人と接することを拒否してた昔の彼女じゃない。今の彼女は、人形じゃない」

言い終わる前に口の中へと焼きそばパンを放り込んで、空は嬉しそうに笑っていた。

かつて危うさを含んでいた彼女は、今はその危うさの片鱗すら残してはいない。

「いい方向に変わっている」

「なんだよ、真紅。父親みたいな顔してんぞ」

「ん？ ああ、娘が成長する親の気持ちって、こんなものなのかもしれない」

「……なんか違う気もするが、まあいいか」

話をやめて真紅も食事に取り掛かる。カレーパンの袋を力任せに破って、カリカリの衣と同時にピリ辛のカレーをかじる。由緒ある学園だか知らないが、購買のパンはなかなかおいしい。

カレーパンを食べ終え、さて次はメロンパンに取り掛かるうとし

た頃、真紅の対愛美センサーがその存在を捉えた。

「……嫌な予感がするんだが」

「奇遇だな。俺もだ」

邪魔になるコーヒーだけをさつさと飲み干して、空は早くも逃げる準備を始めていた。真紅もまだ封を切っていないメロンパンを片手に、ベンチから腰を上げかけた。

「ようやく見つけた。こら、その二人！ 逃げようとするんじゃないの！」

よく通る声に二人は深々とため息をついた。

「別に……逃げようとしたわけじゃない」

真つ赤な嘘を平然と吐いて、真紅は声の方向へと振り返った。

そして、真紅の思考は一瞬だけ停止した。

校舎からやってきたのは愛美だけではなかった。友達と食事を取ると言うのだから誰かと一緒なのは当たり前のことだったが、もう一人の少女の存在は真紅にとって予想外のものだった。

「むさくるしい昼食だろうと思って潤いを与えに来てやったわよ。

今日のゲストは、高嶺 京ちゃんです」

元気のいいというよりは騒がしい紹介の後、愛美の隣に立っていた京は小さく会釈をよこし、どうしていいのかわからずに視線を逸らしている。

愛美に無理やり連れてこられたということは彼女の態度を見ればすぐにわかったが、真紅は愛美に視線を向け、素早く愛美の腕を引き寄せた。

「わっ！ ちょっと……」

「どういつつもりだ、愛美」

「なにつてそりゃあ……」

「悪いが、昔のことは話すなよ。いくら昔馴染みだったとしても、彼女は……敵だ」

敵。自分で言っておいて真紅は心の隅に鈍い痛みを覚えた。

彼女の父親はかつて真紅の両親を殺した企業の幹部だった。昔こそ主だった役職についてはいなかったが、彼女の父に真紅の生存を知られることは得策とは言いがたい。

愛美は驚愕に目を見開いていたが、すぐに申し訳なさげに目を伏せ、ごめんと小さくつぶやいた。

「まあ、昔のことさえ話さなければ普段どおりでかまわない。幸い、彼女は俺のことを覚えていないようだからな」

「……それって、すごく悲しくない？ あの子のために一番がんばってたのは、真紅だよ？」

小さな頭に右手を乗せて、真紅は優しく微笑んだ。

たとえ愛美の言葉が正しくてもそれは過去の話だ。今ここにいる『朝凧真紅』と、京と遊んでいた昔の自分は違うのだ。周囲を取り巻く環境も、真紅自身ももう昔のままではいられない。

それに真紅はただきつかけを作ったに過ぎない。彼女がここまで成長したのは、ひとえに彼女自身の努力の成果だった。

「あの……お邪魔、でしたか？」

「いや、そんなことない。空なんかと二人きりだと、確かに味気ないからな」

「おい、それはちょっと傷つくぞ」

大仰に傷ついたらとジェスチャーする空。そのおかげで京も緊張がほぐれたのか、小さく笑い声をもらしていた。

初めて会ったときは日陰が似合う女の子だった。けれど今のみゃこは少々奥手だが、しっかりとした意思を持って太陽の下を歩いている。

もう彼女は人形などではないのだと、真紅は一人、大きな安堵に酔いしれていた。

〔六話〕 隣の美少女（後書き）

こんばんわ、広瀬です。

少しはスピードが上がってきたかな？　と思う今日この頃ですが、いかがでしょうか？　まああまり変わっていないかもしれませんが。さてようやく主要キャラがそろってききましたが、まだ全員というわけではありません。次話で出せたらいいのですが、ちょっと難しいかな……。

気長に新キャラを待っていただけると幸いです。

〔七話〕 黒の女（前書き）

ありえないこと、というわけでもなかった。
ただ、あまり喜ばしいことでもない。

少年の予想を超えて、世界は早く回っていく。

〔七話〕 黒の女

愛美たちとの昼食は思いのほか楽しいものだった。

昔のことや真紅についてはなるべく触れないよう注意は必要だったが、彼女自身の心根は優しく、あまり自己主張をしないおかげで何事もなく終わることができたのだった。

そろそろ次の授業だということで、愛美と京は一足早く校舎へと戻っていった。

「よかったな、気づかれなくて」

大きく伸びをして空は快活な笑みを浮かべて見せた。真紅は無言で頷き、ゴミを手近な屑籠へと放り込む。片手で投げたビニール袋の塊は風に流されることもなく、目標の籠へと収まった。

安堵。それが真紅の心の大半を埋め尽くしていた。

彼女についての安堵とは別の、自分についての記憶が蘇らずに済んだことへの安堵だった。

京に自分のことが知られるのは、まずい。愛美にも言ったことだったが彼女の父親は真紅にとっては敵だ。彼女が父親に真紅の生存を教えてしまったら、真紅だけではなく空たちにまで迷惑が及ぶことになる。それだけはなんとしても避けなければならなかった。

「さて、授業だな。早く行こうぜ、真紅」

物思いにふけっていた真紅は、空の声に促されるまま立ち上がり、

彼の背中を追うように歩き出す。

優しい風が頬をなでる。熱くもなく冷たくもない。心地よいその風にはかすかに甘い香りが混じっていて、真紅は小さく眉をしかめた。

「? どうした、真紅?」

「空。先に行つてていいぞ。たぶん、俺に用があるんだと思うから」

よくわからないと言いたげに首をかしげる空を置いて、真紅は彼を追い越す。その向こう側にいる人物へと、鋭い視線を向けたまま。

「気づいてくれて嬉しいわ、朝凧くん」

につこりと、表面上は優しく取り繕っているその笑みは真紅の警戒心を促進させる。一定の距離をとって、真紅は足を止め、瞳にありったけの殺気をこめた。

「何の御用でしょうか……先生」

校舎に背を預けていたのは真紅たちのクラスを担当する女教師だった。すらっとした体格によく似合う黒のスーツを纏い、口元には艶のある笑みを浮かべている。昨日の、クラス一つまとめることができなかつた頼りない雰囲気は完全になくなっていた。いや、今の彼女を見る限りでは、もしかしたら昨日はわざと生徒たちの好きにさせていたのかもしれない。

なんにしても警戒を怠ることは、真紅にとってマイナスでしかないだろう。

「ええ。次の時間は私に付き合ってもらえるかしら? 次の授業を

担当してる先生には私から連絡しておいたから」

「……わかりました」

心の中で小さく舌打ちして、真紅は歩き出した彼女の背を追う。

身に纏っている雰囲気からは危機感しか感じられない。言いようのない恐怖は普通の人間がかもし出せるものではなかった。

それとも、と真紅は思案する。教師というものはこういった雰囲気を隠し持っているものなのだろうか。

教師というものをよく知らない真紅にとって、その疑問は至極全うなものでもあった。

教室の窓からは見えない校舎裏へと連れてこられた真紅は、彼女からは視線をそらさぬまま、周囲の状況をうかがった。

しっかりと整備の整った土の地面。左手には校舎の白い壁が、右手には網目状の柵が設置されている。柵は二メートルほどあり越えようと思えば越えられる。柵と校舎の間は、目測で五メートルほど。

「さて、ついてきていただいた理由が何なのか、あなたはわかっていますか？」

その問いに真紅は黙って首を振る。初対面にも近い人間から殺意を向けられる理由など、真紅には見当すらつかない。

教師は艶やかな笑みを浮かべると、一呼吸おいて言葉をつむいだ。

「あなたがいったい何者なのか、それを確認するためです。」朝風
”くん”

朝風を強調した言い方に、眉をしかめる。

その問いには、真紅にとって二通りの意味合いがあった。

一つはナイトメアの関係者という線。彼女がその関係者だったとしたら真紅を人気のない場所に連れてきたことにも納得がいく。

そして、もう一つは

「あなたはあの、朝風 白羽さんのご子息よね？ たしか行方不明ということになっていたはずだけど、なぜそのあなたがここにいるのかしら？」

真紅の素性を知り、こうやって本人が確認するため。こちらの線は薄いと思っただけに、真紅は一瞬、両足の力が抜けるような錯覚に陥った。

朝風家のことを知っているものならば、確かに真紅が本人か、また本人ならなぜそうやって名乗らないのかを問うだろう。真紅は家に戻ったわけでもなく、正式に家を継いではいなかった。

「なぜ、そんなことを聞くんです？」

「あなたが本物かどうか、本当はどうでもいいのよ。上流階級の間にはそれなりの事情があるでしょうから。でもあなたが暗殺者の類なら、生徒に危害が及ぶ存在を見過ごすわけにはいかないの」

その言葉は教師として彼女がいかに生徒を思っているかよくわかるものだった。

だが彼女が信頼に値するのかわ判断材料が少なすぎて、たとえ放っている言葉が正しく聞こえようと、本当のことを言うわけにはいかなかった。

「本人かどうかはともかくとして、暗殺者の類ではありませんよ」

「証明することができの？」

「御子柴たちが知り合いなんです。それだけで十分だと思いますが？」

慣れない敬語を使って、真紅はなるべく威嚇しないように言葉を投げかける。彼女は口元にそつと手を添えて、思索するように目を閉じた。

一瞬、周囲を取り巻いていた緊迫した雰囲気霧散した。それを彼女が警戒を解いたからだと思つた真紅は、自身も警戒を解き、細く息を吐き出した。

「では、用が済んだのなら俺は戻ります。授業の途中からでも……」

踵を返し、校舎へと戻ろうとしたとき、真紅の背筋を怖気が走つた。

振り返り、本能が腕を動かす。それと同時に後方へと飛び跳ねると、目の前で組んだ腕を重たい衝撃が襲つた。痛みに顔をしかめることもなく、片足だけで勢いを殺し、追撃へと備える。

最初の予想が当たっていたか。

攻撃の重み、動きの早さ、死角からの攻撃。彼女は、普通の人間ではない。

真紅の油断を誘うために、わざと生徒思いの発言をしていたのだらう。

攻撃を繰り出したであろう彼女は、今の奇襲を防がれたショックのためか、目を見開いたまま固まっている。

「……今のを、防ぐの……？」

「死にたくないんでな。当たり前だ」

遅れてやってきた痛みを無視して、両足に力をこめる。学校に刀を持ってくるわけにもいかないが、祖父に鍛えられ、空と手合わせを続けるうちに素手での戦いもある程度はできるようになっていた。

次に仕掛けてきた瞬間が勝負。そう思い、真紅は全身の神経を研ぎ澄ませる。

「なら、これでどう?」

正面から仕掛けてくることなど、彼女はしなかった。校舎の壁を蹴り、大きく跳躍した彼女の影は、一瞬だけ真紅の視界から消え失せ、鋭い風が真紅の頬を切り裂くように吹き付ける。

けれど、その行動は真紅の予想したとおりのもの。

膝を折り、真紅は大きく身をかがめる。頭上を掠めていく風を確認して、右足を振り子のように、彼女の足へと叩きつける。

「あっ!」

頓狂な声を上げ、体制を崩す。蹴りの反動を利用して上半身をひねり、倒れかけた彼女の体を左手でつかまえると、そのまま力任せに地面へと叩きつけ、肘をその顔面へと振り下ろした。

「つつ~~~~」

止めを刺す寸前、彼女は両目を強くつぶり、きゅっと口を縛った。

ありえない、ことだった。

真紅の考えが正しならば彼女はナイトメアの一員だ。本当に彼女がナイトメアだったとしたら、こんな行動をとることはない。ナイトメアの特徴の一つが死を恐れないことなのだ。少なくとも真紅が知る限り、死に何らかの反応を見せたナイトメアは一人しかいない。

彼女の顔が、かつての『彼』の顔とダブった。

元々殺すつもりなどなかったが、彼の残像が真紅の振り下ろした肘を止めていた。

真紅の肘は彼女の鼻先で停止し、彼女の額にかかった髪の毛が真紅の起こした風によって後ろへと押しやられる。

「…………え…………？」

殺される、と覚悟していたからか彼女の口から驚きとともに大きく息が吐き出された。

「答える。あんた、何者だ？」

肘を鼻先に突きつけたまま、彼女の両腕をベルトで縛り、左手で押さえる。

彼女は額に冷や汗を伝わせ、もう一度息を吐いた。その姿からは安堵が感じられ、やはり真紅は眉をしかめる。

「……ごめんなさいね。挨拶としては、少々手荒だったかしら？」

強がって見せるが、彼女の声はまだ、震えていた。

「あんな挨拶、聞いたことがない」

さすがにそうに目を閉じて、彼女はさきほどまでとはまったく違う、幼い笑顔を浮かべた。その笑顔が、不思議とよく似合う。おそらく本当はこっちの笑顔が、彼女本来の笑顔なのだろうと、真紅はなんとなく納得してしまった。さっきまでの笑顔からは人間味がほとんどしていなかったが、今の笑みは本当に人間じみている。

「……教えてあげる。私は、あなたの想像しているとおり、ナイトメアの一人よ」

楽しそうに、嬉しそうに、彼女はそう言い放った。

〔七話〕 黒の女（後書き）

こんにちは、広瀬です。

さて、なんか出てきた女教師ですが初登場のときはすごく影が薄かったですよ。二言くらいしか放ってなかった気がします。正直、こんなキャラをやらせるつもりはありませんでした。

でもいつの間にか気の強い女教師に……。世の中わからないものです。

さて、もうナイトメアに見つかってしまった真紅ですが、どうなっていくのでしょうか？

作者としましてもいろいろと出来そう楽しんでます。

〔八話〕 人間の定義（前書き）

人間の愚かしさは、いったいどこからやってくるのだろうか。
全てを思いどおりにしたいと願う誰かの心が、この歪みを生んだ
のだろうか。

〔八話〕 人間の定義

「お、無事に帰ってきたみたいだな、真紅」

授業が終わり、教師がいなくなったところを見計らって真紅は教室へと戻ってきた。自分の席に座ると後ろから空の元気な声がかけられたが、真紅には応える元気すらなく、気づいたときにはぐったりと机に突っ伏していた。

「……おい、まさかかなちゃんに犯されたか？」

かなちゃん、という単語に反応したのか、体が自然と痙攣するよ
うな動きを示す。

それをどう解釈したのか、空は奇妙に固い日本語を発していた。

「……オイ……シンククン？ マサカコノ短イ時間デ、大人ノ階段
ノボツチャツタノカナ？」

背後の雑音を意識の中から追い出して、真紅は数分前までの出来
事を自分の中で反芻し始めた。

ナイトメア。自分のことをそうだと認めた彼女へ、真紅はあらん
限りの殺気を叩きつける。気の弱い人間ならば簡単に心臓を止めて
しまいそうなのを、けれども彼女は平然と受け流し、言葉をつむ
いでいく。

「担任なのに名乗ってすらいなかったわね。私はかなえ、漢字は願いを叶えるの叶よ。苗字は、一応朝倉と名乗ってはいるけれど、もちろん偽名よ」

「そんな話をするために、止めを刺さなかったわけじゃない」

「まあまあ、焦らないでよ。大丈夫、私はもうあなたと戦つつもりも、あなたを殺すつもりもないわ」

声からは棘が、体からは力が完全に抜け去り、その顔にはなぜか心から嬉しそうな笑みを浮かべている。

「……その言葉を、信じると？」

それでも真紅は警戒を怠らない。先日、集落を襲ってきた暗殺者も抵抗する力が残されていなかったはずなのに、最後の力で空を殺そうとしていた。あの姿を思い出すといくら警戒しても足りないのではないかとさえ思えてくる。

けれどその反面、真紅は彼女の腕をつかむ手から力を抜いていた。

彼女は確かに、ナイトメアの一人だ。だが彼女からは先日の暗殺者たちとは違う何かを感じられる。例えるなら、懐かしさ。

「さっきのあなたと同じで信じてもらうための材料は少ないけれど」

「少ない、というよりはまったくくないな」

「ふふ……そうね」

楽しそうに、笑う。無邪気という言葉がよく似合う彼女のそれに、真紅はとうとう疲れて束縛を解いてしまった。

両腕を捕まえているベルトを片手で解き、彼女の上から退く。叶は嬉しそうに笑顔を深め、土を手で落としながら立ち上がる。

「ありがとう。信じてくれて嬉しいわ」

「……一つ、答える。お前は他のナイトメアとあまりにも違いすぎる。何故だ？」

ずっと感じていた違和感。その正体がどうしても気になって、気づけば自然とその問いが口をついていた。

叶は人差し指を下唇に当て、思案した後、ゆっくりと口を開いた。

「私は、ナイトメアとしては失敗作らしいから、きっとそれが原因ね」

「……失敗作、だと？」

少なくとも運動神経の面だけを考えるならば、彼女は他のナイトメアよりも秀でたものを持っているだろう。交戦した真紅だからこそ、それはよくわかる。ならば彼女が失敗作と呼ばれる原因が他にあるはずだった。

「たとえば、ホラ、私は死を恐れるわ。そこから他のナイトメアとは違うでしょ？」

「そうだな。それが欠陥だと？」

「そ。ナイトメアにとって恐怖という感情は、邪魔なものなの」

確かに戦いにおいても、捕らえられたときでも死を恐れるということは暗殺者にとって邪魔なものだ。戦いのときは迷いを、捕虜になったときは恐怖をそれぞれ生んでしまう。

だがそれは人間にとって、あまりにも自然なものだ。むしろ当然のようにもっていないければならないものではなかるうか。

「……もしかして、あの人は何も教えていないの？」

「……なに？」

真紅の反応を見て、叶は疲れたように深々とため息をついた。

「そつよね……あの人にだって伝えたくないことはある。気に入っている子になら特にそつ……私でも、きつと言えない」

「おい……いったい何を……？」

「いい、真紅くん。心して聞きなさい」

彼女の真剣な眼差しを正面から見て、真紅は口をつぐんだ。次に訪れる言葉がとても重要な意味を持っている気がして、聞き逃すまいと耳を傾ける。

「私たちナイトメアは……自然に生まれ出た存在じゃないの」

どういう意味なのか、真紅には理解できない。叶は言いつらそつに視線をそらし、泣きそうな瞳を震わせていた。

「私たちはある男のクローン。人工的に作られた、殺人のために生き続ける人形よ。ナイトメア、悪夢って言うのはね、私たちのリーダーが皮肉を込めてつけた名前なの」

「クローン……？ そんなものが……」

「事実よ。元々は男の遺伝子を使っているから、女の私は一種の突然変異。他のナイトメアと比べると中途半端な力、抑えられない感情。作った人間から見れば、間違いなく失敗作でしょうね」

頭を強打されたような衝撃が、真紅を襲っていた。

咽が不自然に渴く。神経が細いつもりはなかったが、この内容は

あまりに衝撃が強すぎた。

思考が停止しているうちに叶は真紅の目の前へと移動していた。抗えるほどの気力は、真紅に残っていない。彼女が真紅を殺すつもりだったなら、簡単に目的を達成することができただろう。

けれど彼女は同じくらいの背をしている真紅の頭をそつと抱え、自分の胸へと導いた。

「なっ……!!」

「あつたかいでしょ？ 温もりも、心もあるのに私たちはあなたたちとは違う存在なの。信じられる？」

信じられるはずが、ない。頬に感じる温もりも、安らぎも、全て人間ではない存在から与えられている。そんな考えが浮かぶこと自体が、間違っている。

それに、ならば幼い頃の約束は、いったいなんだったというのか。

悪夢を終わらせる

あの時感じた、失われていく温もりと鼻孔に残る血の臭い。言いようのない喪失感。それら全てが偽物だと、肯定しろというのだろうか。

そんなものを真紅が許せるはずがなかった。

「……あんたも、あの人も、人間だ。間違はなく、誰がなんと言おうと、俺たちと同じ人間だ」

「ありがとう。あの人の言うとおり、あなたは優しい子ね」

最後に柔らかく頭を撫でられて、真紅は解放された。

正面にしっかりと立って、彼女の瞳を見つめる。朱色の混じったその瞳は、今は決意に満ちていた。

「あなたと戦うつもりは、もうないわ。ちょっとだけ力が見たかったの」

「なぜだ？」

「私は、あなたと同じ。クドウ レンの意思を叶えてあげるために戦っているの。同じ目的を持つものどうし、一緒に戦えないかと思つて」

その懐かしい名前は、真紅の心へゆっくりと染み渡っていくのだった。

工藤 錬。ナイトメアの元リーダーであり、真紅の父、白羽の部下。真紅を死のふちから救い出した男だが、彼は七年前、真紅の目の前で血にまみれ、力尽きた。

彼との記憶はあまり多くはない。元々は父のところへよく来るお兄さんだと思っていなかった。それが両親を失い、祖父に預けられるまでの少しの期間とはいえ、本当の兄弟ほどに親しくなっていた。幼い頃の真紅にとっては初めて頼りにできる年の近い人だった。

だからこそ彼が死んだショックは大きすぎたし、真紅の根底には彼の死が、今も根強く残っている。

「あの人の意思……か」

確か錬は当時十七歳。叶とは同年代だ。もしかしたら、恋仲くらいにはなっていたのかもしれない。

だとしたら、彼女には悪いことをしたなと思う。錬が死んだ原因は直接ではないとはいえ真紅にある。

嫌な思考をしていることに気づき、頭を振って雑念を飛ばす。

たとえどれだけ考えようと、彼が戻ってくるわけではないのだ。

「……おい、真紅？ そろそろ現実世界に帰ってきて、アレを止めてよ」

「っ……！ なんだ、愛美か。どうした？」

いきなり目の前に現れた可愛らしい顔に、真紅はようやく現実へと連れ戻される。いくら付き合いが長いとはいえ、鼻と鼻が触れ合う距離まで接近するのは心臓に悪い。

「どうした、じゃないって。あんたの後ろにいる馬鹿を何とかしてよ」

振り返るとそこには口から奇妙な空気を吐き出して、白目をむいている何やら面白い空が座っていた。口から出ているものは俗にエクトプラズマというやつだろうか。付け焼刃の知識ではなんとも言いづらいが、本来の人間ではありえない現象が起こっていることだけは真紅にも十分理解することができた。

「……これ、どうしたんだ？」

「あんたが何の反応も見せず、一人で記憶の海を彷徨ってるから空が一人で暴走しちゃったのよ。何か、大人の階段がどうのって言うてたけど、ともかく何とかできるのはあんただけなのよ」

愛美の言葉に納得してしまう自分がいる。今の空はどこからどう見ても安全ではない。一歩間違えばこれは犯罪を犯してしまいそうなほど危うい。そんな空を力でねじ伏せられるのは、ここにいる人間の中では真紅だけだろう。

重たい体を椅子からひつpegがして、真紅はゆったりと立ち上がる。気だるい感じは抜けきっていなかったが、それでも目の前の壊れた空を止めることくらい雑作もないはずだ。

「悪い、空」

一応謝っておいて、隙だらけの首筋に素早く衝撃を与える。蛙がつぶれたような気味の悪い声を上げて、空は机に顔面を叩きつけ、そのままピクリとも動かなくなってしまった。

視界の端で京が心配そうに空を覗き込んでいるが、それを愛美がそっと引き離す。賢明な判断だと、真紅も同じように距離をとる。

「なあ……真紅よ。いくらなんでも、今のは痛かったぞ?」

机に顔面を突きつけたまま、正気に戻った空がしゃべりだした。冷静な声音でお調子者の空からはあまり聞くことが出来ない声だったが、それゆえに空がどれだけ怒っているか、よくわかる。

「う……すまない」

「謝れば済むものじゃないよね、ん?」

ゆっくりと、緩慢な動作で目の前の親友は頭を上げる。日光を浴びたその表情は眩い笑顔に覆われて、他者の発言を許さない壁が教室内の全てを埋め尽くしていた。

恐ろしいと素直に感じてしまう。暗殺者なんて比にならないほど、空の放つ負の気配は邪悪なものを含んでいる。

「さあ、真紅。黙って制裁を受けろよ」

猫なで声に四肢を怖気が走る。逃げようとしても両足が固まってしまっただけ動けない。

「や………さて、空。話せばわかる、だから少しは……う、うわああああ……！」

その後、真紅の悲鳴が数分間教室内を木霊していたという。

〔八話〕 人間の定義（後書き）

こんにちは、広瀬です。

真紅の根底を作っている男、工藤 錬。やっと名前だけは出せました。今まで『あの人』とか『彼』とか代名詞だけしか使えなかったので作者的にはよかったです。

さてまだまだ続いていく学園編、次からは真紅ばかりではなく他の人たちにもスポットを当てていこうと思っています。

〔九話〕 それぞれの意志（前書き）

亡き人に誓った約束。

戦い続ける決意。

そして、少女の思い。

少年の知らぬ場所で、物語は回り続ける。

〔九話〕 それぞれの意志

朝倉 叶にとって、工藤 錬はたった一人自分を理解してくれる人だった。

失敗作と罵られ、人一倍戦闘訓練を強いられ、暗殺ではなく自衛の手段を多く学ばされた。当時の幼かった頃の彼女はその扱い全てに劣等感を感じていた。

自分は誰にも必要とされていない。自分の存在など、あってもなくても変わりはない。

その感情は、彼らには絶対に沸かないものだっただろう。戦うために作り出され、殺すために生き続ける。それが彼らの大半が強いられた、運命だった。

そう考えてみれば自分は幸せだったのではないか。現在の叶はそんな風に思っている。

自分に絶望し自殺を試みたとき、彼は現れた。

『むやみやたらに自分を棄てようとすんなよな』

支給されていた短剣を自分の胸に突き立てた。彼女は確かにその行動に及んでいた。しかし彼女の腕から短剣は姿を消し、代わりに目の前に現れた少年の手の中へとその身を委ねている。

少年は自分と同じくらいの年。当たり前か、と叶は考える。自分たちの大半は同時期に作られた。ならば年が近くてもなんら不思議はない。

腰ほどまで伸びる黒の髪と、利発そうな顔立ち。背は自分よりも

少し上で、その瞳はうつすらと青みがかったている。

叶は少年の瞳を見上げ、睨んだ。

『あなたも、私を見下すの？』

声は震えていたかもしれない。怖いわけではない、ただ全身を取り巻く劣等感が気分を酷く沈ませていた。

『何で？ 君を見下す理由が俺にはないよ』

不思議そうに首をかしげ、叶を見つめるその瞳には一切の偽りが感じられない。優しさに満ちたその蒼は、海のような安らぎを与え、叶の全てを包んでいた劣等感はいつの間にかどこかへ消えてしまっていた。

海なんて、叶は見たことがない。知識として知っている程度だった。それでも、彼の瞳は知らないはずの海を連想させ、包まれるような安らぎが彼女を暖める。

『君は強い。俺たちの定義が強さだというのなら、君はナイトメア以外の何者でもないよ。何か言うやつらなんて気にするなよ。君の強さに嫉妬しているだけなんだからさ』

『……でも』

『むう……じゃあさ、俺と友達にならないか？』

友達。そんなものここでは存在しない。彼らに個人の意思など必要とされず、個性など壊される。

けれど少年は叶の微笑み、右手を差し出す。左手に持っていた短剣は気づかぬうちに少年の後ろへと投げられていて、トスと軽い音が響いた後、何か倒れたような重たい音がその場に響いた。

だが少年はそんなことは気にするなどでも言いたげに笑顔を浮かべている。

笑顔など、彼女は一度も見たことがない。その安らぎに導かれるように、叶は少年の右手をやさしく握っていた。

『よし！ これで俺たちは友達だ。困ったことがあったら何でも言っ
てね。俺の手が届く範囲で、助けるから』

それが

それが、少女の初恋だったのかも知れない。

懐かしい夢を見た。

まだ鍊が生きていたころ、初めて出会った場所の記憶。忘れられるはずがないし忘れるつもりも毛頭ないが、彼がいないという現実に向き合うとどうしても胸の奥が軋むような感覚に襲われてしかなかった。

「……大丈夫だよ、鍊。あなたの願いは、私が引き受けたから」

自分にもしものことがあったら、真紅を頼む。それが鍊の残した最初で最後の願いだった。

叶からはいくつもお願いをしたことがあった。些細なことから大きなことまで、本当に数え切れないほど。それでも彼は文句を言わず、むしろどこか楽しそうに叶の願い事を叶えてくれる。

だからせめて、たった一つの願いくらい叶えてあげたい。

恩返しといえなくもないが、叶にとっては彼女が生きる最後の理由でもあった。

心の支えを失った人間は、弱い。七年前、鍊を失った頃の彼女は抜け殻のような状態だった。

上層部の人間にその姿を発見されていたなら、確実に処分されていた。その危機を救ってくれたのが、昔から彼女を教育していた男だった。

彼は自らの命と引き換えに、叶を施設の外へと逃がした。今思えば、彼が叶に厳しく当たったのは、叶が自分一人でも生きていけるように、未来を見越してのことだったのかもしれない。

「いくら考えたって、死んだ人は帰ってこない」

自分に言い聞かせる。

悲しんだところで、悔いたところで死人は蘇ったりしない。それを痛いほどわかっているから、叶は前を向いて進んでいく。

「朝倉先生。資料出来上がりましたので、明日、生徒たちに配布してください」

「あ、わかりました」

温和な笑顔を浮かべ同僚の教師をやり過ごす。

教師たちの間では、叶は優しく、とても面倒見がいい人を通っている。愛想を振りまいて善良な行動を心がけていたのだから当然かもしれないが、叶にとっては動きやすい環境が整っていた。

今の叶なら誰にも気づかれることなく、自由に行動することが出来る。組織に気づかれなければきっと、真紅の手助けも出来るはずだった。

「今、私に出来ること……それは、戦うことじゃない」

少なくとも今はまだ、武器を取り戦う時ではない。

実際に戦うのではなく、後ろから共に戦う。真紅の存在を敵側から隠し通す。それが真紅のために出来る、最高のアシスト。

職員室にある自分の机に向かい、ノートパソコンを立ち上げる。

小気味よい起動音を響かせて、真っ青な海の壁紙が顔をのぞかせた。

澄んだ海の色は錬の瞳と同じ色。その色が大好きで、叶はずっとこの壁紙を使っている。

ソフトを起動させ、ネットに繋げる。

誰もいなくなった職員室で不気味な笑みを浮かべる。戦わなくなつて六年ほどになるが、彼女の新しい娯楽がこれだった。

ハッキング。スリルもちろんだが、さまざまな情報を入手し、利益を得ることで彼女は生き残ってきた。

今、彼女がしようとしているのは情報操作だった。かつて彼女を

苦しめていた企業の、裏情報。そこへ真紅の情報をあげていく。

もちろん根も葉もない嘘だ。そうすることで真紅の発見を遅らせ、こちらに有益となる情報を手にする。

彼女の戦いは、すでに始まっているのだった。

珍しいこともあるものだ。

我が目を疑いながらも、空は客間にある大きなソファアの元へと足を向けた。

ふかふかなソファアに身をゆだね、無防備な表情で眠りこけている真紅。人前で眠ることなでほばありえない彼の、久々に見る寝顔は優しくてどこか幼さが残ったものだった。

昔、一度だけ見たことがあるそれとは、似ているけれどどこか違う。つらいことをたくさん抱えて、それでも前に進んだからポロポロになってしまった。心に刻まれたたくさんの傷が真紅の裏側にある。空はそれを改めて理解した。

空の場合、強くなりたくて自分を鍛え、立场上やってくる刺客を倒していくことで自分の力を理解していった。

けれど真紅の場合は違う。戦わなくてはならなかった、殺さなくてはならなかった。優しい彼には、本当に酷な運命だったと思う。

「……人の顔見て何してんだ、空」

半眼を開き、不機嫌そうに欠伸をもらし、真紅は目を覚ました。

「こんなところで寝てたら風邪ひくんじゃないかな、と思つてよ」

「誰のせいでここまで疲れたのか、わかつてるか？」

「まあ……悪かったよ。寝起きだったし、俺も混乱してたんだ」

「……あれは、寝てたつていえるのか？」

笑つてごまかして、真紅に背を向ける。客間を抜けたその足で空はいつもの場所へと向かった。

敷地内にある、鍛錬場。十人くらいなら楽に鍛錬が行えるその部屋は、両親に頼み込んで作ってもらったもの。木造の床に裸足であり、部屋の隅に置いてあった重しを両腕と両足に取り付ける。合計で、何キロだっただろうか。記憶にはないが、少なくとも一つ十キロはあるだろう。

それをつけた状態で自由に動けるようになる。当初の目的はそれだった。

だがそれだけでは、真紅に追いつけない。もっと強く、もっと上へ。

空の強さは学園の人間たちには最強とたたえられていたが、空自身は納得などしていない。真紅は、もっと強い。それは死線を潜り抜けてきた数だけではなく、意志の強さ、心の大きさが関係しているのだ。

身も心も、強く。

空に出来ることは、真紅の足手まといにならないこと。ただ、それだけだった。

「それでは、失礼します。お父様」

優雅に一礼して、京は父の部屋から退室する。

呼び出された用件は最近の学園生活について。何か変わったことや、困ったことはないかという質問だった。

転校生が来たこと以外はさして変わったこともなかったため、京は特にありませんと返答した。父もそれでよかったのか、一つ頷いただけで彼女に退室を促したものだ。

長い廊下を渡り、自室の扉をくぐって小さく息をつく。

京の自室は大きなベッドと姿見、机以外はほとんど何も無い。床に敷かれた高級な絨毯のおかげで何も無いという印象は薄れていくかもしれないが、彼女自身、自分の部屋は味気ないものだと思っている。

その中でも唯一愛着があるものへ、京は手を伸ばした。

いつ、どうやって手に入れたのかすら覚えていない小さなネックレス。四葉の形をして、緑色の石を中央にあしらったそれは、高価

なものではない。

でもなぜだろうか。小さすぎて首に入らなくなってからもチェーンを取替え、手入れを怠らないよう心がけ、肌身離さず身につけている。唯一、父の前でだけはネックレスを部屋においていくのだ。父はどういうわけか、そのネックレスをつけていると悲しそうな、悔しそうな表情を見せることがある。その顔が見たくなくて、彼女はその一時だけネックレスと別れを告げる。

机の上からネックレスを取り上げ、胸に抱く。これが身近にあるだけで、京は言い知れぬ安らぎに包まれる。

「……何なんだろう？」

ふと転校生のことを思い出す。彼、朝風 真紅はどこかこのネックレスと似た感情を京に与えていた。

彼はどこか、懐かしい。

懐かしいはずなどないはずなのに、彼と言葉を交わし、近くにいらただけで安らぎを覚えることが出来た。

これが一目惚れなのだろうか。恋愛には疎かった京には、そんな考えが浮かんでいた。

「お嬢様。お食事の用意が出来ましたので……」
「わかりました。すぐに向かいます」

扉の向こう側から投げかけられた声に、京は現実へと引き戻され

る。

彼のことを気にしてみても、詮無きことだ。京はまだ真紅のことを何も知らない。話してみても悪い人ではないことだけはわかったが、明日からはもつとたくさん話してみたい。

自分の中に珍しく湧き上がる好奇心。それがなぜなのか未だわからぬまま、京は自室を後にするのだった。

〔九話〕 それぞれの意志（後書き）

一週間ぶりくらいの投稿となりました、広瀬です。

前の話で悲鳴上げたままフェードアウトしたわけですが、気にしないでください。スキンシップです。

なんとなくですが京も真紅を覚えているみたいです。子供のころの記憶なんてあいまいですからね、忘れてたって仕方ありません。真紅の考えも杞憂に終わりましたし、もうしばらくは学園編が続きます。

それでは次話 「坊っちゃんと嬢ちゃんの大喧嘩」 でお会いしましょう。（嘘）

〔十話〕 痴話喧嘩と面影と（前書き）

微笑ましい。そんな表現が、どうにも似合わない。

二人の仲間と、一人の少女と。

血なまぐさい世界を一時だけ忘れ、少年は心地よい日常を満喫する。

〔十話〕 痴話喧嘩と面影と

学園も三日目になると、流石に慣れ始めてきた。

クラスメイトの顔もなんとなく覚え始め、名前こそわからないものの朝の挨拶くらいは交わしたものである。

昨日は空に起こされた後、そのままソファで眠ってしまった。

空は寝違えたりしていないか心配しているようだったが、杞憂である。元々床で寝たりすることが普通だったためか、体制が悪くても体にはなんら影響がない。

自分の席に座り、空と他愛ない話をしていると、元氣のいい挨拶と同時に愛美がやってくる。

「おっはよ〜！ 二人とも出るの早いんだから。迎えにいったのいないって言われたときは、ちよっぴりシヨックだったんだよ？」

頬を膨らませ、怒っているんだぞと主張する彼女の雰囲気は小さな少女の頃からあまり変化が見られないかもしれない。むしろ体はしっかりと成長しているのだが、真紅は小さく笑い声をもらし、空へと視線を向けた。

「む、何よ、真紅。何かおかしい？」

「いや……愛美は愛美だな、と思って」

「何当然のこと言ってるんだよ？ こいつが簡単に変わるわけないじゃないか」

空の一言が気に食わなかったのか、それから二人の攻防が始まった。

互いの両手が素早く繰り出される。

愛美の右手を鼻先で受け止め、左が攻めてくるところにその手を差し出す。愛美もそれに気づいて右手を引き、左を空の左手へ。右手でそれを受け流し、最後まで使わなかった左手を愛美の額に突きつける。

「俺の勝ちい」

口元を吊り上げるように笑い、彼女の額に弱いデコピンをぶつける。あう、とかわいらしいうめき声を上げ、愛美は自分の額を押さえると涙目で真紅を見た。

「しんくう……」

「俺を巻き込もうとするな」

いきなり常人離れたした動きを見せられても、クラスメイトたちは驚くことがなかった。彼らの行動はどうやら日常化しているらしい。

昨日、一昨日とこのクラスを観察して、少しだけわかったことがある。彼らは外の人間たちには警戒心が強いが、内側の人間に向けてはそれが無い。真紅も、空たちの友達だからということであっさりとクラスに迎え入れられた。

真紅に言わせれば、これは危険な兆候だった。

元々内側に敵が混じっていたとしたら、また内側の人間が裏切ったりしたら。そんな考えがこのクラスには存在しない。ナイトメアの動向は叶を通してわかるようになったが、一つ間違えれば真紅の正体が割れてしまう。

「こんなことなら偽名でもつかっておけばよかったなど、いまさらながらに後悔していた。」

「あ、おはよう。朝風くん」

「ん？ ああ、おはよう、高嶺さん」

後ろで繰り広げられる騒がしいやり取りにはもう慣れているのか、京はやわらかい笑顔を浮かべ席に腰を下ろした。仕草一つをとっても育ちのよさが滲み出しているかのようだ。どこかの元氣娘も彼女を見習うべきではないかと、危険な考えを頭の隅に押しやって、真紅はため息をついた。

「どう、しましたか？ 朝からため息なんて……」

「いや、なんでもありませんよ。ちょっと後ろのやり取りに当てられただけです」

「仲がよろしいですよね」

「仲裁しなければならぬこっちの身にもなってもらいたいですよ、ほんと」

京も苦笑を浮かべ、横目で彼らのやり取りを見守っている。

少し目を離していたうちに、二人は子供のように睨み合いくだらないことで言い争っていた。

しばらくは放置しといたほうがいだろうと、真紅は京との会話に意識を向ける。

「でも、私たちとしては、彼らを止められる人が現れて、助かっているんです」

「……それは、何よりだ」

厄介ごとを押しつけられた気分で、真紅はやれやれと首を振る。

頼りにされることは別にかまわないのだが、その方向性が仲間をなだめることというのはどうにもやる気が出ない。

憂鬱な気分を押しやって、真紅は二人の鎮圧に重い腰を上げるのだった。

二人の喧嘩、もとい言い争いは今に始まったことではない。

幼少の頃から、それこそ物心つく前から一緒にいた真紅が知る限り、日に一度は必ず喧嘩まがいの騒ぎを起こしている。

大半は空が発端であることが多いのだが、愛美からけしかけることもしばしばある。挑発に乗ることが少ない空だが、彼女の挑発だけはうまく受け流すことが出来ないのだ。

長く共に行動していると相手のアキレス腱を的確につけるようになる。愛美の場合、まさにこれだろう。空は誰かを弄って遊ぶのが好きなのだ。

二人とも”折れる”ということを知らないが基本的には仲がいい。どちらも絶対に否定するだろうが、いいコンビなのである。

朝の授業前に二人を止めた真紅だったが、彼らの争いは昼食の時間になっても水面下で続けられていた。

「……あそこまで対抗意識を燃やさなくてもいいだろうに」

流石の真紅も二人の元気についていけない。子供の頃なら、まだ序の口だと軽口を叩いていたかもしれないが、無邪気に体力を消費する趣味は真紅にはなかった。

「あはは……でも、朝凧くんが来るまでは、もっと激しかったんですよ？」

「器物破損とか、しなかったよね？」

一抹の希望を抱いて投げた疑問だったが、隣で笑う京はやわらかい笑顔を浮かべるだけでその問いに答えようとはしない。

その笑顔だけで、十分に理解は出来た。

「……頻度は？」

「わりと、頻繁に……」

二人そろって深々とため息を吐く。吐き出された鬱々とした空気は一際強く吹きぬける風に流されて、自然界へと流されていく。

昨日と同様に中庭にやってきた真紅たちだったが、昨日のそれとは違うあわただしい空気が彼らの周囲を取り巻いていた。

その元凶は未だ互いに睨み合ったままで、和もつとする真紅と京

の意志を悉く消し去っている。

「いい加減、引くってことを覚えるよ。二人とも」

ベンチに座って一定の距離をとり、互いに逆の方向へと顔を背けている空と愛美。正面に立って仲裁をしている二人にとっては、ただ拗ねている小さな子供だった。

昼食を買うときも一悶着あった。上流階級の学校であるため、購買で人の波が出来るなどという状況にはならなかったが、生徒たちが並んでいるところを二人で押しのけ、どちらがいいパンを買えるか競っていた。

呆れて見ていると、生徒たちも慣れっこなのか苦笑を浮かべているだけ。二人の旧友として恥ずかしく思いながら、皆に謝ってから中庭へと向かったものだ。

昼の一件を見ただけでも、二人が学園内で知名度が高い理由がわかる。

主に、悪い評判だったようだ。

親に説教をされているように、二人とも視線を真紅に合わせようとしない。どうしようもないと内心あきらめつつも、真紅は目を細める。

「世間知らずな奴らが多い学校だが、あまりにも阿呆なことをやりすぎだ。やりたい放題にもほどがあるぞ」

くどくどと言ってはみるものの、意味がないことは承知している。

もう一度大きくため息を吐いて、真紅は空たちが座るベンチとは別のものに腰を下ろした。京も二人の間には座れなかったのか、真紅の隣に腰掛ける。

「大変ですね」

「そう思うなら、少し手伝ってもらえると助かる」

「あはは……私には、無理だと思いますよ」

険悪な雰囲気からは少し離れた場所で二人はようやく落ち着いた空気を得ることが出来た。

精神的に疲れた。そう感じているにもかかわらず、けれど真紅はこの状況を楽しんでいる自分がいることに気づいていた。

隠れ里に暮らしていた真紅は、日常的に同世代の人間と接してきたわけではない。空たちの訪問は一月に一回程度であったため、外の情報に少し疎い程度ですんではいるが人との接し方は未だに緊張する。

だからだろうか、二人の喧嘩を収めていくうちに自然とクラスの生徒と話すようになっていく今日を、楽しんでいる。人と接することが嬉しいことなのだ実感できる。

「朝風くん？ どうしました？」

「……いや、なんでもないですよ」

自然と頬が緩むが、収めるつもりはまったくなかった。

自分は他人を軽視する、世間では駄目な人間であると思っていた。それが、どうだろう。他人とのつながりを楽しむ、新しい日常を楽

しんでいるではないか。

どちらが本当の自分だったのかもわからないまま、けれど真紅はもう少しこの日常が続いてくれることを、どこかで願っていた。

気づくと隣に座った京が心配そうに顔を覗き込んでいる。大丈夫だと微笑を向け、購買で買ってきたパンの封を小気味いい音を立てて引き裂いた。

「俺たちは食事にしよう。あいつらに付き合って断食する必要はないよ」

少し離れた場所にいる空たちは、自分が買ってきたものを食べようとせぜずに迷惑な空気を形成している。傍目にみれば痴話喧嘩真っ最中のカップルといったところだろう。考えて、意外にしつくりくる。早苗に話したらきつと、二人をくつつけようとすることに違いはない。

迷惑そうな表情をする二人が目には浮かび、思わずほおばったパンを吐き出しそうになった。

空たちに思いをはせることを止め、真紅は隣の少女へと意識を向けることにした。

京は小さな口にパンのかけらをほおばり、小さな動きで咀嚼している。小動物のようなその動きは、幼き日の彼女を思い出させるには十分なもの。

「楽しそうですね、朝凧くん」

「ああ、確かに。充実していると思うよ」

「朝風くんは今までどんな生活を送っていたんですか？」

視線を向けられ、問いかけられて真紅は少し思案する。

正直に隠れ里に住んでいたとは言えない。御子柴家からどういう説明が来ているのかもわからない。

彼女にしてみれば何気ない質問だったのかもしれないが、軽々しく答えられるものではなかった。

「……あまり、人と関わらない生活をしていた」

「学校には、行っていなかったのですか？」

「ああ。勉学は祖父が教えてくれていた」

学力くらいある程度はつけておけとうるさくて仕方なく勉強していたが、祖父の教え方は学園の教師に勝るとも劣らぬものだった。そのおかげで授業には支障なくついていける。むしろ復習になっっているかもしれない。

「おじい様、ですか」

「俺が唯一、尊敬している人だよ」

じいさん、か。

集落を抜け出して都会に出てきてから祖父のことは考えないようになっていた。間違いなくどこかで元気に暮らしているだろうが、心

配なことには変わらない。

帰ったら祖父の捜索も頼んでおこうと考えて、真紅は残っていたパンを一口で消費した。

「高嶺さんはどんな生活を？」

「私は、学園で楽しい日々を過ごしていました。父も優しい人で、私の好きなように暮らしていいとってくださいましたし」

「そういえば、父子家庭でしたね」

「え？」

言った後に失言だったと気づいてしまった。

直接彼女の家庭について聞いたのは、今日が初めてのことだ。彼女の家庭について予備知識を持っていては、疑問を抱かざるをえないだろう。

気を抜きすぎだと後悔してみても、放ってしまった言葉は返ってこない。戦闘時以外あまり役立たない脳みそを総動員して、次に来るであろう疑問への答えをひねり出そうとする。

「どうして、それをご存知なのですか？」

呟きにも似たその小さな言葉は、どこか期待を含んでいるようにも思えた。

「……愛美に聞いたんです。気分を害したなら、申し訳ない」

「あ、いえ……そうですか」

目に見えて残念そうに肩を落とす京。その意味を理解できずに、

真紅は少し困惑してしまった。

他人の感情というものはやはりわからない。経験不足を差し引いたとしてもそうだった気遣いは苦手だったのだ。悲しませたり、怒らせたり。他人に関心などないのだが、傷つけることを望んでいるわけではないのにどうだったわけか、集落にいた頃もよく人を傷つけてしまっていた。

「……何か、悪いことをしてしまったようだね」

「あ、いえいえ！ すいません、気にしないでください」

両手を目の前で激しく振って、頬を朱に染めるその姿はなかなか愛らしい。真紅が普通の少年であったなら惚れてしまってもおかしくはない。

だが真紅はその表情に、昔の彼女を重ねていた。

彼女が真紅に見せた初めての笑顔。まだ笑い慣れていなくて、少し無理のある笑顔だったけれど、毎日のように通いつめ、たくさん話しかけ、笑いかけ、ようやく報われたそのは真紅にとっては宝物のような瞬間だった。

花が咲いたような美しい笑顔は当初の彼女でも十分すぎるほど輝いて見えたが、明るい印象を持つ今の彼女が浮かべると、直視できなくなるほどの暖かさをかもし出しているのだった。

気まづくなつて顔を背ける京。その横顔を眺めながら、結局過去と比較してしまう自分に複雑な気持ちを抱くのだった。

〔十話〕 痴話喧嘩と面影と（後書き）

気づかれないようにしているのに、心のどこかで気づいてほしい。そんな複雑な心境に陥ったことが皆さんはあるでしょうか？

作者には幸いながらそんな経験ありません。

さて、なんだかんだで二桁に到達したわけですが当初の予定では、もっともっと短くまとめるつもりだったんですよ。作者の力不足で長くなってしまいました。

それと、ここが駄目だとかここ無いほうがいいよとか気づきましたら教えてもらえるととても嬉しいです。

〔十一話〕 感情と罪の意識（前書き）

少年は自身に悩み、男は罪に押しつぶされまいと抗う。

かつての友。そこにどれだけの意味があるのか、少年はまだ知らない。

〔十一話〕 感情と罪の意識

自分自身の感情をコントロールできなくなったのは、真紅にとっては初めての体験だった。

昔から両親の忙しさを理解していたためか、子供らしい我が侷も言ったことがなく、空や愛美、京のお守りをする立場にあった。ませているといえば聞こえがいいかもしれないが、喜ばしくは無い。子供らしさもなく、他人ともほとんどコミュニケーションをとっていなかった。

人間として何か欠落していてもおかしくない。

「おい……さつきから、何ボケエツとしてんだよ？」

真後ろの席からかけられた不機嫌な声に、現実へと引き戻される。授業中なので真紅の様子などほとんどわからないはずなのにどうしてわかったのかと真紅はかすかな疑問を抱いた。

「……授業中に呆けているのはお前も一緒だろうが」

「お、言うねえ。否定できないけどな」

その後、二人の喧嘩を何とか仲裁した真紅は、すぐさま教室へと戻り睡眠を開始した。空たちが何か言うのも聞かず、自分を落ち着けるために。

空たちを子供だと考えていたが、自分自身のことでも悩むなど子供の証なのかもしれない。

「まあ変なことでも悩んでんだろ、お前は」

「どうして、そう思う？」

「そりゃ、今までの経験とカンから」

伊達に付き合いがながいわけではない、ということか。真紅が空のことをわかると同時に、空もまた真紅のことをよく理解している。それが嬉しいと思ってしまう自分に気づいて、真紅は空に背を向けたまま小さな笑みを漏らしていた。

空の言うとおり確かに真紅は意味の無いところで悩む癖があった。それら全てが無駄なものだとは思えないが確かに自分でも無駄だと自覚している。

平静を装って、後ろへと小さく声を投げる。

「変なこと、というのは心外だな」

「はは……しゃべってみるよ。誰も聞いてないからさ」

確かに、誰も聞いていないかもしれない。ちらりと覗くと愛美は爆睡しているし、京は教師の声を熱心に聴いている。

迷いはすぐに消え、自然と口を開いていた。

「……お前は、感情を抑えられなくなる時があるか？」

「はあ？ 当たり前じゃねえか、そんなの。人間なんだから」

人間なんだから。その言葉が酷く緩慢な響きとして鼓膜を揺さぶる。

人間とはいったい何なのだろうか。

感情を抑えられなくなるのが普通。誰かと一緒にいるのが普通。人が恋しくなるのが、普通。

それが人間だというのなら、叶や錬のほうがよく人間と言えるのではなからうか。

「感情なんて不確定なものを分析しようとしても無駄だろ。悪い癖通り返して病気だな、ほんと」

「……お前に説教されるとは、ほんとにヤキが回ったかな」

不服そうな表情が背中越しでもよくわかる。だが言葉とは裏腹に、真紅は空に少しだけ感謝していた。

言っただけのいいことをズバツと言いつけてくれたおかげで、真紅の悩みは中和されていく。

他の誰が同じ言葉をかけてくれたところで真紅の中に影響を与えらると思えない。空だからこそ、祖父と二人きりになったときに支えてくれた彼だからこそ真紅の心を大きく揺さぶることになったのだ。

「……ありがとう、空」

聞こえないほど小さく、独り言のような呟き。それでもしっかりと伝わっていたのか、背中で笑ったような気配があった。

考えたって仕方が無いことだという空の考え方には素直に敬意を払う。真紅のような考えなければやっていけない、細かいことにまで疑問を抱いてしまう人間にはその考えは羨ましかった。

その思いは真紅だけが抱えているものではないだろう。空だって、きつとそうだ。

考えなしに突っ込むところが空の悪い癖だ。暗殺者の奇襲を逃れるためには、あまりいいものだとは言えなかった。今まではそれではやってこれたようだが、これからは少し真紅の考え方を教えなければならぬだろう。

弱点を補うには互いの存在が必要不可欠だと真紅は考えている。真紅の慎重さと空の大胆さ。二つがあつてこそ、もつと多くのことをやり遂げることができる。

無論、愛美の存在も忘れたわけではない。愛美は

「マスコット、だな」

「ん？ 愛美のことか？」

それだけで通じてしまうほど、なのか。

愛美の存在を少し哀れに思いながらも、真紅は窓の外へと視線をめぐらせる。

風になびく緑豊かな木々。まぶしく輝く日の本の世界は、平和で、安らかで。

真紅の悩みなどちっぽけなものだとも言いたげに、緩やかな時を刻み続けているのだった。

怠惰が許される人間は、実はそれほど多くは無い。

自分の仕事を成し金を稼いでくる人間はもちろんのこと、子供でさえ飢餓によって自分で食物を捜しに行ったり、盗みを働いてでも生きようとするものもいる。

日本のように優しい時間が流れている世界でも、つらい現実が存在している。

「……………ぐっ……………がはっ！ ……ぐっ、げっ……………」

中身を吐き出そうとしても肝心の中身すら底を付き、胃液のみを吐き出す。体が異常な痛みを訴えているであろうに、その男は苦痛の声こそ上げるものの屈服しうる気配をまったく見せてはいなかった。いや、もう感情そのものが死んでしまっているのかもしれない。

その姿を目にして、彼は下唇を噛み、耐える。

目の前で繰り広げられているのは、どう考えても人間が人間を拷問している光景でしかなかった。

肉に食い込むほど強く鞭を叩きつけ、すでに折れている足の指をもう一度、一本ずつへし折っていく。悲鳴が聞こえていないのか、それを行っているスーツの男は眉一つ動かすことなく、作業のように拷問を続けていく。

足の次はどこなのだろう。手か？ 腕か？ 耳か？ 鼻か？ いっそのこと苦しませずに殺してやるのが、人間としての慈悲なのではなかるうか。

彼は、ガラスの向こう側で行われるその行為から、目を逸らした。

「おや、趣向に合わなかったようですね。大変失礼をしましてしまいました」

恭しく頭をたれるスーツ姿の男に、彼は心の中だけで舌打ちをもらした。

拷問部屋の隣に設置されている監視室。そもそもその目的は拷問中にもらした言葉を聞き逃さないよう誰かが配置されるために作られている部屋だったが、今は目の前に立つ男の、一種の娯楽施設に変わっている。

他のメンバーと同じように黒のスーツを身にまとい、サングラスを胸のポケットに差し込み、右耳には獅子の顔を象ったピアスがつけられている。髪形はオールバック。身長は百七十後半といったところだろうか。一見して細く見えるものの、スーツの下にはがっちりとした筋肉が付いている。

目元に浮かんだ恍惚の笑みは、ガラスの向こうで繰り返されていく拷問へと向いていた。

フォースナンバー、烏丸 聡司。

彼らの中にある序列。その中で四番目に強いと言われているこの男は組織内でも大の拷問好きで有名だった。

「構わん。それよりも、私を呼び出した理由を述べてもらいたいのだが？」

不機嫌なのを隠そうともせず、彼は聡司へと言葉を吐いた。機嫌を損ねようと別に問題ではない。聡司よりも彼のほうが立場は上なのだ。

聡司はくすりと笑い、口元を吊り上げる。

「申し訳ない、お忙しいのでしたね」

申し訳ないとは微塵も思っていない口調に気を悪くすることすら面倒で、彼は鼻を鳴らす。

「構わんといっている。早く用件を話せ」

「では……昨日、私の部下がある山脈の周辺で消息を絶ちました」

彼らの中で消息を絶つといった事例は、ここ数年では聞いたことが無かった。

「……朝凧 真紅および神坂 黒陽の捕縛、もしくは殺害が彼らの目的だったのですが……何かご存知ありませんか？」

「私が、か？ なぜ知っているというのだ、暗殺は私の管轄ではない」

感情など一切見せず、彼は聡司を射すくめる。聡司は小さくため息をつき、左右に首を振った。

「いえ、あなたは朝凧 白羽殿の古い友人でしたので、何か知っているのではないかと思ひまして」

「その名を口に出すな。あいつは、私たちを裏切ったのだぞ？」

その言葉に何を感じたのか、聡司は今度こそ諦めたように息を吐き、深々と頭をたれた。

「申し訳ありません、あなたを疑っておりました」

今度の言葉には本当に申し訳ないという響きが混じっている。だがそれもほんの少しだ。完全に警戒を解いたとはいえないだろう。

辟易して、彼は背を向ける。聡司も用が済んだのか、彼を止めようとしなない。

狭い部屋を出て、細く薄暗い通路を通ってエレベーターに乗る。地下十階と表示されたプレートに目を向けた後、十個のボタンが電話のように配置されているプレートに手を添えて三十二と入力する。目の前のドアが閉じ、かすかな浮遊感と共に彼は目指す場所へと飛翔していく。

途中一回も止まることなく、彼は目的の階にたどり着いた。

当然のこと、このエレベーターはほとんどの人間が使うことを許されていない。あるIDを使用しなければ起動しないようになっているのだ。

すれ違う社員と軽く挨拶を交わし、昼の陽気の中、自分の部屋へと足を進める。『3201』と書かれたドアの前で立ち止まると、懐からカードを取り出して縦のコードリーダーに通す。すると軽快なメモディーと共に鍵の外れた金属音が鳴り、ドアをくぐった。

室内は一介の会社員には考えられないほど大きなもの。ドアから入った正面には座れば側面を見せる二つのソファと、それに挟まれるようにガラス張りの小さなテーブルが設置されている。ソファの向こう側には職無用に設置された木製の高価な机、何かの皮で作られた椅子が鎮座している。そこに座った場合、背後の壁はガラス張り、立ち上がれば高所恐怖症の人間によくはないものが見られることだろう。

彼はそれらに座ることなく、ドアに背を預け、深々と息を吐き出した。

「……朝風 真紅、か」

かつて共に気高い志を抱いていた親友の苗字。自分の娘を、壊れかけた少女を優しさで癒してくれた少年の名前。

彼が襲撃を受けたことは、少し前に知った。まさか神坂の老人と一緒にいるとは思わなかったが、自分がかくまうよりはずっと安全だったことも確かである。

親友の置き土産を自分が助けてやりたかった。それが彼の本音だった。

確かに企業にとっては裏切りと同じことをしたかもしれないが、白羽のやったことは人間として全うな行動だった。裏で行われている悪事を告発し、平和な世界を。それが二人の希望だったのだ。

だが自分は汚れてしまった。いつの頃からか自分も悪事に手を染

め、その味をしめていた。

白羽の死によって目が覚めたものの、とき既に遅し。白羽を、親友を殺したのは彼だと言われても何の反論も出来ないほど彼は深く、企業の闇に飲み込まれていた。

「いまさら……いまさらだ。許しをこうとすら、私には出来ない」

暗殺から七年。

彼は罪を背負い、死ぬその瞬間まで償いを続ける。

「失礼します。高嶺さま、いらっしやいますか？」

背中に響くノックの音と共に、女の遠慮がちな声が聞こえてくる。

「……少し待て。今開ける」

そうして彼、高嶺 莊介は罪悪感に苛まれながらも通常の業務に戻っていくのだった。

〔十一話〕 感情と罪の意識（後書き）

お久しぶり（？）です、広瀬です。

今回初めて出てきました『高嶺 莊介』読み方は『そうすけ』です。書き漏らしたんでここで読み方を。あと烏丸は『からすま』と読むらしいです。名前のほうは『そうし』めっちゃ似てますね。

企業の内部に話を入れてみたわけですが、まだまだ学園偏は続きます。ええ、そりゃいつ終わるんだよっくらいまで続きます。

……がんばろう。

〔十二話〕 教師と生徒の密談（前書き）

悪夢。

終わらせるために少年は剣を手にした。
だがそれは、本当は贖罪のために……。

〔十二話〕 教師と生徒の密談

職員室。

神風学園の生徒にとってその場所は優等生か劣等生のどちらかが行く場所だという認識があった。

だからというわけではないのだろうが、その放送が全校に響いたとき、クラスメイトの大半から好奇の目を向けられたものだった。

『二年四組、朝風 真紅、職員室担任のところまで来てください』

スピーカーから聞こえたのは叶の声だった。

なぜ呼び出されたのか、数種類の理由を脳裏に思い浮かべた後、真紅は黙って席を立った。

「おい、真紅！」

クラスメイトの視線を無視したまま教室を出ると、慌てたような声が背中にかけられる。

「どうした、空？」

「どうした、じゃねえだろ。何かあったのか？ 出てく時のお前、怖かったぞ？」

空にだけは表情を見せないように勤めていたつもりだったのに、と真紅は頭を振る。察しがよすぎるのも少し考え物だった。

一瞬、最悪のケースを話そうかとも思ったが、それが決まったわけでもない。開きかけた口を一度閉じて、苦笑を見せた。

「別に。勉強のことで、後で呼び出すかもしれないと言われてたからな。勉強つて嫌いだから、それが出たんだろ」

「……本当か？」

「本当だつて。信用がないな、俺は」

「いや……そういうわけでも……」

若干申し訳なさそうな空にこちらが申し訳なくなってしまうが、真紅は彼に背を向けて後ろ手にひらひらと手を振って見せた。

二階の教室から階段を下りて正面に職員室はある。今は授業直前ということもあつてか、室内からはほとんど人の気配がなかった。居るとしたら二人か三人。呼び出した張本人以外にも、誰かは居るだろう。

二度ノックして、職員室のドアをスライドさせる。

職員室の内部は六つの机を長方形に並べたものが四つあり、それぞれに教師の私物が置かれている。窓際にはいくつかの観葉植物も並べられ、その隣にはコーヒーマーカーが置かれている。

「……失礼します。朝倉先生はいらっしゃいますか？」

職員室の中には二人の教師がいた。そこまでは予想通り。だが、その中に肝心の叶の姿が見えなかった。

真紅の声に答えるように、すぐ近くにいた初老の教師がにこやかな笑顔を浮かべて口を開いた。

「朝凪くんかい？ 朝倉先生なら三階の科学準備室にいるから、そこへ向かいなさい」

「そうですか。わかりました、ありがとうございます」

人を呼び出しておいて場所を変えるのかと微かな頭痛を覚えながらも、真紅は教師に一礼して職員室を後にした。

降りてきた階段を上り、さらに上へ、三階へと向かう。一階、二階は一通り見て回ったが、三階に来るのはこれが初めてだった。

他の階とほとんど変わらないレイアウトながら、三階には独特な空気が渦巻いていた。

三年の教室が多いということが影響しているのだろうか。緊張感というか、緊迫感というか、そういった類の肌を刺す空気に眉をかめずにはいられなかった。

初日に教えてもらった構造を頭の中で再生し、科学準備室を目指す。三年の教室とは階段を挟んで逆方向にあるため、背中が微かな痛みを訴えているが気にしない。

少し行くと音楽室、音楽準備室、科学教室と続き、その隣に科学準備室が鎮座していた。

ドアの正面に立つとちょうど、五限目の始業が始まる鐘が鳴り響いた。また授業を休むことになってしまったと、さほど真面目でもないのに罪悪感を覚えてしまう。

「……失礼します。朝倉先生、いらっしやいますよね？」

ノックすることも忘れ、少し機嫌が悪い自分に気づきながらも真紅はドアを開け、教室中へと足を踏み入れた。

カーテンが閉じられた薄暗い室内。中心に設置された大きな机の上にはビーカーやら試験管などが乱雑に片付けられていた。壁際にある棚の中にはたくさんの薬品が入ったボトルやら、蛙や蛇のホルマリン漬けなども並べられている。

机を挟んだ反対側、窓のすぐそばにある椅子に腰掛けて、叶は疲れたように笑っていた。

「やっと来てくれた。遅いぞ、真紅」

「最初にここを指定しなかったあんたが悪い。それと呼び捨てにするな」

「親愛を籠めたつもりだったんだけどなあ。まあいいや、そこに座ってくれる？」

手前にある椅子を指差し、叶は笑う。

その笑顔がどうしても無理をしているように見えて、真紅は不機嫌さを引っ込め、首をかしげた。

言われたとおりに腰かけ、机を挟んで叶と対面する。

「それで、急に呼び出して何の用だ？ 大した用じゃなかったら…」

「ああ、心配しないで。大した用事だから」

よく見ると叶は白衣を纏い、ポケットの中に片手を突っ込んでいる。突っ込んでいた手をポケットから取り出し、それを机の上に放り投げた。

甲高い金属音を上げそれは机の上に転がる。

万年筆のような形をした、銀色の物体。片手で握りつぶせるような小さいものだが、それがいったい何なのか真紅には皆目見当がつかない。

「それね、簡易盗聴器」

「……………は？」

「あら、間抜けな声。あなたでもそんな声が出せるのね」

楽しそうに笑う女教師に腹を立てることもなく、真紅は目の前の物体を凝視する。

盗聴器は実際に見たことこそないものの空から話だけ聞いていた。彼の話を聞いた限りでは、こんな小さいものが盗聴器だとはにはわかには信じられない。

「私のお手製。それを作るだけで二日くらい徹夜しちゃった」

「二日程度で出来るものなのか？」

「出来ないわよ、本来は。でもそこは私だから。昔のコネとかいろいろ使って、急ピッチで作ったの」

あっけらかんと言いつが、これで彼女の様子に合点が言った。

相当な疲労の色は、これを作るためだったのか。

微かだった頭痛が無視できないものになっていくのを感じつつ、真紅は気丈にも叶へと視線を向けた。

「それで？ 自慢するためだけに俺を呼び出したわけでもないだろ？ 何をやらせたいんだ？」

「ホント、察しがよくて先生助かつちゃうわ」

初日に見せたような柔らかかな笑み。それが偽りの柔らかかさだとわかっていても、悲しいかな真紅も男の子だ。ちよつとだけ、その笑顔に癒された。

「この盗聴器の寿命は、もって一年つてところ。それまでにはナイトメアとの本格的な争いになるわよね？ その時に、私たちは圧倒的に数で負けているわ」

「……ずっと気になっていたことがある。ナイトメアは何人いるんだ？」

幼少の頃から数度、真紅は祖父と共にナイトメアを退けてきた。居場所を特定されないうちに殺したことも何度だつてある。罪悪感や背徳の意識はもちろんあったが、生きていくためには仕方なかったと割り切っている。

倒してきた人数はかなりの数に及んでいるはずだ。それでもなお絶えない襲撃に真紅はいつも疑問を抱いていた。

「そうねえ、正確にはわからないわ」

「元ナイトメアのあんたでも、か……」

「もつとも、下級兵が、ということだけどね」

「……なに？」

下級兵という言い回しもそうだったが、彼女の言葉に含まれた小さなブレが真紅の頭痛を一時だけ鎮めた。

「真紅が今まで戦ってきたのは下級兵、それと中級兵の二種類ね。下級兵はほとんど自分の意志を持っていないことが特徴よ。一切の

感情、言葉を発しなかった敵って記憶にない？」

数日前に集落を襲った暗殺者、その姿が脳裏をよぎる。戦闘能力こそ並みの人間以上だったが、動きは単調でまるで機械相手に戦っているかのような違和感があった。

「中級兵は下級兵の指揮を担当しているわ。彼らは自我が強いけれど、正直まともな人間のような倫理的考えは持っていない」
「確かにそんなやつもいたな」

指揮をとっていたあの男。死に際ですら空の咽笛を狙っていたのだ、まともな人間だったとは決して言えないだろう。

思い返してみると叶の言う下級兵、中級兵とは何度か戦ったことがある。

「そして、上級兵。彼らはどこからどう見ても、人間そのものよ」

叶は一度目を閉じ、意を決したように淡々と語りだした。

「これに関しては、私がいた頃から人数が減っていないければ数と実力がわかる。彼らはナイトメアの中でも特殊な存在。限りなく人間に近いもの。どこか欠損しているものもいるけれど、大半のメンバーが人間と同じように感情を持っている。快樂、嫉妬、憤怒。彼らのもっとも特徴的なものは、彼らの中に独自の序列が存在していることなの」

「序列？」

「そう。今は……八人残ってるのか」

指を折って人数を数え、叶はやれやれと頭を振る。

若干話しについていけない真紅は、彼女が理解できるような説明をしてくれるまで彼女から目を離さないように心がけていた。少しして、観念したように叶は再度口を開いた。

「上級兵は減ることはあっても増えることはないの。理屈とかは私にもわからないんだけど、私たちの間ではそういう共通認識があった。私がまだ、組織内にいたときは十一人の上級兵がいたわ」

「その中には……」

「当然、錬と私も含まれていたわ。あの頃、錬が死んで一人消え、私ともう一人が組織から抜けたわ。だから、八人。もつとも、もう一人が捕まっていなければ、だけどね」

さして面白くもなさそうに叶は告げる。

錬が強いことは真紅が身をもって知っていた。だが叶も錬と同じ分類に入っていたことにだけは少しだけ驚いてしまう。

真紅の感情を敏感に察して、叶は不服だと言いたげに頬を膨らませる。その姿は教師になった人間とは思えないほど子供じみている。

「なによ？ 私だってそれなりに強いんだから。あなたにやられそうになったのは運よ、運。あんな場所であれほどの動きが出来るなんて思わないじゃない」

「……ナイトメアは暗殺が主流なんだから、どんなところでも戦えないといけないんじゃないか？」

痛いところを突かれたと叶は言いよどむ。だが、真紅としても彼女の強さを認めていないわけではなかった。

初撃。あの人間離れした打撃は今までの暗殺者とは比べ物になら

ないほど鋭く、骨の髄まで痺れるような痛みを真紅に与えていた。慣れているから、と痛みを無視していたのはいいが御子柴家に戻ってからは何日か両腕から痺れが取れなかったものである。

もししつかりと防いでいなければ、今頃は生きていたかどうか。一瞬浮かんだ悪い想像を引っ込めて、真紅は気を取り直す。

「上級兵のことを、もっと詳しく教えてもらいたいんだけど？」

「そうね。彼らの中には、彼ら独自の序列があると言ったわよね？上から順に、十番まで」

「……ちよつと待て、数が合わないぞ」

十一人と言うからには十一番まで序列が存在しなければおかしい。そう考えたわけだが、叶は一つ頷いた。

「零番が存在するから、十番までで正しいわ。ちなみに、錬がその零番に当てはまるのよね」

妙に納得している自分に真紅は気づいていた。

錬以上の実力を持つものがナイトメアに居たとしたら、それこそ真紅に勝ち目はなかった。七年前に彼の戦い方を見ていたが、子供ながらに彼の戦い方は異常だと認識することが出来るほどだった。

真似を、したくはない。

ある程度は戦えるようになった今の真紅は、素直にそう思っていた。

工藤 錬はどんな時でも、自分の命というものを勘定に入れていなかった。守るためならば命をとって、攻めるためなら腕一本ぐらいいは易々とくれてやる。普段の温厚な性格を片鱗すら見せぬまま、非情に冷酷に、ただ殺す。

並外れた運動神経と類まれなる強運がなければ、工藤 錬ほどの男と戦うことなど出来はしない。

「……なにちよつと安心した、みたいな顔をしてるのよ。言っておくけど、零から三まではほとんど強さが変わらないのよ?」

「……え、マジ?」

「マジよ、マジ」

シリアスだった会話が、一瞬で俗物じみたものになってしまい二人同時に肩を萎れさせた。いつの間にか緊張していた自分を落着かせるために放った一言だったが、予想外に大きな影響をもたらしたようだ。

一呼吸置いて、叶はまた話し始める。

「ゼロナンバー、ファーストナンバー、セカンドナンバー、サードナンバー。ここまでの実力は拮抗している。そもそもどうして最強のはずの錬が死ぬことになったのか、私は疑問に思っていたの。それでね、少し前に組織のコンピュータにハッキングをかけてみたのよ」

何事もないように言っただけのけるがその内容は軽々しく聞き流せるものではない。

「つて、おい！ そんなことして見つかったとしたら……」
「ああ、大丈夫よ。こっちはプロなんだから」

不安にならざるをえない真紅を一人置き去りにして、叶は人差し指を目の前に突き出してみせる。

「その中に上級兵の出動履歴があるの。七年前、朝凧 真紅、工藤 錬討伐に駆り立てられたメンバーが、残りの三人だった」
「……待て…… 本当に、そこは待ってくれ」

三人の上級兵。真紅の記憶に引つかかるものがあつた。

錬が死ぬことになった最後の戦い。あの時、真紅の目の前で繰り広げられた戦いは、錬と長髪の男の一騎打ちだった。錬の日本刀と互角に切り結ぶ蒼い槍。その流れるような軌跡が真紅の脳裏には色濃く残っている。

「……三人の中で、槍を使うやつはいるのか？」
「槍？ ……蒼い槍、セカンドナンバー・氷室 七夜。見覚えがあるの？」
「そいつが、一人で錬さんと戦っていた。あの時、他に敵は居なかったはずだ」

錬を殺したのも、直接的にはその男だった。
いや、そんなもの言い訳に過ぎないのかもしれない。

「ちょっと待つてよ！ 七夜が錬を殺せるはずがない！ あの二人は私たちの中で一番多く手合わせをした。でも七夜が絶対に勝つことができなかったの。新や健三さんならもしかしたらということもあるけど……」

「いや、間違いじゃない。だって……」

錬が死ぬきっかけを作ったのは。

「錬さんが死んだのは……俺のせいなんだから」

意識の根底にはあっても決して口に出さなかった言葉。
ずっと真紅の心を責めたてていた、記憶。

血を吐くような思いで、真紅はその言葉を解き放つのがだった。

〔十二話〕 教師と生徒の密談（後書き）

ようやくそれらしいお話になってきたかもしれませぬ。こんばんわ、広瀬です。

上から十一人。中途半端な数字に見えて、でも作者はどうにも好きで仕方がない数字です。

さて作中に出てきました名前、氷室 七夜ですが読み方は、ひむろ ななや、です。なんだか名前の読み方はっかり書いているような気がしますがご了承ください。

次話はちよっぴりダークな話になる予定。苦手なんですよねえ…。

〔十三話〕 仲間と共に（前書き）

壊したくない、日常。

〔十三話〕 仲間と共に

真紅にとってその告白は、自分自身を傷つけるのと同じほどの重大さを持っていた。

鍊を慕っていた叶の前で放つにはふさわしくない言葉だろう。それがわかっていても真紅は自分の罪を打ち明けずに会話を続けられそうになかった。

「……………やっぱり、ね」

しかし叶はさして面白くもなさそうに呟いて、机の上に放り投げた盗聴器を手に取り、滑らかなペン回しを始めた。

「そんなことだろうとは思ってたわ。あの人はたとえ三人相手でも死ぬことはない。悪くて腕一本もっていかれる程度で済むと思う。だからきつと何らかの形で、あなたが関与しているだろうとは思っていたの」

「……………責めないのか？」

「責めないわよ。ムカついてはいたけどね。それも最初に一発殴らせてもらったから、なくなっちゃったし」

指先から視線を逸らすことなく、叶は何かを吹っ切れたような、すっきりとした笑みを浮かべていた。

確かに始めて叶と手合わせをしたとき、どうして叶が仕掛けてきたのか真紅には見当が付いていなかった。最初はナイトメアの一人として真紅を殺しに来たのかと思っていたが、ただの私怨だということのなら納得がいく。

女の恨みは恐ろしいと空に聞いたことはあったが、顔も知らぬ人間に七年も恨みを抱けるものなのかと真紅はただ叶の恐ろしさを再確認した。

「……なあに？ その悟りきつたような顔は？」

「い、いや……なんでもない」

半眼を閉じて艶のある笑みを浮かべる叶に、背筋を冷たいものが走った。

言うだけのことはあって、彼女の殺気は冷たく、気が小さい人間なら簡単に動けなくしてしまうのではないかと思えるほど、強烈な圧迫感を与えている。

「まあ、その話は置いておいて。錬と戦っていたのが七夜だったとしたら、残りの二人はどこにいたのかしら？」

「残りの二人っていうのは、どんなやつらなんだ？」

「そうね、知っておいたほうがいいかもしれない。まずファーストナンバー・小柳^{こやなぎ}新^{あらた}。あらたって呼ぶより、しんって呼ぶほうがしっくりくるんだけど、その話は置いておくわね。錬と同じ日本刀の使い手で、技術だけなら錬より上かもしれないわ。事実、錬以外のナイトメアに負けたところを見たことがない。そしてサードナンバー・美郷^{みさと}健三^{けんぞう}。本当はセカンドを名乗ってもいいはずの実力だけど、自分の名前に合った三の数字がいいって三番に落ち着いているわ。彼と新は直接戦ったことがないの。だからどちらが上かわからないけれど、同じくらいの実力者が二人いると考えていいと思う」

錬ほどではないというが、それでも今の真紅では歯が立たないかもしれない。正面から攻められるのではなく死角からいきなり仕掛

けられた場合、勝つ可能性は限りなくゼロに近くなるだろう。

本当に、問題は山積みだった。

「……っと、かなり脱線しちゃったわね。それじゃ本題に入りましょうか。今日あなたを呼んだのは、この盗聴器を設置する手伝いをお願いしようと思ったからよ」

「設置するって、本社にか!？」

彼らの敵対する”企業”。

その本社は真紅たちが住むこの町の二つ隣、かなりの大都市に作られている。幼少の頃、父親に連れられ入ったことがあるがかなりの敷地面積と高さを誇っているはずだ。

所々に監視カメラも設置されているだろうと予測されるため、その行動は無謀といっても過言ではなかった。

しかし叶は自慢げに鼻を鳴らし、ペン回しを止め、真紅にその盗聴器を向けた。

「そう。そこでこいつの出番ってわけ。こいつにはジャミング機能もつけてあるの。まあ、簡易的なものだから数時間しかもたないんだけど、それがあれば企業の内部を動き回れるはずよ」

「……妙に生き活きしてるな」

頭痛が、酷くなっていく。

おそらく叶にとってハツカーとか精密器具を作ったりといった頭脳系の仕事が天職なのだろう。そうでなければ、子供のように無邪気な笑顔の説明が付かない。

もつともその笑顔が真紅の頭痛を促進する結果につながっているのだが。

「ともかく、決行の際には手伝ってもらえるかしら、朝風くん？」

最後に教師の口調へと戻り、のほほんと、しかし拒否を許さない言葉を放つ叶。当然、真紅では彼女の要請を断れるはずもなく、ただ首を縦に振ることしかできはしなかった。

「よろしい。数日中には決行するつもりだから、それまでに社内の地図を用意するわ。最初から図面があればやりやすくもなるでしょうし。何か質問ある？」

「……どこでそういう技術を覚えたんだ？」

「ふふ……朝風くん、秘密があったほうが女って魅力的だと思わない？」

「意味がわからん」

収まることがない頭痛に苛まれ、真紅は席を立ち、ドアへと向かう。これ以上この場に留まる必要もないし、少し遅れたが授業に出席しようか。そんなことを考えていると、ふと好奇心が鎌首をもたげた。

「そういえば、ナイトメアを抜ける前のあなたの序列は、何番だったんだ？」

叶は虚をつかれたように呆けたような表情を見せ、小さく頭を傾

ける。

「九番」

予想よりも、一つ上だった。

教室に戻ると同時に終業の鐘が真紅の耳に響いた。

また授業をサボってしまったと、どうにも申し訳ない気持ちが真紅の良心をチクチクと刺激している。

優等生ではないはずなのに、と真紅は大きく首をひねる。

「ん？ おお、朝凧くんか。また朝倉先生に呼び出されていたようだね」

「すいません。長引いてしまって」

気にするなと大柄な教師はその体躯に似合った豪快な笑い声を上げ、職員室へと戻っていった。

この学園は金持ちの子息が通う学園だと空は言っていた。だが今の教師を見る限りではそういった学園だとはわからないだろう。なんとというか、似つかわしくなかった。

もしかしたら叶ただけではなく、この学園の教師には秘密を持った人間が多いのかもしれない。

自然と浮かんでくる苦笑を引つ込めて、少しの休憩時間に活気づく教室へと戻る。数人の生徒が視線を向けているのにも構わずに、真紅は自分の席へと腰を下ろし、大きく息を吐き出した。

叶の話聞いて気が引き締まっているのがわかる。

自分ではかなわない敵が、三人。その中には記憶の底にいつもあった蒼い槍の男も含まれているという。

「 氷室 七夜、か」

何か、何か引つかかるものを感じていた。

何かを忘れている。とても、本当に重要な何かを。それがいつたいたんだったのか、喉元まで出てきているのに、あと一歩足りない。不快感が真紅の思考を鈍らせていた。

「誰だそれ？」

「っ！ そ、空！？」

正面から見つめている四つの瞳に、気づくことが出来なかった。

意識がはつきりして、目の前にいる二人へと非難の言葉を向ける。

「考え事してる人間を見つめてるってというのは、悪趣味なんじゃ

ないのか？」

目の前には空と愛美。二人とも何がそんなに楽しいのか、心の底から面白そうにニヤニヤと頬を緩めている。

「いやあ、なまじいい顔立ちしてるから見てて飽きないんだよね。なあ愛美？」

「うん。窓際でたそがれる美少年。キヤー！ いい！ 絵になる！」
「変なことを言うな。あと、何か無理にキャラ作りすぎだぞ、愛美」

せつかく少し収まった頭痛が、戻ってきそうだった。

心労、というにはあまりにも軽すぎるが、環境の変化も重なって、いつの間にかとても大きなものに変わっていたのかもしれない。

元々の考えすぎる性格も頭痛を促進するのに十分な影響を与えていた。

「さて、冗談は置いて。早く帰ろう！ 今日ちょっと良い所によるんだから」

「え？ いや、まだ一コマ残ってるんじゃない……」

神風学園の授業は一日六限構成で行われている。まだ今日は五つしか授業を行っていないため、最後の一つが残っているはずだった。

「さつき朝倉先生が来たじゃない。今日は臨時職員会議が入ったから六限なし、帰宅！ って」

思考の海に沈んでいる間に、どれだけの時間が過ぎていたのか。

見ると確かにクラスの半数以上が帰宅し、残りも帰宅の準備を始

めているところだった。

叶が来たことにも気づかないほど、油断していたのか。

自分の不甲斐なさを再確認して、溜め息がこぼれた。

「ほら、落ち込んでないで行くぞ、真紅。今日はゲストさんもお招きしてるんだからな」

「……ゲスト？」

空は真紅の隣を親指で差した。つられて真紅は緩慢な動きでそちらへと視線を向ける。

そこには必要以上に身を縮め、顔を真っ赤に染めている京の姿があった。

〔十三話〕 仲間と共に（後書き）

なんとなく久々だなあという感覚なのですが、別にサボっていたわけじゃないですよ。いや、ほんとに。

こんにちは、広瀬です。

叶の九番という序列、微妙ですね。いつそのこと十番にしてやればよかったかもしれませんが、これはこれなりに理由があります。

（たぶん）

学園編はもう少し短めに切り上げるつもりだったんですが、どうにも終わりそうにありません。一部だけで三十話くらい軽く超えてしまうかも……。

……いや、長いって良いことだよな？

〔十四話〕 騒がしい日常（前書き）

あと少し、このぬるま湯の日常に浸っていたい。
心の奥で、少年はそんな願望を抱いていたのかもしれない。

〔十四話〕 騒がしい日常

いったいどこでどう間違っ、こんな状況に陥ってしまったのだらうか。

全てが自分の意志の外側で決められて、でも実際に被害をこうむるのは自分だけだとぬかす。いや、決して嫌だというわけではないのだけれど、せめて、せめて自由な発言くらいは許してもらいたかった。

「えっと……ごめんなさい」

「あ、いや。高嶺が悪いわけじゃないから」

隣の席で小さくなっている京を慰めて、真紅はただ、原因を作った二人へと怨みの念が籠もった視線を向けるのだった。

遡ること数時間。

学園を後にした一行は、周囲を取り巻く住宅街を一直線に抜け、商店街へと向かった。商店街のさらに向こう側には御子柴家を筆頭に高級住宅が立ち並んでいる。そのため商店街は、真紅が学園に通い始めてから毎日通っている場所でもあった。

「それで、どこに行くつもりなんだよ？」

いろいろと疲れていた真紅としては早く帰ってさっさと眠ってし

まいたかった。

前に行く空が首だけで振り返り、女子二人から距離をとってから口元を吊り上げる。

嫌な、予感がした。

空の悪戯っ子のような笑顔は、どんな時でも必ず厄介ことを呼び寄せる。もし疲れている今そんなことが起こったとしたら、真紅には耐えられるかどうかかわからない。

真紅の不安をよそに、空は楽しげに笑う。

「駅前の和菓子屋。新メニューが出たらしいから、それを食いにな」
「だったらいつものメンツで行けばいいだろ？ どうしてゲストがいるんだよ？」

食へに行くだけならば真紅、空、愛美の三人で行けばいい。だが今日は京までつれて、いつもとはまた異なった緊張感があつた。

「だって新メニューのことを教えてくれたの、高嶺さんだから」

予想外の答えに真紅は思わず呆けた表情を浮かべてしまった。慌てて取り繕ってみても、空は見逃してはくれず、大きな笑い声を上げていた。

空のことだからまた何か悪巧みをしているのだと思っていた。しかし提案者が京だったなら、さほど警戒する必要もない。

「感謝しろよ？ 誘わなくてもよかったのに、高嶺さんがどうしてもお前を連れて行く手言ってくれたんだ。和菓子、こっちに来てからまだ食ってないだろ？」

してやったりという笑顔を浮かべる空だったが、真紅は何も言い返すことなく、小さく舌打ちを漏らすだけだった。

長年の付き合いである愛美でも知らないことだが、和菓子は真紅の好物だった。

あの控えめな甘さと見事なまでの細かい造形はまさに芸術。とくに花を象ったような和菓子は、食べてしまうのがもったいないとさえ思ってしまう。

真紅のひそかな楽しみを知る唯一の男は、そっと耳打ちをよこした。

「今から行くところはこの町でも一番和菓子が美味しいところだ。和菓子にうるさいお前でも、十分満足できると思うぞ」

和菓子を食べれば、溜まっていた疲れも吹っ飛ぶかもしれない。

自然と頬が緩んだ。

商店街の中心に駅はある。神風学園前と銘打ってはいるが、徒歩十分以上かかるのにそのネーミングは間違っていないのか真紅は考えている。しかしそんな些細な疑問は、今の真紅の前では浅い霧の

ように微々たる物でしかなかった。

和菓子以外、思考の外側に排除されていく。この後に待っているだろう楽園へ、真紅はずっと思いをはせていた。

「ここ。店構えがいいだろ？」

空の指した店はいまどき珍しい引き戸の入り口と暖簾が印象的な一見すると民家のような店だった。暖簾には『甘味処 苅野屋』と書かれている。

店構えがいいと空は言うが、真紅から見れば店構えだけでよだれが出そうになるほど魅力的な店だ。

女子二人が何かを話しているようだったが気にならない。真紅は空の背に従い、店内へと足を進めた。

「へい、いらっしやい！ たまも！ お客さんだぞ！」

和菓子屋とは思えないほど豪快な声に続いて、フリルの付いた白いエプロンをつけた少女が、とととと小動物のようにかけてきた。

エプロンの下からは見慣れない制服が覗いている。この周囲にある他の学校の制服だろうと、真紅は解釈した。

「えと、四名様ですか？」

がちがちに固まっているのが真紅にもよくわかる。店に出たのが始めてなのかとも思ったが、彼女自身の性格が極度のアガリ症だというだけかもしれない。

「はい、そうですよ」

空が人当たりのいい笑顔を見せ、少女は少し緊張がほぐれたのか、柔らかな笑顔を浮かべた。

「それではお座敷のほうへご案内します。こちらへどうぞ」

案内された先は畳を引いて、中心に木製の小さなテーブルを設置した場所だった。同じ構造のものが四つか五つある。外から見た限りではさほど大きな店だとは思っていなかったのだが、予想は大きく外れていたらしい。

「ご注文お決まりになりましたらお呼びください。それでは、ごゆっくりどうぞ」

少女は一礼して店の奥へと戻っていった。

中心のテーブルを挟んで、真紅と空、愛美と京がそれぞれ並んで座っていた。

「さて、と。新メニューってのはどれかな？」

「あ、これです」

お品書きの表紙にでかかど貼り付けられた紙には『新作！ マロンの和菓子』と書かれていた。

マロン、栗か。決して嫌いではない。うん、嫌いではないのだ。

他のメニューもすてがたいと思ったが、真紅は結局その新メニューを頼むことにした。

「京ちゃん、これなんかどう？ 三色団子。わけっこしようよ」
「いいですね、じゃあ私も何か……」

女の子二人は目の色が変わっている。愛美は普段とさほど変わらないハイテンションのままだが、京の場合は表情や雰囲気など、自信なさげだったもの全てが反転しているのではないかとさえ思えてくる。

女の子にとっては甘いものというキーワードは重要らしい。

二人が夢中になってメニューを見ている間に、空がそつと顔を近づけてきた。

「それで？ 今日はどうして朝倉先生に呼び出されていたのかな？
問題児の真紅くんは」

「……お前、それを聞き出すために連れて来たな？」

当然だと言いたげに口元を吊り上げる。空の悪知恵にはいつも溜め息が出そうになる。

「……組織に、こっちから仕掛ける算段を立ててた」
「あ、やっぱりか」

真紅の雰囲気からすでに察していたのか、さほど楽しくもなさそうに空は少し離れた。

「まあ、俺に手伝えることがあるんなら遠慮なく言えよ？」
「ああ。期待してる」

本当に、どうしてこうも捻くれた性格なのだろうか。

いろいろと悪知恵を働かせるくせに、基本的には真紅や愛美の心配しかしていないのだ、空は。普段のおどけた口調、態度は単なる暇つぶしでしかない。もしかしたら真紅より、空のほうがよほど真面目な性格をしているのかもしれないと錯覚するときもある。

さっきの少女を呼び、それぞれ注文を終えると四人の話題は学園に向いていた。

「二組の近藤さん、うちのクラスの男子と付き合ってるんだって」

愛美の楽しそうな声に、けれど真紅はただ相槌を打つことしかしなかった。

人里はなれた場所で、ただでさえ人付き合いが苦手だった真紅にはその手の話題についていくための知識がまったくなかった。こっちに出てきてからもナイトメアとの戦いに備えるだけで、恋愛がどうのということとは考えたことすらない。

真紅の微妙な疎外感をよそに、愛美と京、そして空は楽しそうに笑いあう。

「へえ、誰？」

「宮本くんです。一年生の頃同じクラスだったそうで、おそらくその頃から付き合っているんじゃないかと」

奥手だと思っていた京ですら会話に混じっている。やはり年頃の娘ということか、そういった話題には興味があるようだ。

「あいつがねえ、ただの眼鏡だと思ってたのに」

「空、それは酷いと思うよ？」

宮本は黒縁眼鏡がよく似合う、体の細い男子生徒だった。根暗そうな外見に似合わず、転校してきて間もない真紅にも積極的に声をかけてくれた。

空の言うとおり、彼に彼女がいるというのは少しだけ驚きだった。

「真紅はさ、そういうのに興味ないの？」

「……俺？」

自然に、事情を知っているはずの愛美はそう言ったのけた。

真紅の置かれていた環境と性格を考えるならそういったことに疎く、また興味がないことくらい簡単に推察できるだろう。実際、真紅は色恋沙汰など考えたこともなかった。

悪夢を終わらせ、その命が尽きるまでひっそりと暮らすのだ。それ以外の未来など、考えたこともなかった。

「別に、俺は……」

「んなこと言わないでさ、ちょっとくらい興味を持ってみてもいいんじゃないか？」

「空……だけど俺は……」

俺に、幸せになる資格などない。

誰にも許されることがない罪を背負って、ただ悪夢を終わらせるために戦うだけ。

それが自分に許されたものだ、真紅はずっと思っていた。

けれど空は、そんな真紅を見て溜め息をつき、首を振る。

「真紅……お前、全部終わったらまたもとの暮らしに戻るつもりだろ？」

空の言葉を聞いて、愛美が表情をこわばらせている。京は何のことかわからないから首をかしげているだけだ。

「終わったら、もう戻る必要なんてないだろ？ こっちに残ればいい。お前の家にも、堂々と帰れる。また一緒に、あの馬鹿でかい家で暴れまわろうぜ？」

空の表情には初めてじゃないかと思うほど珍しく、切迫した色が浮かんでいた。

まるで真紅の答えを恐れているかのよう。

空にはそんな表情、似合わない。

いつも能天気な笑って、誰かをからかって、そういう軽率なものの塊が御子柴 空という人間なのだ。

どう答えればいいのか、真紅は迷った。

答えなどどうの昔に決まっている。けれど空の表情を見て、本当にその答えでいいのかと、迷ってしまう自分がいた。

「真紅様？」

舞い降りた、沈黙。

それを払いのけたのは、呆然と、けれどどこか喜びを含んだ、野太い男の声だった。

〔十四話〕 騒がしい日常（後書き）

いつ投稿したのか思い出せなくなってきた、今日この頃。

自分ではけっこう早く更新しているつもりなのですが、どうなんでしょうね？ 世間にはもっと早いペースで更新する方もいらっしゃるようですし。

最近は時間の感覚もなくなってきた感じがするんですよ。

作者はまだ学生なんですけど、入学当初は「一個の授業が九十分！？ なげえよ！」と思っていたのですが、いつの間にやら完全に慣れてしまい「え、もう終わり？」とか……。

まずい、何かがまずい……！

（ ということで、今後の目標は正しい時間感覚を取り戻すこと。
小説関係ない）

〔十五話〕 和菓子のお夢（予告編）（前書き）

かつてを思い出すほど、懐かしい相手。

昔と変わらぬその優しさ。変わらぬ口調。仕草。

少年の胸へ去来するのは、安らぎ。

〔十五話〕 和菓子のお夢（予告編）

「…………え？」

どこか懐かしいその声に真紅は視線を上げ、座敷の外に立っていた男を捉えた。

その巨体に似合わない白いエプロンと、四角に近い面構え。全員の和菓子が乗っているお盆が小さく見えるほど太い両腕は旧時代の不良なら土下座して退散するほどの威圧感をかもし出している。顔に似合った大きな瞳には、なぜか、こぼれんばかりの涙。

何かに気づいてくれるまで堪えているのか、涙はこぼれるかこぼれないかという瀬戸際で止まったまま、危うい均衡を保ち続けている。

ふと、その巨漢に見覚えがあった。

顔はかつてより老い、少ししわが目立つようになっていた。体格は、自分が大きくなったからそう感じるのか、少し小さくなった気もしないでもない。さらにはその涙もろすぎる性格。極めつけはこの店の名前『苅野屋』。

「……………信介？」

その名前を口に出した途端、均衡を保っていた涙はあっけなく崩壊した。

「おおおお！！　しんくさまああああ！　良くぞ、良くぞご無事でえええ！」

「なっ！　こ、こら！　てめえ、ちょ、ひつつくな！」

いい大人が鼻水までたらし、泣き叫ぶ。他の客に失礼だとか、どうしてここまで暑苦しいのかと真剣に考え始めたが、よく考えて今の状況が相当にまずいものだとということに気づいて、真紅は右手で信介の大きな頭にアイアンクローを決めた。

「ぬあ！？」

「ちよつと来い！　空！　少し頼む」

後のことを空に任せて、真紅は片手で巨体を引きずり、店の奥へと入っていった。

店員でもなんでもない真紅が厨房に入ってもいいのかと思ったが、店長であろう信介をとっ捕まえているのだ、文句の言いようもないだろう。

暴れることもなくずるずると引きずられていた信介は、厨房にいてから自分の足で立ち、エプロンで涙をぬぐった。

「申し訳ありません、真紅様。取り乱してしまいました、さらになんな失態を……」

「気にするな、と言ってやりたいが、残念ながら最悪のタイミングだよ、信介」

よりもよって『真紅様』ときた。

「真紅が」あの”朝凧家と関係がある、そう知られたくはない、いや、知られてはいけない人間があそこには存在していた。そんな状況下で様付けされては、感がいい人ならばれてしまう。

「しかし、よく生きてたな。朝凧家の関係者、特にお前みたいな古株は企業にマークされていたはずだけど」

「ご安心を。朝凧家の使用人たちは優秀です。誰一人として、捕まったり、死んだという情報は入っていません」
「そうか……よかった」

朝凧家の使用人は、白羽の信用の置ける人間十数人しかいなかった。その中でも筆頭として扱われていたのが、もう定年間近の老人と信介の二人だった。

当時はしつかりとしたスーツを身につけ、その巨体をしつかりとスーツで包み込むのが大変だった。

信介は厨房のそう責任者でもあったため、料理の腕は確かだ。だが和菓子まで作れるものなのかは、甚だ疑問だった。

「真紅様は今までどちらに？」

「祖父と一緒に山奥に、な」

「そうですね、本当に、お元気そうで何よりです」

涙を完全に拭い去って、すがすがしい笑顔を浮かべる信介。昔から見慣れていたものだったが、久しぶりに見せられると心が安らいだ。

「それで、ひとまず俺のことは、昔の知り合いだで通してくれ。あそこで俺のことがばれるとまずい」

「と、言いますと？」

「高嶺家は知っているな？ その一人娘がいる。俺の存在が知られれば、企業に俺の居所が知られることになるんだ。準備が整っていない今、それは得策とはいえない」

信介は何かを考えるそぶりすら見せず、大きく頷いた。

その行動に少しだけ驚く。

信介はその体に似合わずなかなか思慮深い男だ。頭を使うゲームでは信介に勝てたためしがない。

それなのに何一つ考えていないような、そんな信介が少しだけ気になった。

「何も、聞かないんだな」

「真紅様に限ってますが、この苅野 信介、全て承知することになっているのです。あなたは白羽と同じくらい思慮深い。考えて考え抜いた末に行動する方ですから、私が口出しする必要もありません」
「そうか……ありがとう」

どうにも人の厚意というものは慣れない。信頼というものは、他人に向けては持っていて、信頼されることはどうにもこそばゆい。

「ともかく、俺は和菓子を食べに来た一般人だ。そういうことで頼む」

了承するように頷いて、信介は恭しく頭をたれる。

信介に背を向けて、真紅は他の客の生暖かい視線を感じながらも

自分の座敷へと戻っていった。

座敷に戻ると、疲れたようにお茶をすする空と呆然と口を半開き
にしている愛美、そして何があったのかわかっていないであろう京
の三人が無言で真紅を迎えてくれた。

「……………無茶しすぎだろ、真紅」

「確かに強引過ぎたとは思うな。こっちはどうなった？」

「愛美と高嶺さんに『見ないほうがいいよ』って言っただけだ。お
前がああ、の巨体を片手で引きずったところもばっちり見てる」

その程度なら何も問題はない。問題は京が自分の正体に気づいて
しまっていないかというただ一点のみ。

そつと視線を向けると、京は首をかしげていた。

「朝凧くん、この店長さんと知り合いなんですか？」

「ああ、昔の知り合いです。どうも懐かしかったですらしくて、無駄に
大声を張り上げてしまったようで……………」

嘘は言っていない。京も気づいていないなら、そのまま記憶の深
遠に封印してくれていい。

そうですか、と妙に得心したような顔をして京は手元の湯飲みを
そつと傾けた。

気づかないうちに背中を冷や汗が伝っていた。

どうしてここまで神経を尖らせなければならぬのか、真紅自信
もはつきりと理由を理解してはいなかった。言うなれば、勘。京に

真紅の正体が”あの”朝凧 真紅だと知られたら、せつかく存在している平穩が崩れてしまうような、どす黒い予感が真紅の思考を駆り立てていた。

きっとその予感は、間違っていない。

「お待たせしました、三色団子、マロン、きんつば、あんみつです」
また巨漢がやってきた。お盆の上からそれぞれの品物をテーブルの上に置いていき、最後に真紅へ視線をよこした。

「先ほどは失礼しました。お詫びと言ってはなんですが、店長としてささやかながらサービスさせていただきます」

そう言っただけにテーブルへと置かれたのは、丸く、菊の花を象った四つの和菓子だった。

首をかしげ、真紅は信介へと問いかける。

「こんなの頼んだ覚えないんだが？」
「ですから、お詫びの品です。まだ正式にメニューとして出しては
いませんが、自慢の一品なんですよ。真紅さ……真紅くんにもぜひ
食べてもらいたくて」

そういえば、と真紅は思い出す。

自分が和菓子を好きになった理由。それは幼き日に信介からもら

った和菓子、それまでに食べたどんなものよりも美味しく感じたからだった。

信介は真紅が和菓子を好きだったことを、覚えていてくれた。

「……ありがとう、信介」

「いえ、それではごゆっくり」

一礼して、巨漢は店の奥へと引っ込んでいく。

真紅の胸には、懐かしい思いと言い知れぬ不思議な安らぎが訪れていた。

しかし、この和菓子が予期せぬ事態を引き起こすことになるのを、彼らはまだ知らなかった。

〔十五話〕 和菓子のお夢（予告編）（後書き）

珍しく日を空けずに更新です。

どうも、作者の広瀬です。

巨漢、苅野 信介ですが、どれくらい巨漢かと言いますと身長1
89センチ、体重90キロ、って感じですよ。

……逆にわかりづらくなったでしょうか？

まあそれは置いておいて、次話、悲劇です。
何が悲劇って、真紅が。

可愛そうに、主人公……。

〔十六話〕 和菓子のお夢（前書き）

和菓子としては失敗作。

けれど策略の中では大成功と言わざるをえない。

自身よりも相当に年をとっているその男に、少年は頭を悩ませる。

〔十六話〕 和菓子のお夢

お詫びの和菓子を四人が受け取り、間食した後、それは起こった。

和菓子自体はほどよい甘さとすっきりとした後味が真紅にとって好みの味で、もう一つくらい無理を言って作ってもらおうかなと思えるほどの逸品だった。

ただ、なぜこれが正規のメニューとして用意されていないのか、真紅には皆目見当がつかなかった。

だが目の前の光景を見る限りでは、確かに正規のメニューにしないはずだと納得するしかない。

「……だからあ！ おばかなしんくうには、わっかんないんでしようよ！」

呂律の回らぬ舌で真紅に罵声を浴びせる愛美。しかしその瞳は真紅を映しているわけではなく、目をむいて口から変な煙を吐き出している空に向いていた。

残った京は真紅の隣に移動して、瞳を潤ませたまま制服の袖をそとつつかんで離さない。

一人だけ、素面を守り続けている真紅はただただため息をつくことしかできなかった。

あの和菓子が正規メニューにならない理由、それはアルコールの成分量が極端に高いせいだろう。

最初に異変が現れたのは、空だった。

たった一口、舐める程度しか口に入れていないはずだったが、空の顔が一瞬で赤に染まり、ボンツと漫画のような爆発音を上げて動かなくなった。不審に思っただけで空を気遣っているうちに残った二人は和菓子を食べきってしまった、足取り不確かに歩み寄ってきた愛美が真紅をつかもうとして、間違えて空の首根っこをひつつかみ、説教を始めた。その惨状を逃げ出そうとした真紅の制服を、今度は顔を真っ赤にした京がその細身に似つかわしくもない怪力でつかみ、離そうとしなかった。しきりにごめんなさいと謝罪してはいるものの、恐らく心はこもっていないだろう。

結果、和菓子を少ししか食していない真紅だけが、平静さをもつてその場に取り残されることになった。

「……すいません、店員さん。店長、呼んできてもらえませんか？」
「え？ あ、は、はい！ 少々お待ちください」

惨状を目にして一瞬だけ放心状態に陥っていたウエイトレスが、しかしすぐに復活して、急いで店の奥へと駆けていく。

口の端から白い煙を吐き出している空。怒鳴り散らすように説教を続ける愛美。小さな子供のように真紅の袖を握り締めている京。この状況を、いったいどうやって打破しろと言っのだろうか？

ナイトメアと戦うよりも、正体を知られないように策略をめぐる
せるよりも、こっちのほうがよほど難しいものなのではなかるうか。
文字通り頭を抱えていると、信介がエプロンを着けたまま座敷へ
とやってくる。

「どうしましたか、真紅様！」

ウエイトレスの慌てっぷりからただ事ではないと感じたのか、言
葉遣いが昔のものに戻ってしまっている。しかし、今はそんな些細
なことを気にしているほど余裕もなかった。

「信介！ この和菓子、酒入ってるだろ！」

「あ……ああ、そういうことですか……… すいません、やはりアルコ
ール濃度が高すぎて………」

「御託はいいんだよ！ さっさと何とかしてくれ」

言っているうちに愛美は動かなくなった空の頬をぺちぺちと軽く
ひっぱたき、京は袖だけではなく腕全体を抱え込むような形で真紅
を逃がすまいとするかのように目を潤ませている。

真紅一人の力でどうこうできる状況ではないのだ。

しかし信介は平然と笑みを浮かべ、真紅の肩にそつと手を置いた。

「……大丈夫ですよ、真紅様。この信介にお任せください」

「いい策があるんだな？」

「ええ、少々お待ちください」

恭しく頭をたれ、信介は座敷を後にする。その背中は真紅の目に

はとてつもなくまぶしく映り、少しだけ、ほんの少しだけだが信介を見直してしまった。

少しして三人の行動も 空は最初からだか 少しずつ沈静化の色を見せ始めた。愛美も京も目が虚ろになってゆき、空の顔色も青を乗り越して白へ……。

「って、空！ おい、しっかりしろ！」

慌てて立ち上がるうとするが腕をがっちりと固められているため、立ち上がることをすままならない。

引き離すにしても乱暴なことではできないため、真紅は小さく舌打ちをもらった。

流石にあの顔色は危ない。

真紅の本能が危険信号を鳴らしている。青白い、とすらいえないほどの白さは死人の顔色だ。見慣れた端正な顔にも妙な汗が浮かんでいる。

愛美にどうにかしろと言ったところで無意味だろう。

早く来い、と念じた瞬間、巨体が座敷へと突っ込んできた。

「真紅さまああ！ 一般の客は全て帰っていただきました、これです。もう存分に宴会が出来ますよ！」

「どうにかする方向が違うんだよ、脳まで筋肉が！」

空いていた右腕で巨体を殴りつける。半身を固定されているためか、威力はそれほどでもなかったが、信介はすいませんと雄たけびを上げて盛大に壁にぶつかっていった。

自分の店ではないが、建物は大丈夫なのかと不安になった。

体制を立て直した信介は思いのほか迅速に行動を始めた。空を捕まえていた愛美の手をそつと離し、代わりに自分のつけていた白いエプロンを握らせて、空に活をいれる。意識こそ取り戻してはいないものの、空の表情は少し血色をおび、呼吸も安定を始めたようにも見える。

残った問題は真紅の腕に絡みついている京だったが、信介は豪快に笑い、『役得ではないですか』と見当違いな答えをよこすのだった。

「……さて、真紅様は和菓子を食べていないのですか？」

「いや、少しは口にしました。食べ終える前にこんな状況になってしまったからな、食べてないのも変わらないんだが……」

「そうですか……なんだかんだ言っても、お強いじゃないですか、真紅様」

「はあ？」

言っている意味がいまいち理解できない。その感情が露骨に出ていたのか信介は肩をすくめ、口元を半月に歪めた。

「申し訳ありません。少し御用がありまして、わざとアルコール濃度を高くしました。真紅様なら大丈夫だろうと判断したしだいですが、こんな状況になってしまうとは。私の不注意です」

そういえばやけに早い対応だった。

客を帰すなどそうそうできることではない。飲食店としては簡単に許せるものでもないだろう。

考えられるのは、最初からこの状況を予想し、いつまでには帰ってくださいと客に言っておいたということ。

「……いつから、考えていた？」

それも、真紅たちが来るよりも早くから。

「……御子柴様から、本日こちらに来ると聞いていましたから」

予想通りの答えに深々と溜め息を吐き出した。

「最初から、あいつの悪戯につき合わされてたってことか」

なら死にそうになってるその姿も、かわいそうだとは思わない。むしろその顔面めがけて踵落としをきめてやるうかと、どす黒い感情を抱きそうになってくる。

「本当に、申し訳ありません。覚悟はしていたつもりでしたが、感情を抑えられなくなるなど何年振りでしょうが……」

「いや、お前は気にしなくていい。とりあえずこいつらを帰らせるの、手伝ってくれないか」

「承知」

愛美と空を両肩に一人ずつ乗せる信介を見ると、どうにも犯罪者にしか思えなくて、真紅は少し苦笑をもらした。

「真紅様、この状況だからこそ、一つ質問させてください。その少女、高嶺 京様を利用すればあなたの目的はすぐに達成できるでしょう。なぜ、その手段を講じないのですか？」

信介の言葉は、状況を中途半端にしか知らないにしても真を捉えていた。

高嶺家の内部へ潜入を計れば、確かに企業の裏側を探ることもこちらから攻めることも可能になるだろう。そのために京を足場として使えば、当主は絶対に手を出さない。娘のためならば自分の命だろうと捨てられる男なのだ、高嶺家の当主、高嶺 莊介は。

しかし真紅は信介の大きな瞳を見据え、首を横に振った。

「……その手は使えない。高嶺家を巻き込むつもりはない。確かに高嶺の当主、莊介さんは親父たちの仇といってもいい人物だ。だが……」

「はぁ……まったく、あなたらしい。わかりました、これ以上は何も言いません」

呆れた、というよりは安心したという声。信介も高嶺家に仕掛けるなどという考えは冗談だったということだろう。

腕をつかんでいる京は話の内容などまったくわかっていないように、くりくりと目を輝かせている。

酔ったら幼児帰りでもするのだろうか。彼女の瞳はかつての、真紅を信頼し、頼っていた頃の彼女のものに戻っているようだった。

少し前にも思ったことだったが、彼女の中には昔の彼女も残っているようだ。自分では何も決められず、親の言いなりになって人形のような少女。

子供の頃はかわいそうだと思って、たくさん話しかけ、笑わせて彼女にとっても真紅にとっても充実した日常を送ることができていた。

だからこそ、幸せに過ごしてほしい。

血なまぐさい世界など知らず、聞かず、安穩と流れ行く日常の中で、友人と、恋人と、命尽きるその日まで幸せに。

それが真紅の”本音”だった。

なんだかんだと理由をつけてみたところで、意味などない。本当なら空や愛美にもこんな世界に足を突っ込んでほしくなどないのだ。

結局、真紅は非情になりきれなかった。目的を達成するために他の全てを犠牲に出来るナイトメアとは違うのだ。

「どうしました？ 早く連れ帰ってあげなければ、その子、仕舞いには全身を使って抱きついてきますよ？」

「……あまり不吉なことを言わないでもらいたいんだがな」

一つ、思い出したことがあった。

今でこそ悪戯小僧、ムードメーカー的な位置にいる空だが、元からそんな性格だったわけではない。

この、目の前にいる巨漢が空の性格の一端を形作ったのだ。

さまざまな技術を与え、知識を与え、実践し、そうすることで今の空を作った。

ともすれば悪戯、策略などが異常に手の込んでいるものであってもおかしくはない。そして他人の不幸を楽しむ性格も変わっていない。

楽しそうに笑う信介に、また頭痛を覚え、けれど真紅は京を引きつれて立ち上がったのだった。

〔十六話〕 和菓子のお夢（後書き）

お久しぶりです、広瀬です。

どこがお夢だよ！ とお怒りの方もいらつしやるかもしれません。しかし、回りみんなが酔っ払っているのに自分だけ酔えていないというのは本当に悲しくて……。

そんな話は端っこに振り払っておいて、次話です。

次話、いよいよ高嶺家に顔出し。

『お父さん、娘さんを僕にください！』

『貴様なんかにやれるわけがなからうが！』

という会話が……。

あるわけないっす。

ともかく、出来るだけ早く更新できるように精進していきますので、ご期待ください。

〔十七話〕 面影（前書き）

不注意だった。

わかるはずがない、知りうるはずがないと高をくくっていたのが間違이었다。

失われていくのは、日常。

〔十七話〕 面影

愛美と空を信介に任せ、真紅は一人高嶺家へと向かっていた。

正確には京も一緒にいるのだが、状況を考えてみても一人と考える問題はない。

「ん……」

寝返りでも打ちたいのか真紅の腕の中で京は体をひねった。それにあわせて真紅も抱えやすいように腕の角度を変えていく。

高嶺家へと向かう途中、京はとうとう疲れきって眠ってしまった。倒れそうになったものの、真紅の腕を抱えていたため大事に至らずすんだが、問題はそこからだった。

最初は力のある信介に京を送ってもらおうとした。しかし信介は、

『がんばってください、真紅様』

と満面の笑みを浮かべて真紅を送り出した。

楽しんでいるとしか思えない。だが一方で信介が高嶺家に彼女を連れて行けない理由も理解することが出来ていた。

信介は高嶺家、いや、企業に属する全ての人間から姿を隠し続けねばならない。朝凧家と関係があった人間は企業やナイトメアたちによって常に狙われていると言っても過言ではなかった。

真紅ならば、当時が子供だった分、ばれない可能性が高い。

だからこそ真紅もしぶしぶ信介を二人の介抱に専念させ、自分は高嶺家へと向かうことになったのだ。

出来ることなら、近づきたくはない場所だ。あの家には、楽しい思い出がありすぎる。

高嶺の屋敷は元々この町にあった。御子柴はいくつもの屋敷を所有しているため当時から屋敷もあったが、そこは別荘のような扱いとなっていた。

屋敷がある場所も、概観も、構造も、全てがはつきりと思い出される。

戻りたい、とさえ思えてくるほどに

「 やめる 」

自分の心へ、自分の言葉で、制止の声をかける。

これ以上願ってしまったら、叶ってしまいそうで。悪夢を終わらせることなく空たちと共にぬるま湯の世界を歩んでいけそうで。

どうしようもなく、怖かった。

両腕に存在する心地よい重さと温もり。そつと視線を下げると、気持ちよさそうに眠る少女の顔が自然と目に映った。

叶うものか。

叶ってしまえば、空たちだけではなく彼女まで危険に巻き込んでしまう。

もしかしたら企業側の人間として温情をかけられるかもしれないが、そんなものの可能性の域を出ない。一番安全な方法は彼女に危害が加わる前に、自分の目的を果たすこと。

そのためには、叶の言っていた作戦を早めてもらうほかにはない。

考え事をしているうちに目の前に懐かしい屋敷が姿を現した。

三メートル近くある門と、それより少しだけ低い塀。堀はかなり遠く、左右百メートル近くまで広がっており、その向こう側には林が広がっている。屋敷の周囲に林を生息させているのは当主である莊介の趣味だったはずだ。昔と変わらぬ緑に自然と頬が緩むのを感じて、すぐに引き締める。

少し低くなったような気がするが、真紅は黙って門の前に立ち、京を抱きかかえたまま拳一つ分ほどのボタンを押した。

数秒して脇に設置されているスピーカーからくぐもった声が漏れ出す。

『ここは高嶺家の屋敷でございます。あらかじめご予約されていた方はそのように……』

「ご息女をお連れした。少々トラブルに遭遇なされたため、急遽私がお連れしたわけだが、お屋敷まで連れて行きたい。許可をいただきたい」

昔、父に教わった拙い敬語ながら、少しは伝わったらしい。スピーカーの電源が切れ、
重たい門が音を立てて開き始める。

入れ、ということだろう。スピーカーから流れ出した声は老齡の男のものだった。彼は真紅がこの屋敷に通い始めた頃からすでに老人だった。その頃も無駄なことは一切口にせず、無言で許可を出すだけだった。

横幅の広い道を京を抱えたまま歩き、大きな屋敷の前に立つ。茶色い屋敷は二階まであり、正面の玄関から左右へと十部屋ほどがある。全ての部屋にしっかりとした家具、寝具が設置されているがほとんど使う人間がいなかった。

正面のこげ茶色の扉が左右へと別れる。出迎えのものが来るのも待たずに、真紅は小さな隙間から中へと滑り込み、正面を見据えた。

中は広間になっていた。扇形に左右へと別れた大理石の階段が正面に鎮座している。左右には四つずつ扉が設置され、その先はそれぞれ廊下になっているはずだ。

左右を固めるように使用人の列が二つ、その広間に作られている。

「お嬢様をお連れいただいたとのこと、ありがとうございます。先

ほどの非礼をお詫びいたします」

真紅の正面に立つのは白髪混じりの髪をオールバックにして、執事の服を着こなした老齡の男性。頬は痩せこけ、体はしぼんだようにも見えるが、それでもかつての力強さを残しているかのように目には奇妙な輝きが宿っている。

「構いません。それよりも……」

「承知しております」

そういつと左右の列から一人ずつ、体格のいい男たちが歩み出て、真紅の腕の中から優しくその少女を抱き上げた。

少女の重みと温もりがなくなった腕を、少しだけ名残惜しいと思いつながら、真紅はその場で踵を返し、屋敷を後にしようとした。

「お待ちください」

しかし執事はその行動を許そうとはせず、真紅の背に力強い声を向けていた。

「私の用件はこれだけです。急いでいますので、これで……」

「せめて、お名前をお聞かせ願えませんか？」

どうやって切り抜けるべきか、真紅は少し思案した。

無理に名前を偽れば、京がその嘘に気づいてしまうかもしれない。天然だから気づかないかもしれないが、本名を彼らに告げることはどうしても出来なかった。

「……神坂……です」

かといって完全な偽名では、おかしくなる。だから真紅は、祖父の苗字を使った。

「神坂さま……本日は、ありがとうございました」

「いえ、それでは、失礼します」

それ以上の追求を逃れようと、真紅は仕草こそ見せず、だが急いで屋敷を後にした。

目が覚めたとき、そこは見慣れた自分の部屋だった。

視界の端がちりちりと点滅しているように思えたが、彼女は構わず上半身を起こし、周りを見回した。

何度見回したところで自分の部屋と寸分もたがわない。

「……あれ？」

どうしたというのだろうか。京は首をかしげながらも、ベッドの中から這い出した。

ドアから廊下へ出ると、そこには見慣れた老人の姿があった。

「お嬢様。お目覚めになりましたか」

「千崎さん……私、どうしたんでしょうか？」

老齡の執事は恭しく頭をたれると、京に向けて柔らかい笑みを浮かべた。

「神坂様、というお方がお嬢様を運んで下さいました。先ほど帰られてしまいました。お引止めしたほうがよろしかったでしょうか？」

「いえ、神坂さん、ですか」

京の記憶の中にはそんな名前の知り合いはいなかった。ともすればいつたい誰が京を連れてきてくれたのか、皆目見当が付かなかった。

「お知り合いではなかったのですか？」

「ええ、どんなお方でしたか？」

「はい。お嬢様と同じ学園の男性でした。短い黒髪と、細身のようにできてしかし筋肉の付いた体。礼儀作法も、この高嶺家に来たにしては萎縮していませんでした。私個人の見解を述べさせていただきますと、彼は普通の学生ではありませんね」

「他に、特徴は？」

今の情報からではやはり自分の記憶の中に一致する人間はいない。

執事は思案するようにひげに手を添えると、思い出したように手を叩いた。

「そうですね。彼にはどこか、懐かしさを感じました。まるで始めて会ったわけではないような、不思議な感覚です」

「……懐か、しい……？」

懐かしいなどという感覚は彼女には久しく覚えのないものだった。

昔の自分は人形のような少女だったと、千崎から聞いている。京はその頃のことをあいまいにしか覚えていないが、当時一人の少年が足しげく彼女の元を訪れていたという。

もしかしたらその人が、とも考えたが可能性は低い。

「千崎さん、一つ教えてもらいたいことがあるんです」

「お嬢様のお願いとあっては、断ることなどできません。いったいどのような？」

「昔、私を助けてくれた人はいつたいどのような方だったのでしょうか？」

千崎が知らぬはずがない。当時の彼女にとってもっとも近い人物であり、その少年とも必ず接点があるはずだ。

しかし千崎は何かを迷うように視線をさまよわせ、京と視線を合わせようとしなかった。

何か言いにくいことを抱えているときの、千崎の癖だった。

「千崎さん？ いったい、その方に何があつたのですか？」

「っ！ お、お嬢様……それは……」

「お願いします、千崎さん。私、どうしても知りたいんです」

京の熱意に根負けしたのか、千崎は深く溜め息をつき、諦めたように口を開いた。

「彼は、そうですね、明るくて他人の暗い顔を見るのがとても嫌いな方でした。子供ながらに他人の痛みをわかっていたのかもしれない。よくお嬢様の部屋にお友達を連れてきては、楽しそうに話しかけてくれていました。お嬢様は覚えていらっしゃるじゃないんですね？」

京はただ頷くことしかできなかった。

自分の記憶にはない空白の自分。自分が自分ではなかった頃の思い出を千崎はまぶしそうに目を細めながら語っている。

もしその少年がいなかったら、今の自分は存在しているのだろうか。

それとどうして千崎がその話をすることのためにためらいを覚えたのか、京にはわからなかった。

「その少年は、今どうしているのですか？」

今度こそ、千崎は絶句していた。その質問だけは聞きたくなかったと言いたげな空気の中、けれど京は答えを聞かずにいられたかった。

「……お亡くなりになったと、聞いています」

「……え？」

「数年前に、事故で。一家全員が亡くなり、家人たちも暇を出されたと」

恩人が、顔も名前もわからないまま死んでいた？ その真実を受け入れがたく、京はいやいやをするような子供のように頭を左右へ振る。

「本当に？ その方は亡くなってしまったのですか？」

「戸籍上は、ですが。事故自体が大規模のものでしたのでご遺体は見つからなかったのですが、その方のご両親の遺体が見つかったことから彼も生きてはいないだろうと警察の方々は判断されたそうです」

千崎の声は勤めて平静を装っている。だがその中には微かな揺らぎと、奇妙な期待が籠もっているように思えた。

その理由を問いただそうとしたとき、彼はしかし、と続けた。

「私は正直、彼が死んだとは到底思えないのです」

「どういうこと、です？」

「先ほどの彼、お嬢様を連れてきてくださった方ですが、本来なら警戒すべき対象でした。ですが、もしかしたら彼が、あの時の少年ではないかと警戒を緩めてしまっていたのです。生きていたら、立派に成長してくださっていたら、あんな姿をしているのではないかと……私の願望でしかないのかもしれませんがね」

自嘲気味に笑う彼の表情は実年齢に近づいたのではないかと思えるほど老いて見えた。昔を懐かしみ、そこに救いを見出しているような、優しい笑顔。自嘲的なものだったとしても、そこには安らぎがあった。

「お嬢様、これからお話しすることは、出来ることなら荘介様には

お伝えしないでいただきたい」

京は無言で頷き、先を促した。

「少年は”神坂”と私に名乗りました。少年は気づいていないかもしれませんが、私は”彼”の祖父と懇意にさせていただいておりまして、その名をよく覚えております」

話が見えてこない。遠回りに何かを伝えようとしているのかもわからないが、あいにくと予備知識も何もないためその意図ををくんでやることが出来ない。

「”彼”の祖父は神坂 黒陽こくやうと名乗っていました」

「それは……どういう」
「偶然、ではないでしょう。彼にとってこの高嶺家は”敵”と判断すべき場所です。本名を告げられないのも、当然でしょう」

半ば確信を持って、千崎は京へと言葉をつむぎ続ける。

けれどその内容は安易に教授できるほど優しくはない。

どうということだというのか。

恩人と高嶺家が敵？ 本名を名乗れないほど？

疑問が彼女の思考を支配していく、それすら予想していたかのよう
に千崎は笑みを深め、彼女へ優しく語り掛ける。

「ご安心ください。彼は警戒心こそ持っていました。私たちに危害を加えようとは思っていないようでした。あんなことがあったのに、未だに昔と同じ目をしていましたよ。」

「千崎さん……」

混乱している京の頭にしわしわの手のひらが優しく触れる。

人形ではなくなってからの京は、小さな頃よくこうして千崎に慰められたものだった。

祖父、といってもいいほど彼女にとって千崎は大切な存在となっていた。

「本当は、知らないほうがよかったのかもしれない。だからこそ彼はお嬢様に何者かを知らせず、それでも気遣ってくださったのかもありません。ですが、私はあなた方の未来に、後悔という念を残してしまいたくはありません」

だから

だから、どうかお許しください。

千崎はここにはいない誰かに語るように、声にならないほど小さな声でその言葉を解き放った。

「……京お嬢様。あなたを救ってくださった、少年の名を今ここで明かささせていただきます」

拒絶したいならそうしてください。彼の瞳は京にそう語りかけていた。

だが、京がそれを恐れては、本当に取り返しの付かないことになりそうで、そして彼女自身その人の名を知りたくて

違う。

本当は、わかっていた。

予想していた。

出会ってからずっと、彼女のことを気にかけてくれていた人。

その答えが返ってくることは。

優しいのに、少しだけそっけなくて。

霞がかかった記憶の中で、笑顔を向けてくれた人。

でも結局、冷たくなりきれていなかった。

優しさを捨てられなかった人。

「少年の、名は……」

朝凧 真紅。

〔十七話〕 面影（後書き）

珍しく大量に書きましたが、まあ結構重要な内容なんでいいかなあ、とか思ってるしだいです。

こんちわ、広瀬です。

執事の名前とか適当に付けたつもりだったんですが、まさか何気に重要ポスト。やべえ、もうちよつとちゃんと決めるべきだった、と少し後悔。機会があればもっと詳細な設定とか、真紅の爺さんとのやり取りとかを取り入れていきたいですね。

ともかく、真紅の正体がバレたわけですが、これからの京がいったいどんな行動に出るのか。ようやく予定通りに話が進んでいく予感……。

それでは次話、明日明後日にはUPしたいと思います。ではでは〜。

〔十八話〕 変わりゆく日常（前書き）

真実を知った少女。それを知らない少年。

二つの想いは重なることはなく、それでいて離れることもない。
変わっていくのは、心。

〔十八話〕 変わりゆく日常

二日酔いに近い状態の空に肩を貸し、途中で愛美をとっ捕まえた真紅は二人のお荷物を抱えたまま学園へと登校し、重くのしかかる疲労感に押しつぶされるように机へと頭をうずめた。

信介とのパイプを取り戻し、叶の作戦を待つ身としては本当はこんな、些細な事象に心を潰されるわけにはいかない。

だというのに友人二人を相手に、自分はいったい何をしているのか。

尻拭いというには生易しすぎる。手伝ってやるとか言いながら、空は余計な負担を増やしてくれているのではなからうかと思っっている。

それなのに、心のどこかでその負担が心地よいと思ってしまっ自分があることにも真紅は気づいていた。

「はぁ……叶のやつ、早くしてくれないかなあ」

出来るだけ早く、企業の内部へと潜入したい。そして、悪夢を終わらせる。

そのためだけにここにいるのだという意志が、少しずつ風化していくのがわかる。

安らぎを求めてしまっている自分。そんなものに気づいてしまっでは、押さえ込むことに全神経を注ぐしかなくなってしまうのだ。

幸せになるわけにはいかないんだ。

背負った罪と、託された希望と、全てを清算できるわけではないけれど、足掻くと決めた。

窓の外に広がる世界へ視線を預けると、眩い朝日に目がかすむ。

もしかしたら、真紅にとってのこの世界は同じような存在だったのかもしれない。

白すぎて、優しすぎて、真紅がいるにはふさわしくない世界。日常。自分がここに続けなければこの日常を壊してしまうことがわかっているのに、ここにいるしかなくなっている。

壊してしまうその前に、決着をつける。

また、思考に飲み込まれている。そう気づいて意識を浮上させると、隣の席に誰かが座る気配があった。

「おはようございます、朝風くん」

「……ああ。おはよう、高嶺」

優雅に座る少女の姿を確認して、真紅は少し警戒心を強くする。

真紅が高嶺家に出向いたことで、何かが変わっていないとも限らない。

もしかしたら真紅のついた嘘がバレているかもしれないし、京自身が何かを思い出しているかもしれない。

もし、わかってしまっていたとしたら

予定よりも早く、ナイトメアとの戦いが始まる。

まだ何の準備も整っていないのだ。あと少し、せめて一ヶ月は猶予がほしかった。

矛盾していることは、真紅にもわかっていた。だが準備の整わない状態で戦ったとしても、叶のいう三人のうち、誰かに負けてしまいうのは目に見えている。それでは悪夢を終わらせることなど出来ない。

真紅の心配をよそに、京は朗らかな笑顔を浮かべると真紅の鼻先にそつと指を突き出した。

「なんだ？」

「鼻、痣になっっていますよ」

少しの間、机に顔を押し付けていたからだろうか。痛みこそないし確認のしようもないのだが、彼女の目を見る限り嘘ではなさそうだが。もつとも、こんな些細なことで嘘をついても仕方がないことだが。

「痣、か。そんなにひどいかな？」

「いえ、少し赤くなっている程度ですね。鏡をお貸ししましょうか？」

「いや、いい。そんなの確認しても仕方ないだろ」

そうですね、と京は口元に手を添えて控えめに笑う。

取り越し苦労だったか。

彼女の態度を見る限りでは、真紅のことを知っているようには思えない。

本当に、昨日は意識を失うほどだったのに、何も変わったところがなかった。

和菓子に入れたアルコール程度で酔っ払い、二日酔いになるほうがどうかしている。真紅は安堵の息を吐き、後ろの二人へと視線を向けた。

気持ち悪いのか二人は放心状態のまま、宙へ視線をさまよわせていた。

「はあ、どうしようもないな、お前たちは」

「……お前、おれが……酒……」

「ああ、ああ、わかってる。一滴舐めただけでも酔っ払うやつだもんな、お前は。早苗さんがくれた薬飲んで、一日中寝てればいいさ」「すまん……」

この様子では本当に一日中使い物にはならないだろう。

やれやれと首を振って、さて今日はどうしようかと思案する。

「そういえば、愛美も弱かったか？ たしなみ程度には飲めるようにしておくと、おじ様が言っていたような気がするが」

「うん。弱くは、ないよ」

そういつ割には、まだ意識がはっきりしていないようにも見える。

首をかしげていると京がそつと耳打ちする。

「あの和菓子、相当きついものだったようです。私の家のものがそんなことを言っていました」

「そうなのか？ 高嶺は、その、大丈夫なのか？」

「ええ。特効薬をいただきましたので、特には。それでもまだ視界が揺れることもあります。それよりも朝風くんのほうがすごいです。まったく後遺症がないじゃありませんか」

「俺は、全部を食ったわけじゃないから」

信介に恨み言の一つや二つ、加えておくべきだったかもしれない。

いくらなんでも、やりすぎだった。

「ところで、朝風くん。本日の昼食は、もうお決まりですか？」

「ん？ いや、購買にでも行ってパンでも買おうかと思ってたけど、どうしたんだ？」

ふと、何か違和感のようなものを覚えた。

嫌なものでは決してない。むしろ、何か喜ばしい。

その原因は簡単に見つけることが出来た。

饒舌な京。

明るい。普段のおどおどとした気配を一切見せず、笑顔も自然だ。

まだ本調子ではないのだろうとその違和感を片付けて、真紅は京を正面から見据えた。

「いえ、コックに頼んで昼食を作っていたのですが、皆さんもどうかと思いますよ」

「そうだな……俺は問題ないが、この二人は飯とか考えている余裕はないぞ？」

二人はこんなときだけ、力強く頷いた。

その力を回復のほうに回せよ、と内心突っ込みを入れつつ、真紅は問いかけるように首を傾けた。

「なら、朝凧くんだけでも、是非。機能のお詫びという意味も籠もっていますので」

「そうか？ ならお願いしようかな」

軽い気持ちで請け負う。京も嬉しそうに頷き、笑顔を浮かべていた。

昼休みになって、二つの屍を教室に置き去りにしたまま真紅と京は中庭へと足を伸ばした。

休日を挟んで、今日は火曜日だ。一週間ほどが経過しているが、この学園内ではこの場所が、真紅には一番過ごしやすい場所となっていた。

自然の中で生きてきたからだろう、あまり自然の息吹を感じられない場所は好きになれない。

「さあ、どうぞ召し上がってください」

ベンチに腰掛けて、京は真紅との間に弁当箱、いや重箱を置き、その黒い蓋を取り去った。

「おお……」

思わず声が漏れてしまうほど、その中にはすばらしい世界が広がっていた。

ふつくらとした卵焼きと焼き魚、甘納豆や数の子。金箔が乗せられた物まである。

今は正月か？ と思わせるほどの内容に、真紅は一瞬、呆然とその光景を眺めていることしか出来なかった。

「さあ、どうぞ。たくさんありますから、遠慮なさらずに」
「あ、ああ」

割り箸を手渡され、恐る恐る箸を伸ばす。まずは卵焼きをつかみ、そつと口元に運んでいった。

気づくと隣の京が興味津々といったように目を輝かせて真紅の一挙一動を観察していた。

本当に、なんだというのだろうか。

朝の違和感は少しずつ、だが確実に真紅を苛んでいた。

何かが昨日までの彼女とは異なっている。酒が残っているからではなく、何か別の、彼女を喜ばせる何かが。

その何かがわからなくて、結局は放置せざるをえない。

視線に気づかないふりをして、真紅は卵焼きを頬張った。

「い、いかがでしょう？」

少し甘いかな。それが率直な感想だった。だが悪くはない。家庭的というか、懐かしい味がそう思わせているのだろう。

「少し甘い味付けだな。でも美味しいよ」

「そうですね、よかったです。自分で作ったわけではないですが、お口に合うか少々不安でした」

「そんな心配しなくても……ほら、高嶺も食べなよ」

真紅に促されて、京も重箱へと箸を伸ばす。

騒がしい空や愛美が近くにいない食事は、こちら側にやってきてからは始めてのものだった。いつも煩わしいと思っていたが、いざなくなってみると少し寂しい気がしないでもない。

二人は無言で重箱をつつき、食事を続けた。元々空がいなければ話題を探せないような男だ。京にどんな話題を振るべきなのか迷っていたというのがその沈黙の真実だった。しかし京のほうはというと、何が楽しいのか頬を緩ませ、時折真紅の方を覗き見て、また笑う。

真紅には彼女の気持ちがよくわからなかった。

「ふう、ごちそうさまでした」

可愛らしく両手をそろえ、そんな言葉を口にしてから京は満足そうに笑った。花が咲いたような、という表現はチープすぎるかもしれないが真紅の脳裏にはそんな考えが浮かんだ。

「いかがでしたか？」

「ああ、美味しかったよ。誘ってくれてありがとう」

「いえいえ、これくらいで昨日のお礼になるのですからいくらでも」

何に對してのお礼なのかはよくわからなかったが、満腹感から思考が鈍っていたのか真紅は深く考えることを諦めた。京が相手、ということに気が緩んでいたのかもしれない。あるいは陽気が邪魔していたということもある。

少なくとも今までのような正体を知られてはいけないという危機感は霞になって消えていた。

それだけ心を許せたのは愛美と空以外、死んでしまった鍊くらいだったろう。真紅にとっては珍しいを通り越して、奇跡ととってもいい。

「さて、教室に戻るか。二人にも、食べられないのがわかってても何か口に入れてもらったほうがいいだろうからな」

「そうですね。こういう時は何を食べさせてあげたらいいのでしょうか？」

「檸檬とか、柑橘系のものじゃないか？」

二日酔いに何が効くかなど、真紅が知っているはずもない。二人でどうしようかと話し合いながら、二人は校舎への道を進んでいく。

何かが変わった。それを理解することなく、真紅はただ心地よい日常に飲み込まれていくのだった。

〔十八話〕 変わりゆく日常（後書き）

思った以上に早く投稿できたみたいですね。
どうも、広瀬です。

真紅と京。

幼い頃の思い出とか高校生にもなれば薄れて、消えてしまうのは当たり前なのではないでしょうか。広瀬は育った環境のためか、幼馴染とは比較的良好な関係を築いてきたと思います。だからこそ、仲間との大切さとかよくわかるつもりです。

うわ、言ってる懐かしくなってきた。熊さんや、今度遊びに行くわ、夏休みあたり。

と、関係ないことばかり（熊さんは覚悟しとけ）でしたがお付き合いくださってありがとうございます。

それではまた、次話にご期待ください。ではでは。

〔十九話〕 出会いの予兆（前書き）

ある少年は苦悩を抱き、ある少年は興奮を胸に。
それぞれの思いを胸に、夜が始まる。

〔十九話〕 出会の予兆

その珍獣がやってきたのは、真紅が京と昼食を済ませ、二人に見舞いの品を持っていこうとしていた頃だった。

購買のおばちゃんから檸檬を買い取り、教室に向かう廊下で拉致された真紅は、そのまま三階へと連れて行かれ、科学準備室の中へと閉じ込められた。

「……………どうしてお前は、昼休みが終わるか終わらないかっていう、微妙な時間に呼び出しをかけるんだよ」

呼び出しと言えるものではなかった。購買のそばで待っていた京を先に戻っていると勝手に言いくるめ、真紅の制服の襟首を引っつかみ、そのまま三階へと連れて行った。

その暴挙をやったのけた女教師は何事もなかったかのように微笑んだまま椅子に腰掛け、真紅の前で足を組んだ。

「まあまあ、細かいことは気にしちゃだめだよ真紅。早く老けちゃうよ？」

「うるさい。学園内では少し抜けたキャラで通しているんじゃないのか？ あんなところを見られていたら、一発でキャラが反転するぞ」

「大丈夫よ。目の錯覚ですわ、って通しきるから」

どこからその自信がやってくるのか真紅には見当も付かない。一日寝たことによって収まっていた頭痛がまた戻ってきそうだったが、幸いなことに戻ってくる気配はない。それだけが唯一の救いだった。

「さて、と。今回とつ捕まえ、もとい連れてきた理由は大体把握してるんじゃない？」

「ああ、見取り図と潜入ルート、手順、全て決まったということだろ？」

それ以外の理由で叶が呼び出しをかけたなら、そんな問いかけはしなかっただろう。予想通り叶は嬉しそうに微笑み、一枚の紙切れを手渡した。

「決行は今夜。私が先行してシステムを数分間停止させるから、その間に内部へ潜入して。その後はこの盗聴器を作動させて、内部を移動。目的の部屋に設置したら、タイマーを三十分後にセットして撤退。敵に見つかからないようにしてね。もし見つかったりしたら迷わず倒して。尾行されたりしたら厄介だから」

手渡された見取り図の中には小さいながら正確なルートが記述されていた。作戦区域は三十階から三十二階。三十階まではエレベーターを使用し、そこからは徒歩で目的地を目指す。

目的地を目にして、真紅の眉が苦渋に歪んだ。

「……叶、お前……」

「ごめんね。でもこの人が今、企業内部では最もナイトメアと関わりのある人間なの。それくらい、予想はしていたでしょう」

予想していなかった、といえば嘘になるだろう。だが実際に目的地がこの人の部屋だというのは、少しだけためらいが生じる。

目的地は三十二階、3201号室。高嶺 荘介の企業内部に設けられた仕事部屋だった。

「変更はないわ。彼の持つ情報は貴重よ。巻き込みたくないのはわかっているつもりだけど……ごめん、今の言葉は忘れて」

真紅は小さく舌打ちをもらし、叶にその紙を返した。

「……真紅？」

「大体は把握した。御子柴の方には今夜は遅くなると伝えておく。それでいいな？」

「え、ええ」

踵を返し、準備室を出ようとする。また叶のせいで授業に遅刻したらたまらない。そんな考えで、自分自身を誤魔化して。

「待って、真紅」

しかし準備室を出ようとした真紅の背に、叶の悲しげな声が投げかけられた。

「……なんだ？」

少し無愛想だっただろうか。苛立ってはいたが勤めて平静を取り繕うとしたはずだった。

「……ごめん、なさい」

「……気にするな、お前のせいじゃない」

振り返らずに、真紅は科学準備室のドアから一步踏み出し、後ろ手にドアを閉めた。

振り返ることなど、出来るはずがなかった。

彼女の声が既に泣き出しそうなほど、悲しみに震えていたから。

昼休みが終わる前に真紅は何とか教室にたどり着いたのだった。

神凧学園、某教室。

他の教室とさほど変わらないその教室の中に、二人の少年がいた。

一人は制服の前を全開にして、目元ほどまで髪を伸ばした少年。外見はさほど大きくもないのだが、引き締まった両腕は運動部に所属している人間よりも強い力を引き出すことが出来る。

もう一人の少年は中性的な顔立ちで、男らしくするために髪を短く切りそろえているが、あまり変わらない。制服をしっかりと着こなし、優等生然とした雰囲気をかもし出している。

神凧学園には、どこぞの子息が通う学園という側面を持ってはい

るが、一方でもう一つ、特殊な性質を持ち合わせていた。

それは学問、運動どちらかが突出した生徒が通うクラス。入試では筆記、実技のどちらかを選ぶことができ、どちらかが規定の点数を超えることで入学が許可される。定員無し。進学率も高いため、多くの生徒が入学を希望する。

ただ合格のハードルが高いため入学数は子息のクラスと変わりないが、厳しい入試を乗り越えた結束感から仲間意識が強く残っていた。

そして同じ学園でありながら制服が違った。

真紅たちが通うクラスは、女子は薄い黄色を主体にした制服で男子は学ランに近いものだったが彼らのクラスは違う。男子は下が紺色、上に羽織るのは少し青が強いブレザー。女子もラインの入った紺色のスカートと白いシャツにブレザーを羽織るなど、生徒の姿を見る限りではとても同じ学園に通っているとは思えない。

教師たちの間では一般コースと特別コース、そんな風に分けられていた。

「終わった終わったあ、さ、帰ろうぜ、康けい」

ブレザーの前面を開けている少年は隣に座る少年へと声を投げる。康と呼ばれた少年はやれやれと溜め息をついて立ち上がり、少年の眉間へと人差し指を立てた。

「赤くなってるぞ、天。一日中寝てたら何もわからないだろう」

「いいんだよ、俺は。どうせ体力組は成績なんて見られないんだか

ら

入学試験で何を選択したかによって学内での扱いも変わってくる。

学力組は勉強を、運動組は体育の成績を見られ、それによって進級できるかが決まるのだとか。

しかし二人に関しては少しだけ事情が違っていた。

「朝倉くん、若元くん。何かわからないことはない？」

「え？ ああ、大丈夫ですよ委員長。この学園のことはいろいろと聞かされていたので」

二人、朝倉 天一と若元 康てんいつは他校から試験的にやってきた交換留学生ということになっていた。期限は三ヶ月。彼らの高校に誰が送られたのかは知らないが、天一と康にはまったく関係のない話だった。

眼鏡をかけたお下げの委員長は残念そうに肩を落とし、二人に別れを告げて教室を後にした。

ちなみに交換留学生を決める際、粗相があつてはいけなからと学力、体力の両面から学校内で一番の人材が選ばれた。体力で天一、学力で康。

二人とも元々は面倒くさくて丁重に辞退を申し出た。しかし学校側としては少し問題児である天一と、それにしっかりと手綱をかけられる康のコンビをみすみす逃すはずもなく、結局交換条件を飲むこととなった。

天一に出された交換条件は、卒業までの全定期試験の免除。頭がそれほどよくない天一にとって、こんな美味しい話を逃す手はない。康はしぶしぶ付き合う形になっていたが、長年の付き合いからそれほど退屈はしなかった。

そして彼らには、この学園にきたもう一つの理由があった。

「さて、と。準備は出来てるのか、康？」
「ばっちり。俺を誰だと思ってるのさ」

教室を二人で出て、昇降口へと向かう。足取りも軽やかに、借りているアパートの一室へと帰りながら、天一は茜色に染まりつつある空を見上げ自身の中を駆け巡る興奮に全てを任せていた。

「て〜ん〜い〜つ〜？」
「うお！ なんだよ、康。脅かすんじゃないか」
「何度呼んでも応えないからじゃないか。ほら、アパートに着いたんだし、さっさとしたくしてくれ。それとも飯を食ってからにしようか？」

逡巡して、しかし天一は首を振った。

「いいや、飯よりもいいものが拝めるかもと思ったたら食欲なくなってきた」

「はは、天らしいや」

呆れたように笑って、康は天一の目の前に拳を突き出した。その意図を汲んで、天一も拳を突き出し、軽くぶつけた。

「それじゃ、今日もよろしく頼む、相棒」

「了解。まかせてよ、天」

夕暮れの中二人の少年は、互いの顔を見たまま不穏な笑みを浮かべ続けた。

〔十九話〕 出会いの予兆（後書き）

お久しぶり、といってもいいくらい更新が遅れてしまいましたね、広瀬です。

ようやく！ ようやく登場させることができましたよ、天一。いやあ、長かった。

実はこの天一くん、広瀬にとっては結構思い入れのあるキャラなんですよ。その分、もしかしたら主人公である真紅より練りこんだキャラかもしれません。真紅との出会いや駆け引きなど、見せ場もたくさん用意しています。

あと康。この人も結構思い入れがあるんですが、今回はたぶん、ほとんど見せ場なんてありません。不憫な人です、ええ、本当に…。

さて新キャラ導入も済んだことですし、次話、ようやくファンタジーっぽくなっていく模様（予定）。

ちよつとがんばらなくちゃ。

〔二十話〕 闇夜の戦い（前書き）

戦い続けることで自分の存在意義を見つめなおす。
戦い続けることで罪を払拭する。

ただそのために、少年はその白刃を抜く。

〔二十話〕 闇夜の戦い

深夜零時を少し回った頃、その建物は完全な静寂に包み込まれていた。

残業をしている社員は一人も存在せず、警備員すらこの会社は雇っていない。

「必要が、ないからだ。」

警備員など何人いようと意味はない。彼の企業には優秀なガードが存在し、その鉄壁の守りによって並みの要塞よりも強力な防衛力を誇っている。

そんな場所に単体で潜入しようとしている少年が、独り。

漆黒の闇に溶け込むような外套を纏い、腰には鞘に収まった日本刀を携えて。その鋭い眼光はしっかりとした敵意を蓄えて、その巨大な建物へと向けられていた。

「……嫌な夜だな」

曇っているわけでもないのに、星たちが完全な闇に囚われていた。

こんな夜はろくなことがない。

見上げるほど大きな建物を数秒睨みつけ、少年は腰の刀に手を添えた。

「さて、と……行きますか、不知火^{しごひ}」

軽い口調で、しかし確固たる意志を持って。

刀に意志などないはずなのに、主の声に応えるように周囲に軋むような音が鳴り響いた。

口元を半月形に歪め、少年は両足に力をこめる。とん、と軽い音が響いた直後、少年の姿は既にそこには存在せず、元の静寂が世界を包み込んでいた。

暗黒の中で血のように赤い外套を羽織って、真紅は三十階の廊下に佇んでいた。

『真紅、道順は覚えているのよね？ なら四十秒後に全防衛システムを停止させるから、一気に上へ向かって』

「わかった。もう一度聞いておくが、三十階までのセキュリティは問題ないんだな？」

『ええ。三十階まではほとんど何も無いといっていいわ。エレベータを使っても”あし”が付かないはずなんだけど、本当に階段を使ったのね』

感嘆というよりも呆れに近い感じで、耳元の小型スーパーカーから叶の声が聞こえてくる。三十階まで上ってくることなど真紅にとっでは準備運動にもならないのだが、どうやら彼女にとってはそうではないらしい。いくら体捌きが上手いからといって全体を見るとやはり女のそれであることに変わりはない。体力が少なかったとしても仕方のないことだろう。

「始めるぞ、合図を」

『了解。へまをしないでよ?』

「わかっている、早く」

瞬間、真紅は全身の筋肉を総動員して数十メートル前方へと跳んだ。

背筋に冷たいものが走る。この感覚には覚えがあった。

殺気。

「へえ、今を避けるんだ。やるねあんた」

暗黒を駆け抜けたのは、雪のように真白い一筋の軌跡。

それが刃であることを脳が理解するよりも速く、真紅は腰に挿していた刀を鞘から解き放った。

「何者だ?」

「そっくりそのままお返しするよ。格好を見ると俺と同じように侵

入者だろ？　　ったく、この会社はつくづく敵が多いこつて」

飛んでくるのは敵意も悪意もない、単純な好奇心。心の底から楽しそうなその声音からは同年代のような気配が感じ取れる。

だが今の一太刀は、達人のそれを思わせるほどの速さと正確さを保っていた。

暗闇の中へ目を向ける。そこには闇に溶け込むような外套を纏った少年が、半月のような形に口元を緩め、片手に純白の日本刀を携えている。

真紅の刀よりも少しだけ長く見える。真紅の刀は二尺五寸。目測だが彼の日本刀は二尺六寸ほどだろう。

「……お前は」

「ああ、心配するな。お前みたいなやつ邪魔はしない。こつちも仕事があるんでな。あんまり俺の独断で動いてると怒られる」

闇のせいで相手の顔は見えない。だが殺気すら完全に消し去っていることから、何か言い知れぬ不安を真紅に与えている。

「ん？　ああ、わかってるつて。もう寄り道しないから耳元で小言いってんなよ。わかつたつて」

面倒くさそうに刀を納め、声の主は背を向ける。

真紅も同じように刀を納めたが、注意だけは怠らない。

「そう警戒するなって、嫌な夜だと思つたが案外面白い出会いがあ

ってよかつたと、俺は思ってるんだ。きつとまた、会うこともあるだろう」

「……奇遇だな。俺も、そう思っていたところだ」

なぜそんな考えにいたったのか、真紅自身にもわかりはしない。言ってみれば、勘。自分と同じ人種を前にして、親近感でも湧いてきたのかもしれない。

だから、勘としかいえなかった。

「はは、お互い次に出会うときまで名乗るのは無しってことで」

そう告げた直後、闇の中を漂っていた漆黒の外套が完全に姿を消した。

半ば呆然と、真紅はその場に突っ立ったままさっきまで人がいたはずの場所を見つめ続けていた。

『真紅、始めるわよ。……真紅？』

「あ、ああ、わかった」

叶の声に正気を取り戻し、真紅は踵を返す。

今はただ目的地に無事にたどり着くことだけを考えればいい。それ以外のことを考えている余裕など、あるはずもなかった。

どこか遠くで刀を打ち合う甲高い音が聞こえてきた気がした。

面白いやつに合えた。少年は雪のように真白い柄を握り締めながら、口元に浮かぶ笑みを抑えることができなかった。

あれは自分と同じ人種だ。罪を背負い、目的を成し遂げるために歩き続けているだけ。

だからこそ、まだあの少年には救いの道が残されていた。

罪を背負ったと感じたのは自分自身の心がそれを後ろめたく思っているからだ。誰に責められ、罵られようと本人がそれを罪だと認識していなければ、罪の意識に苛まれることもない。

解決するための道は、二つ。

一つは罪を償ったと思うことが出来る何かを達成したとき。だがこれは、自己満足以外の何物でもない。だから少年自身は、こんな形で罪を償うつもりもなかった。

そしてもう一つの道は、誰かに許してもらえること。

許しを求める、求めないを問わず、誰かに安らぎを覚え、誰かに許してもらったときその心は罪の意識から解放される。それが罪の意識の元となった事象に近ければ近いほど、罪が消えていく。

「あいつは、どんな罪を抱えてんだろうな？」

小型マイクの電源は切っている。だから誰に問いかけているわけでもないのだが、少年の視線は向かう先ではなく刀へと向かっていた。

神器、不知火。

少年の罪を思い起こさせる悪夢の象徴であり、同時に親友と同じほどの長い時を共に歩んできた無二の愛刀。たった一人の人すら守れなかったその刀は、しかし少年に笑いかける。

大丈夫だよ、と。

少年は嬉しそうに目を細め、足を止めた。

「そっか。なら、ちょっとお節介をしてやるとしますか」

耳元の機器に手を添えて、無線のスイッチを入れる。一瞬ノイズのような音が耳を傷めたが、すぐに声が聞こえてくる。

『 ！ 気をつけるよ、その周辺全域にノイズが 』

「わかってる。他の侵入者が仕掛けたんだろ。こっちもそれを利用してもらつた」

『 ？ いったい何を…… 』

スイッチを切って、腰の刀を鞘から解き放つ。

月光すらない闇の中でも純白の刃は浮き上がるように輝きを蓄え、眼前の敵へと戦いの意志を向ける。

「……これで雑魚だったら、怒るぞ」

闇の中で感じる気配は少なくとも四つ。そのどれもが希薄なものだったが、少年も伊達に修羅場をくぐってきたわけではない。その程度で気配を消しているつもりか、と苦笑さえ浮かんでしまう。

「こいよ。遊んでやる」

その言葉を待っていたかのように、彼らは行動を開始した。

目で追えない速さ、角度から繰り出された投擲を紙一重でかわし、純白の刃を縦に一閃。ナイフのようなものを弾き飛ばし、敵の位置を数パターン予測してから鞘をベルトからはずし、逆手で前に突き入れる。空気の微かな振動を確認すると、右手で持った刀をもう一度一閃する。

思っていたよりもあっさり、純白の刃が獲物を捉える。肉を抉る感触も、骨を断つ嫌な手ごたえもなく襲い掛かってきたはずの肉塊が崩れ落ちる。血しぶきを浴びることなく刀を地面に突き立て、弾き飛ばしたナイフをつかむと闇の中へ投げる。接近していた敵の眉間に突き刺さったナイフを引き抜くと、右手にナイフ、左手に鞘をそれぞれ逆手に握りしめ、左右から迫っていた二つの刃を受け止める。片方は刀、もう片方は小太刀。威力こそ申し分ない、だが少年を満足させるほどのものではなかった。

「雑魚が」

冷徹な声音。

感情が存在しないはずの暗殺者たち、その気配が言葉だけで凍り

ついた。

両腕に乗った重み。それを柳のように受け流して刀に手を伸ばす。勢いよく引き抜いた白刃を、片足を軸にして薙ぎ払う。ほぼ一回転するほどの威力を持って、白刃は敵を捉えた。

「 毘沙門天」

師匠から教わった技の中では初歩中の初歩。軸足を用いた回転と神速の刃を駆使した多人数戦を主眼に置いた剣技は、意志を持たない人形相手には少しもつたいなかつたかもしれない。

この企業に関しての資料は事前に入手していた。

暗部の存在もまた、その際に情報を入手することが出来ていた。

暗殺組織、ナイトメア。公に出来ない実験も多く行っているこの部署について情報をもっと集め、企業の上層部を陥れる糧とする。それが少年に依頼を持ってきた男が明かした真実だった。

「情報屋つてのも、大変な人種だよな」

今更ながらに自分の置かれた状況を理解して、溜め息を漏らす。望んでなったものならともかく、少年の場合は成り行きだった。

刀を納め、四つの肉塊に目もくれず、少年はまた闇の中へと歩き出す。

まだ本当の目的を果たしたわけではない。少しだけ憂さ晴らしもできたが、それもまだ足りなかった。

「あなたですか、侵入者は」
「　　っ！　へえ……これは……」

闇の中から浮き上がるように、一人の男がやってきた。

少年よりも少し高いくらいの身長と、オールバックの髪型。耳元では獅子のピアスがきらめき、口元には嘲るような冷笑が浮かんでいる。

しかし少年が驚いたのは、そんな外見上のもではなかった。

まったく気配を感じなかった。声をかけられるまでそこに人間がいるとは思ってもしなかった。

本当に人間なのかと思うほどの隠密能力。その驚異的な力に、自然と笑みが浮かんだ。

「やっと面白そうなやつが出てきたな」

心が躍る。鞘に収まっているはずの不知火も、主の興奮を感じて震えだす。

「ほう、私を見ても恐れることなく、むしろ好戦的な態度を示しますか。結構。そうでなければ面白くはない」

「……ずいぶんと楽しそうだな」

「あなただって、楽しいでしょう？　嬉しいでしょう？　本気で殺しあえる相手が目の前にいて、互いに殺すつもりで対峙しているのです。これほどの好条件、他では類を見ないでしょうね」

「つまりはお前も、戦闘狂ってことか」

「意外、と言いたそうですね。ナイトメアには感情がない、と思っ
ていらしたのでしょうか。しかし私たち番号付きは違います。少々お
かしなところはありますが、基本的にあなたたちと変わりありません
よ」

空気を切り裂く鋭い音が鼓膜の奥を微かにゆすつた。一足飛びに
飛びのくと、地面を抉る音と共に太いロープのようなものが視界の
端でぶれる。

「くく……！ 素晴らしい、今のを難なく避けるのですか？ 予想
外もいいところですね」

「そっちこそ、なんだよ”番号付き”って」

「おや。私たちの序列を知らないのですか？ 私たちの中で最強の
十一人。それぞれについていた序列です」

「へえ、初耳だな。ちなみにあんたは何番なんだ？」

悠長に話している間に相手の動きを観察する。

右手に握られた何かから伸びているのは異常に太い鞭と判断して
いいだろう。少年の二の腕ほどの太さはあるであろうそれを、易々
と振り回すその筋力は侮ることが出来ない。

「ふふ……あなたは素性を明かせないでしょうからね、私が一方的
に名乗らせていただきます」

言いながら一閃。鞭の一撃を、体制を崩しながらもかわす。壁が
音を立てて破壊されていく様は、常人では恐怖を覚えるものだろう。

「私はフォースナンバー、烏丸 聡司と申します。始めましょうか、
名もなき侵入者殿。甘美な戦いの円舞曲を」

少年の表情はきつと、喜びのあまり悪鬼のよつに歪んでいた。
ろ

〔二十話〕 闇夜の戦い（後書き）

ついに二十話に到達しました。いやあ、早いものです。

周囲を暗黒にしてしまったせいでいろいろと不便だったのですが、単純に自分の力不足かもしれないですね。

烏丸と戦っている少年、もうなんとなくわかっている人もいるかもしれませんが。いや、ばれるように書いていたからいいんですけど、もうちょっと騙し騙し使っていきたかったなあ、と。

〔二十一話〕 少年と烏（前書き）

人外のもものと戦う少年。

戦い続けるその意味を、少年は理解しているのだろうか。
闇に潜む烏を見据え、少年はただ刃を掲げる。

〔二十一話〕 少年と鳥

敵の襲撃もなく、何の障害もないまま目的地にたどり着いた真紅は叶から預かっていたキーで鍵を開け、室内へともぐりこんだ。人の気配を感じないことから、真紅の目的が察知された様子もそれどころか侵入を発見された様子もない。

さつき出会った侵入者がナイトメアの注意を逸らしてくれているのか、それとも思っていた以上に警備がずばらだったのか。どちらにせよ真紅にとってはどうでもよいことだった。

「それで？ どの辺に設置すればいいんだ？」

『そうね、仕事机があればその周辺に。ばれないようにカモフラージュしてくれればいいわ』

「わかった……設置した、これでどうだ？」

『待って……オッケー、何か話してみてる？』

机の影に括りつけるように盗聴器を設置し、適当に、だが小さく声を上げてみる。

『うん、感度良好。問題ないみたい。これ以上そこにいる必要はないわ、帰ってきて』

「わかった。脱出ルートは最初そのまま……」

言いかけて、ふと脳裏にあの侵入者の声がよぎった。

喉元に何かが突き刺さっているような不快感。

何だというのだ、いったい。

「……叶、ジャミングが切れるまで、あと何分ある？」

『え？ えっと、二十分くらいは……』

「十分だ」

それだけあれば、まだ。

真紅にもやれることが残っているから。

それは喻えるなら、巨大な蛇だった。

不規則にうねる太い胴体と、獲物を引き千切らんとする凶悪な意志。回転を効かせ、防御の上からも骨に響いてくる衝撃はどんな斬撃よりも強力なものだろう。

力では、圧倒的に負けている。

「ふふふ、ふふ……はははははははははは……！」

「ちい！ まるつきり悪役だな」

弾くことすら出来ず、少年は後方へ退かざるを得ない。右腕に訪れる鈍い痛みは筋肉の悲鳴か、はたまた強者と出会えた喜びか。

少なくとも今は、戦うことしか出来ない。

「悪役……いい響きです」

「どっかズレてやがるな、こいつ」

鞘に納めたまま防御に徹していたが、その鞘にもヒビが入っていた。

力の分析は出来た。あとはその力に正面からぶつかって、どこまで楽しめるのか。

少年は雪色の柄を握り、足を止めた。

「どうしました？ 逃げ回るのは終わりですか？」

「そうだな……ここからは本気で相手してやるよ」

目線と水平に、日本刀を掲げる。右手は柄に、左手は鞘に添えて。

全身の力を均等に抜いて、少年は自身の相棒に語りかける。

勝てるよな？ 相棒。

心で思っただけで、しかし相棒は答えを返してくれる。

当然だ、と。

少年は口元に冷笑を浮かべ、告げた。

「手加減は出来ないぞ。なあ、不知火！」

日本刀を抜き、少年は駆けた。

空気を切り裂きながら迫る鞭を紙一重でかわし、距離を詰める。烏丸が接近に気づくよりも速く、左手の鞘で鞭を弾き、右手の刃をその喉笛へ突き立てる。

寸前で体制をひねり、その刃をかくぐった烏丸を、少年はなおも追撃する。片足で鞭を蹴り飛ばし、その反動を利用しての斬撃。真横に伸びる三日月を描くように打ち出されるそれは、今度こそ烏丸の喉を打ち払ったように見えた。

「くく……ははははは！」

しかし、その一撃すら完全に封じられた。

弾き飛ばしたはずの鞭を自分の後方から回しこんで、首筋に巻きつけるようにして防御に回していた。そんなことをすれば斬撃の衝撃を殺しきれず、背骨と首の骨を折ってしまうだろうに、それでも烏丸は何事もなかったかのように笑っていた。

「速いですね、私以上ですか。くく……本当に面白い！ これなら健三や新と戦う時と同じ快感が味わえそうです！」

拳げられる名が何物なのかは知らない。そんなことを気にする余裕もない。

「では……今度はこちらの番です！」

身構える隙すら与えずに、烏丸の攻勢が始まる。

瞬時に後方へ飛びのこうとしたが、少年の日本刀は無意識のうちに自分の背後へと向いていた。真後ろから迫っていたのは丸太のように太い鞭の一撃。身をひねり、その一撃を防いだのはよかったが空中だったために踏ん張れず、そのまま数メートル吹っ飛ばされる。

「があー！」

喉から漏れ出した息は痛みを伴って、体の芯に響いた衝撃を外へと吐き出すように。

鞭の追撃から逃れるために少年は衝撃を殺さず、さらに後ろへと跳んでいく。

「ち……反則級だな」

一撃の重さも、速さも、繰り出された角度も、全てが反則と言ってもいい。

死角からどころか、完全に真後ろからの攻撃。しかもどんな打撃よりも重く、鋭いときた。少年の勘がもう少し鈍かったなら今の一撃で全てが終わっていたことだろう。

「仕留めにいったのです。それを完全に受け止められては、私も正直自信を損なってしまうです」

「そのわりに……口元の笑みが消えてないんじゃないか？」

「ふふ……それは、楽しいですから。今まで戦ってきた相手の中でも五指に入る面白さです」

「それは、貶されてるんだか褒められてるんだか」

こみ上げてくる嘔吐感を無理やり押し込めて、少年はもう一度刀を構えなおす。

しかし少年が思っていた以上に被害は深刻だったらしく、少年はその場に片膝をつき、大きな咳を吐いた。

「やばっ、油断してた」

言葉とは裏腹に、少年の声音は深刻そのものだ。

咳の原因は決して今の一撃ではない。

「くそ……まだ何もしてないはずだぞ……どうして」

言ってみれば、過度の戦闘による力の喪失。

筋肉や精神力などという類ではない。いってみれば生命力。

体内のそれを振り絞って戦う彼にとって、戦い続けることにはそれ相応の生命力が必要になっていた。

そして何より、彼の本当の戦い方に重要なものだ。

「ふふ……この場所を侮りすぎていましたね。あなたのような人の力を反転させる効果があるのですよ、ここには」

「なん……だと？」

「あなたとの手合わせが楽しかったのは事実ですが、私にもなさねばならないことがあります。卑怯だとは思いましたが、これもここに忍び込んだあなたが悪いのです」

膝をついた少年の眼前に烏丸は立ちはだかる。視界にもやがかかっている今、少年には戦い続ける力など残されていなかった。

「しかし、面白い。私たちのような人工的な力ではない、超自然的な力。まさかこんな少年がそんなものを所持していようとは。形が違えば、拷問してみたかった」

闇の中でも浮き上がっている、恍惚とした笑顔。その表情、言葉、放つ気配、全てがこの男の異常性を証明するものだ。

こんなところで、死ぬのか。

ただの道楽で手伝いを申し出た情報屋。大切な人の静止すら聞かずに、師匠の忠告すら無視した結果が、こんな結末。

もともとまともな最期など期待していなかったが、これはまた、最悪といっても過言ではないかもしれない。

自然と口元に笑みがこぼれた。

「笑い話にも、ならないな」

「なに？」

「こんな、人外のもんに殺される最期なんて……望んじゃいねえん

だよ！」

目の前のもやが、一瞬にして掻き消えた。

それは怒り。目の前の男へ、そして自分の不甲斐なさへ。

生命力なんていくらでもくれてやる。そんなもの、精神力でカバ
ーすればいい。

歩み寄っていた男の首めがけて、日本刀を片手で振る。その危険
性に気づいて烏丸は一步後退する。

「どこに、そんな力が！」

精神力、と正面から言つてのけるのも躊躇われ、少年は追撃する
形でその問に応えた。

鞭のもつとも有用な戦い方は中距離、遠距離からの牽制だ。懐に
入られてしまえば鞭特有のしなり、破壊力が損なわれる。距離を詰
めるまでが大変な相手だったが、その相手側が近づいてきてくれた
というのならば好都合だ。

しなる直前の鞭を片手でつかみ、日本刀の刃をそれに押し付ける。
鋼鉄で織られてでもいるのか、硬い感触と冷たい表面が少年の手の
ひらを刺激するが、かまわず刃を引いた。

鞭はあっさりと両断され、本来の三分の一にも満たない長さこそ
の姿を変えてしまった。最大の武器である長さを失った鞭に、もう
脅威は残されていない。

「終わりだ、烏丸！」

さらに後退するその身を追って、少年は刃を突き入れる。

今度こそ、喉元に刃を突き立てたはずだった。

刃が喉を貫通し、骨を真っ二つにし、相手の生命を終わらせる。その行為そのものには、既に躊躇いはなかった。

だから、刃に迷いはなかったはずだ。

「ふふ、あはははははははは！」

しかし響き渡ったのは生命が終わった気分の悪い音ではなく、気分が悪くなりそうな高笑いだけ。

その事実を目の前に叩きつけられたとき、少年は我が目を疑った。

烏丸の、刃をつきたてたその場所には銀色の首輪のような物体がある。しかしそれは首輪と言うにはあまりにも禍々しく、血で変色した部分や、棘のように尖った部分が存在している。

少年の脳裏にその言葉が浮かんでいた。

拷問器具。

「ひゃははははははは！」

呆けている間に視界の端で鞭の先端が迫る。一足飛びに後退したものの、その奇妙な事実には未だ脳は呆けたままで、少年はただ烏丸を見つめているだけだった。

「くく……おかしいですか？　おかしいですよ？　自分の首に拷問器具を取り付け、血を流しながらも戦い続ける。くく……なんと滑稽だ。私自身そう思いますよ。ですがね、私は……わたしはああ！」

狂ったような瞳を& a m p ; # 2 1 0 8 5 ; いて、烏丸は鞭を片手に突っ込んでくる。その加速は獣並み。体制も低く、動きは鋭敏。両手で刀を持ち、防御に徹するが、近距離から放たれた鞭の一撃は防御の上からでも少年の両腕を痺れさせる。

「私の！　私が！　私に！」

「この……！　いきなり何を！」

「死んで！　死んでください！　私のために！　私が私でいるために！」

さっきまでとは違う意味で狂った瞳、狂った言葉、狂った笑い声。少年が戦慄を覚えるほどの異常は、その攻撃力にも付随するものがあった。

短くなったはずの鞭から繰り出される打撃は長かったときと変わらず、むしろそれ以上の破壊力をもっている。

少年の防御にも限界が訪れる。

痺れきった腕の中から愛刀が零れ落ちる。しまった、と体勢を立て直すよりも早く、少年の目の前に巨大な鞭が迫っていた。

防御のための手段も、回避の手段も残されてはいない。

だが、死ななかった。

「 なっ? 」

少年と烏丸の間に入って、その一撃を防御した者がいた。

闇の中に浮き上がるような白い刃。手のひらの中には血に染めたような真っ赤な柄。

それはさつき、少年と対峙したものの刃。

「 ……何だ、押されてるじゃないか 」

嘲るでもなく、感情のこもっていないような声が少年の耳に去来する。

少年は場違いにも、何かヒーローみただなど、暢気なことを考えていたのだった。

〔二十一話〕 少年と烏（後書き）

お久しぶり（？）です。

すごく更新が遅れてしまいましたが、ご了承ください。

今回は珍しく戦闘メインのお話だったのですが、いやぁ自分の力のなさを痛感しました。

さて二十話を突破してしまったわけですが、まだまだまだまだ続いていきますよ。

……がんばろお。

〔二十二話〕 闇の中の遭遇（蒼き騎士）（前書き）

蒼い、槍。

漆黒の中でも浮き上がるその凶器は、少年の狂気を駆り立てる。

〔二十二話〕 闇の中の遭遇（蒼き騎士）

嫌な予感は的中していた。

さっきの声の主が気になって戻ってきてみれば、ちょうど窮地に陥っていた。半ば反射的に体が動いてしまったものの、助けたことに後悔はなく、目の前の敵に遭遇したことに後悔はなかった。

むしろ肩透かしを食らっていたのだ。せつかく企業に潜入したものを、誰一人として敵が現れない。それでは自分の力がどこまで通用するものなのかわからない。

巨大な丸太を叩きつけられたような衝撃を刀の上から感じつつ、真紅は刀を一閃し、その敵を後方へと突き飛ばした。

「お前……どうして」

「なんとなく、だ」

本当にただの勘だった。

こっちに向かえばさっきの相手がいる。あっちに向かえば戦える。

その感覚が真紅の足をこの場所まで連れてきたのだ。

「くく……きゃははははは！ また、また獲物がきたあ！」

「……何だあれ？」

「いきなりああなったんだ。最初はまともなやつだった」

苦しそうに息を吐いているのは少年だった。声の質からそんな気

はしていたが、体格などを見て確信した。顔は暗闇のせいで見えな
い。

「動けるか？」

「もちろん……… ったく、右手がいったかもしれないな」

そう愚痴りながら転がってる日本刀を左手で拾い上げ、少年は真
紅と肩を並べるように構えた。

何一つ打ち合わせをしたわけでも、それどころかまともな知り合
いではない。だというのにここまで息の合った動きが出来るとは、
真紅だけではなく少年もまた驚きだったのではないだろうか。

二本の刃を向けられても、目の前のナイトメアは奇妙な笑い声を
上げながら、短い鞭を片手で振り回している。その姿からは中級の
ナイトメア程度ではないかという印象を与えられるが、さっきの衝
撃はその程度のものと言い切ることが出来る衝撃ではなかった。

おそらくは、叶が言っていた十一人の中の一人だろう。

耳元の機器のスイッチをオンにして、声を投げる。

「おい、ナイトメアの中で鞭を使うやつって、いるか？」

声を投げるものの、応える声はない。

おかしいなと首をかしげながらも、目の前の男から放たれる攻撃
を二人同時に回避し、真紅は敵の左へ、少年は右へと移動した。

とりあえずは倒すしかない。刀を正眼に構え、真紅は相手の武器に注意を向けた。

「仕留めるなら、ここで……」

ここで上級兵を倒しておけば今後の戦いに少しの余裕が生まれるだろう。戦力を削ぐ面ではこの上ないチャンスともいえる。

『……しん……にげ……！　そこ……なな……！』

スイッチを入れたままだった機器から、声が漏れ出す。

それが注意を促すものだと気づくよりも早く、現れたその敵に真紅の瞳は完全に奪われていた。

「……き、さま……！」

闇の中でも浮き上がってくるような蒼穹の槍。刃が水のように透明で、装飾が施された美麗の槍はかつて

かつて、鍊を殺した男のもの。

鞭の男をかばうように現れたその敵は、少年の方向へは目もくれず、じっと真紅の方向へと殺気を向けている。

真紅は鞭の男など目もくれず、その槍へ向かって突進した。

「なっ！ おい！」

「そっちは任せた！」

少年の動揺したような声を背中に浴びながら、真紅は刀を鞘に納めながらその男へ向かって駆けてゆく。

相手の槍、その間合いに入るか入らないかというギリギリの場所まで駆けると、真紅はそこで急停止をかけ、刀の柄に手を添える。

右足を少し前に出し、左手で鞘をしつかりと押さえ、体制を低く保つ。

決めるのなら、一瞬で。

さらに一步、前に踏み出した真紅の鼻先に、槍の鋭い矛先が迫る。しかしそれを紙一重でかわし、刀を力いっぱい引き抜いた。

一陣の風を纏った刃は蒼の槍と衝突する。互いにその衝撃に押し返され、数歩後退し、しかしそれでも体勢だけは崩すことなく敵の得物を注視していた。

「……久しぶり、と言っべきなのかな？」

「お前なんかと……会った覚えはないんだがな」

そんな見え透いた嘘に騙される相手ではないだろうが、それでも真紅はそうやって嘘をつくしかなかった。

どれだけ怒っていたとしても、真紅個人を特定されるわけにはいかない。幸いにも暗闇のおかげで真紅の顔も、相手の顔も見ることが出来なかった。

それすら理解しているのか、槍を携えた男は鼻で笑い、頭上で槍を一閃した。

風圧にやられたのか、周りの闇からガラスが割れたような音が響き渡る。

「……これで盗聴器のような無粋なものは無くなった。改めて、久しぶりだな、朝風 真紅」

「……氷室……七夜」

刀をもう一度納め、腰を落とす。切っ先が鞘先端に当たる直前の場所で止め、自身が持つ最大の力を手と足の指先に集中させる。

「覚えていた……いや、名乗ってはいないはずだから誰かに聞いたか。まあ誰から聞いたかなんて無粋なことは聞かない。あの時の子供がこんなに成長しているなんてね。俺も年をとったなあ」

「……長々と話をするつもりは無いんだがな」

「まあまあ、そう慌てるなつて。こつちは久しぶりに槍を握るんだ。少しくらい感覚を取り戻す時間をくれたっていいだろ？」

久しぶりだと七夜は言うが、真紅の攻勢をしのいだ正確な槍捌きと身のこなしは鈍っている人間の動きではなかった。それがナイトメアの特徴なのだと言われればそこまでののだが、真紅は警戒心を強めつつ、七夜の言葉に耳を傾けた。

「ここであつたがなんとやら、ってやつだな。七年前の借りを返させてもらつよ」

「借りがあるのはこっちのほうだ。鍊さんの仇、とらせてもらつ」

真紅の言葉にしかし、七夜は動揺したような声を上げた。

「へえ……既に取った仇を、もう一度取るうって言うのかい？ いや、そうか……君は忘れてるんだね。大切なことを」

「なにを……言つて……」

「はは……わからないならそれでいい。今の俺たちには戦うことしか出来ないだろう？」

その言葉を皮切りに、七夜の攻勢が始まった。

漆黒の中を駆ける三本の筋。それが槍の軌道だと脳が気づくよりも早く、その中の二本を鞘と刀身で受け止め、最初から当たる気配が無かった一本を放置する。しかし二本を防いだ直後、最後の一本が急速に軌道を変え、真紅の鼻先に迫る。体をひねり、鞘を落としながら何とか避けたものの、さらに迫りくる槍の一閃に、たまらず後方へと退いた。

確かに槍の動きは見る事が出来る。しかし見るごとと防ぐことでは難易度が違いすぎた。

攻勢に回る隙すら、見当たらない。

セカンドナンバー、氷室 七夜。数秒間対峙してただけなのに、真紅は気づかぬうちに肩で息をするほどの消耗を余儀なくされてい

た。

「やるね、今のを凌ぎきるなんて」

「はあ……はあ……この、なんて速さだよ」

「でも君の力はその程度じゃないだろ？」

さっきから真紅の理解できないことを七夜は言う。

借りがある？ その程度じゃない？

そんなものありはしない。これが真紅の実力だ。

そう、自分の心に言い聞かせる。

そうだ、言い聞かせている。

それが真実なのだ。真紅の知るこの”記憶”だけが、真実なのだ。

「はは……滑稽だね、朝凧。真実から目を背けるのか？」

「さっきからごちゃごちゃと、五月蠅いんだよ」

刀を正眼に構えなおし、七夜の槍だけに注意を向ける。丁寧に手入れされているであろうそのダイヤモンド形の矛先は、闇の中で奇妙な光を放っている。

それは真紅の刀も同じことで、何に反射しているわけでもないのにうつすらとした光を放っていた。

「確かに、おしゃべりが過ぎたな」

槍と刀ならばリーチの差で槍のほうが有利。さらにあの速さで槍を放たれては対抗のしようが無い。ならば

ならば逆転のチャンスは、一瞬だけ。

七夜の槍が地面すれすれまで低くなる。足元から突き上げるような攻撃か、さっきのように途中から変化する攻撃か。どちらにせよ、真紅が狙うのはただ一瞬だけ。

蒼い槍が、駆ける。

突き上げるように向かってくる牙。闇の中で、直視することも難しいその攻撃を、真紅はしかし、待っていた。

槍が真紅の瞳を抉る、その瞬間。真紅は半身を引き、七夜に体の左側面を向けるようにその攻撃を回避、同時に左足をねじ込み、七夜の胴体に鋭い蹴りを見舞った。

細く息を吐いて体制を崩す七夜に、なおも追撃を加えようとする。刀を片手で振り上げ、七夜の頭蓋を両断する勢いで落とす。しかし一瞬遅く、七夜は転がるように真紅の間合いから逃れ、立ち上がると同時に後退した。

「……なかなか、だね。でもどうやら時間切れかな」

七夜の声を待っていたのか、真紅の後ろで獣の咆哮のような、太い叫び声が上がった。瞬時にその場を退くと、太い鞭を尻尾のように引きずりながら、もう一人のナイトメアが七夜の前に疾走する。

味方のはずだ。そう思っていたのだが、その激しすぎる疾走は七夜の前で止まれるような生易しいものではなかった。

「悪いが、決着はまた次の機会に。今はこいつを静めなければならぬからな」

七夜の槍が獣の牙とぶつかった。その勢いに押され、七夜の気配が闇の奥底へと消えていく。

「また戦おうね。はははは……」

闇の中に消えていった意味のわからない笑い声。半ば呆然としながらも真紅は刀を納め、すっかり忘れていたもう一人の侵入者へと駆け寄った。

「おい。大丈夫か？」

「……なんとかな。本物のライオン相手にしたほうがよっぽどましだった気がするが」

日本刀を納めた少年は、片膝をついて荒い息を整えていたが、すぐに立ち上がり真紅に背を向けた。

「そろそろここを脱出する。俺はあっちに準備してあるけど、お前は？」

「ああ。こつちも脱出経路は確保してある」
「そうか。それじゃあ、今度こそお別れだ。またいつか会える日を、楽しみにしてる」

相当消耗していたと思っていたが、なかなか余裕があるようだ。

真紅は少年に背を向け、安全に脱出するため走り出す。

今はただ、全てのことを忘れ、走るだけだった。

〔二十二話〕 闇の中の遭遇（蒼き騎士）（後書き）

やばい……なんかもう全てがやばい。

一週間近く放置していたような気がしますが、ご了承ください。
テストが近いんです、ホント……。

まあテストのことは置いておいて、真紅対七夜。闇の中っていう状況から武器の色なんかわかんねえだろ、と思うかもしれませんが、仕様です。

長々と駄文を書き綴っても仕方が無いので今回はこの辺で。次回更新はたぶんテストが明けてからになると思います。まあ早まるかもしれませんが、それでは、また。

〔二十三話〕 始動（前書き）

雪の舞うその空に、鮮やかに降り注ぐ朱の花。
二つのイロが交じり合い、停滞していた物語は回りだす。

〔二十三話〕 始動

刀を振るい、仇敵と打ち合った夜が明け、真紅は何事も無かったような学園へと足を運んでいた。

しかし授業を受けるつもりなどさらさらなく、朝は空たちにも顔を見せず、登校したその足で科学準備室へと向かっていた。

「叶。昨日の件で話がある」

言いながら室内へ入るとそこには白衣を羽織った女教師が佇んでいて、真紅が来るのを予期していたかのように鋭く瞳を細めていた。

その表情からはいつものような余裕がまったく出ていなくて、まるで別人のような印象を真紅に与えている。

それは、そう。真紅と叶が初めて対峙したときのような、冷酷な雰囲気。

叶は真紅に向けて細く溜め息を吐き出し、ぼつりと一言、言葉を吐いた。

「やられたわ」

それが何に対する”やられた”なのか、真紅にはよくわからない。その考えが伝わったのか、叶はさらに溜め息を吐き、白衣のポケットから小型盗聴器を取り出した。

「ジャミング機能の弱点をつかれて、盗聴器が発見されたみたいな

の

「なっ……！ それは……」

「発見者はおそらく、高嶺 莊介。発信先を何重にも細工して隠しているから簡単にはこっちが見つかることは無いだろうけど、彼ならばあるいは、私たちにたどり着くかもしれない」

最悪の展開と言ってもいい。叶の技量がどれほどのものかはわからないが、相手が強大な企業であるのならば、個人の力など霞んでしまう。

「だが、まだ特定されたわけではないだろ？ 少しでも妨害が出来れば、それまでに体勢を立て直す」

「立て直すって……どうするつもりなの？ 直接戦うなんて論外。昨日でわかったでしょ？ 七夜の槍はあなたの反射速度でも追いつくのがやっと。反撃に回るなんてできない。あいつを倒せないようじゃ、どうにもならないわ」

確かに真紅一人ではどうにもならないだろう。空や愛美たちを危険にさらすわけにもいかない。あの二人は戦えるといっても、せいぜい中級のナイトメアを相手にするのが精一杯。そうやってしまえば、真紅と叶、二人だけで十人近くのナイトメアを相手にするのは無謀だ。

だが真紅には微かにだが、希望が見えていた。

「あて”がある。少し……そうだな、一週間ほどあれば何とかなると思うんだ」

「……一週間……それくらいなら何もなくなっただって発見されることはないと思うけど……」

「なら、大丈夫。悪いが今日は授業をサボる。適当な理由を考えて、

「適当に空たちにも伝えておいてくれ」

それだけ言って真紅はドアを開け、科学準備室を後にする。

最後に何か言いたそうな叶の表情が気になったが、しかしこんなところで油を売っている時間はない。

教室によらず、荷物を持っていてよかったと的外れなことを考えながら、真紅はどこから向かおうか思案するのだった。

教室について愛美や京と雑談していると、真紅が来ないまま叶がやってきて、今日は朝風くんが欠席ですなどという、空としては看過できないことを言っただけだ。

朝から屋敷のどこを探しても見当たらず、使用人の一人が「先に行きましたよ」と教えてくれなければ遅刻していた。その使用人は真紅が屋敷にいる間世話をさせているメイドだったのだが、彼女の話では帰ってきたのも夜中の四時か五時、すでに空が白くなりかけていた頃だという。

その話を聞く以前から、胸騒ぎはしていたのだ。

真紅が自分に何も言わず、大切なことを隠しているような違和感。昨日は二日酔いで動けなかったが、今ならばその違和感が確かなものであることを実感できる。

きつと真紅は一人で

ならば自分はこんなところでのうのと授業に出て、無駄な時間を過ごすわけにはいかない。

「叶ちゃ〜ん！ 腹痛いから早退する」

「う〜ん……却下」

語尾に音符でもつきそうなほど綺麗な笑顔だが、真紅のためにもその笑顔を歪めようと、早退を押し切らなければいけない。

「いやあ、我慢できる痛みじゃないんですよ。盲腸？ みたいな刺すような痛みで……」

「……そこまで言うのなら、私が一緒に保健室まで行きますから、保険の先生が良いと言ったら帰ってもいいですよ」

諭すような口ぶりだが、どこかいつもの、ほんわかと抜けている彼女とは違う何かがあるように思えた。その違和感を払拭する時間すらないまま、叶はホームルームを終わらせ、空に向かって手招きをよこした。

仕方なく空は叶の背に従い、保健室へ向かうべく席を立った。

いざとなればさまざまな手段をとって仮病を本当の病気にしてしまえばいい。若干の痛みを伴うかもしれないが、かまっている時間すら惜しい。

保健室に向かうものだとばかり思っていたが、叶の足はそのまま

昇降口へと向かい、空の下駄箱の前で停止した。

「……朝倉先生？」

気づかぬうちに、空は彼女に警戒心を抱いていた。

それは数日前、真紅が彼女に呼び出されたその時から続いているものだった。

たとえるならばナイトメアと対峙しているような、緊張感。普段、授業を行ったりホームルームにやってくるときはそれほどでもないのだが、今のような寡黙で、冷たい雰囲気は彼女の学園内で持たれている印象とは似ても似つかないものだ。

「……真紅はさっさとどこかにいなくなったわ。探したいなら急ぎなさい」

「あんだ、いったい……」

「質問している時間があるの？ あの子が何をやるつもりしているのか、私も少し気になっているの。だから聞いてきて。私のことは真紅に聞けばいいわ」

何を考えているのかいまいち掴めないが、この申し出はありがたい。つまり彼女は空の早退を黙認してくれると言っただけ。手間が省ける。

軽く頭を下げ下駄箱から自分の靴を取り出す。叶はその姿を見つめているだけだったが、思い出したように手を叩き、空に向けて艶のある笑顔を浮かべた。

「そつだ、伝えておいてくれない？ 今度からはもう少し詳細を言

つてから行動してつて」
「忘れなかつたら伝えておきますよ」

真紅と叶の関係が気になったが、気にする必要すらないことに気づいて首を振る。

今はただ、真紅の行方を捜すために。空はただ、走り出す。

苺野屋の暖簾をくぐり、アスファルトの地面を踏みしめて真紅は小さく息を吐いた。

学園を後にしたその足で苺野屋へと向かった真紅は、信介に協力を仰ぎ、さっさと承諾させてから軽く打ち合わせを行っていた。

元々信介は真紅の護衛、および食事全般の作業を行っていた。しかし一方で、さまざまな裏の事情に精通している人物でもある。

彼の昔作ったパイプを利用してある人物を調べさせるため、信介を頼らざるを得なかった。

名前や顔立ちなどはまったくわからない。わかることは純白の日本刀を持ち、常人では考えられないほどの運動神経をほこっていたこと。体格は真紅と同じくらい。男性。

その少ない情報からでも個人を特定できるものか、真紅は少し不安だった。しかし信介はというと

「え？ そんなに情報あるんですか？」

と、軽い口調で言っただけだ。

特定できしだい真紅に報告するよう、ほとんど使わない携帯の番号を覚えておいて、ようやく荻野屋にきた用事を終わらせたのだが、信介の気遣い、というよりはお節介のおかげで和菓子を馳走になり、今に至る。

予期せぬ事態で既に正午を回っていたが、昼食を取る気分にはならない。

人に任せているだけで、自分が動かないなどという選択は真紅の中には存在しない。

誰かを動かすならば、自分が率先して動くべきだというのが真紅の持論だった。

青空、というには少し雲が多い気がする昼下がり。制服でいるのは少し目立つ。

だから、その少年たちに気づくことができたのかもしれない。

自分とは違う制服。しかしその胸元にはしつかりと”神凧学園”のバッチがついている。空に聞いた話だが神凧学園には二つの学科があるらしい。自分たちとは違い、学問、運動どちらかに秀でた生徒たちのクラス。それが目の前にいる学生であるという事実が、だが真紅には受け入れることが出来なかった。

「やあ、こんな時間にこんな場所で……君も学園をサボったクチかな？」

一人は制服を着崩し、目元までかかる髪を邪魔くさそうに弄りながらも、真紅に向けて笑みを浮かべている。もう一人の少年はその少年の背後に佇んでいて、中世的な顔立ちをしている。

手前の少年は確かに簡単にサボりそうだが、後ろの少年はとてもサボるような人間には見えない。

だが真紅はその二人に妙な違和感を覚えていた。

どこかが、”違う”。

雰囲気、というには生易しい。彼らが目の前に存在しているだけで、真紅の心の中にいる血に飢えた獣が、殺したいと叫びだす。

「……お前ら、誰だ？」

「ん？ おっと、自己紹介がまだだったな。俺は朝倉 天一、こっちの女々しいやつが若元 康」

「おい、女々しいって何だよ？」

「中性的って意味」

「絶対嘘だろ!？」

二人の少年、天一と康はコントのようなやり取りを繰り返しつつ、真紅から視線を逸らそうとはしない。観察している、というわけではなく、真紅がどういう行動に出るのか、それによって何をなそうとするのかを見守っているようだった。

腰に手を添える。しかし刀を持っているはずもなく、相手も武器

を携えてはいない。

戦う必要性は感じられない。だが

手前の少年からは、初対面とは思えない何かを感じられた。

「そう身構えるなよ”朝凧 真紅”くん」

「っ!?! なぜ、俺の名前を」

「情報屋にかかれればこの程度。まあ昨日のやつがそいつだってわかった意外は、何一つわかっていないんだけどな。ったく、どんな人生送ってるんだよ、お前は」

半ば予想していたが、真紅は天一から視線が逸らせなかった。

昨日の戦いでは意識しなくても連携が取れていた、不思議な男。元々は敵同然の出会いだったはずなのに、どうしても敵対関係とは思えなかった。

同類、といってもいいかもしれない。

「……普通じゃないかな？」

「ぜってえに普通じゃないな」

互いに自然と笑みが浮かぶ。初対面なのに長年連れ添った夫婦のような、なんとも言いがたいが心地よい感覚が真紅の心に安らぎを与えていた。

「いろいろと無駄になったかも、な」

「何だよ？ 俺のことを探してたのか？」

「……何でもお見通しのような」

信介に頼んだことすら知っていたのかもしれない。裏に精通している人物は、情報を仕入れる代わりに、そこそこの知名度も付きまとうという。

しかしこの町は企業の本社があった都市とは少し離れている。それでもこの町を特定できるというのは、彼らの情報屋が力を持っている証明になっているのかもしれない。

「まあ、そこは勘なんだけど」

「勘かよ!？」

「いやあ、言ってみるもんだね」

「……何なんだお前は」

頭痛を覚えつつ、しかし真紅はこの出会いに感謝するのだった。

〔二十三話〕 始動（後書き）

……燃えた、燃え尽きた……。

どうも、更新が遅れてすいません。でもまあ、今回は理由がありまして……。

テストだったんですよ、大学の。

結果は

落ち込んでてもしょうがないですよね 来年またがんばろう

さてようやく出会いました天一。主人公を軽々と抜き去るキャラです。正直に言いますと、作者の愛情を一心に受けているキャラではないかと……。

兎にも角にもこれからは準備期間。やっと回り始めた物語にご期待ください。

ではでは、また。

〔二十四話〕 七夜と荘介（前書き）

それは敵となった二人の、短い安息の日々。

〔二十四話〕 七夜と荘介

両腕を鎖につながれ、両足を拘束され、本来ならば完全に動きを封じられているはずの状況。だというのにその男は眼前に存在する全ての生物に向けて狂気の瞳を投げかけ、牙を& amp;#21085;いてる。

「珍しいな。一日たっても治らないとは、よほど切羽詰っていたのか？」

「わかりませんよ。俺が駆けつけたときには既にこんな状態でしたし、殺されかけた、程度ではこんな風にはならないでしょうし」

拘束される仲間をガラス越しに見据えて二人の男はさも日常会話ですと言いたげに、平然と会話を続けている。

一人は昨夜の戦闘そのままに、槍を肩にかけ、牙や爪の擦り傷が生々しい。後ろに流した長髪が所々血に染まっているが、その男のものではなく、今拘束されている男のもの。

もう一人は支給されたサングラスを完全に無視し、銀縁の眼鏡をかけ、外人のように整った顔をしている。スーツと体格のおかげでかろうじて男だと判断できるが、髪を伸ばし、にこやかに笑っているだけならば間違いなく女に見られることあるう。

自分よりも階級が上の男に向け、微妙な敬語を使いながら七夜は

「何日か拘束していれば問題ないでしょう。いつものようにケロッと復活すると思いますが」

「そうだな。ならこのまま放置する」

酷い、とは思わない。七夜もその男と同じ意見だったし、何より自分自身の体も限界を迎えていた。

序列はたった二つしか変わらない。七夜とガラス越しの男、烏丸聡司に力の差はほとんどないといってもよかった。

二二という数字を背負ってはいるが、七夜の実力は組織内でも三番より下だった。三番の健三が『かつたるい』ということで七夜が二番を背負ってる。それでも実戦での力は四番を軽く凌駕していると思っていた。

その考え自体、甘かったのだと痛感している。

昨夜、狂った聡司を止めるために七夜は本気で槍を振るわねばならなかった。真紅を退けたその槍裁きも獣のそれを使う聡司の前には、ただの目くらましにしかない。

辛勝とっていいほど消耗している今、それ以外のことを考えている余裕はない。

「お前も早く休め、七夜。かなり疲れているだろう？」

「……わかりますか？」

「そんな弱々しいお前はお前じゃないからな」

鼻を鳴らし、視線を逸らす彼を見ると、なんとなく照れているのかと納得できる。冷酷であらねばならない組織のトップだが、こう

いったところは普通の人間に近いのではないかと、七夜は小さく笑みをこぼしていた。

好意に甘え、退室した七夜はそのままエレベーターを利用して上に戻り、とある部屋へと向かった。

3201号室。高嶺 莊介の仕事部屋。

昨夜の侵入者が何の目的で本部に乗り込んできたのかは、おおよそ見当はついている。自分たちとの直接対決を前に、少しでも情報を仕入れたいということだろう。であるならば彼の狙いは”高嶺”で間違いないと七夜は確信していた。

元々は違ったが、今、企業内で最もナイトメアに精通している人物はこの高嶺 莊介で間違いない。その情報は昨今の情報社会において周知のものといってもいい。ならばこそナイトメアの情報を仕入れるためにこの部屋に何か細工を施したか、あるいは情報を引き出した、二通りの状況が予想できた。

「あ……七夜さま」

ノックに出てきたのは女性物の紺色のスーツを纏い、ウエーブのかかった黒い髪を肩ほどまで伸ばした秘書の女性だった。化粧は控えめだが、元は悪くない。

「失礼。高嶺 莊介氏は在室かな？」

秘書の出迎えに恭しく頭をたれると、彼女は恥ずかしそうにやめてくださいというたえ、七夜はただその姿に笑みを漏らす。それが悪戯の範疇だったことに気づいて、秘書は頬を膨らませていた。

「いらつしゃいますよ。今は奥で事務を行っています。お呼びしますか？」

「ん？ いや、入室の許可をもらえれば、中で話したい。いろいろと込み入った話になりそうなので」

「承知しました。では中へどうぞ」

顔見知りだからか意外とあっさり入室を許可され、七夜は応接室を抜け、荘介の仕事部屋の扉を叩いた。

個人の部屋だというのに、荘介の個室は三つに分かれている。一つは応接室、もう一つは秘書専用の仕事部屋。そしてもう一つが、余人の侵入を許さない荘介の仕事部屋だった。

七夜自身、荘介がどんな仕事をしているのか把握していない。ナイトメアに精通していることだけは知っているが、それ以外のほとんどが闇の中に隠されている人物だった。

「誰だ？」

「氷室です。少々お時間いただけないでしょうか？」

「……応接室で少し待て。すぐに行こう」

威厳のある声だが、それだけに七夜は笑いを堪えるのに必死だった。秘書にたしなめられるがどうしようもない。

応接室で一応の落ち着きを取り戻した七夜だったが、現れた荘介の姿に今度こそ吹き出してしまった。

「な、七夜さま……その反応は、流石に……」

「だ、だってよお、くく……荘介さん、相手が俺だからって、その

気の抜けようは何だよ？」

現れた荘介はスーツの上着を羽織ってこそいるが、頬には油が飛び散り、服の随所には奇妙なシミが出来上がっている。どこの工場に働いているのかと思うその姿は、どう見ても企業の重役ではなかった。

「仕方がないだろう？ 突然すぎるんだ、お前の来訪は。こっちの準備などまったく構いなしにやってくる」

四十を超えたはずの白髪頭はどっしりとソファに腰を落とし、秘書の用意した葉巻に火をつけ、大きく吸い込んだ。

「それで、何のようだ？ 昨夜の侵入者については一通りの報告を受けているが、さして問題はなかったと聞いている」

「まあ表向きの報告はそうさせてもらいました。それよりも、荘介さん、この部屋に異変はありませんでしたか？」

「異変？ これといって……いや、そういえばパソコンに覚えのない閲覧記録があったな」

「なるほど……やはり狙いはここだったか」

読みはあたった。情報というのもおそらくはナイトメア関係の資料だろう。荘介の権限ならばある程度の情報は仕入れられる。

「どうした？」

「……荘介さんならお話してもいいでしょう。ただこの件は内密にお願いします」

「彼女も駄目なのか？」

秘書を指しているのだろうと七夜は頷く。荘介もそれに従い、秘

書に退室を促し、彼女もそれに従って自室へと退いた。

「それで、どうしたんだ？」

「昨夜の侵入者、他の面子には知られていませんが」朝風 真紅
でした」

その名前を口にただけで、莊介の表情が一転する。苦虫をかみ殺したような苦しい表情。彼が朝風に負い目を感じていることを知らないわけでもなかったが、それでも今回はこの事実を知らせないわけにもいかなかった。

「あの太刀筋、構え、声。成長したといってもほとんど変わっていませんでしたね。いや、強くはなっていました」

「そうか……元気そうだったかね？」

「ピンピンしてましたよ。俺の突きをかわしたやつなんて何年ぶりでしょう」

それこそ最後にかわしたのも真紅だった気がする。

懐かしい太刀筋は子供の頃の、鋭く軽いものから少しだけ変わり、とても重たい斬撃となって七夜の腕を痺れさせた。あの戦い方で、かつての素早さを取り戻していたのならあるいは

鎌ですらたどり着けなかった場所まで、たどり着くのかもしれない。

不意に浮かぶ笑みをいぶかしみ、莊介が声をかける。しかしそんな声すら聞こえていない七夜には、ただもう一度、今度こそ万全の

状態で真紅と戦うことだけしか考えられない。

今度こそ。

今度こそ長年背負ってきた十字架を、下ろせる場所を見つけたんだ。

七夜はただ、童心に返ったかのような奇妙な高揚感を覚えつつ、再度まみえるときを心待ちにするのだった。

残っている雑務と再度の襲撃に備えるためと七夜が部屋を後にしてから、荘介はまた仕事部屋に戻り、目の前の機器を躍起になっ**ば**らしていた。

万年筆ほどの大きさで、ここまで精密な盗聴器は見たことがない。こんな精巧なものを作れるのならどんな細かな作業でも簡単にやっ**て**のけてしまうのではなからうか。

だが荘介はこれに似たような技術を持っている男に心当たりがあった。いや、正確には持っている男が、いた。

その男は六年ほど前に、二人のナイトメアを逃がすため命を落**し**た。

白羽や莊介にとっては、親友といってもいい存在。かつてはどうしてそこまでしてナイトメアなんかを逃がそうとしていたのか、理解に苦しんでいた。だがしかし今の莊介ならば彼の心がわかる気がした。

ナイトメア、たとえ作られた存在だったとしても彼らはしっかりと生きている。

人間として生活していくことだって出来るのだ。きっと彼は、ナイトメアに自由を与えたかったのだと、莊介は考えている。

この小型盗聴器を作ったのはおそらく、その際に逃げ出したナイトメアの少女だろう。今は成人しているだろうが、その若さでこれほどのものを作れるとは、俄かには信じがたい。

真紅がこれを設置したのならば、真紅とその少女が手を組んだと見て間違いない。その事実が莊介には少し嬉しかった。

盗聴器のことを七夜に伝えなかったのにはいくつか理由があった。一つはこれを七夜が利用し、真紅たちの居場所を突き止めてしまう危険性があるため。企業に反旗を翻すつもりはないが、真紅には少しでも長く、平和な世界で過ごして欲しかった。

もう一つの理由は、単純に莊介自身がこの小型盗聴器に興味があったからだだった。

昔から機械いぢりが好きだったが、最近はめつきり興味をそそのものを見る機会が減った。そこにこんな精密機械が転がってきたのだ、飢えた獣に生肉を放ったようなものである。

分解用の機器を使っている間に油塗れになったが、気にしない。子供のように輝いた瞳が、暗い部屋の中で奇妙な光を宿している。

今日はきつと他の仕事は手につかないだろう。そう判断していたため、秘書には最初から雑務を全て押し付けてある。少々人遣いが荒い気もするが、好奇心には勝ることもない。

「さて、と……続きといこうか」

彼の長い一日は、まだ始まったばかりだった。

〔二十四話〕 七夜と荘介（後書き）

珍しく二日連続の更新です。

いえね、今回は報告も兼ねての更新なのですよ。

祝・読者数千人とつぱああああ！！

ようやくかよ！ という突っ込みはなしの方向で。身内にも教えていないですし、宣伝もしていませんので広瀬にしてみれば快挙なのですよ。

昨日確認してからもう……執筆速度が上がる上がる〜。皆様今後ともよろしく願います。

さて一話開けてしまいましたが、次話は真紅と天一のやり取りです。

似たもの同士なのでどうやってアクセントをつけるべきか……。ともかく、がんばっていきますよ！

〔二十五話〕 共闘、そして（前書き）

回りだす。くるくる、くるくると。

微弱だった回転が歯車を得たことで、全体へとその動きを伝える
よじりだす。

歯車はあと、もう少し。

〔二十五話〕 共闘、そして

場所は戻って、苅野屋。

一日貸切ということで信介に話をつけ、座敷に団を取る。テーブルを挟んで天一と康が真紅の向かい側に座っているが、和菓子が来るまで誰一人として言葉を発する気配がない。

互いに警戒しているというわけでもなく、気まずいというわけでもない。ただ黙っているのが当然のような、奇妙な一体感が真紅たちの間に漂っている。

信介の巨体が小さな盆の上に三つの和菓子を載せてやってくる。相手が真紅の探していた人物だと理解しているのか、彼が貸切を提案してくれたのだった。

和菓子と温かいお茶を前に、三人はただ黙ってその味と風流に舌鼓を打った。

「……いい店だな。お前の関係者の店か？」

「ああ。昔世話になっていた人の店だ」

「そうか。和菓子にうるさい仲間がいるんだけど、今度つれてこようかな」

主に話をするのは真紅と天一。康は全てを見守るように、いや、むしろ我関せずと言いたげに茶を啜っているだけだった。見ようによっては和菓子に夢中になっているとも取ることができる。

信介は言葉こそ発しないものの、座敷の入り口に控え、じっと事

の成り行きを見守っている。

「さて、本題に入ろうか。昨日は助かった。危うく死にかけてたかならな」

「そうだったのか？ 一人でも十分やれたと思っっていたんだが」

「いやあ、あいつらよくわからない技術を使いやがる。一回追い詰められちゃってさ」

何事もなく言っただけのけるが、真紅にとっては驚愕の事実といってもよかつた。

対峙したあの時は誰かに押されるなどありえないほど重く、強烈な威圧感を放っていた。その相手が負けそうになるなどと、真紅の感覚から言わせれば”ありえない”ことの範疇だった。

「お前さんが何で俺を探していたのかは想像がつく。あの組織をぶっ潰すために力を借りたいんだらう？」

「そうだ。こつちの動向がばれた可能性がある。だから少しでも戦力をそろえておきたい」

「そういうことなら俺も力を……」

「こら、天」

簡単に承諾しようとした天一を、黙っていた康が止める。首をかしげる天一を見る限りでは、なぜ止められたのかまったく理解していない様子だ。

「恵理ちゃんが許可を出してくれると思うか？ ただでさえこつちに交換留学することを嫌がっていたんだぞ？ 変なことに関わっていると知られたら乗り込んできても止めるに決まってる」

「何で恵理の話が出てくるんだよ。あいつとは関係が……」

「ないって言えるかい？ 天のことだから恵理ちゃんが泣きついたら、あっさりと陥落されちゃいそうじゃないか」

言葉に詰まるその姿は、どうにも頼りない。出てきている名前は間違いない女のものだ。天一の彼女ということだろうかと考えてしまい、真紅は自分の邪推を振り払うように大きく首を振った。

しかし確かに大切な人が行動を止めてきたとしたら、はたして真紅ならば自分の意志を貫くことが出来るのだろうか。そんな存在がない真紅には到底理解できないことだったが、少しだけ羨ましくも思えてくる。

「え、恵理にはばれないように行動すればいいだろ？ それにあいつだって、正しいと思っただ行動ならかまわないって言ったじゃねえか。俺は自分の行動が正しいと思って行動してる。あいつだってわかってくれるさ」

「……本気で言ってる？」

「……ごめんなさい、嘘つきました。恵理さまが納得してくれるはずがありません」

その理恵という女の子がどれほど怖い存在なのか、天一の神妙な表情と必死で止める康の態度を見るとよくわかる。あれほど強い男が恐れおののく相手なのだ、並みの女の子ではないだろう。

ともかく、難色を示していることだけは確かなようで、最後の望みは消えかけていた。真紅の中は既に次の対抗策をどうすべきか、数種類の手段が渦巻いていた。

「それでも、困ってるやつがいるんだぞ？ 俺たちが助けてやれる人たちが、まだいるんだぞ？ 見ないふりをしてるってのかよ？」

「……そんなに気に入ったのか？」
「おう。なんか文句あるか？」

胸を張って自分の主張を押し通そうとする天一。その言葉こそな
んとなく説得力がないものの、真剣な瞳は康の瞳にしっかりと向け
られ、言い負かしていたはずの康が今度は言葉を詰まらせる。天一
の意志の強さ、それに押されているのか、呆れているのかはわから
ない。しかし次に彼が放つ言葉は、真紅も天一も、完全に予想でき
ていたものだっただろう。

「はあ……わかった。恵理ちゃんには俺から連絡しておく。上手く
誤魔化しておくから安心してくれ」

「よっしゃ！ だからお前大好きさ！」

「なっ！？ こ、こら天！ ひつつくな、頼ずりするな！ 暑苦し
いんだよ！」

「……いろいろ、大変なやつらだな」

真紅の独り言に、背後の信介が頷いたような気がした。

お互いの連絡先を交換して、ひとまず真紅と天一たちは苅野屋の
前で別れた。

今日明日中にどうにかなる話でもないため、互いの仲間たちに伝
えたりする時間も考慮して、少し時間を空けようという話になった
のだ。

それを言い出したのは、康だった。

康としては少しでも時間を空けて、恵理をどうやって言いくるめようかという案を必死で考えたかった。真紅は事情を知らないし、天一は異常に楽観視しているから考えなどあるはずもなく必然的に自分一人で打開策を打ち出さねばならないのだが、これがそう簡単な問題ではなかった。

おそらくは、康が知っている女性の中でも最強の人。性格然り、体術然り、世渡り然り。ともかく最強なのだ、彼女は。千里眼でも持っているかのようにこちらの内情を把握し、痛いところをズバズバとついてくる。康がもつとも苦手とするタイプの人だった。

天一と康、恵理は幼い頃から一緒だったため、さまざまなお癖や弱点を互いに知られているという点においても苦手といわざるを得ない。

「はあ……どうしようか、本当に」

安請け合いをしてしまったな、と今更ながらに後悔してしまう。

「どうしたんだよ？ さっきから暗い顔してさ」

「お前が羨ましいよ、天。恵理ちゃんのことになると強くなったり弱くなったり、波が激しいんだから。たまには俺も、恵理ちゃんに強く言い返してみたいものだよ」

かっかつ、と豪快に笑い、天一は康の鼻先に人差し指を突き出し、左右に振って見せた。その意味が、長年一緒だったとしても康には

理解できない。

「俺が強く出れるときはな、あいつの弱点が如実に出るときだけなんだよ。お前は、まあ当事者だからわからないかもしれないけどよ」

「はあ？」

「いや、やっぱりわからないか。なら一つだけ、お前が今度なんか奢ってやるって言えば、一発であいつの機嫌は直るぜ」

未だにわからなくて康は首をかしげる。その動作がつぼにはまったのか天一は笑いを押し殺し、けれど押し殺しきれなくて決壊したダムのように馬鹿でかい笑い声を撒き散らす。真昼間の道路ではどう見ても不審人物だったが、康には既に止める気力も注意する意志も残されていないくて、ただただ溜め息を吐き出すことしか出来なかった。

周囲の目も完全になくなり、天一が笑い終えるのを待つてようやく康は聞きたくてしようがなかった質問を投げかけた。

「……………どうして、彼に協力しようなんていいだしたんだ？」

たった一度、互いに顔すら見せずに打ち合った相手。敵対関係にあつたわけではないが、解せない。

普段の天一は、確かに馬鹿で何も考えていないような行動をすることもあつたが、それでも彼なりにしっかりとした考えを持ち、最後には自分の望んだ状況、結末に持ち込むことが出来るような策略をめぐらせていた。だが今回の彼の決断はあまりに普段のそれとはかけ離れている。軽率、とっていいだろう。

天一はしばし思案するように口元に手を沿え、探偵のような大仰なポーズを取って見せ、肩をすくめた。

「しいて言うなら、そうだな、同類だったから、かな？」

「同類？ 誰がだ」

「俺と、あいつがな」

天一は自分の手のひらを覗き込み、口元に嘲笑を浮かべた。

それは時折見せる、天一の暗部。康が知らぬ間に、天一一人で抱え込んでしまった何かが彼にそういった態度をさせていた。

それが、どうしようもなく悔しい。

何があったのかは知らない。何かがあったことは確かで、その場に居合わせられなかった自分の不甲斐なさもそうだったが、それを相談してもらえないことにも悔しさがこみ上げてくる。

いつも一緒に、隠し事などない関係だと思っていた無二の親友。その親友に頼ってすらもらえない自分。

どうすれば話してくれるのか。それとも自分では絶対に知ることが出来ないのか。

「……どうした、康？」

「なんでも、ないよ」

歯が軋むほど食いしばっていたことに気づいて、全身から一度、無駄な力を全て抜き去る。

今、考えるべきことではなかった。今はただ、天一のために、親友のために自分が出来ることをしてやる。それだけを考えて行動していれば、それでいい。

一抹の寂しさと不安を内包しながらも、しかし康は普段と変わらぬ聡明さをもってしてこれからやってくるであろう災難に向けて心の準備を始めるのだった。

〔二十五話〕 共闘、そして（後書き）

なんだかんだ言ってもう二十五話です。早いものだとしみじみ実感しているわけです。

さて、しょうもない話をさせてもらいますと、来週から我が大学が夏休みに入ります。ヤッファー！

と、喜んでいらればよかったのですが、そのせいで更新速度が遅くなるかも知れません。

普通逆じゃない？ と自分でも思いますが、夏休みは実家に帰省すると思うのです。そうすると、実家はネット環境が整っていませんから、更新できない。なんだか書く気力がなくなっていく。他のことに目がいつてしまう。放置。

とまあこのような負の連鎖が……。

ともかく、次話ができるだけ早く更新します。ではでは。

〔二十六話〕 恐怖、恵理襲来（前書き）

風のように現れ、周囲に暴風を撒き散らす少女。

少年の瞳を曇らせるその霧を、少女は日と吹きで消し去っていく。

白き少年にとってそれは、最強にして最凶の味方。

〔二十六話〕 恐怖、惠理襲来

仲間に事情を話さなければならぬのは、真紅とて例外ではなかった。

いつかは、いや、今日中に叶や空に連絡をとって、仲間が増えたということを経済承諾してもらうことが必要で、切り出し方を必死で考えていた。

もつとも、考えていた時間は完全に無駄なものへと変わってしまったが。

「やっと見つけた」

目の前の、道路のと真ん中に仁王立ちで待っていたのは空。普段の飄々とした態度はどこへ行ったのか、その表情は真剣そのもので、むしろ真紅に向けられた濃厚な殺気に眩暈さえ起こしそうになる。

「今までどこにいてたんだよ？ あと、叶ちゃんが別人みたいだったことの説明を求めろ」

「な……何の話だよ？ 俺は何も……」

「真紅！」

空の瞳を直視して、真紅は何も言えなくなる。

嘘など、つけない。数少ない気の置けない親友にまで嘘をつくようになってしまったら、それこそ誰一人として信用できなくなるし、信用されなくなる。

だがそんな難しいことなど関係なく、ただ真紅の心が虚実を語ることを否定していた。

「……わかったよ、説明する。長くなるけど、いいか？」

「もちろん。今日は一日中サボる覚悟くらい出来てる」

変なところで覚悟が出来ていることに思わず苦笑して、さてまた戻るのかと辟易することになるのだった。

地獄がやってきた。

まさに予想外。全ての対抗手段を封じられ、反論すら許されず、ただその場に正座させられるだけ。

罵倒され、叩きのめされるのならばまだましだ。彼女はそれすらしよつとはせず、ただ黙って二人の少年を見下している。

苦痛以外の、何物でもなかった。

「……あ、あの、恵理様……どのようなご用件で、いらっしやったのでしょうか？」

天一の超がつくほど控えめで丁寧な言葉にも、少女は黙っているだけで何一つ反応を見せはしない。

天一たちが本当に籍を置いている学校の制服で、胸元には学年を

示すバツチがある。二年を示しているそれはしかし、彼女の威圧感を見る限り一致はしない。

流れるように美しい黒い髪は腰ほどまで伸び、その整った体格と相まって見る人を惹き付ける魅力的な姿を保っている。ちよつと気の強そうなつり目も彼女の美しさを引き立てることに役立ち、微笑とのギャップにただ圧倒されることだろう。

もつともそれは付き合いの短い人間にしか意味を成さないものだ。天一や康にとつて彼女は、恐怖の象徴でしかなかった。

長い時が過ぎ、彼女はようやく硬く閉ざしていた口を開いた。

「……天、言い残すことはない？」

「なぜにいきなり死亡宣言!？」

「ないのね、なら……ここでさようならよ」

おもむろに胸ポケットから取り出したのは、空色のグローブ。彼女の小さな手に吸いつくようにはまるそれは、彼女が絶対に倒すと決めた相手にしか使わないもの。

それを目視した瞬間、天一の血が悲鳴を上げた。

どうしてなのかはまったく理解できない。いや、したくもない。だがこんなところでむざむざと、旧知の少女に殺されてやれるほど天一は自分の命を軽んじてはいなかった。

「ちよつ……! 不知火!」

彼女がグローブを着け、目視できるギリギリの速度で繰り出され

る拳を、不知火の腹で受け止める。狭い空間で打ち合ったため、衝撃波にも似た振動が周囲へと拡散され、玄関に飾ってあった花瓶やら額縁やらが音を立てて破壊されていく。

康はさつさと離脱していて危害はない。ただ拳と日本刀だけが鏝迫り合いでもしているかのような、微妙な均衡を保っていた。

「わかるように、説明してもらえるかな、恵理。いきなり本気で殴られるほど俺も優しくはないぞ?」

「へえ、ここまでしてもわからないんだ……やっぱりあんたって、鈍感そのものね!」

片手で日本刀と押し合いながら、逆の足が死角から迫る。空気の振動だけで動きを見切って、一瞬だけ迷う。その迷いを断ち切るかのように空いていた右腕で受け止めると、腕全体の筋肉が悲鳴を上げ、天一は眉をしかめた。

日本刀を振るうほどのスペースはない。その面では近距離戦に特化した恵理の体術は脅威ともいえる。だがそもそも天一には、恵理に向かつて本気で刀を振れるほどの度胸もなく、同時にそんなことをする理由もない。

それに殺されるとするならば、せめて彼女のその手で

そこまで考えて、馬鹿馬鹿しさに気づき、右腕を力いっぱい外側に押しやった。

誰が、恵理なんかに殺されてたまるか。

俺と同じ想いなんで、させてたまるか。

「惠理……ちゃんと説明してくれないと、俺わかんないなあ」

「っ！ この、こういう時だけ、気の抜けた声で……」

「お前の弱点、俺の笑顔ってね。偽者っていう線はなくなったかな」

攻撃の型、速さ、動き、どれをとっても偽者という線は存在しない。だがそれならばなぜ、という疑問がまた鎌首を持ち上げてくる。

「とということ、質問。なんでお前が、俺を殺そうなんて思うんだ？ 今更、怨みも何もないだろ？」

「う……ううう……」

困ったように似つかわしくないうめき声を上げるその姿は、天一の嗜虐真をくすぐる。惠理に気づかれぬよう舌なめずりをして、天一はさらに言葉を重ねる。

「惠理ちゃん？ 怒ったりしないから、ほら、言ってみな」

「だ……だって、だってえ……最近、康からの連絡だけで、天の声も姿も、全然見る機会がなかったんだもん。なんかこう……イライラしてきて……」

「そんな理由かよ!？」

惠理の弱点、その二。天一だけが知っていることだが、惠理は気が強いわりに極度の寂しがり屋だった。今も康に聞こえないよう、小さな声でやり取りしている。康も二人のそのやり取りにはなれていないのか、聞き耳すら立てようとせず、むしろ部屋の奥へと引っ込

んでお茶の準備を始めていた。

「そ、そんな理由って……あんまりだよ」

「あ……あゝあゝ、悪かった！俺が悪かったって。謝る、何でも言うこと聞いてやる。だから機嫌直せよ、恵理」

「ほんとあ？」

「うん、約束だ。俺がお前に嘘ついたことあるか？」

「ある。いっぱい」

言い返せなくて、天一はただ頭をかくだけだった。

恵理との約束は基本的に守ろうとするのだが、決まって何か不測の事態が襲ってくる。今回の交換留学もそうだ。卒業まで是一緒にしようねという彼女との約束も、そのせいで破る形になっていた。

「でも、うん。今回は許してあげるよ、天」

彼女の瞳には溢れんばかりの涙と、柔らかい笑顔。その二つが合 わさることで、天一が大好きな、絶対に失いたくない”鷺村 恵理 ”という人物が、目の前に実在しているという事実をようやく認識 することが出来た。

「改めて、久しぶりだな、恵理」

優しく頭を撫でてやると気持ちよさそうに目を細め、少女は笑みを深めた。一通り満喫して、少女はやっといつもと同じ凜々しい瞳を天一に投げかけてくれていた。

「うん！ 会いたかったよ、天！」

抱きつかんとする勢いだったが、流石にそれはまずいと思い、天一はその額に平手をあて、彼女の突進を手前で防ぐのだった。

お茶の準備を終えて戻ってきた康に従い、三人は居間へと場所を移した。

さほど広くはないがソファとテーブルはしっかりと設置されている。テレビは二人ともが見ないため置いていないが、各々の部屋には小型のそれが置いてあるはずだった。

天一と康は、同じ家を借りていた。もちろん簡単に一戸建てが借りられたわけではない。この家は彼らの住処ではなく、情報屋としての拠点として、ある人から借りているものだった。アパートに二人分の部屋を借りているが、こっちに來てからというものそこで生活した日数は半分に満たない。

夜の時間を大半情報屋としての活動に持っていかれるため、自室に戻る必要がなくなってくるというのが実情だった。

「恵理ちゃんはどれくらいこっちにいるつもり？ それによってはこっちの部屋を改良して、一人くらい余分に過ごせるようにするんだけど」

康の言葉に、恵理は口元に人差し指を沿え、うなる。

何か嫌な予感がして、天一はその場を離脱しようと思席を立つ。しかしその行動を予期していたのか、恵理の右手が制服のすそをつかんで離さない。

「実はね、私も交換留学生、第三号としてこっちに來ることになっ

たの

「……へ？」

嫌な予感、大的中。

康は驚いたように声を漏らしたが、天一は何一つ反応を見せなかった。

恵理がこの町に来ているという時点で、なんとなくそんな気はしていた。ただ認めたくなかっただけ。これから四六時中、恵理と行動を共にしなければならぬと思うと心臓がいくつあっても足りない、いや、魂がどれだけあっても足りることはないだろう。

「よろしくね、先輩！ 学年は一緒なのに、うん、この呼び方って新鮮」

「……変な遊びを覚えるなよ、恵理」

「何なら”お兄ちゃん”って呼んであげようか？」

「っ！ 恵理！」

「あはは、冗談だよ、冗談」

心臓に悪すぎる冗談に、天一はただ、溜め息をかみ殺す。洒落にならないというのはまさにこんな状況のことを言うのだろう。

恵理は悪戯が成功した子供のように笑い、康はよくわからないやり取りに疲れたのか独り茶を啜っている。

疲れた、こんなことなら帰って寝ればよかったと今更ながらに後悔の念がつのる。

「あ、でも”兄さん”くらいはありかもね」

「……お前みたいなお妹、欲しくねえ」

「ああ！ そんなこと言うの？ こんな美人捕まええ、酷すぎない？」

「自分で言うな、自分で」

遊ばれているとわかっていても、天一には何一つ抗う手段がない。抗う気力すら残されてはいない。

「あはは、さつて……それじゃあ本題ね。天、康、私に黙って何か楽しそうなことやってるわね。私も混ぜなさい」

二人とも、呼吸が止まったのではないかと思えるほど部屋内の空気が凍りついた。

どこからどんな話が漏れたのか。情報屋の件については恵理も最初から知っている。だが彼女自身が情報屋というわけでもないし、彼女単独で情報を集められるほど裏に精通しているわけでもない。

だが彼女の言葉からわかるのは、全てを知っているという自信だけだった。

「なあ、恵理。何を、どういった風に聞きつけた？」

「あんたの師匠さんから。楽しそうなことしてるみたいだからいいよ、って許可が下りて」

「あ……あのくそジジイがあー!!」

今まで生きてきた中で彼ほど怒りをもたらす人物を、天一は他に知らない。

それでもこの世界の中で彼ほどの武人もいないのだろう。あの茶

目つきを差し引けば優秀な師匠といってもいい。

だが時と場合を考えろくそジジイ、と天一はこの場にはいない人物に毒づく。

「さ、包み隠さず話してもらいましょうか？　嘘ついても私にはわかるからね」

迷惑をかけまいと隠し通すつもりだったが、こうなっては仕方がない。それに考えてみれば恵理の体術も戦力としては十分すぎるほどだった。

真紅にはあとで話しておこうと観念して、天一は康と目配せし、昨日からあったすべての出来事を包み隠さず話し始めるのだった。

〔二十六話〕 恐怖、恵理襲来（後書き）

よっしゃあ！ テスト終わったあ！

と喜びながらの更新です。どうも、作者です。

さてやってきました破天荒少女、恵理。さぎむら、と読みます。

黙っていれば日本美人、絶滅危惧種なのですがいかんせん、性格に難ありと言ったところですよ。でも天一にとってはもつとも大切な少女であり、命に代えてでも守りたい人。邪推なしでお願いします。

今回でようやく本当に戦力がそろってきた感じ。あと一人、といったところでしよう。真紅組と天一組のコラボも早く書きたいですね。ではでは〜。

〔二十七話〕 二人の思い、迷い（前書き）

白き少年は喪失したものに苛立ち、紅き少年は投げかけられた言葉に困惑する。

少年たちの心とは裏腹に、事實はたった一つの結論を急がせる。立ち向かうという、たった一つの結論を。

〔二十七話〕 二人の思い、迷い

天一にとってそれは、絶対に失いたくないものだった。

自身の幸せを壊した忌むべき力だったが、それは天一の行動の根底に色濃く影響し、天一の全てを支えている力だった。

それが、今は

「の、くそつたれがあ！」

力任せに不知火を地面に叩きつける。並外れた勢いで振り下ろされ、並みの日本刀では簡単に折れてしまうところだったが、雪のように真白い刃はむしろ地面を切り裂き、主の怒りを地面へと逃がしていた。

強固に作られた刀でも、痼癢を起こした主の一撃はまともに受けたくないらしい。

「はあ……はあ……この……！　なんで、だよ？」

いくら集中しようと、騒ごうと、怒ろうと、全てが天一の意志に従ってはくれない。今まで感じたことがない無力感に、天一の心は今にも壊れてしまいそうなほど冷たく、鈍く軋んでいた。

「……無力感。言いて妙だな」

不意に背後からかけられた、気持ち悪いほど落ち着いた声。

聞きなれた声だったが、今、この場にいる理由が天一にはわからなかった。

「ジジイ……なんでここに居やがる」

「ほほ……年寄りでも遠出したくなるものだ。いや、年寄りだからこそ旅をしたくもなる」

「軽く二百を超えた人間を年寄りなんていわねえよ。その年になれば、もう何も目新しいものなんてないだろうに」

振り返りもせず不知火を鞘に納め、大きく息を吐き出す。

「”力”を、失ったようだな」

何もかも見透かしたような言動に、腹が立つ。

今まで師匠の言動で、間違っていたことなど一度もない。かつて彼が犯した過ちの時も師匠は忠言し、しかし天一がその言葉を聴かなかったがために悲劇が起こった。

怒りに任せ、振り向きながら不知火を抜いた。しかし振り返った直後、師匠の刃が天一の喉に添えられ、天一の防衛本能が全ての行動にストップをかけた。

「……感情に任せて行動するのは、お前の悪い癖だな」

「そうかもしれないな。だけど、それが俺の性分だから」

「開き直れる神経の凶太さも、お前の美德だ」

漆黒の闇の中、老人の姿がうつすらと浮き上がっていた。

腰ほどまで届く銀色の髪と皺が刻まれた色白の顔。厳格な印象など一切ない優しい瞳と笑みは、腕の立つ剣士には到底見えない。そして何より、二百歳などという規格外な人間には、絶対に見えないだろう。せいぜい七十、八十程度にしか見えない。かくいう天一も、初めて会ったときはただの老人としか認識していなかった。

「彼の企業に手を出したか。ならばなるほど、頷ける」

「どういうことだ？ 確かにあそこには、よくわからない空気が停滞していた。戦っている途中で俺に干渉するほどの何かなんて、想像もつかないぞ？」

師匠は笑みを深め、天一の喉に添えていた刀を納めた。

「朝風 真紅」に協力するのだろうか？ 進むその先に、答えはある」

「はあ？ つか、待てよ！ どうして俺があいつに協力するって、っていうより何であいつのことを」

「ほっほっ……あの企業は強いぞ。そのためにお前の大切な”鍵”をこちらへ寄越したのだ。感謝せよ」

鍵というのが恵理のことだというのはすぐにわかった。だが感謝など死んでもしたくないし、何より師匠の言動がよくわからなかった。

「……進めば、力を取り戻せるのか？」

「無論。もつとも、お前が力なしで生き残れるのならば、な」

上等だ。それ以外に手が無いのなら、何より師匠に舐められたままでは引き下がれない。

抜きかけていた刃を納め、師匠の正面にしっかりと立つ。

視線はほぼ同じ。しかし技量は、度量は、師匠のほうが圧倒的に上だった。

まるで見下されているかのような、不快感。実際はそんなことないだろう。師匠の性格を考えると、絶対にありえないと言い切れる。

それはきつと天一自身の心の問題。だからこそ、しっかりと向き合わなければならなかった。

「ジジイ、俺は生き残ってみせる。生き残って、自分の力を取り戻して、てめえを見返してやるよ」

「……楽しみにしているよ」

最後に優しげな笑みを見せて、師匠は背を向ける。互いにもうかける言葉はない。天一も背を向け、師匠の帰りを見送る。

しかしいきなり部屋に電気が点り、聞きなれた少女の声が室内に木霊する。

「あ、師匠さん！ お久しぶりですね」

「ん？ おお、恵理ちゃんか。あいつも変わらず美しいのお」

途端に年頃の少女を相手にした老人へと戻った師匠が、気の抜ける声で恵理と会話を始める。

背中にかかる少女の声に溜め息をついて、さて今日の夕飯はジジイも同席か、と辟易するのだった。

御子柴の屋敷で夕食を取り、空の鍛錬所に向かった二人だったがそこには思わぬ先客が待っていた。

「はろー」

気の抜けた挨拶をしたのは二人の先客のうち、既に酔っ払っている空の母親、早苗だった。どこから持ってきたのか、ワインのビンを片手に頬を上気させている。その姿を光義あたりが見たならば、卒倒くらいはするかもしれない。女物のスーツの胸元をはだけさせ、目は半分以上閉じていた。

しかし真紅が驚いたのは、もう片方の先客だった。

なぜここに彼女がいるのか、真紅には見当もつかない。それは隣にいた空も同様のようで、二人は顔を見合わせ、互いに違うと首を振った。

「遅かったじゃない、真紅。それと、お邪魔しているわ、御子柴君」

前半は素で、後半は学園内でかぶっている猫を用いて、彼女は何

事もないかのように挨拶をよこした。

彼女のほうは一滴も飲んでいないようで、スーツはしつかりと着こなし、口元に微笑を乗せている。化粧もしつかりしているのか、その姿は鍛錬上の背景の中で浮いていた。

「……何の用だ、叶」

比較的冷徹に言い放ったつもりだったが、叶はそれを意にも介さず、早苗の隣にあつた日本酒の瓶を一気におおった。

その仕草はさながら酔っ払いのオヤジ。

一滴も飲んでいないというのは訂正すべきだろう。勢いよく動く彼女の喉は、酒豪のそれと違っていい。

「……やべ、叶ちゃんのイメージが変わったような気がする」

軽く落ち込んでいる空の肩に手を当て、慰める。それと同時に叶へと意識を向け、彼女の意図を探ろうとした。

「ふう……やっぱり誰かと一緒に飲むと美味しいわね。また一緒に飲みませんか、御子柴さん？」

「ええ、かまいませんよ。夫ばかりが忙しくて、わたしにはなにひとつ仕事がないんです。だから、毎日でもいけますよお」

出来上がっている早苗はこの際念頭からはずしておく。

叶は早苗の返事に気を良くしたのか、年頃の娘のような笑みを浮かべ立ち上がった。

すっかりとした足取りを目を見る限り、酔っているようには見えなかったが、その笑みに含まれる艶っぽさは、常のそれとは一線を画すものといえただろう。

彼女のそれに奇妙な寒気を覚え、真紅は一度身震いする。恐怖、とは少し違うがそれに似た感覚。形容しがたいそれは防衛本能を揺さぶり、自然と刀を構えるような体制を真紅に取らせていた。

「何の用か、だったわね。真紅、いったい裏でどんな動きをしているの？ 有名な情報屋があなたについたって言う情報がある人物から来たのよ」

天一たちが真紅に味方することは、まだ本人たちと空以外は知らないはずだ。たった一人、裏と精通し、そういった情報を流したであろう人物に心当たりがある。

「……あのお喋りめ」

巨体の爽快な笑みが目蓋の裏をよぎる。一日に三回も場所を借りたことは悪いと思っていたが、情報のリークという天から考えて礼はなしでもいいだろう。

だが考えようによっては好都合かもしれない。叶に説明する手間が省けたし、何より空と”本当の”叶との顔合わせも出来ている。

空は必要以上にダメージを受けているようだが、そこはあとで何とかしよう。

「ともかく戦力は確保できたんだ、見逃してくれ」

細かい説明をする気力は、今の真紅にはなかった。

帰宅するまで延々と空の質問攻めにあい、そのたびに話の腰を折られたことでもかなりの時間を費やしてしまっていた。当然、そのほとんどの時間を喋り通したのだから、別に話好きでもない真紅にとっては苦痛にも似た時間だったのだ。これ以上説明してやるつもりは毛頭なかった。

しかし叶はちゃんとした説明が欲しいようで、なおも食い下がるように距離を詰めた。

「嫌よ。ちゃんと説明してもらわないと足並みがそろわないでしょう？　ただでさえ番号付きと戦える人間なんて限られているんだから」

「その番号付きとほぼ互角に戦えていた人間だ。次の機会にあわせてやるから、今日はもう休ませてくれよ」

当初の予定では鍛錬所で空と軽く手合わせする予定だったが、叶の登場でそんな気力すらなくなってしまった。ここのところ続いていた頭痛こそないものの、このままでは再発も時間の問題かもしれない。

真紅の心労を汲み取ってくれたわけではないだろうが、叶は目の前で深々と溜め息を吐き出し、スーツのポケットに両手を突っ込んだ。

「……仕方がないわね。絶対よ？」

「わかってる。明日にはもう一度会うことになってるから、その席に同伴するといい。空にもそういうことで話を通した。あとは愛美

「ただ、あいつは事後承諾でいいだろ」

「細かいところは任せるわ。それよりも空、ちょっと手合わせしてよ。なんだかストレス溜まっちゃって」

また勝手に名前で呼び始めたが、その場を当人たちに任せて真紅は鍛錬所を後にする。

本当は、全ての煩わしい事を後回しにして考えたいことがあった。

『へえ……既に取った仇を、もう一度取るうって言うのかい？』

『滑稽だね、朝風。真実から目を背けるのか？』

七夜の言葉が酷く心を締め上げる。

「いったい、なんだというのか。わからないことが多すぎた。」

真紅はただ錬の残した願いを、悪夢を終わらせるという意志を引き継いだに過ぎない。それがたとえ、彼を死なせてしまったことへの負い目から背負ったものだったとしても、今の真紅にとって最も優先すべきことであることに変わりない。

だから何も迷うことなど、ないはずだった。

なのに

「真実って……何なんだよ？」

誰に問いかけるでもなく、真紅はただ自身の拳に目を向けた。

そこには血がにじむほど強く握り締められた拳が、もの言いたげに存在しているだけだった。

〔二十七話〕 二人の思い、迷い（後書き）

予想通りかなり更新が遅れたような気がします。

いや、ねえ？ いつもは少ない休みの時間を使って書くじゃないですか。それが夏休みになると時間がありません………どうにも書く速度が落ちてしまっんですね。

っと、愚痴っぽいことはこの際放置の方向で。

さて学園編、終了の兆しが見えてきました。

どういった形で終わらせるかは言えませんが、あと十話くらいで学園編を終わらせられたらいいペースかなあと勝手に考えています。

まあ、当初の予定からは大幅に遅れているんですけど………。

さあ、ガンバロー！。

〔二十八話〕 二人の問題（前書き）

人にはそれぞれ抱えている想いや問題がある。
解決できるのは他の誰でもない。
ただ、自分だけ。

〔二十八話〕 二人の問題

昼休み。予想もしなかった展開に、ここに集まったうちの二人がついてきてはいなかっただろう。少なくとも真紅から見て、彼女たちは何がなんだかさっぱり理解していないようだった。

神凧学園、真紅たちが通っている校舎の屋上にその一団は円を描くように座っていた。コンクリートの地面にシートを敷いただけのお粗末な場所だったが、他の生徒が来る心配もないため誰も気にするそぶりを見せなかった。

違う校舎からわざわざやってきた三人の生徒に空が声をかける。

「俺は御子柴。御子柴 空だ、よろしく」

「朝倉 天一だ。こっちは若元 康、それに鷺村 恵理」

まったく異なった制服ながら、同じ学園の生徒である天一と康。それだけならまだ、そういった学科が存在していると知っている在校生には納得できるものなのだろうが、恵理という少女だけは神凧学園の二種類の制服とは異なった制服を着ている。そのことに違和感を覚えていたのだが、彼女自身が笑みを浮かべ、説明を始めた。

「私は本日からこの学園に交換留学生として所属することになりました。制服が届いていなかったため、本日は前の学校で使用していた制服を着用しています」

黒く美しい髪に似合う、白をメインにデザインされた制服は大和撫子という彼女の第一印象を確固たるものに変えていた。京に似たものを感じなくもないが、彼女の場合はあまりにもさまになってい

る。

「あ、そ、そうなんですか……違う学校の生徒さんかと思ってビックリしました」

その言葉を発したのは、意外にも京だった。

初対面の人間とは極力話さないのかと思っていたが、それは愛美の方だったようで手にしたアンパンをかじったまま微動だにしない隣に座る京がそれをフォローする形で何とか収集がついているものの、愛美はこの時間まったく役に立たないだろう。どのみち京が同席している時点で説明は不可能だったが、少しは慣れてもらいたかった。

昼休みの屋上を利用しようと言い出したのは天一だった。

別れる前に連絡先を交換していたのだが、それを使わず教室に押しかけてきたときは心臓が止まるほど驚いたものだった。

その勢いのせいで京まで一緒に食事を取るようになってしまったのだが、結果としてはいい緩和剤になってくれている。

「今日はまあ、顔合わせ程度に考えてくれてかまわないぜ。真紅の仲間ってのがどんなやつか興味があったし、こっちもまあ、不測の事態で恵理を紹介しなきゃならなくなったから」

「ちょっと、不測の事態ってどういうことよ、天？ むしろ感謝しなさい。あんたより役立つわよ」

おしとやかだった口調が、一瞬で崩壊していた。本人もすぐに気づいて口をつぐんだのだが、時すでに遅し。愛美以外の全員が笑い

出し、恵理はただ赤面して天一の横っ腹を小突くのだった。

しかし、ふと気づく。今の会話は事情を知っている人間以外に話せないような内容を含んではいなかったか。

談笑を始めた他のメンバーを尻目に、天一に手招きを見せてシートから立ち上がる。少し離れた場所に移動して、真紅は一つ溜め息をついた。

「すまん。部外者が一人いるから、今日は込み入った話はなしにしてくれ」

「ああ、かまわないよ。でも部外者って？」

「企業側の人間だ。俺の居場所がばれるとまずい」

誰だ、と問われ京を指差すと、ちょうど彼女と目が合い、彼女はにっこりと花が咲いたような笑顔を見せてくれた。苦笑いで応え、視線を天一のほうへと戻す。

「彼女が、ねえ。でもさ彼女、かなり自然に俺たちを受け入れたよな？」

「どういう意味だ？」

「空ってやつは事情を知ってるからいいとして、普通はあそこでアパンくわえたまま固まつてる子みたいにして少しは身構えるんじゃないか？ 性格上の問題かもしれないけど、むしろ好意的に接してくれるってのが、どうにも違和感を覚えるんだよ」

確かに彼女はもともと、誰かと積極的に話すような性格ではない。慣れてきた相手でもたまにびびったりすることがある。

だが、天一の言葉に真紅は何か、言い知れぬ不安を覚えた。

違和感などずっと前からあった。それは、そう、彼女を屋敷に送り届けた次の日から続いている。

妙に明るすぎるのだ、今の彼女は。無理をしているようには見えないが、どこかがおかしい。

「……心当たり、あるみたいだな」

「なにが、だよ？」

「とぼけるな」

天一が言いたいことは、すでにわかっている。

彼女が関係者ではない、その認識を改める必要がある。そう、言っているのだ。

だが心のどこかで、思い出して欲しいと思っていたのも事実。もし思い出していたのなら、彼女の変化の原因と考えていいだろう。いや、そう考えるほうが自然だった。

しかしそれは、彼女が敵側に情報を漏らしてしまったかもしれないという、危険信号に他ならない。

彼女は真紅が企業と敵対していることを知らないはずだ。不用意に父親に話していたとしたら、居場所が特定されていると考えてもいいだろう。そうなった場合、個々で戦う以外の選択肢がなくなってしまう。

出会ったばかり、連携など取れるはずがない。真紅と天一のような奇跡がなければ本来は共に戦うことすら難しいだろう。互いを知

ることで連携は深まる。そのための時間がないのなら、一対一の戦いに持っていくほうがまだ勝機はあった。

「……すまん。少し意地悪すぎたか」

思考に沈んでいた真紅に、天一は頭をかきながら申し訳なさそうに呟いた。

慌てて思考から舞い戻ったが真紅も何を言っているのかわからず、結局は二人で押し黙ってしまう。そんな自分たちが馬鹿馬鹿しく思えて、二人はほぼ同時に吹き出すのだった。

「どうやって対処するのはお前しだいだ。個人の問題は、自分たちで解決するしかないし、そうしなければ意味がない。俺たちがどうこうできる問題じゃないだろ？ でも一つだけ言えるのは、感情を優先してみることもたまにはいい結果をくれるってことだ」

「……肝に銘じておくよ」

「いや、そこは軽く流していいんだよ。お前にはお前の生き方があるんだ。それを曲げる必要なんて全然ねえ」

性格は正反対といってもいい。だというのに、なぜか天一とは馬が合う気がした。それはきっと、根本の部分で同じものを抱えているからだろうと、真紅は漠然と理解していた。

絶望を味わって、それでもなお前に進める心。彼がいったいどんな絶望を味わったのかなど付き合いの短い真紅がわかるはずもない。それでも真紅は、この一件が片付いたら天一の手伝いをしてやってもいいかなと、遠い未来の出来事に思いをはせるのだった。

真紅には真紅の問題があるように、天一にも天一なりの問題、もとい心労が存在していた。

放課後の職員室、目の前で自分の担任教師と会話している恵理の背中。それを何の気なしに眺めながら、彼女が同じ学園で生活することに微かな不安を覚え始めている。

恵理がこの学園にやってきたこと事態には不満はない。むしろ嬉しくらいだった。しかしいくらなんでも教師に掛け合って、天一の隣の席にして欲しいなどと頼むだろうか。しかも担任は既に彼女の話術に籠絡され、完全に席を移動させる方向へと話を進めている。

その了承を求められこの場に居合わせたわけだが、天一としては茶番以外の何物でもない。恵理の要求を断れるほど天一に度胸はなかった。

明日にはいろいろと理由をつけて席を移動させる、そう担任に宣言させて二人は一緒に職員室を後にした。

廊下を移動する際、天一は極力恵理から離れるように窓際すれすれを歩いていった。しかし彼女もそれを見越していたようにゆっくりと、しかし確実に天一に近づいてくる。予想通りの行動に辟易しながらも、天一はどうやって次の行動を回避すべきか、必死にない知恵を搾り出していた。

「て〜ん〜!」

「……よっ、とー!」

天一の右腕を狙った恵理の両手。右腕を引くことでそれをかわして、一目散に教室へと駆ける。恵理のトップスピードは知っているから下校中の生徒に驚かれない程度の速さで走りながら、次の手を必死で考える。怒られることは必須だ。ならそれを緩和させるために使うべき手段は、たった一つしか存在しない。

「康！ ちょっと手を貸してくれ！」

教室に戻り勢いよくドアを開けたが、そこに康の姿はなかった。急いで自分の鞆を取り、他の生徒に康の行方を尋ねると、既に帰宅したという予想外、かつ最悪の答えが返ってきた。

限りなく、不味い。

恵理が戻って前に急いで帰ろうと踵を返すが、しかしそこには既に鬼のようなオーラを纏い、聖母のような笑みを浮かべた少女が立っていた。

「え、恵理さま……待って、は、話し合おう。大丈夫、お互い誠意を持って話し合えばきつと……」

「あら、朝倉君。私は別に、まだ何も言っていないですよ？ 今日はそのほど暑くありませんのに、どうしてそんなに汗をかいているのかしら？」

嫌な汗が全身の毛穴から吹き出してくる。蛇ににらまれた蛙の気持が少しだけわかったような気がする。

打開案すら存在しない。ここまで彼女の機嫌を損ねた場合の末路を天一は一つしか知らなかった。

「朝倉君、少し付き合ってもらえませんか？ 昼食時に忘れ物をしていたようで、あちらの校舎の屋上へ行きたいのです」

「は、はい……わかりました」

拒否権なんて存在しないお願いに天一は従うしかなかった。

校舎を移動して屋上に向かっている間、互いが無言で歩き続ける。恵理は怒りが原因だろうが、天一はこれからやってくるだろう地獄に耐えるための覚悟を固めるためだった。

「ふう……やっぱり肩こるわね、お嬢様みたいな演技は」

屋上にたどり着いた瞬間素に戻れる度胸には感服する。そこに誰もいないと知っているからこそ豹変だったが、誰かがいた場合どうやって收拾をつけるつもりだろうか。きっと実力行使で叩き潰すのだろうと自己完結させて、四階くらいからなら飛び降りても怪我はしないなどの外的外れな方向に思考を逸らしていた。

「飛び降りて逃げようなんてのはなしだからね。私でも出来るんだから、追うよ？」

「しない！ しないって！」

声が裏返ることすら関係なく、全力で否定する。時々恵理の鋭さを恨めしく思う自分は間違っているのだろうか、また自分自身に疑問を向けてしまった。

「でも、頭から落ちるなら全然オツケーだよ？」

「それは暗に死になさいと言っただな、恵理？」

笑顔で頷かれると流石に悲しくなってくる。そんな心情を察したのか恵理は艶のある笑みを浮かべ、ポケットからお気に入りグロブを取り出し両手にはめていった。

殺気が周囲に充満していく。屋外だというのに息がしづらくなるほどの圧迫感に、天一の防衛本能が撤退を進言する。それでも体はその場に張り付いたように動かず、彼女の次の動作をじっと見守るように固まっていた。

「ふふ……師匠さんとの話、聞いてたんだあ」

「……はは、やっぱり？」

全身から冷や汗があふれ出す。先日の烏丸との戦いよりも死が近づいているような感覚。それは決して間違いではない。彼女は迷いなく、今この場で天一を殺すつもりなのだ。

それだけ怨まれる理由と、慕われる理由が天一にはあった。

殺されてやつてもいいなんて馬鹿げた考えはもう浮かんでこない。今ここでできる精一杯の力で、恵理の全力を弾き返してやるだけ。

最近はずけていなかったロザリオをポケットの中から出して、手のひらに意識を集中させる。心の中にその姿を描き出すことで、その存在をこの世界に確立させるために。目蓋の奥にはっきりとその姿が浮かんだとき、天一はその名を呼んだ。

「……不知火」

ロザリオが純白の刀に姿を変える。主の意図を理解している日本刀は、自身が持つ全ての力を主に預け、共に戦う意志を示してくれる。

「恵理、俺に殺気を向ける意味、わかっているんだろっな？」

「わかってなければ、天に牙を向けるなんていう無謀な行動、すると思う？ あなたが自分の力を失っている今なら、あなたを殺すことが出来るの。まったく歯が立たなかったあの時とは違う。体術と不知火しかない今のあなたが、力を保っている私に敵うと思う？」「そんなの、やってみなくちゃわからないだろ？」

精一杯の虚勢。かつて異能と恐れられた自分の力は今、自身の中には存在せず、目の前の少女の周囲には今まで怨み続けてきたそれと同じ力が充満している。

師匠との約束を、少しだけ思い出した。

わるい、ジジイ。いきなり約束を破っちゃうかもしれない。

心の中でそんな弱音を吐いて、天一は右手で不知火を握り、左半身を恵理に向けるように構えた。

「長い付き合いだけど、こうやって名乗るのは初めてかもしれないな」

「え？」

本当は倒すと、殺すと決めた相手にしか名乗らない方法。少し恥ずかしくて、知人の前では言いたくないというのが本音だったが、

きつと名乗らなければ割り切れない。

一度大きく息を吸って、両の目をしっかりと見開き敵を見据える。

「飛翔連牙流、朝倉 天一。お前を倒す男だ」

〔二十八話〕 二人の問題（後書き）

……こわっ！ 恵理こわっ！

書いてて怖くなりました。どっちの顔が本物とか、そういうこと関係なく存在自体が怖いです。女の子ってここまで裏表があったら、もう別人ですよね。

さて次話はいよいよ天一と恵理の戦い。文章力がない分、何とかフォローできるようにがんばりますよお！

〔二十九話〕 風の少女と光の騎士と（前書き）

世界の法則を歪め、自己の存在すらあやふやになったとしても、
彼らは戦い続けるだろう。

なればこそ、その戦いは美しく、それでいて儚い。

〔二十九話〕 風の少女と光の騎士と

「……ん？」

御子柴家へ帰ろうと昇降口を出た真紅は小さな違和感に気づいて屋上を見上げた。

いつか感じた殺気、それはいまや仲間となった少年のもの。

屋上で何が起こっているのか気になって真紅は踵を返す。しかし視線は屋上からすぐに離れ、見慣れた少女の瞳へと移動していた。

「高嶺……？」

鞆を両手で前に持ち、柔らかい笑顔を浮かべているその少女は間違いなく高嶺 京という少女その人だった。しかし思わず問いかけてしまうほど、彼女の雰囲気が普段のそれとはかけ離れていた。

彼女はもっと、自信なさ気な雰囲気をかもし出す少女だったはずだ。自分では決断できず、出来たとしても本当に正しかったのかを考え続ける。そんな少女が、高嶺 京だったはず。そういった先入観が真紅には色濃く根付いていたし、実際に過ごした短い時間の中でもそれは証明できていたはずだった。

ならば今、目の前にいる少女は何だと言っただろうか。

迷いの気配はまったく感じられず、かといって自信が満ちてると

いうわけではない。焦燥がなくなった、とでも言えばいいのだろうか。

「朝凧くん、今日は迎えが遅いようなので、出来れば私の家まで送っていつていただけませんか？」

「……どうして、俺に？」

「いつもは愛美ちゃんに頼むんですけど、御子柴くんと帰ってしまったようで、他にお願いできそうな人を知りません。お願い、できませんか？」

上目遣いで覗き込んでくる少女の瞳には微かな不安があった。

ただでさえ容姿がいいのだ、そんなふうをお願いされてしまったのは耐性のない真紅では断ることなど出来るはずもない。

「……わかった。寄り道とかはなしの方向で頼む」

「はい！」

可愛らしく頷いて、京は先に歩き出す。真紅もその背を追って歩き出そうとするが、一度だけ歩みを止めて屋上へと視線を向けた。

『個人の問題は、自分たちで解決するしかないし、そうしなければ意味がない』

昼に天一が口にした言葉。それが脳裏で蘇る。

あの殺気は、先日のそれとは一線を画すものだ。それほど切迫した事態が学校内でそう易々と起きるとは思えない。だとしたら、天

―自身の問題、ということではないだろうか。

心の中で天一の無事を祈りながら、真紅は自分の抱えた問題と向き合うため踵を返す。

天一の宣言にも恵理は眉一つ動かすことなく、臨戦態勢を崩すことがない。

腕力は天一のほうが上。しかし不知火の根元を攻められれば、力が拮抗してしまうこともあるかもしれない。

ようはどうかやって攻め、守り抜くか。ただそれだけが勝敗を決することになる。

技術ではどう考えても天一に分があるだろう。何も知らないものが勝敗を予測するならば、天一が勝つと言い切ってしまう。しかし彼女の”力”は常人の予測をはるかに上回る破壊力を誇っている。

「わかつているの、天？　あなたは今、自分自身の全開とほぼ同格の力を相手にしているのよ？」

「……んなもん、最初からわかつてるっての」

冷や汗が出てくるのを止めることができない。いや、そんなことを気にしている余裕があるのなら少しでも対抗手段を考えるために時間を使うべきだろう。

空気が震えている。普通の神経ならば立っていることすらままならないほど濃度の高い殺気と力は少女の背後に存在する空間を歪めるほど。

「……魔力、太古から忌み嫌われた異能の力、か」

今更ながらに自らが失った力の強大さに恐怖する。その一割でも力を発揮すれば、この校舎くらいは簡単に破壊できてしまうだろう。

しかしそんな力を躊躇いなく放出する彼女に、天一は違和感を覚えた。

非情な行動をとってみせても彼女は無関係な人間を巻き込める強い精神を持つてはいない。

「お昼にこの屋上の四隅へ、康くんお手製の結界符を張っておいたの。私の全開を出し切っても、この屋上が破壊されることはないわ」

天一の心の中を見たような物言いに思わず苦笑が漏れる。用意周到というか、最初からこの場で戦うつもりだったらしい。

「さあ、あなたの罪、ここで償ってもらおうわ」

少女の姿が一瞬で掻き消える。それを脳が認識するよりさらに速く、両足の筋肉が悲鳴を上げることすらかまわずに駆ける。一瞬でトップスピードに達し、そのまま何も無い空間に刃を振る。風を切り裂くような斬撃は何かにぶつかり中空で止まり、天一の突進もその場で止まることになった。

ゆらゆらと、その場に少女の姿が浮かび上がる。左腕で刃を受け

ているように見えるが、刃は少女の数ミリ手前で停止していて、少女の体には傷一つついてはいない。

「いくら風に乗って速力を上げようと、反射速度が追いつかなきゃ意味がないよな、恵理」

「この……！ どうして追えるのよ？」

「んなもん、勘に決まってるじゃないか」

実際に目で追える速度ではない。耐性があるからこそそれだけの速力を維持できているが、恵理以外の人間がそれを行おうとするならば体のいたるところへ影響が出るだろう。彼女の”風”は彼女の手足であり、同時に彼女を守る鉄壁の楯。今も本気で放った不知火の一撃を紙一重で止めている。

だが不知火の刃を止めている状態では彼女もうかつには動くことが出来ない。一瞬でも気を抜けば不知火の刃が彼女の片手を両断し、鮮血が宙を舞うだろう。それをお互いにわかっているから天一は不知火を握る手に力を込め、恵理は操る風へと全神経を集中させていく。

本来ならこのまま均衡させ、時間を稼いで恵理の消耗を待つところだ。だが生憎と今の天一に、そんな忍耐は存在していなかった。

右手からいきなり力を抜く。台風に吹き飛ばされる傘のように勢いよく押し返された刃、その反動を利用して天一の拳が恵理の顔面へと迫る。不意をつかれた恵理は風に集中させていた神経を霧散させ、右手で拳を受け止める。風に加護がないその手のひらには暖かさがあり、少女特有の柔らかさがある。勢いそのままに体を反転させながら、右足で回し蹴りをあてにいく。天一が不知火を活用しない、その戦い方に驚いたのか恵理は風を使うことが出来ず、防戦に

徹する。

「じ、のおー！」

気合と共に繰り出された右ストレートを紙一重でかわし、無防備になったその腕を横合いから掴み取る。しまったと認識させる隙すら与えずに手首をひねると、少女の軽い肉体はふわりと宙を回転し、地面へと叩きつけられる。

しかし地面に叩きつける直前、天一の頬を鋭い風が撫でた。危険を感じてその手を離し一足飛びに退くと、すでに視界の中に恵理の姿はなく、飛びのいた勢いとは正反対の方向へと飛び跳ねる。直前までいた場所に風の塊が叩きつけられ、コンクリートの地面が少しひしゃげる。結界の上からでも物質に干渉できるほどの力。それがどれだけのものなのかを想像して背筋に冷たいものが走る。

少女の姿をまた見失い、天一は意識を集中させる。わずかな空気の流れ、それを読んで攻撃に備えようとしても恵理相手には通用しない。その流れ自体を彼女が作為的に生み出している場合もある。ならばいつもと同じように、自分の勘に頼るしかなかった。

迷いを捨て去って、天一は前へと駆け出す。そこに少女がいないと知っているから、だからこそ本気で駆けることができた。

風を頬に感じながら、天一は貯水タンクに足をかける。そのまま貯水タンクを駆け上がり、上空へと体を浮かせる。

飛ぶように宙を舞う天一は、不知火を地面へと向け、思い切り振りぬいた。

弾丸のように地面へと降下していくそれは、地上に到達する直前に爆ぜ、屋上全体へと衝撃波を撒き散らしていく。

「きゃーー！」

風がかき消され、恵理の姿がはっきりと捉えられるようになった。もともと上空からなら見えるのではないかと思つての行動だったが、こういつた形で姿が見えるのなら対抗手段が増えてくる。

着地した瞬間、恵理に向けて駆け出す。まだ体勢を立て直せていない恵理は、しかし敵の接近に反応して拳を振るう。素手の状態では恵理の拳を正面から受け止めることが出来ない。紙一重で一撃をかわすが風を纏つたそれは天一の頬に傷をつけ、背後の空間に大量の風を押し出していく。

だがどれだけ威力が大きかろうと、当たらなければ意味がない。

振りぬかれた直後の右腕、その二の腕を右手で弾いて無防備な背中が天一の目の前に広がる。躊躇が生まれるが、しかしすぐに割り切つて両腕を大きく後ろへと引いた。

全身の筋肉を使つて両腕を前方へと押し出す。弓なりになつて数メートル飛ばされる恵理だったが、衝撃を殺しながら踏ん張り、天一に向けて鋭い視線を向けた。

「驚いた……不知火に頼らない戦い方をするなんてね」

「なんだよ、忘れてたのか？ お前に体術を教え込んだのは俺だけ？」

とはいえ渾身の一撃を受けても平然としている恵理を見て、すでに体術では追い抜かれていることを実感していた。体重もかけた、威力が霧散しないように直線状に打ち出した。それでも効かないというのなら、もう体術で攻めても無意味だろう。地面に突き刺さっていた不知火を手に取り、もう一度構えを取る。

今のまま戦っていては勝敗は目に見えている。体術は通用しない、かといって剣技だけで攻めたところで手の内を知られているから対抗される。

天一はほぼ、手詰まりの状況に置かれていた。

「もう諦めたら？ どうがんばったって今のあなたじゃ私に勝てない。並みの人間では敵わないから、私たちの力は魔力なんて大仰な呼び名を得ているのよ？」

「そうかもな。でもさ、最後まで諦めないってのも悪くないと思うんだよ」

恵理の姿を覆い隠すように、天一は視線の高さまで左手を掲げ、広げた。

力のない天一が何をしようとしているのか、恵理には皆目見当がつかなかっただろう。説明する義理もなくて、天一は黙ったままその手のひらに意識を集中させた。

たった一度、師匠の目の前でしか使ったことがない。康すら知らないそれは恵理にとってはまったく予想外のものだっただろう。今

は力を失っている分、余計にそれは意味がある。

左手の前に光の粒子が集まっていく。驚愕に目を見開く恵理を置いて、天一はただ口元を笑みに歪ませた。

「奥の手を見せてやるよ、恵理」

光が徐々に形を保っていく。夕日に照らされたそれは、本来の白を血に染めたような赤に変わる。

「……そんな、それって 不知火？」

現れたそれにやはり恵理は驚愕していた。

左手に訪れた重みは右手とまったく同じもの。造形も色も、全てがまったく同じ。

不知火が二本、その場には存在していた。

「どんな手品を使ったのよ、天」

「……不知火の特性だよ」

左手を下げ、恵理に笑みを向ける。

「不知火は元々この世界に”本体が存在しない”。そんなものが世界に一本あるうが二本あるうが、世界の法則には影響がない。こいつは俺のロザリオを媒体に呼び寄せているだけなのさ。本体の魔力を利用してはいるから、俺の魔力の有無は関係ないし」

「……本体が存在しない？ そんなものが魔力を持っているって、どういうことなのよ？」

「さあ？ この刀の存在自体が反則の品物だ。別の世界、とかがあって、そこに存在してるって考えも出来そうだよな」

暢気に話し続けることをやめ、目に力を込める。戦い方を考えることをやめ、殺気を全身に纏わせる。

「それじゃ少し覚悟しろよ、恵理。あんまり手加減できるほど、こっからは甘くないからな」

二本の不知火を両手で握り、駆ける。

油断していた恵理が周囲に風を集中させる。

だが、甘い。

両手を交差させ、眼前で左右へ押し出す。切り裂かれた風が四方へと散っていき、恵理の顔が鼻先に現れる。

「っ！」

「悪い。こっからが本気だ、恵理」

振り上げられた拳を右手の柄で押しのける。本来は近接にむいていない日本刀だが、天一の手にかかればそんなハンデも関係がなくなる。

急いで距離をとろうとする恵理を追いながら左右の刀を交互に振っていく。逃げるために風を使っているのだろうが、それすらも切り裂いて迫る天一は恵理から見れば悪鬼のような存在だっただろう。なにより今の恵理には集中力がなかった。集中力がなければ力も上手く操れず、体術にも少なからず迷いが生じる。

天一を退けようと一際大きな風の塊が恵理の手から放たれる。片方の刀でそれを受け流し、恵理の足をすくって体勢を崩させ、最後に残った方の刀を恵理の首筋に突きつける。

勝敗は、決した。

膝をついて、恵理は睨むような視線を天一に投げかけていた。

「勝負ありだ、恵理。力を納めろよ」

苦々しく表情を歪め、少女の纏っていた威圧感と周囲を取り巻いていた風が霧散していく。事実上の敗北宣言に胸をなでおろし、天一は両手の刀が消えていくように頭の中でイメージする。すると両手の刀は光の粒子となって消え去り、二人は何も言うことなく見詰めて合っていた。

先に口を開いたのは、恵理だった。

「どうして、殺さないの？ 今ここで私を殺さなかったら、またあなたを殺そうとするかもしれないよ」

「お前はそんなことしねえよ。確信もあるし。それに他のやつに殺

されるよりは、お前に殺されたほうがましかもしれないし」

にやりと口元を歪めて見せると、恵理は苦笑を漏らして両手を揺らした。

「……わかっていて、私に刃を向けたの？」

「まあな。お前が本気で殺そうとしていないことくらいすぐにわかる。何年の付き合いだと思ってるんだよ？」

「……生まれてからずっと……だね」

本当に、ずっと一緒だった。今回の交換留学を抜いて考えるなら、離れていた期間は最長でも三ヶ月。

その三ヶ月が、大きく二人を変えた。

「ジジイとの会話を聞いてたっつのは、本当だな？」

「うん」

「だから俺がどれだけ戦えるか、試そうとしたのか。ここでお前に負けるようなら、動けないようにして戦いから離れさせよう」と

恵理の優しさはいつも不器用だと、天一は思う。

真っ向から好意をぶつけられないのだ、彼女は。どんな時も、どんな人にも。だから最初は優等生の仮面をかぶって、親しくなるにつれて少しずつ素顔を見せていく。他人が怖いのは誰だっ一緒だが、彼女の場合は人一倍その感情が大きい。

それが自分の責任だということくらい、痛いほどよくわかってい

た。

「まったく、この不器用娘が」

「なっ……！　そ、そんな言い方しなくても　！」

反抗しようとする恵理の体を、黙って抱きしめた。昔からよく知っているはずだった少女の体は、しかし想像以上に柔らかくて、想像以上に華奢で、恐怖に小さく震えていた。

本当に、どこまでいっても不器用なところは治りそうになかった。

「こんなに震えやがって……怖かったか？」

「……うん。だって天、本気で斬るんだもん。怖いに決まってるじゃない」

「悪かった。でもなあ、生身の人間にあれだけの力を向けられたら、俺だって本気にならざるを得ないんだぞ」

腕の中で何度も頷く恵理に少しだけ申し訳ない気持ちが始りてきた。確かに本気にならねば殺されていたところだが、大切な人をここまで怖がらせずとも、もっと別の対処法があったかもしれない。

「よしよし。落ち着くまでずっと頭撫でてやるから、泣くのはやめてくれよ？」

「な、ないなんか……泣かないもん。泣かないって約束したから」

「俺の前以外では」だろ？　俺の前なんだから泣いても約束違反にはならないと思うぞ？」

「ふ……ふええええん！　てんのばかああ！」

堰を切ったように胸の中で泣き出した恵理の頭を優しく何度も撫でてやる。どれだけ強がったところで中身は年相応の少女。怖いも

のはどれだけ割り切ったところで怖いに決まっている。

恵理が泣き止むまでこうして撫でていようと決め、天一はただ茜色に変わりゆく空を眺める。

どうしてか、空までもが泣いているような気がして天一はただ、自分の無力さと大切なものを守る覚悟だけを再確認させられたのだ。った。

〔二十九話〕 風の少女と光の騎士と（後書き）

約二週間ぶりとなる更新です。

いやあ、思った以上に実家が居心地がよくて、当初の予定より長く滞在してしまったことが敗因かなあと

さて、天一と恵理の戦いなんですが、いきなり規格外の戦いしすぎじゃね？ と疑問を抱く方が多いでしょう。広瀬もこれでいいのか？ と首をかしげたものです。

ですが初期設定とかをすっかり作ってしまったため、どうしてもこの二人、康も含めて三人は規格外にならざるを得ない、という結果にいたってしまったわけで……。

うん、がんばれ主人公

真紅が空気になりませんように。

〔三十話〕 複雑な気持ち（前書き）

か弱かった少女は今、しっかりと生きている。

すでに自身の手を離れた娘を見るような心境で、少年はただその背中を見つめていた。

〔三十話〕 複雑な気持ち

懐かしい道を歩きながら真紅はただ少しだけ先を行く少女の背を見つめていた。

病的なまでの引つ込み思案さえ改善されれば友達も増え、たくさん人間を惹き付けることが出来る少女だと思っていた。その考えは今でも変わってはいない。彼女が人間として素晴らしい人生を送れるように、当初はそこまで深く考えていなかったとはいえそのためにかつての真紅は奔走した。仲間たちにも協力してもらって、外の世界のことをたくさん少女に教え、感情を揺さぶった。そうして初めて笑顔を見せられたとき、思わず泣いてしまいそうになったことを覚えている。

その彼女が今、元気に日向を歩いている。対照的に自分は、本当の意味では日向を歩けない人間になってしまった。それが自分の責任ではなかったとしても、なんという皮肉だろうか。

立場が逆転してしまった今では、もう自分は彼女を支えることが出来ない。支える必要もない。それが少しだけ寂しく、同時に嬉しかった。

「ここです、私の家。送っていただいて、どうもありがとうございます」

昔から通っていた、つい最近にもやってきた屋敷の門までたどり着いて京はぺこりとお辞儀する。

「ああ。何事もなくてよかったな」

「はい。何かあるとも思えないのですが、こうして一緒に帰ってきてくれるだけで安心できます」

用は済んだと思い、真紅は京と屋敷の門に背を向ける。

もうここに来る必要はないと思っていた。ここに来れば昔のことを思い出して辛くなるだけだと、わかっていたから。

しかしその背に、京はまだ声をかけた。

「お礼といっでは何ですが、上がっていきませんか？」

「……遠慮しておく。これ以上遅くなったら空たちが五月蠅いだろうからな」

嘘だ。空は真紅の行動に干渉などしないし、早苗たちも遅くなっただろうがわんぱくでいいわね、とか言い出すに決まっている。

ここで頷いてしまつたら自分がどうなるかわからないから、真紅はただ首を振ることしか出来ない。

真紅の遠まわしな拒絶を、京は許さない。

「御子柴くんたちにはこちらから連絡します。いかがでしょうか？」

たまには御子柴くんの家とは違う食事をとってみてもいいのではないのでしょうか？」

「いや、だが……」

「ほら、行きましよう？ 一人分増えたところで、コックは大丈夫だって言ってくれますから」

どこから力が湧いてくるのか、引きずられるように門へと近づいていく。

まずい、と認識したときにはすでに遅い。重く閉ざされていたはずの門は開き始め、老齡の執事がやってくる姿が確認できる。

最悪の展開だった。

「お帰りなさいませ、お嬢様。おや、そちらの方は……」

老齡の執事、千崎は真紅の姿を確認し、表情を崩した。

「お久しぶりですね、朝凧殿。先日はお嬢様にご迷惑をおかけしました」

「っ！ あんた、どうして……」

この老執事には”神坂”の名で挨拶したはずだ。簡単に騙されてくれる相手ではないと思っていたが、まさか京の目の前でそう呼ばれるとは思わなかった。

驚愕に体が固まっている。今ならば簡単にナイトメアにやられていただろう。そんな真紅に近寄り、千崎はそっと真紅の鞆を取る。

「お客人には相応のおもてなしを。それがお嬢様の恩人ならなおさらです。ご安心ください、旦那様はまだお帰りになっておりません」「……なんの、つもりだ？ そこまでわかっているのなら、俺がここをどう思っているかなんて」

「存じておりますよ、もちろん」

それならばどうして。真紅が高嶺家を怨んでいると考えないほうがおかしい話だ。そんな不穏分子を屋敷に招くなど、正気の沙汰ではない。

千崎は真紅でも知っている高嶺家の古株だ。それが主の指示もなく、敵となった真紅を迎え入れるはずがない。

「いいじゃないですか、今くらい。」友達”としてお嬢様が招いた人なのです。敵だの味方だのといった物騒な話は、この際ないものとさせていただきます」

「俺が割り切れない、と言ったら？」

真意が計り知れない。子供の頃もそう思ったが、この千崎という執事だけは高嶺家の中でもよくわからない位置にいる。

単なる執事ではない、かといって主の方針に口を出すわけでもない。権力も欲すれば手に入れられただろう。

警戒に値する人物だと、真紅の本能が告げている。

「本当に割り切れていないのなら、先日のあの際にお嬢様を人質にするくらい造作もなかったでしょう？」

「この……ああいえばこう言う」

「ほっほっ、年の功です。あなたのように若い方には言い負かされませんよ」

笑いながら屋敷へと向かっていく千崎。その背中を半ば呆然と眺めながら、真紅はようやく隣に佇む少女へと思い至った。

「っ！ た、高嶺……えつと、これは……」

「？ 千崎さんと何を話していたのかわかりませんが、早く屋敷に行きましよう？」

京の態度から小さな違和感を拭えないまま、真紅は頷くことしかできなかった。

屋敷の中に入って、その足で食堂へと通される。この屋敷に仕える使用人全員が食事をとれるくらい大きなテーブルの端には向かい合う形で二人分の食事が既に用意されていて、どこまでも手際がいいことに真紅はただ警戒心を強めるだけだった。

勧められるがままに席について、真紅は正面に座った京を睨む。敵意はまったく感じられないが、それゆえに父へと情報を漏らしてしまわないとも限らない。

「すみません、無理を言ってしまった。いつも食事は一人ですることになっていて、たまには誰かと一緒に食べたいなあ、と」

はにかみながら告げ、京は早速食事を始めた。上品な食べ方とマナーにそった食事は自然で、彼女の育ちのよさと気品をそれだけで表しているといえた。

口をつけない真紅を訝しく思ったのか、京は不思議そうな顔をしていた。

「どうしました？ 毒が入っていませんか？」

「いや、それはわかるんだが……」

「テーブルマナーなどは気にしなくてもいいですよ？ 私の場合は

癖みたいなものですから」

的外れなことを言われて真紅はただ小さく肩をすくめる。確かに毒は入っていないだろう、そう考えて真紅はナイフとフォークを手に取り、ゆっくりと料理を口に運んだ。

幼い頃に教わった拙いテーブルマナーだが使わないよりはましだと考えて実践してみる。すると京が驚いたような表情を浮かべ、身を乗り出した。

「すごいです！　すごく自然に出来るじゃないですか！」

「……まあ、な。昔かじった程度だが、役には立つたらしい」

そんな他愛のない話を続けながら、真紅と京は食事を続けていく。

楽しいと感じてしまうほど油断していたのは確かだったが、身の危険を感じないほどこの雰囲気は優しく、柔らかかった。

一通りの料理を食べ終え、二人は示し合わせたように席を立つ。

そのまま玄関まで移動して真紅は振り返った。

「思った以上に長居してしまった。何の礼もできなくてすまん」

「いえ、送ってきていただいたのは私です。そのお礼ということですからお気になさらず」

互いの丁寧な物腰に同時に吹き出した。

「はは……正直、こういった堅苦しいのは嫌いだ」

「はい、私も実はあまり得意じゃないです。数年前からこういった

礼儀作法を教えられたんですけど、どうにも上手くいかなかった」

「そうか？ 十分に自然だった気がするが」

「まだまだ、ですよ」

はにかむ京はどこか、昔と同じ無垢な印象を真紅に与えていた。

自分のことがわからなくても、この笑顔を見ただけで十分だ。

そう思わせるほど京の笑顔は魅力的で、真紅は自然と笑みを浮かべていた。

最後の挨拶を終えて屋敷を出ようと背を向ける。今回はとても楽しかった。その言葉を口にしうとして、止めた。

それを言ってしまったら、またここに足を運んでしまいそうな気がして。

それだけはどうしても、ここまで踏み込んでしまっていたとしても許せない。

やってきた千崎から鞆を受け取り、京にもう一度挨拶をして屋敷を出る。何か言いたげだった京を無視したのは、真紅の心がそうさせたのだろう。

屋敷から門まではそれなりの距離がある。そこをゆっくりと歩きながら、真紅はふと思いついたように空を見上げた。

空には無数の星が煌いている。そのどれもが真紅には眩しい。

何も気にすることなく、自分の存在を示すように煌く星。自分の存在を大切な人から隠している真紅にとっては羨ましくもあり、同

時に何か不思議な安らぎを感じることが出来た。

いつの間にか立ち止まっていた自分に気づいて、真紅はまた歩みだす。

しかしその眼前に、予想しなかった男が現れた。

「荘介さんに用だったんだが、思わぬ出会いが出来たみたいだ。久しいね、といつても先日やりあったばかりか」

「……氷室、七夜」

因縁の相手に敵意を向けることも忘れ、真紅はただ呆然とその姿を見つめるのだった。

〔三十一話〕 七夜の行動（前書き）

少年にとって、青年は敵だった。

だが青年にとって、少年は的といえる存在だったのだろうか。

その答えを知るものは、青年以外に存在しないのかもしれない。

〔三十一話〕 七夜の行動

その姿を確認した瞬間から、真紅の神経は極限まで研ぎ澄まされていた。

武器がない今、どんな攻撃をされても冷静に対処できるように姿勢を落とし素早く動けるように細心の注意を払う。

だが肝心の七夜は攻撃を仕掛けてくるでもなく、頭を適当に掻きまわって思案していた。

「うーん、今日は荘介さんに用事があっただけで誰かと戦いに来たんじゃない。そこらへん含めて、今回は休戦といかないかな？」

「その言葉を、信用しろと？」

確かに敵意は感じられない。だが敵を前にして警戒心を完全に解けるほど、真紅は馬鹿ではなかった。

「……なら朝風、君の疑問を解く手助けをしてあげよう。君が俺たちへの対抗策を考える片手間、ずっと抱えていたものだろ？」

「っ！ なぜ、それを知っている？」

「なんとなく、ね。それを投げかけたのは俺自身だ。君ならきっと考えてくれると信じていただけさ」

七夜の真意がよくわからない。

先日の襲撃の際は容赦なく槍を向けてきたナイトメアのナンバースリー。あの時の鋭い殺気と槍筋は今も真紅の脳裏に焼きついて離れない。

恐怖した相手が、しかし今は爽やかな笑みを浮かべ友好的に接してきている。

そんな状況に真紅の思考は、正直な話完全に置いていかれていた。

「しかし、大きくなったね。最後に会った時のことを、君はどれだけ覚えていたのかな？」

「……お前が、俺たちに刃を向けたことくらいだ」

実際、その程度のことしか正確には記憶していなかった。錬とのやり取りなどは今でも克明に思い出すことが出来たが、いかんせん子供の記憶など曖昧すぎてそれ以外の記憶には微妙な霧がかかっている。

その霧を最近では酷く疎ましく思う。もしこの霧さえなくなってしまうえば、自分の抱えている疑問もなくなってくれるのではないだろうか。全て悪いのは自分自身の記憶なのではないだろうか。そんな考えがどうしても生じてしまう。

「あの時”の記憶自体が抜け落ちている、か。やれやれ本当に厄介な力を使っていたんだね、君は。いや、それは今も同じことか」

「何の話だ？」

「ん？ まあこれくらいなら話しても大丈夫だよな」

誰に了承を取っているわけでもないのだろうが、七夜は一人で頷いて真紅に正面から対峙した。

「君には力がある。それはもう気がついていていると思うけど、その力はナイトメアの”作られた力”とは対極にあるものだ。そうだな、

君と同じときに侵入してきた子が使った力、あれと同じ類のものだろう」

天一たちと同じ力、それがどんなものなのか真紅にはよくわからない。だがその力が希少かつ強力なものであることは天一の戦いや言動から何となくだが想像することができた。

「あれは世界の理に干渉する力だ。理を捻じ曲げて、自分の思い描いたものをこの世に生じさせる。その代償を使用者は少なからず背負うことになる。君自身の代償に、何か心当たりはないかな？」

言われて何か引っかかるものがあつた。

力といわれて思い当たるものは人並みはずれた反射神経しかありえない。その力を使った直後、いつも必ず襲ってくるものは何だ。ただの心労だと思って念頭から外していたものがあつたはずだ。

後遺症のように絡み付いていた、頭痛。あれが異常な反射神経の代償だというのなら納得がいく。

「君が本当の意味で”本気”になったとき、その代償は想像を絶するものになるだろう」

「それが、俺の疑問に関連している？」

「さてそれはどうだろうね。そこから先は君自身が思い出すことこそ、もっとも正しい答えだ。俺の推論なんかで結論を出してしまつたら、それこそ面白くないだろう？」

本当に楽しそうに笑う七夜を見ると、つい敵であることを忘れてしまいそうになる。仇であるはずなのに、なぜそう思ってしまうのだろうか。鍊を殺したこの男を怨んでいたのは確かなはずだ。

自分の記憶の曖昧さと、この男の言葉がそうさせているのかもしれない。

「もしまだ疑問があるなら、三日後のこの時間、またここに来るといい」

「……どういふつもりだ？」

「君の疑問はきつと俺たちナイトメアでしか解くことは出来ない」

信用してもいいのだろうか。どちらかという罫の可能性のほつが大きい。

「……刀を持ってくるといい。正面から戦ってあげるよ。きつとそれが、君を解き放つことが出来る鍵だから」

一方的にそう告げて、七夜は屋敷へと歩き出す。

真紅はその背にかけ言葉を持ってない。たとえ持っていたとしても、今はきつと何の意味もなさなかつただろう。

彼の背中からは大きな覚悟が見て取れたから。

真紅を送り出した後、京は大きく息を吐き出した。

当たり障りのない会話ばかりを続けるだけで、本当に聞きたいことを聞く機会が見つからなかった。いや、それを聞いてしまうことを無意識のうちに拒絶していた。

あなたは、私の恩人ですか？

そんな、たった一文に過ぎない問い。それすら言葉に出せない自分が情けなくて、ただただ溜め息を吐き出す。

千崎との会話でほぼ間違いないことはわかっていた。そもそも疑うつもりなどまったくくない。

「私って、ほんとダメな子」

自己嫌悪に陥った京の肩を千崎がそっと叩く。それに励まされ、明日こそはと気合いを入れなおした。

部屋に戻って明日の準備をしようと、玄関の扉に背を向ける。しかしその直後、来客を知らせる音が玄関に鳴り響いた。

真紅が忘れ物でもしたのかと振り返るが、玄関からやってきたその男の姿に京はただ黙って立っていることしか出来なかった。

「失礼。 荘介さんは在宅かな？ 本社に姿がないから帰宅したと思っていたのだが」

恭しく使用人に声をかける黒いスーツの男性。何度か父と一緒にいるところを見たことはあったが、間近で見たり会話したことはな

い。あつたとしても記憶に残らない程度、挨拶くらいはしていたかもしれない。

眺めていた京に気づいて、男性は優しく微笑んだ。

「やあ、荘介さんの娘さんか。話には聞いていたけど美しい。ただの親馬鹿だったわけじゃないね」

「え、えっと……父がお世話になっております」

「ああ、かしこまらなくていいよ。俺とお父さんとは、まあ言ってみれば共犯者みたいなものだから」

意味を正確には理解できない。共犯者と言われても、京の父は何一つ悪いことをしているわけではない。

困惑気味の京を見て、なおも頬を緩めながら男性は京の後ろに立つ老執事へと言葉を投げた。

「千崎さん、荘介さんはまだ？」

「はい。帰宅なさったという報告は受けておりません。本社には本当にいらっしやらなかったのですか？」

「ああ。念のため秘書にも聞いてみたんだが……外に出たときかわからないらしくてね。あの人のことだ、心配はないと思うんだけど」

企業内での父がどのような場所にいるのか京は知らない。知ろうと思ったこともない。父の仕事には興味すらなかったが、男性は京に微笑み、何かを言おうとした。

だが言葉には出来ず、どうやって言うべきかを思索しているようだった。

「あの……どう、しましたか？」
「ん？ すまない。そうだな、やっぱり言っておくべきなんだろうな」

自分一人で結論を出し、男性は一度礼をして見せた。

「氷室 七夜だ。君のお父さんには何かと世話になっている。それで急で申し訳ないんだが、三日後のこの時間帯、庭を使わせてもらってもいいかな？」

「え、それは……父に言つてくだされば……」

「そのお父さんに秘密にしておきたいんだ。野暮用でね。一応君もこの屋敷の主。大丈夫、君たちには何の影響もないはずだから」

本当は父に言ってみなければいけないことのはずだった。しかし京は自然と、無意識のうちに頷いていた。

京の首肯に男性の笑みが深くなる。そしてそっと耳元に顔を近づけ、ごめんねと一言、控えめに謝罪していた。

「では荘介さんが帰宅されたら伝えてください。『氷室が探していました。連絡を入れて欲しい』と」

「承知しました」

「よろしく願いますね」

頭を下げて、男性は早々に立ち去ろうとする。最後に使用人の一人へ軽く声をかけ、男性は振り返ることなく屋敷を後にする。

何が何だったのか、京にはよくわからなかった。

わかったことといえば男性の名前くらいと、何かよからぬことが起きるのではないかという不安だけだった。

〔三十一話〕 七夜の行動（後書き）

珍しく一日に二話分投稿です。

自分の中で一話は三千後半から六千文字までという決まりを設けていて、それにしたがって二話にわけたのですが……

一緒にしてもあんまり変わらないなあ、これは。

ともかく、七夜の行動が少しずつ現れ始めてきました。

当初の予定では七夜は完璧な敵キャラとして設定していたのですが、ここからどうなっていくのか、正直作者自身もわかりません。

今言えることは一つだけ。

がんばれ、主人公。

〔三十二話〕 遊戯、開始（前書き）

一時の休息。

自らを取り巻く世界から一時だけ目を逸らして、少年はただ、その楽しい時間の中へと身を沈めていく。

〔三十二話〕 遊戯、開始

その一日は本当に、騒がしいだけの一日となっていた。

「までえええええ！ その首もらったあああ！」

「いや、ちよつと待てよ！ うああああ、やばいつてこれ！ 何？ 何なんだよ！？ どう考えても学校の競技じゃねえぞ！」

追われる天一と、鬼のような形相でそれを追いかける恵理。どちらかというと天一の援護に回っている康。

校舎全体を使った大レースに、真紅と空はただただ呆れることしかできなかつた。

唐突に担任の叶から言い渡された事例、もとい命令はいたってシンプルなものだった。

『普通科の校舎で開催される出し物に参加してきてください』

特別科の中でもえりすぐりの身体能力、それがなければ役に立たないということを選び出されたのが真紅と空だった。愛美も参加したいといって聞かなかつたのだが、特別に観戦できるという条件を飲んで、今はどこかの実況席で遊んでいることだろう。

しかし出し物の内容を聞いたときは度肝を抜いた。

『普通科全生徒参加種目、大鬼ごっこ』

名前こそ力が抜けるようなものだったが、その内容を聞いたときは真紅も空も、本当に大丈夫なんだろうかと不安に思ったものだ。

鬼ごっこ、その名の通り鬼ごっこだ。しかしその実態は、少々特殊なものであるといい。いい。

鬼はほぼ普通科全生徒。その中で選り出された生徒十一名が頭にプレートのついた鉢巻きを巻いて逃げ回る、といったもの。精鋭ぞろいの普通科の中でそんなことをしようものならば、一発で袋叩きにあいそうなものだ。

鉢巻きを取られた場合、取った相手から一つだけお願いを聞かなければならない。お願い、とはマイルドに言っているだけで、ようは単なる命令だ。実現可能なものに絞り込まれるが、人によっては非常に魅力的なもの。

対照的に最後まで逃げ切った場合、その生徒には相応の景品が送られる。これもまた学園側が実現可能なものならば何でもいい。

鬼たちの大半は面白い出し物に参加する気分だろうが、恵理のように個人的な感情で動く生徒も少なからず存在している。

問題はその十一名の中に、真紅と空も含まれているということだった。

「いや、流石に死ぬだろ」

「大丈夫ですよ。朝風さんと御子柴くんなら、きつと死地を乗り越えてくれます」

「……死地って思いつきり言ってるな」

最初は乗り気ではなかった二人だったが、叶の出した”景品”を聞いた途端、考えが一転した。

空には捜し求めている銃を、真紅には祖父がよく話していた名刀を。それを学園の経費で買ってくれろというのだ。無論逃げ切ったらの話だったが、二人はすぐにオーケーを出していた。

現実には、されどとても非情なものだ。

味方、逃げる側に天一がいたことは幸いだった。最初に逃げるルート、手薄な包囲網の位置、敵の種類などを正確に把握でき、対処法もそれなりに練ることができた。

問題は

敵側に鷺村 恵理という化け物が存在していることだった。

「真紅！ 空！ こっちは一応引きつけておいてやるから、お前たちはさっさと逃げる！」

「わかった。天！ 捕まるんじゃないぞ！」

「わかってるって の！」

恵理の拳を中空で蹴り返しながら快活な笑顔を浮かべる天一。それをフォロワーしているのは敵側のはずの康だった。

『俺の”力”は少し特殊だ』

彼らが持つ特殊な力、それについて教えられたときは信じきれないなかったが、今の天一を見てみると納得がいく。

今、天一は何もない場所を足場にして、一気に人垣を抜けていた。

天一自身は今力を失っている。だからこれは康の力。

空間を固定し、隔離し、圧縮する。”空間”そのものに干渉する力。手品のようなその力は、しかし使い方によっては最悪の凶器になりえる。

そんな力を気づかれずに使って見せるあたり、康のサポート能力は相当のものだった。

そこまでして景品が欲しいのかと天一に聞いたが、彼は快活に笑いこぼした。

『ちよつと恵理と賭けをしてな。負けるわけにはいかねんだ』

どんな賭けをしたのかまでは聞いていないが、どうやら天一にとっては重要な賭けらしい。

そのために人外の力まで駆使するあたり、常識はずれもいいところだった。だが真紅はそれほど常識がわかるわけでもなく、ばれなきやいいんだなあとはなしに納得してしまっていた。

「俺は上に向かう。そっちは下に」

「わかってる。気をつけるよ、空」

三階の階段付近で空と別れ、手すりを伝って階下へと向かう。ど

ここに罠が仕掛けられているか、どこに敵の塊があるかなど、耳元の小型マイクから康が指示をくれる。

『そこを左だ。そつちには簡単にくぐれるトラップと、運動部ではない生徒の部隊がある。そこを抜けて二階の窓から野外へ出るという』

「わかった。他の二人は？」

『どつちも無事だ。空は屋上からダイブするつもりらしい。天の阿呆はまだ恵理ちゃんと交戦中。でももうそろそろ仕掛けに引っかかる頃だ。心配はない』

どんな仕掛けなのか一瞬想像しかけたが、蜘蛛の巣のように張り巡らされたネットを手刀で切り裂くことに気を取られ、すっかり思考の外に追いやってしまった。

十数名の生徒を難なくいなして窓を開け、飛び降りる。幸いなことに地面にトラップはなく、軽やかに着地すると上へと視線を向けた。

もうそろそろか、そう思った直後、真上から威勢のいい声がいくつも聞こえてきた。

「おらあ！　ここまで追ってこられたら　お前らすごいぞ」

最初は小さな影だった。それがだんだんと大きくなっていくにつれ、真紅は両足に力を込め、両手を大きく広げた。

「ヒヤッホー！」

奇声を上げて落下してきた空の体を両手で受け止める。衝撃を少

しだけ緩和して、空は一回転を披露し、体操選手のような華麗なポーズをとって見せた。

「どうよ？」

「むちゃくちゃだな、おい」

もし真紅が衝撃を殺していなかったら、少なからずこの後の行動に支障をきたしていただろう。真紅が受け止めてくれると考えたからこそなせる技だった。

ふと耳元のマイクから不穏な言葉が聞こえる。

『すまん！ 少しミスった。今からそっちに天が行くから、できれば援護してやってくれ！』

慌てたような康の声に真紅は三階の窓へと視線を向ける。なにやら大きな音と共に窓が列を成して割れていく。

破片を避けるためにその場を飛びのくと、三階の窓から一人の生徒が勢いよく飛び出してきた。

「やばっ！ 真紅、空！ 逃げろ！」

宙を舞いながら必死で体勢を整えようとする天一の姿がある。それを二人同時に確認した瞬間、逃げようとした体が硬直した。

天一を追って窓から飛び出してきた恵理。その姿と表情はまさに鬼。実際に追われているわけではない真紅たちですら戦慄を覚える追手に、天一への同情を禁じえなかった。

空と目配せをして一瞬で作戦を練る。最良だと思える手段を一つだけ引つ張り出して、真紅は空に手を広げるように指示した。

「ちょっと我慢してくれ……行くぞ」

空の両腕を利用して高々と跳躍する。落ちてくる天一に手を伸ばし、つかんだ瞬間後ろへと引つ張る。天一の代わりに宙へと取り残された真紅だったが、むざむざ鬼に食われてやるために飛び出たわけではない。

一瞬だけでいい。

その言葉が耳に木霊した瞬間、真紅は全身の筋肉という筋肉を総動員して一発だけ本気の蹴りを見舞った。

流石の恵理でも防御しないわけにはいかない。空中で左腕と足を固め、防御の型に転じる。

攻防がぶつかり合った瞬間、互いの体が逆の方向へと押し出されていく。

ただ予想外だったことが、一つだけ。

恵理は防御しながらも、しっかりと反撃を食らわせていた。防御した腕とは逆側の腕、反動を利用して放たれた拳は真紅の右足を強く打っていた。

鈍い痛みが脳のどこかに伝わってくる。だが自分のすべきことは、

しっかりとやり遂げて見せた。

「 今だ、康！」

腹の底から声を張り上げて、どこにいるかもわからない仲間合図を送る。

瞬間

世界そのものが、凍りついた。

凶器を突きつけられたときのような寒気。その元凶は見えない線をなし、恵理の周囲に四角い”檻”を形成していく。

猛獣を封印する、絶対の檻。それが世界に影響を及ぼすとき、世界そのものが軋んでいく。

「うそ……け」

恵理の表情が色を失う。それと同時に金属がはまったような甲高い音が木霊し、恵理の声が最初からなかったように静寂へと飲み込まれていく。

一瞬の出来事だった。

恵理の体は霧に包まれたように一瞬だけ見えなくなり、その後完全に消失した。

何が起こったのか定かではない。ただ恵理の華奢な体が完全に世界から断絶された、その非現実的な事実だけが彼らの前に残っていた。

「恵理を隔離したのか、康？」

着地すると、真紅たちと同じようにイヤホンをつけている天一がそれに向かって声を投げている。

『ああ。だが、そう長くは持ちそうにない。全力で押さえつけてるんだけどな、長くて五分が限界だ。その間に見つかからない場所まで逃げてくれ。力を失っているお前や真紅たちなら簡単には探知されないはずだ』

「わかった。わりいな、無理を言って」

『お前の無理は今に始まったことじゃないだろ？ 早く行け。思っていた以上に成長してるな、恵理ちゃん』

何事もなかったかのように会話を続けていく天一と康。その内容を自分のイヤホンで聞いていて真紅はただ絶句するしかなかった。

「急ぐぞ、真紅、空。康の力でも少ししか持たないってのは、間違いないく恵理のやつキレてる。隔離がとけたらどうなるわからん」

「……大丈夫なのか？ あれ」

「問題ないよ。死ぬほど強力な結界じゃないはずだし、なによりあの程度で死ぬほど恵理はやわじゃない」

他にもいろいろと気にしなければならぬことがあったはずだが、押し寄せていた敵に気を取られすぐに頭の中から消えていく。

三人は足並みをそろえ、急いでその場から離脱するのだった。

〔三十二話〕 遊戯、開始（後書き）

学園の出し物とは思えないほど過激なものゲームですね、ほんと。

さて次話からはこの鬼ごっこを舞台に話が進んでいきます。

ではでは。

〔三十三話〕 裏側で（前書き）

少女は座して時を待つのみ。

けれど黙って待っているには、その場所には何もなさと過ぎた。

〔三十三話〕 裏側で

光も闇も存在しない空間。

自分の姿だけが浮き上がるように存在しているそこで、恵理は抵抗しようともせずただ虚空に半眼を向けているだけだった。

「……まさか私を隔離するなんて、無茶をするね、康」

手足すら動かせない状況でも酷く落ち着いている自分に驚きつつ、恵理は返答を待った。

『まあね。この学園で最も危惧すべきなのは恵理ちゃん、君だ。君を封じてしまえば天と真紅はまず無事だろう。空は……何か見落としている気がして仕方がないんだけどね』

姿はないが苦笑する康の表情が容易に想像できる。

実際、天一が本調子ならば恵理でも捕まえることは出来ない。その天一によれば真紅もかなりの実力者。確かに普通の学生に捕まるほどやわではないだろう。もっとも空の実力は未知数。康が見落とされているのはその部分ではないだろうか。

「でも、私を封じることが出来るのなら誰かをこの空間に隔離して制限時間を過ぎさせればいいじゃない？ どうしてそんな回りくどいことを？」

『そうだね。空あたりなら力もないから簡単なんだろうけど、問題は天と真紅かな』

康の言葉には疲れと、少しだけ驚愕の色が籠もっていた。

失っているとはいえ、もともと天一の力は計り知れないものだ。イレギュラーを危惧してこういった手段を使わなかったことには納得がいく。しかし真紅は何の力も持たないただの人間だと、恵理はずっと思っていた。

「どういうこと？ 真紅には力なんてないはずよね？」

予想していたのか、康はすぐに返事を寄越す。

『どうやら、その見解が間違っていたみたいなんだ。彼の中には大量の”力”が眠ってる。それも天に引けを取らないほどの、ね。天が言っていた並外れた反射神経っていうのは、おそらくそれが原因なんじゃないかと思うんだよ』

天一の一撃を難なく避けるだけの反射神経は確かに驚愕に値する。

ああやって飄々とした態度で振舞ってはいるものの、天一はそれに見合わぬ戦闘能力を持っている。

「私たちとはまた違ったベクトルの力、ということ？」

『そういうこと。推論でしかないんだけどね』

しかし康の推論は、的を射ているような気がした。

確かに真紅からは天一のような絶対に敵わないと感じさせる何かが出てくるわけではない。だがそれゆえに何か、警戒しなければならぬという本能レベルの何かを感じずにはいられなかった。

「私たちの場合は力を何らかの形で放出することに適している、そう教えてくれたのは天よね？ それはつまり、内部で扱うことでもきるってことなのかな」

『どうだろう？ そんなこと考えたこともないね。天がこの力についてどこまで知っているのかわからない以上、本人に確かめるしかないんだろうけど』

その本人とやらが自覚しているのかどうか。恵理は小さくため息をついて、虚空へとまた声を投げる。

「ところで、いつまでここに封じ込めているつもりなの？ そろそろ五分経ったと思うんだけど」

『あれ、聞こえてたんだ？ でももう少し待ってくれるかな』

珍しい、と素直にそう思ってしまう。

力を行使しているとき、康にはそれ相応の負荷がかかっている。

出来ることならばすぐにでも解除したいだろう。

何かあったのが、少しだけ興味がわいた。

「何してるの？ こっちを解除する手間すら惜しむなんて、よほどのことじゃないんでしょ？」

『……どう、だろうね。面白いとは思っただけど、大事ではないかもしれないな』

康が天一のようなことを言っている、恵理はただ驚いていた。

天一は大事なことよりも、楽しいと感じたことを優先する。対照的に康は大事なことを優先し、自分のためになることを後回しにする。

る傾向があった。

その康が”面白い”と言う。大事なことを後回しにしてでもさねばならぬことはいつたい、何なのだろうか。

「なあにをやってるのかにやあ？ いい子ちゃんの康くんは」

『は……ははは、いい子ちゃんつて……少し、ね。この学園の秘密とやらが、拝めるかもしれないんだ』

「学園の、秘密？」

康の声は歓喜に満ちている。

もともと体を動かすことより、知的欲求を満たすことに快感を覚えるような人だ。恵理が理解できないことに夢中になる、などということは日常茶飯事だ。しかし今回はわをかけて、理解しがたい。

「なんなの、その、学園の秘密って言うのは？」

話してもらえないことを覚悟して口にした言葉だったが、康は嬉しそつに言葉を寄越した。

『この学園の設立者、および出資者についての資料。それに理事関連の資料を洗い出しているんだ。この大騒ぎの中ならさほど警戒もないと思っつてね。すると、ビンゴ。ハッキングをかけたら思った以上に簡単に引き出すことができたよ』

「ハッキング？ そんなこともできたんだ」

『情報屋をやっているのは元々俺だよ、恵理ちゃん。最近では潜入を天にまかせつきりだから、いろいろと腕が落ちているかもしれないけどね。っと、脱線したね。それで出てきた資料、それも出資者、理事関係の両方に気になる名前がちらほらとあるんだ』

恵理は先が気になって、黙って先を促した。しつかりと聞いているという気配でも伝わったのか、康の声はさつきよりも弾んでいる。

「その人たちはこの前、天が潜入した企業の重役だ。出資したのはかなり昔。今は全員が老人だろうね。ただ現在の理事たちの中にはその息子やら孫やらが名を連ねている。驚いたよ。大企業が運営している学園。それも真紅たちにとっては完全に”敵”が仕切っている学園だ。真紅たちはこれを知っているのかな？」

「……知らない、でしょうね」

もし知っていてこの学園にやってきたのだとしたら、大した度胸だ。恵理や康、天一だったとしてもそんな無茶をしようとは思わないだろう。

しかし、ここが敵の運営する学園だったとするならば真紅の存在は敵に筒抜けということになるのではないだろうか。

そんな恵理の心配を見越して、康が優しい声を寄越した。

『でもどうやら真紅の情報は、あちら側に届いていないようだね。学園の教師陣の中に手を回している人がいるようだ。真紅にはそんな話聞いていないけど、たぶん間違いなく協力者がいるんだよ』

「それじゃあ、今のところは大丈夫ってこと？」

『うん。もっともそれもいつまで続くか、ね。理事たちもそうだけど、この学園の生徒たちは多かれ少なかれ企業と繋がりを持っているようだ。いっばれるか、今の真紅は綱渡りよりも危険な場所を渡っているんだ』

周り全てが敵。互いが気づいていないだけで、いわば一触即発の

状況と大差はない。真紅が確実に信頼できるのは空と愛美と、天一たちだけだということだ。

もし自分がその立場に置かれたのだとしたら、きつと疑心暗鬼になって孤独の道突き進んでしまうだろう。朝凧 真紅という人間を少しだけ見直す必要があるようだ。

不意に四肢を包み込んでいた浮遊感が揺らいだ。おそらくはこの空間が紐解かれようとしているのだろうが、確認するように恵理は声を投げた。

「もう終わったの？」

『うん。あらかた情報は落としたり、後はログを消して撤退するだけだね。ここからは本気で天たちの援護に回るよ。何なら皆の位置を教えてあげようか？』

かなりの時間をこの場所で取られているため、天一たちはすぐには見つからない場所へと移動しているだろう。康の申し出はなかなか魅力的なものだ。

だが恵理は唯一自由な首を横に振り、口元だけで笑って見せた。

「自分で見つけるほうが、なんか面白そうだからいいや」

『はは……そういうところは、やっぱり天に似てるね』

言葉と共に、一筋の光が何も無い空間へと降り注ぐ。同時に闇が生まれ、だんだんと双方の力が拡大していく。

気がつくとも恵理の体は、隔離された空中へと舞い戻っていた。

着地と同時に、全身のばねを使って走り出す。

人が集まっているところへ行けば、逃げている人間は必ずいる。それが天一たちではなかったとしても、しらみつぶしにあたればいつかは見つかるだろう。

子供の頃よくやったかくれんぼのような高揚感に浸りながら、恵理はさらに笑みを深め、校舎へ向けて駆けるのだった。

〔三十三話〕 裏側で（後書き）

そろそろ後書きで書くネタがなくなってきた今日この頃。

やっとファンタジー要素が出てきた感じですが、ちょっといきなりすぎた感じもしますね。一応最初からあった設定なのですが、もう少しちらかせておくべきだったなあと反省しております。

もう少しこの遊びは続きます。ではでは。

〔三十四話〕 散開（前書き）

残り少ない時間。

けれど遊戯はまだ続いていく。

〔三十四話〕 散開

「おらおら、お前ら！ あんまり前に出すぎると怪我するぞ？」

実に楽しそうに、天一は剣道部の連中から奪い取った木刀を二本、振り回しながら敵を蹴散らしていく。天一曰く二刀流用の木刀らしいのだが、確かに真紅が他の剣道部員から奪った木刀よりも少し短い気がする。

現在三人は剣道部の部室付近を抜け出し、体育館の中を一直線に突破しているところだった。一直線といっても事前には設置されていた障害物なども多く、三人で一緒に行動しようとするとなんざや狭い。

野外に部室や体育館があるため逃げ道は他にもいくらかあったが、康と連絡が取れなくなったことや互いの戦闘能力を把握するためにも、あえて敵が多い場所を選んで進んできた。

結果として、身体能力だけならば三人とも同程度。あとは実戦を乗り越えてきた場数で真紅と天一が上、というところだろうか。その結果というわけではないが、空は敵から武器を奪うことができなかった。もっとも奪ったところで空の得意な武器は銃。流石に学園内で使用できるものではない。

「しかし、流石にこのまま全校生徒を相手にするのは難しいぞ。一般人とはいえ、運動神経や知能はそうとうなものだ。このまま数で押し切られたら、いずれ空がつぶれる」
「って、俺が最初って確定してるの？」

「そうだな。流石にちょっと、手加減がしづらくなってきてはいるな！」

走りながら天一は二本の木刀を左右に一閃する。アメリカンフットボールのユニフォームを着た男子生徒二人は一瞬で気を失い、その場に音を立てて崩れ落ちた。それにつられたわけではないが真紅も片足を軸に円を描くように一閃する。一斉に襲い掛かってきた生徒たちを力いっぱい吹き飛ばし、また駆け出す。空も上手い身のこなしで奇襲を退け、手をひらひらと揺らして冷やしていた。

「お前だけ素手じゃん。誰が最初につぶれるかは目に見えてるって」「う……でもさあ、流石に学園で銃をぶっ放すのはなあ」「銃刀法違反とかで捕まるな、確実に。もつとも、俺たちも人のことをいえない気がするが」

三人そろって、笑う。案外余裕があった自分に驚きつつも、片手で持った木刀を軽く一振り。物陰から襲ってきた生徒の顔面を捉え、鼻血を出しながら男子生徒は床に倒れる。

少し狭いため、思い切り振ることはできない。その点では天一の使う木刀の方が小回りが利いていいだろう。

しかし、そろそろ木刀の強度が心許ない。何人もの生徒を吹き飛ばしているせいで、刀身はぼろぼろ、柄も軋んでいる。あと何発殴れるのか。少なくとも二桁に届かぬうちに壊れてしまうだろう。

「……天、一つ提案だ。このまま三人で固まっているのもまずい。どうせ康からの連絡も途絶えていることだ、ここからは三人、ばらばらに行動しないか？」

元々、康の負担を軽くするため一緒に行動していたのだ。康のサポートが途切れている今、共に行動していても敵を寄せ付けるだけ

だった。

それならば三方に別れ、生徒たちを分散させたほうが各自が生き残る確率も上がるだろう。

天一も考えは同じだったのか、あまり考えるそぶりも見せず頷く。

「だな。俺はこのまま校舎へ戻って敵を攪乱する。二人はどうする？」

「俺は野外で戦おう。その方が上手くこいつを使える。空は……何ならこの際、新しい武器にでも挑戦してみたらどうだ？」

何の気なしに話を振ってみるが、空からの返事はない。振り返ってみると空は興味深そうに倒れている生徒から長い棒を取り、目線の高さまで掲げて眺めている。

「空？」

「うん？ あ、わるいわるい。散開するんだっけ？ 俺もちょっと面白いもの見つけたし、俺たちの校舎付近まで移動するかな。あつちは確か、被害が出ないようにつて下校してるはずだよな？」

「ああ。京たち一般生徒はもう下校済みだ。備品は流石に壊さないようにしろよ？」

了解と言う代わりに親指を立て、空は棒　　槍を構える。先端の凶器部分を取り除かれているだけで、それはれっきとした槍だ。リイチは申し分ないし、疲れ始めていた空にとってはちょうどいい武器となるだろう。

真紅や天一もそろそろ新しい武器を探さなければならぬ。そういった点でも散開することは、今取れる最も有効な手段と言えた。

「それじゃ、残り時間も生き残れるよう健闘を祈ってるぜ」

片手で二本の木刀を握り、天一は右手の拳を突き出す。

「そつちこそ。負けるなよ?」

それに応え、真紅も拳を突き出した。

「もうかなり時間がたってるし、もう一ひとふんばりだな」

最後に空の拳が突き出され、三つの拳が軽くぶつかり合う。

それを待っていたかのように、物陰から大量の生徒たちが押し寄せてくる。

三人はそれぞれ別の方向へと逃げながら、襲い掛かる敵を切り伏せ進むのだった。

〔三十四話〕 散開（後書き）

星野ジャパンを見ていたら更新が遅れてしまいました。ちょっと反省。

今回、さほど量はないのですが、繋ぎという意味ではまあいいくらいかなあと思っています。

どうでもいいことですが、本編より後書きで書くネタを探さねば……。

さて次話は少し込み入ったお話。あいつとあの子の関係が明らかに（！？）。

ではでは。

〔三十五話〕 朝倉と、鷲村と（前書き）

少年と少女。

分かたれたはずの二人が会うのは、偶然か、運命か。

どちらにせよ、向き合うべき時が近づいているのかもしれない。

〔三十五話〕 朝倉と、鷲村と

余裕の態度を貫き通していた天一だったが、実際はそれほど余裕があるわけでもなかった。

「まったく、厄介だよな、普通の人間ってのは、よ！」

振り向きざまに片手の木刀で切り伏せ、また走り出す。それを繰り返しながら校舎へと移動してきた天一ではあったが、その後どうやって行動しようか、などまるで頭になかった。

今までどれだけ力に頼っていたのか。失った今ならば、それが痛いほどよくわかる。

力とは、いうならば生命力だ。自身の生命力を無理やり引き出し、超常現象のようなものを引き起こす。惠理の風然り、康の結界然り。天一にも天一なりの力が備わっているはずだったが、生憎と今はその全てを使えなくなっていた。

だがそれは、本当に失ったと言えるのだろうか。

天一の中で何か、引っかかるものがあった。

烏丸と戦っていたとき感じた、虚脱感。あれは確かに力を失ったような感覚だった。だがそれが、自分の力を全て失ったことに繋がっているのか、と問われたなら答えは否だろう。

昔、本当に昔に一度だけ、あれと同じような状況に陥ったことがある。

体の中に溜まっていた力を全て吐き出して、地面は歪み、四肢の感覚はなくなり、喉は枯れ果てた。

あの時は数日動けなかったものの、その後は何の問題もなく力を行使できた。

「……ずいぶん昔のことを……俺もやきが回ったかな」

柔道着の男子生徒を二人、駆け抜けながら叩き伏せて一人こちる。

嫌な思い出だったはずだ。消し去りたい過去だったはずだ。それでも、それでも絶対に忘れられない。忘れることなんか、できやしない。

「くそっ……こんなところ、恵理にでも見つかったら」「見つかったら、どうなるのかなあ？」

嬉しそうな、獲物を見つけた狩人のような声。まさにその通りなのだろうが、余裕など微塵もなく、天一は前のめりになってそれを避けた。

頭上を通り抜けたのは、風の刃。かまいたちという自然現象を強制的に引き起こし、それは廊下の硬い壁に傷をつけ、数メートル前方で霧散した。

証拠が何一つ残らない、絶対的な凶器。こんなものを簡単に引き

起こせる人物など一人しかいない。

「みいつけた。こんなところにいたんだね、天。てつきり私が怖くて隠れてるのかと思ったよ」

「ず、ずいぶんとご立腹のようですね、恵理さま。いやあ、僕用事を思い出したんでダッシュで消えます。もうマッハで」

そのまま振り返らず、恵理の顔を見ないで逃げ出したかったが、左右を縦のかまいたちが走りぬけ、身動きが取れない。

「せつかく逢えたんだから、もう少しゆっくりしていいと思わない？」

「い、いやあ、俺もそう思うんだけどな、どうしてもはずせない用事なんで。じゃ！」

片手の木刀で窓を叩き割り、飛び出す。しかし恵理もそれは予想していたようで、窓から飛び出したのはほぼ同時だった。

飛び出してから失敗だったことに気づいた。

脱出の手段はさつきとなんら変わらない。恵理なら簡単に予想して、一手先を読んでいただろう。さらにここは空中。力があつた状態ならまだしも、今は逃げるすべがない。

絶体絶命、その言葉が脳裏をよぎる。

恵理もまったく手を抜く気はないようで、高速で振りぬかれた拳が天一の鼻先を掠めていった。

寸前で体をひねっていないければ、失神くらいはしていただろう。

もう一度同じことをされたら、流石にもう避けきれない。

「終わりね、天。楽に殺してあげる」

趣旨がすり替わっている。本気で殺しに来ているわけではないが、天一の意識を落としてから、簡単に物を手に入れるつもりだろう。

だがそんなこと、死んでも許せるものか。

「なめ……んなよ！」

筋肉なんて切れていい。神経なんて歪んでいい。骨なんて軋でいい

今この瞬間、彼女の追撃を逃れられるのなら。

空中でのけぞった体を無理やり回転させる。四肢の筋肉が悲鳴を上げるが、痛くない。両腕の神経が痺れているがかまわない。背骨が軋むような違和感を感じるが、興味はない。

馬鹿かもしれない、こんなところで体を痛めつけても意味はないのかもしれない。いっそのこと負けを認めてしまえば楽になれるだろう。

だが簡単に諦めてしまえるほど、物分りがいい覚えはない。

恵理の拳が天一を捉える直前、片手に握っていた木刀がその間へと割り込む。拳とぶつかった衝撃で体が押し返されるが、その反動でもう片方の木刀を振りぬく。

狙いは彼女の、わき腹。手加減ができていないから骨の一本や二本くらい折れてしまいかもしれない。

心の中で謝って、けれど手を抜くことはなかった。

裏をかいた攻勢だったはずだが、恵理は片腕で木刀を防ぎ、直撃だけは避けて見せた。しかし防いだ腕もろとも地面の方へと叩き落され、背中から落ちるところを何とか受身を取り、事なきを得た。

天一も着地し、恵理へと視線を向ける。

何事もなかったように立ち上がって見せるが、天一の目は誤魔化せない。左腕を庇うように立ち上がった仕草。若干引きつっている表情。何より

今にも泣きだしそうなのその瞳が全てを物語っていた。

「黙って寝てる。木刀だったからよかったものを、真剣なら胴体両断されてるぞ？」

「あはは……確かに、ちょっとこれはキツイ、かな」

強がることを止め、恵理は小さく舌を突き出して、膝をついた。

途端に荒くなる呼吸。辛そうなその姿に思わず駆け寄りてしまっ
そうだった。

「ほんつと、容赦、ないなあ。天は」

「否定はしねえよ。顔見知りでも、仲間でも、倒さなきゃならない
ときは倒す。俺は……冷血なんだ」

「……ごめん、ね」

少しだけ、意地が悪かったかもしれない。

禁句に近いその言葉を易々と口にしてしまった自分に、反吐が出
る。恵理から視線を逸らし、何も見ようとしない自分に腹が立つ。

「どうして、お前が謝るんだよ？」

「はは……なんで、かな？ 私も、わかんないや」

恵理にしては弱すぎる声。

今の恵理はきつと、体だけでなく心までもが傷ついている。

天一の放った、たった一言のせいだ。

もう賭けだのゲームだの、どうでもよくなっていた。

糸が切れた人形のように倒れる恵理の体を、地面に落ちる前に抱
きとめる。

「あ、あれ？ どう、して？」

おそらく目を見開いて、予想していなかった事態に驚いているであろう恵理。その顔を見ることなく、天一はその体をそっと抱きしめた。

「うるせえよ。黙って寝てろ。じゃないと力づくで寝かせるぞ？」
「え、それは……イヤ」

よほど体が痛いのか、いつもなら愚痴の一つでも寄越すところを、今日は黙ったまま天一の腕の中に納まっていた。

懐かしい重みと、暖かさと、心地よい鼓動。こんなことがなければきっと、もう二度と感じるものがなかったもの。

決別したはずのそれを、今一度手にしている。

悪い、母さん。今だけは許してくれ。

天国にいるのか、はたまた地獄にいるのかはわからない。どちらにせよ母は、今の天一を許すことはないだろう。

それでも一応、建前として謝っておいた。

「……懐かしいね。昔はよく、こうやって抱きしめてもらってたっけ」

まったく棘のない言葉は安心している証拠だ。怪我をさせた張本人の腕の中だというのに、よく安心できるものだ。半ば呆れながらも、天一はその美しい黒髪をそつと撫でた。

「おてんば娘は近所の餓鬼どもに喧嘩売って、全員のしたのはいいけど母親連中に怒られて、勝手に人の胸へと泣きついてきたのでした」

「ちょ……！ そんな昔の話、持ち出さないでよ」

「こんな機会でもなけりゃ、お前恥ずかしがって殴りかかるだろ？」

図星を指摘されてぐうの音も出ないようだ。首筋まで真っ赤に染まって、いつものように恥ずかしさを発散できずにいる。

そんな姿が妙に可愛くて、それでいて懐かしい。

もうずいぶんと、こんな近くで、こんな柔らかい雰囲気の中で、恵理と二人つきりになっていなかった気がする。

「……ねえ、天」

「ん？ どうした？ もう動けるようになったのか？」

凄まじい勢いで恵理は首を振る。胸板あたりに頭があったから、何発かは頭突きのような衝撃を与えている。

「この状況なら、天は絶対に、私の期待を裏切らないと思って」

何を言っているのか、一瞬天一にはわからなかった。だがその意図と、次にやってくるであろう言葉を理解したとき、天一はただ自分の不甲斐なさと、仏心を呪った。

「誤魔化さないで、答えてね。どうしてお母さんを 殺したの？」

そう遠くない過去、何度も投げかけられた問い。そのたびに同じ答えを返し、同じような殺意を向けられ、同じようにいなしてきた。

時には凶器を向けられ、時には屋上から突き落とされ、時には淀んだ瞳を向けられた。彼女が絶望しないために力の存在を教え、覚醒させ、力を昇華させた。

そうすることで彼女に『朝倉 天一を殺す』という目的を与え、自ら死に急ぐような真似をさせない布石とした。

恵理にとつての母親は優しい人であり、いつも全てを見守ってくれていた人だった。

それは、天一にとつても同じだったはずだ。

「ねえ、答えて……答えてよ、”お兄ちゃん”」

いつの間にか胸板に押し当てられていた額は離れ、恵理の瞳は天一の正面にあった。だが天一にはその瞳を直視する勇気はない。目を閉じ、ただ歯を食いしばって耐えることしか、出来はしないのだから。

これは、罰、なのだから。

〔三十五話〕 朝倉と、鷲村と（後書き）

またしても……またしても星野ジャパン……！
ええい、見入ってしまったのではないか！

星野ジャパンは残念だったなあと、言葉以上に落胆している広瀬ですが、そろそろ物語の事に触れないと後書きにならない気がします。

天と恵理の関係、隠しているようであるで隠していなかったような気がします。気づいていた方もいらっしやったことでしょう。
むしろ気づいて！ お願い！

恵理が投げかけた想いですが、天はどんな答えを返すのか。次話に、と言いたいところですが次話はまた違ったお話。
こちら辺で主人公にもスポットを当てなければ……主人公が空気のような扱いに！

ではでは。

〔三十六話〕 黒幕（前書き）

遊戯としては、あまりにも不利な状況が続いていた。

少年にとってそれは、予想できることではあったが喜ばしいものではなかった。

〔三十六話〕 黒幕

いつも通っている方の校舎付近まで逃げてきた真紅は、周囲に敵がいなかったことを確認してから深く溜め息をついた。

三方に分かれた際、最も多くの敵をひきつけてしまったのは真紅だった。

意識を保っていた運動部員の大半が一拳に詰め寄ってきたときは流石の真紅でも恐怖したものだ。結果として切り抜かれたからよかったものの、もうあんなむさくるしい状況に陥ることは勘弁してもらいたい。

「ここまで……ヘビーだったとは、な」

ナイトメアと戦っていたとき以上の疲労感に全身が悲鳴を上げている。流石に違う校舎の付近は手薄のようだから少しくらい気を抜いてもいいのかもしれないが、真紅の性格がどうにもそれを許さなかった。

さっきまで握っていた木刀も、今はない。生徒たちを蹴散らしているとき、ものの見事に真つ二つになってしまった。

武器になるようなものを探そうにも、畏を警戒しなければならぬから動きづらい。本気で殺しに来ている相手なら迎撃もしやすいが、生徒に大怪我をさせるのも躊躇われた。

ある意味ではこのゲーム、実戦よりも厳しい。

「さて、あとどれくらい時間があるんだ？」

「そうねえ、あと十分くらいじゃない？」

背中にかけられた能天気な女の声に、真紅はもう一度溜め息をつくだけだった。

少し前からつけられていることは知っていた。だからこそ一網打尽にされないよう散開を提案し、案の定その人物は真紅一人に狙いを絞り、こうして追いかけてきた。

もつとも、その人物が特定できていなければあんな提案はしなかったかもしれないが。

「教師は参加しないんじゃないのか？ 叶」

「いやあ、面白そうだったから、つい」

「ごめんごめん、なんて軽い口調で謝ってはいるが、本心でないことはすぐにわかる。白衣を羽織ったその女教師は両ポケットに手を突っ込んだまま、真紅の前に立っている。」

「他の生徒に俺たちの居場所を教えたのもお前だな？ ほぼ全校生徒が襲ってこなければ、あんな人数集まらん」

「はは、他の参加者はあらかた鬼に捕まっちゃってね。捕まっていないのは真紅たち三人ともう一人、どこかの部長さんだったかな。ともかく、それならちよつと指示してあの子の力を見ておきたいなあって」

自軍の戦力を正確に把握しようとするのはいい心がけだと思う。

だがそれ以前に叶の言葉には説明のつかないものが混ざっていた。

「……叶、お前どうしてあいつが今回の協力者だと知っている？」

天一のことは協力者ができたと話していたが、どんな人物なのかは話していなかった。ならばどうして天一のことを協力者だと判断できるのか。

「あなたは特別科の生徒と面識はほとんどないでしょ？ それなのにその生徒と仲良く逃げている。そんな状況を見たら、その子が協力者だってわかるわよ」

「なるほどな。確かにあいつは協力者だ。その推論も当たっている」

得意げに笑う叶。だが真紅は言葉を止めることなく、少しずつ網を縮めていく。

「しかし、いつから見ていたんだ？ あいつと恵理が戦っているところを見なかったら、さして把握したとは言えないぞ？」

「恵理？ それって最初にあなたたちを追っていた女の子のこと？」「そうだ。あいつも協力者だ。今日までどれだけの力かわからなかったが、あれを見たら戦力としても十分だろう。むしろお前よりも強いかもしれんな」

鬼のような、と言えば真紅にまでその牙を向けるかもしれないが、そう思わせるほどの脅威を彼女は見せ付けていた。

あれならば天一が事前の打ち合わせなしに、戦力として連れて来るのも頷ける。彼女の参戦を知らされたのは、顔を合わせた直後だったはずだ。

「失礼ね、私のほうがもうちょっと強いわよ」

「どうか。あいつらはお前たちナイトメアと真逆の力を使っているらしい。俺も直に見たが、あれは人間業じゃない」

恵理を捕らえた、結界とも呼べるあの技。あれは明らかに人間のそれを超越していた。あんなことができる人間が何人もいたらこの世界自体が狂っているとしたか思えなくなるだろう。

天一や恵理を見る限りでは、すでに狂っていると言えなくもない。

「へえ、そんなに凄いものだったんだ。ちょっと見てみたかったかも」

「見なくて正解だ。あれは心臓に悪すぎる。自分の目が信じられなくもなる。ところで恵理、お前はいつから俺をつけていた？」

「ゲームが始まった直後からだけど？」

何の気なしにした質問、返ってきた答えもまたさほど考えて出てきた言葉ではないだろう。

だからこそ真紅にとってはちょうどよい。

叶は自分がしたことが全てばれていないと信じ込み、だからこそこうやって平然と真紅の前に立っている。それ自体が誤算であると気づかぬまま。

そろそろか。真紅は気づかれないように小さく溜め息をつき、また何事もなかったように言葉を放った。

「しかし、康はすごいな。恵理みたいな化け物と正面から打ち合えるなんて」

「え？ あの時一緒にいたのは、天って子でしょ？」

かかった。

決定打、とまではいかないが切り口を手に入れた真紅は、今まで大人しくしていた分の不満を全てぶちまけるため、語気こそそのままに攻めへと転じた。

「どうしてそいつが天だとわかる？」

「だって、あなたがその子のことを天って……」

「俺はお前と会ってから、一度もあいつの名前を口にしていないはずだが？」

途端、叶は狼狽する。

自分の失言に指摘されてから気づくなど、まだまだ甘い証拠だった。

「おかしいよな。俺は一度もあいつのことを”天”とは言っていないのに。どこで調べたんだ？」

「そ、それは……学園の名簿よ。あの子のことを名簿で調べたの。そうしたら名前が天だって……」

「それもおかしいな。あいつの本名は『朝倉 天一』。俺たちが愛称代わりに天と呼んでいるだけで、名簿には天一としっかり記入されている」

本当に名簿を見て名前を知っているのだとすれば、この程度のことにはすぐに気がつく。確信こそ持っていなかったが、多少の勘も

働いてくれているようだ。

「さて、あといくつか攻める手段とネタはあるのだが、どうする？
素直に自分の非を認めれば、あまり酷い目にはあわせないが」

「う……い、いつから気づいていたの？」

「このゲームが始まった直後に」

観念したように両手を挙げて、叶は参りましたと敗北を認めた。

もし真紅が”それ”に気づいていなかったら、納得がいかないことがたくさんあった。

異常に集まってくる運動部の生徒たち、康のサポートをいかくぐって張られているトラップ、多すぎる奇襲。極めつけは康と連絡が取れない、今の状況。

全ての元凶が目の前にいる教師だったとすれば、説明も納得もできる。

「お手製の盗聴器、額のプレートにも埋め込んでいたんだろう？」

だからこそ会話で状況を把握し、発信機としての機能で位置を特定し、サポートの及ばない場所にトラップを張ることができた」

「知っていて行動していたってどういうの？ 私が裏から指示を出していたと知っていて、それでもゲームを続けていたってどういうの？」

「言ったろ。協力者は今度紹介するって。今回はその実力を知ってもらったものだと考えればいい。これが終わった後にも、正式に紹介しよう」

叶のせいで面倒な状況になってしまったが、そのおかげで互いの力を再確認できたのも事実だった。

康の力は実際に目にしていなければ信じられるものではない。恵理の力も確認することができた。考え方によつては感謝しなければならぬなど、真紅は溜め息をついた。

「その必要はないかもしれないなあ」

「……康？」

振り返ると制服の上着を肩にかけた康が、柔らかな笑顔を浮かべて立っていた。

真紅が気づかないほど気配がなかったのは、情報屋としての癖なのか、何か意図があつてのことなのか。どちらにせよ手間が省けたかもしれない。

「学園側に協力者がいるとは思っていたけれど、あなたでしたか、朝倉先生」

「あら、あなたは……交換留学生の」

元来、特別科と普通科の教師陣は別のものだというが、どうやらこの二人には面識があるようだ。小さく首をかしげていると、康はまた笑みを深めた。

「朝倉先生は優秀な科学の先生でね、特別科にも授業に来てくれるんだ」

「へえ、あんた案外優秀な教師だったんだな」

褒められて気を良くしたのか、叶は白衣に手を突っ込み、胸を張っている。

本当に、今までのナイトメアとは比べ物にならない人間っぽさだ。叶を見ていると錬のことを思い出しそうになる。

もし叶の言う番号付きが全て、叶たちのような感情豊富な者たちだとしたら。

真紅は、倒すことができるだろうか。

殺すことが、できるというのだろうか。

今までのナイトメアは、感情をほとんど持たない機械のような存在か、どこか狂っていた。

だが叶たちは、どう考えても人間ではないか。自分の刃が迷いで鈍らないとは、言い切れない。

「どうした、真紅？」

鼻先に康の中性的な顔が飛び出してきて、真紅は一瞬言葉を失った。しかしすぐに自分を取り戻し、首を振る。

「なんでもない。ところでさっきはどうしたんだ？ いきなり通信不能になって、天が慌てていたんだぞ？」

「あの天が？ はは、ありえないありえない。慌てているように見えて、その実絶対に動揺しないんだ、あいつは」

目の前で手を振って、無い無いと否定するが康の顔には笑みが浮かんでいる。

「つとと、忘れるところだった。真紅、君に伝えなければならぬことが、いくつもあるんだ、聞いてくれるかい？」

柔らかい口調だったが、瞳に宿る真剣さと有無を言わさぬ雰囲気
に、真紅は逆らうことをしなかった。

〔三十六話〕 黒幕（後書き）

今回までで二週間近く溜めてあった分の更新が終わりました。

一度に全部更新しなかったことには目を瞑ってください。

さて次話あたりからまた更新ペースが遅くなりますが、今しばらくお付き合いいただけると幸いです。

ではでは。

〔三十七話〕 眞実への一歩（前書き）

自分の知らないところで何かがある。漠然とわかっていたとしても、今の少年には知るすべがない。

〔三十七話〕 真実への一步

康が持ってきたのは一枚のプリント用紙。真新しいことから見ても、数分前にプリントしたものだろうと想像がつく。

しかしそこに羅列されている人物には、思い当たるものがほとんど無い。

「なんだ、これ？」

当然の質問に、康は満面の笑みを浮かべて答える。

「この学園に金銭的な援助をしている人物、理事に名を連ねている人物、設立に関わった人物のリストだ」

「そんなものをどうやって仕入れてきた？」

「手薄になった職員室に潜入するのも手だったんだけど、PC室のパソコンを拝借してハッキングをかけた。学園のデータベースって言うのは、思った以上に防壁が薄くてね」

あっけらかんと言つてのけるがその内容は易々と聞き逃せる代物ではなかった。

「……叶、お前の十八番が取られたぞ」

「ええ！？ 私の長所ってそこだけなの？」

大袈裟に落胆して見せてはいるが、さして傷ついた様子は見られない。もともと戦闘、または暗殺に特化しているナイトメアの一人。そういつた分野以外で貶されたところでさして問題はないのだろう。

真紅にとってはそんなことはどうでもいいことだった。

問題は、そこに列挙されている人物の中に、何人かだけ見覚えがあるということ。

「高嶺 荘介。それに……朝風、白羽？」

かつての理事の中にあつた二つの名前。京の父親と、死んだはずの父、白羽。

もっとも理事として在籍していたのは死ぬ数年前までとなつているが、自分の父がこの神凧学園の理事だったことに少なからず驚いている。

そしてもっとも驚いたのは創設時の、理事長。

神坂 黒陽。

なぜ、祖父の名がここに連なっているのか。

そもそも真紅が引き取られるまで、祖父が何をやっている人なのか知りうるすべはなかった。否、知ろうとしなかった。

『お前のお爺ちゃんはな、すごい人なんだ』

何がどうすごいのか、父は何一つ教えようとはしなかった。出会

って、剣や戦い方を教わっているうちにそれが祖父の凄さなのだと認識してしまっていた面もある。

だが、それが誤認だったということはないだろうか。父が言っていた凄さは、こういった人の上に立つ素質だったのではないだろうか。

今になって祖父のことが気になる自分に気づいた。

あの祖父なら大丈夫、どこかで元気にしているという自己暗示は果たして正しいのだろうか。もしかしたら祖父はもう

「どうかしたのか、真紅？」

「……いや、なんでもない」

平静を装って、真紅は手にしていた紙を返す。持ち主の手に戻ったそれはしかし、横から割り込んできた科学教師の手によって掴まれ、持ち主の手から離れていく。

「……これ、ほとんどがあの”企業”の幹部ね。高嶺、朝風双方の名前もあるし、ほぼ間違いないでしょ」

「へえ、見ただけでわかるんですか。流石ですね」

「……元々気づいていたから、というのも含まれているんだけどね。もっとも私たちが創り出したあの男まで、ここの理事をしていたとは思わなかったけれど」

どこか遠くを見るような叶の瞳。だがその奥底には計り知れないほどの憎悪の炎が息づいている。

ナイトメアとして生を受けた叶は、決して幸せではなかったのだ

ろう。ただ創られただけならば辛い思いもしなかったのかもしれない。でも彼女は欠陥品として、組織内でも弱い立場にいた。そんな思いをさせた元凶に恨みを抱くなどというほうが、無理な話だろう。

「まあ、もう死んじやった人間だから問題はないのかもね」

「もう、死んでいるのか？」

「ええ。私ともう一人が脱走したとき、もう一人のほうが殺したわ」

前々から気になっていたことだが、この機会に聞いてしまってもいいだろう。

真紅は意を決し、その問いをぶつけた。

「なあ、叶。前から気になっていたんだが、お前と一緒に脱走したそいつは、どうなったんだ？」

叶の情報網、ハッキング能力を駆使すれば大抵の情報は手に入れることができるだろう。彼女がそのもう一人についての情報を仕入れようとしなかった、などということはないだろう。ナイトメアの中でも彼女には仲間意識が強いことは、鍊の一軒でわかつている。

一つ間をおいて、叶はそつと言葉を吐いた。

「……捕まったわ。私たちが脱獄した、二年後に」

「……そう、か。すまない」

「なんで謝るのよ。あいつが弱かったのがいけないの。ただ、それだけのことよ」

そつはいつものもの、叶の表情にはどこか無理があるようだった。

「なら、そいつは今……」

「殺されちゃったんじゃない？ 組織内での裏切りは異例。計画の主導者を殺したとあつては、それも逃れられないんじゃないかしら」

声が震えている。言葉にすることで、その事実を受け入れようとするように。

それだけに彼女がどれだけその仲間を気にかけていたのか、わかる。

「そいつは、何て言うやつだったんだ？」

苦しめるとわかっていても、それが彼女の決別ならば最後まで付き合っただけならねばならない。

叶は目を閉じ、けれどすぐに答えを返した。

「烏丸…… 烏丸 聡司よ」

その名を口にしたとき、一筋の光が彼女の閉じられた瞳からこぼれ、頬を伝った。

いつのことだっただろうか。朽ちることもなく、限界まで痛めつけられ、彼が理性を失ったのは。

一見すると普通の人間。少し偏った趣味を持っているだけの、青

年のように見えるだろう。

事実、彼は企業の人間にナイトメアの幹部と認識され、上位十一人しか許されないナンバーを得ることができている。

だがそれは彼が本当に狂っているときの、力が認められているからだ。

「あんたは、俺たちよりよっぽど強いはずだった。力はともかく心の強さは、もしかしたら鍊さんよりも上だったかもしれないのに」

ガラスの向こう側で、死んだように貼り付けにされている男へと七夜は独り言のように言葉を投げかける。

聞こえていないことは承知しているし、そもそも聞こえていたところで、彼がまともな反応を示してくれるはずがないことも知っている。

六年ほど前の脱走は、七夜の記憶にも新しい。その際に脱出したのは叶と聡司。ナイトメアの中でも鍊や七夜と親しい位置にいた。

だから、だったのかもしれない。

鍊が、不敗と言われていた不動のゼロ・ナンバーが死んだことに焦った組織の人間が六年前、ナイトメアの強化と称して叶をモルモットのよう扱おうとした。

その情報を入手した聡司と、叶の世話役だった男。二人が企てた脱出作戦によって叶は自由を得た。

代わりに世話役だった男は死に、数年後、七夜を含めた上位ナイトメアを複数投入した捕縛作戦によって、聡司は少ない自由を奪われた。

いくら拷問されても叶の行方は知らないといい続けた聡司は、数年間の拷問の後、理性を失った。

優しかったかつての面影はなく、下位のナイトメアが失敗することと拷問を行い、その記憶を抽出して様々なものを得ている。

歪みきった感情と、抑制不可能な行為。元々強力な力を持っている聡司が理性を完全に失ったとき、その力は二番を背負う七夜でも抑えることが難しくなる。

「……悲鳴を上げることも死ぬこともできず、十字架に貼り付けられた君に救いはないのかもしれない。でも君の信念が、叶を守っている。誇っていいよ」

かつての彼ならばそれだけで満面の笑みを見せ、死地に赴くこともいとわなかっただろう。しかもう、明朗快活な彼の表情は見ることができない。

捕縛作戦に、七夜は参加していない。錬たちと親交があったことは組織の内部に知られていたため、彼には自粛という命令が下されていた。手心を加えては困ると判断されたのか、共謀して七夜にまで逃げられては困ると判断したのかはわからない。もし七夜が参戦していたとしたら、確かに聡司の味方についただろう。

錬を死なせてしまったという、罪の意識から。

「すまないな。変な話をしてしまった。もう時間がないから、少し勇み足になっているのかもしれない」

真紅との約束を果たすため、残された時間は今日を含めて三日のみ。その間に残っている問題を解決していかなければいけない。

真紅と戦った後、自分がどうなるのかわからないから。

「はは……我ながら滑稽だ。鍊の真似事でもしようというのか、俺は」

七年前、鍊が白羽暗殺を命じられたときも、彼はいろいろなところに細工をしたり、仲間たちと最後の会話を楽しんでいた。

ともすれば今の七夜は、かつての鍊と同じ道を歩こうとしているのかもしれない。

信じた人のために、信じたものを信じぬくために、死ぬ覚悟。

七夜は自分の口元に浮かんだ笑みに気づかぬまま、聡司を監視する部屋から一步踏み出すのだった。

〔三十七話〕 真実への一歩（後書き）

うわぁ、やっぱり間に合わなかった。昨日中には更新しようと思
ってたのになぁ……。

さてちよつとずつ疑問が浮き彫りになり、七夜の行動も活発化し
てきました。

うん、なんかファンタジーっぽい。

ごめんなさい、調子に乗りました。

もう少しファンタジーっぽく、を心がけておりますので……えと、
がんばります。

ではでは。

〔三十八話〕 咎人（前書き）

人は、過ちを犯す生き物だ。

そこにどんな理由があろうと、その人間の生き方を少なからず歪めていく。

少年とて、例外ではなかった。

〔三十八話〕 咎人

あの時、母は笑顔で言葉を発した。

『あなたを育てたのはね、私があるあなたの力を取り込んで、今以上の力が欲しかったからなの』

あつけらかんと、友達に投げかけるようなその言葉はまだまだ幼かった天一の心を締め上げた。

『あなたの持つ属性が光だとわかったときから、あなたの力が欲しくてたまらなかった。あなたの力があれば、私が殺したくて仕方がなかった相手を、易々と殺せちゃうんだもの』

本当に、嬉しそうに語る母の姿を天一はその時初めて目にしたかもしれない。

母は優しい表情で笑うことはあったが、嬉しいという感情を表に出すことはほとんどない人だった。

その母が初めて、人間らしく喜びを示している。

それが珍しいと共に、天一は身の危険を感じて自分の周囲に光の粒子を纏わせた。

『母さん……俺はあなたに殺されてやるつもりは無い』

『誰も殺すなんていつてないわ。ちよっと人間として大事なものを』

借りるだけ。私の敵を殺戮し終えたら、返してあげる』

師匠から教わっていた。他者の能力を吸収し、自分のものにできる異端者が存在していることを。

それが自分の母親だということにも驚いたが、思い出したその話には続きがあった。

能力を奪われた相手は、必ず死ぬ。

能力、魔力とはそもそも生命力だ。それを奪われた時点で人間としての機能を失うことは目に見えている。

『ごめん、母さん。悪いけどこれはあげられない。まだ俺は恵理との約束を果たしていないんだから』

『恵理ちゃんとの約束？ ああ、確か結婚するまでは守ってやる、だったかしら？ 本当に仲がいいわよね、あなたたち兄妹は』

嘲笑とも取れる笑みが母の口元には浮かんでいる。仲がいいことに自覚はある。たった一人の、元々は一つだった双子の兄妹だ。普通の兄妹と違うところがあったとしても仕方がないだろう。

『ごめんね、天。あなたの力は強すぎる。私が、欲しいと思ってしまつくらいに。光の世界に存在するという不知火まで召還できるあなたの力、私はどうしても手に入れない』

『母さん……あなたが倒したいものって、なんだよ。自分の息子まで手にかけて、それでも成し遂げたいことって、なんなんだよ』

心が軋んでいた。最愛の人、という位置は今のところ妹の恵理が占領しているが、今まで大好きだった母親に殺意を向けられて、子供の心が軋まないはずも無い。

師匠との修行で強くなったつもりでいた天一は、しかし心までは強くなれていなかった。

『……子供の頃、私の家族を皆殺しにした奴らがいるの。そいつらを全部殺してやるまで、私の生は終わらない。終わらせないと決めた。だからね、天。私の目的のために、あなたの力をもらおうわ』

復讐、それは人を狂わせる。しかし同時に、それを目的にして生きていける人間も存在している。

伊達に云百年生きている男の言葉ではないかと、天一は思った。

自分の母がその人種だとは思っても見なかったが、確かにこれは、狂っている。

『本気でいかせてもらう。こんなところで死ぬるほど、俺は諦めがよくない』

『ふふ……戦い方を学んで間もないのに、私に勝てると思ってる？』

言うだけのことはあって、師匠と同じくらいの気迫を母は放っていた。

蛇。全てを呑み込み、ゆっくりと消化していく大蛇。そんな印象、今まで母から与えられたことなどなかった。

これは、勝てないかと直感した。

今の自分を全て使ったとしても、本気の母には到底及ばない。それだけの覚悟と憎悪が母からは感じられた。

どれだけ自分の力の本質を知り、使い方を学んだところで、圧倒的な経験の差には敵うはずが無い。自分を生んだ人と比べることなどおこがましい。

それでも。

それでも天一には死ねない理由と、生きるという意志があった。

『……勝つよ。勝たなきゃならない。たとえ母さんを、実の母親を殺すことになったとしても』
『うん、いい答え。あと、ちよっぴりカッコいい顔つきになったよ、天ちゃん』

その時に、気づくべきだったんだ。

自分に対する呼び方が”天”から、いつもと同じ”天ちゃん”に戻っていたことに。

母の瞳に、慈愛の念が籠もっていたことに。

光の力を全て解放して、天一は母を倒した。

木々の生い茂る山の中、様々などころから鮮血を流す母の姿を、天一は今でも忘れることができない。

『……なあ、に？　こうかい、してるのかなあ？　私の、可愛い息子、は』

切れ切れになる言葉、口元から伝う一筋の血。それでも笑顔が浮かべる母の顔を直視し続けるしかなかった。

『……答えてくれ、母さん。最初から、俺を殺すつもりなんて、なかったんじゃないか？』

『あはは……どう、だろうね。自分でも、わからないや』
『こんな時まで、はぐらかすなよ、かあさん』

自分が泣きそうなことくらい自覚していた。それでも我慢できるはずが無い。大切な母が、もう少して死んでしまうのだから。

一歩近づこうとした時、母は黙って手元の短剣を天一に向けた。

『来ちゃ、ダメ。今こっちにきたら、あなたの魔力を吸う。私は生き残れるけど、あなたは、死ぬ』

『最初はそのつもりだったんだろうが！ それに、半分くらいなら私と本気で戦って、” あれ” まで召還して、私に分け与える、魔力なんて、ある？』

母の言っていることは、正論だろう。今の母を救うには、天一の中に残っている全ての生命力をささげなければならない。それだけ大怪我であり、同時に避けられない未来というものが易々と想像できた。

どちらも手を抜いたなどということは無い。天一と母の力はほぼ互角で、互いに山の中まで移動してしまうほどの接戦を繰り広げていたものだ。

無論、天一とて無傷ではない。不知火を握っていた右手以外はどこも傷だらけ。左腕はすでに感覚を失い、両足は立っているだけでも悲鳴を上げている。

それでも天一は、母の死と向き合わねばならない。

『うん。いい目に、なった。天ちゃん、力を使うってことは、こう

いうこと。いつか大切な、誰かを、失うかも、しれないってこと……」

『っ！ 母さん！』

勢いよく血を吐いた母に近寄ることもできず、天一はただ自由に動く右手を握り締める。

『そんなことを、教えるために？』

『馬鹿ね、そんなわけ、ないわ。力が欲しかったのは、本当。家族を殺したやつらに、復讐したかった。でもね、天ちゃん。私ができなくても、子供にそれを任せることだって、できるわよ、ね？』
『どういう、ことだよ？』

血が少なくて、青白くなった顔でも、母はただ笑い続けた。優しく、暖かいその笑みを失ってしまうその感覚に、天一は涙を堪えることができない。

『……光の騎士、朝倉 天一殿。私が果たせなかった復讐を、あなたに委ねます。我が無念を振り払い、怨敵を切り裂くことで、私を殺した罪の贖罪としましょう』

『……ずるいよ、母さん。最初から、そのつもりで……』

息子に全てを任せるためだけに、母は自分の命を差し出した。それだけではない。母は天一が抱えていた”力を行使する代償”というものを理解させるために、天一に刃を向けていたのだ。

今更それに気づいたところで、遅すぎた。

『ごめんね、天ちゃん。我が俣な母親で。自分でも、酷いなあ、つて、思う……んだ』

『っ！ 母さん……かあさん！』

もう手にした刃は地面に落ち、母の手は自身の腹部へと添えられていた。天一は駆け寄り、そっとその手に自分の手を添えて、念じる。

生きてくれ、と。

それが敵わぬ願いだと知りながら、それでも願ってしまつ。

『ご、めん、ね……えり、ちゃんを、おねがい……あのひと、には、いわないでも、わかると、おも……』

『死ぬなよ、母さん！ 死なないで……』

『あは……むちゃ、いわない、で』

すでに目を閉じ、母は死を受け入れている。

それがわかるから天一は涙を流して、母の手を握ることしかできない。

『……母殺しの罪、この身に背負おう。我が剣と魂を賭して、あなたの無念を晴らし、我が罪を晴らして見せましょ』

精一杯の、言葉だった。

それでも母は満足そうに笑みを浮かべ、最後にもう一度ごめんねと呟き、安らかに息を引き取った。

それから後のことは、よく覚えていない。

血まみれの状況を探しに来た恵理に見つかり、俺が殺した、とだけ告げ怒りを煽り、母の死を悲しみではなく憎しみで塗り替えた。父は全てを理解していたように何も言わず、そっと天一の頭を撫でただけだった。

その後は、なんだったか。

恵理が母の旧姓、鷺村を名乗り、殺意むき出しの彼女に魔力の存在を教え、強くした。

代償として、最愛の妹から憎悪の念を送られることになったが。

それでも絶望するよりはよほどいい。そう、思っていた。

〔三十八話〕 咎人（後書き）

いやあ、また遅い更新になってしまいました。

正直な話、今回の話は載せないほうがいいかなあとかなりの時間迷っていました。話自体は最初から考えてあったものですし、文章にするのはスムーズだったのですが……

なんだかなあ。

どうにも納得できないんですよえ。

今回の話はもしかしたら後々書き直すかもしれません。そうなたとしても皆様どうか寛大な心で見逃してください。

まだ恵理が真相を知ることはありませんが、今回のお話は天一の心の中だけで描かれたものだと思っただけだと助かります。

ではでは。

〔三十九話〕 遊戯の後に（前書き）

遊戯は終わり、現実と向き合おうべきときが訪れる。

〔三十九話〕 遊戯の後に

約束を守るために、天一は母を殺した。殺さざるを得ない状況だった。

でもそのせいで、恵理は約束を棄て、天一に殺意を向けるようになってしまった。

考えてみれば滑稽な状況ではないだろうか。

「……俺は自分の意志で母さんを殺した。それでいいだろ？」

「おに……天」

「俺の力を試したかったから母さんにけんかを吹っかけてただけだ。それ以外に理由は無い」

辛くても恵理の瞳を直視して、言っただけだ。その後すぐに体を離し、二本の木刀を拾い上げる。

直後、スピーカーにノイズが走り、鬼ごっこの終了が宣言された。

「賭けは俺の勝ちだな。今日の夕食は恵理が準備してくれよ」

「……はあ……うん、わかった。もう最高の料理を作ってやるんだから」

気を取り直したような“うん”と華やかな笑顔。それはさっきまでの“妹”としての恵理ではなく“鷺村 恵理”という少女が見せる気丈な笑顔。

自分を責め立てるその笑顔を見ることが、天一にはたまらなく辛

い。

恵理との賭けは、天一が勝ったら夕食の材料費は恵理が、恵理が勝ったら天一がはらうというなんともどうでもいいものだった。だが馬鹿にならないのはその材料費。最低でも手持ちの半分は使って用意しなければならぬという制約付き。

お互い意地になって貯金を全て下ろしていたため、仕送りで生活している天一には相当辛いものになっていただろう。

もつとも恵理にとってもそれは同じこと。鷺村と名乗っていても恵理はまだ父と一緒に生活している。父が天一を責めなかったことには当初から反発していたが、それでも父には怒りを向けているわけではなかったため、母が死んだ後は天一が家を出る形をとって事なきを得ていた。

生活費を稼ぎたいがために友達だった康にバイトを紹介してもらったのが、情報屋として活動し始めるきっかけだった。

昔のことを思い出すなど、らしくない。せつかく手に取った木刀を力任せにへし折って放り投げると、天一はいつもと同じようにわざと軽い笑顔を浮かべて振り返った。

「しかし結局、俺以外は眼中にないみたいないな行動だったな。真紅や空たちだって相手としては申し分ないやつらだったはずだぞ？」

「あ、それ！ そうだ、天！ あの真紅って子に私たちと同じ力があるって本当なの？」

「うん？ あれ、言っていなかったっけ？」

真紅の力には初めて会った瞬間、天一がらしくない奇襲をかけた

ときから気づいていた。いや、力の存在に感づいたからこそ天一は奇襲をかけ、一撃で仕留めようと焦っていたのだ。

すっかり忘れていたためか、恵理は頬を限界まで膨らませ、美人が台無しになるほどふてくされた仕草を見せた。

「聞いてません！ 何よ何よ、康は信用してて私は信用しないんだ。そおなんだ！」

「あー、あー、あー！ 悪かった。悪かったよ、頼むから機嫌直してくれ」

平謝りするような覚悟、というよりもどうでもいいやという気持ちで天一は両手を高々と掲げて降参の意志を示した。その瞬間を待っていた！ とでも言いたげに恵理の瞳が鋭い光を宿した。

しまった、と思ってもすでに遅い。

「悪いと思ったなら、今日の夕食代半分持つてね」

「え、いや、ちよい待て……お前の財布と俺の財布じゃ重みがまるで違」

「へえ、じゃあいいや。今日は康と私の分しか用意しないから」

「俺を飢え死にさせるつもりか、お前は！」

死活問題を楯にされては、天一に勝機はない。料理は一通りできるようにしてあったが、今日は流石に自分で作る気力は残っていないかった。

ああだこうだと議論するのも億劫になって、天一はもう一度両手を上げた。

「……もうやけくそだ。好きにしろ」
「やった！ だから大好きだよ、天！」

危うく抱きつかれそうになって、反射的に手のひらを前に突き出していた。突き出した右手は見事なまでに恵理の額を捉え、恵理は両手を大きく広げたまま天一の腕の長さ分だけ手前で静止していた。

嫌な沈黙が、お互いの間に流れた。

どれだけ経ったかわからなくなったころ、地獄からこみ上げてくるような憤怒の声が恵理から聞こえてきた気がした。

「……天一くん、そんなに抱きつかれるのが嫌いなのかな？」
「い、いやあ、なんていうかこれは……変な癖が付いてしまってますね……不可抗力といいますが、俺のせいじゃないといえますか」
「てーんーいーっーくーん？」
「ひい！？ ちょ、ま……いやあああああああ！」

悪鬼のような恵理の表情に、天一はただ悲鳴を上げ、逃げ出すしかなかった。

これでいい。

こうやって、他人でも家族でもない友達としての距離にいられたなら、他には何もいらないとさえ思えてきてしまう。

天一は母を殺した罪の意識から、恵理は母を殺された憎しみから離れていく。それでも互いに過ごしていくなら、この距離が一番過

ごしやすい。

死の危険を背中に感じながら、それでもこんな日常が続いて欲しいと、願ってしまった。

二人を迎えに行つてくるよ、と言つて康が消えてから真紅は校庭の木に背を預け、思考の海に沈んでいた。

祖父、神坂 黒陽がこの学園の関係者であり、企業と繋がりがあつた。少しだけ驚いていたが、それも当然かもしれないと思う自分も確かに存在していた。

そもそも父、白羽は企業の幹部だつた。祖父が企業に籍を置いていたため、父もその後を追って入社したという考え方だつてできる。驚くべきなのは、どうして今までその可能性に思い当たらなかつたのか、という一点のみ。

祖父と過ごしていた間にその考えを思いついていれば企業のことをもっとよく理解できたかもしれない。ナイトメアへの対抗策も手段の幅が広がっていただろう。

もっとも、どれだけ考えても所詮”今更”だ。

過去に戻るわけでもないし、今すぐに祖父を捕まえて話を聞けるわけでもない。どれだけ考えてもどうしようもないものなら、考えないほうがいいのではないか。そう思えてきた。

少しは前向きな考えができるようになったかな、と思いながら真紅はゆっくりと思考の海から浮上していく。

「どしたの、真紅？　すごい遠い目をしていただけ」

「……なんでもない、少し考え事をしていただけだ」

一緒に待機していた叶へ適当に言葉を返し、真紅は当面の問題へ意識を切り替える。

今は天一と恵理に叶をあわせることができれば、ナイトメアに対する防衛手段も叶たちが考えてくれるだろう。叶と康だけでもできたかもしれない。

そちらは二人に任せるとして、やはり一番の問題は七夜だった。

三日後、正確には二日半だが高嶺の屋敷へもう一度行き、七夜と対峙する。これはすでに決定事項となっていた。

いくら考えたところで、真紅の頭から疑問が消えることはなかった。

確かに俺は、何かを忘れている。

とても重要な、何かを。

それがわかるというのなら、七夜との戦いも甘んじて受け入れよう。

ふと違和感に気づいてしまった。

今まで敵だと思っていた七夜。殺して、鍊の無念を晴らす足がかりにしてやるうと思っていたが、今はなぜか戦うことに戸惑いを覚えていている。

馴れ合っているのとは何か違う。そもそもさほど会話らしい会話もしていないし、戦場以外で会ったのは昨日だけ。

あえて言うなら、既視感。

七夜と戦う、ということとはあの時が初めてだったのだろうか、よくわからない疑問が真紅の中を取り巻いて離さない。本社の中で、一度戦ったことがあったのではないだろうか。真紅がまともにも戦えるようになったのはここ三、四年の間だから絶対にありえないことだったが、何かがとても引つかかる。

やってきた三人に気づいて、考えることを止めた。

「お疲れさん。でけえ怪我もないみたいだし、何よりだ」

「そっちこそ、な。結局鷺村さんに見つかったのか？」

真紅の問いに天一は両手を上げて降参のようなポーズを見せた。よく見てみると顔の所々に殴られたような痕がある。さほど深刻なものでもなかったが、気づかないふりをしてやることも大切だった。

「叶、対抗策の打ち合わせはお前に任せる。天、ちょっといいか？」
「んあ？ どうした？」

皆から少し離れ、真紅は声を潜める。何かあるかはまだ理解していないようだったが、天一もそれにあわせ少しだけ顔を近づけてくれた。

「二日後、ナイトメアの一人と会う」

天一の表情が引き締まるのがわかる。しかし気にすることなく、真紅は淡々と話しつづけた。

「氷室 七夜という男だ。話し合い、ですむとは思わない。もしかしたら死ぬほどの傷を負う可能性もある」

「それをどうして俺に？」

「何か気づいて、手伝わせる形になるのもいやだったからな。今回は手を出さないでくれ」

天一ならどこからか情報を仕入れて援軍に来てしまうのではないか。そう思ったからこそ真紅はこの話を先にした。そうすることでこれが自分自身の問題なのだと伝えるために。

それを理解しているのか、天一は口元だけで笑い、背を向けた。

「わかった。ただ、死ぬなよ？」

「……ああ。わかっている」

まだ少ない付き合いだが、どういうわけか天一とは分かり合える部分が多い。同類、といっても過言ではない。

あとは七夜との戦いまで、少しでも自分の状態をよくしておくこと。

いつになく死が間近に感じられるのに、真紅はなぜか自分の中に喜びが生まれていることを実感するのだった。

〔四十話〕 安らぎの時を（前書き）

少年たちの安らぎ。

それは何人たりとも犯せないもの。

〔四十話〕 安らぎの時を

無事鬼ごっこを終わらせた真紅たちは、勝者の景品を決めるため科学準備室に集まっていた。学科が違う天一、康、恵理の三人と真紅、空。そしてなぜか愛美を交えた六人。教師である叶を含めると七人が狭い科学準備室に収まっているのだ、暑苦しくてたまらない。

「さて、と。真紅と空の景品は決まっていたわね。真紅には新しい刀を、空には銃を。元々勝ち残る生徒が極端に少ないゲームだから、学園側もかなりの資金を提供してくれてる。いやあ、金持ちの学校はいいわねえ」

しみじみと言われてもどう反応していいのかわからず、六人がそろって口をつぐんでしまう。それに気づいているのかいないのか、叶は実験台の上にノートパソコンを置いて、画面にページを表示した。

表示されたページの頭に描かれていたのは”武器屋”とかいうなにも気が抜ける文字。

真紅はただ、その文字を見て脱力するだけだった。

「……かなり胡散臭いんだが」
「大丈夫よ。ここは一見するとただの個人サイトだけど、ちょっとした作業をすることで本物の武器屋として使用することができるのもっとも店舗が隣町にあるから、実物はそこで買うのが一番なんだけどね。今回はただ写真を見て、これだ！と思う品をピックアップしてくれればいいわ」

叶はパソコンを真紅と空の前に押しやり、康と話し始めた。

ナイトメアが襲ってきた場合の防衛策はこの二人に一任することになった。いざとなれば空間すら操ることができる康はこういった守りの戦いに向いているし、叶は自身がナイトメアだということもあって相手の作戦を予測することに長けている。この二人が防衛策を思案するのは至極当然の人選だった。

叶がナイトメアの一人であることは、ここにいる全員に伝えていた。その際、空と愛美は驚愕の表情を、天一と康は最初からわかっていたように平然とした表情を浮かべていた。唯一、恵理はそのナイトメアというものが何か理解していなかったため、呆けたような表情を浮かべていたものだ。

ナイトメアの実態についても叶から説明をしてもらった。言いたくないこともあるだろうからと口をつぐんでいたが、やはり叶は自らが誰かのクローンであるという事実だけ伏せていた。

その他諸々の話をしていった結果、放課後も遅い時間まで科学準備室に引きこもることになってしまっていた。

ああだこうだと話し合う二人を横目に、真紅はパソコンの画面へ目を落とす。今は空が銃の写真を見ているが、確かに品揃えはいいもっともここには”観賞用”という注意書きが書かれている。本当に売っているという事実が警察などに知られたら、一発で家宅捜索されてしまつなあとどうでもいいことを考えつつ、真紅は深く息を吐いた。

「どうしたの、真紅？ 疲れた？」

空とは反対側、真紅の右隣に座っていた愛美が心配そうにそんな声をかけてくれる。変に勘ぐらせるのもかわいそうだと思い、真紅は勤めて笑顔を浮かべた。

「いや、学園の景品で武器って、ばれたらどうなるのかなあと」「あ、それは言えてるね」

あっけらかんと言つてのける愛美は樂觀視しているのではなく、単純に物を考えていないのだろう。難しいことは考えないのが彼女の信条だ。

何となく羨ましいと思う。そんなふうになんか難しく考えず生きられたら、どれだけ人生が充実することだろう。

「どうしたの？　じっと見つめちゃって、惚れた？」「……馬鹿か」

不満そうに下唇を突き出す愛美を一蹴すると、空の驚いたような声が狭い室内を木霊した。

その場にいた全員が空へと視線を向けた。

「……どうしたの？」「え、いや。もの凄く珍しいもの見つけちゃって……叶ちゃん、これ決定」

画面の写真を指差し、空いた手で叶を呼び寄せる。叶も話を切り上げ画面を覗き込んだが、小さく眉を歪めていた。

「ほんとにこれでいいの？」

「うん。いや、むしろこれでなくちゃ意味がないね」

真紅も画面を覗き込むが、一見すると空が使っていたものと変わりない。

しかし空はそれがたいそう気に入ったらしく、叶が何を言おうがその意志を変えることはなかった。

空の得物が決まったところで、今度は真紅にパソコンが渡っていた。

パソコンなどほとんど使ったことがなかったが、空と愛美に協力してもらったことで何とか使えていた。

だが、どうにもこれと言える代物が存在しない。

「なあ、叶。いつ実物を買っていくんだ？」

「明日の放課後だよ。何か問題ある？」

「いや、ない。ただ、店に行くまで選ぶのは保留にしておいてもいいか？ どうにも、これと言えるものが見当たらない」

もともと父の残した刀があるからか、早急に決める必要もない。なにより明日ならば、七夜との戦いにもなんら影響はない。それらのことを鑑みても、実物を見て判断するのが一番手っ取り早いと判断できた。

「いいわよ。じゃあ、明日はホームルーム後に科学準備室に来て。鍵は先に開けておくわ」

そう言うと叶はパソコンを閉じ、小脇に抱えて立ち上がった。

「そういえば、朝倉くんは景品決めた？ 君の分も担当教師からまかされているから、決まっているなら教えてくれると助かるん」
「今日の夕飯代！」

あまりにも切実な願いと救いの手を差し伸べられた幼子のような無垢な瞳に、その場にいた恵理以外の全員が言葉を失った。唯一、恵理は笑いを堪えるように必死で口を押さえていたが、すぐに勢いよく笑い出したのだった。

「本当によかったのか？」

天一たちの家だと言う一軒家にお呼ばれた真紅たちは、手際よく料理の準備をする恵理、康、愛美の三人と、面倒くさいから手伝わない三人に分かれていた。

天一と真紅、空の三人はさっきまで行われていた鬼ごっここの疲労からリビングのソファに並んで腰掛け、康が持ってきてくれた冷たいお茶をすすっている。

左から天一、真紅、空という順に座っていた。

何が？ と首をかしげる天一に、真紅は茶をすすって言葉を続ける。

「食費。俺たちの分までお前が負担して、確か絶望的な金銭事情っ

て言ってたよな？」

「ああ、そのことが。大丈夫だって。今日の夕食にかかる費用は全て学園持ち。というより、今日の買い物全て学園持ち！ いやあ、あの学園は太っ腹でいいね。これだけ買いためしておけば当分は食費で苦労しなくてすみそうだな」

真紅たちがここに居るにはもう一つ理由があった。

学園が今日の買い物代を全て払ってくれると聞いた直後、天一はすぐにお買いだめするという選択をしていた。だがそのためには大量の少量を運ぶことができる人材が多く必要だったのだ。そのため真紅たちにも声がかかり、結局は六人で商店街やスーパーなどを梯子し、大量の食料をこの家へと持ち込んだ。

愛美以外は全員、片手に三個ずつレジ袋を持っていたはずだ。愛美だけは両手に二つずつだったが、女の細腕でそれだけ持つことができればいいほうだっただろう。

「でもこれは流石に買すぎじゃねえの？ 食いきれるのか？」

「まあ大丈夫だろ。俺と康は結構食わないと戦えないし、恵理もあの細い体でなかなか食べる」

空の問いに笑顔で答えた天一だったが、何かに気づいて即座に席を立つ。直後天一がいた場所を強風が襲い、真紅の頬をつめたい空気が撫でていく。

「恵理さあん、室内で力を使うのをやめてもらいませんか？」

「うっさい。黙って座ってなさいよ」

さほど怒っているような声でもなかったが、天一はやれやれと肩

をすくめ、もう一度ソファーへと腰を下ろした。

考えてみれば不思議なものだ。天一たちとは出会ってまだ間もない。会話をして、共に行動するようになってまだ二日と経ってはいなかった。だというのに彼らといることに不自由を感じないし、むしろ心地よさすら覚えている。

それは天一たちも同様なのか、キッチンにいる女二人からは時折笑い声も漏れていた。

「なあ、真紅、空」

天一の何気ない言葉に、真紅は黙って耳を傾ける。

「こういうのって、いいな。俺は今まで康と恵理以外の人間はさして信用していなかった。俺たちの持つ力ってやつを知られたら困るってのもあったけど、単純に他人と行動するのが好きじゃなかったってのもある。でも、お前らと一緒にいるときはなんかこう……落ち着くっていうか」

「心地いい、か？」

「そう、それだ。不思議だよな。お互いのことなんてほとんど知らないはずなのに、それでも気が許せちゃう。うちの師匠に知られたら笑いものだ」

自嘲的に笑って見せているが、その笑顔の中には喜びの色が混じっている。

「時間をかけて築く情もあれば、出会ってすぐ生まれる情もある、てことじゃないか？」

「お、空。お前いいこと言うな」

「……空はごく稀に、本当にたまぁにいいことを言うんだ」「
あ、こら真紅！ その発言は俺を馬鹿にしてるぞ？」

心地よい空気に包まれながらも、三人は料理ができるまで、そうして他愛ない言葉を交わすのだった。

〔四十話〕 安らぎの時を（後書き）

一週間くらい更新していないことに気づいて愕然とした今日この頃。

いやあ、面目ない。今回はかりは完璧なサボりです。サボタージユです。

べつに、ネタに詰まったわけじゃないですよ？ 本当だよ？

さて作者の苦悩など放っておいて、次話あたりからはまた非現実的な色が濃く出てくることでしょう。緩急のつけ方って未だに難しいです。

さほど締めませんが今回はこの辺で。
ではでは〜

〔四十一話〕 六枚の花弁（前書き）

そこは人知れず息づく、旧時代の遺産。紅の刀はただ、世界にただ一人、その少年を待ち続ける。

〔四十一話〕 六枚の花弁

学園の修理と称して休校となったその日、真紅と叶は薄暗い店内へと訪れていた。叶は空に頼まれた品物を購入するために、真紅は得物を物色するために。どうせ学園が経費を持つのだからと言う叶にどうにも譲けず、当初は訓練用のなまくらでも購入しようかと考えていた。

店内は二人が並んで歩けるギリギリのスペースを保ちながら、銃や刀剣類が乱雑に陳列されている。地下のように薄暗い店内には窓などという洒落たものはなく、正面に鎮座している白髪、白髭の男からも最初は生気すら感じられなかった。

だが真紅を見た男は生気が宿った瞳を真紅に向け、店の奥へと引っ込んだ。戻ってきた男の手に収まったものを目にしたとき、真紅が当初持っていた考えは霞のように消え去り、視線は男の手の中に集中していた。

紅色の柄紐、銀の鍔、朱の鞆。店主と名乗る老齢の男が店の奥から引っ張り出してきた逸品は、真紅の心を易々と絡めとり、離そうとはしなかった。

「少年。この刀は”六花”と言う。銘は私がつけたのだが、この刀は元々ただ一人のために打ったもの。その男には完成品を渡したが、この刀は、それと同時に作り上げたものだ。完成度はおそらく、こちらのほうが圧倒的に上だろう」

祖父、黒陽に聞いたことがあった。刀とは本来、一本ずつ作るものではないと。二本、ないし三本の刀を打ち、もっとも完成度の高

いものは鍛冶師自らが神仏に供養する。祖父自身もつる覚えだったらしく、詳しい話は聞くことができなかったが目の前に存在する刀はその際に完成していた”成功作”なのだろう。

しかしなぜ、そんな刀を自分に見せるのか。真紅は首を傾げそうになるのを堪え、店主の言葉に耳を傾けていた。

「叶嬢がここに来た、と言うことは組織関係の問題に首を突っ込んでいるということだ。そして少年、君の瞳はあいつに似ている。似すぎていて、かつてのあいつ自身を見てるようだよ」

「……あいつ？」

男は遠くを見るような瞳を真紅に向け、優しげに微笑んだ。

「この刀は朝風 白羽、彼のためだけに打った刀だ」

不思議と、その名を聞いても驚きはしなかった。ただ目の前に存在する素晴らしい刀を父のためのものだという事実が誇らしくて、自分の頬に自然と浮かぶ笑みを押さえることができなかった。

この男は真紅を見ただけで朝風 白羽の関係者だと見抜いたのだろうか。それとも昔、真紅が物心すら付いていない頃に出会っていたのかもしれない。どちらにせよこの男は良い”目”を持った、本物の鍛冶師だということだろう。

「本来売るつもりもなかったものだ。君に譲ろう。もちろん御代は要らないよ」

「だが、それは……」

「はは、あいつの息子にはずいぶんと殊勝な心根を持っているな」

茶化されているのか、本心からなのかはわからない。真紅は苦笑しながら一礼すると、男が差し出した刀を手に取り、ゆっくりと鞘から抜き放った。

薄暗い店内ですら神々しいまでの煌きを宿した刀身は、乱れもなく美しい波を描く波紋を宿し、自身を作り上げたものの心と、それを使うはずだった男の心を描き出しているようだった。

乱れなき、信念。

白羽は企業の不正を暴こうと正面から向き合い、自身の信念を守って死んでいった。その揺らがない心がこの刀には映し出されている。

この刀が一緒なら、きつと大丈夫。負ける気がしない。

真紅は刀を納め、しかし男へとその刀を返した。

叶はなぜ、と首を傾げていたが、男と真紅の考えはまったく同じだったようで、二周りほど年の離れた二人は同じような笑みを浮かべていた。

「わかっているようだね、少年」

「ああ。これはあくまで”父さんの刀”だ。俺の刀じゃない。だからこのままで受け取っても、俺個人の力とは釣り合わない」
「その通り」

男は最初に白羽のために打ったものだと言っていた。ならばこの刀をそのまま真紅の力とすることなどできるはずがない。

だからこそ真紅は今、本当にすべきことを知っている。

「ご老体、酷かもしれないがこの刀、二日で俺の物にしてくれ」
「……………くく……………くくくく！」

一瞬呆れたような表情を浮かべていたが、男はすぐに押さえた笑い声をもらし、半眼で真紅に恨みがましそうな、それでいて楽しそうな目を向けた。

「訂正しよう。殊勝なわけがなかったな。君は確かに、あいつの息子だよ」

「ふ、俺はほとんど記憶にないが、父さんも随分と無茶な人だったようだな」

男は刀を壁に立てかけ、真紅に向けて右手を差し出した。しっかりと握り締める真紅にまた半眼を瞑ってみせ、男は宣言する。

「今から三十六時間後、それまでには作り上げて見せよう。君のための”六花”を、そのために君の心を知る時間をいただきたい。聞き忘れていたが、名はなんと言う？」

「真紅だ。朝凧 真紅」

男は真紅の手を握りながら、どこか懐かしい笑みを浮かべていた。

真紅が店主と共に店内へと残り、少しの間店主とやり取りをするというので叶は店から出て新鮮な空気を吸っていた。空に頼まれていた品物は手に入ったし、真紅には口出しする必要もない。

店から出ると雲一つない空が彼女を迎えた。

彼女がナイトメアとして戦う時、夜に輝く星はその姿を隠し、空は漆黒に包まれる。だからだろうか、こういった青空を見ることが清々しい。

血に染まった自分の手を、空の蒼は一時だけでも忘れさせてくれる。

「……あなたも、この青空を見ているのかな……聡司」

すでに死んでいるかもしれない旧友に言葉を投げ、叶は頭を振った。

私は、何をやっているのだろうか。

柄にもなく感傷に浸って、旧友たちですら知らない憂いの顔をして、結局は何もできなくて。

白衣のポケットに押し込めてあった煙草を一本取り出して、少し

折れ曲がったそれを啜えて火をつける。慣れない煙は肺に充満し、思考にも少しだけ霞がかかる。

現実逃避するにはちょうどいい。

大人になつたからこそ出来ることだったが、もしかしたらその逃げ道すらなくなっていたのかと思うと背筋に冷たいものが走る。

叶たちは、ある男のクローンだ。それがどんな人物なのか、名前すら知りはないがその事実は変わらない。日本の、いや、世界の技術をもつてしても完璧なクローンなど存在しないという。だがナイトメアは精神に難があるが、身体面で不都合が生じることはない。多くのクローンが寿命などの問題を抱えているのに、そういった部分だけは完璧な人間と言つてもいいのだ。

生きていくということは、尊いこと。

「あなたはそれを、知っていたのかな？　ねえ、七夜」

いつからそこにいたのか、煙草の煙の向こう側に存在する青年は爽やかな笑顔を浮かべて手を振っていた。

制服である黒のスーツを纏い、しかしサングラスはつけていない。一見するとどこかのホストと錯覚するその容貌は、かつての面影を色濃く残している。

「さあ？　君の脳内でどんな自問を繰り返したのか知らないが、俺に答えを求めているわけじゃないだろう？」

「そうね。どうしてここにいいのか、聞いてもいいかしら？」

ゆっくりと歩み寄ってきた七夜は、叶の手から優しく煙草を奪うと、自分で啜えて微笑んだ。

「旧知の仲だろうか？ 顔を見に来ることくらい、普通じゃないかな？」

「私の消息は、組織の誰も知らないはずよ。どうやって……」
「本当は真紅に用があつたんだ」

言葉と共に放たれた殺気に、体が自然と反応する。懐に隠してあった三本のナイフを指で挟み、反動をつけて投げつける。狙いは喉眉間、心臓の三箇所。けれどそれは、七夜の振るう槍によって打ち落とされ、力なく地に落ちた。

「そう邪険にしないでよ」

「いきなり殺気を向けてくる旧友には、手厚く対応してあげないとね」

挑発するような言葉を投げつけつつ、けれど背中には冷たい汗が伝っていた。

年の差は無いに等しいが、力の序列には圧倒的な壁が存在していた。ナイトメアの一人だった頃の叶は組織内でちょうど十番目、七夜は三番目。上から四人の実力は痛いほどわかっている。

死角から仕掛けたとしても、勝算は少ない。まして正面から堂々と戦おうとするならば、絶望的状况だといっても過言ではない。

「……あは、あははは……」

「な、何よ？」

「はは……ごめんごめん、いやあ、相変わらずからかい甲斐があったいいね、叶は」

瞬時に消え去った殺気、楽しそうに槍を下げるその姿は年齢にそぐわない幼さをかもし出している。

呆気にとられている叶を置き去りにして、七夜は彼女に背を向けた。

「明後日を楽しみにしているって、伝えておいてくれる？ 用件はそれだけだから」

「明後日って……ちょっと、待ちなさい！」

「あはは！ それじゃあね、叶。久しぶりに顔が見れて嬉しかったよ」

軽い、友人に向けるような簡単な言葉を残して七夜は二階建ての屋上へと移動していた。最後に一つ手を振って、彼の姿は完全に見えなくなってしまう。

まるで白昼夢のような時間。叶は新たな煙草を取り出して、ぼつりともらした。

「……なんだったんだろ、あの馬鹿」

脳内で今のやり取りをなかったことにして、叶はそろそろ終わるであろう真紅の元へ戻るべく、踵を返すのだった。

〔四十一話〕 六枚の花弁（後書き）

何だかんだやっている最近更新がかなり遅れてしまいました。いやあ、面目ない。

そろそろ第一部を完結させなければ、このままでは完結するまでに百だの二百だの、三桁の話数に到達してしまいます！ それだけはやめて！

あまり長く続けすぎると飽きが来ますからねえ、もう少し詰めて創らなくては……。

次話も全精力を持って、できる限り、善処して……がんばって更新していきますよぉ〜。

ではでは〜。

〔四十二話〕 戦いの前に（前書き）

少女の想いと少年の思い。

淡い想いと確固たる意思は交わることはない。少なくとも、今はまだ。

〔四十二話〕 戦いの前に

学園の修理が終わり登校してきた京の隣に、真紅の姿はなかった。

空の話では鬼ごっこで参加した際に些細な怪我をしまい、大
事をとって休ませているらしい。けれどその言葉をどうしても信じ
られない自分がいることに、京は気づいていた。

いつも冷静に物事を見極めている彼がそうそう怪我をするとは考
えにくい。彼の身体能力がどれほどのものなのかかわからないが、京
を抱えてキロ単位を移動できるほどの腕力と体力があるならなおさ
らだ。

その疑念を微笑という完璧な仮面で押し込めて、京は授業へと耳
を傾けた。

現代国語の授業はいつもなら真剣に聞いている分野の一つなのだ
が、今日はどうにも頭に入っていない。

間違いなく、真紅のことが気になっているからだ。

幼い日に救ってくれた人、というだけでどうしてここまで気にな
ってしまうのか、京は覚えのない感情に振り回されているような錯
覚に陥って、小さな目眩を覚えた。

屋敷に引きこもっていた頃に比べると格段に増えた知識量だった
が、未だに感情の面に関しては知らないことが多かった。確かに真
紅のことは好きだったが、小説や漫画のような恋愛感情だとは思え
ない。それはきつと恩人に対する敬愛、尊敬の念だと思っていた。

だがこれは、重症だ。

「……大丈夫かな」

頭から離れない真紅という少年の存在。また何も言わず、京の気づかぬうちに消えてしまうのではないかという不安がこびりついて離れない。

「いや、今でなかったとしても真紅はかならず京の前から消えてしまっただろう。直感にも似た感覚が京の中に存在していた。」

「どつたの、京ちゃん？　なんか顔色が良くないよ？」

不意に前に現れた愛美の顔に驚き、いつの間にか授業が終わっていたことに気づいて愕然とした。どれだけ集中してしようとここまで授業が早いと感じたことは無い。

何事もなかったような顔を取り繕って、京は彼女に首を振ってみせる。

「なんでもないよ、愛美ちゃん。少しつかれたかなあ、って思っただけ」

「そうなんだ。でもあんまり無理しないほうがいいよ？　まずいと思っただけに言っただけ、保健室まで付き添ってあげるから」

「ありがとう、と笑顔で返して京は現代国語の教科書を鞆に収め、机に思い切り突っ伏した。らしくないと思う。けど胸を締め付け

るような感覚は消えることがなく、京の心を少しずつすり減らしていく。

でも、きっとこれはとても大切なこと。

誰かを想う気持ちを大切に、その人のことを真剣に考える。それが尊いことでないはずがない。それだけを理解しつつ、けれど苦しみに耐え切れなくて京はそつと目を閉じたのだった。

徹夜明けの朝日は結局見ることができず、真紅が店内から出てきたのは店に入ってから半日近くが経過していた。昼の日光は真紅の目を突き刺すような痛みを与え、反射的に目を細めてしまう。

叶を先に帰して、店主と共に一夜を明かしてしまった真紅は店主の鍛冶を手伝ったり話をして自分のことを一通り理解してもらった。それが自分の刀を手に入れるために重要なことであったこともそうだが、店主と話していると普段とは違って饒舌になり、なぜだか自分をさらけ出したいと思ってしまった。

「行くのか」

「ああ、きつと行かなかつたら後悔するから」

約束の日。昨日一日を棒に振ってしまったが、不思議と眠気もなく生気が満ちている。

これから町に戻って、刀をとってから高嶺家へ。時間的にはいっばいいっぱいだ。

「君が歩もうとしているのはおそろく、白羽よりも険しい道だ。かつての仲間すら裏切って自分の正義を貫き通したあの男より、辛い定めを背負うことになるのだぞ？」

「……かまわない。元々孤独の中で生きてきたんだ。今更孤独に戻ろうと、問題は無い」

自分の心に嘘をついて、でも前に進まなければ自分の世界は変わらないから。抱えている疑念と七夜、二つに決着をつけるためにもここで退くわけにはいかない。

店主に別れを告げ歩み始める。

もしかしたら死んでしまいかもしれない。疑念や過去にとらわれのまま呆気なく逝ってしまったら笑いものにすらならないだろう。

しかし不思議と不安はなかった。

ただ心残りがあるとすれば、京に別れの挨拶ができなかったことくらいだろうか。もし生き残ったとしても、真紅はもうあの学園に戻るつもりはなかった。

あの学園は企業と太い繋がりを持っている。そんな場所に長期間在籍することは自殺行為に他ならない。叶が隠してくれているが、言い換えるならば隠さなければすぐにばれてしまうということであり、

こちらの体制を整えるためにも一旦公の場から退く必要があった。

それを残念だと思っっている自分に気づいて、存外に学園生活を気に入っていた自分にも気づいてしまった。さほど長くない在籍期間ではあったが、それでも真紅にとっては新鮮で、取り戻せないと思っていた平穏を少しの間でも取り戻すことができた幸福が神凧学園の生活には詰まっていたのかもしれない。

「……それでも、立ち止まるわけにはいかない。約束を、悪夢を終わらせるまで」

言い聞かせるように呟いて、真紅は足を速める。

泣き出しそうなほど厚く灰の雲が空を覆っていた。

〔四十二話〕 戦いの前に（後書き）

今回はかなり少ない量での更新になってしまいました。寛大な心で見逃してください。

あんまりネタバレばかりしていてもいけないので後書きはあまりいたしません。

次話はいよいよ真紅対七夜……になる予定。さてどうなることやら。

ではでは。

〔四十三話〕 開戦、七夜（前書き）

少年の刃はどこに向かい、青年の刃は何を映し出すのか。
二人が向き合うその時に、いったい何が起こるといえるのか。
全ては、誰にもわからない。

〔四十三話〕 開戦、七夜

弱々しい風が吹く芝生の庭には建物に背を預けて腕を組む青年が一人いるだけで、他の生命はただの一つも存在しなかった。眼前の地面へと突き刺さる蒼の槍は主の意志を損なわぬようと沈黙し、次第に沈みゆく太陽の光を反射させるだけだった。

青年、七夜は茜色に染まりゆく空に目を細め、そつと建物から背を離れた。しかし武器へと手をかけるわけでなく、何かを思案しているようにただ空を見つめるだけだった。

「来てくれると思っていたよ、真紅」

右手に刀を携え、真紅の外套を羽織った姿で真紅はその場所へと足を踏み入れていた。本当は少し前からいたのだが、七夜が放つ言いようのない雰囲気の話しかけようとする意志を封じ込めていた。

「来いと言ったのはそちらだろう。来ないと思っていたのか？」

「いいや。俺に聞きたいことがあるはずだ。来ない可能性は、ないと思っていたよ」

自信にあふれたような回答、不遜な態度。茜色に照らし出されるその表情には絶対的な自信が浮かび上がっている。けれど真紅は、その全てに違和感を覚えていた。

どうしてそう思ったのか、自分自身に問いかけてもわかりはしない。ただ単純に、七夜の全てがおかしいと思えてならなかった。付き合いが長いわけでもないのに、不思議なものだ。

「さあ、始めようか。僕にもあまり時間はないからね」

七夜が槍に手を伸ばしたのとほぼ同時に、真紅も左手に刀を握りなおし、右手を柄に添える。全神経を思考の海から引きずり出して、目の前にいる敵と対峙するための準備を整える。一瞬たりとも気は抜けない。今の真紅では、七夜に勝てる可能性は極端に低かった。

間合いの差は逆に懐へ入り込んでやれば解消されるだろう。しかし問題は七夜の放つ槍の速度だ。真紅の反射神経をもってしても紙一重でかわすことがやっとの一閃。それをほぼ同時に三つ繰り出すことができる七夜の力は、恐怖するに十分の理由を持っている。

それでも、退くわけにはいかない。

自身の中に渦巻く疑念の答えがそこにあるのなら、七夜の言葉を信じるのなら、決死の覚悟で対峙しなければ意味は無い。

地面から引き抜いた槍を一回転させ、腰の位置でそれを固定し、片手を真紅へと向けて七夜は口元を吊り上げた。

「行くよ、真紅。錬さんが残した最後の希望、俺にもう一度見せてくれ」

言葉と同時に、七夜の体が弾丸のように迫り来る。

蒼の槍を打ち崩すため、白刃を解き放つのだった。

一日中授業に身が入らなかった京は、早々に帰宅して自室の窓にかじりついていた。

何を見るでもなく目線を庭に向けていたが、気づいたときには空が茜色に染まり、そろそろ夕食の時間が近づいていた。

そういえば、三日前のこの時間は真紅と一緒に夕食をとっていた。何か特別な会話をしたわけでもなかったが、誰かと一緒に夕食をとるという行為自体が久しぶりで、いつもより饒舌になっていたのを覚えている。

覚えている、か。

真紅と一緒にいた時が、なぜだか酷く昔のことのように思えてくる。

少し会わなかったただけで彼が遠くへ行ってしまったような錯覚に陥って、切なくて、苦しくて。昔、同じようなことがあったことを、不意に思い出していた。

『……いつちやうの？』

『大丈夫だよ。また今度、きっと会いに来るから。その時はまた笑ってよ。京が笑っててくれたら俺も笑っていられるから』

『……うん、笑う。しんくのためだけに、笑ってる』

笑って手を振る少年に、かつての京は泣きながら手を振ることしかできなかった。結局その少年はその後一度たりとも京の前に現れることがなく、今まで記憶の奥にしまいこまれていた。

けれどこの記憶は、決定的な証拠だった。

一片の憂いすらない記憶の中の笑顔と、どこか影がさした笑顔は違っていて見えるが、それでも面影はしっかりとある。

気づいて、しまった。

救ってくれた少年、それが京の初恋だった。

気づいてしまったら、どうして今まで気づかなかったのか不思議で仕方が無い。あの笑顔も、声も、大きな背中も。全てが暖かくて、出会ってきた誰とも違う感覚ではなかったか。

出会う前から、恋していたのかも知れない。

京は窓の外を眺めながら、どこか清々しい思いに満たされていた。

そんな中、ふと視界の端で動くものを捉えた。空が漆黒に染まりかけ、庭も闇が満たし始めているというのにそれは時折光を放っているように煌き、移動しているのか場所はまちまちだ。

そういえば、と京は三日前に現れた男の言葉を思い出した。父には報告していないが、おそらく庭には七夜という男がいるのだろう。

庭を借りるとしていたが、いったい何に使っているのだろうか。好奇心が勝って、京は庭に向かうべく部屋を後にした。

正面玄関を使わず、庭に直結している玄関を抜ける。

甲高い金属音と共に光を放つ、二つの影。

それが何かを理解した瞬間、京は凍りついたようにその場に立ち尽くすことしかできなかった。

脅威なのは神速と形容できるほどの刺突と、細腕から繰り出されているとは思えないほど重い薙ぎ。離れすぎれば三段突きで間合いを詰められ、近すぎれば力任せに薙ぎ払われる。刀を使っている真紅は自分の間合いギリギリのところまで距離を開いて攻勢に回るのが、薙ぎ払いの後に繰り出される三段突きに体勢を崩され、思う

ように刀を振るうことができていなかった。

劣勢というには少しばかり生易しいところがある。

本来の、数日前に戦った七夜の実力はこんなものではなかった。

数日前の七夜は槍に込められた信念は揺らぎなく、自分の正義を貫いていることがはっきりとわかるほどだった。だからこそ真紅は今、こうして七夜の言葉通り刃を交えているし、七夜自身おそらく罨を張ろうとか、姑息な行為をしようとは考えていないだろう。

けれど今の彼には、迷いがあるように見えた。

「……何を迷っている、氷室 七夜？」

「迷う？ 俺がかい？ 馬鹿なことを。戦闘中のナイトメアに感情はいらない。ただ戦うことに集中する、それが俺たちの定めだ」

力任せに振るわれた雑ぎをかわして、片手で握った刀を突き入れる。反撃を予想し切れなかった七夜はのけぞりながらそれをかわし、一歩後ずさる。七夜の長髪が刃によって少し裂かれ、数十本の髪が宙を舞う。

「……本当に迷いがなかったら、俺を舐めすぎているな。本気を
出せ」

「はは……うん、確かに少しだけ侮っていたかな。その状態でもここまでやれるとは思っていなかったよ」

その状態、というのがわからなかったが真紅は刀を下段に構え、右足を一歩前に出した。七夜も両手で槍を構えなおし、真紅の動きを注視している。

緊迫した空気が流れるかと思った瞬間、七夜がいきなり吹き出した。

「くく……ははははは！ はあ、ダメだね。当初の予定にないことばかりやっている。錬さんほど上手く立ち回るなんて、俺にできるわけがなかったか」

「なんだ、いきなり……」

「ああ、すまないね。このまま打ち合っているのも悪くないんだけど、それじゃあ君に答えを与えられない。真紅……君なら気づいてくれると、信じているよ」

瞬間、七夜の姿が幻のように消えうせた。死角からの攻撃だと普段ならば考えるものだが、真紅は不思議とその狙いを理解し、両足に全力を込めて駆け出した。

何が起きているのかわからず立ち尽くす、その少女のもとへ。

〔四十三話〕 開戦、七夜（後書き）

うっ、あ、うああ。

書いている時間がないときに限って制作意欲が沸くときってありませんか？

今の作者がまさにその状態です。

いや、忙しいんだってば！ そんな展開今思い浮かばなくていいよ！

とまあ、こんな状況に陥ってしまったわけで……。

明日以降、さらに更新が遅れることと思われます。思われるというのとはなんとというか……更新しちゃうかもね、という意味だと捉えていただけると……。

ではでは。

〔四十四話〕 思い、記憶、そして（前書き）

少年の記憶の底、閉じ込められたそれを取り戻したとき、少年は
真実へと近づいてゆく。

〔四十四話〕 思い、記憶、そして

他人を巻き込むこんでしまう事態など、今まで一度たりとも想像したことがなかった。巻き込んでしまったとしても空や愛美といった、戦闘に少しでも慣れている仲間たち。一般人に危害が加わるようなことは、ナイトメアのような暗殺者相手ではありえない。いや、あつてはならない。

だからこの状況は、あつてはならないものだった。

七夜の背中を追って駆けながら、真紅はどうやってこの危機を切り抜けるか必死で思考をめぐらせていく。速力では七夜に一步及ばない。このまま追い駆けているだけでは確実に、真紅の負けが決定してしまう。

何より七夜が誰かを巻き込む戦いをするとは、考えられなかった。

負けていたわけではない、むしろ圧倒していたはずの七夜がここで彼女を巻き込む理由。それを駆けながら考える。

そもそもここで戦っているのは、七夜に植えつけられた疑念を晴らしたいと思ったからだ。七夜の言葉を完全に信じきったわけではなかったが、それでも彼と戦うことで自分なりに答えを出すことができる、と信じていた。

迷いがある状況でも、同じように迷っている七夜になら付いていくことができている。しかし

何か、おかしいと思ってしまう。

七夜の力は本気でなくともこれ以上のものを出すことができる。今の彼は本調子ではない。そういった確証の無い自信が意識の根底に息づいている。その理由を、後一步で導き出せるような気がしていた。

もしその理由を七夜自身も導いてくれているのだとしたら。いや、七夜こそが真紅に思い出して欲しいと願っているのだとしたら。

今この瞬間に、七夜が駆け出した理由も理解できるかもしれない。

『お前を巻き込んだ。これくらいの罰で済まされるのなら、かまわないかなあなんて思ってる』

不意に響く、鍊の優しい声。目の前に浮かんでくる情景。

林の中で少し開けたその場所に、鍊が片膝をついて苦しげに表情を歪めていた。口元には血が滲み、服の腹部は血ににじんでいる。目の前には今より少しだけ若い七夜がいて、膝をつく鍊目がけて槍を振り上げていた。

その瞬間、真紅の体は自分でも驚くほどの動きをした。

両足は感覚がなくなるほど高速で機能し、両腕は子供の体ではなしえないほど力をひねり出し、頭はその場でもっとも有効な対処手段をたたき出す。真紅がしっかりと多い出せたのは、その後には、その後に錬の刀を握る自らの両手と、吹き飛ばされて血を吐く七夜の姿。

この記憶が本当のものだとするのなら

考えるのは後回しだ。今はただ彼女を救出することだけを考
えればいい。

彼女を守りたいと、死なせたくはないという思いが胸にこみ上げる。せつかくかつての人形のような表情を捨て去り、少女の表情を得ることができたというのに、こんなところで未来を終わらせるわけにはいかない。

いや、それも違う。彼女の身を守るだけではなく、彼女をこんな世界に巻き込んでしまうこと自体が許せないのだ。

ああ、そうか。こんなにも俺は、彼女の幸せを願ってしまっている。

彼女を守るために戦うわけじゃない。彼女を守りたいと願う自分の心に従って、戦うんだ。

世界の音が、止まった。同時に四肢の感覚が希薄となり、懐かしい感覚が全身を支配していく。

懐かしい、と思えてしまうほど記憶が蘇っていた。この後自分がどんな行動をとればいいのか、どんな行動ができるのか、全てを把握して動くことができる。

呆然と自分たちを見ている少女。その顔が思いのほか近くに感じられた。片手を伸ばして少女の細い体を抱き寄せると、空いている片腕で刀をかざし七夜の蒼い槍を防ぐ。防がれたという認識をさせる前に七夜の視界から駆け抜けて、彼の背後十数メートル付近で急停止した。

「あ……え……？ あさ、なぎくん？」

世界に音が蘇る。同時に襲い来る虚脱感と全身の骨が軋んでいるような激痛は、記憶の中と一致する。確かにこれほど強烈な感覚が襲い掛かってくるのなら、幼い少年が記憶を欠落させるのも頷ける。成長した今でも、強烈過ぎる感覚は苦痛だった。

少女は一言だけ呟くと、真紅の速度に耐えられなかったのか意識を失ってしまう。しかし今は、好都合だった。

「……よかった。思い出したみたいだね、真紅」

「ああ。そうだな」

表情は見えなくとも、本当に嬉しそうに言葉を紡ぐ七夜。その意味が今なら少しだけわかる。真紅は思い出したその記憶の中で七夜が投げて欲しいと思っっているであろう言葉を、告げる。

「答える、氷室 七夜。なぜ 生きている？」

半身を彼の背中に向け、少女の、京の体を庇う心構えをもって七夜と対峙する。背を向けたままだった七夜は堰を切ったように押さえきれない笑い声をもらし、真紅に振り向いた。

「そう。その言葉が聞きたかったんだ、あの夜に。あの時、俺を殺した男、朝凧 真紅」

「肯定する……か」

あっさりとしたその回答に真紅は思わず眉をひそめた。しかし何よりも、振り返った彼の浮かべる表情こそが真紅に奇妙な感情を植えつけていた。

七夜の顔に浮かんでいたのは心の底からの歓喜。鬼気迫るその表情からは先ほどまで感じていた殺気が微塵も感じられず、むしろ何というか

かつての錬と同じような、優しい感触があらわになっている肌全てを包み込み、真紅の心に安堵が去来していた。

張り詰めていた心が弛緩していくのがわかる。京を守っていることすら忘れて、真紅はそつと切っ先を地面へ向けてしまっていた。

「ありがとう、真紅。君が思い出してくれただけで、俺の使命は完遂された」

「なん、だと？」

「答えよう。俺は確かにあの時、君の刃に腹部を切り裂かれ、死んだ。それは間違いない」

ならばなぜ彼は生きてここにいるのか。偽者、ということももちろん考えられる。だがその可能性は極端に低いものだろう。もし彼が偽者だとするのならどこを斬られて死んだのか、真紅がどうやって彼を殺したのかここまでではつきりと理解しているはずが無い。あの場にいたのは真紅と錬、そして七夜だけだったはずだ。

偽者ではない。だからこそ疑問は尽きない。

「……これは俺たちナイトメアの内部では常識となっているものだが、君たちの常識からは逸脱しているだろう。だから信じるかどうかは、君の考えに任せるよ」

「……ああ。こっちに来ていろいろと新しい発見があったからな。今更滅多なことでは驚かないぞ」

「それは良かった。なら、真実を伝えよう」

七夜は槍を地に突き刺し、告げる。

「俺たちナイトメアは 死ぬことができないんだ」

七夜が告げるその事実には、真紅は脳髓をハンマーで潰されたような衝撃を与えられ、おそらく今攻撃を受ければあっさりとやられてしまうほど無防備になってしまったのだった。

「始まりは幼い頃に行われた実戦形式の演習。目の前で死んだやつがいた」

そもそもクローン技術を駆使して創ったものだったため、研究者たちも対処に難色を示したという。どこかで埋葬しようにも戸籍がないため墓も用意できない。秘密裏に処理するのは当初の責任者が許さない。

どうすればいいのかと話し合っていたとき、それは起こったという。

死んだはずの男が突然立ち上がり、腹部に開いていた大きな風穴は時間が逆行しているように再生していく。

その時から、新たな実験が始められた。

ナイトメアの再生能力。それがどの程度のものなのか、どういった現象によって成り立っているのか、研究者たちにとっては確かに格好の研究対象だっただろう。

研究されていくにつれてわかったことは再生が開始されるのは彼らが生まれた施設の中だけであるということ、一度死ぬと個体能

力がかなり下がってしまふということ。研究に使われた仲間たちはいくどの生と死で精神を病み、感情を完全に失った人形となつてしまつたという。

結果としてナイトメア、錬や七夜たちの反抗心を刺激し、上位ナイトメアのうち三人の反逆者を出してしまつた。

〔四十四話〕 思い、記憶、そして（後書き）

天一たちが使っている魔力。彼らの場合はそれを放出する形で使用しているのですが、真紅はそれを自分の中で操ることによって並外れた身体能力を発揮する。

その代償として体に過度の負荷がかかり、防衛本能が記憶に鍵をした。それが真紅の力を半減させていたわけです。

久しぶりにお話に関することを書いた気が……。

まああまり気にしないことにします。

次話もなるべく濃い内容のものを書いていきたいと思っています。

ではでは〜。

〔四十五話〕 獣の宴（前書き）

共に歩むそのために、共に掲げるその願い。
少年の旅は、少しずつ、少しずつ

終着へと近づいてゆく。

〔四十五話〕 獣の宴

七夜の言葉にはわかには信じがたい内容ではあった。

死んだ人間が蘇る。そんな非現実な事態を平気で信じられるほうがよほどおかしい人間だと、昔の真紅ならば考えるところだ。

しかし今の、様々な世界を知った真紅ならば七夜の語る真実をただ突っぱねることをしなかった。

「……錬や叶がナイトメアから離反したのは、そういった実験が原因か」

「錬さんはそうだろうね。ただ叶はこの事実を知らないんだ。ナイトメアとしては失敗作である彼女は、おそらく蘇生能力が備わっていない。元々ナイトメアにいた女性は三人。今一人しか存在しない理由は……君ならまあ、察しがつくだろう」

実験に利用されたか、暗殺に失敗して死んだか。どちらにせよろくな終わり方をしてはいないのだろう。叶が今五体満足で生存していることは、言ってみれば偶然の産物。

その事実を知らない叶は、幸せなのかそうでないのか。真紅では判断できないし、する必要もなかった。

「さて、俺の目的は達成できた。感謝するよ、真紅」
「待て！ お前の言葉が正しいとするのなら！」

七夜の語る事実を信用するとしたら

死んだはずの彼は、工藤 錬は生きているというのだろうか。

曲がりなりにも彼はナイトメア、その筆頭だった。ナイトメアの定義に当てはまらないはずが無い。だとするのならあの時に死んだはずの錬と七夜、互いに生き返っていてもおかしくはなかった。

「察しの通りだよ 錬さんは生きている」

今度こそ、刀をこぼしそうになるほど無防備になっていた。

今まで錬との約束を、悪夢を終わらせるという約束を守るためだけに力をつけ、刀を握り、たくさんのナイトメアを切り伏せてきたそこには少なくとも錬を死なせてしまったという罪悪感も含まれていた。

もし彼が生きているのなら、もう一度、一目でいいから会いたい。

「もつとも今どこにいるのかは定かではない。企業に見つかるほど弱い人じゃないから大丈夫だと思うけど、それだけに見つけるのは至難の業だよ」

「……そう、か。わかった。感謝しよう、七夜」

「ふ……君に感謝されるいわれはないけどね。俺は君の大切な人を殺そうとしたんだよ？ 怨まれこそすれ、感謝とは……」

大切な人、か。

七夜は最初から真紅が何を、誰を大切に思っているのか理解していたと言つことだろうか。当人よりも早く。そこまで自分が鈍かったのか、七夜が鋭かったのかわからないが気持ちと言つものはままならないものだと言再確認させられる事態ではあつた。

「いや、感謝しよう。あなたのおかげで自分の気持ちに気づくことができた」

「……おやおや。案外と純情だつたんだね、君は」

「うるさい。憎まれ口を叩かないとやってられないのか、あなたは」

険悪な空気など微塵も感じさせず、真紅は刀を納め、七夜は槍を肩にかけて溜め息をついている。

決着など最初からつける必要が無い。真紅が記憶を取り戻したその瞬間に七夜の目的は達成され、真紅がここに来た理由も果たすことができた。

「あなたはこの後、どうするつもりだ？ このままナイトメアに戻るのか？」

「そうだね。何もなければそのつもりだつただけど、どうやらそうもいかないらしい」

せつかく和解できたはずなのに、真紅と七夜は同時に戦闘体制を整える。

放つ殺気は尋常なものではなく、さっきまでの戦いとは比べ物にならないほどのそれ。しかしそれは、互いに向けられたものではない。

高嶺家の敷地内に設置されていた離れ。その屋根に座ってこちらを見ていたその男に、二人の殺気は向けられていたのだ。

いつからそこにいたのか。少なくとも七夜と決着をつける前まではいなかったはずだ。感覚が研ぎ澄まされていた真紅が見逃すはずは無い。

「敵対、ばれちゃったみたいだし」

「あんた、かなり軽い性格してるのな」

ほめるなよと真顔で言う七夜だったが、その表情からは余裕がさほど感じられない。それは真紅も同じこと。さっきの反動がまだ体中を支配していて、思うように体が動いてくれない。

そこにいる男から放たれる気配は、本調子でなければ敵わないと思わせるほど強烈なもの。

「……………ひひ……………ひひひひひ！」

獣のような、少なくとも人間のものとは思えないほどの笑い声。どこかで聞いていなければ人間のものとは思えなかっただろう。

それは七夜と戦ったあの日、彼を闇の中へと押しやった獣のもの。

「おいおい……………最初からイツちゃってるな、聡司」

あの夜、天一と戦っていた男、烏丸 聡司。

狂ったその笑い声は拡散しているはずなのに、気落ち悪いほど耳にこびりつく。皮膚に感じる威圧感の本物の獣と遜色なく、七夜以上の恐怖を植えつけようとする。

「真紅。君は彼女を連れて逃げていいよ。その子まで巻き込んだら、流石に後味が悪い」

「……仕方ないか。何分持つ？」

「ん〜……三分？」

「カップ麺か、あなたは……すぐに戻る」

冗談のようにやり取りをしているが、実際問題三分程度しか対峙できないということだろう。手合わせをしなくても、わかる。聡司が放つ獣の圧力はいくら人外存在であるナイトメアであったとしても敵うとは限らない。

右手だけで槍を回転させ、高速で円を描く七夜の槍は巨大な凶器。元々存在していた破壊力を倍増させるその動きに背筋が凍る。

「真紅。一つだけ言うておくよ。俺はいつだって、あの時だって鍊さんの味方だった」

一つ頷いて、真紅の耳から音が消え去る。その場に背を向けて、彼女を守るために駆ける。

背中に響いたのは、重たい何か衝突したような鈍い音だけだった。

言葉を交わすこともできず、七夜は襲い掛かってくる聡司の鞭を切り裂こうと槍を振りぬく。わざと正面からぶつけようとせず、一定の角度を保ってぶつけると聡司の鞭は上手い具合に軌道を外し、七夜の体にぶつかる可能性はなくなる。

とはいうものの聡司の鞭は思いのほか重く、遠心力を味方につけていなければ弾き飛ばされてもおかしくはない。それでも押し負けていないのは、ひとえに七夜の力量というものだった。

フォースナンバー・烏丸 聡司。彼の潜在能力は七夜や鍊とほぼ互角か、それ以上のものだった。だった、と過去形なのはこうして人格が破綻したことで生まれた力があるという事実、元々の実力とは比べることができないという事態がそういった表現を余儀なくさせていた。

少なくとも力だけなら現存するナイトメアの中でもトップに君臨している。その細い体でどうしてそんな力が放てるのか、不思議で仕方がない。

ワックスで固めていたオールバックの髪型は完全に崩れ、繋がれていたままの姿なのか服は所々破けている。憎たらしい笑顔は狂気に満ちた笑顔に変わり、理性のかけらも残っていない。

かつてたった一人の少女を逃がすために自らを犠牲にした面影も、すでに残ってはいなかった。

「俺はさ、聡司。お前のことを尊敬していた。叶のために全てを棄てるなんて人間じみたこと、お前以外には鍊さんくらいしかできなかっただろうから。でも、だからこそ、今のお前を野放しにするわ

けにはいかない！」

懐へ入り込んだ七夜は槍を楯のように利用して鞭の死角にもぐりこみ、わき腹に力強い蹴りを見舞う。弓なりにしなる聡司の体へと容赦なく追撃を加えるべく一步を踏み出すが、首筋に違和感を覚えてその場で直角に跳躍した。

数秒前まで七夜の頭があった場所を丸太のような鞭が通過する。あと一瞬でも遅れていたなら、おそらく七夜の頭と胴体は永久の別れをむかえていたことだろう。

理性を失っても自らの戦闘スタイルは大幅に崩すことがない。戦慄するに値するその事實は、七夜の不利をさらに後押しするものだ。

回転が止まってしまった槍にもう一度遠心力を加えるべく、七夜は槍を振る。

七夜にとってこの戦い方は自分の主とするものではなかった。七夜は元々力より速さで勝負を決めにいくタイプの槍兵。三段突きのような高速刺突を得意とするため、本来は力を使うことなく相手の急所、心臓や喉笛を狙う。しかし今はその正確な槍捌きを力へと向けているため、普段のような冷静な戦闘が行えずにいた。

「……厄介だな、本当に」

昔から知っている鞭の動きに、力でねじ伏せるような強引さが加わって七夜の中では戸惑いが生まれている。普段の聡司に対抗する方法はわかっているが、どこまでが普段どおりでどこからが獣なのか、その見極めが難しい。

それでも、負けるわけにはいかない。

ここで負ければ、本部で拘束されて聡司の二の舞となってしまう。逃げる手段、経路も数個用意しているが錬のように上手く立ち回れるか定かではない。そもそも負けるなど七夜のなけなしのプライドが許さなかった。

着地と同時に距離をとり、回転数を上げる。筋肉の限界まで速力を上げ、空気を切り裂き、防御と攻撃のどちらもできるように整える。

そうやって聡司に対抗する手段を増やすつもりだった。しかし

「……おいおい」

思わずそんな言葉を呟いてしまうほど、七夜は自らの目を疑った。

数十メートル先にいる聡司は頭上に鞭の柄を掲げ、二メートルを超える鞭を回転させていた。七夜とは違い空気を切り裂くのではなく、空気を巻き込んで味方にする。そうすることで自らを台風の目とし、小規模の台風を巻き起こしていた。

人工的な台風に七夜の皮膚があわ立っていく。しかしなぜか、それが恐怖であるとは思えなかった。

この状況下で恐怖以外の感情が生まれている。生まれた感情が何

なの、七夜はそれに気づいて口元を吊り上げるように笑っていた。

楽しんでいるのか、俺は。

自分の限界を見つける戦い。そう考えても過言ではない。

恐怖すら超越して、快楽に変わっていく。これがナイトメアの本質なのだしたら、それは悲しいことなのか。今の七夜には判断することができない。いや、する必要もない。

いつもより体が軽くなったような錯覚に陥って、七夜は一步を踏み出す。

錬さん、あなたはこんなとき、どうしますか？

長らく行方の知れない旧友に問いかけて、それは自分で見つける答えだと、七夜は苦笑を浮かべるのだった。

〔四十五話〕 獣の宴（後書き）

祝・七夜参戦！

いや、めっちゃ前から参戦はしてるよ、とか突っ込みはなしの方
向で。味方として、ですよ。

以前に書いたかもしれませんが元々七夜は完全な敵キャラとして
考えていたキャラでしたが、何だかんだでいいキャラに育ってくれ
たかなあと思っております。

他人をからかって楽しんでるけど、それでも人一倍仲間を気遣
っている彼。そんな彼がかつて錬に向けた殺意にはいったいどんな
思いが込められていたのか。任務だから、なんて理由でできるほど
彼は単純じゃない気がします。

ではでは〜。

〔四十六話〕 三人の戦（前書き）

ただ戦うだけなら簡単なことだ。そこに意味を見出してこそ、刃の重みが増してゆく。

〔四十六話〕 三人の戦

庭を駆け抜けて安全な場所を探していた真紅の前に現れたのは、彼女に仕えている老執事だった。

「千崎、さん？」

「真紅様、お嬢様のことはお任せください。この千崎、命を賭してお守りいたします」

全てを知っているかのようなその物言いに、真紅は一瞬眉をひそめる。こちらの素性を瞬時に察したその慧眼や知識量はただの執事としては度を越えたものであり、軽々しく信用するわけにはいかない。もしかしたらこちらの情報を主人に伝えているのではないかという疑念も残る。

だがここは彼を信用し、彼女を預けるほかに選択肢を持っていなかった。

「あなたが我々を信用できないことは存じております。しかしあなたにもなすべきことがあるはずです」
「……わかりました。お任せします」

片腕で抱えていた少女の細身をそつと執事に預け、真紅は刀へ視線を移す。研ぎ澄まされた刀身は刃こぼれこそないが、真紅の漆黒の瞳にはどこか危うく映ってしまう。その理由がどこにあるのか定かではないが、白刃を鞘に納めると急ぎ七夜のもとへ向かった。

芝の庭を駆け抜け、戦場へ舞い戻った真紅の目が捉えたのは様々な奇怪に遭遇した真紅をもてすらありえないと思わせるほどの奇怪。

邪悪な笑みを浮かべて鞭を回転させる聡司と、それに真つ向から対峙する形をとり槍を高速回転させている七夜。聡司の回転は嵐を起こし、七夜の回転はそれを打ち消そうと必死に抗う。勢力でいけば明らかに七夜の劣勢だが、その気迫と腕力には常軌を逸したものが存在していた。

「七夜！」

あらん限りの力を込めた叫びも強風に遮られ、七夜のもとに届いている様子はない。真紅自身も嵐の中心から離れているとはいえ、何の影響も受けていないわけではなかった。しっかりと両足に力を込めていなければ吹き飛ばされてしまいそうな圧迫感。恵理の生み出す風を思わせるが、彼女のそれよりも明らかかな殺意、悪意を感じずにはいられなかった。

このまま風に任せて吹き飛ばされてしまえばどれほど楽なことだろうか。恐怖を植えつけようとする目の前の獣など他人に任せ、安穩とした世界に帰ることができたなら。しかしそれは彼の、朝凧真紅の信念が許しはしない。

逃げれば後悔する。目を逸らせば失ってしまう。自分の信念を守るために、大切な人を守るために、自らの刃に手をかける。

姿勢を低く、弾丸のように速く

風の刃に頬を裂かれても、真紅は加速をやめない。

お前に最も合った刀、それはここにはないが

回転する鞭の下にもぐりこんだとき、ようやく聡司はその存在に気づいて一瞬だけ回転が鈍る。

お前に合った戦い方、それは

その一瞬だけで、十分だ。

自身の間合いに敵を捉えた瞬間、真紅は右足を一步踏み出し柄に添えた右手に力を込める。左右の手を真逆に引き、白刃がその頭を現したときにはすでに彼の独壇場。

刃が鞘から離れる瞬間の、最高速度。それこそが真紅にとって必殺の武器。

前方百八十度を切り裂くように、真紅は刃を解き放った。

祖父から教わった絶対の技。それは当の本人にすら目視できないほどの凶器。それをかわされたことは未だかつてなかった。

だが

「　　そんな」

目の前の獣は真紅の刃を、紙一重でかわしていた。

ぼろぼろの服を掠めて、腹部に浅い傷を負わせることはできたものの致命傷には程遠い。それどころかこの後の行動にも支障をきたしはしないだろう。

かわされた、という事実には真紅の脳が停止している。そのわずかな隙を突いて、遠心力をふんだんに溜め込んだ鞭が正面から突き入れられる。

たとえるならば巨大な丸太。復活した思考の中で何とか防御しようとする防衛本能が働き、両手を柄に添えて刀を前に押し出す。直後に襲う衝撃は形容しがたいほどの重みと圧迫感を与え、踏ん張っていたはずの真紅は軽々と後ろへと押しやられてしまう。

地面すれすれを舞う自らの足。両手の力を少しでも抜けば眼前の鞭が真紅の肉を引き千切る。足で速度を緩めることもできず、負荷は少しずつ握る刀へ傾いてゆく。

まずい、そう思った時にはすでに遅い。

輝が入る時間すらなく、真紅の刀は中ほどから砕け散っていた。

守りを失った今、真紅は一般人と変わらない。命を刈り取ろうと

するものに抗うすべを持っていなかった。

「……のー」

窮地を救ったのは七夜の槍。鞭の中心を的確に狙い、必要最小限の力でそれを受け止めようと試みた。しかしそれも長くは続かず、真紅は左へ、七夜は右へと弾き飛ばされてしまう。

「はは……ここまで来ると同じ生物なのか疑いたくなるね」

鞭を手元に戻し薄い笑みを浮かべる聡司。周囲の夜闇もそれを後押ししているのか、その笑みが邪悪なものに見えて仕方ない。

聡司から視線を移し、自らの愛刀へと目を落とす。残った刀身にも大きな輝ができていたり、刃こぼれがあつたりとさつきまで健在だったのが嘘のよう。見る影のない長年の相棒に感謝の意を念じつつ、この後どうやって聡司と戦うべきか必死で考えをめぐらせていく。

素手で戦おうにもあの鞭の壁は突破するだけでも難しい。加えてさっきの一撃で左肘を鈍痛が襲っていて、効果的な打撃は見込めない。武器のない自分がどれほど無力なものなのか、こんな状況で再確認させられるとは思ってもみなかった。

「……真紅、俺が引き付けておくからその間に逃げ……」

「嫌だな。決めたんだ、逃げないと。喻えどんな状況だったとしても、負けるとわかっていたとしても逃げたくはない。愚かだと言われようと俺は、自分の信念くらいは貫いてみせる」

今までは錬との約束を糧に、どこか義務感を覚えて戦っていた。

それを背負った責任から逃れる理由にして、京たちの目の前から消える言い訳にして、そうやって全てのものから逃げようとしていたのだ。

自分の気持ちに、大切なものを守りたいと願う心に気づいてしまった今、逃げるなどという選択肢は存在しない。

「よく言った」

不意に頭上から投げられた言葉と同時に、何かが振ってくる気配を感じた。視線を上げると白い塊が一直線に落下しており、慌てて一歩だけ後退する。

音もなく地に突き刺さったのは、雪色の柄、純白の鍔を持つ日本刀。

その日本刀がどうしてここにあるのか、なぜ頭上から降り注いだのか、真紅は理解できずにいた。

「使え。刀も日本刀も扱い方は変わらないだろう？」

「なっ……天！」

隣に現れた天一は初めて出会った日のように漆黒の外套を身にまとい、当然と言いたげに自らの存在を確立していた。これには七夜も驚いたのか、槍を肩にかけて口笛を吹いていた。

「お前、何で……」

「いやあ、気になってきてみたら変なのとやりあってるじゃん。あ

いつには俺も借りがあるんだ。だから俺も参加な。あ、そいつは使
つてくれてかまわんぜ。諸々の事情から同じの二本くらいなら出せ
るから」

「出せるって……」

その言葉が言葉が示すとおり、天一の手には目の前のそれと同じ
日本刀が握られていた。これも彼らの言う”魔力”がなせる業なの
か。理解したとは言いがたいながらも、真紅は無理やり納得し、目
の前の日本刀に手をかけた。

雪のような柄はその外見どおり、手のひらに吸い付くような感触
を真紅に与えている。

それ自体が意志を持っているかのように、どんな扱いかたが自ら
に合っているのか自然と理解できていた。

「氷室 七夜、悪いが俺も参戦させてもらっぞ」

「かまわないよ。いや、むしろ助かるかな。あれを止めるのは今の
俺たちだけでは難しかった」

七夜の承認によって三人は一定の距離を保って散開する。真紅が
中央、左に天一、右に七夜。それぞれが武器をしっかりと構え、目
の前の獣に敵意を示す。

聡司のほうはというと、口元の笑みが消えることはなく、また頭
上で鞭を回転させ始めていた。

今までのように一対一でも対応できるようなものではなく、驚異
的な力を放つ敵。初めて自分だけでは倒せないという感覚に、昔の

真紅なら奇立ちを覚えていたかもしれない。だが不思議と今は、天
一や七夜と共に戦うことに深い安心を覚えていた。

自らの変化をはっきりと自覚して、真紅は不知火を握る手にいっ
そこの力を込めるのだった。

〔四十六話〕 三人の戦（後書き）

大切なものに気づいたことで戦う理由が変わってゆく。それがいい方向であるうと、悪い方向であるうと進歩には変わりない。

それに気づいたからこそ、真紅は少しずつ真紅らしさを育てていくのではないかと考えています。

ではでは〜。

〔四十七話〕 闇の中の戦い（前書き）

一匹の獣を倒すために、自らの信念を貫くために、少年は剣を手にする。

〔四十七話〕 闇の中の戦い

先手を取ったのは真紅たちの方だった。中央の真紅が初手を攻め、七夜が鞭を押さえ込み、天一が決める。示し合わせたわけでもないのにそれが最も有効な手段だと理解できる。

真紅の素早さは敵の攪乱に向いている。初手で決着をつけられるのならそれでもいいが、今の聡司がそこまで弱いわけではない。七夜の槍は真紅や天一の日本刀よりリーチがあるため、今は鞭の軌道を防ぐのに適していると言える。そして天一は真紅のそれよりも高い精度の技術を持ち、真紅が失敗した方法を取ったとしても今度は成功に導いてくれることだろう。

まだ加速途中の鞭、その懐に潜り込むべく真紅は加速する。頭上すれすれで回転する鞭を警戒しつつ不知火の切っ先を聡司に向け、駆け抜けるように突き刺そうと考えていた。

だが聡司にも相手の出方を判断する能力は残っているようで、横に回転していた鞭をいきなり頭上に振りかぶり、力いっぱい地面へとたたきつけた。

前方に向いていた勢いを何とか殺しながら、真紅は横に飛ぶ。地面を抉る一撃は芝を易々と吹き飛ばし、弾けた土を思わず片手で払ってしまった。

その一瞬、聡司の姿を見失ってしまう。

「上だ、真紅！」

天一の声に反応して、上を見ることなくさらに後退。直後鞭の一撃が真紅のいた場所を襲い、衝撃が空気を震わせる。

距離をとってしまった真紅の代わりに七夜が距離を詰める。幸い回転が止まっており、七夜の腕力なら聡司の鞭を防ぐこともできるだろう。次の一手に備え体勢を整えながら真紅はその動きを注視していた。

強引に突き入れるのではなく、牽制を混ぜた高速刺突。力任せな攻撃よりも、やはり七夜はこっちのほうが似合っている。本人もそれを自覚しているのだろうが、速さだけならば聡司の鞭は七夜のそれに遠く及ばない。

さしもの聡司も七夜の槍は怖いのか、むやみに押そうとはせず交代しながら隙を突こうとしていた。体力まで無尽蔵のように素早い動きで槍の軌道から逃れている。

「天、左右から仕掛けるぞ」

了承の合図を確認する必要もなく、真紅は聡司の左側へと駆け出した。本当に不思議なことだったが、示し合わせる必要すらなくほぼ同時に左右へと到着していた。

二人の姿を確認して七夜の槍が一瞬止まる。反撃の隙だと判断した聡司が反撃に転じようとしたその出端こそが、二人の狙う瞬間。

真紅は縦に、天一は横一文字に斬りつける。左右同時に繰り出さ

れる斬撃はさしもの聡司も戦慄を覚えたのか、鞭の柄を地に叩きつけ跳躍した。

空中で無防備になったところへ七夜の投擲が迫る。素手で防ぐにはあまりにも威力がありすぎる。

今度こそ、止めを刺した。その確信はだが、またしても打ち破られてしまった。

七夜の投げた槍を聡司はその牙で挟み、何事もなかったように着地する。今にもうなり声を上げそうなその影はまさに獣と言つにふさわしい。

「……いやあ、流石にこれは予想外だね」

言葉こそ軽いものの七夜の声にはわずかな焦燥が顔を覗かせていた。

噛み締めていた槍を手に取り、聡司は持ち主の方向へ投擲する。七夜の投擲よりも速い一閃は素手では止められないと判断して、真紅は七夜の前に躍り出て、その一撃を弾いた。

宙を舞う蒼い槍。自らの槍を取り戻した七夜はありがと、と軽く礼を述べて構えをとる。

「猛獣相手にしてる気分だな。どうするよ、これ？ 波状攻撃でも仕掛けてみるか？ 案外怪我の一つくらいでおさまるかもしれないぞ」

「その程度で倒れてくれるなら、ほんと助かるんだけどね」

二人の言葉を半ば流して聞きながら真紅は対抗策をひねり出そう
と思考をめぐらせていた。

脅威なのは並外れた身体能力と巨大な鞭の二つだ。速さは真紅や
七夜のほうがはるかにあり、技術面においては天一に遠く及ばない。

三対一であちらの独壇場になっている理由はやはり鞭のほうに問
題があるのだろう。どうにかしてあれを止めることができれば勝機
はある。

しかし言うほど簡単なことではない。破壊力だけは異常にあり、
位置取りを間違えてしまえば高嶺の屋敷を破壊されてしまう恐れも
ある。今の聡司の常態から見てもその可能性は低くない。必然的に
真紅たちが取れる手段は限られてくる。

鞭を少しの間だけでも使用不能にする方法。真紅の頭の中にふと
妙案が浮かんだ。成功する確率は低いが、やってみる価値はある。

「天、七夜」

沈黙する聡司を警戒しつつ真紅は二人に作戦を説明する。

戦闘中になんとも情けない構図だったが、二人は同じような笑み
を浮かべていた。

「いいんじゃないか？ 手を拱いているよりはましだろう」

「ま、作戦としては安直だけだな」

二人の中途半端に辛口の発言に苦笑しつつも、真紅は日本刀を構
えなおした。

足を止めた聡司へまずは真紅が駆け出す。聡司の意識を少しでも自分に向けるために左右へ進路を何度も変え、攪乱する。上手く術中にはまった聡司は真紅だけに敵意を集中し鞭の直線が真紅に向けて放たれる。

紙一重でそれを避け、鞭の横つ腹に刀を思い切り突き立てる。当然硬度の高い鞭に刺さることはなかったが、その一撃は鞭の軌道を大きく変化させ、先端のあたりから曲がり始める。この真紅の一撃こそ絶対に失敗してはいけない一撃。聡司の鞭を封じるための布石だった。

天一の両手を足場にして七夜が高く跳躍する。建物五階ほどの高さまで跳んだとき、七夜は全身のバネをもって地上へ向けて投擲した。

重力を味方につけた槍は鋼鉄の鞭でも防ぎきることはできず、鞭のちょうど中心に深く突き刺さった。

それを確認して天一は勢いを失った鞭の下に潜り込み切り上げる。切り裂くことができるならそれでも良かったが、天一の力をもってしても切り裂くことはできなかった。

完全に力を失った鞭を、天一は野球のバッターのごとく不知火を構え、振りぬく。最初とは真逆の力を受けた鞭は、七夜の鞭に巻きつくように回転し、槍を完全に覆うほど多く巻きついていった。

天一のバッティング技術に舌を巻きつつも、真紅は武器を失った聡司に肉薄する。

今度こそ、とった。再三の失敗を乗り越えて、今度こそ

瞬間、聡司の体が掻き消えた。

驚愕するよりも速く、真紅の中から音が消えうせる。目視できない聡司の位置を把握し、その攻撃を回避すべく跳躍する。

空中に逃げた真紅の背後に聡司の姿が浮かび上がる。

七夜を倒した奥の手を使っても、聡司から逃れられない。空中に逃げたためさらに回避することもできず、簡単に言つと絶体絶命という状況に陥っていた。

聡司の研ぎ澄まされた爪が鼻先に迫ったとき、真紅の視界が急にぶれた。同時に横腹を襲う衝撃は痛みを伴わず、誰かに優しく押しつけられたような感覚だった。

その原因に気づいたとき、真紅は気づかぬうちに声を荒げていた。

「七夜！」

着地した真紅の目に映ったのは真紅を庇って爪を受けた七夜の背中と、薄闇の中でもはつきりとわかる鮮血。真紅の代わりとなって傷を負った七夜は半分閉じた半眼を真紅へと向け、精一杯笑おうと努めていた。

また、守られた

「いったいいつまで俺は”守られる側”にいなければならないんだ？」

怒りと自己嫌悪と、わずかな焦燥が真紅の心を覆い尽くす。

死なせない。絶対に。

たとえ生き返ると知っていても、七夜を、仲間を守りたいと願っていた。

右足が芝の地面にめり込むほど強く、踏み込む。どれだけ空中で動かれたとしてもかわされない攻撃を。全身の筋肉を総動員して、今度こそ聡司を止めてみせる。

「併せろ、天！」

声をかける必要もなかったように、いつの間にか天一は聡司を挟んで反対側に位置取っていた。

刺さっていた爪を腕ごと強引に引き抜き、七夜はその体を押しつける。背中越しに聡司の位置を確認して、天一より少し早く駆け出した。

聡司が肉薄に気づき、両手を真紅へと突き出す。右手に握った鞘で防ぎ、左手の不知火で下段から大きく振りぬく。防御に使った鞘は破壊されたものの、それに見合う結果を得ることはできていた。

不知火の白刃が聡司の右肩を捉えていた。勢いよく噴出す生暖かい鮮血を顔のいたるところに浴びながら、理性を失った顔に驚愕の色が浮かんだことを確認し、真紅は口元だけで笑って見せた。

「お前の負けだよ、烏丸」

もう一人の存在に気づいて聡司は振り返る。間髪いれず逃げるように横へ跳んだが、天一の刃を逃れられるとは思えない。

天一の刃が聡司の胸を通り、少し遅れて上半身と下半身がズレる。獣のような大きな咆哮を残して聡司は仰向けに倒れ、目に宿っていた奇妙な光が完全に消えていく。

刀を納める鈍い金属音が、周囲の沈黙に染み入るように響き渡るのだった。

〔四十七話〕 闇の中の戦い（後書き）

今回は筆力のなさを痛感させられる一話でした。

思ったように戦闘風景を書くことができない。これがやはり一番の問題でした。いろいろと、もっとこうしたらいい、こうすれば臨場感を出すことができる、ということが漠然と頭にあるのに描写が下手になっていく。ある意味では勉強になる一話だったといえなくもないですね。

ではでは〜。

〔四十八話〕 真紅の心（前書き）

脅威を退け、それでも少年に安息は許されない。

自分には安らぐ権利などないのだと、少年はずっと思っていた。
けれど、本当は

〔四十八話〕 真紅の心

物言わぬ肉塊となった聡司を見下ろして真紅は大きく深く肺にたまっていた淀んだ空気を吐き出す。喉が焼けそうなほど熱い息は外界にさらされることでその熱を発散させ、夜闇の涼しい空気へと溶け込んでゆく。

「なんとかか……倒せたみたいだね」

「七夜……大丈夫、か？」

真紅の声が若干淀んでいたのを察してか、七夜は爽やかな笑みを浮かべ、自らの右肩を指差した。肉は深く抉られ、黒く濁り始めた血は腕を伝って、緑の芝に少しずつ雫をこぼしていた。

見た目は確かに酷く深い傷ではあったが、命に関わるほど大きなものではない。失血多量は懸念されるがスーツの袖を破いて止血しているあたりは流石としか言いようがなかった。

「ふう。でも何だっぺこいつがここにいたんだ？」

不知火を鞘に納め、歩み寄る天一の疑問は真紅も同様に抱いていたものだった。

七夜が呼んだという可能性は状況的に考えても難しい。万が一にもそうだった場合、七夜が彼と対峙する必要がなくなってくる。だとすれば尾行されていた、ということになるのだがあんな獣を野放しにするリスクを組織側が犯す理由がわからなかった。

「俺の裏切りが予想されていたんだろう。俺を殺せるナイトメアと

考えて、よりもよつてあの二人じゃなく理性を失つた聡司を寄越した。情けをかける心配でもしたのかな、お偉いさんがたは」

「もしこんな獣が暴れまわっていたら……連中は一般人の被害を考えていないのか？」

「当然可能性は考慮しているだろう。けどあの連中にとつて一般人への被害なんて些細なこと。俺を倒すことと天秤にかけようとすらしなかつただらうな」

かつて真紅の父、白羽を殺したときも、組織は無関係の人間に被害がおよぶことを考えず大量のナイトメアを投入した。交通事故という形で目撃者の多くを闇に葬っていたと信介から報告も上がってきている。

つまり彼らは自分たちの企業、組織が健在ならば他は全て二の次だということなのだろう。上層部の人間の精神を疑いたくもなるが、悲しいがそれが現実だった。

「これからどうする？ 組織には戻れなくなつたんだろ？」

天一の言葉に七夜は小さく肩をすくめる。

「元々情報收拾がしやすいから組織に残っていたようなものさ。今更末練もない。できることなら叶に話をつけて、どこかで住まわせてもらえる助かるんだけどね」

「叶なら今、うちの学園に教師として在籍している。自分で会いに行けばいいだろう？」

「どう、だらうね。どうやら俺は、彼女に嫌われているようだから。直接会いに行けば間違はなく刺されるんじゃないかな？」

叶は他のナイトメアについて、鍊のこと以外ほとんど口にしよう

としていなかった。そこにどんな感情が隠されているのか考えようともしていなかったが、彼女が他のナイトメアと交流を断っていたのは彼らに対する負い目もあるのだと考えていた。

「そんなこともないと思うけどな」

「君はまだ叶の本性を知らないんだよ。彼女はね……キレると本当に、恐いんだ」

獣となった聡司と対峙したときには見せなかった恐怖の表情。七夜のそれはかつての彼女、朝倉 叶を思い出しているからなのだろうが、あの聡司よりも恐ろしいという感情は真紅には理解できないものだった。

ともかく七夜が完全にこちら側へついた以上、戦力は整ったと考えてもいいだろう。現在のナンバーツーが抜け、ナンバーフォーが倒れた今ならもしかすると組織を突き崩せるかもしれない。

問題は七夜の言っていた”再生”だけ。

「七夜……死体がここにあるのに、再生するのか？」

「ああ。死体が完全に消滅しても関係ない。組織にある施設が死んだナイトメアの肉体を再構成させ、精神を肉体に呼び戻すらしい。俺も初めて味わうまで半信半疑だったけど、死んだ数分後には施設の中だ。今頃聡司も再生されているんだろうな」

自嘲的な笑みを浮かべながらそれでも七夜は事実だけを語っている。

ナイトメアに恐怖心が存在しないのは、この再生能力が存在しているからなのだろうか。確かにそれならば再生できない叶が死の恐

怖に目蓋を閉じた理由も説明がつく。同時に、死に続けることで精神を病んでいくというのなら感情の希薄な下位ナイトメアに恐怖が表れないことにも説明がついた。

「個体能力は下がるんだろう？　どの程度なんだ？」

「そうだね……それも個人差があるらしいからよくわからないんだけど、聡司はきつと初めて死ぬ。本当に予想できない事態なんだ」「初めて、死ぬ？　おいおい、生き返ることができるとのかよ、こいつが」

亡骸を見下ろして驚いたような声を漏らす天一はある種まともな反応を示していた。彼の力は使っている当人から見れば当たり前なもの。しかし他者から見れば異能のものだ。天一たちのおかげで順応力がついたからこそ真紅も受け入れられたわけで、天一から見るとまさに奇跡に近い現象と言えた。

「そう、生き返るんだ。おそらく鍊を含め、一度も死んでいないのは聡司ただ一人だっただろうね」

聡司は死ぬこともできず、ずっと拷問されて精神をやんでしまったのだと言う。だからこそ理性を失った獣となり、言葉も聞かずに攻撃を仕掛けてきた。人間の悪意が生んだ産物だと考えたなら彼は本当に悲しい人生を送ってきたのだと痛感する。

だが今は彼に同情している余裕などない。七夜の逆逆が知られた以上、こちらの動向もある程度把握されていると考えたほうがいいだろう。ということは学園にも情報が入っている可能性もある。最悪この街にナイトメアを送り込んできている可能性もある。

早急にこの街を離れる必要があると真紅は考えていた。

「その必要はないと思うよ」

思考が顔に出ていたのか七夜が発した言葉に真紅はただ驚くことしかできなかった。だが頭の片隅でその根拠を求めていたのも確かである。

「今回は俺をしとめるための襲撃だから、君たちの事はほとんどつかんでいないと思う。仮に尻尾をつかまれていたとしてももみ消す方法はいくらかもあるさ」

「……だがリスクは残っている。無理にこの地に残らず、他に拠点を置いたほうが動きやすいと思うが？」

天一たちという強力な仲間を手に入れた今、当初の予定通りどこかに身を隠し、隙をうかがって攻め込むことを最優先に考えるべきだ。これ以上空や愛美に迷惑をかけるわけにもいかないし、京を危険な目にあわせた負い目もあった。

大切な人たちをこれ以上巻き込みたくはない。幸い七夜や天一には共に戦う理由もあるから、巻き込むことの負い目も少なくてすむ。

「それは逃げだと思うな」

「……人の心を読むなよ、七夜」

本当に心を読んでいるわけではないのだろうが、七夜は得意げに笑みを浮かべ怪我をしていないほうの腕で槍を拾い上げる。鞭に締め上げられ、深く地に突き刺さっていたにもかかわらず蒼い槍には目に見えた損傷がなく、闇の中でもほのかな光を発している。

七夜の言葉に小さく苛立ちを覚えている自分。彼の言葉が正しい

と思えるからこそその言葉に心を苛まれてゆく。

「確かにこれは、逃げだ。」

空や愛美を戦いの中で失うのが恐いから、ナイトメアとの戦いから遠ざける。京を守りきる自信がないから、彼女の前からまた姿を消そうとする。七夜に言われるまでもない。こんなもの逃げ以外の何物でもないのだから。

そんなこととつくの昔に理解していた。理解しているつもりだった。それでも改めて指摘されると、自分の弱さを再確認させられたようで胸の辺りが小さく痛んだ。

「確かに叶一人で俺たちの情報を完全に押さえ込める可能性は低い。いくら彼女が情報操作が得意だといっても、あくまで独学で手に入れた技術だ。それは俺だってわかってるよ」

「だつたら……」

「だがそれは彼女一人なら、という前提だ。今は状況が違ってくるんだよ」

言っている意味が真紅には生憎理解できなかった。

情報操作に適している叶と康が力を合わせたところで企業の情報網を完全にやり過ごすことは不可能。それは彼ら二人が自ら語った事実だ。康の存在を知らない七夜が確信を持って状況が違うなどと

言う理由は他にあるのだろう。

「今回は心強い味方がいるから。ねえ　　莊介さん？」

無意識のうちに真紅は振り返る。そこにいてもおかしくない、けれどどうしても欲しくなかった人物の存在を確認しようと無意識が体を引っ張っていく。

見たくない。顔を合わせたくない。かつて父の親友として真紅を可愛がってくれた男の顔を。

けれど体は真紅の意志を聞こうとせず、瞳はその姿を映し出す。

屋敷を背にこちらへと歩み寄ってくるその人物は、昔より一回りほど小さく感じるが、昔と変わらぬ温和な笑みを浮かべ真紅たちの一つ頭を下げたのだった。

〔四十八話〕 真紅の心（後書き）

気づけば十月も六日ほど過ぎていた今日この頃。更新が遅れたことについては本当に申し訳ないと思っています。

最近では後書きにまともなことを書いていましたので、ここらで小休止を。

ほとんど手抜きじゃねえか！ と怒られたらそれまでですが、どうか広い心で受け止めてやってください。

次話は真紅と荘介、二人の掛け合いを描ければいいなと考えています。

ではでは〜。

〔四十九話〕 深淵の囚われ人（前書き）

ただ守りたかっただけなのに。

ただ泣かせたくないだけなのに。

そうしてたどり着いた結末に、彼は

〔四十九話〕 深淵の囚われ人

漆黒の闇にとらわれたまま、聡司は目を覚ました。四肢は太い縄に縛られたように動かさず、自らの体が空中で大の字を描いていることに否応なく気づかされる。どうしてこんなことになっているのかと考えたとき、霞のかかった記憶の中で蒼穹の槍を構えた男の姿が浮かびだした。

「……………ありがと、七夜」

完全に人格が消滅していた自分がこうして自我を保てるほど回復したのは、おそらく肉体が一度死滅したからだろう。聡司の場合は肉体の防衛本能として、自らの人格を内側にかくまうことにより聡司の人格が失われたように外部には受け取られていた。

しかし一度肉体が死んだ以上、肉体に刻まれた苦痛と屈辱の色は霞み、どれだけの時間かわからないが自我を保つことができている。

目が慣れてきたのか周囲の様子が少しずつわかるようになってくる。体は地上から三メートルほど高い位置で固定されていて、真下にはよくわからない機材が無数に散乱している。四方はわずかな光を灯した機械によって固められており、監視されているということが容易に理解できた。

心拍数などで起きていることを悟られてはいけない。ナイトメアとしての本能からかその辺は無意識のうちに調整が効いているらしいがいつ気づかれるかわからない。

不意に足音が聞こえた。足音を殺しているわけでもないのに小さ

すぎるそれは、聡司の記憶の中ではただ一人しか該当しない。

「研究員たちは下がらせた。起きているんだろう、聡司？」

男の声にしては少し高い声。けれどそこに絶対の自信と究極と言えるまで研ぎ澄まされた闘志を秘めていることを聡司は知っている。

まさか彼が会いにくるとは思っていなかったが、ある意味ではない機会かもしれない。

「……久しぶり、なのかな。ここ数年の記憶が曖昧だからわからないが、とりあえずそう言っておこうか、小柳」

「うーん、昔みたいに”あたら”って呼んではくれないのかい、聡司？」

とぼけた口調だ。本当に聡司が起きていたことを知っていたらしい。

いや、彼にとっては聡司の小細工などあつてないようなものなのかもしれない。

ファーストナンバー・小柳 新。錬が組織を抜けて以来、ナイトメアのトップとして君臨している男。錬と同じように日本刀を操り、技の面に関してだけ言えばナイトメア最強。錬よりも美しい技を操ることができていた。

「無理な話だ。誰のせいでこんなことになったか、忘れたわけじゃないだろ？」

「ありや、覚えてたか。その節は悪かったね」

「本当に……むかつくやつだよ、お前は」

もし四肢を封じられていなければ、勝てないとわかっただけでも向かっていっただろう。今だって両腕に千切れそうなほどの痛みを感じながらも、全身が止まろうとしてくれない。飄々としたその態度、口調。この場で殺してやらなければ気がすまないと、理性の奥に引っ込んでいたはずの獣が咆哮している。

六年ほど前になるのだろうか。記憶が曖昧すぎて定かではないが、かつて聡司を捕らえたのがこの男だった。下級のナイトメアを大量に切り伏せ、中級のそれすら寄せ付けなかった聡司を彼は笑顔を浮かべながら生け捕りにしたのだ。聡司の鞭を完全に退け、膝をついた聡司の眼前に刀を向けるその表情は、最後まで笑顔。

「まあまあ、そんなに怒らないでよ。今日はいいいニユースをもってきたんだから」

「いいニユースだ？ お前が持ってきたニユースなんて、昔からまともなものじゃなかっただろうに」

七夜がこけたとか、鍊が叶を泣かせたとか、健三さんが壁をぶつこわしたとか、まともな話を持ってきたことは一度としてない。ナイトメア内で最もありえない容姿をして、最も適当な男。それが小柳 新だった。

「いやいや、今回は本当に真面目な話だよ。どうやら君の監視が弱められるらしいんだ。理性を完全に失っていると理解してもらえないらしい」

「へえ、そいつはいいいニユースだ。参考にさせてもらおうか」

そう答えるものの、聡司はまったく新の言葉を信用してはいなかった。

聡司は知っている。叶と聡司が逃げ出したあの日、組織の연구원たちに脱走の情報を漏らしたのはこの小柳 新という悪魔だ。理性が希薄だった頃に仕入れた情報だから少し信憑性には欠けるかもしれないが、警戒するには十分な理由となる。

「まあ、もう少しだけ我慢してもらえるかな？ 君は一度も死んだことがなかったみたいだから、いろいろ検査が必要みたいなんだ」
「へえ、その言い方からすると、お前は何度か死んだことがあるみたいだな」

「あはは……うん。昔、一度だけね」

漆黒の闇の中、表情などわかるはずもなかったが聡司はなぜか新の顔に小さな苦痛の色が浮かんだような気がした。どんな時でも笑顔を崩そうとしなかった彼が、見えないという先入観がある場所であれその表情を崩した。それだけで驚愕に値する。

「いったい何がそうさせたのか興味をそそられたが、聡司は細く息を吐いて目を閉じた。」

「要件はそれだけか？ 体が重いんで俺は眠らせてもらう」
「再生後は皆そうなるらしいよ。ゆっくり寝ているといい。次に起きたときにはきつと、自由を取り戻せているはずだよ」

自由、か。

この組織に監視されている以上、自由などという言葉は存在しない。一挙一動を監視され、一人になっても気を抜くわけにはいかな

い。一つでも妙な行動を起こせば、すぐに動きを封じられる。そんな生活を自由と言うはずがない。

けれど今は、わずかな希望を抱いて眠ることができる。

頼んだよ、七夜。

錬と叶、七夜、そして聡司。かつて組織に反抗心を抱いた四人のうち、最後までそばで支えてくれていた親友の顔を思い浮かべながら聡司は安らかな夢の世界へと落ちていった。

応接室、というのだろうか。大きな執務机と正面に設けられた大きなソファ。ソファのほうには左から天一、真紅、七夜という順に座り、執務机の向こう側にはどっしりと腰掛ける荘介の姿があった。

絶対に顔を合わせてはいけない人、そう考えていた。

高嶺家の当主であり、朝凧 白羽の親友でもあり、京の父親でもある彼。それだけならばむしろ好意的に接することだってできるが、真紅は彼に対して警戒心しか持ち合わせてはいなかった。

白羽が死んだ事故。正確には暗殺のために大量のナイトメアを送

り込んできたあの時、首謀者は他ならぬ彼、荘介だった。

白羽が告発しようとしていた幹部たちの中には荘介の直属の上司も含まれていたという。そのため上司から指示を受けた荘介が白羽の動きを探り、白羽がもつとも無防備な状況を狙っていたのだという。

「まずは真紅、感謝の言葉を送らせてもらおう。ありがとう」

「……あなたに礼を言われる筋合いはありません」

「いや、君には大きな借りがある。私の娘を、京を二度も救ってもらったのだから」

「あなたが……！」

勢いよく立ち上がる体を止めようとせず、今まで溜め込み続けてきた感情を抑えようとせず、言葉という名の凶器をつきたてる。

「あなたがそれを言うんですか？ 京を人形のようにしてしまったあなたが！ 俺の両親を死へと追いやったあなたが！ あなたに礼を言われる必要などない。関係のない京を巻き込みたくなかった、ただそれだけだ！」

感情のおもむくままに言葉を発したことなど今まで一度としてなかった。真紅自身も内心では驚いているが、隣に座る二人はもつと驚いていたようで、七夜など目を見開いている。

けれど言葉を向けられたはずの荘介はただ静かに真紅を見つめているだけで、反論しようとしなかった。

いや、ただ見つめていただけではなかった。よく見ると彼の体は小刻みに震え、口は堅く閉ざされ、瞳は微かに震えている。

真紅は今の今まで、高嶺 莊介という人は完全に敵側の人間だと考えていた。人を殺めることに何の感情も抱かず、親友すら簡単に割り切る。そんな、組織の人間の典型だと。

だがこれは、どういうことなのだろうか。彼の姿は、真紅の言葉に何一つ動かされていないわけではなかった。その姿は、罪の意識に苛まれているようにしか見えない。

今まで心の底に渦巻いていた怒りが、ふわりと軽くなったような気がした。

彼が罪の意識を持っているというのなら償うことだってできるはずだ。ならば真紅がどれだけ怒りをぶつけようという意味はない。

大きく息を吸い込んで、真紅は努めて冷静に言葉を選んでゆく。

「……あなたが負い目を感じているのなら、俺たちに協力してもらう。組織の現状と、俺たちの情報が組織に漏れないための手配。その他諸々の援助をしてもらう」

「そのくらいならば、たやすいことだ」

声が微かに震えている。そう感じるのは記憶の中にある彼の声と少しだけ違うからなのか、本当に震えているからなのか。正確な判断をすることはできないが、追求する気にもなれずにソファーへと身を落とす。

同時に天一が腰を上げ、莊介と対峙する。

「援助の一環としてこの屋敷を拠点として使わせてもらいたい。ナイトメアの襲撃にもこの屋敷なら対処することができるはずだ」
「確かにこの屋敷は外敵に対する防衛機構は万全だ。何なら宿泊もできるようにしておこう。その方が何かと動きやすかろう」
「感謝する。人数は……八人分でお願いでできますか？」
「問題ない。各自個室を用意できると思うぞ」

二人のやり取りを右から左へ受け流しながら、真紅は小さく溜め息を吐く。

彼を許すつもりは毛頭ない。それは荘介自身理解していることだろう。

「……絶対に許せないのかな？」
「だから、人の心を読むなど言っているだろう、七夜」

二人には聞こえないほど小さな声で、どこか楽しそうな声音が聞こえていた。本当に心を読まれているような感覚がしていたが、不思議と悪い気分にはならない。それが氷室 七夜という人物の人徳なのか自分自身の問題なのかはわからないが、会話すること自体は拒否する道理もない。

「君は鍊を殺すきつかけとなった俺を許すことができている。それと同じように、彼も許すことができるんじゃないか？」
「別に、完全に許したわけじゃない。ただあんたにも理由があったんだと思つたら、どうにも憎むだけではいられないと思つただけだ」
「ならもつと簡単じゃないか。荘介さんにも理由があつたんじゃないか、今後悔しているのならそれでもいいんじゃないか。考え方はたくさんあるよ」

確かにそうなのかもしれない。真紅が子供だけで、過去のことだと割り切ることができたなら彼を味方としてみることもできるのかもしれない。

だが理屈はわかっていたとしても、心がそれを拒んでいる。

怒りの矛先を彼だけに向けるともりはないが、彼に向いた怒りは真紅の原動力にも繋がっているはずだから。少なくとも今、完全にそれを鎮めることはできなかった。

「あとは……そうだね、時間が少しずつ解決してくれるんじゃないかな？」

「ああ……俺も、そう思うよ」

もし怒りが、憎しみが完全に消えてしまつてしまつてしまつたら真紅はいったいどうなってしまうのだろうか。今更普通の生活を送ろうなどとは思わない。日常は、両親と過ごした幸せな時間はもう戻りはないのだから。

霞の向こう側にある未来を見ようとすると自分に嫌気がさして、真紅は目蓋を下ろす。

酷使してきた体は主の意志をやりわりと押さえ込み、いつの間にか何も考えられなくなっていた。

〔四十九話〕 深淵の囚われ人（後書き）

今回、本当は聡司に焦点を当てた物語にするはずでした。

昔の叶との掛け合いや、七夜や錬とのやり取り。そういったものを描けたらいいなと思っていたのです。

でも、それやっちゃんとうと情が移っちゃいそうで……。

味方になるのは七夜だけで十分じゃああー！！

以上、心の叫びでした。

こんな実のないあとがきで申し訳ないのですが、今回はこの辺で。

ではでは〜。

〔五十話〕 京の心（前書き）

ただ真実を知ることが、どれほど傷つくことなのか。
それを知る少女と、知らなければならぬ少女の出会い。

〔五十話〕 京の心

目が覚めて見えた光景は闇の中ではなく、見慣れた自室の天井だった。何があったのかさっぱりわからなくて、京は上半身だけを起こし頭を振る。

庭の中で戦う真紅とこちらに迫ってきた青年、氷室 七夜の姿。目の前に七夜の姿が迫った直後、京の意識はぶつとりと切れてしまった。

「……気がついた？」

突然かけられた声に、反射的に視線が上がる。

部屋の扉に背を預け腕組みをしている少女、まだ出会って間もないが思わず目を奪われるほど美しいその少女を忘れられるはずもなかった。

「恵理、さん？」

制服姿ではなく、白のスカートと白いブラウスを着た少女、鷺村 恵理は京に柔らかい笑顔を向けてくれている。制服よりもこっこのほうが似合う、なんて場違いな感想を抱いていると、恵理はゆくりと口を開いた。

「怪我とかはないらしいわ。何が起こったのかわからないようなら説明するけど、その表情はどっちに対する驚きなのかな？」

「え？ えと……どっちでしょう？」

ここに恵理がいるという驚きと、状況を半分ほどしか理解していないという戸惑い。そのどちらが勝っているかなど今の京にわかるはずはない。

それをわかつているからか、恵理は柔らかい笑顔のまま京の座るベッドまで歩み寄る。

「とりあえず、両方説明しておくよ。あなたは真紅に助けられた。手荒すぎて気を失っちゃったみたいだけだね。私がここにいる理由は、うちの暴れん坊がしゃばったからなんだ」

京が知る人物の中で彼女が暴れん坊と称するような人は一人しかない。それに思い当たったとき、京は思わず笑みをこぼしていた。

「うん。その笑顔ができるなら大丈夫だね」

安心したように息を吐く恵理。思いのほか心配してくれた彼女に感謝しつつ、かけられていたタオルケットをどけてベッドから立ち上がる。

部屋を出て真紅たちを探そうと考えていたところに、恵理の手がそつと京の二の腕をつかんだ。手のひらに力は籠もっていなかったが、振り払う理由もなく京は恵理を見て首をかしげる。

「今は行かないほうがいいよ。いろいろと話し合っているみたいだし、真紅もあなたのお父さんも、あなたに聴かれたくはないんじゃないかな」

「どづいっ、ことですか？」

真紅が父、莊介に会いたくないと思っっていることは執事である千崎から聞いていた。彼が失踪した当時の状況などから千崎が判断したことだと言うが、かつての恩人だと名乗り出ないことなどもその仮定を裏付けていた。その彼が父と話し合いをしている。それだけで十分驚愕に値することだった。

「……ああいう生き物は皆そう。嘘について真実を隠し通すことができれば、自分だけ傷ついて大切なものは守れるんだと思ってる」

答えになっていなかったが、京はどうしても恵理の言葉から意識をそむけることができなかった。いいや、しなかった。

今京が置かれている状況こそ、彼女が語る状況と同じだと思えた。父がついている嘘、真紅が隠している真実。それが全て、他人のためだとしたら。

「確かに隠しているうちは楽だよ。何も考えずにただ相手の言葉を信じて、怒りと憎しみ、負の感情を全て向ければいいんだから。でも、馬鹿みたい。真実を知ったときの絶望は、仮初の安らぎを簡単に消し去るっていうのにな」

「……恵理さんも、そうだったんですか？」

「どうだろう。私の場合はちょっとだけ特殊だから。未だにどこまで嘘で、どこまで本当なのかわからない。だからそれほど絶望もしないと思う。けど、あなたの場合は別。きつとどっちの言葉を聞いたとしても、あなたは悲しむと思うの」

恵理の言葉は真摯で、深い漆黒の瞳にも慈愛の心が映し出されているよう。

彼女の言葉には一片の嘘もない。ただ自分と似通った境遇の京を悲しませたくなくて、できるだけ心の傷を浅くしようががんばっている。そのがんばりが、京の胸を優しく包み込む。

気づけば京はベッドに座る恵理の隣へと腰を下ろしていた。

「恵理さん。嘘をついたのって、朝倉君ですか？」

「どうしてそう思うのかな？」

京の問いかけに一瞬、彼女の目が虚空をさまよった。それを肯定の意味にとつて、京は言葉を紡いでゆく。

「お二人には、何か通じ合ったものがあるような気がします。だからきつと、朝倉君なんだと思ったんです」

「……はあ、あいつと通じ合ったものなんて、嫌になるわね」

悪態をつきつつも恵理の口元は笑いを抑えきれないように、奇妙な具合に歪んでいた。嬉しそうな瞳は、けれど恋する乙女のそれとは少し違う気がする。

しいていうならば、親愛。

「ねえ、京ちゃん。今から言う秘密、絶対誰にも言わないって約束できる？」

「へ？ えと、内容にもよりますけど。はい、大丈夫だと思いますよ」

京の答えを聞いて、恵理の口元が三日月のように不気味に歪んでいた。さながら悪戯を思いついたときの子供のような、無邪気な狂気。

「私と天は 双子の兄妹なの」

「 え、ええええええええ！」

自分でもどこから出ているのかわからないほど大きな絶叫。今まで生きてきた中で最大の声は自室の家具などを小さく揺らしているような錯覚を京自身に与えていた。

途端、恵理は両手を下腹部に当てて笑い出し、苦しそくに京のベツドをのた打ち回る。

「あはは！ いやあ、思った以上の驚きようだね。そこまで驚いてもらえる、お姉さん嬉しいわ」

「ちよ、待つて。だって恵理さん、”鷺村”って……」

「ああそれ？ 母方の旧姓よ。いろいろ事情があつて、朝倉家で生活してるけど名字は違つの」

未だベツドに転がりながらも、恵理は楽しそくに声を投げってくる。

世の中というものは予想していたさらに上に行くものだと痛感させられる。複雑怪奇、その一言だけで片付けられるならどれだけ楽なことか。少しだけ頭を抱えて、京は恵理の奇行を止めようと声をかける。

「あの、恵理さん……」

「はい、ストップ。恵理さん禁止」

少しの間、何を言われているのか判断できなかった。恵理は上半身だけ起き上がり、京の鼻先に人差し指を突きつける。

「さん付け、あんまり好きじゃないんだよね。せつかく秘密を聞いてもらったんだから、もつと親しく接してもいいよね？」

「え、えと、これは生まれつきというか、えと恵理さ」

「み〜や〜こ〜！」

楽しそうな声音と緩みきつた頬。どこまでもこの状況を楽しんでいる恵理には、悩みなどまるでないようにも見える。切り替えが上手いのだろう。それとも表面を取り繕うのが上手いのか。

それは京にも言えることだった。

人形の状態から少し人間に近づいただけで、未だ自らの感情全てを理解しているわけではない。他人に少しでも好かれようと努力して、けれどそれすら上手くいかない。素直に自分を出せればいいのに。そう思ったことが何度あったことだろう。今、彼女の前でなら素直な自分が出せる気がした。

「え、り？」

「はい、ワンモア」

「ええ！？ 酷いよ、えり！」

「さらにワンモア！」

「え〜り〜！」

「きゃあ〜、京が怒ったあ」

身を翻して、惠理は迫る京の手から逃れる。それを追って、京もベッドの上へと転がり込む。

これから来るであろう悲しみを乗り越えるために、惠理はそう言っていた。ならばこの、友達と遊ぶ楽しい時間もその一環なのかもしれないと、京は少しだけ惠理に感謝したのだった。

「ん？ これはただ私が楽しんでるだけだよ」
「ええ！？？」

楽しいなあと、初めて思ったかもしれない。

〔五十話〕 京の心（後書き）

いつの間にか結構な日が経過していました。いやあ、恐ろしい恐ろしい。

京と恵理。この組み合わせははっきり言って思い付きです。この話を書く直前まで恵理が出てくる予定はこれっぽっちもありませんでした。

しかし出してみれば、あれ？ これいけんじゃね？ という感じで、いやあたまには直感を信じて成功することもあるんだなあと思えましたね。

今回も実のないあとがきでしたが、この辺で。

ではでは。

〔五十一話〕 かつての少女に（前書き）

悲しませたくなどない、苦しませたくなどない。

真実を知ることによって彼女が悲しむことになるのなら、本当はそれを知らせることは間違いないのかもしれない。

けれど彼女がそれを望むのなら、少年は

〔五十一話〕 かつての少女に

た。 莊介のことを七夜に任せ、真紅と天一はそろって執務室を後にした。

連戦の疲れもあつてかすっかり眠りこけてしまった真紅だったが、天一が苦笑を浮かべながらも連れ出してくれたおかげでなんとか意識を取り戻し、高嶺家の広い廊下を今はすっかり歩くことができていた。

「何で、手を出した？」

助けられたことには感謝しているし、彼の助けがなければ戦いにすらなっていなかったことは真紅も理解していた。しかし真紅は最初に、天一にだけは手を出すなと忠告したはずだった。それを無視してでも助けに入ってくれたことが少し照れくさかった、問いに含まれた本当の理由はそんな単純な感情。

「お前のケジメは終わってたたる？ あれはイレギュラーだったし、それくらいは手を出してもいいと思っただけだから。それに、あいつには借りもあつた」

何事もなかったかのような笑顔で、天一はこともなげに言っている。どこまでも前向きな姿勢を見せる彼を羨ましくも思い、けれどその内に秘めたものの大きさを感覚で理解できるあたり、本質は自分と同じではないのかと真紅は小さく溜め息をついた。

諸々の手続きなどは全て七夜たちに任せ、真紅たちは高嶺家を離れようと考えていた。七夜は確かに数刻前まで敵だったが、根っこ

の部分が真紅と同じ、錬の遺志を引き継ぐという面において同質と言えた。だからこそ信頼することができていたし、不思議とその選択が間違いでないのだと確信することができていた。

お互い想像以上に消耗していたからか正面玄関まで歩く少しの間、二人の間に沈黙が舞い降りた。だがその沈黙は居心地の悪いものではなく、最初から言葉など要らないといえるほど心地よいもの。

執務室は二階にあつたらしく、天一についていく形となつた真紅は正面玄関の階段までたどり着いた。あとは玄関を抜け、天一の家で他のメンバーに説明するだけ。

だが、真紅は天一の背で彫刻のように固まってしまった。

「あ、お疲れ、天。思ったより時間がかかったわね」

鬼ごつこのときの面影をまったく見せない清楚な白で統一した、目を奪われるほど綺麗な格好をした恵理がやってきた天一に笑顔を向けている。天一は天一で、元氣な恵理に困つたような表情を向け、頭をかいていた。

「……なんでいるんだよ、お前」

「へ？ 何か面白そうなことしてるなあと思つて、後ついてきた」

「な、てめっ！ いつの間に気配消すなんて技術覚えやがった？」

「ふっふっ、天が気づかない場所で、私も成長しているんだなあこれ」

誇らしげに胸を張るその姿に、天一はやれやれと首を振る。

本来なら真紅も一緒に溜め息をついて馬鹿話をしながら屋敷を出

るのだが、真紅はただ一点に視線を奪われ、息をすることすら忘れていた。

黒のレースがついたワンピースを着た、少し儂げな印象を与える少女。学園で見せる流れるような黒髪は左の上方でまとめられ、一つの房として成り立っている。

その姿が、かつての彼女と完全に一致していた。

初めて出会った幼い日の彼女は、今とまったく同じ姿をしていた。

その瞳には生気が感じられず、真紅は子供心に必死になって彼女を笑わせようと走り回ったものだ。

けれど今の彼女の瞳には優しげな光が宿り、ほんのりと恥ずかしいような笑顔が浮かんでいた。

「ね、言ったとおりでしょ？ 真紅もぞっこん、ってね」
「えり〜、恥ずかしいからやめてよぉ」

恵理の背中に隠れようとするが、その恵理に押し返され逃げ場を失っている。小動物のような動きを見せる彼女は学園での落ち着いた姿など微塵もなく、本当に彼女が昔の”人形のような少女”なのだとわかってしまう。

雰囲気、とでも言うのだろうか。お淑やかに整えてどこか無理をしている感じはなく、本当の自分を表に出している。

「どうかしたか、真紅？」

「え……いや、何でもない」

天一の声でようやく我を取り戻し、視線を京から逸らす。目ざとくそれに気づいたのか、恵理は小悪魔特有の笑みを浮かべ、京の耳元にそつと何かを耳打ちした。瞬間、京の顔が遠くから見てもわかるほど赤く変わり、今にも湯気が出そうなほど茹で上がっていた。

何を耳打ちしたのか、内容こそわからないがよからぬことであるのは間違いない。あの天一が表情を引きつらせているほどだ、恵理の性格は思っていた以上に困ったものだと言えるだろう。

「天、逃げたほうがいいのか？」

「……ああ、あの笑顔はまずい」

こと恵理に関しては天一の言葉ほど信用できるものはないと真紅は考えている。鬼ごつこの際に見せたあの逃げっぷり、あれは一見単純な逃げに見えるがそこに行為に対する慣れを感じさせるものだった。もつともそれは真紅の深読みかもしれないが、逃げるという選択肢については真紅も大いに賛成できるものだった。

聡司と戦ったときよりも速く体が反応を示す。少しだけ眠ったからか体が軽い。天一が右から駆け恵理の注意を誘い、その隙に真紅が玄関を突破する。その後のことは天一がどうにかしてくれるだろう。

絶妙なタイミングで左右へと散った二人を、しかし恵理は見過ごしてくれない。一瞬で京を自分の後ろへと引いた恵理はその両手を左右へと広げ、口元に不気味な笑みを張り付かせる。

それとほぼ同時に真紅の背筋を冷たいものが駆け抜ける。両足の筋肉を総動員して前進する力をかき消すと、鼻先を鋭い風が駆け抜けた。天一も腰に挿していた不知火を引き抜き、襲い掛かる風の刃を弾いていた。

忘れていたわけでもないが、彼女にはこの力があった。

風を自在に操る、異能の力。見ているだけの京には何が起こったのか理解できなかっただろうが、真紅は表情を失い、天一は引きつった苦笑を浮かべるほどその能力は厄介な代物だった。玄関の扉にたどり着き、それをこじ開けるまでの時間を考えると突破できる可能性はほぼ零に近い。わずかな望みを断たれた二人は小さく肩をすくめ、その場に両足を落ち着けた。

「うん。殊勝で結構。あ、でも後で天にはおしおきね」

「んなあ!？」

不意に落とされた爆弾に、頓狂な声を上げて膝から崩れ落ちる天一。そんな絶望にひれ伏す姿など想像したこともなく、またできなかったことから真紅はただその光景に呆然と口を開くことしかできなかった。その爆弾を投下した当人は何が楽しいのか鼻歌など歌いながら、真紅の方へ流し目を寄越した。

「ほおら、真紅も。むやみに逃げようとするんじゃないの」

「あんな恐い顔されたら、俺じゃなくても逃げたくなるさ」

思わず本音で返してしまうと恵理は艶のある笑みを浮かべて、後

で覚えておきなさいよとでも言いたげに指を突き立てた。普段天一が感じている身の危険、その片鱗を垣間見た気がして真紅は思わず同情の視線を天一へと向けてしまった。

うなだれたままだった天一はその視線に気づいて弱々しく笑みを浮かべ、すでに全てを受け入れていると告げていた。

「逃げるのはちゃんと向き合ってからにしてもらおうかしら、朝凧
真紅」

「……なるほど、そういうことが」

彼女なりに気を使ってくれたということかもしれない。事情を全て理解しているわけではないだろうが天一が認める唯一の女の子だ、いろいろなところに気がついて真実に近づいていたとしても不思議ではない。

考えてみると天一と恵理にはやはり、似通ったところがあるのではないかと思う。他人をよく観察している観察眼、何も言わないでもいろいろなことを理解してくれる洞察力、不思議と心を許してしまっ安心感。

まるで性別が違うだけの同じ人間がいるような錯覚が真紅を少しだけ混乱させていた。

ともあれ今は彼女の好意に甘え、解決せねばならない問題と正面から向き合うことが必要だった。

「高嶺、少しだけ時間をもらえないか？ 話さなければならぬことがあるんだ」

驚いたように一度跳ねた京だったが、すぐに表情を引き締めて頷いた。

彼女にはまだ気づかれていないはずだった。それでもしつかりと話を聞いてくれるのは数時間前に見た七夜との戦いのせいか、それとも

どちらにせよ真紅は、決断を迫られているのかもしれない。

〔五十一話〕 かつての少女に（後書き）

真実を知ることが全て幸福ではない。どっかの偉い人が言うてそんなことですが、一応作者の持論でもあります。

さてそんなことはどうでもいいことなので、作中の補足でもしたいところなのですが……

どこ補足すりゃいいんだろ？

いえね、補足すべき場所はたくさんあるはずなのですよ。でもそれを補足しちゃうとネタばれになるような……。

ギリギリのラインが見えない今は、変なことを書くのは控えることにします。

駄文ばかり重ねていますが、ある種特徴だと思って受け止めてください。

ではでは……。

〔五十二話〕 嘘つきな二人（前書き）

ある少年は触れないことで真実を隠し、ある少年は言葉を偽ること
とで真実を隠そうとした。

それが一時の逃げだったとしても、かまわないと思えたから。
けれど今、その責任を負わねばならない。

〔五十二話〕 嘘つきな二人

もう一度訪れた庭は夜の空気によって冷たく彩られていて、さきほどまでの緊迫した空気は微塵も感じられない。莊介の配慮か聡司の亡骸も血痕も使用人たちの手によって片付けられており、すでに庭は元の優しい表情を取り戻していた。

京の隣を彼女の歩調に合わせてながら歩く真紅は、屋敷に残してきた二人に見られていれば笑えるほど緊張しているようだっただろう。事実、真紅は少しだけこの後に起こるであろう事態に決意を固めなくてはならなかった。

「……昔も、こうして庭に連れ出してくれたことがありましたね」

京が人形のようにだった昔、真紅はよく彼女をこの庭へと連れ出していた。物言わぬ少女にせめて日の光くらいはまともに当ててあげようという子供ながらの配慮だったのだが、その頃の記憶が今なお残っていることは真紅にとって思わぬ誤算だった。

もっとも彼女がその記憶を確認してきたのなら、すでに真紅のことを思い出している可能性が高い。千崎のような優秀な使用人から確認を取ってあったとしてもおかしくはない。

年貢の納め時、というものが本当にあるのなら真紅にとってそれはまさに今、この状況のことをさしているのだろう。

自分で思っていた以上に真紅は諦めが悪い性質らしい。目を覚ました京が七夜との交戦を覚えていなければいいなどと都合のいい願いを抱き、昔のことになど興味を抱かなければいいと願っていた。

けれどそれではダメなのだと、彼女は理解していたのだろう。

止まったままではいられない。向き合うことでしか進めない道があるのなら、辛い真実を確認せねばならなかったとしても前に進んでみせる。

ようやく、本当にようやく真紅の決意が固まった。

「ああ、そうだな」

過去の事象を認めたことで京は柔らかい笑みを浮かべ、真紅に正面から対峙する。

「やっぱり、朝凧くんでしたか」

「いつ気づいたんだ？ 俺のことを」

「この前、送っていただいた日です。不甲斐ないことですけど、千崎さんにいただくまで、気づけませんでした」

京は不甲斐ないと言うが真紅自身がそれを気づかせないように立ち回っていたのだから仕方がないことだろう。元々京を連れ出す場所や一緒に行ったことなどは限られていて、気をつける場所も数点でよかったから隠しやすかったということもある。京の記憶が曖昧なことも助けとなっていて、おそらく千崎に見つかりさえしなければれることはなかっただろう。

結局は自らの行動が招いた結果だったというわけだ。

けれど、どうしてだろうか。あれほどかつての自分と今の自分を重ねて見られなくなかったはずなのに、今はなぜか落ち着いている。胸の奥がほんのりと暖かいような、不思議な感覚。これが本当の安堵だとしたら、真紅はやはり心の底で願っていたのかもしれない。

もう一度、あの時の笑顔が見たいと。

京の真摯な瞳を真紅はただまっすぐ見返す。その後が続くであろう言葉には、もう見当もついている。その言葉にどう応えるべきなのかも、すでに決意はできていた。

「教えてください。七年前、あなたの身に何が起こったのか」

京はもしかしたら気づいていないのかもしれないと、淡い期待も持っていた。だが彼女の目を見る限り、自分が辛くなるような現実が待ち構えていることを彼女はしっかりと理解している。

ならその決意に真紅も応えよう。

「わかった」

一つ頷いて、芝の地面へと腰を落とす。それほど長話をするつもりもないが、もしかしたら相応の長さが必要になるかもしれない。京もゆつたりと腰を落とし、真紅をまた正面から見据えている。

一度だけ大きく息を吐いて、真紅はぽつぽつとかつての出来事を思い出しながら語りだすのだった。

真紅たちから少し離れた場所で建物に背を預けながら、天一は横目でその姿を眺めていた。普通の人間ならばその距離で相手を視認することなどできるはずもないが、天一の夜目は座り込んだ二人の姿をしっかりと確認できていた。もつとも覗き見など天一の趣味ではない。本当に興味があるのなら堂々と彼らの隣に座り、その話に耳を傾けることだろう。

天一が彼らを眺めているにはしっかりとした理由があった。

「聞き耳立てるのは邪魔しないが、茶々入れに行くのはやめておけよ、恵理」

指摘された本人はびくんと大きく一度跳ね、機械のような硬い動きで頭を動かし、引きつった笑みを浮かべている。

「そ、そんなことしませんよお」

「嘘が下手だな、相変わらず」

恵理が嘘をつくとき、天一がその嘘に気づかない場合はほとんどない。特に癖があるわけでもなく、今回のようにわざとらしい反応を見せるわけでもないのだが何となく、これは嘘なんだなあとかかわかるのだ。もしかしたらどこかで通じ合っているのかもしれないが、こちらの嘘も大半通用しないから困りものである。

「あんたもさ、嘘は下手だよね」
「……うるせえよ」

真紅の気持ちだが、今の天一にはよくわかる。真実を打ち明けなければならぬ日が来たとしたら、天一はどんな行動に出て、どんな思いでそれを打ち明けるのだろうか。母を殺してしまったのは確かに自分だし、それを恵理に隠すつもりは毛頭ない。けれど真実の全てが見えてしまったとき、恵理は天一が背負った想いと責任をどのように思っただろう。そんな一抹の不安が心の中に渦巻いていた。

「でも京も可愛そうよね、親からも大切な人からも、結局本当のことを教わっていなかったんだから」

「本当のことを知るだけが、そいつの幸せに繋がるとは限らないだろう？」

「はあ……相変わらずだよ、天のそういう性格」

心底呆れたと言いたげな溜め息に、天一は肩をすくめて見せる。

いつだっけと一緒にいた。嘘について、少し離れていたときだった。心はどこか繋がっていたことを天一は何となく理解していた。こんな力が使えるからそんなことを思うのかもしれないが、双子というものはどこかで必ず繋がっているのではないだろうか。

らしくないことを考えた自分が少しおかしくて、思わず笑みを漏らしていた。

「あ、何よその笑顔は。感じ悪いよ」

「悪かったな。俺の顔が感じ悪いならお前の笑顔も感じ悪いってことだぞ？」

「それはないよお。外面だけは綺麗に装ってるんだから。そこらへんは天とは違うんだからね」

「ああ、はいはい。外見はどこで間違ったのか、お前のほうが圧倒的にいいしな」

誇らしげに成長した胸を張る恵理は確かに外見だけでは双子だと判断することは難しいだろう。昔なら髪形が違っただけで他はほとんど同じだったはずなのに、いつの間にかこうも差が出たのか。不思議で仕方がなかったがそれが成長というものなのだろう。

それでもかかって交わした約束は、変わらない。

恵理が幸せを手に入れるその日まで、守り抜いてみせる。たとえどれだけ自分が傷つこうとも、半分以上嘘に気づかれていたとしても。真実を知ることが恵理のためにならないと信じているから。

天一の体と同じように建物に立てかけてあつた不知火が小さく震えるような感覚が天一には伝わっていた。真実を知る唯一の相棒は主の意志に忠実に従ってくれるものの、いつもどこかで”その考えは間違っている”と責め続けている。

そんなことわかってんだよ。

嘘をつくことがその場しのぎに過ぎないことを、天一は知っている。それどころか真実を知ったときの悲しみを増やすのだと理解もしているのだ。

それでも、それでも恵理が十分に強くなって、真実を知っても壊れないくらい強くなるまで隠し通して見せるから。

今はただ、未来の自分を見るような心構えで真紅の背中を見守るのだった。

〔五十二話〕 嘘つきな二人（後書き）

嘘つきな二人。タイトル通り、真紅と天一の心のうちを少しだけ垣間見ることができた一話じゃないかなあ、と思ったのですが、いかんせん腕が足りなかったなあと痛感しています。

さて次話は過去、真紅の思い出語りとなります。

過去って書きづらいなあと思う反面、真紅の性格を形作ったものですからしっかりと書かなければなりませんね。

と言うわけでかなり更新は遅れると思います。

言い訳じゃないですよ？

ではでは〜。

〔五十三話〕 追憶〜まで（前書き）

かつての悲しみを、苦しみを、今少しだけ呼び起こそう。
これからまた、しっかりと歩いていくために。

〔五十三話〕 追憶くさく

あの日、使用人の運転する車の中、家族三人で向かった先は高嶺の別荘がある場所だった。大事な話をしにいくんだ、朝風 白羽は幼い真紅にそう言つて楽しそうに片目を瞑つて見せたものである。

朝風 白羽は当時三十代になつたばかりのまだ若い男で、けれど老人のような真つ白な髪をしており、頬などにはどこでついたのか刀傷など鋭く細い傷が目立つ男だった。母は温厚な人で、白いワンピースがよく似合う黒髪の大和撫子といった表現がよく似合う人。真紅は、おそらく白羽もだろうが彼女が本気で怒つたところなど見たこともなく、幼心にも母の優しさと聡明さがよくわかつた。

別荘へと向かう途中で真紅たちが乗っていた車が事故にあつた。対向車線からはみ出してきたトラックがぶつかり、一家全員が死亡した。そういうことに、なっている。

だが事実そうだったとするならば、今ここに真紅は存在していないだろう。

別荘に近づいたころ、運転席を小さな衝撃が襲つた。真紅はその際まったく気づかなかつたものの、白羽はかなりの速度で走っていた車のドアを躊躇うことなく開け放ち、真紅と母の二人を抱きかかえ、一本の刀を伴つて車内から身を投げた。普通の人間なら耐えられないほどの衝撃を白羽は難なくやり過ごし、二人の体をそつと離す。幼い真紅の瞳を捉えたのは数秒前まで乗っていた車が蛇行しながら進み、民家に突っ込んでいく様。何が起つたのかまったくわからぬまま、真紅は半ば呆然と父の背中を眺め続けていた。

『……やっかいなのがおいでなすつたな』

父の眩きと同時に周囲の建物から黒いスーツを身に纏った男たちがわらわらと現れた。どう考えても異常な状況に、けれど白羽は慣れた様子で肩を回し、腰に携えた刀を引き抜いて見せた。

当時の真紅にとって父が刀を持っていることは当たり前で、法律上問題があるということを理解してはいなかった。そこからすでに異常だったのだと気づいたのは、祖父の下で様々な事象を教わってから。

母に抱きかかえられるような形となり白羽の動きをよく見ることはできなかったが、襲い来るスーツの男たちを打ち払い、ゆっくりと血に染まっていく刀の様子だけはなぜだかはっきりと覚えていた。

不意に視界が開けたと思った瞬間、両手を大きく広げた母の背中が視界いっぱいに広がった。母の体が大きく跳ねたと思ったとき、その白いワンピースに赤い染みが幾重にも広がり、母の体がゆつたりと地面に落ちてゆく。閉じられた目蓋と広がってゆく血の池は母から暖かさを奪ってゆき、同時に真紅の理性を奪いつくしていく。

呆然と立ちすくむ真紅を抱え上げて白羽は大きく跳躍する。母はもう助からないと理解して、真紅だけでも助けようという考えだったのだから真紅を抱える彼の腕も小さく震えていたことに当時の真紅は気づくことができなかった。

事故現場から数キロ離れた場所で白羽は突然停止した。抱きかかえられたままだった真紅は何が起こったのかと正面へと視線をめぐ

らせる。そこにいたのは襲ってきた男たちと同じようなスーツを着た、どこか幼さを残す少年だった。

『白羽さん！ ご無事で？』

『錬か。ちようどいい、真紅を頼む。俺はまだやらなきゃならないことがあるらしい』

『ですが！ あなたを死なせるわけには……』

まだ何か言おうとする少年に白羽は抱えていたものを思い切り投げる。もちろん投げられたのは真紅で、悲鳴すら上げるまもなくその体は少年によって抱きとめられていた。

白羽が身を翻すとさきほどまで追ってきていた男たちのうち、十数人が追いついてきていた。刀を抜いた白羽は最後に首だけで振り返り、真紅に快活な笑みを向けた。

『真紅。あんまりいい親父じゃなかったかもしれんが、それでもお前を愛してたよ』

まるで今生の別れを交わすように、白羽の言葉は真紅の理性を引き戻すのに十分な力を持っていた。父さん、と声を出そうとしてもすでに白羽は背を向けて男たちへと駆け出していた。少年の腕から逃れようとしても思いのほか少年の力は強く、真紅の動きを完全に封じ込めていた。

『離せ！ 離せよ！』

『……離れたらあの人の後を追うつもりだろう？ お前じゃどうもできない。さっさと逃げるぞ』

『やだよ！ どうして、どうして！』

『なら強くなれよ。もう何も失わないでいいくらい強くなるまで、』

それまでは逃げ続ける』

少年の言葉など聞けるはずもなく、真紅はもがき続ける。もがいて、もがいて、もがき続けて。けれどどうやっても白羽の背中に近づけなくて、真紅は不意に意識が遠のいていくような感覚に襲われた。少年に何かされたのだと気づくまもなく意識は闇の中へと落ちていった。

目が覚めたとき目の前にあっただのはみすばらしいほど壊れている木の天井だった。所々に穴ができていて、柱は風化寸前、床も軋むほどどうしようもない場所だったが意識がはつきりしてくるにつれて、真紅は慌てて体を起こした。

『気がついた？ よかったよ、意識を落とす方法ってよくわからなかったからね』

背後から聞こえた声に驚いて、真紅はかけられていたタオルケットを引っぺがし、勢いよく振り返った。そこにいたのは黒いスーツを脱いで白いジャージを身に纏っていた少年。白羽が”錬”と呼んでいた男だった。

『ここはどこ？』

『山奥にある小さな山小屋。隠れるのにちょうど良かったからね、拝借させてもらったよ。当分は追っても来ないんじゃないかな。もちろん追ってきていたら戦うしかないんだけど生憎と君を守りながらは厳しいかな』

あっけらかんと物騒なことを言い放つ少年に真紅は幼心にも恐怖を覚えた。白羽にたしなみ程度の剣術を教わっていたからなのか、当時の真紅でもわかることが一つだけあったのだ。この男は危険だ

と。

片膝を立てて座っているその姿からは本来何も感じないはずだ。だがどこにも隙がない。怒りに任せて襲い掛かるうとした真紅の本能を止めたのはおそらくそれが原因だったのだろう。

錬は真紅に笑顔を向けると、ゆっくりはつきりと言葉を紡いだ。

『だから、君を強くする。追手が来ても自分で戦えるくらい、いや、俺でも手が出せないほど強く。そうすれば君は、復讐だろうと何だろうと自由に決めることができるはずだから』

『俺にとつて、何の価値があるのさ？ 父さんたちは死んだんだ。』

復讐なんか……』

『俺があいつらと仲間だったと言っても、何の感情も抱かないか？』

急激に胸の奥からこみ上げてくる何かを真紅はしつかりと覚えていた。あれが憎悪という感情だったとするならば真紅は当時から計り知れない負の感情を隠していたのだろう。京の件で大人たちの醜い面をしてしまったことも真紅のそれに拍車をかけていたかもしれない。

今度は理性と本能が怒りに負けた。錬へと勢いよく飛び掛った真紅だったが、しかし予想していたようにその体を木造の地面へと叩きつけられる。息ができなくて視界がちかちかと点滅しているような錯覚を覚える。その際に錬の肘が鼻先まで落下してきて、寸前で急停止した。

『こんな簡単にやられるようじゃ、まだまだだよ』

殺されてもおかしくない状況。しかし錬は真紅から離れ、満足げ

に一度頷いていた。

『それだけの怒りがあるのなら大丈夫。これからどんどん強くしていけるさ』

『この……！』

立ち上がるうとしても両手に力が入らない。さっきの衝撃が脳に影響を及ぼしているのだろう。そこまで計算して真紅を倒したとしたら、この男は本当に恐ろしい實力を持っているといえた。それを理解したのは少し後のことだったが、真紅はただ怒りの瞳を錬に向けるだけで精一杯だった。

『俺を殺したいならかまわないよ。寝込みを襲うなり、正々堂々狙うなり好きにしたらいい。でもそう簡単にはやられて上げないってことは覚えておいてね』

『……上等』

その日から真紅と錬の奇妙な共同生活が始まった。寝食をともにし、時には実戦ばりの稽古をし、時には木登りや泳ぎなど一見意味のなさそうなことをして、同じ時をともに過ごしていた。いつしか真紅は怒りも忘れ、単純に錬に勝ちたいと思うようになっていた。勝てるわけがない、絶対に手が届かないという感覚は最初の数日だけで、武器などの扱いを少しずつ覚え始めた真紅はいつか錬に勝つことができるのだと信じていた。

〔五十三話〕 追憶〜杏〜（後書き）

気づくと一週間以上更新していませんでした。閲覧ページ数が多いのは”早く更新しろ”という意味表示なのかと、かなり申し訳ないなあと思っている次第でございます。

と、前口上はこの辺にして、この追憶、二回か三回に分けて書いていこうと思っています。また一週間以上更新しない、とかになつてしまったらメッセージか評価とかで”早く更新しろやあ！”とか……送られたら困りますね（汗）

今回の話、錬の性格や人柄をメインに書いていこうと考えていたんですが、最初の予定とはるかに違う人になってしまいました。どこかで路線変更させる予定ですが、いやまさかここまで物腰が穏やかになるとは……。

当初の予定と照らし合わせてみると、正直気持ち悪いくらいの變化です。

余談はこの辺にして、次話、できる限り早く更新できるように頑張ります。

ではでは〜。

〔五十四話〕 追憶〜弐〜（前書き）

思い出す、眩しかった日々を。
思い出す、守ってくれた人を。

そうすることで自らの覚悟を再確認するよつに、少年はただ、思い出す。

〔五十四話〕 追憶（式）

『ほら、下半身の踏ん張りが利かなくなってきたぞ？ 握りも甘い。そんなんじゃないつまでたつても俺を倒すなんてできないぞ』
『はあ、はあ……このっ！ これなら！』

踏み込むと同時に体制を低く保ち、錬の薙ぎの下を通過する。同時に木刀の峰に左手を添えて、上体を起こすとともに上へと叩きつける。自分なりに絶妙なタイミングだと感じ、事実そのはずだった。薙ぎを放った直後ではどんな剣士でも一瞬隙が生じる。その隙を突くこれは、子供である真紅のような小さなものにしかできる芸当ではない。

しかしそれを錬は易々と受け止めた。右手に握っていた木刀ではなく、懐に差していたもう一本の木刀。瞬時にそれを引き抜き、防御に回った錬の判断力は真紅では絶対に真似できないもの。けれど真紅が始めて、錬にもう一本の木刀を抜かせた瞬間でもあった。

『上手い上手い。流石に驚いたぞ』
『……汗一つかいてないくせに……よく、言う』
『なら、少し汗をかこうかな。二本で行く。受けきって見せなよ』
『な、ちよつと待て……うわぁ！』

左右から繰り出される幾えもの軌跡。その全てを見切ることなどできるはずもなく、木刀で防御しながらも真紅は数歩ずつ後退していく。楽しそうな笑みを浮かべながらそれを追いかける錬は、本当に生き生きしていた。

朝食をとり、軽く剣の稽古。昼までそれを続け、朝食をとり、そ

の後は基礎体力作りと称した食料調達。森の獣を狩るのは鍊の担当で、真紅はもっぱら山菜など葉っぱ類を收拾してくるのが仕事となっていた。その後夕食をとると、鍊の昔話や戦術など体を動かさないですむことをやって一日が終わった。そんな毎日を繰り返し、ほとんど同じ時間を過ごしていくうちに真紅にとっての鍊の立ち位置が少しずつ変わっていた。

言うならば頼れる兄貴分。こと戦術関連の知識については貯蓄が半端ではないようで、この状況ならこんな戦い方をすべきだという戦略的な見方までできるほど頼もしい存在だった。家族を亡くした直後だったということも、真紅のそんな思いに拍車を立てていたのだろう。鍊のほうも最初の少し丁寧な口調は鳴りを潜め、楽しそうに笑い、たまに真紅にちょっかいを出し、本物の兄のような物腰が板についていた。

施設の仲間たちのほとんどはそういった兄弟のような存在ではなく、友達といってもいい存在だったらしい。その中でもよく話題に上ったのが特定の名前。今になって思い返してみれば、それが七夜、そして聡司のことだったのだと納得がいく。叶のことは数少ない女の友達だと嬉しそうに語っていたし、聡司のことは芯の強いいやつだと言っていた。そして、七夜のこととは

『あいつになら、後のことを任せてもいい。そう思えるほどのやつだよ』

誇らしげに語る鍊の瞳には、何かの覚悟が宿っているようだった。

仲間を裏切って真紅を助け、そして逃亡している鍊の気持ちなど

当時の真紅にわかるはずもなかった。けれど今の真紅なら、少しだけ彼の気持ちもわかる気がした。

ただ、信じていたから。

残してきた仲間たちの無事と、強さと、信念を。たとえ何があつたとしても揺るがない思いが彼の中にあつたから。きっと工藤 錬という人間を支えていたのは、そういった心の強さだつたのだろう。

だからこそ真紅もそんな男に憧れた。ただ強いだけならば真紅の心を奪つたのは父の白羽だつただろう。事実、白羽の剣筋と錬の剣筋では白羽のほうがより洗練されたそれを持っていた。けれどそれでも、真紅は錬に惹かれたのだ。この男のように、強くなりたいと。

いつかその力を、守るべき人のために使いたいと。

今の真紅が存在しているのはやはり、錬の存在があつたからだといえるだろう。清廉潔白、とは言えそうもないがナイトメア中最強と謳われた男は心まで強い存在だつたのだと、真紅の心には強く残っている。今、真紅も彼と同じように大切なもののために戦えるのだとすれば、それはとても素晴らしいことだと真紅は思う。

京を巻き込みたくないという根底にあるのはおそらく、そういった錬への憧れがあるからではないだろうか。幼少期の経験というの

はそれほど強く心に根付き、その人の行動に影響を与えるのだと実感する。

工藤 鍊という人間がいなかったら、今の真紅はないのだと思うと本当に感謝の気持ちがいみじみてくる。

真紅の剣術は祖父である神坂 黒陽から教わったものだったが、その中にもまた鍊の影が残っている。本来黒陽の教えた剣は力で敵をねじ伏せるための、いわば大陸風の剣術だ。しかし今真紅が好んで使っているのは鍊や天一のような、速さを重視する剣。日本刀とは違う真紅の刀では本来そういった戦術は好ましくない。それでも真紅がそれにこだわるのは、やはり憧れる対象があるからこそ。流派などに囚われたくないという思いもあるが、それは理由の一部でしかなかった。

思えば鍊と出会うまで真紅は様々なことを我慢して、自分の中に閉じ込めていた。両親に我が侘を言ったこともほとんどなかったし、京を笑わせるためにできる限りの手を尽くした。溜め込んでいたものが両親の死、慣れない環境などで一気に漏れ出し、真紅の中での鍊という存在を頼るべきものにしたのかもしれない。

不思議なものだ。本来鍊は敵、ナイトメアという暗殺者だったはず。その事実も鍊と生活していく上で事実なのだとはわかった。身のこなし、判断力、機転を利かせることができる能力、どれをとっても普通の人間とは異なる。一度、鍊とともに山へ入った際、真紅が野生の鹿に襲われたことがあった。鍊は躊躇うことなく腰に差した刀を抜き、鹿の頭を両断し『今日は肉だな』と返り血を浴びた顔で穏やかに微笑んでいた。真紅はその顔から学んだものだ。他者の命を奪うのと動物の命を奪うのは、同じ覚悟が必要なのだ。そして鍊がその覚悟をしつかりと心に宿していることを、同時に理解した。

今の真紅はナイトメアを倒すという明確な目標を持って、そのために剣を振るっている。ナイトメアを殺める覚悟はあっても、関係のない人間を殺める覚悟までは持ち合わせていなかった。だがこのまま企業と向き合うことになるのだとしたら、いつかかならず企業の人間を、ナイトメアではない人間を殺さなくてはならない日がくるだろう。そのときに真紅は命を奪うと言う覚悟をすることができるとだろうか。

いいじゃないか、その時になってからで。先のことばかり考えてると疲れるだろ？

いつか鍊がそういつていたことを思い出した。彼の何か考えているようで、その実ほとんど感性で行動する性格には呆れを通り越して感嘆する。その言葉を直接言っつてやる前に彼が死んだのは、心残りの一つでもあった。

その彼が今まだ生きている。その事実を叩きつけられたときの衝撃は、数時間前のことながら何故かさほど覚えていない。本当はそれほど驚いていなかったのだと気づいたのは、彼のことを思い出している最中だった。

心のどこかで彼が生きていると、死と直面したというのに、わかっていたのかもしれない。

きつとあの日、鍊が死んだ日の出来事が真紅の心にそう思い込ませていたのだろう。

〔五十四話〕 追憶〜式〜（後書き）

……途中から追憶じゃないじゃん、とかいうツツコミ、自分で入れたくなりました。

今回こそ錬の性格を補正しようとかやっきになっていたのですが、いかんせんすごい優しい性格のままってのはどうかと思います。本来はすごい豪快で、いろいろ大雑把な性格にしたかったのですが……。

まあ、ドンマイ。

さて次で追憶は終了。本編に戻っていくようにしたいと思っています。

今まで予定通りに行ったことがあっただろうか……。

ではでは〜。

〔五十五話〕 追憶〜参〜（前書き）

過去ばかり見ていると未来は変わらない。

けれど過去があるからこそ、今がある。明日がある。
だから時々でも、思い出すことが大切なんだと思う。

〔五十五話〕 追憶〜参〜

いつもと同じように朝食をとり、稽古を続けていた真紅たちの耳に遠くで鳥たちが羽ばたいた大きな音が聞こえた。稽古用の木刀を構えていた二人はほぼ同時にその方向へ顔を向け、鍊は小さく舌打ちして切り株に立てかけられた二本の刀を手にとった。一本を真紅に投げ渡し、もう一本の鞘を左手で握りながら鳥たちの動きへ意識を向けている。刀を受け取った真紅はそれを呆然と眺めていたが、鍊の声で意識を取り戻す。

『あいつらの相手は俺がする。白羽さんの、オヤジさんの刀で自分を守るくらいはできるようにしてるはずだ。大丈夫、お前ならできるよ』

『……ああ！』

急に震えてきた体を鼓舞しようと、真紅は目一杯の声で鍊に返す。不思議とそれだけで体から余分な力が抜け、いつもの鍊と行っている訓練のような感覚が全身を支配していた。

真紅でもわかるほど強烈な殺気。白羽が向き合っていたほどの数ではないだろうが二人で対処できるほどの数でもないだろう。

しかし鍊の顔を見ると、そこには本当に楽しそうな微笑が浮かんでいた。

ああ、これが本当の工藤 鍊なのだ。真紅は唐突に理解した。戦いの中でこそ本当の自分を見せることができる。ナイトメアという生き物は本来そういうものなのだと鍊は自嘲気味に語っていた。話半分に聞いていたが、戦慄を覚えるほど強烈な覇気が蛇口が壊れた

水道のように吹き出していた。

敵襲よりもよほど恐かったことを真紅は今でも忘れられない。あれが本物の獣なのだ、それまでとはまた違う震えが真紅の全身を駆け抜けた。

林を駆け抜ける足音。真紅はそちらに向けて刀を抜こうとしたが、鍊は目も向けることなくポケットに隠していた二本のナイフを指にはさみ、勢いよくあらぬ方向へ投げつけた。投げられたナイフは真紅の背後に飛び、木の上からスーツを着た二人の男が落ちてくる。まったく気づかなかった真紅が未熟だということもあるだろうが、鍊の索敵能力は異常な領域に達している。少し強くなった今の真紅でも、かつての彼ほど上手く敵を発見することはできないだろう。

『……………奇襲は失敗ですか』

まだ若い男の声が正面の林から聞こえてきた。同時に林から透き通るような青い槍が高速で飛び出し、鍊の心臓目がけて走りぬける。真紅には目視することすら難しいそれを、しかし鍊は鞘に納まったままの刀で払いのける。

『まさかお前が来るとは……………正直、驚いてるよ』

『それほど驚いているようには見えないけどね、鍊さん』

現れたのは鍊とほとんど年の差がない少年だった。長い髪を後頭部あたりで一本に束ね、黒いスーツの胸元にサングラスを引っ掛けている。体格は細身で、鍊と同じように筋力があるようには見えなかった。

再開したときの七夜は闇の中で、姿が変わっていても声で同一人

物だと判断することができた。日の下で再開していたとしたら互いにわからなかったかもしれない。

何か言葉を交わしているようだったが周囲に意識を向けていた真紅にはその内容まで把握することはできなかった。

『真紅！ 初陣だ、気張れよ！』

腹から搾り出したような強烈な声に真紅の緊張が少しだけ解ける。平常心で行け、そう言われたような気がして、大きく一度深呼吸をしてから真紅は刀の柄に手を添えた。

錬の方に意識を向けるられたのはそこまでで、真紅は襲い掛かる二人の男に意識をむけなくてはならなかった。剣速、身のこなし、反射、全てが錬より劣る相手。錬のすごさばかりを見てきた真紅は片方の懐に入り込み刀を抜き去り、胴体を両断した。初めて人間を切った衝撃を感じる暇すらなく、もう一人の男が切りかかる前に軸足を固定して、回転しながら一閃した。

今思えば敵を、ナイトメアを倒すことに何一つ迷いを抱いていなかったのではないか。親の仇、それだけではなく、人を殺すという行為そのものを真紅はすでに受け入れていたのかもしれない。

二人を片付けた真紅は錬のほうへと視線を上げる。そこにいたのは口元にうっすらと歓喜の笑みを浮かべた、冷たい殺気を放つ錬の姿。一緒に生活していたときは一度も見せたことがなかったが、真紅は彼のその姿を一度目にしていることを思い出した。

父の後姿を見ながら意識を失う直前、錬の前にも数人の敵が立ちふさがっていた。それをあっさりと切り伏せた錬の殺気は、腕の中

にいた真紅には無意識のうちに忘れなければならないという防衛本能が働いていたのだ。

錬を中心に血の海が形成されている。その向こう岸に対峙している少年は小さく苦笑を浮かべて青い槍を構えなおした。

『流石……ナイトメア中最強の男、ですね』

その言葉を最後に真紅は少年の姿を見失った。それと同時に錬の刀が小さな火花を散らせ、青い槍と刀が交差していた。真紅では対処できないほどの速度域。そのなかで攻防を繰り返す二人の少年に、たぶん見惚れていた。

見えない攻防が続いていた。ふと血の海に視線を移した真紅はその中でまだ動くものがあることに気づいた。本当はそこで、何もしなければよかったのかもしれない。錬を信用していれば、もしかしたら今も彼は真紅の前で笑っていたかもしれない。

けれど血まみれになった男が死に際にナイフを放とうとしている。そんな状況で動くなと言われても、当時の真紅には無理な相談だっただろう。

血の海へと駆けた真紅は思い切り刀を振り下ろし男の息の根を止めた。すぐにその場を離れようとした瞬間、真紅の目の前に鋭い刃が見えていた。

やられる、そう思って目を閉じたが一向に衝撃が襲う気配はない。真紅の目に飛び込んできたのは、彼を守り、背中から槍の一撃を受けた錬の笑顔だった。

『はは……ごめんな、すっかり倒しておけば、こんなことにはならなかったのに』

『あ……あああ……』

左胸を貫かれても、鍊は穏やかな笑みを浮かべたままだ真紅を安心させようとする。朱色に染まる槍が引き抜かれると、傷口から飛び出した大量の血液が真紅の顔に赤い染みを作っていく。

瞬間、体が思考よりも速く動いた。鍊の握っていた刀を取り、少年へと肉薄する。対処しようとする少年の槍を真ん中から両断して、勢いを殺すことなく腹を尻ぐ。下腹部を裂かれた少年は黒ずんだ血を吐き、血の海に膝をつく。その姿を妙にさめた意識の中見下ろして、切っ先を少年の目の前にかざした。

『……へえ、君が……”切り札”か』

殺されるといふのに、少年は酷く穏やかな笑顔を浮かべていた。その存在自体が、癩に障る。躊躇うことなく額に刀を差し、絶命するところまで見届けた真紅は急いで鍊へと駆け寄った。

倒れそうなほど強烈な頭痛に襲われながら、鍊の体を支え血の海から離れる。少し離れた大きな木に鍊の背を預けると、その正面に膝をついて鍊の瞳を覗き込んだ。

『ごめん……ごめん、鍊さん』

『なんで、謝るんだ？ 助けようとしてくれたんだろ？ よくやったよ、お前は』

胸を貫かれたのだ、苦しくないはずがない。けれど錬は普段と変わらぬ落ち着いた様子で真紅の頭をそつと撫でた。

『でも、ここから先は一緒に行けない、な。あいつらの死体に、火をつける。狼煙代わりになって、ある人が来てくれる、はずだ』

『そんな……！ 死んじゃうみたいなこと、いうなよ』

幼い真紅にも錬の傷が致命傷だということくらいはわかっていた。かろうじて心臓は避けているが、出血も止まらないし、肺に穴も開いていたのだらう。同じように喋っていても、錬の声はやはり霞んでいた。

それでも笑顔を浮かべたまま、錬は真紅の頭を撫で続ける。

『最後に、さ。俺の願いを一つだけ、聞いてくれるかな？』

『……何？』

涙で霞んでいく視界の中で錬の穏やかな笑顔だけが酷く輝いて見えた。

『俺たちは、いちゃいけない存在なんだよ』

『そんなこと……そんなこと、ないよ』

『はは……やっぱり、優しいな、お前は』

もう目を開けているのも辛いのか、錬は目を閉じて言葉を紡ぐ。

『頼む、真紅。俺たちの』

俺たちの悪夢を、終わらせてくれ。

それが最期の、言葉だった。頭の上に乗せられていた手は力を失い、ゆっくりと地面に落ちてゆく。死んだという事実を受け入れることができなかった真紅はただ、呆然とその姿を眺めていた。

おそらく錬の残した言葉が真紅を無意識のうちに動かしていたのだろう。錬のポケットからライターを取り出して、周りの枝をかき集めて火をつけた。火はしたいの油に燃え移り、大きな火柱となって空へ高々と上っていった。

「……錬は、死んだか」

現れたのは昔数回だけあったことがある、真紅の祖父。神坂 黒陽という男は物言わぬ真紅の頭に手を乗せて、真紅の代わりに錬の死体を木のそばに埋めてくれた。少しだけ盛り上がった地面に形見である刀を突き刺して、白羽の形見を強く握り締めた。

大切だと思っていた人は、結局真紅の目の前から消えていく。弱いから、強くないから守れないんだ。守りたいなら強くなればいい。強くなれば、こんな悲しい思いはしなくてすむんだ。

真紅は黙って見守っていた祖父を睨むように見つめ、言葉を発した。

『お爺ちゃん、俺を、強くしてくれ。もう誰も死なせなくてすむように』

『……いいだろう。その代わり、僕の教えは厳しいぞ？』
『かまわねえよ、強くなれるなら』

強く、なるんだ。強くなって、大切なもの全てを守れるだけ強くなって、錬の背中に追いついて見せるから。

あの人の悪夢を、終わらせて見せるから。

新たな決意を胸に、真紅は祖父とともにその場を離れる。一度として振り向かなかつたのは、けじめのつもりだった。

それから祖父の暮す隠れ里に移り住み、毎日のように訓練を続けた。ただ強くなるだけじゃない、誰かを守るほど強くなるために、けれどそこには錬を死なせてしまったという後悔が少なからず存在していたはずだ。それら全てを払拭するために、真紅は前に進んでいく。

〔五十五話〕 追憶〜参〜（後書き）

ん〜ん〜？ あまり鍊のかつこよさが伝わらなかつたような気がするのは、俺だけでしょうか？

ともかくこれで長かつた（？）追憶は終了です。次回からはしっかり成長した真紅と京の会話でもえがいていこうかなあ、なんて考えているわけですが、京と真紅って……う〜ん、甘つたるい雰囲気にはなりそうにないですね。

ではでは〜。

〔五十六話〕 現在〜イマ〜（前書き）

過去があるから、現在がある。

そんなこと誰だってわかっているはずだった。

〔五十六話〕 現在〜イマ〜

真紅の記憶を話すだけならば彼女の心を傷つける心配はほとんどない。襲撃された期間が、彼女がやつと笑ってくれた直後だったという事だけが唯一残念なことだっただろうか。真紅が危惧していたのはその後、祖父とともに事件の真相を知ったときのことだった。

「……俺たちを襲ったやつらは、高嶺 莊介、彼が指揮を取っていたらしい」

そもそも襲撃を受けた際、真紅たちは高嶺家の別荘へ向かっている最中だった。そのコースを予想して、極力周囲へ危害が及ばない場所を選ぶことができた人間は少ない。また白羽の実力を正確に把握して、投入する戦力を計算することができた人間を絞り込んでいくと、莊介だけが浮かび上がってきたのだ。実際彼と対峙した感覚なら、仮定は確証に変わっていた。彼自身もおそらく、問い詰める必要もなく、正直に真実を答えてくれるだろう。

真紅と莊介の間では、すでに判明していた事実。けれど真紅たちを陥れたのが自らの父だったと知った京はどんな反応を見せるのか。それだけが真紅の不安要素だった。

案の定、彼女はどのようなように両手を自らの口元に沿え、目一杯に涙をためていた。

そんな姿を見たかったわけではない。彼女の泣きが見たくなかったからこそ黙っていたというのに。真紅は自らの未熟さと変えることができない真実に悔しさを感じ、下唇を噛み締める。

「怨んでいないと言えば嘘になる。だがそれもかなり薄れているのさ。彼自身も自分の行動を悔いているようだし、君が悲しむことはない」
「でも……」

口下手な真紅の精一杯な慰めも、今の彼女には通用しない。臨界点を突破した涙は頬を伝い、星明りの下できらきらと輝く。思わず綺麗だと思ってしまうほど京の泣き顔が美しく、真紅は息を呑む。美人の涙は男を狂わせると空によく言われていたが、ようやくその意味が理解できたような気がした。

かける言葉を捜そうにも、何を言おうと今の京には意味がないことを察して真紅はただ押し黙る。結局のところどれだけ強くなっても守れないものがあるのだと、祖父の教えで理解していたはずだった。

なら、どうしてこうも胸が痛むのか。涙なんてものは鍊が死んで以来枯れ果てたと思っていたが、彼女の姿を見ていると目頭が熱くなるような懐かしい感覚が襲ってくる。だが泣く理由が見当たらない、真紅はただ戸惑うばかりだった。

「ごめんなさい……ごめん、なさい……」

「謝らないでくれ。君に謝られると、どうすればいいかわからない」
「でも、謝りたくて……意味はないかもしれないけど、どうしても……」

京の言うとおり、その謝罪に意味はない。彼女の自己満足だと片付けられても仕方がないほど理不尽な思いの押し付けだ。

頭の隅にそんな考えがあったが、それよりも強く、彼女の言葉に

癒されている自分がいることに気づいていた。

謝罪なんてものは関係ない。ただ自分でも気づかなかったほど深い悲しみを共有して、それに涙してくれた京がどうしようもなく愛しく思えて、同時に自分がどうしようもなく情けない存在に思えて、どうしたらいいのかわからなくなった。

そもそも高嶺家に知られてはいけないという考えはあったが、彼らを怨んだことはほとんどなかった。事実を知らなかったときはもちろんだが、真相を知った今でも彼らを怨む気持ちはほとんどない。もちろん、どうしてという感情は胸の内に燻っている。それでも莊介の気持ちが知りたいと思いはしたが、本当の憎しみがあつたかと聞かれると首を傾げてしまふだろう。

「なら……一つだけ、お願いを聞いてくれるか？」

口をついた言葉は京も、そして真紅自身も予想外なものだった。

顔を上げた少女の赤い瞳を見て、いったい何を願うというのか。自分の心が本当に望むことを探して、たった一つだけ、じっくり来る言葉を搾り出していた。

「俺の代わりに笑ってくれ。泣き顔なんて、見たくない」

「そんな……そんな、お願い……」

「頼む。俺はきつと、心の底からは笑えないから。だから代わりに笑顔をくれ」

悲しまないでいい、苦しまないでいい。そんな姿を見るために彼女へ真実を伝えたわけではないんだ。

それに真紅の言葉はあながち嘘でもなかった。

空たちと一緒に馬鹿なことをやって、笑うことは何度もある。けれどそれは心の深淵に存在する空虚を紛らわすためのもので、本当に笑っているわけではなかった。

だから笑顔を求める。自分が持っていないものを、京に求める。それで彼女の泣き顔が晴れるなら、十分すぎる結果だから。

「お願いだ 京」

月明かりの下でわかるほど赤い目を京は見開く。再会して初めて下の名前で呼んだことがよほど衝撃だったのだろう。意識してその名を呼ばなかった真紅自身も、少しだけ気恥ずかしさに似た感情を抱いていた。

「本当に、そんなことでいいんですか？」

「ああ。あと、できれば敬語もやめてくれると助かる。敬語は苦手だ」

「はい！」

京はクスツと笑うと、涙の跡が残る顔で最高の笑顔を浮かべてくれたのだった。

真紅たちのやり取りを見届けようとした天一だったが、それ以上の問題に直面してしまっただけのためその場を離れなければならなくなっていた。

「う、うええええ〜ん！」

「ったく、そろそろ泣き止め。どこに泣く要素があつたんだ？」

真紅の話聞いていた途中、突然恵理が泣き出した。慌てて抱きかかえ、逃げるようにその場を離れた天一だったが、正直なところなぜ泣くのか皆目見当がつかなかった。

「だつて……だつてえ！」

「あゝあゝ、わかつたわかつた。わかつたからとりあえず泣き止めよ。そしたらいろいろ聞いてやる。ほら、いい子だから、な？」

小さな子供をあやすような感覚で天一は恵理の長い黒髪をすく。さらさらと手触りのいい髪はいつまでも撫でていたい代物だったが、流石にこれ以上泣かれたら対処に困った。

恵理をこんな風にあやすのも随分と久しぶりのような気がする。こっちの学園に交換留学生として来るまで、恵理とは会話こそあったがほとんど挨拶程度にとどまっていた。お互いに顔を合わせづらいい気持が少なからずあった。普通の兄妹とは違い互いの繋がりを強く感じる事ができたが、母の死がそれに小さな亀裂を生じさせ、今まで全て分かり合えてきた二人に戸惑いを生じさせたことも原因の一端を担っていたのだろう。

臍目もあるだろうが、いい女に育ってくれて安心する。思っていた以上に約束の効力が切れる日は早いかもしれないと一抹の寂し

さを感じながら、天一は泣き止むまで彼女をあやし続ける。

「ごめんね、天。真紅の話聞きたかったよね」

「別に。もともと盗み聞きなんて趣味じゃないし、気にするなよ。泣き虫の世話のほうがよくほど重要だ」

ようやく泣き止んだというのに今度は赤面する恵理。もともと同じだったはずなのにどうしてこうまで違っているのか、恵理のそんな姿を見てみると時々不思議に思えることがある。それが成長することなことなのだと思いついたのは、恵理が天一のもとを離れた後のことだった。

赤面して顔を逸らす恵理の髪を優しく撫でる。機嫌がよくなるかと思っただが、なぜか恵理は眠そうに目を細めていた。

「恵理？」

「あ、ごめん……なんか、ねむい」

頭を撫でられてよほど気持ち良かったのか、蕩けた目は今にも重みに耐え切れず閉じてしまいそう。泣くことによほど体力を使ったのかもしれないが、いくらなんでも屋外で寝かせてやるほど天一も甘くはない。

「ばか、ここで寝るやつがいるかよ」

「うん……だから、おんぶ」

「はあ!？」

自分で驚くほど大きな声を上げてしまったにもかかわらず、恵理の眠気には歯止めがかけられないようだった。

しかし、いきなりおんぶしろと言いだす女がいるだろうか。仮にも年頃の女子高生、血の繋がった兄妹だからといって問題がないとは言いがたいのではなからうか。そんな考えが脳裏をよぎったが、小さく溜め息をついて諦めた。

母が死ぬ前まではこんなこと日常茶飯事だったはずだ。友達に冷やかされたり馬鹿にされたりしたとしても決して離れられなかった二人。いまさらおんぶ程度で驚くこと自体がおかしなこと。

「はあ……わかったよ。ただ、おんぶは面倒くさいからな。こっちでいかせてもらう」

「ふえ？ わっ！」

不確かな恵理の動きを止めて、一気に持ち上げる。片腕は足に、片腕は背中にそえると予想以上に軽い体がすっぽりと腕の中に納まった。

「……少し痩せた？」

「そんなことないと思うけどなあ」

ダイエットをしているようには見えなかったが、もしかしたら父子家庭になってからまともな食事をしていないのではないかと心配してしまう。久しく実家に帰っていないことを思い出して、たまには親父に連絡を入れようかとまるで関係のないことを考えてしまった。

母の件についてもそうだったが、父はどうも放任主義が過ぎるような気がする。家を飛び出した息子を心配している様子はないと恵理は言っていたし、天一自身もそんな気はしていたのだ。天一たちの力についても少なからず知っているようだし、師匠と同じ、もし

くはそれ以上に謎の多い人ではないかと考えたこともあった。

「ま、どっちでもいいけどな」

「どうかした？」

「何でもねえよ。寝るのか喋るのか、どっちなんだ？」

「んー……ねる」

言うが早いか天一の首に腕を絡ませて、小さな頭を胸板に押し付ける。数秒もしないうちに聞こえてきた小さな寝息は彼女が本当に疲れていたことを証明していた。

穏やかな寝顔を眺めていると互いの成長を否応なく実感する。けれどその成長の中に昔と変わらぬものがあるような気がして、安心している自分を感じてもいた。

もし母を殺す必要もなくて、今までどおり同じ時間を共有し続けていたら、一生離れられないほど依存していたかもしれない。そう思うほど恵理とともに過ごす時間は穏やかで、優しい。その大切さを教えてくれたのは、結局のところ母だった。

良くも悪くも、母さんに支えられてるんだな。

恵理の寝顔を眺めながら、さて帰るか、と前へ一歩踏み出したのだった。

〔五十六話〕 現在〜イマ〜（後書き）

はい、というわけで追憶が終わってからの第一回ということですが真紅が思いのほかヘタレだったことと天一がシスコンだったことがわかったくらいでしたね。

しかし天一に少なからず共感できてしまう作者は末期なのでしょうか？ いや、そんなことはないはずだ。妹が可愛いと思うのは、兄としては当然のことですよ！

そもそも血のつながった兄妹を大切にしてくのが可笑しいというのでしょうか。そりゃぁいい年した大人がそれをやっていたらさすがに引きますよ？ でも学生の年齢ならそれくらい許されてもいいのではないのか！ どうなんだ日本！

何か、疲れているような気がします。

と、ともかく次話はもう少しまともな後書きを……あれ、話が脱線しすぎてる？

いいじゃない、たまにはこんな後書きがあったって。

毎回こんなノリでいこうかな。

でせはせ〜。

〔五十七話〕 赦しと許し（前書き）

願えばきつと、叶ってしまふ。

望めばきつと、拒まれはしない。

それでも彼は、赦されるわけにはいかなかった。

〔五十七話〕 赦しと許し

天一がようやく帰宅した頃には、日付が変わろうかというような時刻になっていた。

完全に夢の世界へ旅立ってしまった惠理をソファーに横たえて、小さく息を吐き出す。想像していた以上に距離があったのもそうだが、歩いている間に背中の中の眠り姫が無意識で体を動かすため、落ちないように調整するのにいちいち手間を取られてしまった。

よく考えてみると夕食をとっていないことに気づいて、軽く何か入れようと冷蔵庫を開けてみる。数日前にいろいろと買い込んでいたはずだったがいつの間にかほとんど食べるものがなくなっていて、軽く衝撃を覚えてしまった。

一応アパートの一室を借りてはいたが、ほとんど毎日のようにこの一軒家で生活していた。康はアパートで生活しているが、天一がこちらを使っているからアパートを使っているだけで、天が使わなくなったら使うよと笑っていたのを思い出す。流石に毎日夕食を作っていたら、買いためたものもなくなるということだろう。それが想像以上に早かったただけの話である。

残っていたジャガイモと玉葱、それにベーコンと薄いチーズ一枚を取り出して使い込まれたまな板を用意する。ジャガイモの皮をむいて、玉葱もむいて、適当な薄さに切ってから油を敷いたフライパンに玉葱をぶち込む。炒めている間にベーコンを小さく切って、玉葱がしなってきたからジャガイモを投入し、塩コショウで少し味をつける。ジャガイモに火が通ってきたらベーコンを入れ、さらに炒めて火を止める。フライパンに蓋をして、少しの間蒸してから、チ

―ズを手で裂いて上にかけて。最後に弱火で少し放置してから、上手に皿へ盛り付けて完成。

二十分程度で完成した料理は育ち盛りの男子にすれば手軽すぎるものかもしれないが、簡単に作る分には申し分ない。調理中に解凍しておいた白米を添えれば十分すぎるほどの夜食だ。

リビングに皿と茶碗、それにポットを持っていくと、匂いにつられたのか恵理が夢の世界から帰還していた。眠たげな目をこすつて、おふあよう、なんて呂律の回らない挨拶をよこす姿に苦笑を浮かべ、恵理の正面に腰掛けた。

「なにい、やしよく？」

「そ。お前も食うか？ 気に入ったら作り方くらいは教えてやる」

「たべる〜。でも、つくりかたはいらにゃい」

予想していた答えにため息をついて、キッチンから箸と取り皿を持ってくる。完全に目を覚ました恵理は目の前に鎮座する料理に目を輝かせ、天一から皿と箸を受け取るとすぐに料理へと箸を伸ばした。

「つ〜〜〜！ 相変わらず美味しいね、天の料理は」

「簡単なもんだぞ、こんなの。お前の料理が壊滅的ただけだ」

「そ、そんなことないよ！ たまたま天が食べるときだけ、失敗するだけだもん」

中学校の調理実習などではよく恵理の料理を食べさせられたものだ。そのたびに腹を痛めたり、意識が遠くなったり、いきなり走り出したりと思いつき出すだけで寒気がするような事態を何度も経験した。その一方で他の生徒たちに聞いてみても普通だよ、とい

った反応をされるため、わざとやっているのではないかと警戒したこともあった。だが康のような、まともな調理ができる人間が一緒の場合はいたってまともな食事が出てくることを考えると、理由が本当にわからなかった。

しかし、美味しそうに料理を食べる恵理の姿は見ていて心地いいものである。それほど手の込んだものではないが、美味しい、といつて食べてくれる人がいて、それが大切な家族だったのならこれ以上の幸福はないのではないかと思えてくるのだ。

もはや母親の心境ではないかと気づいて、思わず頭を抱えてしまった。

「どしたの、天？」

「い、いや、なんでもないよ。ああこら！俺の分も少しは残しておいてくれよ」

気を抜いているうちに半分ほど食べられていて、急いで箸を動かす。恐ろしいことに手元にあったはずの茶碗まで奪われていて、白米まで半分以上食われていた。

実の妹ながら恐ろしい食欲だ。食材の減りが予想以上に早いのは彼女のせいではないのかと、わずかな頭痛を覚えてもいる。

食べ終えた頃、時計の針は一時を少し回った時刻を示していて、食器を適当に洗ってから人心地とばかりに日本茶を沸かした。一人暮らしをしていると覚えてしまうもので、作法などはわからないながら美味しいと思える淹れ方を習得していた。

「……主婦？」

「うるせえ。そういうのは一人で料理できるようになってから言うんだな」

他愛のないやり取り。心休まる時間を共有する感覚は悪くないものだったが、いくつかやるのが残っているのを思い出して、どうしようかと少しだけ思考の海に浸っていた。

「今日は考え事が多いね。ん？ もう日付変わったから昨日と今日、かな？」

「……まあ、な」

防衛策は叶と康、さらに七夜や高嶺家の当主に任せておけば天一が口出しすべき点は見つからないだろう。その点は康を信頼しているし、いざとなれば無茶をしても何とかなる。一番の問題はやはり、天一自身の力が戻る気配がないということだろう。

師匠はナイトメアという敵、組織に向き合うことで力を取り戻すことができるかという点だ。だが原因となったであろう烏丸を倒した力が戻る兆しはない。烏丸を倒すことで力が戻ると考えていた天一にとって、これはとても大きな誤算だった。

烏丸を倒すために戦ったとき、初めてわかったことがある。恵理と対峙したときは不知火の二刀流という反則技を使ったからこそやり過ごすことができただけで、一本だけだったさっきの戦いはほとんど本来の動きをすることができていなかった。真紅や七夜に助けられていたから生き延びられただけで、もし一人だけだったら確実に負けていた。

本当に、無意識のうちに力に頼っていた。ただ刀を振るうだけでもどこか力の存在に頼っていて、刀をよけられても力でどうにかで

きると思っていた。しかし今回は、力がないと思っただけで動きが鈍った。

はつきりとわかる、今の自分は足手まといだと。雑魚と戦うには十分な戦力になるだろう。だが彼らの言う番号付きと一対一で対峙したとき、おそらく天一は何もできずに終わってしまうだろう。

「……深刻に考えることかな、それ」
「え？」

唐突に投げられた言葉で思わず顔を上げる。鼻と鼻がぶつかるほど接近していた恵理の笑顔に驚いて、目を何度かしばたかせてしまった。

「今までがおかしかったんだよ。何でもかんでも自分一人で背負って、突っ走って。皆と一緒にやれることがある、それってすばらしいことだと思っただけだな。頼ってもらうのって、結構うれしかったりするしね」

「恵理……お前……」
「らしくないこと言ってるのはわかってるよ。でも、たまには妹らしいことさせてよ、お兄ちゃん」

優しい笑顔、落ち着く声音。愛しさがこみ上げるその姿は、死んだ母に似ていた。

当然といえば当然だったが、何の心の準備もできていなかったためか心に受ける衝撃を緩和することができなかった。

「え……？ お兄、ちゃん？　なんで、泣いて……」
「へ？　あ、これは、その」

気づけば一筋の涙が頬を伝っていた。慌ててそれをぬぐい、なんでもないという風を装ってみるが、恵理はさらに笑みを深め、今度は唇が触れるほど顔を近づけた。

「優しい私は、嫌い？」

「ば、馬鹿か！ そういう問題じゃなくてだな！ ただ眠すぎて、欠伸をこらえたら出てきたただけだよ！」

苦しい言い訳だったが押し通して、天一はソファから立ち上がる。

本当に、双子というのは厄介なものだ。考えていることが全てわかるわけではないにしろ、感情の起伏を感覚で理解されては隠し事が成り立たなくなってしまう。その勢いで最大の嘘まで暴かれてしまった日には、今までの苦労や痛みが全て無意味になってしまっただけではなく恵理を悲しませる結果につながってしまうだろう。

しかし、隠し続けることに本当に意味があるのだろうか。今日の真紅を見ていると、自分も隠し事を続けている意味を見失いそうになる。

言い方は悪いが、所詮母はもう故人。恵理を悲しませたくはないがいつまでもばれるのを恐れているよりはよほどいい決断なのではないと考えなくもない。だが真紅と違って、天一には真実を告げるだけの勇気が存在していなかった。真実を告げて、大切な人の泣き顔を見る覚悟なんてできるはずがなかった。

あいつの泣き顔だけは、見たくねえんだよ。

天一が自覚している唯一の弱点。戦闘面では絶対に弱点を作らないように心がけていた天一がどうしても直せなかった部分。でも直せなくていいとも思っている。生活していくうえでも戦闘上でも、さして影響はないのだ。恵理に頭が上がらないだけで、それさえ我慢すれば万事うまくいく。

でも、心の中で赦されたい自分がいることにも気づいていて

馬鹿馬鹿しい。本当に馬鹿馬鹿しい考えだ。

赦されないことで罪を忘れない。母と交わした約束を果たすまで、絶対に赦されるわけにはいかないのだ。たとえどんな悲しい思いをしたとしても、赦されることだけは許されない。

簡易ベッドに身を横たえて、天一はただ何も考えず眠りという闇へ落ちていった。

〔五十七話〕 赦しと許し（後書き）

夜なべして書いた話なのでどこかおかしいところがあるかもしれませんが。その場合は後に訂正しますんで生暖かい目で見守ってくださいと嬉しいです。

しかし天が料理上手なことには正直驚きました。恵理が実は料理が下手、という設定は最初から存在していたのですが、それなら天はどうなんだ？ というのは盲点で急遽料理上手という設定が仕上がりました。

あ、天が作っていた料理はいいジャガイモと玉葱さえ手に入れば本当にお手ごろ、かつ簡単に作れますんでお試しあれ。

いや、レシピが大雑把過ぎるだろ。

さて天一の意外な一面も見れたところで後書きも終わりたいと思いますが、次話はあまり焦点が当てられていない人を中心に描いていこうかと……。

やっぱりやめようかなあ。

ではでは〜。

〔五十八話〕 空の思惑（前書き）

いつも明るく、いつも馬鹿なことをやっている男だった。

それでも彼にだって戦う理由が、足手まといになりたくないという思いがある。

〔五十八話〕 空の思惑

屋敷の中に設けられた一室。そこは来客である朝風 真紅のために用意された部屋で、夜も更けてきた時刻になると流石にいるだろうと訪れたのだが、探し人の姿はそこになく、屋敷の中で彼が行きそうな場所全てを回ったがそれでもその姿を確認することができなかった。

首を傾げつつ、屋敷の主といつてもいい少年、御子柴 空は自室へと戻っていく。

先日の学校行事以来ほとんど屋敷に帰ってきていない真紅を少しだけ心配していたのだが、いろいろと聞こうとしても当人がいないのではどうしようもない。

最近になって、真紅に置いていかれているような感覚を空は肌で感じていた。鬼ごつこのときや彼が単身企業の本部へ突入したときもそう。真紅が仲間を危険にさらしたくないと思っっていることはわかっている。だがそれ以上に真紅が自分を戦力として数えていないのではないかという不安が空を襲っていた。

最近になって天一や康といった戦力が増え、未知の力を見せ付けられて、その不安は急激に肥大していた。天一とは体術だけでも勝負にならないだろうし、康には鬼ごつこの際見せた力がある。加えて恵理という少女も空では敵わないほどの力を持っているだろう。あんな可愛い顔してすさまじい力と殺気を見せられて、人生前向きをモットーに掲げていた空でも流石に凹むというものだ。

気がつくとも道場に足が向いていて、せっかくだからと訓練着に着

替え、冷たい床を裸足で踏みしめる。少しでも訓練して、強くなつて、真紅に戦力として認めてもらうために。足手まといではいられないという思いが空の体に少なからず力を与えていた。

どれだけ時間がたったのか。気がつくとも壁にかけられていた時計の針は、日付をまたいでいた。さっと着替えてから、シャワーでも浴びようかと廊下を歩いていると、正面からやってきた相手に空は小さく息を吐く。

安堵の息。

「どこ行ってたんだよ、真紅」

白を主張する清楚な服を着た真紅が眠そうな表情で空を見る。空が持っていたものでも真紅が持っていたものでもないその服をどこで着てきたのか凄く気になったが、それ以前にどこへ行っていたのかを聞くべきだろうと、理性が叫んでいた。

真紅は普段よりも疲れた声音で、それでもしつかりと答えてくれる。

「野暮用。いろいろと説明することがあるから、明日愛美を呼んでほしい。あと、学園は少しの間休むと思う」

「……そっか。わかったよ」

何があったのか、いったいどんなことを説明してくれるのか。気になることなんて尽きない。それでも真紅の言葉を受け入れ、自室に消えていくのを見守ったのはせめてもの心遣いだった。

野暮用と言っていたがおそらく真紅はまた、空たちに黙って戦っていたのだ。真紅が疲れることなど戦い以外思いつかない。だとすれば疲れた体に鞭打つてまで真相を聞きだす必要もない。説明してくれるまで少しの時間を黙して待てばいいだけだった。

しかしやはり、一緒に戦ってやれないのは堪える。お前は無力だ、足手まといだといわれているような気がして、悔しくて、やりきれない気持ちになる。

いつだってそうだ。空は昔から、どんなことも真紅に追いついたことがない。京を元気にさせようとしたのも真紅。ナイトメアと戦おうとしたのも真紅。企業を潰そうとしたのも真紅。どんなときだって空は彼に追いつけない。

劣等感に近い感情を抱いた時だってあった。けれど空を支えているのは、必要とされているんだという使命感だった。

今、それがなくなってしまうのだとしたら、空はいつたい何を支えにして生きていけばいいのだろうか。

「なさけねえな、ほんと」

思い悩むなどらしくない。どこまでも陽気で、どこまでも馬鹿が空だ。真紅も愛美も、空の知り合い全ての共通認識を独りになったからといって崩すわけにはいかない。

それでも

それでも力がほしいと、願ってしまう自分がいる。

叶に頼んでおいた銃は昨日届いた。他の誰が見てもただの銃だが、空にとつては本当に思いいれのある銃で、今もっている二丁の拳銃を売り払ったとしても手に入れたかった代物だった。

そういえば封をといっていなかったと思ひ出し、空はいそいそと今度こそ自室に戻っていく。自室の扉をくぐり二重に鍵をかけてから、部屋の中央に鎮座する円形テーブルの上に置かれた白い包みを手に取った。

重い。

実際は今まで使っていた銃と同じくらい、一〜二キロ程度のはずなのだが、必要以上に重く感じてしまうのはこの銃が特別だからだろうか。

力がほしい、か。どうしてこれに意識が行かなかったのか、今となつては可笑しく思える。

封を、解く。しゅるりと小気味良い音を立てて布が本来の四角へと戻ってゆき、黒い銃身が姿を現す。

銃身に絡みつくような龍の装飾が施された細身の銃。全てが黒で創られているのに装飾の部分だけが輝いているかのような、不思議な色を宿している。見ようによれば蛇のように見えなくもないが、引き金の部分に龍の頭があるから龍だと判断できる。

スペックだけを見るならば、マグナムほど威力はなく、装填可能弾数も二桁には満たない。今まで使っていた銃が十二発、威力も標準よりも強いため明らかに選択ミス。けれど空にとっては最高の選択であり、長年捜し求めた至上の逸品である。

この銃を製作した人物を、空は知っている。真紅や愛美は知らないだろうが、かつてこの屋敷に出入りしていた男がこの銃について語っていた。

『今まで僕が作ってきた中でも最高の銃だよ』

何がどう最高なのか、当時の空はまったく理解できなかった。そんな感情が表情に出ていたのか男は優しい笑みを浮かべ空の頭をそっと撫でていた。

『弾は必要ない。もちろん実弾を利用することもできるけど、あの銃の真骨頂は人の心から力を得るということなんだ』

彼が言うには精神というものは未知の力を放っているらしく、それを吸収することで銃弾に変換する。そんな非現実的な理論を現実にした作品がそれだと、彼は嬉しそうに語っていた。

銃の名は『新月』。なぜその名をつけたのか、彼は多くを語ろうとしなかったが、きつととても重要な意味が込められているのだと思っている。

マガジンを外す。口径も調べてあったが、幸い今まで使っていたものと同じで新しく買い溜める必要はなかった。マガジンの装填弾数を確認してグリップに戻し、漫画とかでよくやる人差し指で引き

金の部分を回転させるのをやってみて、失敗する。回転しながら床を転がる銃に苦笑を浮かべつつ、空はそれを拾い上げ、ホルダーにしまった。

今まで二丁の銃を使っていたから、一丁だけ使うのには何か抵抗がある。そのため一つのホルダーには新月を、もう一つのホルダーには今までの銃の片割れを押し込んで、最後に残った一丁はセーフティーをかけたまま鞆の中に突っ込んだ。予備を一丁入れておけば様々な状況に対応すればできると思ったが、よくよく考えると銃刀法などに引つかかるのではないだろうか。

いや、そんなのもう今更か。さらに苦笑を深くして、空は大きく伸びをする。

いろいろと気を張りすぎていたのか眠気が強い。訓練のせいで体も疲労しているし、明日もある。せつかく真紅が説明してくれるというのに、寝ぼけ眼で対応することになってはどうしようもない。

風呂でも入ってさっさと寝るか、と欠伸が出そうになるのを堪えながら空は隣の部屋にある浴室へと歩いていく。

その背中、ホルダーに納められた黒い銃が鈍い光を放っていた。

〔五十八話〕 空の思惑（後書き）

気がつけば一週間更新していなかった今日この頃。

いや、頑張ってるんですよ？ そりゃあもう、大学内でいきなり奇声を上げるくらい。

いやいやいやいや、そんなことしてたらただの変態じゃん！ 俺はそんな人間じゃねえ！

さて、変なテンションを戻しましょうか。今回は宣言どおり、わきやk……失礼。真紅の親友である空に焦点を当てた一話となりました。

この作品では真紅と天一という二人がお話の軸となる人物なのですが、いかんせん他の人物をぞんざいに扱っている作者。腕がないというのも確かですが、いくらなんでも空気過ぎるだろう、ということと今回は空を主軸において見ました。

もう一人の可哀そうな男、康くんについてはまた活躍する機会を与えてやりたいなあと思います。

長々と後書きをやっててもしょうがないので今回はこの辺で。

ではでは〜。

〔五十九話〕 似た者同士の考え（前書き）

力ばかりに固執する。

そんな必要、なかったはずなのに。

〔五十九話〕 似た者同士の考え

翌日早々に屋敷を出た空は、使用人の運転する車に真紅を乗せ途中で愛美を拾い、向かった先は昔、真紅につれられて通っていた場所だった。

どうして、と疑問が浮かぶ前に昨日何が起こったのか何とはなしに理解していた。

ようやく決心したのかという安堵のほうが強い。今まで京に本当のことを教えなかった真紅が、ようやく真実を語ったのだと。今まで喉の奥に引っかかっていた小骨が取れたような、気持ちの良い感覚が空の中を駆け抜けていた。

高嶺家の屋敷を見たのは久しぶりだった。同じ街にあるのだが学園から正反対の位置にあるここは、普段は用事がなければ近づくこともない。昔は真紅と一緒に京を元氣付けるため通っていたはずだったが、真紅がいなくなり、京が表情を取り戻してからは自然と足が遠のいていた。

だから客間に通されたとき、空は我が目を疑った。客間自体は上級のソファアールと暖炉、鹿の頭の剥製など昔とほとんど変わったところはないのだが、最も変わっていたのは彼女、高嶺 京の表情だった。

「あ、いらっしやい」

今まで学園で散々見てきたはずの顔。けれどそこに咲いていた誇らしげな笑みと清楚なワンピース姿はあまりにも、あまりにも彼の

知る京とはかけ離れていた。その驚きは空だけではなく、隣で寝ほけ眼を擦っていた愛美も同様のようで、驚きで完全に目を覚ました彼女は小動物のようにパタパタと京へと駆け寄っていった。

「どうしたの、京ちゃん！ いつにも増して可愛いよ！」

「え、そ、そんなことないと思うんだけど……」

戸惑いがちに頬を赤らめるその仕草は、愛美の言うとおり可愛さを増している。今までは容姿の美しさと弱々しさから保護欲をかきむしられるような感覚のほろが強かったが、今の彼女はまるで違う。可憐、その言葉がよく似合う。

何が彼女を変えたのか。今日ここにやってきた理由と真紅の行動から容易に理解することができるが、空の中にある嗜虐心が鎌首をもたげていた。

「……真紅」

「どうした、空？」

「キスでもしかた？」

瞬間真紅が吹き出した。同時に茹で上がったタコのように赤くなる。

「そ、そんなことするわけないだろうが！」

「どうだか。京ちゃんは純情だからなあ。案外あっさり……」

言いかけて、真紅の邪悪な目に止められた。それ以上変なことを言えばただではすまない、とでも言いたげなその目にただ降参するしかなくなってしまう。もちろん愛美や京に気づかれぬよう表情は笑顔のまま。いつの間にそんな器用になっていたのかとビックリしながらも、そろそろ本題に入ろうとした。

「で？　いろいろと説明してくれるんだろう？」

「ああ。ただ、まだ全員がそろったわけじゃなくてさ」

そんなことを言った直後、玄関のほうから軽い足音が聞こえた。ドアが開き、そこから現れた少女は空たちが通っている学園の制服を着た朝倉 恵理。確か制服はまだ届いていないはずだが、彼女はじゃれあう愛美と京のほうへ一目散にかけてゆき、飛びつかんばかりの勢いで両手を広げていた。

「まなみちゃん、みくやく」

「え？　恵理ちゃん？」

豪快にダイブした恵理を二人で受け止める。倒れなかったのは愛美の脚力のおかげか、恵理が軽かっただけなのか。

彼女の後にやってきた二人は空たちとは違うものの同じ学園の制服を着て、片方は眠そうに、片方は申し訳なさそうに客間へと足を踏み入れた。

「お~~~~~っす」

「……随分と眠そうだな」

「ああ……昨日はいろいろと、疲れたし」

「そうか。昨日は、手間をかけた」

「あ~~~~、気にすんな」

なにやら意気投合している真紅と天一。元々似た部分を持っている二人だから別段おかしいこともないのだが、少し見ない間に随分と仲がよくなったものである。

少し距離をとっていると隣に天一の相方、康がやってくる。

「いつの間に仲良くなったんだろうね、あの二人」
「……そうだな」

康と二人で話す機会はまだなかった。真紅が連れてきて、あの鬼ごっこがあつて、いろいろとごたついたせいもあっただろう。こうして二人で話してみると、何となく波長が合うような不思議な感覚にとらわれる。どうしてもっと早く、互いに話をしてみなかったのかと後悔するほどに。

肩をすくめる康は真紅たちを眺めながら、ゆっくりと口を開いた。

「俺たちはきつと、彼らのような役回りにはいないんだと思うよ」
「どういふことだ？」

悟りきつたような口調。何となく言いたいことがわかるのだが、空は持ち前の意地悪で康に先を促す。彼はもう一度肩をすくめると、優しく目を細めていた。

「真紅や天のような『主演』になるべき人間じゃないんだよ、俺たちは。彼らのような存在を陰ながら支える、それが俺や君に与えられた役目なんだと思うんだ」

真紅のような何かを始める原動力。天一のような全てを自分で片

付ける活動力。性質こそ違うものの、あの二人には自分だけでもやっていける何かがある。けれどそれは自分一人で何かができるわけではなく、誰かの助けがあつてこそ成立しうる才能。彼らを認め、共に歩んでいく存在がいなければただ空しいだけの力。

康はそれを理解していたから、天一と共に行動していたというのだろうか。いや、それだけであのじゃじゃ馬に付き合えるような心の広い人間が世界広といえど存在するとは思えない。

「で？ どうしてお前は、あいつを支えてられるんだ？」

思ったとおりの質問をぶつけると、康は恥ずかしそうに頭をかいで、笑みを見せた。

「やっぱりさ、親友だから。力になってやりたいと思つじゃない」

康の言葉は至極全うな、たったそれだけで説得力のあるものだった。けれどそれこそ、本来空も持っていた感情。親友だから、仲間だから。だから支える。根本にあつたはずのその感情を、空は忘れかけていたのかもしれない。

無力な自分に嫌気がさして、戦える力なんて求めて、馬鹿馬鹿しいことこの上ない。

もしかしたら康は、そんな空の心情を察してこうやって話しかける機会をうかがっていたのかもしれない。何となく、そんな気がした。

女性陣がソファーを取り、左方の椅子に天一、右方に康。ソファーの右後方、少し離れた場所にある椅子に空が座り、全員の正面に

真紅が立っていた。いろいろと説明すべきことがあるというが、京と恵理は楽しそうに話しているし、天一にいたっては完全に眠りかけている。まとも聞いているのは康と空、あと二人の会話に時折参加している愛美くらいだろうか。

「昨日の夜、烏丸 聡司というナイトメアと交戦した。俺と天、それに味方になったナイトメア、氷室 七夜と共にそれを撃退した」
「損害は？」

問いかける康に、真紅は一度目を伏せる。

「俺の刀と、七夜が軽い傷を負った。今彼がいないのは、大事をとって治療に行っているからだ」

「君や天が共同で戦っても損害が出るのか……相当厄介な相手だったみたいだね」

「ああ。それと重要なことが一つ。心して聞いてくれ」

珍しいと素直に思った。真紅が前置きを置くことなどほとんどない。それだけ重要なことなのか、それとも何か別の理由があるのか。どちらにせよ聞き逃すことはできないと、空は身を乗り出した。

「俺たちの敵、ナイトメアは……殺しても蘇生する」

「……は？」

「その場で蘇生するわけじゃない。やつらの研究所、死んだナイトメアはそっちで新たな命を得るらしい。七夜の話と、俺の体験から考えても間違いのない事実だ」

事実だといわれても、にわかには信じがたいものだ。死んだ人間が別の場所で生き返る。ゾンビでもあるまいし、容易に受け入れることはできない。

しかしそんな空を置き去りにして、康は何か納得したように頷いて真紅に問いかける。

「彼らに恐怖心がほとんどないのは、それが原因と考えてもいいのかな？」

「だろうな。死んでも生き返れるんだ、恐くもなくなるだろう。ただペナルティもあるらしい。死んだナイトメアの力は、死ぬ前より弱くなるらしい。どれほど弱くなるのかはわからないが、俺たちが苦戦したときほど強いことはないだろう」

いつまでも固まってはられない。無理やり自分を納得させて、空も問いを重ねる。

「それでも、その聡司ってやつが一番強いわけじゃないんだろ？それに、殺しても生き返るならどうやってやりあうんだよ？」

死んでも違う形で生き返るならゾンビよりも性質が悪い。ゾンビは頭をふっ飛ばせばいいが、ナイトメアは全身粉々にしたとしても復活する。ならばどうやって対応すればいいのか。

真紅は小さく頷いた。

「それを今、七夜や京の親父さんを混ぜて検討しているんだ。ナイトメアである七夜と研究施設に無条件で侵入できる人がいれば、少し時間がかかるかもしれないがいずれ対抗策がわかるだろう」

「それまで防戦一方……ってことか？」

「そうだ。この話は昨日、天と恵理、それに京にもしてある。しばらくはここを拠点にして、活動することになるだろう」

「活動って……どう、するの？」

それまで口を閉じていた愛美が、震える声を押し出すように口を開いた。

一瞬、震えは恐怖から来ているのだと思ってしまった。けれどその声に若干ながら、怒りの色を見たとき、その背後にいた空が恐怖に体を固まらせた。

「とりあえずは情報を集めること、かな」

「そんな大事なこと、あんたたちだけで決めたんだ」

正面にいる真紅も気づいたのか、息を呑むような仕草が空の目にもはつきりと映った。康はきつと、気づいていない。付き合いの長い二人だからこそ気づく微妙な変化。普段ならさっさと逃げ出すところだが、今回ばかりは勝手が違う。

「どうして、私たちに何か言わなかったの？」

「……これ以上巻き込みたくなかった」

「じゃあ、どうして今話したの？」

「それは……関わった以上、危険が及ぶかもしれない。だから一箇所に固まって、防戦に徹したほうがいいと思ったからだ」

「……っの！ あんたはどうして……いつもいつも！」

ソファから勢いよく立ち上がって愛美は語尾を荒げる。敵と対峙するときのように全身の産毛が逆立っていくのがわかる。その全てが真紅に向かっていているとわかっていながら、いや、わかっているからこそ止めなければならぬという感情が空にまで影響を与えていたのかもしれない。

真紅の胸倉を掴み上げ、愛美はその顔を睨みつける。

「私たちはあなたにとって足手まといかもしれない！ けどね、それでもあなたの力になってやりたいと思うんだよ！ あなたは優しさでそうしたのかもしれないけど、私たちには侮辱に等しいわ！」

「……すまない」

「謝るな！ 謝るくらいなら、最初から相談くらいしなさいよ！」

泣き出しそうな声に、天一以外の全員がその姿を見つめていた。

空は声をかけることすらできなかった。ただ黙って愛美の泣く後姿を眺めている以外、何一つできない。戦うことも、仲間を慰めることもできないなんて

なんて、俺は無力なんだ。

拳を握り締めて、空はゆっくりと全身の怒りを解き放つように息を吐くのだった。

〔五十九話〕 似た者同士の考え（後書き）

二話続けて空にスポットを当ててみました。思っていた以上にやりやすく、どうしてももっと早くやってみなかつたのかと後悔するばかりです。

ごめんなさい、嘘です。

さて今回の後書きですが……ぶっちゃけほとんど書くことないです。後書きのネタ切れです。ええ、そうですとも。

ではでは〜。

〔六十話〕 六花の刃（前書き）

どんな困難も一人で乗り切れる。
そんな人間いるはずがない。

だからこそ誰かのために、また自分のために剣を取る。
それがどんな形にせよ、剣を持たない人間などいないのだから。

〔六十話〕 六花の刃

愛美をなだめてくれたのはやはりというか、京と恵理の二人だった。女の考えは女にしかわからない、ということなのだろうかと溜め息をつき、真紅は残りをやってきた七夜に任せ、迎えの車に飛び乗った。

七夜と他のメンバーの顔合わせはやっておいて損はない。少しでも互いを理解しておけば、様々な場面の連携などをスムーズにできるだろう。

もつとも、互いの理解をしなければならぬのは真紅も同じだ。

巻き込みたくないと思っていたのは確かだが、愛美が言うように、心のどこかで彼らを戦力外と判断していた。ナイトメアとやりあう危険性を知っている二人なら理解してくれると高をくくっていた面もある。

「……らしくないわね。思いつめるなんて」

はつと顔を上げると、正面の席には白衣を羽織った女性、朝倉叶が意地の悪い笑みを浮かべて座っていた。今は学園で授業をしているはずなのだが、当然のように座るその姿は威風堂々。呆れるほど自信に満ち溢れていた。

「学園にいるはずじゃないのか、叶」

「今日は有休とったわよ。それより！ 七夜が味方についたってどういうこと？ 今日いきなり家に来たときはビックリしたわよ。寝込み襲われるかと思っただわ」

「……あいつに限ってありえない発想だろ」

「まあね。じゃなくて！ 何があったのよ？」

「暴走した聡司との戦闘に協力してもらった」

聡司の名が出た瞬間、叶の表情が引きつった。凍りついた、といったもいいたろう。

死んだ。彼女は聡司についてそういう認識を持っていたはずだ。裏切り者の聡司が殺されていないはずがないと、そういった先入観が存在していたのだろう。しかし彼らが死んでも蘇ることや、拷問に関してかなり高度な手段を持っていること。そういった諸々の事情を知っていれば、彼の生存を知ることができたかもしれない。

小刻みに震えだした叶から視線を逸らし、真紅は簡単な説明を始めた。

「お前が知らないナイトメアの秘密だ。男のナイトメアは、死んでも施設で蘇る。そのために死体は必要じゃないらしい」

「……何を言ってる」

「七夜の情報だ。俺もあいつを殺した記憶がある。正確には思い出したんだが、あいつは殺されたときの傷なんて残っていなかったし、死体も俺が焼き払ったはずだった」

今ならわかること、辻褄があうこともいくつかあった。

ナイトメアの感情が希薄な点、上級と下級の圧倒的な力の差。そして、どうして叶が失敗作だなどと言われていたのか。

「お前が失敗作と言われていたのは、再生能力が存在しなかったからだ。クローンとして……いや、人間としてはきつと、お前は今ま

でないほどの成功作なんだろう」

「人間と、して？」

「七夜のお墨付きだ」

叶の目から一筋、涙がこぼれた。どうしていいのかわからずにおろおろと目元を拭う姿は成人した女性にはとても見えなくて、真紅は思わず笑ってしまった。

不服だといわんばかりに頬を膨らませる姿は誰かに似ていて、また笑う。空の嗜虐心の源が何であるのか、初めて理解したかもしれない。なかつた。

ひとしきり笑ってから真紅は真剣な表情を作って叶を見る。伝っていた涙はいつの間になくなっていて、目も赤くはない。瞬間の姿を見ていなければ泣いていたとは思えない姿だが、少し慎重に、言葉を選びながら話を進めた。

「彼の顔を、見ておくか？」

「……いいわ。どこかで生きてるんでしょう？　ならどんな形であれ、出会う機会はあるでしょう」

そうか、と一言だけ呟いて真紅は思案する。

思っていた以上に心は強い。泣いた姿を見た後だからかそんな考えが脳裏に浮かんだ。

「それで？　今日はあの鍛冶屋に会いに行くんでしょう？　交通費節減させてもらうわね」

「はいはい」

移動の目的を知っているから乗り込んできたのかとようやくに理解する。それなら最初に言ってもらいたいものだが、いろいろと説明もできて結果的には何の問題もないのかもしれない。

目的地につくまでの時間を有意義に過ごそうとした真紅だったが、そうはいかないのが世間の現実だった。

ほぼノンストップの車内では、教師と生徒の関係がしつかりと成り立っていた。二人の話題、というか説教の内容はもちろん勉強について。レベル的にはほとんど追いついているはずの真紅だが、いろいろと目の前にいる女教師が原因の一端を担っているのだが理由があつて授業に出席できていなかった。そのため学年主任にこっぴどく怒られた叶が、その鬱憤を晴らすもとい生徒に対する指導として真紅に説教をくれていた。

「いくらなんでも転入してから授業に出席してる率が低すぎるわ。何よ二割って」

「いや、それはほとんどお前のせい……」
「担任に口答えしない！ あゝ、もう！ ただでさえあの中年肉だるまにねちねちねちね言われたんだから。少しくらい黙って聞いてなさい」

中年肉だるまとはよく言ったものだ。確かに学年主任の中年親父はかなり腹の肉が目立つ、一見すると本当にだるまのような男だ。あれで二人の子供がいるなど、正直世界は理不尽だと思う。

「こっちはさあ、みんなの存在が上層部にはれないよう手回しして、教師としての仕事もして、武器の調達やら何やらで走り回らなきゃならないのにさ！ 何なのよあのだるまは。ギャグなの？ 人を笑わせるために生まれてきたの、あのだるまは？」

「確かにあれば、見ているだけで笑えてくる容姿をしてるがな」
「でしょ？　ぐちぐち言われてるとき、笑い堪えるの大変だったわよ」

もう説教でもなんでもない。ただの愚痴と化した叶の言葉に相槌を打ったり、時折なだめたりしているといつの間にか車が止まっていて、目的地に続く小さな路地の前に到着していた。

黒塗りの車から降りて数分歩いていくと、壁の色に同化した扉にたどり着く。軽く押すと壁がへこむような感触と共に、地下へと続く階段が現れる。

蠟燭を灯した階段を下ると武器が陳列された棚が現れ、その向こう側に目的の人物が現れる。

「来たか」

暗がりの中に佇む白髪白髭の老人は、不思議とよく通る声で真紅を貫く。

「ええ。仕上がっていますか？」

「当然だ。まったく、老骨に鞭打たせおつて……ほら」

よく通るのだがどこか疲れた声と共に暗がりを何かか飛ぶ。感覚だけで右手を広げると、まるで最初からその場所に収まるつもりだったように、一振りの刀が訪れた。

黒い鞘に収められた刀は両腕を広げたより少し長いほどで、朱色の柄は真新しい柄紐で織り込まれ、小さな十字型の鍔は金属ではないような、何か少し柔らかい感触があった。

右手を柄にそえ、鞘を握った左手を少し引つ張る。現れた刀身に、真紅は数秒魅入られていた。

一見すると何の規則性もない、波のような波紋。しかし真紅には、なんとなくわかる気がした。この波紋が示す、意味を。

どれだけさまよっても、間違っても、決して揺らぐことのない根底。父の刀としてのこれにはそれがなかった。一切の迷いも、間違いもない刀身。それは信念を貫くための強固な力であると同時に、まったく異なつた方向からの力にはあつさりとは折られてしまう諸刃の剣。けれどこの刃には、不安定さはあれど危うさというものは感じることがなかった。

「それ以上にお前の刀と呼べるものはできないぞ」
「……だろうな。俺も、そう思う」

満足かと聞かれれば、もちろんと答えよう。今の自分にとってはむしろもつたいたない刀にも思える。軽さもちょうどいい、長さも申し分ない。柄を握った感覚は、長年連れ添った相棒のように心強いだろう。

鞘から全てを解き放つて、暗い室内にその刀身を掲げる。不思議な光を宿す刀身はどこか、天一の相棒である不知火に似ていた。

狭い室内では振ったりすることができないが、その扱いやすさは握っているだけでよくわかる。

「普通の刀ならば持ち主を選んだりはしない。だがこいつのような特殊な刀は、持ち主を選び、自らの眼鏡にかからなければ切り捨て

る。それをしかと理解しておけ」

彼の言葉には真紅も同意見ではあった。

不知火のように明確な異常を宿している刀にはそれが顕著に現れているが、名のある刀工が打った品物のほとんどは持ち主の力量しだいによって実力を出し切れないものもある。ただの鉄の塊だと思っただけはいつか泣きを見るものだ、かつて錬に言い聞かされた。

刀を鞘に納め、真紅は老人に一礼する。

「感謝する。よくこの短期間で、これほどのものを作ってくれた」

「もともとが儂の打った刀だ。もう一度打ち直すのはそれほど苦ではないわい。ただ、流石にもう歳だのう。老骨に響く。少しの間休みを取るから、貴様らはさっさと出て行け」

「あ、ならお金を……」

叶の言葉を老人は制止する。

「いらん。久々にいい物を作らせてもらった。銃のほうもそれで破算にさせてもらおう」

「え、しかしそれでは話が……」

「儂が言いついてるんだ。新月の持ち主にも『しっかりと使わぬと、喰われるぞ』と忠告しておけ」

そう言って正面に腰を下ろし、老人は二人にさっさと帰るよう促した。叶は仕方がなさそうに、真紅はもう一度一礼を残し薄暗い地下から地上へ続く階段を上っていく。

「……朝凧 真紅。君は、喰われるなよ」

最後の言葉は真紅の鼓膜を揺さぶるだけで、意味のあるものとして届いてはいなかった。

〔六十話〕 六花の刃（後書き）

まあた一週間放置してました。

いや、わざとじゃないんですよ？ 本当ですよ？

さて叶の驚愕なんて空気みたいに扱って、真紅が新しい刀”六花”を手に入れましたとさ。

読み方は”りっか”。何でこんな名前なのかはまた別のお話。

なんとなくでも意味があるんだと思っていただけると幸いです。

今回の後書きはこのへんで終わります。

では〜。

〔六十一話〕 平穩の中で（前書き）

少年の新しい日常。

それは緩やかに、穏やかに流れてゆく。

〔六十一話〕 平穩の中で

叶まで学園を休んでしまったわけだが、結果としてそれは成功したといっても良かった。

作戦参謀を康、叶、七夜の三人に強化したことで防衛策の問題点や、味方の戦力分析などが予想以上に強固なものに変わっている。

叶曰く『あの馬鹿いつの間にあんなこと言えるようになったのよ』とのことだが、七夜のことをどれだけ過小評価していたのか、もしくは戦闘以外何もできないと考えていたのか、ともかくいい方向に誤算があったため、真紅にはやることなくってしまったのだ。

余った時間を高嶺家が用意した一室で過ごそうと、指定された扉を開いて中に入る。大きなベッドと机だけが置かれた質素な部屋。趣味が多いわけではないので丁度いいのだが、少しだけ寂しいとは思う。

真紅は新しく手に入った刀を鞘から抜き放ち、その波のような刀身へと目を向けていた。

引き込まれるような魅力。どこか狂気を孕んでいる、美しい曲線。そもそもは刀なんてどれでも同じだと思っていた真紅だが、この刀だけはどこか違う印象を持っている。

俺専用の、刀。

その一言だけで胸が高ぶる。握り締めるだけで体が震える。何かの禁断症状でも出ているのかと考えたが別にそんなものは真紅にない。しいていうならばおそらく、失っていた家族を取り戻したような感覚に近いのだろう。

喜んでいいのか、俺は。

自分の感情を理解したとき、真紅の唇にはうっすらと笑みが浮かんでいた。

「真紅、ちよつといいかな？」

「……ん？」

扉からちよつと頭を出したのは、この家の家主である少女だった。少し遠慮がちなその声と表情からはどうにも育ちのよさが抜けない。いや、育ちがいいこと自体は別にかまわないことなのだが、その少々引つ込み思案な性格は少なからず直すべきだろうと真紅は考えている。

刀を納め、ゆっくりと京へと歩み寄る。

「どうしたんだ、京？ そんなおどおどしてないで、お前の家なんだからしゃきつとしろよ」

「は、はい……わかつては、いるんだけどね」

たはは、と小さな苦笑を浮かべながら京はそつと声をかけた。

「あの……さっきの、愛美ちゃんのことなんだけど……」

愛美がキレたことは京にとっては予想外のことだったらしい。彼女と付き合いが深くなればなるほど、あの怒りようは想像できなかったのだろう。だが真紅は彼女の行動を当然のように受け入れていた。

何一つ説明しなかったことには真紅なりの理由があった。

愛美や空を戦力がいいとして考えていたわけでは決していない。むしろあの二人にしかできないことを考えて、今回のことは説明しないようにと決めたのだ。当然そうすることで愛美と空の反感を買うことは承知していたし、ああやって行動に移されたことも想定していた。予想外だったのは、空が何一つ文句を言わなかったことだろうか。

あいつなら何か、阿呆みたいにテンションを上げてでも何かを言うだろうと思っていた。

「ん、大丈夫。お前が思ってるみたいに、気が悪い状況にはならないはずだよ」

「えっと……どうしてって、訊いてもいい？」

意識して笑顔を浮かべ、真紅はその小さな頭にそつと手を乗せる。

「あいつが、そんな些細なことを引きずるタイプじゃないからだ」「え？」

少し大きめの声を上げて真紅は京だけではなく、もう一人の、廊下の角から服の袖だけが見えている相手に聞こえるようにその言葉

を放った。びくんと反射的に反応した袖を見る限りではその人物は真紅が想像した相手で、言いたかったこともおそらく間接的に伝わっているのだろう。聞き耳を立てるといっつか、代わりに誰かを使うなんてらしくないとは思うのだが、そこはさっきのやり取りも考えれば仕方がないのかもしれない。

ともかく、真紅は小さく溜め息をついて京の頭に置いた手を優しく左右に動かした。

「ふ、ふあああ!？」

「ん? どした、変な声を出して?」

「や、だ……だって、だって!」

顔を真っ赤にして抵抗の意思を示す京に真紅はただ首をかしげるかまわず右手をわしゃわしゃと動かすと、京はなにやら気持ちのよさそうな、恍惚とした表情を浮かべて口をだらしなく開いていた。

なんだが、面白くなってきた。緩急をつけるように手を動かすときにはじれたそうに目を細めたり、時には嬉しそうに目を閉じたりして、目で反応を示してくれる。嗜虐心をくすぐるというのはおそらく彼女のような存在、反応を示しているのではないだろうか。

「何やってんのよ、この変態が!」

「へ? うっ……!」

行為に夢中になっていたからか、彼女の接近に気づけなかったのは真紅の落ち度だ。飛び込むように腹部を捉えた彼女の右足は真紅の呼吸を止めるには十分な威力を持っていて、数歩後退すると共に膝について空気を求める。目の前が霞むほどの、おそらくは放った本人すら理解できないであろう攻撃は聡司との戦いよりもよほど凶

悪だろう。

「な……何するんだよ、愛美」

「こっちの台詞よ！ 京ちゃんのかわいい頭に何てことしてくれてんのよあんたは！」

仁王立ちで京を守るように立ちふさがるその姿は一言で表すなら騎士。お姫様を守らんとする確固たる意思と、邪な心のまったくない澄んだ信念。彼女を表す言葉としてはこれ以上の言葉が存在するとは思えない。

しかし今は自分の安全のほうが大切だと、真紅はさらに数歩後退する。

「変なことはしていないだろうが」

「そんなわけないでしょ！ こんな……頬を上気させた美少女！

これ見たら明らかに、あんたが何かやったとしたか思えないでしょう！？」

「何もしてないって。そこで見てただろう、お前」

「なっ……！ あんた、知ってたの！？」

墓穴を掘ったと理解しても時既に遅し、眼前で両手の拳から音を鳴らしているその姿は男よりも漢らしくて、真紅はどうやって退路を確保しようかと気づかれないように後方へと視線を送った。

壁。壁しか、ない。

なぜにこんな、端っこに部屋を用意されていたのか。荘介の小さ

な悪戯心と真紅の運のなさがこんな状況を引き起こしているのではないかと考えて、せめて刀を手にしていれば逃げられたかななんて悠長なことを考え始めていた。

「しゅんくく！ 観念しなさい！」

「……逃げるが勝ち、だな！」

こんなところで臨戦態勢になるのは自分でもおかしいと思いながら、真紅は自分の脳みそに指示を送る。瞬間、京や愛美の動きが緩慢なものに変わっていき、世界から音が消えていく。彼女たちの横をゆっくりと潜り抜けると、すぐに緊張を解いて頭痛が生じる前に元に戻っていく。

「え？」

「な、何ですか？」

真紅がいきなり消えたことに驚いた二人の声。当然といえば当然の反応。けれどそれに何か言葉を残してやることもできずに、真紅は勢いよく駆け出していた。

「あ！ ちょっと待ちなさい！ 真紅！」

気づいた愛美が駆け出す気配と怒りのオーラを背中に浴びながらも真紅はいそいそと庭へと向かう。

まったく今日は厄日だな、と小さな小さな溜め息を残して。

もの凄い勢いで逃げていく真紅とそれを追いかける愛美の背中を半ば呆然と眺めていた京は、我に返って小さく笑みを漏らしていた。

学園と今の真紅たち、何が違うわけでもない。けれどどこか、立ち位置とでも言うのだろうか、そういったものの違いから京の目には今までとは違った存在に見えた。

今までは遠い存在で、憧れにも似た感情を抱いていた相手。その人たちがこうして自分の家で馬鹿みたいに騒いでいる。どう解釈するかは人それぞれだろうが、京にとっては嬉しいことである。

友達が家にいる。それだけでも彼女にとっては未知の体験なのだから。

開け放たれたままの真紅の部屋に目を向けると、そこには興味深いものが存在していた。好奇心から室内に入り、その漆黒に鞘に手を伸ばす。

重い。

女の細腕、しかも育ちが育ちだけに京の腕にはズシリと重たくて、いったい何なのかという好奇心が加速していく。

十字型の鏢をそつと撫でて、柄に手を伸ばす。手触りのいいそれを握り締めてから、京は数瞬の躊躇いの後、一思いに引き抜いた。

波のような美しい軌跡を描いて、うつすらと伸びていく線。刀身の美しさに目を奪われて、京はそれが刀であるということを理解で

きずにいた。

「……………綺麗」

思いがけず口をついた言葉は京の本音。その育ちと違い、芸術な
んてものは専門外の彼女だが美しいと思わせる。

「取り扱いには気をつけるべきじゃないかな」
「っ！ て……………天一さん!？」

扉に片手をかけて意地の悪い笑顔を浮かべた少年、朝倉 天一。
いきなり現れたその少年に、京はただ驚いて相手を確認することし
かできなかった。

「へえ……………それが真紅の新しい刀か。どれどれ……………」

ゆっくりと歩み寄った天一は京の手からそっと刀を奪い取り、そ
の刀身をしげしげと眺め回す。

彼のことはまだよくわからない。

真紅たちほど交流があるわけでもないし、元々人見知りである京
にとってはどうにも正面からぶつかりづらい相手である。彼のほう
は別にそうでもないらしく、他の全員と同じような態度で京に接し
てくれる。彼なりの気遣いで、京もそれに乗っかればいいものを、
どこか遠慮してしまう自分を京は心の中で叱っていた。

「……………参ったね、こりゃ」

「あの……………どう、したんですか？」

片手で額を引っかき、困惑したような表情を浮かべる天一。短い付き合いである京はもちろん見たことがない表情で、思わずそんな言葉をかける。

「いいや、ちょっと真紅に言わなきゃいけないことができたなあっと思っただけ」

「え？」

なんでもないと首を振って、天一は刀を納める。そのままひよいとベッドの上へそれを放り投げ、小さく欠伸をもらした。

「それより京ちゃん。人の部屋に勝手に入るのは、感心しないかなあ」

「え、えと……ごめんなさい……？」

「ははは！ 冗談だよ、冗談。ほら、行くうぜ。そろそろ真紅を助けてやらないと」

笑いながら歩いていく彼の背中を眺めながら京は一つだけ理解した。

この人、最初から見てたんだなあ、と。

〔六十一話〕 平穩の中で（後書き）

え〜〜……気づけば十二月ですね！

いや、放置してたわけじゃないんですよ？ 頑張ってたんですよ？
という言い訳はそろそろ厳しくなってきたんじゃないかと思う今日この頃。

やっとこさ更新にこぎつけたわけですが、まあ気づけば二週間近く。やあ……そろそろ皆のキャラクターを忘れてきた頃でした。ふう危ない危ない。

とりあえず真紅の新しい刀や新しい生活。そんなものを描ければと思い書いた回ですが、いかがでしたでしょうか。

まあ内容忘れ始めたのは私だけではないだろうと思います。そして今後とも、更新が遅れるだろうと思いますのでますます何もわからなくなるでしょう。

やばい、壊れ始めてる。

こんなそろそろ廃人になりかけている作者が描く物語ですが、どうか見捨てないでいただけると幸いです。

ルルルルル。

〔六十二話〕 覚醒の序曲（前書き）

新たな力。それは甘美な響きを宿し、持たざるものを誘惑する。

かつての力。それは誰もがいつかは体感するであろうもの。

〔六十二話〕 覚醒の序曲

刀というものは現代においては芸術品の色合いが強い。一部の人間以外は扱うことを許されておらず、美術館や展示会などに行かなくては一生見る機会がない人もいるだろう。それは槍や銃などについても同じである。

だから今の高嶺家は、一種の展示会とほぼ同じような状況なのではないだろうか。

客間に集められたこの屋敷に存在する全ての武器。それを目の当たりにして、真紅と天一はただ溜め息をつくことしかできなかった。

真紅の六花、天一の不知火を筆頭に、テーブルの上には槍が二本と銃が三丁、ナイフが十数本に刀が一本と、どう考えても一般の家庭に存在する物量ではないだろう。

その中でも特に存在感を示しているのは、やはりこの二振りの刃だった。

「六花と不知火……確かにお前の言う通りかもしれないな」

小さく呟いて真紅は自らの新しい刀、六花を手を取った。十字型の鍔を持つその刀は奇妙なくらい手に馴染んでいて、新しい相棒というよりは長年連れ添った夫婦のような印象が強い。

しかしそれは、本来の刀という定義には当てはまらないものではないだろうか。

「不知火は本来、この世界に存在する刀じゃないんだ」

天一の言葉に真紅はただ納得する。刀自体が意思を持っているような感覚は実際に握って戦った身としては言われずともわかる違和感であり、同時にそんな説明がジグソーパズルの最期のピースであるような、しっくりと来る感覚があった。

そしてこの六花は不知火と同じような感触、つまりは不思議な違和感を植えつけていた。

「こいつを打った刀工、本当に人間かよ？ 明らかに人間業じゃない、っていうよりもこんなことができる人間がいるなら、ものすげえ筋肉してると思うぞ」

「どういうことだ？」

「刃金と庵の圧縮。って言ってもわからないだろうから、刀の峰と刃の部分、って言うのかな。ともかくそこらへんの圧縮率が異常な密度なんだよ。お前の話だと頼んで数日の代物なんだろう？ そんな数日でここまで硬い刃を作れる、そんな人間いねえよ。うちの師匠でも、おそらくこんなもの作れない。それにな、何よりなんだよこの感覚。お前は手に馴染むような感覚らしいけど、俺には……なんか、手が焼けるような感じがしたぞ」

あの老人が普通の刀工でないことは真紅も理解していた。しかしまさか天一が驚愕するほどの人物だったとは夢にも思わなかったし、今でもそんなたいそうな人物だとは思えない。

少し寡黙な印象があるが彼はただの人。少なくとも真紅はそう思っていた。

だが実際にこうして他の武器と並べてみると、その違いが色

濃く現れる。存在感の違い、鞘から抜き放たれた際の圧迫感、造形の美しさ。どれもが段違いで、不知火にも引けをとらぬほどの存在。

「それで、お前はこれが危険な刀だと言うのか？」

「そこまでは言っていないさ。ただ何か……それが本当にそいつの姿なのかと、疑問に思っただけのことだ」

「？ どういうことだよ？」

頭を搔いて、天一は一つ息を吐く。

「……言っとく。お前はおそらく、俺たちの同類だ。うちの師匠が言う”魔力”とやらを体内に持つてるし、お前の場合はそれを内部で使うことができている。だからこそこの刀はお前のそれに反応して、お前を主だと認めたんだろう。こいつは俗に言う妖刀って部類に入ると思う」

「同類って……それじゃ俺も、お前や康みたいなのができるって言うのか？」

「いや、お前のそれは体内で使うことに長けているらしい。お前の反射神経や運動神経が上がるのは、そういった力を消費しているからだ。だから回復せずにぶっ続けで使うと頭痛がしたり記憶が飛んだりする。ってこんな話、前にもしなかつたっけ？」

首をかしげながらああでもないこうでもないと思案する天一。傍から見ている分には滑稽でしかないその姿を視界に入れつつ、しかし真紅は自らの刃に意識を注いでいた。

妖刀。言われてもさほど実感はない。確かに他の刀よりはしつくり来るし、この刀を生涯の相棒とする覚悟もすぐに固まった。

「妖刀……ねえ」

妖刀といえば禍々しい印象がある。使用者に何らかの悪影響を持っているというのも俗世の通説ではないだろうか。しかしこの刀からはその真逆で、澄んだ何かを感じさせるものだった。

「……つと、話がかかなり反れたな。本題に戻そう」

深い思案から舞い戻った天一はテーブルの上に鎮座するもう一本の刀を手取る。

薄紫色の柄で二人の刀より少しだけ短いそれは、初めて見るもの。

「これが”建御雷”。ほとんど使ってるどころ見たことないけど、康の刀だよ」

「……え？ あいつ、刀なんて使うんだ」

康はあの強力な能力だけで、直接戦うことなどないだろうと考えていた。

空間掌握能力。ほぼ無敵だろうと思っていた能力は、しかし天一曰くそれほど万能ではないらしい。

「アレはそれほど万能でもないさ。副作用もあるし、何より近接戦闘に弱すぎる。それを補うためにこいつが必要ってわけだ」

銀色の鍔をそつと撫で、鞘を握って真紅に渡す。

「抜いてみ。たぶん結果は、俺と同じだから」

どういう意味なのかわからぬまま、真紅はその紫色の柄に手を伸

ばす。滑らかな柄をそつと掴むと、一息に引き抜

こうとして、思った以上の抵抗にあった。

「……抜けない？」

どれだけ力を込めようと、鏢より先はピクリとも動かない。天一も同じ結果だとすると、力が足りないというわけではないのだろう。

「そう。康の野郎、こいつに封印でもかけてるらしくてな、あいつ以外は誰一人抜くことができないんだ」

「そんなこともできるんだな」

「そういうこと。いい機会だ、俺らの力について、深く説明しよう」

自分の刀を手にとって、天一は柔らかいソファアへ身を落とす。テーブルを挟んだ反対側のソファアに真紅が座ると、彼は不知火を抜いて切っ先を真紅の頬に添えた。

「師匠に聞いた話によると、この世界で成り立っている”力”ってのは何らかの自然属性に属しているらしい。俺の光もそうだし、恵理の風もそうだ。でもお前のそれや康の空間掌握みたいな、自然とは少し離れたものも存在する。それでわかったことなんだが、力の使い方によっては様々な現象を引き起こすことも可能だ」

「現象、というと？」

「まず康がこの刀に施した封印。これは鏢と鞘の結合部分の空間を自分以外の人間が使おうとした際、圧縮することで封じ込めている。こいつみたいな半永久的な能力は、施す際に若干の魔力を消費する

だけですむ。今、康は魔力を消費してないからな。んで、俺の不知火もそうだ。こいつはそもそもが実体のない刀だから、俺の属性に呼応させて半ば強制的にこちらへ引っ張ってきている。俺の力が消失してもこいつを呼べるのは、康の封印と同じ原理ってわけだ」

力が必要ないのなら天一が不知火を使えることにも一応は説明がつく。しかし問題なのはなぜここでそんな話をしているのかと、それがどう六花と関わってくるのかという点だった。

真紅の疑問を汲み取ったのか、天一は大仰に両腕を広げ、溜め息をついてみせる。

「つまり、その刀も同じようなものだったこと。俺らのような力をぶつけることで、何らかの反応を見せてくれるんじゃないかと思っ
てさ。そういう不思議な刀には、大抵特異なものがついてるもんさ」
「……よくわからないな」

「わからないならわからないなりに、そいつと正面から向かい合うべきだったこと。ま、俺は詳しいことなんてこれっぽっちもわからないし興味もないんでな、頑張つて向き合ってくれよ」

不知火を鞘に納め、天一は大きく伸びをした。

これ以上ヒントはくれない、ということだろう。天一なりのアドバースに感謝しつつ、はて自分たちはなぜ武器をここに集めたのか
と思いつ出した。

「あ、おい、天！ やることやってない」
「……あ」

退室しようとしていた天一が踵を返して駆け戻ってくる。そのま

まさつきまで座っていた場所に座りなおすと、今度は七夜の槍を手
に取った。

全員の武器の点検と、武器から見て取れるここの戦力分析。

康に頼まれたこの役割は、どうやらようやく始動したようだった。

莊介の執務室。莊嚴な印象をもつその部屋には大きな執務机と小
さなテーブル。テーブルを挟むように二つのソファアが設置されて
おり、ソファアの後方にはそれぞれ書物が詰まった棚が鎮座してい
る。

ソファアに座っている白衣姿の叶と黒いスーツを着た七夜。並外
れた精神力ではその正面にいられないはずだが、康は涼しい顔をし
て様々な事象が描かれた書類に目を通していった。

今、可及的速やかにすべきことが二つある。一つはナイトメアの
襲撃に対する防衛策を考案すること。要人をこの屋敷に終結させる
ことができれば最善なのだが、対象は空や愛美の血縁者、ひいては
使用人にまで及んでいるのではないかと康は睨んでいる。そのため
そういつた打開策はほとんど無謀と言ってもいい。最善の案として
は敵の目をこの屋敷だけに集中させるか、徹頭徹尾こちらの動向を
隠し通すかの二択。もっとも先日の方聡司戦を終えた今となつては、
こちらの現在位置は知られていると考えていい。

そちらの問題は叶や七夜の意見も取り入れて対策を考えているが、

本当にまずいのはもう一つの問題のほうだった。

それは、天一に自らの力を理解させること。

朝倉 天一という男を康はこの世で一番理解していると自負している。光という漠然とした力を有し、驚異的な戦闘力で敵をなぎ倒す。あの快活な性格からは想像できない知略と戦術は康のそれなんて霞んでしまうほどの力を持っている。しかし最も危惧すべき力は、彼の本質にあるのだ。

あいつは、自分と不知火の本当の姿を理解していない。

一度だけ、本気の天一と戦う機会があった。彼の師匠が用意した舞台で、お互い本気を出しても死なないよ、という言葉を鵜呑みにしたからこそ実現したもの。天一はその場で、不知火の二刀流という荒業を見せ付けた。

あの時の感覚を康は今でも忘れない。いや、忘れられない。肌があわ立つどころか、光に焦がされているような感覚。存在するだけで敵を焼き殺そうとするあの刀に康は初めて脅威を抱いた。同時にその力を制御し続ける精神力に感嘆したものである。

戦いの結果は康の惨敗。康の魔力が尽きたことで、天一が剣を退いたのだ。それでもよく戦ったほうだとは思う。空間隔離を何度となく破られ、何度彼の間合いに入ってもかすり傷一つ負わなかった。そのときの教訓を生かし『建御雷』という仰々しい刀を手に入れて、修練を欠かしたことはない。

全ては、本気の天一と互角に戦うために。

一種の目標と化した彼だが、今は見る影もない。

聡司というナイトメアがどれだけの力を持っていたとしても、天一の力があれば遅れをとることはないはずだ。そのはずなのに、三人で戦っても苦戦したなどという話は

「……本当に、情けないな」

「どうかした、康くん？」

叶の怪訝な表情になんでもないと首を振って見せ、康は資料に目を落とすフリをする。

どうにかして彼の力、その片鱗だけでも取り戻させなければ、彼は戦いの中で命を落とすだろう。これは勘ではなく、確定事項。いくら不知火という刀を持っているとしても、あの程度の剣術では先が知れる。無論康よりは強いが、空間掌握の力を使った康と比べることはできないだろう。

さて最善の策、といわれるとこちらの問題にはどう手をつけたらいいかすらわかっていない。他の二人に相談できるようなものでもなければ、天一自身も頭を悩ませる問題のはず。あの男が思案して、それでも解決できないような問題で、康に打開策がひねり出せるはずもない。

「すみません、少し席を外します」

二人の承諾を得るよりも早く、康は執務室から飛び出した。

足早に庭へと出ると、誰もいないはずの上空に声を張り上げる。

「いい加減出てきてください。見ているんでしょう？」

自分の師匠でもないのにそこにいることを承知している。そんな自分がどうにも悲しい。そしておそらく康の想像通り、そこに彼はいるのだろう。

背後を取られた。

そう自覚したのは、完全に背後を取られ、首筋に切っ先を向けられてからだだった。

殺気がまるで感じられないのもその要因だっただろうが、空気の動き、空間の変化、どれをとっても彼の動きを察知することができなかった。

格が、違いすぎる。

「僕の存在を察知したまではいいが、こうまで簡単に背後を取られては情けないのお。若元の」

「……あなたほどの達人でなければ、こんな簡単にやられませんよ」

首筋に当てられていた切っ先が引かれ、康の全身から緊張の糸が

ほどけていく。芝の地面に両膝をついてから気づいたが、全身から汗が噴き出している。体は素直だなんて馬鹿な考えを拭い去って、首をひねって背後の老人を仰ぎ見る。

鼻先に触れるほど長い銀髪。天一すら名を知らぬその老人は、真面目な話でもおかしな方向へ進めてしまうという類稀な、かつまったくいらぬスキルを持っている。しかし今回は沈黙させなければならぬ理由がある。

「教えていただけませんか？ どうすれば天の力を、取り戻すことができるんです？」

「お前自身のことでもないのに、よくもまあそんなことで僕を呼び出す」

「あなただって、あいつが心配だからここにいたんじゃないですか？」

彼がここにいるという確証はなかった。もちろん空間掌握の力を使えばいるのかどうかくらいはわかるだろう。いや、彼の場合はわからないかもしれないが、ともかく今回は彼の考えを聞くことが目的で、それ以外は全て些細なことだった。

「教えてください。何か、策はないんですか？」

「……あいつの力は、別にあいつから失われたわけではない。栓をさされているだけだ」

小さな溜め息と共に、彼はぼつりと呟いた。

「栓をされた水道をもう一度使えるようにするには、どうすればいいかな？」

「そんなもの、栓を抜いてやればいいたろう？」

「そうだ。しかし思いのほか栓は堅い。どれだけ腕力に訴えようと、道具を使おうとビクともしない。さて、そんな時、君はどうやって栓を緩める？」

「どうやって、って……いつから謎かけが趣味になったんです？」
「いいから。ほら、君ならどうする？ あのア呆が認めた君なら、この問いに答えを出せるはずだが」

そうは言われても力でも道具でもどうしようもないほどの栓を、緩めることなど容易ではない。ビクともしないとまで言われては、どうやっても無理だと考えるほかないのだろう。

なら、どうするか。

こんなとき、天一ならどんな答えを出すのだろうか。それ以前に『余計なことすんなよ』とか笑いながら、康の後頭部に容赦ないツッコミを入れるのだろう。そんな姿が容易に想像できて、今もその心配があるのだと気づき背筋が凍る。

あいつが、じゃなくて康自身がどう応えるのか。それが今、必要なことなのかもしれない。

「……栓は、どうやっても動かないんですね？」
「ああ。そうだ」

簡単なことじゃないか。単純に考えればわかるはずだったのに、変に気を回しすぎている。

「簡単だ。水道のほうを、蛇口を変形させればいい」

「それでは、蛇口が元に戻らないかもしれないぞ？」

「かまわない。その変化が蛇口にいい影響を与えるかもしれないし、悪い影響を与えるかもしれない。その先は、蛇口自身が決めることだ」

「……はは、ははははは！ おとなしいかと思えば、存外に言うなあ」

大声で笑い出した彼の銀髪が、康の視界を一瞬だけ隠してしまう。視界が開けた瞬間には彼の姿はそこになく、屋敷の屋根に座ったその姿だけが、少し小さく確認できた。

「やりたいようにやるといい。儂が許可しよう」

「ありがとうございます」

「なんのなんの、これも可愛い弟子のためだよ」

それが弟子の望むことか、それとも弟子を谷底どころか地獄に突き落とすものなのかは、おそらく彼の念頭にはないだろう。それは康にとっても同じこと。

やつを信頼しているからこそ、荒療治だってやってやれる。

そんな言葉を自らの中に反芻させ、詳細を決めるべく、康は屋敷へと戻っていくのだった。

〔六十二話〕 覚醒の序曲（後書き）

はい、というわけで今回は珍しく量が多い、というか地の文が無駄に多い気がするのは広瀬だけでしょうか？

今回は真紅の力について自覚を促し、天の力を取り戻させる計画の布石、ということになるのでしょうか。や、書いてる作者がわからないのじゃあどうしようもないだろう。

とにかく次話はまた少し、ファンタジーの世界に片足を突っ込むことになるかもしれません。

文章力のない、さらには最近更新も遅れがちな作者ではありませんが、できれば暖かい目で見守っていただけると幸いです。

ああ、眠い。（本音）

っと、失礼。

ではでは〜。

〔六十三話〕 力の矛先、光と空間と（前書き）

光。それは全てを包み込み、全てを呑み込む不可避の存在。

空間。それは全てが存在し、変動していく存在。

〔六十三話〕 力の矛先、光と空間と

むせ返るような汗の臭い。呼吸が荒い。全身の毛穴からあふれ出した汗は生温い風に撫でられて気持ちが悪い。目の前の光景が霞んでいくような違和感に苛まれながら、それでも二本の剣を杖代わりにして立っている。

いくらなんでも、これはきつい。鈍っていたとか体力不足だとか罵られようと知ったことじゃない。

頼むから、水をくれ。

「どうしたのかな、天。もうばてたとか、言わないよね？」

恐ろしいまでに冷たい声と共に背筋を何かが駆け巡る。同時に残された体力を総動員して横に転がると、空間が捻じ曲げられるような違和感とそれが現実になっていく感覚。周囲の空気が希薄となり、まるで小規模のブラックホールでも生じたかのような風圧が頬を撫でる。

既に全く水分の残っていない喉から無理矢理唾を呑み込んで、二本の不知火を前方で交差させる。

「……いい加減、その反則技を使うんじゃないよ」

「嫌なら俺の魔力切れを待つか、強引にでも封じ込めてみせなよ」

手前の空間が歪む。気づいた瞬間、それを強引に切り裂いて、その衝撃を利用して上空へと跳ぶ。

「 単調」

背後で聞こえた聞き慣れたはずの声。無理なのは承知で、上半身をひねり刀で防御の体制を整えようとする。しかしそれすら見越していたのか、さらに逆、本来正面だったはずの方向に紫色の刀を持った少年が構えていた。

「……っ！」

「そんなんじゃ、死ぬよ、朝倉 天一」

紫の光が視界いっぱい広がっていく。防御なんて生易しいものじゃどうしようもないほどの圧力。獣のような咆哮を上げて、天一はただがむしゃらに刀を振るうのだった。

初めて康と手合わせしたのは、彼が力に目覚めた直後のことだった。

まだ幼くて、互いのそれが輝かしいものに見えていた頃のこと。康の空間を掌握する力は、当時の天一にとっては驚異的なものだった。

思えばあの時から、天一は康に恐怖を抱いていたのかもしれない。

万能ではないまでも、敵なしと言っても過言ではない代物。それをしっかりと制御できる彼の實力には、仲間になった今でも一目置いている。だがそれはやはり力に対する恐怖の裏返しであり、力のない天一ではどうにもできないもので

恐怖が、何だったの！

そんなもの今まで幾度となくかいくぐってきている。恐怖から目を背けるんじゃない、恐怖に立ち向かうための心を手に入れたはずなのだ。

仲間の刃を退けることすらできなくて、どの面下げて他人を守ると言えるのか。

「死ぬわけには、いかねえんだよ！」

光の中心に右の刃を突き入れる。光に混じった微かな手ごたえ。それが何であるかを理解するよりも速く、反動を利用して体を回し、左の刃で切りつける。

手ごたえは、なかった。

紫の光が収束していく。それが完全に消えたというのに、目の前には康の姿はなかった。

初撃の手ごたえは間違いなくあったのだ。目の前にその姿がないことは、天一にとっては予想外の事態である。周囲の岩陰にも姿はなく、どこかに隠れているような気配も全くといっていいほどない。

額から垂れてきた汗を拭い、右手の刀を地面に突き刺す。柄尻に右手をかざして、天一はゆっくりと目を閉じた。

刀の意思。そんなものが存在するとは思っていなかった。だがこの刀、不知火を手に入れてからは、時々思い出したようにやっつける不思議な感覚を信じるようになっていく。

力を借りるよ、相棒。

右腕の産毛が逆立つ。同時に腕全体を取り巻くような風が起こり、手首にブレスレットのようなものが出現する。銀でできたブレスレットは手首にしっかりと食いついて、接合部分も存在しない。最初からそこに存在していたような感覚は、天一の全身に活力を流し込む。

真紅ほどの超感覚は持ち合わせていないのだが、不知火から借りたその力は天一の感覚を加速させる。

それでも、康の気配はまるでない。

「反則……二本目かよ！」

不知火を足場に、勢いよく真上へと跳躍する。それまで天一がいた場所に突然刃が突き立てられ、地上に残っていた刀にぶつかっていく。刃だけが出現した異様な光景は、小さな舌打ちをもらすには十分な状況である。

自らを別空間に隔離して、感覚だけで外の敵を討つ。今までは未完成だったはずの、康の反則技。こちらの攻撃はまるで通用しないくせに、あちらの攻撃はほとんど予測不能。攻撃が来る数瞬前に小さな前兆が起こる程度で、今のも回避できたのは奇跡に近い。不知火の力を借りていなければ避けられた可能性はさらに下がっていただろう。

この技は未完成だったはずだ。自らを隔離しても外がどうなっているのか認識するすべがなく、仕方なく覗き穴のような空間を作る
と位置を特定されてしまう。結果として攻撃は術者の感覚だけで行
われ、隔離空間の移動も予兆なしではできないはずだった。しかし
今の攻撃は天一のほぼ真後ろから、移動した形跡はまるでなかった。
気づかぬうちに完成させていたということだ。

空間掌握なんていう未知の能力を使いこなすのは並大抵の努力では
できることではない。いったいどんな能力なのか、どんなことができる
のか、どこが自らの限界なのか。様々な試行錯誤を繰り返して成り立
っているのが、若元 康という男の能力である。

彼の反則技。これが二本目だと言ったが、一本目は既に発動している。
いる。

彼らがいるこの空間こそが、若元 康の初めて開発したオリジナ
ルの能力だった。

空間派生。 現実に存在する空間をそのまま複製して別次元に召還
することや、存在しない空間を創り上げることができる力。神にも
匹敵する、なんて緩い言葉がしつくり来るこの能力は、今まで自分
たちの鍛錬や強敵を別空間に連れてくるために使役されていたもの
だった。比較的康への負荷も小さいため多用しても問題ない。この
空間で戦うのを天一に任せれば、使役に専念もできる優れものであ
る。

この空間の最も特徴的な力は、康の決めたルールが影響力を持つ
ているというものである。体内の魔力、その使役率を低下させるこ
とや、腕力を低下させること。ともかく康が定めたルールが一つだ

け、多大な影響力を持つことができる空間。だからこそこの空間は反則であり、対策法がないため敵に回すと本当に厄介な能力だった。

首筋がざわめく。眼下の刃が消えたと同時に背後に出現した刃は、いうまでもなく康のもの。着地までの時間を待たずしてけりをつけるつもりなのだろうと、妙な落ち着きに包まれながらも天一は小さく、気づかれないように笑みを漏らしていた。

素早い突きが天一の背中を狙う。振り返ってそれを素手で掴むと、天一は思い切りそれを引き寄せる。

「 なっ!?! どうやって正面に……!! 」

鏡が割れたような音と共に康の体が宙に現れる。その顔には驚きの色が浮き上がり、天一の背中を凝視しているのがよくわかった。

「 新技開発してたのは、お前だけじゃないんだよ、康。もっとも、今使ってるのは俺の力じゃないんだけどな 」

背中を包む柔らかく暖かい光。力が足りなくて薄い光しか放っていないが、そこには純白の羽が出現するはずだった。こういった実戦で使ったことはまだなかったが、今回の実戦で完成形は見えてきた。その点に関しては康に感謝しなければならぬだろう。

「 光の、翼…… 完成させてたわけ? 」

「 お互い隠し玉はあったってことだよな。でも、まだこれだけじゃないんだぜ? 」

握った刃を少し強く握る。手のひらの肉が切れる嫌な感覚と共に鮮血が刃を伝ってゆき、ゆっくりと鏢の部分へと到達する。

「……閃血せんけつ」

光が真つ赤な河から解き放たれ、閃光。相手の目を潰す目的と同時に、魔力を奪う力を持っているその光は、康には秘密にしていた荒業。見せる前に自らの力を失ってしまったわけだが、こういう状況ならいい方向に向いてくれる。

「ぐ……ああああ！」

似合わない絶叫を放ちながら、地面に向けて落下していく康。残された刀を握り、その体目がけて投げつける。急降下する刀を空中で捕まえると、同時に康は別空間へと姿を隠すのだった。

天一だけではなく、康にとっても武器、建御雷は重要な役割を担っている。自らの力を溜めておく電池のような役割や、音楽で言うアンプのように増幅器の役割。天一の場合は前者であり、康の場合は後者である。康が建御雷を使うようになった最大の理由はこれであり、もしあの刀がなかったとするならば、空間を作り出し、その中で行動するということが自体が成り立たなくなっていただろう。

敵に塩を送る、という行為は情けをかけるわけではなく、単純にフェアな戦いをするためにあるのではないだろうか。

着地した天一は瞬時に光を収束させ、刀の切っ先に力を集中させていく。

「封じ込めてみるよって言ったよな？　なら望みどおり、やってやるうじゃないか」

切っ先に溜め込んだ力を刃の全体に満遍なく流し込んで、精神を集中させたまま鞘に納める。右足を踏み出してから、少しだけ体勢を落として息を吐いた。

康の力は自らの気配を含め、存在全てを認識させないようになっていた。しかしその効果は実験段階で、たとえ完成したといっても粗が残っているのは変わらない。最初の一撃を回避できたのはその感覚を野生の勘とやらが察知したからだろう。それなら精神を集中することで、その感覚を完全に読み取ることができるかもしれない。

前方、二時。

感じると同時に柄を握る手に力を込める。下半身の踏ん張りにも意識を注ぎ、鞘から自らの狂気を解き放った。

死神の鎌と呼べるほど驚異的な殺傷能力を持つ、巨大な刃。十メートルを優に超える光の刃は、感覚が捉えた康の位置を的確に両断し、微かな手ごたえと共に空間へと輝を入れる。

さつきと同じようなガラスの割れる音と共に、康の姿が空間へと現れる。

「力が使える状態で、俺に勝てると思ってるのか？」

この空間において、康が指定したルール。それは康にとってはもちろんプラスの効果を持ち、同時に今の天一にとってもプラスとなるもの。

『力の消費量を極端に下げる』

力が使えなくなる、という意味のものではなく、能力の発動時に使用する力の量を軽減するという特別なルール。康がこの空間を作る際、最も多く使用する効果であり、現在の天一にはこれ以上内追い風となっていた。

頭のいい康が何も考えずに天一に有利な効果を指定するはずがない。何かしらの罠が存在するのかと警戒したものだが、今回はそんなこともなかったようだ。

建御雷の刃が鈍く軋み、康の表情が苦痛に歪む。光は直接相手の肉体を傷つけるわけではなく、その魔力、精神力を傷つける。天一が味方に躊躇いなく力を放てるのは、そういった特別な理由が存在しているからだった。

「……流石に、きついとは思ってるよ。でも、こうでもしなきゃ君は、蛇口は変容しないから」

「なんだそりゃ」

「わからなくていいさ。でもね、君はきつと、引きずり出したことを後悔すると思うよ」

建御雷の切っ先に康は優しく手をかざす。二人を包む大気が風を作りながらそこへと収束していく気配。同時に切っ先に紫色の光が集結していく。

その光景は、先ほどの天一と変わらないだろう。

「……何だよ、それ」

康の能力は空間に干渉する類の能力だ。天一のように刃を形成する力を持つていなければ、恵理のように自らの全身を凶器にすることもできない。その力で天一と同じことをしようとしても、できるはずがない。少なくとも師匠からはそう聞かされていた。

自分の能力に属さない力は、使役に異常なまでの魔力を消費すると共に、制御に多大な精神力を消費する。できない、ということは厳密に言えないのだが、使おうとするのは無限に等しい能力を持っているものだけだろう。

天一の表情を見て、康はその小さな顔に華やかな笑みを浮かべた。

「空間に干渉する。この能力は、こんなことだってできるんだよ」

切っ先に集結した光が破裂する。片手をかざして光を防ぐものの、その光は目蓋を浸透し、天一の脳内を浸食する。

目の前が暗くなったと思い目を開けると、そこには異様な光景が待っていた。

「……勘弁、しろよな」

溜め息すら、この状況ではつけそうにない。せめてもの抗議としてそんな言葉を放つ以外、放つ言葉を持ち合わせていなかった。

茶色の岩山に突き刺さる無数の刃。刀、槍、剣に飛び道具。ありとあらゆる刃を持つ武器が出現したその空間において、変わらないのは康のみ。康の手から建御雷は消えうせ、はるか頭上に出現する紫のオーラはおそらく建御雷が放つもの。

地獄にある、剣の山。それが天一の抱いた第一印象だった。

「これはね、本当は一番初めに思いついた能力なんだ。何も無い空間に思い描いた武器を出現させる。その動きもまた、術者の思いのままさ」

岩山に突き刺さっていた刃たちがゆったりと宙に浮き上がる。康の手が頭上に向けられ、同時に全ての刃が上空へと飛翔していく。

「避けてみてよ、天。光の翼でもなんでも、使えばいいさ。避けられるのならね」

冷たい言葉のはずなのにどこか温かい声音は、天一の脳内を何度となく木霊するのだった。

〔六十三話〕 力の矛先、光と空間と（後書き）

はい、いきなりこんな状況で驚いた方も多いことでしょう。ええ、一日あけてすぐに投稿するなんて、珍しいこともあったものです。

あ、違った？

お話のほうもいきなり天一对康なんていうのが始まっていて驚いたことでしょう。や、広瀬自身も結構驚いているんです。

光と空間掌握なんていう変則的な戦いで、天のほうは力が使えないなんて不公平な状況。こりゃあ天にもいい状況と思ったのですが、なにやら雲行きは怪しいです。

果たして、天一は勝利することができるのか！？

んで、頑張れ名脇役！！！！

や、マジで眠いっす（すっごく真面目な表情で）

ルルルルル。

〔六十四話〕 変わる力、変わる心（前書き）

守るための力を求めて、二人はただ力を求める。
互いに向かう先が違ってても、守りたい心は変わらない。

「六十四話」 変わる力、変わる心

今までは精神力だけで支えていた肉体。その限界を超越してでも引き出すことをいとわなかった超反射は、使い続けられれば自らの肉体をゆっくりと侵食し、最終的には肉体の寿命を極端なまで縮めてしまふという。

昔の真紅にとってはそんなことはどうでもよくて、ただ敵と戦うことができるならそれでいいとさえ思っていた。しかし今は、京や仲間たちに心配をかけるわけにはいなくなっていた。

誰かの考えを気にして生きるなど、今までの真紅には信じられないこと。それでも彼は、自らの変化をいい方向に受け入れていた。

誰かのために戦うことを、真紅はいつも目指していた。それがいったいどういう意味を持っていたのか、今でも正確なところはわからない。でも目指しているものに少しでも近づけているのなら、それは素晴らしいことではないだろうか。

目的のためにも、自らの力を正確に理解しなければならぬ。だからこそ彼女の、恵理の申し出を受け入れることに決めたのだった。

「えつと……最初に言っておくけど、私自身もあなたの力を正確に理解しているわけじゃない。だから私のやり方が本当に正しいのか、本当に効果があるのかはわからない。それでもいいなら……」
「かまわない。それを承知でここにいる」

やれやれと肩を落として、恵理はその長い黒髪に手ぐしを入れる。さらさらと風になびくように落ちゆくそれは目を奪われるには十分

なものだったが、生憎と山奥育ちが長かったため通常の美的感性は欠損しているようだ。

彼女の手にはめられた黒いグローブ。両手を前に突き出した彼女は、そのまま目を閉じて、聞き取れる限界の小ささで言葉を紡いでいく。

「私の力は風。空気の流動が引き起こす現象であり、万物の中で最も実態をつかめない存在の一つ」

彼女の両手に風が集まっていく。鬼ごっこの際も間近で見たものの、こうして実演されるとやはり違う。風の動きを全て制御下において、収束させることも、拡散させることもできる。それがどれほど現実離れたものであり、本来は信じられるものではないことを真紅はやはり理解しきれてはいなかった。

単純に、凄いと思ってしまふ。反射神経が鋭いだけだと思っていた真紅も同じことができるなどと言われても、一体どうすればいいのか皆目見当がつかなかった。

「天に聞いたんでしょ？ 個人の素質がその能力に大きな影響を与えるの。自分が適しているもの以外はそう簡単に使えない。だから自分流に何ができるのか、そういうのを考えていかなきゃならないんだ。でも、今はそんなことじゃなくて、天が言っていたことを実践しなくちゃね」

両手に集った風を恵理は空へと掲げる。彼女と真紅を包み込むには十分な大きさのドームを形成し、半透明の風の防壁が完成する。直後、空から無数の刃が降り注ぎ、風の防壁へとぶつかっていく。まるで雨のように休まることのないそれは少しずつ風を弱め、一発、

また一発と恵理の顔に苦痛の表情が広がっていく。

「……こっちにまで影響が来るなんて、康、本気で天を……」

ここへ連れてこられたのは天一と真紅、そして恵理の三人。康が天一に特訓をつけるというので、なら真紅も少し力に触れておくと天一が強引に押し切ったのだった。

刃の雨の中、天一は生身で戦っているというのか。

戦慄すると共に、この空間に残された時間が少ないことを真紅は悟る。風の防壁が壊れた瞬間、真紅たちもこの刃へと身をさらすことになるのだ。いくら恵理が強いと言っても、これだけの刃をかわしながら生存することは難しい。同時に真紅も、この状況を打破することはできないだろう。

とぼつちり、というには十分な状況。

「……こんなの、天……！」

恵理の表情にも焦燥の色が濃い。

俗に言う妖刀って類に入ると思う。

天一の言葉が頭の中を駆け巡る。もし本当に、この刀が妖刀なんという大仰な存在だとするなら、この状況を打破することもできる

のではないだろうか。そんな安直な考えにとらわれて、真紅は自らの新しい刀、六花を鞘から抜き放つ。

抜いたのはいいが、どうすれば妖刀を使いこなせるのか、そもそも何ができるのか、さっぱりと聞いていいほどわからない。握った柄は燃えているかのごとく熱くて、真紅は初めて、その変化に気づいた。

刀が反応している。自らと仲間の危機を察知して、戦いたいと疼いているように。

全身を蛆虫が駆け回るような違和感。同時に、この後自分がどうすればいいのかを刀が教えてくれているような、不思議な感覚に全身を包み込まれていた。

誰かに見られている感覚。恵理ではない。恵理なら正面で、空を見上げたまま固まっている。いや、固まっているわけではないのだろう。周囲の、上空から降り注ぐ刃の動きまでもが緩慢なものとなり、風が包み込む音すらもどこか遠くに消え去っている。

気づかぬ間に、超反射能力を発動させていたというのか。そんなこと今までなかった、昨日自分の力を理解した真紅にそう断言することはできないのだが、少なくとも普通のことではないと真紅は考えていた。

気づいていなかったとしても、肉体にかかる負荷は変わらないはずだ。長時間の使用による脳の拒絶反応。肉体の限界突破による筋肉収縮。様々な面で問題が生じるはずだった。だというのに今の真

紅はあまりにも、あまりにも普段のそれと変わらなかった。

天一の言葉を信じるなら、この状況は六花が引き起こしていることとなるのだろう。増幅器という役割を担った刃はうつすらと光を放ち、真紅の心をやんわりと包む。

「……六花……一式」

自然と口をついた言葉。同時に六花の鍔がガラスの割れたような音と共に弾け飛び、六つの花弁を持つ銀色の花へと姿を変えていく。楕円でできた六つの花弁は確かな実体を持ち、その全てに言いようのない恐怖を覚えずにはいられないだろう。もっともそれはこの刀の敵となった場合であり、今の真紅にとってはこれ以上ないほどの援軍となっている。

この刀があれば、負けることはありえない。

直感でそう思えるほどの刃を手に、真紅は恵理へと歩み寄る。

「え……？ ちょっと、真紅？」

「黙って。もうそろそろまずいんだらう？」

風の防壁は軋み、彼女の額には大粒の汗が伝っている。それがどれほどの負荷を与えられた結果なのかは、自らの消耗と照らし合わせればわかり易い。

自分だけを守れば何の問題もなかったのだらうが、今の彼女は真紅も含めかなりの距離を防御下においていた。ならばその負担も大きくなり、こうなるのは目に見えていたはずだ。それでも防壁の半径を縮めなかったのは、彼女なりの優しさだったのだと真紅は考え

ている

今度は、真紅の番だ。

「その刀……何？」

「どうかしたのか？」

「それ……凄く、怖い。何だろう、不知火を相手にしてるような、存在感がある」

不知火と同じ。そういわれている気がして、真紅は妙に納得してしまう。

妖刀という表現は不知火にも当てはまるものだ。あの刀も妖刀だというのなら、名前が歪だからといって抵抗を感じる必要などない。心のどこかにこびりついていたしこりが崩壊していくように、真紅は心が軽くなる感覚にとらわれていた。

頭上で風の防壁が崩壊する音が甲高く鳴り響く。同時に無数の刃が地面へと迫り、真紅たちの視線も自然と上空へと向いていく。

どれだけのことができるのかはこの際関係がない。どんなことができるか、どんなことができなくなったら、今この状況を打破できればそれでいいのだ。恵理は消耗して自分一人では刃の餌食となるだろう。そんなこと許されない。天一に合わせる顔がなくなると共に、自らの理念に背くことになる。

仲間は、守るものなんだと。

頬に自然と笑みが乗る。右手に握り締めた六花の柄から流れ込む不思議な感覚に身を任せれば、こんな状況でも難なく切り抜けられる確証があった。

「掴まってる」

恵理の腕を強引に引いて、両足に思い切り力を込める。刃が地面に到達する直前に、それに反発する形をとって跳躍した真紅は右手の刃を大きく一閃する。落ちてきた刃を一振りで薙ぎ払った六花の刃は本来の間合いよりも数倍広い斬撃を繰り出し、跳躍も真紅の限界を易々と飛び越え、五メートルを超える大跳躍を引き出していた。

肉体の限界を超越させる補助能力。それが六花の持つ増幅器としての役割であり、刃を巨大化させるのはおそらく六花が真紅の力を吸い込んで引き起こした力。六花は真紅の身体能力を引き出し、真紅は六花に力を流し込むことで力を増幅させる。持ちつ持たれつの関係。同時に何も考えずそんなことが引き起こせるこの刃は、つくづく真紅のために作られた刃であると実感する。

第一陣を切り抜けた真紅の頭上に第二陣の攻撃が迫る。空中に取り残された体では踏ん張ることはできなくて、真紅は思わず刀の腹を眼前に広げ防御の体制に入る。

「……任せて！」

左手で引つ張っていた少女の体が一瞬重力を失う。自らの体まで軽くなつたような感覚にとらわれながら、全身を包み込むような強力な風が何もない空間から発生する。刃同士がぶつかるような高い音と共に刃の軌道がそれてゆき、地面に突き刺さる剣の山へと突き刺さっていく。

少しだけ回復した恵理の能力。魔法みたいなその力に感謝しながら、真紅は落下していく中でもしっかりと空を見上げていた。第三陣は、今のところ兆しはない。

「終わったって、ことなのかな？」

着地して手を離れた恵理が不思議そうに声を漏らす。思っていた以上にあっさり終わった攻勢に肩透かしを食らったような、それでいて無駄だと思うほど安堵した自分を感じながら、真紅は自らの右手に収まった剣へと視線を落とす。

六枚の花弁を持つ刀、六花。これが本来の姿だと思っていたが、自分の口から自然にこぼれたあの言葉が妙に心の中に引っかかっていた。

一式って、何だよ？

完全に自分の意思とは違つところから現れた言葉。どうしてそんな言葉が漏れたのかわからないが、それこそが六花の意思なのではないかと思っている。

一式と銘打っているわけだから、二とか三とかが存在していてもおかしくはない。

じっと刀を眺めていると頭の隅がちくりと痛んだ。同時に六枚の花弁がうつすらと光り、光がはじけると同時に元の十字型の鍔が姿を現すのだった。

「ありゃ、元に戻っちゃったね」

「ああ。そつだな」

次にいつこの姿を見ることができなのか、真紅にはわからない。それでも仲間が危うくなったり、自らの命が危険にさらされたときは手を貸してくれるだろうという直感を信じてその刃を鞘へと納めた。

「さてと、天のほうを、見に行くとするか」
「そつだね。行こうか」

あまり気にしていないように見えるが、惠理の顔には焦りの色が隠しきれないほど浮き上がっている。よほど心配なのか、行こうかと言ってからせかすように足を動かしている。

素直じゃないな、なんて微笑ましく思いながらも真紅は紫の光が放たれる方向へと足を進めるのだった。

刃の雨は休まることなく少年の小さな体へと降り注いでいた。天候を操ることはできない康にとつてその光景は一種異様なものであり、同時にこれほど強力なものだったことは彼の予想をはるかに上回るものであった。

刃を降らせる術。どれほど量を生成できるのか、範囲はどれほどのものなのか、どれくらい魔力を消費していくのか。全てが実験段階だったこの技を使われたのも全くの予想外。力を使えないはずだった天一がこれほど自分を追い詰めるとは、康にとって今回の

戦いは予想の斜め上に行く事態ばかりが起こるものだった。

それでも、心の中で安堵している。

力を完全に使えなくなったわけではないし、今回のように魔力消費が少ない状況を作ってやることができれば不知火の力を借りても戦うことができる。これなら、戦闘で死ぬ確立は軽減されるのではないだろうか。

しかしそれも、この苦境を乗り越えられなければいけない。

刃の雨に隠されて天一の姿は康には見えない。天一の魔力、正確には不知火の力がほとんど残されていないのは、この空間の管理者である康には手に取るようにわかる事態ではあったが、天一が無事かどうかはわからない。

死んでいたとしたら、恵理ちゃんに殺されるな。

そんなこと考えてもいなくせにと、康は自分に苦笑を向ける。天一が死んでいる可能性なんて、微塵も考えてはいなかった。

不意に刃がぶつかる音が、止まった。何が起こったのか目視することはできずとも、それが天一の起こした何かであることは疑うことができない。

光り輝く刃が天を貫く勢いで伸びていく。十メートルを超える巨大な剣は康へとその刃を向け、ゆっくりと振ってくる。刃の雨なんでものともしない。自らの負傷なんて全く考えないその攻撃は、あ

まりにも天一らしくて一瞬防御へと意識が向かなかった。

空間を圧縮しても止められない、別空間に逃げても空間ごと断ち切られる。刃の雨を集中させてもこの勢いは止められない。術で止めることはできなくとも、その緩慢な動きは自分が動くことで回避することができた。

巨大な剣が地面にぶつかる。それが引き起こす衝撃波は既に地面へと到達していた刃を全て吹き飛ばし、完全に避けていた康の体を吹き飛ばしていく。風圧に飛ばされた康は建御雷を握っていなかったこともあって、なすすべなく飛ばされることしかできない。

「……助かったよ、康。お前のおかげで、少しだけ道が見えた」

耳元で聞こえた優しい声。それに戦慄すると同時に、背中に冷たい切っ先が突きつけられる。

「どうやって……後ろに」

「光の翼。光の刃。とりあえず今使えるものをありったけ叩き込ませてもらった」

康の背後を取れるほどの力。少しだけ手を抜いていて、力の補助機能が極端に高いこの場所だからできたのかもしれないが、それはすなわち天一の持つ本来の力に近づくことができたということではないのだろうか。

「まったく、お前も恵理も……お節介だよな、本当に」

「あはは……誰かさんに似たのかもね」

「心当たりがないな。誰かさんって言うのは、俺も知ってる人なのか？」

とぼけた口調に思わず吹き出してしまふ。当然本人は気づいてい
るはずであり、もし本当に気づいていないのだとしたら康は彼に対
する意識を変更せずにはいられない。

「あ、なあに笑ってるやがる、このこの！」

「わっ！ ちよつと待って、横っ腹は！ わ、わひゃひゃひゃひゃ
！」

完全に手玉に取られた康は天一のくすぐり地獄にとられるほか
ない。肋骨と肋骨の間を縫って食い込んでくる指は時折痛みを伴う
ものの、相手に苦しみを与えろという面においてはこれ異常ないほ
どの拷問として天一の十八番となっていた。

「……何してんの、あんたら？」

「あ……」

剣の山に足をかけた恵理と真紅が呆れた顔をして見ていたのに気
づいたのは、声をかけられて数瞬経過してからのことだった。

真紅たちと合流し、康が創りだしたこの空間を抜けた途端、天一
の意識は闇の中へと落ちていった。雨の如く降り注ぐ刃を幾度とな

くかわしつつ、反撃のために閉じていたはずの魔力を無理矢理に引き出した。その反動はその場にいた全員が予想しなかった形で訪れ、結果として天一は高嶺家の柔らかい芝生の庭へとその顔をうずめる形となってしまった。

太陽のにおい。それだけが脳にこびりつきいていた。

漆黒の海に身を委ねている感覚。四肢の感覚がまるでない。それなのに意識は不思議とはつきりしていて、目の前に小さな光の塊があることを認識できていた。

はつきりとした形を持たない、漠然とした光。そもそも光というものは実体なんてつかめるはずがないのだが、光を扱う天一にはその異常性が理解できる。

光ではない。何かの思念、発光している人間の意識とでも言うのだろうか。ともかく天一がよく知るものでないことだけは理解できるのだ。

「そう身構えないで欲しいわね」

凜と、透き通るような声。さほど高域の声でもないのだが、どこか女性の柔らかさを保っているその声に、天一はただ戦慄する。同時に腰に差しているはずの刀へと手を伸ばそうとして、両腕が動かないことを思い出した。

額に冷や汗が伝い、奥歯が軋む。最も聞きたくなかった声。でも心のどこかで聞いたかかった声。その声を前にしてまず自衛のために体が動くとは、なんとも滑稽だ。

「……無理なこと、言うなよ」

ようやく放った声はかすれていて、自分の声ではないかのような引きつったものに変わっていた。それを受けて光の塊から小さな笑い声が漏れ、光が少しずつ形を作り出していく。

「やっぱり、ね。あんたならそういうだろうと思ってたの」
「何でもお見通しか。まったく、あんたには頭が下がるよ」

光はゆっくりと人間の形を作り上げ、一人の女性の姿へと変わっていく。

頭の後ろ上部でまとめられた長い黒髪。小さな顔に浮かぶ優しい笑顔とすらっと細く長い体はまだ若い女性と考えても差し支えないだろう。とても中学生の子供がいる女性だとは思えない。服装も若々しさを保つように黒のスーツで決め、意識して若く見せているとしか思えない。

しかし、天一はその姿、黒のスーツの意味を理解していた。

喪服。

優しい顔に冷笑が乗り、その視線は天一の心を射抜くように突き刺さる。

「……どうして、会いに来たんだ？ てっきり俺は、あんたに怨まれていると思っていた」

「あら、心外ね。私がいつ、あなたを怨んだっていうのよ」

「いつって……それは……」

言いよどむ。どうして言いよどむのかわかっていても、その躊躇いが消えうせてくれるわけではない。心の葛藤を見透かしたように、彼女は動けない天一の顎を人差し指と親指で捕まえ、そつと角度を変えた。

「言ってみなさいよ。いつ？」

「……俺が、あんたを……殺したときだよ」

「ん。よろしい。だから大好きよ、私の可愛い天ちゃん」

途端に破綻した冷笑は柔らかい子供のような笑顔に変わり、動けないのをいいことに彼女は全身を持って天一の体に抱きついた。

息が詰まって潰れた蛙のような声が喉から零れ落ちる。これが現実だったらと思うと冷や汗が出るが、おそらくここは天一の精神世界。だからこそ彼女も、ここにいられる。

「は……離せ！ 離してくれ、母さん！」

「もお、いつの間にそんなませちゃったのかしら。昔は喜んでくれたのに。ねえ、天ちゃん」

天一と、そして恵理の母親、朝倉 美里。数年前に死んだはずの彼女がここにいる。確かな柔らかさと暖かさ、昔と変わらぬ笑顔を持って。喻えこれが夢で、自分が創りだした幻想だったとしても天一はこれだけで満足だった。

どうしてこうも、安心するのか。一度殺されかけ、殺してしまった人だとわかっていても子は親には敵わぬもの。その優しさに包まれた途端、普段のような気丈さも理性も、取り繕っていたもの全てが崩壊していく。

「……やっぱり、勘違いしてたのね、あんたは」

優しいデコピンを喰らって天一は我に返る。鼻と鼻がぶつかる距離で笑顔を浮かべる実の母親は、天一が彼女を殺したときから時間が止まっている。

「何がだよ？」

「私が、あんたを怨んでると思うの？」

「は、はあ!？」

やっぱりか、と溜め息をついた母は、天一の鼻に自らの鼻を擦り合わせ左右に頭を振る。鼻がむずむずすると共に自然と涙が零れ落ち、視界が涙でにじんでいく。

「私にあんたに、全てを任せたの。敵討ちを任せてしまったのは確かに私の落ち度だけれど、だからといって自分を追い詰める必要なんてない。ましてや守るためとはいえ、恵理ちゃんに怨まれる必要があつたの？」

「そんな……そんなこと言われても！あの時はああするしか、なかったんだ」

「うん。わかってる。あの子はとことん甘えん坊だからね。私がいなくなったら生きていけなかったかもしれない。だからって自分が怨まれることで、恵理ちゃんに生きる目的を与えなくても良かったんじゃないの？ そんなの、あんたが辛いだけじゃない？」

頭が、優しい両腕に包み込まれている。抱きしめられていることを理解して、涙がますます止まらなくなっていく。

「もう、自分を赦してあげなさい。私が言ってるんだから、あなたは自分を赦すの。被害者がどっちだったのか、本当は理解しているくせに」

「でも、それじゃあんたがあまりにも……」

「母親にあんたって言わない。あと、あんたはもう少し、母親に甘えるってことをしなさい。ほんつとに可愛げがないんだから」

ぼんぼんと頭を優しく叩かれる。思えば昔から母に甘えるのは恵理の役目で、天一はいつも自らの意思で距離をとっていた。甘える必要なんてない、いつか母を支えられるような人間になればずつとそばにいられるからと。本来とは別のベクトルで、天一はマザコンだったのかもしれない。

恵理と同じくらい大切だった人をこの手で殺めたのだと、その事実が恵理との距離すらとらせたのだ。全ては天一の、心の弱さが引き起こしたことだった。

「恵理ちゃんはね、きつと、気づいてる。私たちの間で何があったのか、どうしてあんたが私を殺さなければならなかったのか」

「……え？」

「そう驚くことでもないでしょ？ あんたたちは双子なんだから。どこかで繋がってるのは、この状態になってから私も痛いほど理解しちゃったもの」

確かにその予兆はあった。

怨んでいるはずの兄の下へ転校してきたり、戦いになっても本気で殺そうとはしなかったり、頑なに真実を告げさせようとしたり。気づかないほうがどうかしている。天一だって薄々はわかっていたのだ。それでも認めるわけにはいかなかった。認めてしまえば、今までやってきたことが消えてなくなってしまうから。恵理をこちらの世界に引き込んでしまっただけになってしまいうから。

「あなたたちはね……結局はこっちに足を踏み入れる運命だったのよ」

「どうして？ 力の発現は、一生しない人間のほうが多いって、じいさんが……」

「あなたたちが私の子供である以上、その運命からは逃げられないのよ」

「ごめんねと言って母は抱きしめる腕にいつそうの力を込める。痛いほど強いその抱擁はせめてもの償いだと言いたげに、髪の毛をなにやら冷たい雫が伝う。

どうしてなのか、何があったのか天一にはまるで理解できない。

「どういうことだよ、母さん。逃れられない運命って、どうして？」

「どういう意味なのか天一はただ問いかけることしかできない。何らかの反応を見せようとした母だったが、思い出したように首を振って天一の頭から体を離す。

「ごめんね。今は、教えて上げられない。でもいつか、あなたが私の故郷に足を踏み入れることがあったなら、きっと、もう一度会いに来るから。や、会いに来ること自体は結構簡単にできるかもだけ

ど。ともかく時間だから、またいつか、ね？」

「ちよつと、待てよ！ 母さん！」

「大丈夫大丈夫。私はいつでもあんたと一緒。別に心の問題じゃないわよ？ 単純に私の魂が、不知火と一緒にいるだけだから」

「はあああ！！？？」

「んじゃ、またね、天ちゃん。恵理ちゃんによろしく！」

最後に音符でもついていそうな陽気な声で、母はまた光の塊へと姿を変えていく。光は天一の真上で静止し、四肢の自由が戻ってくると同時に天一はその光へと手を伸ばす。

光は刀の形へと姿を変え、喜ぶように一度震える。

なんだか、馬鹿みたいだ。母を殺してしまったことを後悔し続け、母に恥じないようにと行動してきたはずなのに、その母親がもの凄い身近に存在していた。不知火が引き起こした幻覚かもしれないが、母の魂がここにいることは事実なのだろう。手に収まった刀がそうだと言いたげに震える。

「はっ、馬鹿みたいじゃねえか、母さん。あんたの幻影と俺はずっと戦ってきた。なのに肝心のアンタが俺を怨んでいないんじゃ、何やってたのかわからねえ。でも……感謝するよ。おかげで俺は、まだ戦えると思うから。力なんざ無くたって、生き残って見せるから」

だから、見ていてくれ。一番近くで、一番傍で、共に戦いながら。

漆黒の海が浮上していく。圧縮していく闇の中で、白の刀を手にした少年は、その刃を高々と振り上げる。

闇なんか切り裂いてやる。迷いなんか消し去ってやる。それでい

いと言つのなら、共に歩んでくれると言つのなら、もう俺は怖いものなんて何もないから。

振り下ろされた刃からは光の渦が巻き起こり、周囲を取り巻く全ての闇を消し去っていく。誰かの小さな笑い声と共に天一の意識は光に呑み込まれ、天一自身もその安らぎに身を委ねた。

「……………ん……………！ てん……………！ 天……！」

「……………うっせえな、聞こえてる」

耳元ででかい声を食らって、耳の置くが痛む。そこまで慌てることかと思いつつも、天一は大丈夫だと知らせるために手を上げた。

上げた手には、一振りの刀が。主の、息子のことを心配しているように光を反射させている。

大丈夫だったの、と心の中でささやいて天一は目蓋をこじ開けた。

一番最初に目に飛び込んだのは、大粒の涙を流して泣き笑いを見せる、愛しい妹の姿だった。

〔六十四話〕 変わる力、変わる心（後書き）

忙しいとか言ってるのに思った以上に筆が載る今日この頃。どうしてこんなに進むのか。広瀬自身も驚きを隠せないでいるのです。

今回は六花という名にふさわしい姿をと思って書いた話だったのですが、なんだか鰐が変わっただけでさほど変化なし。

さて、どうしようかな……。

そしてもう一つ、天一が隠れマザコンだった件について！

や、どんだん天一のキャラ付けがおかしな方向に行っているのは赦してほしいところです。

さて次話がいつ更新になるかはわからないのですが、今度は誰にスポットを当てようか鋭意製作中です。お楽しみに(?)。

ではでは〜。

〔六十五話〕 静観者たちの剣（前書き）

銀の老人は世界を疎んじ、世界に背を向けた。

黒の少年は一度世界に背を向け、それでも大切なもののために、
もう一度世界と向き合う心を手に入れた。

どちらが正しいのか、誰にも、無論二人にも、わかりはしない。

〔六十五話〕 静観者たちの剣

二振りの刃。純白の刀と紅の刀は互いの力に共鳴する、などということも無いがどこかしら共通するところがある。互いに増幅器の能力を有し、主の負担を軽減すると共に絶大な影響力を主へと与えている。一度その力に頼ってしまえば、自らが無ければ戦えないようにしてしまうほど。それが刃を鍛えた刀工の思惑なのかは定かではないが、ともかく刀と主の関係性について二本の刀は同じような関係を持っていた。

それを知る数少ない人物、彼は眼下に寝そべる出来の悪い弟子を眺めながら小さく、おそろくすぐ隣にいても聞こえないほど小さな安堵の溜め息をついた。流れる銀髪は風に揺られ視界をちらつき、うつつしさと共に奇妙な懐かしさを彼に抱かせる。空しくなりそうで、彼は無理矢理溜め息をついて自らを誤魔化し、踵を返してその場から去ろうとした。

「随分と過保護になったものだな。弟子の心配をするなど、貴殿らしからぬ行動をする」

振り返った先にいた相手。正面から対峙しても気配がほとんど感じられない男に、初めて対峙する人間ならば幽霊かと思うだろう。彼も人生経験が莫大な量でなければ理解できない人間だったが、生きていくことは間違いが無いし疑いようの無い人物である。

年のころは天一たちと同じくらい。長い足にフィットするジーンズと黒の上着を着て、長い黒髪を彼と同じように頭の後方で一本にくくっている。意志の強い顔には冷笑が浮かび、その右手には鞘に納まった二本の刀が握られていた。

なぜこの場にいるのか、なぜこんな格好をしているのか彼には皆目見当がつかなかった。

「あの少年に、朝風 真紅に刀を打ったお前が、ここに用事があるとは思わなんだ。自らが打った刀にはまるで興味が無いと思っていたのだが、やれやれ、そんな容姿をしてまで陽の下に現れるとは、どういった風の吹き回しだ？」

少年、のように見えるその男は口元に鋭い笑みを創り上げ、彼に語りかける。

「貴殿ほど過保護でもないのだが、私も自分の息子、六花の様子を見なくなったのだ。力をまだ使いこなせていない少年に預けはしたが、どうにも心許なかった。陰ながら助力しようかと思っていたのだが……どうやらその必要は無かったらしい」

姿とは比例しない口調に苦笑いが浮かぶ。姿を偽ることは出来ても口調、心まで若返ることは出来ないらしい。

言葉尻に優しいものを感じて、彼は小さく首をかしげる。

「随分と人間くさくなくなったものだな、情を抱く相手が現れるなど、ここ最近無かったことではないか？」

詳細などわかるはずもなかったが、彼の考えでは少年の姿をしたこの男が特定のもの、もしくは人間に興味を示すことなどほとんど無かった。彼の腰にささっている刀もこの男に鍛えなおしてもらったものだが、本来の力を引き出すまではいかないものの、人間とは思えないほどの技術と力で半分ほどの力を取り戻しつつあった。今

でも一度使用した直後に修復しなければならぬほど損傷が激しいが、使い物にならないでいられるのはこの男のおかげである。

しかしこの男はたいしたことではないと言いたげに鼻を鳴らすだけで、報酬のほとんどを返してきた。完全に直せなかったのは自らの力量不足だと頭を下げて。その姿勢と力量が気に入った、というのが彼の気持ちである。

それでも彼に興味を示した、というのとは少しだけ違う。自らを高めるための素材としか見ていないはずだったし、そもそもまだこの男は修行中だとたまっていたはずである。

「術者として、鍛冶師としては未熟だがな、いかんせん年をとった若者に託した自らの光がどこまで輝いてくれるのか、気になるのは私だけではないと思うのだが？」

「……何が言いたい？」

「貴殿の希望、託した光はどこまで大きくなるのか。私としても気になっているのだが、貴殿はさほど気にならないと、そう言うのか？」

確信を持った眼差しは彼の銀髪を突き抜けるように、その背中に存在する光へと向いているような気がした。気のせいではないだろうが、彼としては予想の範囲を出ない問いかけであり、同時に鼻で笑ってしまうような感覚が彼の心を取り巻いていた。

「……そう、だな。さほど気にはしていない。僕の弟子は、どうにもじゃじゃ馬だな。あの男が負けるところも、死ぬところも、倒れるところすら想像できん。だから僕の光は、まだまだ僕の中にあるのだよ」

「貴殿ほどの存在になれば、早々に力を託すのかと思ったが……や

れやれ、予想以上に用心深いのか、単純にあの男が眼鏡にかなっていないのか。どちらでもかまわないのですが、興味本位で聞いてみたいのですが？」

戸惑いの表情こそ見せなかったものの、予想を外された反動は男の言動の影に見え隠れしている。元々さほど饒舌ではないこの男が今日に限ってはかなりの量喋り続けている。その異変をまず理解すべきだった。

その理由に思い当たって、彼は小さく笑う。それは嘲笑ではなく、ただ純粹に愛らしいものへと向ける慈愛の笑み。

「お前は、本当にあの少年が気に入ったようだな。朝風 真紅、といったか……なるほど、確かに奴は”あの男”によく似ている」

その言葉を口にした瞬間、男の体が跳ねるように反応する。握っていた二振りの刀、その柄を同時に、それも片手で掴み腰を落とす。片手二刀流などという変則的な剣術を得意とするその剣士は、確かに鍛冶師としても人間としても未熟かもしれないが、剣士としては一目を置ける存在である。

さほど細くも無い柄を二つの指で挟み、悠々と扱うことが出来る腕力。精密に刃を振ることが出来る操作性や一撃の重みを考えれば稀代の名将だろうと歴戦の勇者であろうと見劣りしない。名が知れていないのは世が世だというせいもあるが、同時にその存在を認識している人間が極端に少ないことにも影響を受けている。

世捨て人、というほど世間から隔絶しているわけでもなく、かといって社会に貢献しているかと問われれば、答えは否。鍛冶師という廃れた職についているせいもあるが、この男や彼のような存在は

そもそもが一般人には認知されない。というよりは、受け入れられないのだ。

「騎士二刀流……騎乗時に片手は手綱を引き、片手だけで戦うために考案された流派。その創始者にして、一番の使い手。お前以外の誰一人として会得できなかった剣術は、お前の色が出すぎていたために広まらなかったのだと考えているが？」

「その通りだ。この剣術は私のために、私自らが考案したもの。そもそも広めるつもりも無かった」

もし銃のような火器が存在していなかったとするなら、この男は世界一の戦士として名を連ねていたはずだ。変則的な剣術は初見では見切ることが出来ず、馬上から届く鋭い刺突、斬撃はただの歩兵には目視すら出来はしない。力を使わない状態でこの男と戦ったとしたら、彼ですら死を覚悟しなければならぬだろう。

本当に、人間にしておくには惜しい人材である。

「あの男が死んだのは、お前のせいではない。あの男自身がお前の手助けを拒んだのだし、そもそもあの戦力では、お前が手を貸したところで暖簾に腕押し、無意味この上なかつた」

かつての戦い。手を出さないと決めていた彼とは違い、目の前で剣を握るこの男は、自らが刀を預けた男のために死地に赴こうとしていた。

戦力といつても手を貸そうとしていたのはたった一人の剣士。対する敵は強力な暗殺者が三十以上。市街地を利用した逃走劇には、流石の彼も脱帽したものである。

燃え盛るビル街、削り落とされたコンクリートの地面。ガラスは飛び散り、そこかしこに敵の気配が消えない。本来なら気配を消すことが常識である暗殺者たちも、状況が状況だけにそんな余裕も存在していなかった。

恐怖心を持っていないはずの暗殺者が本能で逃げ出すほどの剣士人間として逝ったのは、彼なりのポリシーだったのかもしれない。

「……貴殿の心がわからぬ。何が大切で、何が必要で……そんな人間的な心が、貴殿には残っていないのか？」
「笑わせてくれる。この儂に人間としての心を求めるのか、お前は」

笑いが堪えきれない。思わず漏らしたその笑顔は男の怒りを増徴するだけだとわかっていてももらえることなど出来はしない。互いに人間の枠を越えてしまったはずなのに、まだ人間としての自分を保ち続けようとする。滑稽の極みだと、彼は思う。

刀を手にしていない彼と、現存する最高強度の刀を二本持っている男。鍛冶師として未熟、とはいうものの現代では最高と呼べるほどの名工であることは疑いようの無い事実である。その男が自分のために打った刀なのだから、なまくらであるはずが無い。最高硬度、最高の切れ味を誇っていると考えるのが妥当だった。

圧倒的な不利に置かれていても、しかし彼は笑みを崩すことが無い。

「やめておけ。お前には、儂を殺せるだけの力は無い。無様にあの蒼天を仰ぐだけだ」

「武器を持たない貴殿に何が出来る。牙を持たぬ獣同然の貴殿に、私を倒すことなどではすまい？」

「愚か者が……だからお前は未だに人の枠を超えられんだ」

この世の理に羽交い絞めにされ、身動きがとれず、じたばたともかくことしか出来ない人間。それこそが人間だ、と彼の弟子は満面の笑みを浮かべて応えるだろう。だからこそあの少年を弟子として鍛え上げ、人間の限界がどこにあるのか知りたくなる。限界を、見てみたくなくなってしまふ。流れゆく時の中を生きてきた彼にとって、その少年の存在はある種の奇跡であり、同時にまだこの世界にも可能性があるのだと信じさせてくれるもの。

人の枠を越えようとするものと、人の枠に戻ろうとするもの。どちらが強い課などわかりきっているが、それでも彼は信じている。

進化しようとするその志こそが少年の、朝倉 天一の力なのだと。

ならばこそ、退化しようとするこの男に、彼は負けるわけにいかなくなつた。

「力の差を、見せ付けてやろう」

右手を横に、地面と水平となるように掲げてから彼は目を閉じる。髪留めが干切れ、その長すぎる銀髪が宙に浮くと共に彼の右手に光が集まっていく。

呼吸をさせるな、瞬きさせるな、何も考えられないほど、本能レベルで動けなくなるほど右手に意識を集中させる。この世で最も無防備である自分を認識させるな。そう念じることで世界を従わせ、世界に従属する存在を全て意のままに操る。

訪れた重みと重たくなった空気の質感に、召喚の成功を知る。同時に目を開けた彼の眼前にはただその存在を注視する男の姿だけが映っている。

漆黒の長刀。卍型の鍔は漆黒に染まり、上質な布で編みこまれた柄ももちろん漆黒に彩られている。柄尻まで漆黒に染まったその刀は、日本刀と呼ばれる部類の刀剣。目の前で息を呑むこの男が鍛えなおしたものだだったが、こうして敵対するとやはり違うものなのか目を離せずにいる。

柄と同じ色の鞘に手を伸ばし、彼はゆっくりと宣言する。

「我が理の下に、ひれ伏せ」

この世の理など関係ない。誰かの想いなど興味もない。ただ自らの理の下に生き、自らの理の下で死ぬ。

世界なんて神様が創った存在から抜け出して、彼はその刃を蒼天の下にさらすのだった。

刀鍛冶の男、少年の姿をした彼は名を波多野 時雨という。自らの力を知ったのは彼がその姿を保てるようになった頃、まだ十代の頃だったという。力の使い方などまったくわからなかった彼は面白半分にその力を使い続け、結果、自らの愚かさと無力を知り、世界を棄てた。

不特定多数の人間と関わる必要を見出せず、ただ自らの研究に没頭していく。そんな生活が好ましく思えて、戦場で戦えるという騎馬の技術を手に入れ、そのための剣術も編み出した。彼の本質を知らない人間は足しげく彼の元に通い、彼の剣術を学びたいと思ったものの誰一人としてしつかりとそれを会得することが出来ず、また彼は一人になった。

その後は自らのために最高の刀を創りたいと鍛冶師としての技術を学び始め、数多くの刀を打ってきた。

その全てが、自分のため。もう誰かのために生きることが嫌になつて、孤独を愛し、孤独に浸り続けた。

そんな彼の世界に土足で踏み込み、色々とかき回していった男がいた。

「俺のために刀を打ってくれないか？」

快活な笑顔に隠れている悲しみ。それを見抜くことは、かつての時雨には不可能なことだった。長きに渡り他人と関わりなかつた彼に他人の何かを見抜く技術などあるはずが無く、どうでもよかつたというのが本音である。

老人の姿で対応した時雨は彼に怪訝な表情を向け、手を振った。

「私は自分のためにしか、刀を打たない」

きっぱりと言つてのけ、時雨はまた刀剣の手入れに取り掛かつた。こついえば退くだろうと考えて、もうその存在を忘れようと思つていた。けれど彼は諦めるどころか目を輝かせて、低いカウンターに身を乗り出した。

「いいじゃねえか。自分の技術が向上する、そのために刀を打つで、それを俺が使う。あんたにはいいことづくめだろ？」

「……聞く耳持たんな」

人間と関わりを持ちなくなつた。いずれ失うものだとなつてゐるから、どうしても関わりたくない気持ち先走つて。そもそもどこから自分の工房の場所が知られたのかわからなかつたが、ともかく信用できないと思つていた。

その日は何とか追い払つた。安堵して床についた時雨だったが、次の日起床した瞬間、ただ呆気にとられることしか出来なかつた。

「あ、どうも。おはようございます」

額に白い鉢巻きを巻いて、動きやすいような灰色の服を着て、林の中に作っていた竈の前で薪を割っている。まさかまだ夢を見ているとも思えないが、そう誤認させるほどの衝撃を時雨に与えていた。当然抗議しようとした時雨に、彼は笑顔で手を広げる。

「手伝うことくらいさせてくださいよ。ずっと一人なんて、寂しいじゃないですか」

「寂しい？ そんなわけがないだろう。私はもう長い間、ここで一人で生きてきたんだ。今更誰かがいるほうが迷惑極まりない」

「そりゃあおかしな話だ。昨日と違って、今のあなたの顔、生き生きしてますよ？」

そんなはずがないと言いたかった。正面きつてそんな言葉をぶつければ彼がいなくなることは容易に想像できる。彼がいなくなれば時雨の平穩は戻り、今までどおりの一人だけの生活を送ることが出来るはずだった。

それでも、時雨の体は反応してくれなかった。

彼の前に歩み出ることは出来ても、喉が渴いて言葉が出ない。拒絶の言葉を放つどころか、時雨の体は彼の意識を離れ、少年のそばに腰を下ろしていた。

「そんなに、顔に出ていたかな？」

「もつぱうちりと」

何をやっているのか、自分の行動を理解できなかった。他人と生きることをやめたはずだった。他人を信じることをやめたはずだった。だというのに、何だというのだからか。

この、心が満たされる感覚は。

その日から彼と少年の共同生活が始まった。午前中は刀を打ち、午後は竈の手入れ。夜は外の世界についての情報を得ることで時間を潰し、眠たくなったら眠る。最初こそ探るような心だった時雨も、徐々に会話に慣れ始め、時に聞き入り、時には突っ込みを入れて彼とのやり取りを充実させていた。

いつしか、彼のために刀を打つことも悪くはないかなと感じてしまうほどに彼との日々は楽しかった。

彼がやってきて一月という時間が流れた。その頃には完全に互いが打ち解け、彼の抱えていた秘密をも露見させてしまった。それでも少年は笑顔のまま、そういう人間もいるんじゃないか？ くらいに感覚で受け止めてくれた。今まではこの力が、容姿を変容させる力が露見するだけで気味悪がられて避けられていた。こんな反応が初めてで、彼への情が深まるばかりだった。

ある日、彼は持ってきていたスケジュール表を見て溜め息をついた。黒塗りの表紙には何の文字も描かれてはいなかったが、彼にとって重要なものであることはそれまでの経験でわかっていた。

「明日……か」

呟くその言葉には普段の快活さはなく、彼の負の部分を如実に体現しているようだった。

「何があるんだ？」

少年の姿で作業をしていた時雨は、小さく首を傾げつつ彼に近づく。彼は勢いよく首を振って、なんでもないよと呟くのだった。

その姿にどこか無理を感じた。他人のことなど興味が無かったはずの自分、その変化に何故か心安らかなものを感じつつも、時雨はその場に腰を落とし、鍛えている途中だった刀を打ち水の中にぶち込んだ。水が瞬間的に沸騰する音を耳にしても、時雨の意識は彼の方向へ向いていて、その憂いを含んだ横顔を眺め続ける。

「どうしたんだ、時雨？ 急に作業を止めたりして」

「……何を迷っているのかと、思って、な」

普段快活以外の表情を見せない少年の顔に、初めて戸惑いの色が浮かんだ。驚愕にも似たその姿はどうにも時雨の心をかきむしり、その先を知りたいと思わせる。

「お前は私を救い出した。今度は私が、お前の迷いを払ってやりたいと思うのだが、どうだろう」

らしくないことを言っているのはわかっていた。それでも、自らの性格なんて考えないで、心で物事を決めてみようと、そう思ったから。

少年は小さく溜め息をつき、時雨の正面にどっしりと腰を落とす。

「俺がここに来て、お前に刀を打ってもらおうとした理由、まだ伝えて無かったよな？」

「ああ。確かに聞いていなかった。それどころか、お前がここに来た経緯すら、私は聞いていないがな」

「そうだったな。俺の親父が、お前のことを知ってたんだ。凄腕の刀鍛冶がいるから、刀が欲しいならそいつのところに行けってな」

なぜこの場所と自分のことを知っていたのか、最初の頃こそその謎が心の中を渦巻いていたが、今となってはどうでもいいことだ。それよりも今は彼の心を取り巻いている憂いを取り払ってやりたいと、強く強く思うのだ。

少年は誤魔化すように両手を広げ、おどけて言葉を紡いでいく。

「……大切な人を取り戻すために、力が欲しかった。戦えるための力を必要としていたんだ」

「大切な人を……取り戻す？」

かつての自分が重なる。大切で、心の底から一緒にいたいと願っていた女性。特別美しかったわけではないが、一緒にいることで心が癒され、自らの本来の姿を見せることが出来た。

そんな彼女を失ったのは、時雨の力不足。

忌み嫌われた時雨を守るべく楯となった彼女を、時雨は泣きなが

から見捨てることしか出来なかった。だからこそ力を求め、自らの存在を高めることに没頭していった。

どうして忘れていたのか、大切だったはずなのに時雨の心は荒んでいた。

「うちの親父どもが企業間で対立していて、その抗争に巻き込まれている。彼女が相手側の社長、その息子と婚姻を結ばされるのが、明日だ」

立場や状況は当たり前前に違うが、少年もまた、かつての時雨のように大切な存在を失おうとしているのか。それを阻止するために力を求め、時雨に頼ってくれたことを、場違いと知りながら嬉しく思った。

無言で立ち上がった時雨は、竈のある庭に出て一振りの刀を握る。自らのために何年も鍛えてきた三本の刀。片腕で二振り、もう一本の手で一振りの刀を扱うことが出来る時雨にとってもっとも適している本数だったが、この一振りを、三本の中で最高の刀を彼に送ろう。

決意した時雨の行動は早かった。戸惑いながらついてきていた少年に声をあげ、手伝わせると共に彼の体の中に流れている魔力を、少しずつその刃に注ぎ込んでいく。なぜ自分も手伝わされているのかわからないという表情をしていたがかまわず、時雨は彼が倒れるまで、刀を打つ手伝いをさせた。

夜明けと共に完成した刀。迷いの無い一筋の光を示すべく創り上げたその波紋は少年の存在自体を示すように、少年のためだけに創り上げた最高の刀。

眠っていた少年を叩き起こし、最高の刀を握らせて、その瞳を正面から見据える。

「 ゆくぞ。こんなところで呆けている余裕は無いはずだ」

まさか一晩で完成するとは思っていなかったのか、少年は眠たげな目から急に覚醒し、時雨の言葉にしっかりと頷いたのだった。

その後、秘境と化していた住処を引き払って久方ぶりに世俗に戻った時雨は少年と共に結婚式場に突入する。武装していた黒服のガードたちをもとせず、しかし誰一人として殺めることなく戦いきた二人の前に現れた花嫁の姿に、少年はただ咆哮を上げた。

「朝風 白羽！ 花嫁をいただきに参上した！ ……なんてな」

花嫁にウインクしてみせるその姿はあまりにも歳相応で、思わず笑ってしまった。後に知ったことだが当時彼は十七になったばかりで、戦士としても人間としても未熟だったらしい。そうは言うものの長年生きつづけている時雨にとって白羽の背中には並みの大人に匹敵するほど大きくて、背中を預けるには十分な相手だった。

その頃から時雨は自らが果たせなかった思いを白羽に託したのかもしれない。大切なものを守るために死ぬ、自らの理想の死に方を果たすために、彼の戦いに助力しながら。

だからこそ、あの戦いに、共に剣を持って向かいたかったと、切に願った。

気がつけば、目の前に広がるのは雲一つ無い蒼天。両手に力が入らないと共に四肢の感覚が希薄。二振りの刀は目の前の地面、というよりも屋根に突き刺さったままで何が起こったのかを把握するには十分すぎるほどの光景であった。

「わかったか？ お前では私を倒せない。お前の力は既に戦うことからは離れている。それは自らが一番よく知っていることだと思っ
が？」

頭の上からかけられる声は感情を含んでいない。感情で行動した時雨を責めるように、あえて感情を殺して見せる。その奇妙な気遣いに思わず笑みが浮かび、姿が見えないその相手に手を伸ばす。蒼天から降り注ぐ日差しを遮るように掲げられた手のひらは思いのほか小さくて、どうしてこんなに小さな手なのか悔やんでしまうほど。

人間を超えなければ、守りたいものを守れなかった。けれど誰かを守りたいと願う心は人間のものです、そこにはきつと矛盾が生じてしまうから。世界の理の中でも彼の理の中でも、時雨は勝つことなど出来ないのかもしれない。

「そう、だな。貴殿に勝てるほどの力は、私には無い。だが……それでも挑んでしまうのが人間というものではないか」

「くだらん。お前や僕は既に人間の領域など超えているはずだ。今更そんな想いなど不要なもの」

「そうでしょうか？ 良くも悪くも私は、人間でいたいと思っていますよ。あいつが教えてくれた人間としての生き方を、もう少し続けてみたいと思うんです」

どれだけ弱くなったとしても、たとえそのせいで命を落とすことになったとしても時雨は感情で生き、感情の下に死ぬと決めた。それが時雨を世界に引き戻した少年に対する、せめてもの誠意だと思つて。

呆れたような溜め息が頭上で空間を揺らす。けれどそこに含まれているのは呆れだけではなく、多分の感慨も存在していたのではないかと時雨は思う。

刀が鞘に納まった甲高い音と共に張り詰めていた空気が糸を切つたように消滅していく。

「好きにすればいい。お前の生き方はお前のものだ。僕を含め、お前やあやつの生き方に口を出せるものなど存在せん。なにせ、既に人間と呼べるかどうかも危ういのだからな」

茶化すような口調と響きには自嘲的なものも混ざっていた。

きつと彼も、本当は人間でいたいのではないかと時雨の直感が語りかけている。戻りたくても彼は時雨やもう一人、人間の域を超えてしまった男などよりもよほど人間から遠い位置に立っている。だ

からこそ必要以上に世俗と距離をとり、たった一人の弟子しか取るうとしない。

彼の流派。数世紀前に考案され、世紀を重ねるごとに発展を重ね続け、名を変え続けたその流派は一子相伝と言われている。しかしその認識は誤りであり、正確には時雨と同じようにたった一人の会得者しか存在していないのだ。

幻の流派、飛翔連牙流。

まったく癖が盗めず、弟子を取らないためにその技の一つ一つすら未知数である剣術を初めて継承する少年。その存在は彼にとつてよほど大きなものだという認識は、今でも時雨の中で変わりはない。

「それでも……私たちは、いや、俺たちは生きなきゃいけないのだと思います。たとえ世界の摂理から外れてしまったのだとしても、そこには何か意味があるのだと信じて。前に進んで見せる、そんな心を持つて」

「……本当に、変わったよ、お前は。いつの間にそんな人間らしさを取り戻したのか……あの男には感謝せねばならんかもしれない」

やけに老人らしい口調を作ったと同時にその気配が一瞬で消えさせる。驚いて上半身を起こした時雨の視界に動くものは悉く存在せず、ただ溜め息をつくことしかできない。

茶目っ気という面だけを見るならば、少なくとも彼はまだ人間の、

それも成人する前の精神を持っているのではないかと常々抱いていた疑問を大きな溜め息と共に吐き出して、時雨はゆっくりと立ち上がる。

嫌になるほど清々しい蒼天の下、時雨はただそこにいるかもしれない友を思いつつ佇むのだった。

〔六十五話〕 静観者たちの剣（後書き）

前回から量を極端に多くして更新していますが、これ、実際自分の首を絞める以外の何物でもないんですね。

忙しい忙しい言っている割にはこうやって量を上げ、クオリティを落とさないように頑張ってる。

なんだかなあ、そろそろ更新の手を一旦休めようかと思ってもいるんですよ。最近は読んでくださる方も減ってきて、続けていく自信もあんまり……。

すみません、嘘つす。

どれだけ読んでくださる方が少なくなると、描きたいものがあるって読んでくれる方が一人でもいるなら書き続けたいと、そうやって自分を高めていければいいなと思っています。

珍しく真面目に後書きを書いていることに奇跡を感じつつ、今回はこのへんで。

でせはせは〜。

〔六十六話〕 悪夢の集い（前書き）

悪夢は終わらない。いつまでも続いていくと思っていた。

そう、”思っていた”。

〔六十六話〕 悪夢の集い

薄暗いダンスホール。企業の重役を招いて舞踏会などという優雅なものを行う場所に、今は気配を見せない男達が集結している。カーテンの隙間から覗く光はその全体を照らし出すことは出来ず、そこに何人かの人間がいることだけわかる程度の光しかそこには存在していない。集まっているのは組織内で上級、中級と区切られている暗殺者十数名。完全に殺しきってしまった気配が逆にその存在を如実にしてしまっているものが十人近くいるが、上位のそれは本当に存在しているかすら定かではない。

その光景を二階から眺めつつ彼、小柳 新は小さく溜め息をつく。成人して相当な年月を重ねたものの身長は伸び悩み、顔はまだ高校生かと思まごうほど幼く。自分の姿を鏡で映し見たときは高校生としての潜入も出来るのではないかと考えたことも一度や二度ではない。声も成人男性としては高いほうで、どうにも男らしくないという言は同僚である健三のもの。実力だけなら絶対に負けれないと言いつけるのだが、言葉や行動は彼のそれに遠く及ばない。

今もまたその男は目の前の広間に存在せず、悠々自適にどこかで行動を続けているのだろう。やれやれと頭を抱えてしまいが今は仕方が無い。彼抜きでも集会を始めなければならないと、新は一步前に歩み出た。一階のフロアから見える位置まで歩み出ると、新はその高い声質で眼下に集まった仲間達へ語りかける。

「やあ、今日はよく集まってくれた。欠席は健三だけかな？」

「いつものサボリ魔もいねえよ」

間髪いれず返された妙に殺気立った声。その理由を容易に想像で

きるものの、新は声の主に反応してやる気にすらなれず、無視して言葉を続けていく。

「今日集まってもらったのは、皆も既に知っているだろうことについて……そう、七夜の離反についてだ」

気配を感じさせなかった全員が一瞬動揺したように息を呑む。暗殺者としてはあまりに情けない反応だが今回は仕方が無いだろう。なにせ現在組織内で二番目の地位にいた男がいなくなり、あろうことか敵として立ちふさがるのだ。ここにそろったメンバーはほとんどが一对一では七夜に勝てず、何人かにいたっては束になっても敵いはしない。それに七夜は組織内の情報をかなりの量把握しているため、各地に設置してある設備などが破壊される恐れも十分すぎるほど存在していた。

加えて現在は健三が不在。今となっては名実共に二番目の権力者となったその男の欠席は、仲間達の間にも動揺を感染させる。動揺するな、というほうが無理な話だったのかもしれない。

「で？ 詳細についてはまだ知らないやつも多いんだ。教えてくれよ、シンちゃん」

「……相変わらず凶太いね、キリン。それと仲間内の情報ぐらい先に入手しておいてよ。いちいち説明するのは流石に面倒くさいんだけど」

「いいから教えてくれよ、シン。あの腰抜けがどんな行動に出たのか、興味がある」

明確に動揺していないのは数秒前に声を投げってきた男だった。暗がりからではよく見えないが無意味に伸び続けた髪の毛を無造作に流し、支給品であるサングラスも絶対に忘れてくる。スーツは皺だ

らけでいかにも適当な人間だと体現しているものの、実力は認められるレベルである。新にとってはどこか憎めない存在であり、組織内でも最も信頼している仲間だといってもいいだろう。だからこそ名前の読み間違いを続けることに抵抗を感じることなく、むしろ愛称として受け入れている。

中屋 麒麟。七番の数字を背負うその男に、新は大仰な溜め息をついてみせる。無論そんな行為で身を改めるはずが無いことを知りつつも、溜め息をつかずにはいらなかった。

「氷室 七夜は彼の武器と共に組織から離反、狂人化した聡司と交戦し、彼を死に追いやった」

「あらま、裏切り者同士の殺し合いか。そういえば聡司の馬鹿は理性を欠損してたんだっただな。それで？ 互いに潰しあつたなら今の七夜は相当な深手を負ってるはずだ。今攻め込めば勝てると思うんだが、場所までわからないとか言わないよな？」

「ごめんね、うちの諜報部は最近役立たずだから場所を特定できなかったよ。聡司が完全に意識を取り戻せば、また拷問でもして聞きだすんだけどね」

眼下に柔らかい笑顔を向けると小さな舌打ちが響いた。もちろん麒麟のものだとわかつているが、聞こえないふりを決め込んで、同時にもつとも重要な話題を皆に伝えるためもう一度口を開く。

「それで、そんな役立たずな諜報部が持ってきた唯一の情報だ。敵は七夜だけではない。七夜と同等の戦力が二人、相手側には存在していると考えていい」

今度こそ、フロアに存在する全員が息を呑んだ。あれだけ勢いがあつた麒麟まで息を呑む姿というのはなんと珍しいもので、新と

してはその姿が見えただけで満足してしまいそうだったが事実を事実として全て伝えなければ後味が悪い。

「一人はかつて死んだ彼、朝凧 白羽のご子息だという情報もある。どうやら、僕達は報復されるらしいよ」

白羽の名を口にして自分の中でも妙な感情の変化を認識する。動いたのは、憎しみと悲しみ。どうしてその二つが動いたのかを自覚しつつもそれを考えないようにして、新は眼下の仲間達を見回した。

眼下に集った仲間のほとんどが下を向いている。白羽という男の強さを身をもって理解しているから、その息子がどれだけの力を持っているか想像して。その姿がどうにも滑稽に思えて、新はただ薄ら笑いを浮かべることしか出来なかった。

七年前。彼らと新、そしてここにはいない健三は自らの部下を数人連れてある街を強襲した。さほど大きくない街ということもあってそこは一日で完全な廃墟と変わり、地図上から名も奪われた。本来そこまで大規模な戦闘を行う部隊ではない彼らナイトメアにとって、そこは現在の地位を確立したもつとも重要な戦場。同時に恐怖という感情を持ち得なかった彼ら番号付きにその感情を覚えさせた初めての戦場でもあった。

あの戦場において、敵はたった一人。各々得意な武器を用いて時に協力し、時に散開し戦って見せた。

全てはその男を、朝凧 白羽を殺すために。

たった一振りの刀を握り、彼は同胞を、仲間達を悉く切り伏せた。あるものは両腕をもぎ取られ、あるものは胴体を、首を切り落とされた。衣服こそ切り裂くことが出来ても、あの男の体にはほとんど傷が無く、血液はまるで流れない。疲労すら感じていないような鬼神のごとき動きはナイトメアの追隨を許さず、中位の仲間は全滅、上位の仲間まで被害は広がり、無傷で済んだのは新と健三のみ。無論無傷といっても血を流していないわけではないが、他の仲間ほどの深手は負っていなかった。

最後の一戦では麒麟が遠距離から狙撃し、健三が拳で足止め、最後に新が切りつけるという決死の攻勢で勝利をもぎ取った。

その際に一度死んでしまった仲間はそれぞれ一つずつ序列を落とし、当時適当に実力を見せていた健三が三番の地位に、予想以上の戦果を出した麒麟が七番に浮上した。その頃から七夜、叶という二人の離脱があるが二人の序列、二と九は空席として扱われている。

「朝凧 真紅、と言ったかしら？」

沈黙していた空気の中で女性のような高い声が響く。麒麟とは違いう上品な声音と口調を見せるその仲間は主に上流階級に潜入するスパイの役割を担っており、女性の姿をすることが多かった。今は男物のスーツを着ているものの、胸の膨らみがあったとしたら女性だと誤認することだろう。

「そうだね。その名前で正しいと記憶しているよ。」

「なら、戸籍でも何でも調べて居場所を特定できるのではなくて？
そういった情報操作は私達の得意分野だったはずでしょう？」

「残念ながらそれもできない。知っているものもいるだろうが、七年前の錬たちの事件以来、彼は消息不明だったんだ。先日の隠れ里強襲の際もようやくやく仕入れた情報だったというのに……どこかの馬鹿が勝手に手を出すから逃げられちゃってね」

壁に背を預け、眠っているかのように反応を見せないその男へ、新は意図して声を投げる。それでも反応を見せない彼は本当に眠っているのかと思うのだが、おそらく聞こえていないふりをしているのだろう。

無口な彼らしいと思いながらもこの中で最も情報を持っているだろう相手だ。新も知らない情報を握っていたとしても不思議ではない。どうにかして口を開いてもらおうと新は語りかける。

「どうだろう、^{ひじり}聖。諜報部の長である君なら、何か知っているんじゃないかな？」

「……知らない」

あっさりと口を開いたことについてもそうだが、その言葉にも驚かされる。

いくら部下が無能だからといって諜報部の長、千崎 聖の情報収集は独特のケーブルを使っている。そのためナイトメア間には情報も彼なら持っている可能性があったのだが、当てが外れたというでは何だが、予想外だという印象は拭えなかった。

「本当に？」

「嘘を言っただけになる」

「まあ、君が嘘をつくとは思えないけど、正直予想外かな」

正直に言ってみると聖は鼻を鳴らし、また眠ったように気配をなくした。

無口なのは彼が不機嫌だからではなく、単純にそういう性格だから。諜報活動としてパソコンばかりと向き合っている彼はクールを通り越して完全な沈黙へと変わってしまったため今回のようにコミユニケーションを取れたほうが珍しいこと。しかしそれゆえに彼が本当に何も知らないのがわかるし、これ以上聞くなという意思がその態度からも現れていると考えられた。

「ごめんね、命みこと。そういうことだからほとんど情報は無いんだよ」

「……仕方がありませんね。千崎さんまで情報を手に入れていないなら、誰一人わからないのでしょうか。無理を言っ、申し訳ありません」

「君の意見は正しいよ、命。気にしなくてもいい」

上流階級に潜入していた頃の癖なのか、彼は女性のような優雅なお辞儀を見せていた。闇の中で正確に見えるのはナイトメアならではと言ってもいいのだろうか、着ているものさえ女なら本当に女としてしか見ることはできないだろう。そのために教育された暗殺者ではあるものの、少し世界の倫理をかじった新にしてみれば少々異常ではあった。もっとも別に毛嫌いしているわけではない彼、いや、この場合は彼女と形容してやるべきか。彼女の能力は組織内でもかなり貴重な部類に入るため、戦力としても期待できる存在である。

命との会話に区切りをつけると眼下にいる番号付きの中で唯一口を開かない男へと新は話の矛先を向ける。

「君は何も質問が無いのかな？ 修三」

聖とは正反対の壁に背中を預け、巨大な鎌を胸に抱くその男は、暗がりでもしつかりと見える不気味な笑みを浮かべながら新を睨み返す。柔らかな笑顔で返して見せると彼はそれには反応せず、笑みを浮かべたまま口を開いた。

「興味が無いな。裏切り者だろうと敵対者だろうと、あの化け物の息子だろうと関係ない。ぶち殺せばいいだけだろ？」

「関係ない、かい？ 君には十分すぎるほど意味のある相手だと思うんだけどね」

「……性質が悪い……が、貴様ならではの言い回しだな、小柳」

白羽との戦いで死なず、だがもつとも深手を負ったのが彼、葉山修三だった。

彼は新たちと違い一対一の正々堂々の戦いを白羽に挑み、敗れはしたものの最後の一手を決めるための大きな役割を担ってくれた。その大鎌で彼の右腕を傷つけ、その刃を鈍らせたのだ。しかしそのために彼は片腕を、利き腕である左腕を失った。そのため本来の実力ならば新や健三と互角に戦えるはずなのに八番という低い地位に堕ちることとなっていた。

修三は大仰に右腕を広げ、肩をすくめて見せる。

「確かに。つけられなかった決着をつけられるなら、あいつの息子だろうとかまわない。なんて、言うと思っただか？」

「正直なところ、そうだと思っただ」

「残念だが違うな。あいつとの決着などとうの昔についている。今

更、興味も無いんだよ」

新の予想が完全に狂っていたわけではないだろうが、今日はどうにも斜め上に行く回答が多い。修三の場合左腕を失ったがために降格したという印象が強いため、その元凶である白羽に対しては強い憎悪を抱いていると思っている。しかし彼の回答にはまるで感情が籠もっておらず、むしろどこか清々しい印象が強かった。

小さく嘆息して、新は目の前の手すりに手を添えて皆を見回す。

「ともかく、今回の召集によって君たちの意識を強めてもらいたい。いつ彼らの強襲があるとも限らない。同時に、あちらはこちらの強襲があるかもしれないと警戒しているだろう。そういった点も考慮して、各々情報収集を欠かさないでもらいたい。以上だ」

出来るだけ威厳を持ってその場にいる全員へと注意を促し、新は出口へと向かう。自分二人分ほど大きな扉を片手で押し開けて光溢れる廊下へと抜けてから、小さな溜め息を漏らすのだった。

黒い絨毯が敷かれた長い廊下。等間隔に設置された窓からは蒼い空が覗き、少し近寄れば眼下の街を見下ろすことが出来るだろう。そつと窓に近寄って、新はもう一度溜め息をついた。

「我らが隊長殿は、随分と憂いの表情を見せておられるようで」
「っ！ 人が、悪いですよ、健三さん」

現在組織内で最高位についている新が全く気配を感じなかった。背後から聞こえたその大人びた声は仲間のものと違わぬものであったが、これが敵に回ったときにどうなるのか想像もできない。無論、戦闘になれば新の神経も張り巡らされ、彼と対等にやりあうことが

出来るだろうが今回のような無防備な状況になってしまったのは不覚以外の何物でもないだろう。

ゆっくりと振り返る。その口元に浮いた意地の悪い笑みを想像して、振り返るのが億劫になったのは言うまでもないことだった。

廊下の壁に背を預け、偉そうに腕を組んで笑みを浮かべる男。体格がいいことを隠したいのかいつも通りの黒い外套を身に纏い、腰から下の黒スーツは所々が傷ついて年季物のようになっていた。かなりの短髪で、額の傷がはっきりと見える。顎の右下にも大きな傷跡が残っており、それが刀傷であることをはっきりと主張しているのがわかる。

今回の召集に参加していなかったはずの男、美郷 健三はどこか哀れむような眼をしていた。新の被害妄想なのかもしれないが、笑みがその印象を加速させる。

「うちの隊長がどうにも情けないんでね、つい意地悪をしちまった」
「……召集をサボタージユしたあなたが、どうしてここにいるんですか？ 帰るのが面倒くさい、とか言ってたじゃないですか」
「まあな。そこは気にすんなよ」

一番気にすべき部分をあっさり切り捨てて、新と同じように窓際に歩み寄った建造は外套から取り出した折れ曲がった煙草をくわえ、火、と右手を突き出す。煙草を吸わない新はもちろんライターもマツチも持っているはずが無く、やれやれと首を振ることしか出来なかった。

「僕が煙草なんて吸わないこと、知っているでしょう？」

「そっいや、外見で高校生に間違われるから吸わないんだっただな。」

わりいわりい」

「覚えてたくせに。本当に人が悪いですよ、健三さん」

「くく……わりいな。お前の顔を見るとどうにも意地悪をしたくなる。悪い癖だ」

言いながら小さめのライターを取り出し銜えた煙草へと近づける。廊下は禁煙だったはずで、この窓もはめ込み式だから開けられないのだが、彼にそんなことを言っても意味が無いことはわかっている。

胸いっぱい煙草の煙を吸い込んで窓に向かって勢いよく吐き出す。ぶつかつた煙は行き場をなくし新の方向へと流れ、思わず口元を覆ってしまう。

「ったく、ホントに苦手だよな、お前は」

「苦手で何が悪いんだい？ 煙草なんて百害あって一利なし、だと思ってるんだけどね」

「理論で動くねえ、お前は。こういうのは単純に気持ちの問題なんだよ、気持ちの。世知辛い世の中に身を置く俺たちはこうでもしないと気持ちの入れ替えなんかできねえだろ？ 唯一の樂園が吸ってる間は得られるんだ。お前もどうだ？」

煙草の紙袋から折れ曲がった一本を取り出して、強引に握らせる。手のひらに納まった白くて小さな存在はそれだけでは何の意味もなさなはずなのに、どうしてか新の心をかきむしる。それがどうしてなのかわかっていても、新はそれを認めない。認めたくないという心が彼の中で確かに存在しているのだ。

「……おかしな話だ。心から怖いと思つた敵がいなくても、心から怖いと思つているものは存在しているらしい。何がお前をそうした

のか、なあ、新？」

「……いい加減にしないと、あなたでも容赦しませんよ」

「おお、怖い怖い。流石は現ナイトメア最強の男。殺意だけでも身が凍るね」

少し大袈裟に言つてのけて、窓から退いた健三は大きなその背を向ける。用事は済んだと言いたげに手を上げたその姿はどこと無く嬉しそうで、新はただその背中を眺め続けることしかできなかった。

手のひらに残された煙草を使い物にならないくらい強く握りしめて、新は眼下の街へと視線を落とす。何事も起こっていないような平和な世界。自らの絶対に踏み込めない世界を見下すように、彼はただ黙してそれを見つめるのだった。

「まったく、相変わらずのお堅い性格なこと、うちのトップは」

組織の中で最高位についている新、七夜、そして健三の三人にはそれぞれ企業の本部において個別の部屋が与えられている。特に規定は無く、健三の場合はホームセンターで買ってきた簡易ベッドがあるだけの小さい部屋。

簡易ベッドに身を横たえ、灰色の天井を眺めつつ健三は肺に溜まっていた煙を思い切り吐き出した。白く染まった自らの息はいかにも毒性を含んでいて、まるで毒を持った生物にでもなった気分ですわす笑みがこみ上げる。何がおかしいとは形容できないが、笑い声を抑えることができなくて健三はただ心の底から笑い続けていた。

「……はは、こんなもの、確かに毒以外の何物でもねえよな」

それでも止められない。断ち切ることが、できない。自らを縛る鎖の如く自由を奪う存在に捕まって、もがいていても無駄だと本能が理解している。煙草についてはすでに諦めがついているが、自らを捕らえて離さないもう一つの鎖についてはまだ諦めがつかないし、諦めるつもりなど毛頭ない。

不意に耳の奥にノイズが走る。左耳の裏側につけてある小型無線機が何かを受信したのだと気づいて、枕元の灰皿へ煙草を押し付け、それから左耳へと手を伸ばす。

「……留守だ。かけなおせ」

無意識にこみ上げる笑みを何とか我慢する。相手がわかっているからこそどうしても頬が綻んでしまうのだが、それは相手も同じである。その証拠に開口一番の言葉を聞いた相手は思わず吹き出していた。

「……それは、反則だ。健三」

「うるせえ。こんなのがツボにはまるお前がおかしいんだよ」

自らの耳にしか届かない声。脳内で反射しているようなその声は事情を知らぬ人間には独り言のように映るだろう。だがもちろん、対話している相手は存在している。

二十歳を少し超えたくらいの、若い男の声。最近ほとんど連絡

を寄越さなかったが、時折思い出したようにコードがある。

情報系の先任者である聖すら傍受するのが困難な高レベルの技術かつてナイトメアとして存在した女が残した技術を流用し、健三が独自に開発した無線機は七年前に作った物ながら未だ現役。聖に傍受された痕跡も無いことから、少なくとも健三が健在な間は使用し続けるだろう。

「で、今回は何の用だよ？ いつもみたいに気まぐれか？ それともホントに何か用事があるのか？」

「今回はちよつとした野暮用だよ。そつちの……」彼”についての情報はどれだけ広まっているのか。それが知りたくてね」

「相変わらず過保護なこと。いや、てめえの場合は心配してても絶対手はかさねえか。ある意味じゃお前をみならわにやらんな」

苦笑いが目に浮かぶ。虐めがいがある一番の相手で、目の前にいないのが心の底から残念だ。

「俺は招集に参加してないからわからん。が、聖ですら場所を特定できていないようだ。数日前に本社、ここが襲撃されたがそのときも対処したのは七夜と聡司。かたやガラクタ、かたや裏切り者。足取りを掴むにはほとんど使えない存在だ。こつちを出る前に七夜もそれなりの手を施していたようだし、そう簡単には尻尾を掴まれることはねえよ」

「……そっか。よかった」

心からの安堵。心配性は相変わらずで、感情が声に出やすいのも相変わらず。七年経ってもほとんど変わらぬその心に、健三は憧れすら覚えたものだ。

いつか、こいつのような人間になりたい。こいつのような人間として死にたい。ナイトメアというクローンとして生まれた身で、自分より少し年下のナイトメアにそんな感情を抱くのは随分とおかしいことなのだろう。だが彼ら二人の教育係は快活に笑い、その感情を大切にしろと教えてくれた。

「……なあ、お前は、俺を……」

怨んでいるか？

言葉を、呑み込んだ。今更言ったことで何にもならない言葉であり、健三の中では既にケジメがついたはずのこと。ほじくりかえしたところで意味は無く、どんな言葉を返されたとしても健三の心は揺るがない。

罪はこの手で、魂で背負うのだと、心に誓ったのだから。

押し黙った健三を不思議に思ったのか、耳元から心配そうな声が響く。

「どうした？ 盗聴器でも見つかったか？」

「るせえ、用事が済んだなら切るぞ」

「わかったよ。でもその前に、お前に伝えなきゃならないことがあるんだ、健三」

首を傾げつつ、何だよ？ と先を促す。嬉しそうな、しかしどこ

か憂いを含んだ声が脳内を木霊する。

「悪夢を終わらせろ鍵を、見つけたよ」

「っ！ 本当か！？」

「ほぼ九割は。裏づけを取るためにもう少し潜るから、そっちをよろしく……」彼”を守ってくれ」

「ああ、お前が残した最後の希望なんだろ？ なら命をかけて……こんな安い命でいいならだが、守りきってやるよ」

安心したような溜め息がどうしてか嬉しい。こんな自分でも頼りにされているのだという事実が、そして彼がもたらした情報が健三の感情を揺さぶっているからだろう。

「それじゃあな、健三。次に連絡するときはいいい報告を出来るよう努めるよ」

「ああ、じゃあな」

ノイズが止まり、同時に左耳へと手を伸ばし装置の電源を切る。灰色の天井へと向いている瞳はなぜかよく見えなくて、それが涙のせいだと気づくまで数秒の時間を要した。

念願が叶う。ようやく罰を与えられるのだ。背負ってきた重すぎる罪への贖罪が、許されるのだ。そのためにも

「悪夢を、終わらせてやる」

力強い言葉は狭い部屋に響き渡り、彼の世界を大きく揺らした。

〔六十六話〕 悪夢の集い（後書き）

はい、ということでもクリスマスも終わりまして……関係ないよね、そんなの。

とテンションの低い広瀬ですが今回もまあまともに更新しております。というかおそらく今年最後の更新ではないかと思えます。

気づけばこの小説を書き始めて早半年以上。最初はプロットすら考えていなかった物語が少しずつ形になっていく感覚は、この物語で初めて得た感覚でした。それだけでもこの物語を書き始めてよかったと考えています。

や、たぶん自分で書いている人からは”プロットくらい考えとけよ”とツッコミを入れられるのでしょうかがそこはほら……

……すいません。

ともかく今は形になってるからいいじゃん、とか言い訳をしてみますが不甲斐なさはぬぐえないでしょう。

こんな駄文で今年を締めくくることがお詫びしつつ

今年はこんなつたない文章を読んでもいただき、ありがとうございました！
来年も思い出したときにも読んでいただければ幸いです。

では……

良いお年を！

〔六十七話〕 朝倉（前書き）

少年と少女。二人を繋ぐ運命の鎖は、どこまでも長く、強固である。

〔六十七話〕 朝倉

光を宿した一振りの刀、不知火。雪色の鞘、柄、そして力を発揮した際に強力な光を放つその様は濁りの無い純白の存在。使用者である朝倉 天一の意識と強く連結しているこの刀には使用者ですら未だ知りえない秘密が存在している。誰が打ったかすら定かでない刀。謎がないというほうがおかしな話だっただろう。

ルーフがついているベッドに眠らされた主の隣、壁に立てかけられたその刀は沈黙を守り、主の目覚めを今か今かと待ちわびている。刀という無機物に許された行動は主に全てを委ねるということだけで、自らの意思を表現することも主と共にしかなしえない。

「せっかく目が覚めたと思ったのにすぐ寝ちゃうんだもん。心配かけないでよね」

眠る主の額を人差し指で軽く弾いたのは、主の実の妹。双子だと知っている人間は彼女たちが滞在するこの屋敷内で彼女たち本人と朝凧 真紅、そして若元 康の四人だけで、おそらくその真実を聞いても納得しない人間もいるだろう。いや、性格の違いからかほとんど全員が納得しないのではないだろうか。

朝倉 恵理。それが彼女の本当の名であり、彼女の母親が愛を込めて授けた名前。姓は母の旧姓を名乗っているが、彼女に込められた愛情のおかげか母親が死んでもしっかりと生き抜いてくれていた。

風を操る能力を有する少女。いかにもファンタジー、非現実的な存在である彼女が、しかし自らの力を受け入れた訳。それは元々、彼女の兄であり、不知火の主でもある天一を殺すためだった。

母を殺したことを打ち明けた天一が彼女に与えたきっかけ。力を手に入れ、怒りの矛先を天一に向けることで絶望せずにくれるのならそれでいい。主はそう望み、事実彼女も意図通りに行動してくれた。

しかし不知火としては、彼女と主が下した決定に納得ができなかった。

血が繋がった、それも双子の兄妹だ。殺意と憎悪を向ける対象としては間違っているし、そもそも母を殺さなければならなかった戦闘に、主の非はほとんど存在していなかった。

確かに主の力量がもっと高ければ母親を殺す必要はなかっただろう。主も、彼女もそう考えているに違いない。

だがその考え自体が間違いだ。

彼らの母親、朝倉 美里という女性は体を使った戦闘というものにはもっぱら弱く、それを補うために力を使い続け、結果肉体の節々に異常をきたしていた。彼女と夫はそれを承知しており、長くても十年は生きられなかっただろうと考えていた。

十年。それだけの時間があればいいと考えるものがほとんどである。この世界で、彼女はそれを是としなかった。

彼女の目的を果たすためには少なくとももつと長く、もつと強い力が必要になっていた。彼女の両親と妹を殺した”敵”を殲滅し、

自らの怨念を消し去るための時間と力。それを我が子に求めてしまつたのはひとえに彼女の弱さが原因である。復讐などという負の感情に縛られ、その意思を息子の託す。どれだけ愚かなことかを知つたのは死に際、息子の涙を見たときだつた。

悔いても悔いきれない自らの過ち。払拭することが出来ればどれだけ救われるか。そんな時彼女の霞む意識に噛み付いたのが『不知火』という不可思議な刀の意識だつた。

今、不知火の中に存在する意識は元々の『不知火』ではない。そもそも不知火という刀はこの世界に存在せず、発現する際、術者である天一に当人が気づかぬほど大きな負荷を与えていた。彼女は、息子のためと自らの罪を払拭すべく『不知火』という意識と契約を結んだのだ。

不知火の楔、この世界に存在するための礎となることで彼女の魂は天一の持つロザリオへと宿り、不知火の発現を補助している。

彼らを見守る白き刃は、彼らの母親であると言つても過言ではなかつた。

「どうしてあなたはいつも、心配ばかりかけるんだらうね？ 兄妹の関係、反対になつてるんじゃないの？」

慈愛に満ちた溜め息と共に少女の頬に柔らかい笑顔が生まれる。彼女本来の朗らかで優しい笑みは、天一が母を殺して以来一度として彼に向けられなかつたもの。眠っているからこそ浮かべられる本来の笑顔を、彼女は今惜しげもなく兄に向けられている。

本当はいつも、この笑顔を兄に向けたいのではないだろうか。

私は心配しているんだぞ、だからもう少し自重しろ。言いたくても言えない、伝えたくても伝えられない気持ちを押し込める少女の表情は、きつといつまでも悲しげに歪むのだろう。

今だけは、今くらいはその優しい笑みに悲しみを混ぜないで欲しい。見るものにそんな感情を抱かせる笑顔を、少女は兄に向け続けるのだった。

「いい加減、この悪趣味をやめてもらえないかしら？」

苛立っているのは声だけではなく、彼女のまとう魔力という未知の力。肉体を失っていてもその質量は変わらず、むしろ衰えを見せる前の力を引き出しているのは、単純に肉体という概念を棄てたからではないだろう。

漆黒の空間、数時間前に天一が堕ちてきた場所で、彼女は一人見たくもない光景を見せられ続けている。

それを引き起こしている悪趣味な意識とは望んで契約を結んだものの、どうにも厄介で仕方がない。

「……何が不服だ？ 気になっていた息子や娘の状況を見れるのだ、貴公にとっては喜ばしい状況ではないか」

「息子たちのすれ違いをただ見ていることの方が喜ばしい状況だつて言うのよ？ それと、その胡散臭い口調、やめてくれない？ いい加減虫唾が走るのよ、不知火」

二つの意識が形を作り出す。片方は光を吸収し、もう片方は闇を取り込み。人の形となった二人は互いに女性。純白の羽衣を羽織っ

た女性は長い黒髪を頭の後方で一本にまとめ、優しいはずの顔に怒りの色を混ぜている。闇から現れた女性は女性と形容するにはいささか若く、よくて二十歳前後、悪くて恵理よりも年下に見える少女であった。ブロンドの髪を左右でクロワツサンのように巻き、それをまとめるために左右に漆黒のリボンを巻いている。身長は純白の女性の胸元より少し低い程度で、身体的特徴を述べるならば、貧乳だった。黒い羽衣を羽織った少女は嬉しそうに相貌を崩し、純白の女性へと手を差し伸べる。手を伸ばせば簡単に届きそうな距離だというのに、彼女たちの間には絶対に埋められない距離があるかのごとく、女性は決して手を取ろうとはしなかった。

「貴公の気には召さなかったようだな、朝倉 美里」

「黙れ。本当の姿をさらせば舐められると感じて息子に姿を見せない腰抜けは、とつとと光の世界に帰ってしまえばいいのよ」

「それはあなたにもいえるよね、美里」

唐突に少女のものへと変わったその口調に女性、美里は戦慄を抱く。左右のクロワツサンが揺れ、少女の表情は極めて穏やか。だといつのに彼女の心を取り巻くのは、少女から発せられる奇妙な圧力である。笑顔の奥に潜めた感情。少女に感情などという概念が存在していたことにも美里はただ驚くことしか出来なかった。

「死者であるあなたをこの世界に留めているのは私と彼、天の魔力。どちらか一方がなくなってもあなたが消えることはないだろうけど、彼の力は激減するでしょうし、あなたのせいで彼は力を使いこなせなくなるかもしれない」

「……脅しのつもり？」

沈黙が降り注ぐ。ぶつかった視線は火花なんて安っぽいものが上がるものでもなく、彼女たちが存在している空間そのものを壊す勢

いで世界に影響を与え始める。闇に光の亀裂が生じ、光に闇が混じる。

気を抜けば取り込まれるかもしれない。そんな危険が存在しているはずなのにどうしてか美里は酷く心が落ち着いているのを感じていた。

「……なんて、言うと思う？」

「迷いなく言つてのけそうなんだが……ま、今回は冗談と受け取つてもいいのかな、不知火の妖精さん？」

「えへへ、ちよつとふざけてみたかっただけですよ。驚かせたなら、申し訳ない」

姿相応の幼い笑みを浮かべ彼女が纏っていた緊張が弛緩していく。同時に美里も全身を取り巻いていた魔力を収縮させ、霧散させることなく自らの胸の中へと押し込める。肉体を失った美里の魔力は一日に回復する量が極端に少なく、その大半は天一が刀に込める魔力の残滓で構成されている。こんな馬鹿げたやり取りでなくしてしまふのは少々どころかかなり痛い。

少女は自らが羽織った衣が脱げそうになるのもかまわず、美里の胸の中へと飛び込んでくる。

「ごめんね、美里。辛い思いをさせているのはわかってるの。でも、今の私や天にはあなたという楔が必要。どうしても、この現実だけは受け入れてもらわねばならないわ」

わかっていることだ。美里も最初から承知の上で彼女が持ちかけた契約を承諾し、今こうして彼女とともにいる。美里の光は天一の力を、少女の闇は倒してきた敵の魂や精神力をそれぞれ糧として存

在している。

美里は優しく首を振り、彼女の小さな頭へと手を乗せる。

「大丈夫。あんたが思っていた以上に性格が直つてて、良かったと思ってるくらいよ」

「もお、昔とは違うんだよ？ 私だって、もう子供じゃないんだから」

「や、どこからどう見てもちっさい女の子にしか見えないから」

少女は両方の頬を膨らませ、言外に心外だという表現を試みせる。その仕草こそが子供の証拠なのだと思っていたが、どうやら彼女は意図的にこういった仕草をして見せてくれているらしい。それでは気づいたのは彼女とともに不知火の中で生き始めた頃のこと。今では見慣れてしまったが、このころころと切り替わる性格は多重人格の一種なのではないかと考えたことも一度や二度ではない。

手のひらに馴染む感触は我が子を撫でているようであり、ずっと昔に存在していた妹を撫でているようであり。

いいや、この少女こそその妹であることを美里はよく知っていた。

少女の姿、美里が最後に見たときの姿そのままに不知火の意思として現れた実の妹に、美里ははじめ怒りを覚えた。不知火という妖刀が見せている幻で、自らを惑わせるものなのだ。だが話すにつれ、触れるにつれて彼女が本物の妹であることを実感していった。

魂を刈り取る死神の刀、不知火。日本に伝わる神獣の名を冠する

その刀はしかし、この日本で創られた刀ではなかった。

彼女たちがもともと存在していた世界で打たれた刀。魔術という不可思議な力を持って構成されたその刀には強者の魂を欲する意思が存在していた。美里の家族を惨殺したのもこの刀を使っていた男であり、その際妹の魂は刀に喰われた。

刀の使い手を倒したのは美里と仲間たちで、回収した不知火を天一に授けたのも彼女だ。その秘密に気づくべきだったと嘆いたのは真相を知った直後のこと。すでに自らの魂すら刀に呑み込まれ、使用者である息子に言葉を送ることすら難しくなった。

それでも死んだ妹とこんな形で再会できたことは、嬉しいことでもあった。

「……いいの？ 美里は自分のことを、ほとんど何も教えてないんだよね？」

「天と恵理には、確かに何も教えてないわね」

「なら天はいつたい誰に復讐すればいいの？ 一生見えない敵を追い続けなきゃいけないの？ そんなの、悲しすぎるよ」

見上げるブルーの瞳には悲しみの色が混じり、言葉が剣となって心へと突き刺さる。

自らが背負わせてしまった重い十字架。それを少しでも軽減させようと契約を結んだというのに、結局のところ何もできていない自分。気づいたときには齒を食いしばって息子たちの争いを眺めることしか出来ずにいた。

その苦しみは妹が背負ってきたものと、同じなのかもしれない。

ずっと刀に縛られ、姉に意思を伝えることすら出来なかった少女。彼女は敵の刀となり、美里と戦ったときいったい何を考えていたのだろうか。悲しんでいたのか？ それとも仇を取ってくれて、喜んでいたのか？ 何も考えず、状況を静観していたのだろうか？ たとえどれだったとしても、あの時はそんなことを考えている余裕などなかった。

だからきつと、息子たちも同じに違いない。母の存在など全く気づかずに、ただがむしゃらに自らの望んだ道をひた走る。その過程で何を失い、何を手に入れたとしても美里には口を出すことなど出来はしないのだから。

妹のときより良い点といえば、不知火の使い手が敵ではないという部分だけかもしれないが。

少女の頭に手のひらを馴染ませるように、美里は優しく撫でる。

「無責任、って皆は言うんだろうけど、あの子達ならきつと自分の答えを見つけられる。復讐を諦めるかもしれないし、仇敵を見つけてくれるかもしれない。でも、私は何もしない。ただ黙って見守るだけ。私の復讐を押し付けてしまったのは悔やんでも悔やみきれないけど、私はサポートするだけで、決めるのは全て朝倉 天一という個人でしかないの」

「……それじゃ、美里が不知火と契約した意味が、ないじゃない？」
「あんたの顔をもう一度見れただけでも十分意味があったと思うてるわよ、私は」

慈しむ心は妹が生きていた頃には与えられなかったものだった。人の親となった今だからこそこうして素直に愛情が表現できる。何

の躊躇いもなく頭を撫でることができる。

「それにね、なんだかんだ言っても私は、あの二人を信じているから」

出来のいいとは到底言えない馬鹿息子と、母親にくつついてばかりだった娘。言葉だけなら信用する対象としてあまりにも心許ない存在だが、それでも美里は自らの子供を信用している。

彼らが導き出す答えを、全て許せると心から思っている。

「変わったね、美里は」

「あんたは全く変わってないけどね」

小動物のように頭を撫でられて気持ちのよさそうな目をする妹。女の美里から見ても可愛らしいその姿に、もし生きていたとしたら色々な人に好かれ、充実した人生を送ることが出来たのではないかと考えてしまう。

今更考えてもどうしようもないが、それでも考えてしまうのは人として仕方がないことではないだろうか。

人として、か。

人間としての定義から離れてしまった自分が言えることではないが、そもそも人間というものは生物学上の定理である。”人”としての定義などいった誰がしたというのか。魂だけでも人、肉体から離れたとしてもそこにある心こそが人なのだと美里は考えている。

でなければ、妹があまりにも不憫だから。

華奢な体をそっと抱きしめて、美里は小さな暖かさに満たされていくのだった。

刀の世界で何が起こっているかなど知る由もなく、恵理はただ静かに眠る兄の寝顔を眺めている。白い羽根布団に隠された首から下の部分には小さな切り傷とぼろぼろになった服が存在しているが、その寝顔には全く傷がなく、そして今までに見たことがないほど安らいだ寝顔をしている。

まったく、どうしてこうも能天気眠っていることが出来るのだろうか。

双子の兄ながら適当で面倒くさがりで、何事も真面目に取り組もうとする気配がない。そういった点において真逆である恵理にとっては理解できない存在であり、同時にどこか羨ましい存在でもあった。

こんな風に能天気生きられたら楽しいんだろうな、見つけられなかったものがたくさん視界に入ってくるんだろうな。そんな直感が、しつかりとある。

「馬鹿兄を持つと、妹は大変なんだよ？」

反応を見せない相手に、恵理は語りかける。一応は高嶺家専属の医者に見せたのだが、身体的には小さな傷こそあるものの全くといっていいほどの健康体なのだという。魔力の大量消費が限界か、と考えもしたがそもそも今の天一はまともな魔力解放が出来ずにいる。康との戦闘でも不知火という妖刀の力を借りていたわけだから、その可能性は極端に薄くなった。

ならば何故、天一は眠りから覚醒しないのか。

考えられる可能性はほとんど康が却下した。恵理よりも長く力に触れている康の意見なら曲げることも出来なくて、結局恵理はこうして寝顔を眺めていることしか出来ずにいる。

ほっとけば治るよ。

康の言葉がやけに楽しそうに聞こえたのは、恵理の勘違いなのだろうか。真紅は真紅で何か思うところがあるのか大丈夫だろう、なんて言葉を残して自室へと戻っていった。結果彼の傍には恵理が残り、こうして枕元の椅子に腰掛けている。

「……あなたの光を支えるには、私の風じゃ弱すぎるのかな？」

元々三人の力、その方向性は全く別のベクトルを持っていた。空間を掌握、制御する康。風を自在に操り、自らの肉体すら覆いつくす恵理。そして世界に存在する光を自らの力に変える天一。互いに支えあうことが出来ない属性を持つ三人。形のない三つの存在が支えあうことなどありえないのかもしれないが、恵理にとって悲しいことに変わりはない。

朝倉 恵理、か。

今まで天一に支えられ、それがどれだけ強いものだったのか”驚村”の名になってから実感した。生活していく面でもそうだったが、精神的に弱っていたときや肉体的に疲れていたとき、いつだって天一は恵理を優先し、自らの負担など省みずに行動していた。

どれほど救いになっていたのか、彼は知っているのだろうか。どれほど彼が弱っているのか、自覚しているのだろうか。どれほど、支えになりたいと思っているか、知っているのだろうか。

恵理に出来ることなど限られていることは、重々承知している。それでも何か出来ることはないか模索することに、意味がないとは思えない。

「そよ風になんか意味はない。あんたはそう言うのかもれない。でもね、私のそよ風でもあなたを想う気持ちは誰よりも強い。そう、思ってる」

康よりも強く、師匠よりもなお強い想い。支えられてきた年月を、兄妹として育った情を、全ての感謝と心を込めて、誰よりも強く彼を想う。もし天一に大切な人が出来たとしても、恵理に大切な人が存在したとしても、互いのことを想う心は弱まることありえないから。

見た目よりも柔らかな頬に触れ、小さく笑みを漏らす。

どれだけ成長しても幼さが残されたその頬は、恵理にとってお気に入りのもので。眠っているときにしか触れた事がなくて、おそろく面と向かって触れようとしたり怒られてしまっただろう。でも手のひらを訪れるほのかな暖かさと安らぎは恵理の心を満たしていく。

復讐なんて、今はどうでもいい。彼女自身の復讐も、母の復讐もどちらも今は蚊帳の外にどけてしまえ。守りたい人を苦しめるのが復讐という存在ならば、なおさら念頭から消し去ってしまえばいいのだ。

「……なに、やってんだ？」

体のほとんどを動かすことなく目蓋を半分ほど開いて、天一は覚醒する。最初から起きていたかのような錯覚が生じるものの、長年共に過ごしてきたから彼が完全な寝起きで、寝ぼけていることがすぐにわかった。

だから恵理は、そっとその額に手を乗せて、大丈夫と微笑む。

「眠り王子の眠りを覚ますには、姫のキスが必要かなあと思って」
「……姫と王子の役割が入れ替わってるのは、気のせいじゃないよな？」

「さて、どうでしょうか？ まだ万全じゃないんだから寝てなさいよ」
「体は動くんだ。起きてても問題ないだ、ろ！」

反動をつけ布団を吹き飛ばすと共に上体を起こす。一見行儀の悪い起き方だが布団は綺麗に三度折り、自らの手間を最小限に抑えられるように計算されている。自堕落が人間の皮を被っているような

人だ、これくらい出来て当然で恵理自身も何度か目撃しているのだが、改めて馬鹿なスキルだなと実感してしまう。

ぼろぼろの服を軽く調べてから天一は完全に覚醒する。その顔には意地の悪い笑みが浮かび、何か悪巧みをしているのが容易に想像できる。

「んで、恵理。二つばかり質問させてくれ」

「何よ？」

「今何時だ？」

「えっと……」

左腕の腕時計へと視線を落とす。ピンク色のベルトがついた可愛らしいデザインが気に入っているもので、小さな二つの針は五時を少し越えた時刻を刻んでいた。

「五時、ちよい」

「どおりで腹の虫がなるわけだ。で、もう一つの質問。夕飯は何だ？」

「……そんなの、京に聞いてみなきゃわかんないわよ」

頭を振る。今まで原因不明で意識を失っていた男とは到底思えないが、これが朝倉 天一という男の利点であるのだからどうしようもない。

遅しい、といえば聞こえはいいのだろうか。

「まったく……心配してた私が馬鹿みたいじゃない」

「ありゃ？ 心配してくれたんだ、そいつはありがたい」

聞こえないほど小さな声だったはずなのに天一は耳ざとく反応してみせる。内容を理解されたのは耳がいいからだけではなく、どこかが繋がっているからだを知っているのだが、どうにもこればかりは厄介だ。

「このまま死んだら死体をどうしてくれようか、本気で考えるとこ
ろだった。そういう心配よ」

「うあ、厳しいことを平然と言つてのけるな」

「当然。私があんたに優しいことなんて、あつた？」

「……なかつたな。一度として」

悲しそうに瞳を潤ませて見せるが、それが演技であることを知らないわけではないし、そもそも彼の泣き落としに屈するような女ではない。

「ほら、起きたならさっさと行くよ。なんだか私もお腹すいてき
ちやつた」

「だな。んじゃ食堂に案内してもらいましょうか」

「へ？ 食堂の位置つて、知ってるんじゃないの？」

「いや？ 俺は二階の間取りは聞いているが、食堂がどこにあるかは
聞いてないぞ？」

二人そろつて顔を見合わせる。大きくない家ならこんな問題も起
こらないだろうが、ここはかなりの豪邸。間取りがわからないとい
うのはあまりにも間抜けであり、同時に少しまずい問題でもあつた。

結局二人は京を呼び出し、食堂の位置を教えてもらつことにした
のだった。

〔六十七話〕 朝倉（後書き）

新年に入って一発目です。

皆様、今年もよろしくお願ひします。

と、挨拶もそこそこに、今回は天一の母、そして妹の回でした。

以前に、天一はマザコンだったのか！と述べた回がありました
が、今回は恵理のブラコンぶりが露見してしまいました。や、結構
皆さんわかっていたと思いますが……。

え〜と、色々書くべきことや書きたいことがあるのですが今回
は自重する、ということでは……。

手抜きじゃないよ？

ではでは〜。

〔六十八話〕 決意の夜に 前編（前書き）

少年の握る剣に、いったいどんな意味があるのか。
少年のかざす刃に、心がこもっているのだろうか。

思いを貫く、意味とは何だ。

〔六十八話〕 決意の夜に 前編

ナイトメアの現状を知る人間、氷室 七夜。彼のもたらした情報と対抗策は真紅たちにとつて有益なものであり、同時に衝撃を与えるための爆弾でもあった。

作戦室として使わせてもらっている荘介の執務室。そこには真紅、天一、康、空の四人と七夜がいた。左右のソファーに二人ずつ腰掛け、荘介の机に七夜は腰掛けている。深夜呼べるほど遅い時刻での召集は他の人間に知られたくないという意図を含んでいるのだと、真紅は考えている。

「……なるほど。つまりその千崎 聖という男が、情報操作の最前線に上がっているということなんだな？」

真紅の言葉に、七夜は小さく頷く。

「そうだ。現状の情報では上位ナイトメア全員が参戦するなんて事態にはならない。出てくるとして二人、千崎 聖と渡良瀬 命だろう。」

「聖ってやつが情報系のプロだつてことはわかったんだけど、その命っていうのはどんなやつなのか、教えてくれるかな？」

敵を知る必要があるのはここにいる全員に共通することだが、康はその中でも筆頭といえるだろう。手足として行動するのが天一や真紅、空のような存在ならば彼はブレーン。敵の性質を理解していなければ行動する三人が危なくなる。

「渡良瀬 命。外見は女性以外の何物でもないが、実質は暗殺者と

いう称号が最も似合う男だ。得意武器は不明。武器を持っていないときえ言われている。俺自身、あいつとの接点が少なすぎて情報を捉えきれていないんだ。だが行動を起こすならその二人だろうと考えているし、実際、あの二人以外は動くこともないだろう」

「二人の階級は、わかるよね」

「ああ。聖は十番、命は六番だ」

十と、六。

その序列に意見したのは、天一だった。

「間のやつらはどうしたんだよ？ 自分より序列の高いやつを尖兵として駆り出すなんて、どうかと思うんだが？」

「確かに現在の序列ではそうなっているね。でも、実質的な戦闘力、行動力は異なっているんだ」

「はあ？ 序列つてのがお前たちの戦力把握なんだろう？」

「そう。でもそれは、かつての話。現在の序列は七年前に改変されたものであり、お互いに戦って手に入れた序列ではないんだ」

三人はわからないと首を傾げるが、真紅には直感としてわかることがあった。

「……七年前の、あの戦いか？」

「流石。君はわかっているようだね、真紅。そう、七年前、朝風白羽との戦いだ。参加していなかった俺、鍊、聡司、叶の四人はそのままの序列で収まっているけど、他は色々と変わっているからね。序列をそのまま強さの基準には用いることが出来なくなっているんだ」

「ならその命っていう男が、強さでは下から三番目と考えていいのか？」

「そうかもね。ただ、現在の序列で考えるなら、最悪の相手が出てくる可能性もあるんだ」

「最悪の、相手？」

七夜は何かを振り払うように首を振り、大きく息を吸う。

「今は訳があつて下がっているが、元々の実力は俺や錬にも劣らない。残忍さだけなら俺たちの斜め上を行くだろう」

「そんなやつがいるのか？」

「現在は八番に甘んじている。あいつが出てきた場合、ここにいる全員が束になつても敵うかどうか……正直、危ういところだ」

凶暴化した聡司と戦った際よりさらに多いメンバー。だということに勝てるか危ういほど強力な相手というのは容易に想像できるものではない。一緒に戦った天一と顔を見合わせるがあちらも想像できないように首をかしげる以外にできることがなかった。

「もつともこれは最悪の場合。彼が出てくることはまずないだろう」「そいつの特徴は？」

質問をするのは康が多いが、このときばかりは天一がそんな言葉を漏らした。少しでも特徴を聞いて警戒を強めるつもりなのか、単純に好奇心なのか。どちらにせよ有益であることに変わりはない。

「茶髪で、身の丈はさほど高くない。ただ身長と同じくらい巨大な鎌があつて、一度目撃すれば嫌でも忘れなと思う」

「他には何かないのか？」

「そう、だね。外套に隠れて見えなと思うけど、彼には左腕がな

い。七年前に切り落とされたんだが、それが原因で彼の序列は下がっている。それ以降彼が戦っているところを見たことがないから、今の彼がどれほど戦えるのかわからないんだ」

そういつた面でも警戒すべき対象なんだよ、と七夜は言う。

基本的に今の彼らは防衛側だ。相手の戦力とこちらの戦力の差を正確に把握できていない以上、戦う際は一対一に持ち込まず、出来るだけ多人数で仕掛けるようにと康からのお達しがある。八番の男が出てきた場合、最低でも三人は戦力を割かれると考えても、同時に何人かが攻めてきた場合は対処に手が足りなくなる。最悪の場合は叶や恵理を投入することで合意していたが、防衛地点をこの高嶺家と仮定する場合、最低でも一人は家主である二人の護衛として必要である。

そのお役目は愛美と仮定されているが、中級以下のナイトメアがそちらを襲わないとも限らない。戦力に余裕がない以上愛美を信頼するしかないのだが、いざとなれば一対一となる覚悟も持たなければならなかった。

ナイトメアと真つ向から戦えるのは七夜、真紅、天一の三人。しかし現在の天一が本調子でない以上、天一には康と組んで行動してもらい、銃火器を使用する空には真紅のサポートをしてもらうことになっている。七夜は基本、叶と行動することになっているがそのフォーメーションも少しずつ変更を加えなければならない。

「ともかく、その片腕の男が出てくるのはイレギュラーだ。一対一で戦うのは問題外。最悪でも三人以上で戦うこと。わかった？」

康の忠告ももつともだが、本当にここで戦闘が起こった場合、そ

の忠告を聞けるかは怪しい。特に天一と真紅は刀という汎用性の高い武器を使っている。ほとんど刀を抜かない康やある程度距離をとらねばならない空よりもよほど単独行動に向いていた。

新しく手に入れた六花の性能も把握できていない今は軽率だが、恵理と共に刃の雨をかいくぐったときの力を引き出せばそれも可能ではないかと考えている。

「……若干二名ほど、わかってない人がいるみたいだけど、気のせいかな？」

半眼で睨まれ天一は白々しく口笛を吹き、真紅は視線をそらす。わかりやすい反応だがもちろん二人ともわざとで、最悪の場合は単独行動をとると暗に伝えていた。

しつかりと伝わったのか康は深々と溜め息をついて小さな声で死ぬなよ、と呟くのだった。

話し合うこともなくなったわけで早く自室に戻って休めばいいところを、五人はなぜか部屋に残りコーヒを啜っていた。

用意されたのは四つのマグカップ。香ばしい湯気が香る中、四人はミルクを入れたり入れなかったりと思いつきに調節し、真紅はブラックのままそれを啜る。苦味と共に若干の酸味が訪れるのはコーヒーとしては果たしていいのか悪いのか。どちらにせよ眠気を覚まさせるには十分なものである。

「でも、彼も随分と肝が据わっているね」

「……単純に馬鹿なだけだと思うんだがな」

七夜の心底感心するという眩きに真紅はどうしても納得できない。

真紅の隣にはソファーに埋もれるような体勢で眠る空の姿があった。いつから眠っていたのかは不明だが、話し合いの際に一つも発言しなかったことを考えると最初から眠っていたのではないかとさえ思えてくる。

「まあ空が参加してもあまり進展はなかっただろうし、別にいいんじゃないかな？」

「甘いぞ、康。こいつを甘やかしたら、今度からは会議に参加すらしなくなる。そうなたら色々と面倒だから、出来ればこいつにはきつく当たってくれ」

眠る空の頬に人差し指をつきたてる。しかし起きる気配はまるでなくて、静かな寢息は規則正しく漏れ出していた。

「戦えると思うか？」

空の実力は怠けなければ中級のナイトメアとは対等以上に戦えるものだ。だが番号付きの敵と遭遇したことがない、また新たな銃がどれほどの性能を持っているかを考慮した場合、最も分析しづらいのが空だった。

しかし康は何事もないよな澄ました笑顔を浮かべると、大丈夫だよと言葉を紡ぐ。

「空の身体能力は高い。いざというときの力も十二分に発揮してくれる。確かに不安要素は一番多いだろうけど、それでも十分すぎるほどの戦力だと思っているよ」

「……そうか。なら不安要素もひっくりくるめて何とかできる戦略を組

み立ててくれ」

「もちろんそのつもりさ。だから大船に乗ったつもりでいてくれ」

康の力強い言葉は軍師としては本当に心強い。事実先に聞いていた戦術と戦略は真紅では到底考え付くことが出来ないものであり、天一や七夜も舌を巻くものだった。

空は基本的に中距離からの狙撃に徹することになっているため真紅としても戦いやすい。そのせいで狙撃訓練を強化しなければならず、こうして疲れが出ってしまったのだが、成果はしっかりと現れているといってもいい。

「さてと、俺は先に寝るかな。天と真紅はどうする？」

そう言いながら眠っている空を軽々と肩に担ぐ。起きるまで待っているつもりだったがその気配すらない。ならば明日の朝にでも詳細を確認すればいいと判断したのだろう。

天一は何も言わずに席を立つ。執務室に残る七夜は荘介が残している雑務をこなしてから自室に戻るのだろう。真紅も普段なら席を立つてすぐ自室に向かい、明日の体調を整えるために眠ることを優先するはずだった。

しかし真紅は執務室を出てすぐ彼らと別れ、腰に差した新たな刀“六花”と共に庭へと足を進めた。

雲がまるでない夜空。星々は自らの存在をかけて煌き、月は鏡のように太陽の光を跳ね返して金色に輝いている。漆黒の世界を照らし出す金色の光に目を細め、真紅は芝生の上にそっと腰を下ろした。

右手で柄を、左手で鞘を握り緩やかに刀を抜く。月光に照らされた刀身は三日月のように輝き、真紅の視界の中には二つの月が燦々と輝いている。

美しい、と想ってしまうのは真紅だけではないだろう。刀の価値が切れ味とその美しさで決まるのだとするならば、六花は真紅の身に余るほどの刀なのではないかと錯覚してしまう。

錯覚では、ないのかもしれない。

六花という刀は美しく、揺らめいていてもどこかに芯が通っている。しかし真紅には本当に守りたい信念も、貫き通す力も存在しない。欠片が存在していたとしても、本当に小さくて見落としてしまうほどだろう。

使い手のほうが見劣りするなど、滑稽すぎるのではないだろうか。

「……父さん。あんたはどんな気持ちで、こいつを握っていたんだろうな？」

打ち直されたといっても元々は父の刀。その根本は変わらず、宿った思いは消えたりしない。

七年前にあった戦い。その際に白羽が使っていた刀こそ六花だった。そもそも彼専用に使われた刀が大きな戦いで使われないはずもない。

どういった経緯であの刀工の手に渡ったのか定かではないが、七

年前の戦いに何らかの形で関わっていたのは間違いないだろう。

どんな気持ちで白羽がこの刀を握っていたかなどわかるはずもない。なのにどうしても気になって仕方がない。

それは、劣等感。

父に劣っていることは最初からわかっていることだ。戦闘経験、腕力、知力、全てにおいて敵わないことは承知している。だが、だからこそ父ほどの力があつたらいいと思ってしまうのは人間の性ではないだろうか。

「……守りたいものも、信念もないのに力を求める。それは滑稽なんでしょうか。あんたは、どう思う？」

この世にいない人間へと投げかけられたその問いは夜の冷たい空気を振動させ、星が輝く漆黒の夜空へと溶けていく。広大な庭には他に誰もいなくて、言葉はきつと真紅以外には届かない。それでも胸につかえていた思いを言葉に変えて解き放つたことが真紅の心を軽くする。

嘘つき。

どこからか声が聞こえたような気がする。その声が誰のもので、どこから聞こえたのか定かではないが、中性的な声は真紅の心を見透かしたように的確な言葉を残し、漆黒の空気へと消えていく。

嘘をついているつもりは毛頭ない。信念なんてない、守りたいものなどないはずだった。

誰かを守るほど自分は強くない、何かを貫き通せるほど強くないと自らに言い聞かせていた。

その考えこそ信念であり、守りたいものが何であるのか気づいたのは、いったいいつだっただろうか。無意識のうちに守ろうとしていたもの、自分の心を覆い隠してでも安全な場所に置いておこうとした存在。別に恋愛感情や、所有欲に突き動かされたわけではない。ただ、ただ笑っていてほしかった。

彼女本来の笑顔を浮かべていてほしい、その笑顔を曇らせる存在を作りたくない。その一心だけで隠し通した、自らの素性。彼女にとっては過去の存在であり、記憶に残ってすらいなかったかもしれない。むしろそうであってほしいと願った。

今の真紅は、強くないから。父ほど強くない、錬ほど強くない、そして天一ほど、強くない。誰にでも勝てるような人間になりたいたとは思わなかったが、信念を持つには、守りたい存在を手に入れるには早すぎると思った。

星が散りばめられた空を見上げる。自らの力で光を放つ星、太陽の光を反射して光る月。共に光を放っているように見えても異なった手段で光り輝く存在は、今の自分と強者たちの違いを表しているように思えて仕方がない。

父や天一たちは自らの力で輝いているのに、自分はいつまでも何

かの力を借りて輝いている。六花の存在、仲間の存在、そんなものがあるからこそ真紅は戦えているのだと思う。

天一たちが輝ける理由が何なのか、それが少し気になった。

力が先なのか、守るものが先なのか。

一人で考えていても埒が明かない、螺旋に続いていく問い。深みにはまっていく自分を理解していても、止められるはずがない。

「しん、く」

思考の波を止める防波堤となったのは、背中にかけられたか細いくせにどこか透き通った声。弱々しいとさえ思えてくる声には家主の自然体と呼べる落ち着きはなく、まるで棄てられた子犬のようなと言えるほど躊躇いがちなもの。

振り返った先にいるのは、おそらく真紅が想像した少女だろう。だがわかっていても、今の真紅には振り返ることが出来なかった。

今、振り返るわけにはいかないと思った。直感にも似た感情は全身を完全に硬直させ、大木のように両足を止めたまま夜空に視線を投げ続ける。

だが反応しないわけにもいかず、声だけで聞こえていると反応してみせる。

「……京か。こんな時間に、どうしたんだ？」

出来るだけ穏やかに声を投げたはずだったが、言葉のキャッチボ

ールはスムーズに行われることがなく、躊躇っているような空白が二人の間を取り巻いている。大きく息を吸い込むような音が少し離れていたはずなのに聞こえてきて、何かを話そうとしているのが容易に想像できた。

「あの、お父さんの部屋で何かやっているのが、聞こえたから。どうしたのかと思って」

「大丈夫。心配をかけるようなことは何も無いから、安心してお休み」

安心させようと放ったのだが、京は未だ離れる気配を見せない。いったい何が気かりなのか振り返りたくなっただが、本能が身体動きを封じ込めている。

自分自身の行動に理解できないものを感じながらも、真紅はまた沈黙の中に身を投じる。

「また、戦うんですか？」

「どうだろうな。ここが戦場になることはできるだけ避ける方向だが、いつ戦わなければならなくなるかわからない」

「でも、あなたが危ないことは変わらないんですよね？」

「……そうだな」

どんな状況になろうと真紅が戦線に出ないという選択肢は存在しない。ナイトメアとの戦闘において主力と考えられているのが天一、七夜、真紅の三人であり、残りのメンバーは支援や作戦の随時変更を考慮するなどそれぞれの役割が存在している。実質上は最も危ない位置にいて、一番実力が低いのが真紅であり、死ぬ可能性が高い。もっとも簡単に殺されてやるつもりはないし、自分が死んでしまえば全てが終わってしまうことも承知している。

悪夢を終わらせるために、まだ死ねない。

それだけではないと心のどこかで聞こえる訴えを完全に無視して、京の言葉を待つ。三度静寂に彩られた世界は風の音すら消え去って、全ての音が遠ざかっていくような感覚が真紅を襲う。

どれだけ時間がたったのか。真紅が口を開こうとした直後、その背中に少女の弱々しい声が投げられる。

「……………死な、ないで……………」

〔六十八話〕 決意の夜に 前編（後書き）

え〜、いろいろあって更新が遅れてしまいましたが、決意の夜に、
です。

本当はもう少し書いてから更新するつもりだったのですが、まあ
今回は仕方がないかなあと。

星のない夜空の下で、は本来四章で構成するつもりで書き始めた
ものですが、神風学園での物語が一章、七夜が合流した後は二章と
自分の中で区切っています。

それにあわせて文章量も少しずつ多くしていったのですが、微妙
にうけが悪いような気がします。

それでも、これは色々な意味で挑戦しようと思いだめた物なので、
まあいいかなあと……。

はい、雑談しゅりよ〜。

次話をもっと早めに更新しますのでどうぞよろしく。

ではでは〜。

〔六十九話〕 決意の夜に 後編（前書き）

少女の瞳は優しすぎて、少年の心を傷つける。

けれどそれが、心地いいと感じてしまうのは、どうしてだろうか。

〔六十九話〕 決意の夜に 後編

音という概念自体が完全になくなってしまったような違和感。彼女が必死にひねり出した言葉、それがあまりにも予想外で、けれどどこかその言葉を想像していた自分がいて、真紅はただ立っていることしか出来ずにいた。

真紅にかまうことなく、京は弱々しかった声から徐々に力を取り戻してゆく。

「死なないでください。戦うことなんてできない私が言えることじや、ないのかもしれない。でも、どんな状況に置かれても、死なないでほしい。それが私の、正直な気持ちです」

振り向くことが、できない。

彼女の言葉そのものに衝撃を受けたわけではない。彼女にとって誰かが死ぬことは想像できる最悪の可能性であり、絶対に避けたい事象なのだろう。

真紅が動けないのは、自らの心に存在していた負の感情を、理解してしまったからだだった。

心のどこかで、死んでしまってもいいと思っていた。

鍊が生きていることを知り、七夜たちと共に防衛時の対策を練っているときから既にその思いは鎌首をもたげていた。悪夢を終わらせるための最大の鍵、工藤 鍊の生存とこれだけの戦力。企業そのものを解体させるにはいたらなくとも、ナイトメアを、悪夢を終わらせることはできるだろう。もし高嶺の屋敷を彼らが突き止め、襲撃してきた際、最悪の場合は刺し違えてでも敵の戦力をそぐべきだと真紅はどこか他人事のように決めていた。

仲間がそんなことをしようとしていたなら、全力を持って止めるはずなのに。

選択自体を間違いだとは思っていない。後を任せ、悪夢を終わらせるための礎となれるのなら、真紅の願いは成就する。

誰かの心に残る傷を、考慮しなければの話だが。

「あなたの話を聞いて、考えていました。どうして自分のことを思いつかせないように行動して、最後までそれを貫こうとしたのか。最初は、それがあなたの優しさだと思っていた。悲しい現実から私を逃がしてくれたんだと。優しいあなたならその意味もあったのでしょうか。でも、もう一つ意味があった。あなたは最初から、死ぬために生きているんじゃないですか？」

反応することができない。

その言葉はまるで杭のように、真紅の背中に深々と突き刺さる。痛みは背中を貫通し、胸を締め付けられるような痛みが言葉以外の音が存在しない世界を歪めてゆく。

「親しい人の死を間近で見続けてきたあなただから、悲しい世界を知っているあなただから行き着いた答え。あなたは戦いの中で死ぬことを、願っていた」

母親を失い、父の背中を見送り、心の支えだった存在の死を目の当たりにした。人の死が一瞬であることを知らなかったわけではないが、大切な人たちを同時期に失った衝撃は少年だった真紅に一つの答えを与えていた。

目的を果たすために死ねるのなら、それでいい。

悪夢を終わらせる、それが直接的だろうと間接的だろうとかまわらない。何らかの形で関与することに意味があるのであって、その中で死んだとしても本望だと、いや、むしろ戦いの中で死んでしまえばどれほど楽か。

空や愛美、天一のような仲間を得て、簡単に死ぬわけにはいかないと思い始めてからも、結局考えを払拭させるにはいたっていない。

「そんな死に方、悲しすぎる」

しかし彼女がそれに気づいているとは思わなかった。

彼女の前ではまだ、戦う時の朝風 真紅という素顔を見せてはいないはずだった。見られていたとしても七夜の一撃を回避したあの一瞬のみ。だというのに彼女は真紅の、戦場でしか見せない素顔を的確に汲み取っていた。

観察眼が鋭いのか、単純に真紅個人の心を見抜いただけなのか、ともかく彼女の前で嘘をつくことができなくなっていた。

「……じゃあ、悲しくない死に方って、なんだ？」

「え？」

「悲しくない死に方なんてないだろう。人なんて簡単に死んでしまう。その死に方がどんなものだったとしても、必ず死ぬことも、簡単に死ぬことも変わらない。なら自らの思い通りに死んだほうが、よほどいい。俺は、そう思っている」

悲しい死に方。彼女が思うそれは、確かに真紅にとっても悲しむべきものなのかもしれない。真紅だって人の子であり、世間と隔絶した環境で生活していたが基本的な倫理観はしっかりと持っている。

だが、だからこそ京を突き放しておく必要があった。

握っていた鞘から六花を引き抜き、月光に照らし出された切っ先を彼女の喉元にかざす。振り向きざまに向けられた凶器に動揺するかと思っただが、しかし彼女は微動だにすることなく意志の強い瞳を真紅に向けていた。

白く可愛らしいフリルが腰の部分についている、白を強調した寝具を纏った姿。鎖骨が見えるほど開かれた首の部分と、スカートのようなふわりと膨張したフリルの部分。実年齢よりも幼く見える純白の姿はしかし、少女の心が強固なものであることを主張しているように見える。刀をかざした真紅がたじろいでしまうような圧迫感が少女から生じ、不思議と右手が震えだす。

京の澄んだ瞳から若干視線をそらしつつ、真紅は言葉を紡いでい

く。

「……俺が刀を振りぬけば、簡単に殺せる。死に方なんて選ぶ必要もない。世の中には理不尽に殺される人間も、死んでいく人間もたくさんいる。強いものが弱いものを殺す。俺たちの間にも、その関係は成り立っていると思わないか？」

「優しいあなたに、そんなことできるはずない」

「できるさ。今までだってたくさん敵を薙ぎ払ってきた。今更人一人手にかけることを、躊躇うはずがないだろう」

虚勢をはってでも京の前で無慈悲な姿をさらけ出す。実際は彼女を殺す理由もなければ、殺す覚悟なんて持つてはいない。そもそも彼女を危険にさらすつもりもないはずなのに、真紅は自らの刀を彼女に向けているのだった。

「……あなたはやっぱり、優しい人です」

唐突に、少女の瞳が柔らかく歪む。見ほれてしまう笑顔は真紅の張り詰めていた感覚を完全に弛緩させ、思わず刀を取り落としてしまいそうになるほど、両腕から力が抜けていた。

「なに、言ってるんだよ？」

動揺する真紅の姿がおかしかったのか、手を口元に添えるように笑う京。月光に照らし出された仕草一つ一つに魅せられる。小さな手のひらやほんのりと上気した頬。月の淡い光は彼女の儂さを際立たせるかのごとく、しっとり光る黒髪と淡い黒の瞳は真紅の衝動をかきたてる。

美しい少女に凶器を突き立てる暴徒の図がここに出来上がっていた。

「心配させまいと、わざと怖がらせて……自分のことなんてまるで考えない。優しいけれど、馬鹿な人です」

「ふざけたことを。そんな、俺に何の得もないことをするはずがない」

落としてしまいそうだった六花を鞘に納め、無造作に芝の上へと放り投げると京の柔らかい笑顔から視線をそらし柔らかい芝の地面へと腰を下ろす。自分の行動を自分自身が理解できていない。そんな馬鹿げた行動に出してしまった自分を恥ずかしく思いながら、夜空の月へと視線を上げる。

冷静な判断力。真紅の中でそれだけは、他の誰にも負けないものだと思っていた。どんな状況下でも冷静な対処をすることで、生き残ってきたと思っていたのだ。けれど何故だろう、京の前で、京のことが関係してくる状況においてはどうにもその思考に霧がかかってくる。

「得にはならないって、自覚しているんですね」

背中にかかるやや喜びを含んだ言葉を流して、静かな空を眺め続ける。

反応がないことをどう判断したのか、京は真紅の左隣に腰を下ろし、同じように空を見上げた。横顔を伺うこともできたかもしれない。だが真紅にそんな勇気があるはずもなく、視線はそのまま空に向けられていた。

「……冷えるぞ」

「大丈夫ですよ」

寒くないはずはないのだが京の言葉には不思議な説得力がある。どうしてそう言い切れるのか首をかしげていると、左肩に柔らかい重みが訪れる。肩から伝わるほんのりとした熱は左肩を少しずつ侵食してゆき、しだいと全身へと広がってゆく。

こうしていれば、寒くないから。

そう言われているような気がして顔中が発熱していくような、こそばゆい感覚が訪れる。肩のぬくもりが原因ではないことくらい真紅にもすぐにわかったが、その感情を受け入れることはしなかった。

「そこまで自分を追い込む必要は、ないと思いますよ？」

彼女の言葉は真紅の全てを見透かしているように優しく、胸の奥がちくちくと痛む。優しさなんてものを向けられたのは、もしかしたらこれが初めてかもしれないなどと場違いな考えが脳裏をよぎった。

今までの真紅は死に場所を求めてナイトメアと戦い、七夜や聡司との戦闘に生き残れたのはただ真紅の本能が死にたくないと思鳴を上げた結果だった。本能が死を拒絶しているのに、真紅はしかし死を求め続けていたのだ。大きすぎる矛盾は本人が気づいていたとしても、たった一人でどうにかできるものではなくなっていた。

必要だったのは、理解してくれる他人だったのかも知れない。

守っていたと思っていた少女が、いつの間にか自らの支えになっていた不思議に真紅は思わず笑みをこぼす。

「どうしたんですか？」

「いや……なんでもないよ」

何度となく交わしてきたようなやり取り。けれど今は、返す真紅の心が少しだけ違っていった。

今まで以上に、この少女を守りたい、幸せにしてやりたいという感情が胸の奥からこみ上げてくる。

夜空を並んで見上げながら、二人きりの夜はゆっくりと更けていく。

〔六十九話〕 決意の夜に 後編（後書き）

まずは謝罪から……。

早めに更新しますとか言っておいて、気づけば一ヶ月近く放置していました。平に謝罪いたします。

はい、というわけで更新しましたよ。決意の夜に 後編、です。

前回の前編とつけていみせんですが、そこは今日中に変更しておこうかなあと。や、べ、別に手抜きじゃないんだからね！？
戦う力を持っているから守るものを見つげるのか、守るものがあるから力を求めるのか。どちらが先なのかわからない、少年の迷いと戸惑いは少年自身が予期しない方向に行動を向けてしまう。
遅く来た思春期、といったところでしょうか。
真紅が今後、どんな道を進んでいくのか。広瀬自身、正直どうすべきなのか迷ってたりします。

まあ、ぶつちやけなるようにしかならないんですけどね。

大学のほうも一区切りつきましたので、今度こそ、今度こそ早い

段階で更新できるように心がけつつ、今回の後書はこの入んで終
りたいと思います。

シンデレラって、よくわかるなあ。

あ〜あ〜。

〔七十話〕 朝（前書き）

少女の夢と、少年の願い。

いつか重なるときが来ることを少女は、心の底で願っている。

〔七十話〕 朝

空を眺めていた。青々と澄み渡る広い空は心の中に大きく開いた穴を埋めてくれるわけでもなく、逆にいなくなってしまうた人の存在を大きく意識させる結果となっていた。

人形のように考えることをやめていた京が初めて抱いた感情。

喪失。そこから生み出される、悲しみ。

世界の中からいなくなってしまうたわけではないのに、目の前から消えてしまっただけでどうして胸が締め付けられるのか。

少女の小さな胸の中で初めて生じた痛みは少女に一つの答えを与えていた。

いつか失ってしまうのなら、それまでできる限り、大切な時間を過ごそう。大切な人と一緒に。

少年を失った少女の心ではそんな、強くて固くて、美しい信念が生まれていた。

現在の高嶺 京という少女を形成しているのは少年、朝風 真紅との離別だったのかもしれない。誰かに歩み寄る強さをくれたのは、間違いなく彼だったと京自身は認識している。

けれど今は、彼を取り戻してしまった今は失いたくないと強く願っている。

悲しい死に方だろうとかまわないと語った彼の瞳。そこに宿っている悲しみと、同じくらい大きな決意。彼をそうまで縛り付けるものが何なのか、京は少しだけ、いいや、強く知りたいと願った。

柔らかなまどろみの中で感じる、右手の感触。暖かくて大きな何かを握り締める手のひらからは、安らぎと喜びが、まだ半分ほど夢という波に浸っている意識を包み込んでいる。同時に目蓋を透過する柔らかな光が夢に浸る残った意識に覚醒を促し、少女はゆっくりと目蓋を押し上げてゆく。

歪んでいた世界はゆっくりとその形を取り戻し、そこが少女の寝室で、自らのベッドの上なのだ と理解する。ふと右手の感覚が気になって、緩慢な動きで首を右に向ける。

「……………え？」

ベッドの隣には小さな丸椅子が設置されている。いつもはほとんど使うこともなく、またその必要もないものだったが、今そこには一人の少年が腰掛けている。

少しだけ幼さが残る表情、短く黒い髪。眠る少女の右手を柔らかく包み込んだ左手と、右手は自らの膝を使って頬杖のようにしており、本当に小さな寝息を立てていた。

けれど少女、京はそんな彼の寝顔に見とれることもなく、ただ混

乱に陥っていた。

どうして彼が、朝凧 真紅が自分の部屋にいるのか。何故自分の右手を優しく握り締め、自室に戻ることもなく眠ってしまったのか。何で

何でこんなにも、心が安らかなのか。

普通なら男性が近くで眠っているだけで恐ろしいと感じてしまうだろう。今までだって、これからだってそれは変わらないはずだ。だが真紅の場合は怖いと感じようとしても、全く恐怖を感じない。

そつと、左手を伸ばす。彼の頬に触れたいという欲求が強く鎌首を持ち上げ、京の行動を加速させている。

手のひらが頬に触れる直前、京の左手は不意に行き場を失い、中空をさまよった後布団の中へと戻っていく。

触れてしまったら何か壊れてしまうのではないか。直感じみたものが全身を駆け巡り、京の行動を完全に押しとめる。

「……………真紅」

思わず漏れてしまった言葉。そこに感情が含まれていなかったとしても、飛び出してしまった音は眠る少年の鼓膜を緩やかに揺らし、少年の浅い眠りを覚ましてゆく。

半分ほど開かれた目蓋の下に鈍く光る漆黒の瞳。まだ焦点の合わ

ない瞳は何の感情も浮かび上がってはおらず、おそらく京の姿は映っていないだろう。その横顔に思わず心臓が飛び跳ねた。

「ん……まぶしい……」

空いている右手で目蓋の上から力任せに目を擦る。けれど京の手を握る左手には変わらず柔らかい力がこもっていて、それが完全な無意識から来る行動なのだと証明している。単純に握っていることを忘れていただけなのかもしれないが、その何気ない行動は少女の頬を上気させるには十分すぎる威力を持っている。

焦点の合わない瞳と少女の瞳が交差する。それだけで頬の温度がまた上昇する。けれど真紅のほうは未だ意識がはっきりしていないのか、何度か瞬きを繰り返すだけだった。

十数秒見つめあうような形となり、京はやはり、動けない。動くことで真紅の意識を覚醒させなくなかった。覚醒してしまえばこの顔を正面から見据える機会などなくなってしまうそうで、それは凄く勿体のないような気がして、ただ息を殺し続けた。視界に入っているのに息を殺すなど少々おかしい行為だったかもしれないが、真紅を見ていられるのならそれでもいいと思う自分がいる。

一際長く目蓋を閉じてからようやく真紅の瞳に活力が戻ってくる。

「みやこ?」

「あ……お、おはよう、真紅」

できるだけ穏やかな笑みを浮かべようと努めるも、どこか引きつった笑みが浮かぶのを自分でも認識できていた。寝起きの真紅はしかしそれに気づいていないのか、大きく一つ欠伸をもらすと首をか

している。

「ここ、どこだ？」

「えと……私の部屋、です」

「ん……ああ、そうか。昨日そのまま眠ったのか。すまない、不快な思いをさせたか？」

否定の意味を込めて何度も首を振る。若干おかしい反応を、しかし真紅はさほど気にしていないように息を吐く。京としてはありがたい反応なのだが、どこか空しく思うのは何故なのか。

「ところで、どうしてここにいるの？」

どうやって部屋に戻ってきたかも記憶にない。おそらくは眠ってしまった自分を真紅が連れてきてくれたのだろうと思っっているが、それならばどうしてここで眠っているのか、どうして手を握っていたのかがわからなかった。

真紅は眠気を晴らそうと何度か首を振り、小さくうなる。

「確か……眠った京を抱え上げて、千崎さんに鍵を開けてもらってベッドに寝かせて……部屋を出ようとしたら右手が握られてたから無理矢理外すのも悪いと思っつて緩むまで待つてたんだよ。いつの間にか俺まで眠ってしまったみたいけど」

その言葉を聞いてようやく、真紅より京のほうがよほど強い力を込めているのに気づいた。気づいてしまった瞬間頬の温度が一瞬で上昇し、全身へと広がっていく。

慌てて手を離すと真紅は不思議そうに首をかしげたものの、何事

もないように朗らかな笑みを浮かべていた。

「風邪とか引いた感じはないか？ 外で眠ってしまったから、それが少し心配だな」

「え？ えっと、大丈夫、です」

「本当か？ 妙に頬が赤い気がするんだが」

「だ、大丈夫ですから！」

胸元の軽い掛け布団を引き上げて、顔の下半分を隠す。鈍感な真紅でも流石に気づいてしまうかと危惧したが、結局のところ彼は京の動揺や迷いに気づくことなく、流れるような動作で椅子から立ち上がってドアへと向かっていた。

彼がここにいる理由がなくなったのだろう。手を握っていないければもっともっと早く解放されていたはずだが、無理矢理そうしなかった理由を好意的に解釈してもいいのだろうか。いや、彼にそんな感情があるはずないと京は自分の中で決着をつけていた。

ドアノブに手を添えたとき、真紅は思い出したように振り返った。

「改めて口にするのは少し恥ずかしいから、こんな形で許してくれ……ありがとう、京。君のおかげで少し、求めているものが何なのかわかりそうな気がしてきた」

「え……？」

「朝食はしっかり取れよ。それじゃあ」

京の返答を待たずに部屋を出て行った真紅。その背中はどういうわけか妙に力強くて、京は思わず首をかしげる。

彼が求めているもの。

直接彼の口から聞いたことはないが、色々想像することはできる。

例えば生きる目的だったり、戦う目的だったり。彼が求めているものは何かしらの目的ではないかと京個人は考えていた。

けれど何故京のおかげでわかりそうなのか、彼女本人はまるで予想できないのだった。

〔七十話〕 朝（後書き）

えと……お久しぶりです。広瀬です。

なんだか気づけば二ヶ月以上更新していなかった今日この頃。いやあ、ネットが繋がらなかったりスランプだったりと色々なことがありました。ええ、そりゃあもうたくさん。

はい、言い訳です。本当に申し訳ない。

春休みも明け、大学が再スタートした今日からはまた、今までと同じペースで更新できるように努めていきたいと思えますので、どうぞよろしくお願いいたします。

ではでは〜。

〔七十一話〕 ある夏の物語 く真紅く 前編（前書き）

ただ、そこにある平穩。

他愛の無いやり取りが、どうしてか心を満たしてゆく。

〔七十一話〕 ある夏の物語 く真紅く 前編

休日は高嶺家で訓練をつみ、普段は神風学園で生徒として行動する。それが企業に見つからず、かつあちら側の情報を効率よく入手する最善の行動だった。

天一、恵理、康の三人は特別科の交換留学生であるため真紅たちと行動を共にする時間は極端に少なくなってしまうが、むしろ自由に行動できる分だけ情報収集には向いているかもしれない。真紅たちの側には叶もいるため学園と企業の情報をやり取りするパイプはこちら側が握っているといっても過言ではなかった。

極め付けは企業の人間である高嶺 莊介。重役のポストについている彼には様々な情報が自然と流れ込んでくるし、情報操作は彼の十八番でもある。叶と並ぶほどハッキングにも精通していることから彼女と並ぶ情報戦の要だろう。

発見されるまでの間は情報戦だ。真紅たちに出る幕は無いだろう。

「……眠い」

思わず漏れ出した言葉は真紅の心境を端的に表しているものだった。

可及的速やかにすべきことは限られている。真紅自身が持っている力を完全に把握すること、六花の本質を理解すること、七夜のような死なない兵士をどうやって倒すか。どれもが学園で暢気に授業を受けている場合ではないことを示している。

焦りこそなくなつた真紅だったが、それにしても暢気に行動しすぎていると思わずにはいられない。

黒板に描かれていく理解不能の数式と窓から差し込んでくる夏の太陽もそれを増徴させ、必然的に学園を抜け出してしまいたいという欲求が発生していた。

発見されていないとはいえ、危険度は今までと何一つ変わっていない。七夜の見立てでは聡司を倒したことで真紅たちの存在を危険視する意識が強まり、発見されると同時に襲撃される可能性が最も濃厚。七夜がこちらについたこともその確立を格段に高めていた。

ただ座して待つよりは何かをすべきだ。そう意識していても学園を休み続けるわけにもいかないし、目立った行動を起こすことなど論外だ。

不謹慎だが、刺激も無いこの学園では退屈するのも当然である。

「随分と退屈そうですね、真紅」

授業が一つ終わり、眠たげな目の真紅がそばにはまったのか京は片手を口元に添えて柔らかい笑顔を浮かべる。妙に気恥ずかしくなつて一度目を反らしたが、一度溜め息をついてから大きく伸びをして、京へと視線を戻す。

「確かに、退屈だよ」

「それでも眠らなかつただけすごいです。御子柴君は最初の一分ほどで眠ってしまいましたよ」

未だに背後で突っ伏している友人を見る限りでは、こちらも相当

に退屈しているようだった。けれど彼の場合は単に疲労から訪れる眠気であつて、肉体的には何もしていない真紅とは違って色々と詰り込んでいるのが伺える。

真紅と違つてやるべきことが明確な分、疲労も大きくなつている。それを承知しているからこそ空の隣で彼を見守る愛美も起こす仕事をさせないし、真紅も深い眠りを妨げようとは思わなかつた。

もつともそれを知らない京にとっては空の不真面目さが顕著に現れているだけだろうし、他のクラスメイトたちにも同様の印象を与えていることだろう。普段からのイメージはこういう場面においてプラスに働いていた。

曖昧な笑顔を浮かべて空については何も触れない。具体的な訓練内容は知らないが体力の高い空がこうなっているのなら、本当に限界なのだろう。

空のことは愛美に任せ、京を連れて購買へと向かう。別に付き合いももらつた必要など無かつたのだが何となく、二人そろつて向かうことになつていた。

一階の昇降口付近にある購買には、しかしこちら側の学生はほとんどいない。もみ合うような人間の塊が目の前に広がっているが、九割以上が特別料の学生である。むこうよりも上質なパンや弁当を販売しているらしいが、そのために百メートル以上ある校庭を駆け抜けようという気概が真紅には理解できなかつた。

棚に並べられたパンやらおにぎりを会計に持つていくシステムだが、その全てをたつた一人のおばちゃんが捌いていく光景はなんとも恐ろしい。

「……随分と、混んでますね」

弁当持参の京にはこの光景を見ること自体が珍しいらしく、口元には少々引きつった笑みが浮かんでいる。女の子の、そもそも活発とは程遠い彼女にとってはこの人並みへと飛び込む勇気が出ることは無いだろう。もっともそれは真紅も同じだが、これを突破して昼食を手に入れない限り午後の授業を空腹で過ごさなければならぬ。退屈で、しかも空腹となってはさしもの真紅も最終手段を選択せざるを得ない。

心優しい京なら自分の弁当を分けてくれることくらい快諾してくれるだろうが、彼女のことを考えて作られた弁当を分けてもらうのは少し憚られた。

「よし、行ってくる」

大きく息を吸って両足に力をこめる。力負けはしないが、この量の男児を突き抜けるのは至難の業。意識を強めようとした矢先、右肩に柔らかい重みが訪れ、反射的に振り返っていた。

ぶにっ

右の頬を指圧する、少し細くてスベスベした人差し指。記憶に無い感触に何事かと戸惑っていると少女の嬉しそうな笑い声が耳に届いた。

「あはは……まだ引つかかる人いるんだね、これ」

少しはしゃいでいるような跳ね回る声音と視界の端っこで花開く一輪の笑顔。快活な少女の後方には頭を抱える少年の姿もある。

「……恵理……それに、天もか。どうしたんだ、こっちの校舎にまで来て」

周りの特別科生徒のように昼食を買いに来ただけかと思ったが、それなら恵理を連れてくる必要が無い。むしろ彼女の場合は天一をパシりに使うことになんら抵抗を感じないだろうと予想もつく。

はたして、真紅の予想は的中した。

「康が撃沈してさ、二人だけで食うのも味気ないからってこっちでお前らと食おうと思ってさ。もうお前の分のパンも買ってあるんだけど、どうだ？」

「ありがたい。あの波に突入するのは正直気が引けていたところだ」
疲れることは極力避けたいし、一人だけ妙な動きをして目立ってしまいたくも無い。彼らなりの考えは他のところにあるのだろうか
真紅に都合がいいのは変わらない。何より二人きりの食事よりも、何人かで食事をしたほうが京も喜ぶだろう。

「……ところで、そろそろその指を外してくれないか？」
「んー？ 無理」

天一と話している間もずっと、恵理は真紅の頬に指を押し付けたままだった。むず痒い、という表現が適切なものだったが、何か、

背中に冷たい視線が突き刺さっているような奇妙な感覚が彼を襲っている。

はつきりとわかる視線だ。恵理が気づいていないはずが無いのだが、彼女はさらに頬を強く押ししたり、断続的に押したり引いたりを繰り返してゆく。そのたびに強まっていく視線の感情が真紅にさらなる気まずさを与えていく。

「はあ……ほら、いい加減にしるよ恵理。さつさとくわねえと昼休みが終っちゃう」

「はい。それじゃ、中庭へゴー！」

呆れたような溜め息と共に歩き出す天一と跳ねるように昇降口へ向かう恵理の背中を見送って、真紅は数秒その場で動けなくなっていた。

視線の主は十中八九京だった。一対何が気に障ったのかわからないが、機嫌が悪いのは間違いない。

「京？ 弁当を取ってこなくて……いいのか？」

いたたまれなくて振り返ることすら憚られる。それでも振り返らないわけにいかず、意を決して振り返った。

目が、冷たい。

普段のおっとりとした雰囲気とはまるで違う。丸くて、少したれ気味だった目は上半分ほどが目蓋に覆われ、小さな口元は不満そう

に少しだけ上方へ向いている。

目に見えた変化などほとんど目立たないものだったが、真紅にははっきりと彼女が不満を訴えているのがわかってしまう。

「……二十秒ください。すぐに取ってきますから」

ようやく口にした言葉は、酷く低いものに聞こえた。

「あ……うん」

「いいですか？ 動かないでくださいよ？ 先に行ったりしたら、私、怒りますから」

「は、い……」

京が怒った姿など想像できなかったが、それゆえに彼女の言葉には不思議な拘束力と重さが存在していた。

彼女の怒った姿、少しだけ見てみたいなと小さな悪戯心が生まれ始める。彼女の性格から考えれば怒るといっても頬を膨らませて恨みがましく目を細めるくらいだろうが、予想に反して大きな声で怒りをあらわにするかもしれない。以前の夜のように静かに強い言葉を浴びせられる可能性だってある。一番怖いのは怒ると言いながら涙を流したりして、真紅にはどうしようもないような状況を作られてしまうことだった。

どれも一度は見てみたいような姿だが、そもそもどうして彼女の機嫌が悪くなったのか、真紅にはわからずにいた。教室を出て、購買にやってきて、人並みに突っ込む直前まではまだなんとも無かつ

たはず。ならその後、天一たちがやってきてから機嫌が悪くなったのだろうか。

恵理と京が仲違いしているという事はない。むしろ京にとって恵理は愛美に並ぶほど信頼を置く友になっているだろうと真紅は感じていた。なら天一かと問われれば、違う、と思う。冷たい視線は真紅と、そして恵理に向けられていたもので天一は完全に蚊帳の外だった。

恵理の悪戯が京を不機嫌にさせたのか。京がされたわけではないので可能性は低いと思っていたが

不意に左肩に控えめな重みが訪れる。考え事をしていた真紅は反射的に振り返り

ふにゅ

本日二度目の罨に、引っかかってしまった。

「え……み、京!？」

「ふふ……真紅の肌、スベスベしてますね」

不機嫌はどこへやら、弾むような声の京はさっきの恵理と同じように何度も何度も頬をつついてくる。

京の急速な変化も驚いたが、それ以上に自らの変化が真紅の心を取り巻いていた。

恵理にされたときは感じなかった胸の高鳴り。戦闘のときに感じるような緊張ではなく、どことなく心地よい鼓動。自然と上昇する頬の温度を自覚しながらも、京を遠ざけることなんてできなくて、結局なすがままにされてしまう。

「み、京……そろそろ行かないと、昼休みが……」

「あ、え、えと……ごめんなさい！ あの……は、早く行きましよう！」

横目で捕らえた京の頬は桜色を通り越して朱に染まっている。勢いで行動してしまって、後々になって恥ずかしくなった、といったところだろう。そんな京の姿にどうしても頬が緩んでしまう。

足早に昇降口へと向かう背中を追って、真紅もゆっくりと歩き出す。昇降口を抜けて太陽の光にさらされると、一瞬だけ眩暈にも似た感覚が訪れる。しかしそれも一瞬のこと。太陽に照らされた中庭がはつきりと見えるようになると、京の背中が鮮明に映し出される。

開けた中庭で京を見失うことは無いとして、とりあえずはあの二人を見つけないければならない。特別科の制服を着ているだけにすぐ見つけられるだろうが、あまり時間をかけすぎるといけない。

そんな心配をよそに前に行く京はいち早く二人を見つけたらしく、両手を小さく振りながら早足になる。その先には両腕を大きく振る恵理の姿がある。恥も外聞も無く両腕を振るその姿は、年齢以上に幼く見えた。

「遅い！」

京より少し遅れてベンチへたどり着いた真紅を待っていたのは、

恵理の容赦ない一言だった。

「あ、あはは……ごめんなさい、恵理ちゃん。私がお弁当を取りに行っていて遅れたんです」

「京はいいのよ、可愛いから。でも真紅が遅いのは許せないの！」
「……横暴だ」

両肩を落とす真紅を見て恵理は相貌を崩す。これにいつも振り回されているのかと思うと、天一と康の苦勞がはつきりとわかってくる。女版の空とでも言うべきだろうか。他人の前でこそ清楚な姿を装っているものの、本来は天真爛漫を通り越したトラブルメイカーだった。だが手がかかるはずなのにそれを不快に感じさせない部分は、ひとえに才能といってもいいのかもしれない。

夏の風が過ぎ去ってゆく。

平穩という名の世界に身を委ねて、少年はその時間を謳歌するのだった。

〔七十一話〕 ある夏の物語 ー真紅ー 前編（後書き）

中途半端なところで更新してしまったことを少しだけ悔いている
広瀬です。どうも、こんばんは。

真紅と京、近づいたかなあと思えばまた遠くなり、遠ざかったか
なあと思えば近くなる。

なんか、書いていて苛立ちを覚えるようになってきています。
じれったいんじゃあほおおおおお！！ と叫んでやりたい気
分です。

何やってんだか、と自分に突っ込みをいれそうな今日この頃でし
た。

ではでは〜。

〔七十二話〕 ある夏の物語 〱真紅〱 後編（前書き）

平和だ。

そんな感情を心地よく感じるのは、別にかまわないのではないだろうか。

〔七十二話〕 ある夏の物語 ー真紅ー 後編

理不尽な少女に少しだけ辟易して、溜め息をつきながらベンチに座る天一の隣へと腰を下ろす。恵理のことになると腰が低くなる彼に苦笑を向けて、彼が差し出した紙パックの飲み物に口をつけた。

「……………ぶふおっ!？」

一口飲み込んだ瞬間、青臭い匂いと強烈な酸味が口内を犯していく。言葉では言い表せないほどの苦味が後からやってくると共に青臭い匂いが胃へと到達し、大きな波のように吐き気がやってくる。

危うく戻しかけたものをぐっと堪えて、真紅はゆっくりと手元の紙パックへと視線を落としていく。

『眠気スツキリ! 青汁プラスレモン汁!』

完璧なまでのゲテモノ飲料水を握らされたことに怒るより、今はまず吐き気を抑えることに集中しなければならぬ。全身の毛穴から湧き出してくる冷や汗が夏の暑さから来るものなのかもわからぬまま、ただ必死で吐き気を堪え続ける。

「……………あれ? どうしたんだ、真紅?」

本気で何が起こっているのかわかっていない、そんな反応を見せる天一に疑問が生じる。悪戯ならこんな反応を見せることはないし、天一の性格なら悪戯の後にしっかりとした後始末が残っているはず

である。その様子もなく、しかも呆けたようなこの反応。

悪戯ではない。恵理がこういった悪戯をするならわかるのだが、今の彼女は京と楽しそうに話し込んでいる。悪戯は成功するのを見届けなければ面白くない。それをしないということは彼女の悪戯ではないのだろう。

ともすれば天一の善意でこれを買ってきた、ということなのだろうか。

波のように訪れる吐き気を何とか堪えながら、天一に視線を向ける。未だ呆けたような表情を見せる彼からは、悪戯をした少年の無邪気な気配は感じられなかった。

「すっげえ顔が青いけど、大丈夫か？」

「だ……だい、じょうぶ……だ」

天一の意図がどこにあるのかは知らないが、善意ならば無碍にすることもできなくて思わずそんな言葉を返してしまう。見るからに大丈夫ではないだろう自分に向けられた視線は本当に無邪気で、真紅は思わずもらった紙パックを天一へと返してしまった。

「？ いらねえの？」

「あ、ああ。なんだか一気に眠気が覚めた……飲んでくれ」

そう、なんて簡潔な言葉を残し、天一は一息で紙パックの中のゲテモノ飲料水を飲み干していく。思っていた以上に躍動する彼の喉に半ば呆然と視線を注いでいたがすぐにその動きもなくなつて、ものの十数秒で世にも恐ろしい飲み物を飲み干したのだと理解できた。

「ぶはあ……うん、不味い」

不味いといいつつその表情は清々しいほどの笑顔で、真紅が身悶えるほどだったものを飲み干した人間の表情には到底思えなかった。

「よく飲めるな……」

「うん？ 飲めないほど不味いものでもないだろ。身体にいいし、眠気覚めるし、いいもんじゃねえか？」

さも当然のように言い放つその瞳には嘘偽りなく、思わず絶句せざるを得ない。

今日までの天一を見ている限りでは別に味覚が異常だとか、ゲテモノ好きだという様子はまるでなかった。自分でも少しは料理が作れることから味覚障害の可能性は少ないだろうが、もしかしたら恵理の料理を食べ過ぎて少々免疫ができているのかもしれない。そんな、半ば失礼な想像をしていると天一はまた不思議そうに首をかしげ、空になった紙パックを鉄製のくずかごに放り投げる。

立っていれば腰ほどまでの高さがある網目のくずかご、空を向いているその口に吸い込まれていった紙パックは音もなく、まるで音を立てることすらおこがましいほどのゲテモノだと自己を卑下しているような、そんなどうでもいい想像を真紅に引き起こさせる。

あまりに暇すぎて、すでに妄想と言える度合いまで到達してしまっただようである。

「これくらいの刺激がないと、やっていけないかと思ってさ」

そこまで悶えるとは思わなかったけどな。

そう言いながら天一は快活な笑顔を浮かべ、今度は紙袋に収まった昼食を手渡してきた。

飲み物の悪夢があつた直後、中身が見えないものを渡されては流石に警戒せずにはいられない。無意識のうちに強張つた体が差し出されたものを拒絶するように、小さな震えを生じさせずにはいられない。

真紅の心配をよそに自分は紙袋の封をあけ、かりかりの衣がついているカレーパンにかぶりつく天一。妙に幸せそうな表情を浮かべているあたり食生活について多大な不安を抱かずにはいられないが、今は手の中にある紙袋が不安で仕方がなかった。

本能が警戒している、というわけではないのだが奇妙なほど胸が苦しい。

警戒心を異様なほど刺激している。しかし食べないわけにもいなくて、残されている全身の気力を振り絞って封をあける。

ほのかな熱と共に上ってくる香ばしい空気。

香ばしさの中に微かな甘い香りと、食欲をそそる衣が見え隠れしている。中に入っていたのは二つのパン。片方は天一と同じカレーパンだが、もう片方は先からソーセージの端が見えているもので、どちらも見た目、香り共にまともなものといえるだろう。

張り詰められていた警戒心が一気にしぼんでいく。

「……まともだな」

「当たり前だ。パンでどれだけ冒険できると思ってたんだよ、お前は？」

天一の優しさの塊を食べ終え、少し遠目で食事をしている二人の少女を眺めながら二人は何の気なしに言葉を交わしていく。最初こそ互いの学科についての話題だったが、今後の方針について、自分たちの得物について、最後には天一が使えなくなったという力について。

最近になって見せるようになった京の自然な笑顔と恵理の快活な笑顔を見ながらする話題でもなかったが、それでも時間があるうちにしておく確認はいくつもある。

「お前の場合は、そうだな、肉体の能力を瞬間的に上昇させるってことでいいんじゃないか？ それ以外にできそうなことって思いつかないんだよな？」

天一の問いには素直に頷く以外なかった。そもそも力だの何だのいわれても、実際にできるようになった今ですら混乱することが何度かある。定義もあやふや、存在も感じ取ることなどできないものなのに、何故か使えるこの力について情報を手に入れるのは必須ともいえる。

「んで、だ。お前の刀、六花が反応しているのは力の根本。そうだなあ、うちの師匠の言葉を借りるなら”魔力”ってやつだ。精神力や魂の力がどうかかって言ってたけど、そいつがあるから刀も反応するし、能力も使える」

「それが全ての基、と考えていいのか？」

「おう。俺のも恵理のも康のも全部、そいつが基礎になる。まあ使える力のほうは何度も使っていけないとうまくは使えねえだろうけ

どな。とりあえず魔力が燃料、能力はエンジン、武具はタイヤだと思っとけばいい」

「？ ちよつといいか？」

純粋な疑問に真紅は首をかしげる。いいよ、と首をかしげて返す天一に思わず笑いが漏れそうになったが、踏みとどまって次の言葉を探した。

「武具はタイヤ、車輪ってことだが、能力だけではまだ不十分ってことなのか？」

真紅自身の力もそうだったが、康の、あの空間を操る本物の魔法を見る限りでは、彼は武具など用いることなくその力を最大限に使用していた。真紅もまた、六花を手に入れる前と後で能力の幅が広がったということもない。だからこそその表現が妙に引っかけり、こうして疑問が生まれていく。

「使うだけならできるんだろうけど、燃料の消費が極端に多いんだよ。エンジンにも申し訳程度にはタイヤがついてるんで、それで動かせるけど、タイヤを替えたほうがより効率よく動かせる。康も使っていないように見えて、いつもあの刀を腰に挿してる。その恩恵を受けてるんだ」

康が空間を操るときに刀を持っているかなど、正直気にしたことがないためわからない。だが天一がそう言うのならそれが事実であり、納得するには十分な要素となっていた。

「まあ俺は説明下手だからな。本当に細かいところまで確認するには康に訊くのが一番だ」

「……ん。そうだな」

他にも話したいことは山ほどあるが、二人は戯れる二人の少女へと視線を移したまま次の話題へと進むことはなかった。

退屈なのは間違いのないことだった。それでもこの退屈を、心地よいと感じている自分がいることも自覚している。平和を体現しているような少女たちの姿を見ているだけで、心地よさは快樂へと変わり、退屈は充実へと変わっていく。

少し、言い過ぎかもしれないが。

あの夜から変わり始めた自分の心を、真紅は思いのほか素直に受け入れている。

戦う力がどれだけあるかなんて関係ない。戦う力がないからって、守りたいものを作らないのはただの逃げだと、そんな考え方が自身の中に生じている。

誰の考えが正しいなんてわからない。つい最近までの自分が正しいのかもしれないし、今の自分が正しいのかもしれない。もしくは正しい選択なんてないのかもしれない。

それでもいいと思う。

迷っている時間はたっぷりある。少なくともこの退屈で穏やかな日常が続く限り、自分の感情を見直している時間くらいはあるはず

だ。

少しずつ自分を変えていった元凶を、夏の日差しをうつとうつしくも思いつつ、真紅は二人を穏やかに眺めるのだった。

〔七十二話〕 ある夏の物語 ー真紅ー 後編（後書き）

えー……書いた都度更新しようと考え始めた今日この頃です。
どうも、広瀬です。

見つかる前の平和な時間を満喫する姿というものを表現するため、それと真紅の変化を少しずつ表現できればいいと考えていたわけですが、上手くできているかはあまり自信がありません。というより全く自信がなくなりました。

いやあ、どうしよう。

ともあれ少しずつ時間を見つけては書いていく所存ですので、これからもどうかよろしく願いますね。

ではでは。

〔七十三話〕 ある夏の物語 空 前編（前書き）

全てが億劫になる瞬間がある。
全てが大切になる瞬間がある。

そのどちらも大切で、どちらも等しく一瞬のこと。

真紅がのんびりと昼食を取る一方で、彼は清々しいほど晴れ渡っている空を見上げることもなく、ただただ机に突っ伏していた。

自らと同じ名を冠する存在はこんなにも澄み渡り、力の限りを尽くし地上の全てに太陽の光を浴びせている。一方の自分はどうと普段のようにムードメイカーを買って出る気力すら残されていないくて、厚い雲に覆われた空の如く沈黙を守っていた。

首を動かすことすら億劫になっている。疲労なんて表現を通り越して、気力を根こそぎ持っていかれたような状態に身を委ねるしかなくなっている。既に昼食の時間になっているはずだが空腹すら訪れることはなくて、眠気すら襲ってきてはくれない。連日の訓練はある程度のノルマを果たしているものの、その反動は思いのほか速く、かつ多大なダメージを持って存在していた。

彼が、御子柴 空が連日行っているのは長距離からの狙撃訓練。それだけならばスコープや狙撃用のライフルを使用すればよいのだが、いや、最初はもちろんその訓練だったものの、訓練を始めて二日目から全く違うものへと変わっていた。

二丁の拳銃で、百メートル以上遠くから正確に射抜く訓練。最初は空き缶から始まり、次第に細い木の棒、鉛筆、最後にはビー玉へと変わっていた。

神経をすり減らせるその訓練に加え、彼が握っていた銃のうち一丁は少々特殊な性能を持っている。

精神力を用いて銃弾とするマグナム。一発一発が多大な精神力を有するそれを一日に百以上、多い日には三百以上の弾丸を打ち込んでいく。十発放つのに十キロ走ったのと同じほどの疲労を覚える、それほどの射撃に加え、正確な照準。精神的な負荷を無視した訓練は現在の状態を招くには十分すぎるほどの威力を誇っていた。

「……………何かいる？」

頭上から聞こえる幼馴染の声に反応することすらできなくて、空は少々申し訳なさを覚える。けれど他人に対する気遣いがまだできるのなら、少しずつ精神力は回復しているのだと実感できた。

何もいらないとわかってくれたのか、幼馴染はその柔らかい手で空の後頭部を撫でるとどこかに消えてしまった。気配でしかわからないためどこへ行ったのか定かではないが、おそらくは昼食を取りにいったのだろう。

目を使わない分、気配に敏感になるといっ話はよく聞く。実感するとは思わなかったが、教室内にいる生徒たちの気配、廊下で談笑する生徒たちの声、風にそよぐ木々の音。そして、自らに向けられる視線。

普段騒がしい分、今日のように死んだような状況は珍しい。確かに視線を向けられてもしょうがないとも思ったが、この視線はどうにも、しつこい。

愛美が声をかけてくるよりもっと前から続いていたそれは、最初は愛美のものかとも思っていた。けれど視線は空の頭頂部、前方か

ら向けられている。休み時間のたびにそれをされたとあっては、流石に気にしないわけにはいなくなっていた。

愛美に呼びかけられても動かなかった体が好奇心に反応して動き出す。

上半身を上げた先に見えたのは、何の変哲もないいつもの教室。当たり前前かと自分の中で完結させて、違和感の正体を探すために視線をめぐらせる。

各々談笑を続けている級友たち。誰一人として空が起き上がったことに気づいていないようだった。愛美の姿もない。真紅も未だ戻ってきていない。他にそこまで仲のいい級友がいたかと首を傾げるが、視線の主と目が合ったとき自然と理由を理解した。

「……あ」

「……ああ、大丈夫だから気にしなくていいよ。ほんとにやばいときは自分で保健室行くし」

空を見つめていたのは一人の少女だった。

茶色の強いセミロングの髪の毛。染めているのではなく、自然に出ている髪の色は色の薄い肌によく似合っている。こげ茶色のフレームが下方にのみついている眼鏡はかなり度の強いもので、レンズの奥にある茶の強い瞳は申し訳なさそうに揺れている。自身を押し出そうという気質の少ないこの学園において、特に自信というものを持ち合わせていないのが一目でわかる。少女特有の、発展途上の胸の前で組まれた小さな手のひらも空と目が合っているだけで小さ

く震えていた。特徴的なところは無いものの、整った顔立ちと奥ゆかしい雰囲気はまさに大和撫子だ。

少女の名を植田 涼という。空たちのクラスで保険委員を務める彼女にとって教室内で具合が悪そうに突っ伏している空の存在は特に気になってしまふものであり、保険委員という肩書きからその様子を見守る義務があると思ったのだろう。

けれど空の不調は別に保健室へ行ったからといって治るものでもない。いや、保健室で眠ることができれば少しはましになるのかもしれないが、そもそも眠りにつくことすら億劫な状況ではまともに寝ることもできないだろう。

もう一度心配しないように手を振って、頬杖をつく。窓際の席は必要以上に外の景色を見せつけ、その清々しさを見せつける。

ああ、本当に、嫌な空だ。

どこまでも曇りのない空など、皮肉にもほどがある。

自然と睨むように空を見上げていた。別に澄み渡る空が悪いわけでもないはずなのに、八つ当たりだとわかっていても、そうしてストレスを発散することしかできなくて。

「なあに怖い顔してるのよ？ 涼ちゃんがおびえてるじゃない」

「……………んあ？ 愛美……………」

缶コーヒーを空の前に置いて、愛美はおどおどした少女の手を引つ張って同じように空の眼前へと差し出した。真紅の席に座らされた涼はどうしたらいいのかもわかっていないのか、救いを求めるように愛美へと視線を向けている。震える瞳はまるで小動物のようで、保護欲というか、嗜虐心をくすぐられるというか。

最初の頃の京に似たものを感じたりもしたが、彼女からは京とは違う何かを感じて仕方がない。

京には控えめなところがあるものの、しっかりとした一本の芯があると空は考えている。そうでなければ目まぐるしく変化した彼女をとりまく環境を受け入れることなど出来はしないだろうし、得体の知れない七夜のような人間を屋敷に滞在させることも許容しないだろう。もっとも家主は彼女の父である荘介なのだから父の決定に従っただけなのかもしれないが。

しかし彼女、涼にはその芯の部分が存在しない。悪く言うのなら自分というものを持っていないのだ。周りの反応に身を委ね、誰かが願った行動を率先して行い、誰にも疎まれることなく生活を続ける。箱入りの多いこの学園ではさして珍しいことでもないが、それゆえにどうにかしていい方向へ変えてやりたいと思ってしまう。

さほど会話したことがないはずなのに、どうしてこんな感情が浮かぶのか。自身の感情に疑問を抱きながら、けれどおかげで戻ってきた活力で言葉を捜す。

「ああ。悪いな、植田さんも。本当に大丈夫だから気にしないでいよ」

努めて優しい声を投げかけ、笑顔を浮かべる。普段とは違い弱々

しいものの、それが今の精一杯。

「だってさ、涼ちゃん。こいつのことは気にしなくていいから、お昼ご飯食べてきて」

「あ……は、はい……それでは御子柴さん、間野さん、失礼します」

ゆっくりと立ち上がり深々と頭を下げ、涼は逃げるように教室を出て行った。どこか怯えたような表情の意味はよくわからなかったが、視線を彼女から引き剥がし、目の前で意地の悪い笑顔を浮かべる愛美へと力ない瞳を向ける。

「何だよ、嫌な笑い方して」

「べつつにい。私が起こしても動かなかったのに、涼ちゃんが見てると気づくんだなあと思って」

「ちっ……気づいてたのかよ」

顔を上げていなくともわかるほどの視線だ、確かに愛美が気づいていてもおかしくはない。いつもはからかう側の人間である空にとつてからかわれることは少しだけ不快なものだったが、不思議と心が落ち着くのを感じていた。

「でも彼女、ほんとにおどおどしてるよね。京ちゃんみたい」

空が感じていたことを愛美も察していたのか、彼女が消えていったドアのほうへと視線を移す。人ごみにまぎれてもきつと見つけれないほど気配を感じさせないのも少々特異な才能だが、それほど自己が存在しないのは危うすぎるのではないだろうか。

「まあ、あの子とは少し違うみたいだけどな」

「うん？ どういうこと？」

「まあわからないならわからないでいいんだよ。あんまりいいことじゃないし」

「うん？ なあにを考えてるのかな、このいじめっ子は」

反撃できないのをいいことに頬を人差し指で刺され、目蓋を優しく引つ張られる。完全におもちやだと思いつつも反撃する気力がでないあたり、やはりまだまだ回復には程遠いようだった。

「死人に鞭打つのがそんなに嬉しいかよ」

「うん、面白い。あんたをいじる機会なんて早々ないものねえ」

これ見よがしに溜め息をついて、腰を上げる。立ちくらみのような感覚を筋肉の反応だけで押さえ込み、一步一步踏みしめるように歩き出す。

「どこいくの？」

「食堂」

無理矢理にでも何か口にしなければ肉体的にぶっ倒れてしまう。食堂ならばある程度の食事が用意されているし、食欲がないときに食べるものも用意されているのではないだろうか。

肩を貸そうとする愛美から逃れるように階段を降りて、食堂へとできるだけ早足で向かう。食事時に行くには込み合いますぎている場所だったが、既に昼休みも半ばを過ぎていて今なら生徒の数も半数ほどに減っている。どうして他学科の生徒の姿があるのかはこの際気にするつもりもないが、食券の販売機に並ぶ後姿を見たとき、少し肩の力が抜けるような気がした。

さっきまで自分を見ていた茶髪の少女。券売機の前で何を食べよ

うか迷っている姿は困惑を通り越して混乱の域に達しているが、周りの人間がその行動を見守っていることに気づいてはいないようだった。

声をかけるのが躊躇われる。その場の全員が手を出すなとすごんでいるような圧迫感が生まれている。

こんなに人気あったんだな。

空気のような存在かと思っていたが、こんなに男子の視線が集中する女生徒はそうそういない。この学園にはアイドル的な存在がないながら、局地的なファンクラブなどはあるのかもしれないと改めて考えさせられるのだった。

ようやく選ばれたものは遠目でしか確認できなかったが”蟹雑炊”。価格、530円。

常々思っている材料費と価格が絶対に釣り合っていないということ。どこをどうやって贖罪を買い占めているのわからないが、ともかく破格で昼食が取れるのは利点なのかもしれない。

食券を買って振り返った彼女と、自然と目が合った。

「……あ」

教室で目が合ったときと寸分たがわぬ反応。瞬時に目を背けるのではなく、数秒見つめてから視線をそらす。まるで相手の反応を見て行動を判断するような間、気分を害さないようにと勤める心遣い。

確かにそんな行動は間違っていないのかも知れないが、空にとって彼女の心意気は少々木に触る類のものだった。

苛立たしい、というものではない。どうして自分に正直に生きようとしないのか、それが不思議でしようがなかった。

せめて学園で生活しているときくらい、外界のことなど気にせず生きればいいのに。

「あ……あの、御子柴くん、昼食、まだでしたよね？」

「え？ あ、ああ。そうだけど……」

声をかけられた事実には驚きながらも言葉を選ぶことなく返事を返す。あまり感情の籠もらない冷たい声だとわかっていても、上辺だけをとり繕って答えることは彼女にとって逆効果になると思ったから。

彼女、植田 涼は弱々しい笑みを浮かべた後、手にしていた食券を両手で差し出した。

「これ、差し上げます。本当は教室まで持っていきこうと、思っていたのですが。ご迷惑でしたら言うってください。こちらで、処理しますので」

差し出した手が小さく震えている。なけなしの勇気を振り絞ったような、小さな子供を相手にしているような違和感を覚えて、空はふと、自らに生まれていた疑問の正体に気づいた。

彼女には芯がないんじゃない。ただどうやってそれを表現すればいいのかわかっていないだけ。他人との接し方がわからなかったり、

どうを表現すればいいのかわかっていないだけで心の底にはきつと優しさが溜め込まれている。初めて自分の意思で行動した結果が、今だというだけ。

彼女の中でどんな革命が起こり、どんな決心をしたのか定かではない。そもそも彼女とはまともに話したこともないし、もしかしたらさっきまで感じていた違和感も疲れた空の間違いかもしれない。

でももし空の予想が当たっていてなければの勇気がここで使われているのなら、無碍にするのはばかられた。

「……ありがとう。悪いね、なんか気を使わせちゃったみたいで」「い、いえ……こちらこそ、すみません」

「どうして君が謝るんだよ？ 何も悪いことなんてしてない。素直にお礼を受け取ってもらえないと、逆にこっちが困っちゃう」

肩をすくめて見せると、涼はまた申し訳なさに身を縮ませ、視線を足元へ落としてしまう。根っこがどんなものでも、やはりすぐには変わらないようだ。

しかしこういった女の子の扱いはどうにも難しい。恵理のような裏表のある女性なら扱い方も簡単だし、愛美にいたってはまるで男友達のように接することが可能である。始めの頃は京も苦手な類であつたものの、かつての交流と変化の兆しが見えていたし、真紅の存在が彼女を支えていたことも承知していた。だからこそ彼女の扱いはほとんど真紅に任せることができていたのだ。

困っているのを敏感に察知したのか、横から愛美が口を挟む。

「ねえ、涼ちゃん。どうせなら一緒にお昼ご飯食べない？ 涼ちゃ

んもまだ食べてないよね？」

「え……あ、はい」

「なら決まりね。何か食べたいものある？ 空が奢ってくれらって」

「はあ！？ てめ……」

口を挟もうとした瞬間、下腹部へ鋭い痛みが生じ、思わず息を呑む。それがかなりの高速で放たれた肘鉄だとわかったのは、愛美が彼女を説得し終えてからだだった。

「塩ラーメンだったさ」

「……わかった、よ」

右下腹部の痛みと周囲からの視線で生じる痛み、そして財布を直撃する痛みと戦いながら空はゆっくりと券売機へと歩みだすのだった。

〔七十三話〕 ある夏の物語 空 前編（後書き）

はい、なんやかんやでサブキャラにスポットをあて、なんやかんやで新キャラを出していきます。どうも、広瀬です。

空と愛美の掛け合いって最近やってないよなあ、と思って書き始めた今回の話ですが、思いのほか指が動きました。そりゃあもう馬車馬のようじ。

嘘です、ごめんなさい。

新しく出てきた少女、植田 涼ですが、まあこれからもちよこちよこ使っていいこうかなあと思っています。

ではでは〜。

〔七十四話〕 ある夏の物語 へ空へ 後編（前書き）

少女の瞳に映るのは見慣れた現実か。
それとも、新たに見えた非現実か。

どちらにせよ、彼女の世界は動き出す。

いくら家自体が金持ちだとしても、子供のほうも金持ちかと問われれば答えは否である。

愛美のような特別な事情があり、家が持つ財産を全て自由に使えるのなら話は別だ。けれど空の場合は家のことを除けばその辺にいる一般学生と大差はなく、むしろ月々の小遣いだけを見てみればかなり少ない部類に割り振られるのではないだろうか。

それとは知らず、正面に座る二人の少女は片や笑顔、片や困惑気味の表情を浮かべたまま食事を取っている。そもそもあまり食欲がなかった空ではあったが、せっかく好意で奢ってもらった昼食を無碍にするわけにもいかなくて、一足先に一息で食べ終えていた。

正直、味はよく覚えていない。

美味しかったという曖昧な記憶はあるものの、どんな食感だったとか、詳細を語れといわれた場合どう言えばいいのかわからない。

理由は二つある。一つはもちろん精神的な疲労が溜まっているから。そしてもう一つがやはり目の前で繰り広げられる少女たちの会話のせいだった。

「涼ちゃんは小食だね。なのに塩ラーメンのチョイス。うん、面白い」

「え、えと、それって褒められてるのかな？」

「うんうん。褒めてる褒めてる」

照れくさそうに頬を染める涼から少しだけ視線を逸らし、けれど会話のほうは意識を反らすことができなくて、空は二人に気づかないよう溜め息をつく。

元々お調子者のように振舞っていた空だが、確かに面白おかしいことが好きではある。しかし女の子の会話にどうやってついていけばいいのかはいまいちよくわかっていないし、引っ込み思案の涼に話しかけた場合どんな反応を見せるのかは教室でのやり取りでわかっている。

自然と空は黙り込むこととなり、少女二人の会話は広がっていく。

退屈だということはない。涼は美形だし愛美も外見だけはそこらの令嬢に見劣りしない。そんな二人の会話を至近距離で見ることができるのなら、ある程度歳を召した男なら金を払ってでも体験したいだろう。

もっとも空にはまだそんな趣味はないし、これからもそうなる予定はない。

「でも涼ちゃんって優しいね。こんな馬鹿のために昼食持っていてこ
うなんて」

「そんなことないです。御子柴くんにはいろいろとお世話になって
いますので、こんな形でしか、普段のお礼ができないと思って」

普段のお礼と言われたところで空にはあまり覚えがない。クラスメイトなのだから何度か言葉を交わし、一緒に作業をしてもおかしくないものの、特別彼女に手を貸したことはない。そもそも保

険委員は体調の悪い生徒がいた場合、その生徒の要望があるときのみ手を貸せばいい簡単な委員だ。手を借りたことがあるならともかく、感謝される理由はない。

愛美も同じことを考えたのか、小さく首をかしげて問いかける。

「空に？ 馬鹿ばかりやってるこいつが、迷惑じゃなくて？」

愛美の言い分は少々癪に障るものだったが、自身で考えても間違いない。

空の反応を気にしてか、一瞬だけ言いよんだ涼だったが、柔らかい笑顔を浮かべて口を開く。

「直接では、ないんです。でも御子柴くんの行動っていつも、クラスの雰囲気明るくしてくれるじゃないですか？ そういう時って元気がない人も元気が出るんです。体調が悪い人も、笑って元気になる。それだけで私の仕事なんてなくなっちゃうんです」

「それが、空のおかげ？」

「はい。私は、そう思っています」

間接的に彼女の仕事を減らしている、少なくとも彼女はそう思い、空に感謝している。はつきり言うと空にはそんな意識微塵もないし、自分が楽しければ学園生活などそれでいいと思っていた。そんな自らの行動が誰かのためになっていて、誰かに感謝される行動になっている。こんなに不思議で、こんなに居心地が悪いはずなのに、どうしてこそばゆいのだろう。

隠し切れない恥ずかしさから視線をさらに別の方向へと向ける。

他の学生たちは次の授業の準備や自分たちの校舎へ戻るため、既に移動を開始している。空や愛美たちの場合は教室がそこまで遠くないことや、次の担当が叶だということもあってゆっくりとされているが、涼を付き合わせるのは可哀そうかもしれない。

「ところで、戻らなくていいの？ 次の準備とか、植田さんはしなくて大丈夫？」

「あ、はい。御子柴くんたちはまだ、戻らないんですね？」

「ん？ ああ、朝倉先生は少し遅れてくるし、とりわけ時間に厳しい人でもないからな。ゆっくりしようかと思ってる」

「なら、もう少しだけ一緒にさせてください」

教室で交わした会話とも呼べない会話より、遥かに落ち着いた言葉と雰囲気。打ち解けたとかそんな理由で、変わっているのではないだろう。

何が違う。

一緒に昼食をとったからいきなり打ち解けるなどありえない。特別親しい会話をしたわけではない。いつものような明るい雰囲気がかもし出す気力も今はない。

なら、何が違う。

周りへと視線を向ける。券売機の前で感じていた男子からの視線は既になく、残っている少ない生徒たちも自分たちの会話に夢中だ。

集中していたわけではない、空気のように存在していた視線は完全に抜け落ち、本物の空気だけがその場に残る。

空の中で、何かがつとんと腑に落ちた。

目立たないような行動、常日頃は目立たない保険委員という役職、おどおどとした”ような”性格。まるで作られたような、行き過ぎといえるほどおしとやかな性格は弱々しい自分を他人に理解させようとしているのではないだろうか。

弱々しい彼女は、彼女の本质とは少し離れた場所にあるのではないか。

確証はなければ、そんな行動をする理由もわからない。そんな感じがする、としか言えない。

まるで真紅のように直感に任せた判断。何の確証もないものをどうして信じていることができるのか今までは不思議で仕方がなかったが、今は少しだけわかる気がする。

環境の違い、微小な変化、経験則から導き出される答えを最後には自分の直感で判断する。それが真紅の直感を裏付けているのかもしれない。

そんなことを思いながら、視界の端に入り込んだ人物に驚いて思考を現実へと戻される。

食堂に入ってきた白衣の女教師。スーツと白衣の狭間で見え隠れする透明な試験管には緑色や青といった液体が並々と注がれていて、おそらくは何か危険なものだろうと予想できる。

生徒の少なくなった食堂で、彼女は学内で被っている仮面などお構い無しにおもちゃを再発見した子供のようない無邪気な笑顔を浮かべた。

背筋が凍るような感覚。蛇に睨まれた蛙のように呼吸すらできなくて、空の脳内で警報が鳴り響く。

彼女が、朝倉 叶が苦手だということは決してない。表の顔は害のない存在であるし、裏の顔もはきはきとしているが自分たちに不利益となる行動はしないだろうと考えていた。

ならば何故、自分の全てが警戒心をあらわにしているのか。わからぬままに目の前へとやってきた叶は、なお笑顔だった。

「聞いたわよ、御子柴くん。調子が悪いんですってね？」

「だ……誰がそんなこと」

「愛美ちゃん」

何を当然と言いたげに人差し指が愛美へと向けられる。乾いた笑顔を浮かべる愛美も叶の変化に驚いているようで、悪意があったとは思えない。

「珈琲を買ってきただけではなかったらしい。」

「な、何の用でしょう？」

自然と震えだす自らの声。

自然と広がっていく彼女の笑顔。

関係のない涼がいることも気づかずに、叶は恐ろしい笑顔を浮かべたまま懐から一本の試験管を取り出した。

純白の、まるで固体のような液体。

コルクに封じられた試験管の中に鎮座する奇妙なそれは、美しいと思うのだがどういいうわけか危機感を覚えずにいられない。

「これ、御子柴くんに試して欲しいんだけど、いいかなあ？」

「全力で拒否させてください」

どんな方法で、どんな効力を持っているのか定かではないが、どう考えても危ないものだ。

「まあまあ、そう言わずに。一本分飲み干せば活力が湧いてくるから」

およそ人間の飲み物には思えないそれに、全身が更なる拒絶反応を示す。

「明らかに毒なんですけど、それ」

「うっん、そんなことないよ？ ただちよおつと、意識が飛ぶこともあるかもなあってだけ」

「っの……マッドサイエンス……んが!？」

油断していた口へと突っ込まれた試験管。いつの間にコルクを外していたのかわからないが、呑み込むわけにはいかないと残っている精神力を総動員する。

数秒拮抗していた力だったが、押し込まれた液体を呑み込まないにも限界があつた。

喉を通り過ぎたのは液体だつたはずだ。しかし熱くもなく冷たくもなく、まるで空気のようなものが腹部へと落ちていく。

胃を中心に冷たい感触が全身へと広がってゆく。四肢へと到達したそれはまるで眠りのように四肢の感覚を少しずつ鈍らせてゆき、空の意識に薄い靄をかけていく。

「……の……」

空になつた試験管を離されて、言葉を放つことが出来るようになって、舌が麻痺しているのか思ったとおりに動かない。

嬉しそうな叶の笑顔、苦笑いの愛美、そして戸惑つたような涼の表情を視界に捉えながら空の意識は完全に、闇へと沈んでいくのだつた。

「あら、倒れちゃった。調合ミスったかなあ」

勢いよくテーブルへと突っ伏した空を見て、叶は首をかしげる。本気で不思議そうな表情からは絶対に元気になると確証があったように、愛美はただただ苦笑を浮かべるしかなかった。

傍から見ていた愛美ですらアレがまともな飲み物ではないことくらいわかった。純白の液体は透明感など微塵もなく、まるで液体化した雪のようで、美しくはあるが同時に恐ろしい。そんなものを飲まされてはさしもの空もただではすまないだろう。弱っている状態ならなおさらだ。

「結局なんだつたんですか、あれ」

「え？ 精力剤の改良版」

何をどう改良したのかはこの際聞かないでおく。ともかくまともなものではないことだけ、確かだろうと思ったから。

予想外だったのは学校内の、それも人の目がある場所で本性をあらわにしたことだ。同じクラスの涼がいても学外と同じ性格を維持しているのは何か考えがあってのことか、それとも単純にほかの事が見えていないのか。

どちらにせよ隣で茫然自失に陥っている少女を、どうにかせねばならなかった。

「……叶先生、色々やることが増えましたけど、大丈夫ですか？」

「へ？ 何が？」

本気で気づいていない。その事実には半ば頭痛を覚えながらも、溜め息について堪え、隣の少女を指差してみせる。

未だ呆然と叶を眺め続ける少女は自分が指差されたことすら気づいていないようで、叶もそちらを向いてからは他のものが見えていないように固まっていた。涼にとっては優しく穏やかな教師という印象しかないだろう叶が、こつも砕けた女性だったという事実を受け入れるにはそれ相応の寛容さが必要になる。

空が沈黙した今、事態を収拾させられるのは愛美だけとなっていた。

「あ、あのね、涼ちゃん……これは、その……」

ともかく涼を復活させようと声をかけてみる。けれど彼女は愛美の声などまるで聞こえていないようで、焦点の合っていない視線を叶に向けている。

その瞳に愛美はふと違和感を覚える。

彼女の瞳に映っているのは恐怖ではない。彼女の変化や空に行った行動を鑑みると恐怖のほうに鎌首をもたげるのではないかと愛美は考えていた。だがそこに映っているのは、まるで、羨望。

「す……素敵」

ゆっくりと口を開いた涼に、愛美はただ驚愕するしかなかった。

目を輝かせ、今にも抱きつかん勢いでテーブルから身を乗り出す。好奇心を通り越し、崇拜の域に達した瞳の色は彼女本来のものとは全く異なったもので、愛美はただただ呆然とこの流れを眺めるこ

としかできなかつた。

「えっと……は？」

思わず漏れた言葉はけれど、幼い少女のように目を輝かせた彼女に届くことはない。ようやく自身を取り戻した叶も自分のクラスで見ていた彼女と全く異なった彼女を見て、表情を引きつらせている。

「素敵です、叶先生！ 凛々しい表情、素早い動き、まさに私の理想です！」

「えー……とりあえず、ありがとう？」

返す言葉を失って、やっと出てきたのはなんとも情けない声音。その頬を汗が伝っていることに気づいて、愛美は何となくおかしくなる。

けれど次の言葉は、流石に笑い飛ばすわけにはいかなかった。

「叶先生！ お願いです、私を、私を……叶先生にしてください！」

愛美も、きつと叶も、彼女の言葉をただ呆然と反芻することしかできなかつた。

〔七十四話〕 ある夏の物語 空 後編（後書き）

今回もやはり可哀想な目にあっている空、うん、残念すぎる。

どうも、広瀬です。六月になった瞬間更新していますが、残念ながらこの更新、連続とは行きません。

や、最近は確かに更新が減っていましたが、これから一週間は確実に更新できなくなりまして……。

戻ってきたら早く続き書かないとなあ。

本編の内容に全く触れていないことに気づいたので、一応触れておきますか。

がんばれ、空。

以上！ ではでは

〔七十五話〕 ある夏の物語 〔終〕 (前書き)

誰だって誰かに憧れ、誰かと競い合う。

誰かを目標とし、誰かを育てようとする。

だから彼女は人として、あまりにも正しい心を持っている。

〔七十五話〕 ある夏の物語 〔終〕

叶にとって彼女はただの生徒であり、真紅や空のように本性をさらすことができる相手では到底ありえなかった。そもそも叶がなさねばならないのは学園内にいる真紅たちを察知されないよう、企業への情報を改ざんすることだ。朝倉 叶個人の情報は既に、彼女の育ての親が完全に書き換えてしまった。ナイトメアとしての素性が知れることはありえないが、あまり目立ったことをしても利点はない。

だからこそ穏やかな教師として行動していたはずなのに、空に薬を飲ませようと必死で、周りが見えていなかった。

それももちろん失態だったが、目の前の少女がこんな反応を見せたこと自体も予想外で叶は彼女の言葉をただ聞くことしかできずにいた。

「えっと……それは、どういう意味かな？」

「言葉通りの意味です！ 私、叶先生みたいになりたいんです」

興奮気味に声を上げる少女の表情はあまりにも真剣で、あまりにも誠実で、あしらい方すら忘れてしまったようにただ彼女に流されていく。真紅のような冷静さがあるわけでも、天一のような緻密な話術があるわけでもない。彼女の底にあるのはただ溢れんばかりの情熱だ。情熱だけに突き動かされる人間ほど厄介なものはないと思いつつも、彼女の言葉を浴びるにつれて少しずつ、心地よい感覚に陥る自分を感じていた。

「私、変わりたいんです！ 誰かの顔色ばかり伺って、誰かの感情

ばかり優先して、いつもびくびくしている自分が嫌で、そう思っ
いても行動できない自分が嫌で、だから……だから……」

自分の中で考えがまとまっていないのか、感情をまとめ切れ
ないのか、ともかく彼女は視線を彷徨わせながら、それでも言葉
をつむぎ続ける。その姿は年齢にそぐわないほど幼いもので、叶の顔
に自然と笑みが浮かぶ。

自分を持っていても外に出せない、周りに振り回されてしまう。
自分の意思を示すことができなくて全ての鬱憤を自分の中に閉じ込
めてしまう。そんな記憶が叶にもある。

工藤 錬と出会う前の叶はいつも研究者たちの実験や他のナイト
メアたちの罵声を浴びつづけて、ただそれを受け流し続けることし
かできなかった。とくに命からの誹謗中傷は激しく、時には直接的
な攻撃を受けたこともあった。

錬に出会い、失いかけていた自分を取り戻すことができなければ
今の叶はなかったかもしれない。彼の言葉があったから命の攻めを
乗り切り、ナイトメアから離れた自己を作ることができた。

涼がかつての自分と同じだったとしたら、今の叶は昔の錬だろう
か。そんな考えがふと浮かんで、叶はさらに笑みを深める。

叶の笑みを不審に思ったのか、愛美は小さく眉を寄せる。

「叶……先生？」

「なんでもないよ、愛美ちゃん。うん、なんでもない」

首をかしげることすらかまわずに、叶は涼の頭に右手を置いて優しく一往復撫でる。子供をあやすような仕草だったが涼が不快な表情をすることはなく、むしろ少し気持ちよさそうに目を細めた。

その仕草が子猫のようで、叶の胸に愛おしさがこみ上げる。

「でもね、植田さん。私になっただってしょうがないと思うんだ」
「え……？」

叶は努めて穏やかな表情を作り、彼女の頭を撫で続ける。

「あなたがなりたいのは、自分自身を素直に表現できる自分、でしょう？」

「それは……」
「私になったら、二面性がすごい強い人になっちゃう。だからあなたが目指すべきなのは私じゃなくて、素直になれる自分、だと思うんだ。そのための手伝いだったら何だってしてあげる。私はあなたたちの先生だしね」

かつて真紅に向けて放った言葉には何一つ偽りがない。

生徒たちの安全と精神面の成長の補助、そんなものもちろん教師の仕事だろう。けれどそういった全体への思慮もちろんだが、個々人への手助けだって教師としての立派な仕事ではないかと叶は考えていた。

同時に単純な話で、ただ叶が涼を気に入っただけということ。

「素直に……」

「そ。素直。いい言葉じゃない？」

感情に、感性に、理性に。どんなものにだっていい。自分の心に従って行動できるような人間に育ってくれば、それでいいと思う。それができないのが今の世の中で、彼女たちを取り巻く環境だといふのなら、その根源から変えてやるうじやないか。

なんだか楽しくなってきた、少女の頭に乗せた手のひらを勢いよく動かす。整っていた髪が滅茶苦茶になって涼はいやいやと首を振るのだが、逃れることを許すつもりなどない。

わしゃわしゃと効果音が出そうなほど頭を撫でてから、ようやく叶は拘束を解いた。

「わ……わ……わ……」

「えへへ……面白いねえ。そう思わない？」

急に話を振られて、愛美は苦笑いを浮かべている。目を回している涼を見るとさらに苛めたいという衝動に駆られるのだが、これ以上やると時間的にも精神的にも問題が出てくる。最後に優しく撫でてから、叶は笑った。

「御子柴くんの処理は私がしておきますから、二人は授業に行ってください。少し遅れることを皆さんに伝えるのも忘れないで」

教師としての朗らかな笑顔と、柔らかい言葉遣いを意識して見せ、突っ伏したままの空の右腕を自らの肩にかける。引きずるような体勢になるだろうがそこは途中ですれ違う他の教員に手伝わせれば

いいだろう。

呆然と見送る二人を背に、叶は食堂を後にする。

食堂と保健室は同じ一階にあるため、最悪一人でも連れて行くことはできる。問題は空がこうなった理由の言い訳と、いつ目覚めるかわからない事実。薬の組成は間違っていないはずだが、予想外の反応に叶でも今後の予測がつけられない。

いざとなれば専門家に何とかしてもらうつもりだったが、どうせならそんな手間を省きたい。自分が招いた状況だとわかっていても、つつい溜め息をつきそうになった。

「……そいつ、どうしたんです？」

「え？ ああ、朝凧くん」

昇降口から戻ってきた真紅と京に朗らかな笑顔を向ける。教師としての立ち位置を崩さない叶に対して、真紅は小さく溜め息をついた。

「空が疲れていたのは知ってるが、倒れるまでではなかったはずだ。あんだ、なにやったんだ？」

「私は何もしていませんよ？ ただ、元気の出る薬をお渡ししただけです」

勘の鋭い真紅だ、気づかないことはないだろうと思っていたがこつもあつさり見破られると叶のプライドもあつたものではなかった。その不満を面と向かって述べることはできないが、別の形で晴らす

ことならできるとも思えない。そう考えて、叶は花が咲いたような笑顔を作った。

「朝凧くん、よかつたら彼を……」

「授業の予習がありますので、これで失礼させていただきます。行く、京」

「え、あ……はい」

唐突に話を振られて、京は動揺したように視線をめぐらせる。彼女がこの学園入学した際は表面上こそ普通の学生と同じ水準を保っていたものの、内面には他者への遠慮と自己の弱さが存在していた。

真紅たちの戦いに巻き込まれ、真紅との交流を深めることで彼女も少しずつ変わっている。一教師としてその変化は喜ばしいことで、同時に自分たちの厄介ごとに巻き込んでしまった負い目を感じさせるものである。

叶がどれだけ負い目を感じても、結局彼女は誰のせいでもないと思ふのだらう。教師として、ナイトメアノ一人として、そして一人の人間として彼女の強さは見習うべきなのかもしれない。

「それでは朝倉先生……失礼します」

なかなか歩き出さない京の手を引いて、真紅は一礼を残し立ち去った。随分と嫌われたものだと思う反面、出会いが最悪だった割には嫌われていないのだと実感していた。

本当に、叶の周りには強い人間が多い。両親を失ってもなお抗い続ける者、巻き込まれても笑顔を崩さない者、仲間のために戦える者、力を奪われても前を向き続ける者。

叶なんかよりよほど見習つべき者たちが、叶の周りにはたくさんいる。

「……さっさと用事済ませて、授業に行きますか」

小さく一つ笑って、叶は保健室へと再度歩き出す。

皆のために自分のできる最善を尽くす。その決意を再度固め、そのための一歩を踏み出すために。

〔七十五話〕 ある夏の物語 〔終〕 (後書き)

六月も半ば、蒸し暑くなってきました。どうも、広瀬です。

叶の心象ばかりを描写して、話がまるで進まない、なんて状況に陥りかけていた今日この頃でしたが、ようやく更新することができました。

というかぶつちゃけると忙しさにかまけてほとんど書いてなかったのですが。

しかしたぶん、きっと今月はもう少し更新できると思います。

怪我しちゃったせいのできる事がかなり少なくなりましたので、書くことにかなり時間を割けるようになりました。こういうのを怪我の功名というんですね。

こうやって笑い飛ばさないと地味に痛いので。色々な意味で。

雑談はこの辺で終わりとして、次回は久しぶりにアグレッシブな内容となります。

ではでは〜。

〔七十六話〕 ある夏の、戦いゝ前編ゝ（前書き）

唐突過ぎる遭遇と、唐突過ぎる逃走。

唐突過ぎる変化に少年たちは翻弄される。

〔七十六話〕 ある夏の、戦い（前編）

彼女が教室に飛び込んできた瞬間、真紅は何故、今日この瞬間に六花を持っていないのか後悔した。

「朝凧くん！ 急いで保健室へ来て！ 御子柴くんが！」

半分ほど教師としての仮面が剥がれかけた状態で、叶は真紅の元へ飛び込んでくる。白衣に仕込んであったはずの試験管が幾つかなくなっている所を見る限り、悠長に授業の心配をしてはられないようだ。

「……天たちに連絡してください。こつちでも何とか時間を稼ぎますので」

「わかった！ 皆、悪いんだけどこの時間は自習していてね」

最後に一瞬だけ笑顔を浮かべてから、叶は急いで教室を後にした。残された生徒たちがほとんど呆然と後姿を見守る中、真紅と、そして愛美はほぼ同時に席を立ち、急ぎ足で保健室へと向かう。空に何が起こったのか定かではないが、叶の慌てようは尋常ではなかった。

本来なら愛美が向かうのを止めなければならぬのだろうが、ナイトメアとの抗争において今まで一線を退かせていた分、たまには自由にさせないと拗ねてしまう。長年の付き合いでわかってのことだったが、保健室についた瞬間、今回ばかりは彼女を拗ねさせておくべきだったと本気で思った。

「……六花、持ってくればよかったな」

保健室のドアを開け、その惨状を目撃した瞬間、真紅は隣の愛美を脇に抱えて右へと飛び退く。直後ドアから光の筋のようなものが伸び、直線上にあった窓が粉々に砕け散る。愛美が何か言う前に、保健室に背を向けた真紅は全力を持って駆け出していた。

「ちょ……ちよつと、真紅!？」

「黙ってる。舌嚙んでも文句言えないぞ」

今の真紅に余裕はない。戦闘なら一握りの冷静さだけ残して、他の全てを戦闘に回すことだってできるのだが、今回は学園内だし、何より戦闘ではない。

これは、逃走だった。

「……何よ、アレ」

抱え方が悪かった。無理矢理抱えたせいで愛美の頭は真紅の背中へと向いていて、ともすれば必然的に背後の状況を見ることとなる。そこまで思考がいつていなかったが、背中中の光景を見せることが愛美に悪い影響を及ぼすとすぐに理解できていた。

「見ないほうがいい。目を瞑っていればすぐに……」

背筋を冷たいものが走り、思わず真紅はその場に膝を折った。下げた頭の真上を鋭い何かが通過する。それが”砲撃”であることを理解しつつ、それが自分に向けられていることを真紅は少しだけ悲しく思った。

「少し荒っぽいが、ばれなきゃ大丈夫か……!」

立ち上がると同時に右の肘で廊下の窓を叩き割る。抱えた愛美を落とさないよう外へ離脱して、できるだけ開けた場所へと駆け抜ける。直線上においては砲撃の的になりやすいし、校舎内で乱発されれば被害が拡大してしまう。幸い今は授業中。学園の生徒は基本真面目ばかりなので、被害はないに等しいだろう。校舎の修復は後で叶にやらせればいい。

校庭を全速力で逃げて、その先にある雑木林へと身を隠す。久しぶりに肩で息をするほど走りぬけ、抱えていた愛美をおろしてから真紅は膝をついた。

「はぁ……はっ……はぁ……」

酸素が欲しい。全身の細胞がそう訴えかけても、全身に酸素が行き届くのはまだ少し時間がかかる。回復する時間を与えないといわんばかりに、楯にした木へと銃弾がぶつかる。貫通こそしなかったものの、銃弾は木の中腹ほどまで埋まり、同じ箇所は何発か打ち込まれれば容易に貫通してしまうだろう。

意を決し、隣の木へと転がり込む。隠れきる直前、制服の端を銃弾が掠めたが、ダメージはないとっていいだろう。

「くそ……正確だな」

一瞬の間でも逃がさず攻撃する。そんなことがあいつに、空にできるとは思わなかった。

保健室の中は悲惨な有様だった。壁には幾つもの弾痕があり、ベツドを隔てるカーテンは焼け焦げた穴だらけになり、地面には足の

形をした穴が幾つも存在していた。その中心で暴れまわっていた空の目は朱色に染まっていて、退却の二文字が真紅の脳裏をよぎったのだ。

結果として、その判断は最善だった。

上着を脱ぎ、ワイシャツのボタンを上から半分ほど外した状態で空は中庭まで真紅たちを追ってきた。右手には彼の新しい銃、新月が握られている。元々二丁の拳銃を扱う空が新月だけを握っているのは、おそらく彼が正気ではないからだろう。

「何がどうなってるのか、さっぱりわからないな……」

空には似合わない能面のような無表情は、明らかに彼のものではない。正気でないことは容易にわかるのだが、その理由が皆目見当つかなかった。

「あ、もしかして、叶ちゃんの薬かも」

「……何？」

「空を元氣付けるためって、昼食のときに薬を飲ませたの。もしかしたらそれが……」

ありえなくはない。叶が精製した薬がどんなものだったか知らないが、今の空は疲労が極限まで溜まっている。元氣をつけるだか知らないが、おそらくはそのせいで空は正氣を失ったのだろう。

背中の幹にぶつかる銃撃に舌打ちを漏らし、真紅は足元の小石を拾い上げる。

「ともかく、今できるのは……足止めだけか」

幹に着弾するのとはほぼ同時、真紅は隠れていたそれから身を乗り出し、握った小石を思い切り投げつける。プロ野球の投手顔負けの投球だったが、それも易々と打ち落とされ、同時に真紅の右手を銃弾が掠める。

「くそ……素手に銃は反則だろう」

弾丸が掠った箇所からは血こそ出ていないものの皮膚が少し焦げている。痛みがないのは軽症のためか、それとも神経が死んでいるのか。どちらにせよ対抗手段がないことに変わりはない。

「大丈夫!？」

「なんともない、とはいいづらいか」

再開された銃弾の雨に反撃することすら許されず、真紅は思わず舌打ちを漏らす。幹越しにぶつかる銃弾の威力は計り知れず、絶え間なく打ち込まれるそれは恐怖以外の何物でもない。反撃の手段も潰えた今、木の楯だけが真紅たちに残された唯一の防御手段だった。

けれど、こんな状況でも真紅は悲観していなかった。

自分に手段がないのなら、自分以外の攻撃に便乗して反撃とすればよい。

「ごめん、待った?」

まるで待ち合わせに遅れてきた恋人のように、それは軽い響きと共に訪れた。

「康くん！」

「……遅刻だ」

何もなかったはずの中空から姿を現したのは特別科の制服に身を包んだ若元 康。天一の話では疲れで動けなくなっていたはずの彼だが、今は制服の腰に刀を挿し、凜とした笑顔で真紅たちと対面している。

「ごめんって。お詫びに、こんなもの用意したからさ」

笑顔のまま差し出された右手は、空だった。

だが彼が聞き取れない音程の言葉を口にするのと、右手を中心に色が広がるように、少しずつそれが姿を現す。

十字型の鍔、黒の鞘、そして目を奪われる美しい紅の柄。真紅の愛刀である六花が、そこには現れていた。

「取ってくるのに遅れちゃってね。これで許してもらえるかな？」

「及第点、といったところだな」

「手厳しいね、ほんと。なら……」

自らの刀に手をかけ、康は意地の悪い笑みを浮かべる。片方の口元だけを吊り上げるような笑みは悪戯を思いついたときの子供のもので、真紅は思わず寒気を覚えた。

「これで、どうかな！」

草に覆われた土の大地へ、建御雷が突き立てられる。同時に周囲の音という音が静止し、耳鳴りがするほどの静寂が世界を包み込んだ。

この感覚には、覚えがある。

真紅が六花を初めて使ったとき、康が使っていた隔離空間。外界との接触を完全に拒絶し、康の意思でのみ解くことができる別世界の牢獄。彼が定めたルールの中に捕らえられ、目的を達するまで戦い続けなければならない。

「これで校舎の生徒たちには見つからない。存分に戦えるよ」

「助かる。だが、あいつは？」

「大丈夫。天なら……」

銃弾の雨が止む。同時に天空から能天気で、どこか力のある笑い声が響いた。

「もらったああああ！」

固定砲台となっていた空の直上から降り注ぐ光の筋。魔力を帯びた弾丸のようにそれは、朝倉

天一は空目がけて落下していく。

光の筋は地面にぶつかると同時に、太陽のような光を空間いっぱい
に吐き出したのだった。

〔七十六話〕 ある夏の、戦い（前編）（後書き）

アグレッシブになったかな、と思う今日この頃。どうも広瀬です。

普段騒がしい人間が正気を失うと、反転して口数が減る。そんなジंकス存在しないと思っっていますが、案外普通にありそうですね。

作品の話は置いておいて、珍しく今回は昼間の更新です。昼間の更新だと閲覧数がかなり落ちるんで今まで避けてました、こんちくしよ-。

冗談はさておき、一時くらいに更新しようと思ってすっかり忘れていたというのが真実です。いやあ、ボケが進んできたかな。

今月中にもう一回くらい更新できれば御の字かなあと思いつつ、今回はこの辺で失礼します。

ではでは〜。

〔七十七話〕 ある夏の、戦いゝ中編ゝ（前書き）

紅の刀が奔り、純白の刀が二つの軌道を描く。

それぞれが必殺、それぞれが渾身。

けれどもそれは 届かない。

〔七十七話〕 ある夏の、戦い（中編）

光の奔流が過ぎ去ったとき、真紅はその光景に言葉を失った。

天一の増幅された魔力が放つ光の攻撃は速度もさることながら、戦慄する破壊力を秘めている。まともな防御をすれば無論弾かれるどころでは済まないし、一歩間違えば致命傷を負う可能性だってある。

けれど空は、その中で立っていた。

右手の新月を楯のように扱い、天一の加速度付きの突きを受け止める。その右手をカバーするように、元々使っていた普通の銃を左手に握り、右手を下から支えていた。

「……吸収、した……？」

隣に呆然と佇んだまま、康がそんな言葉を漏らす。

真紅たちの位置からでは攻撃を受け止め、その魔力すら受け止めたようにしか見えない。けれどこの空間の管理者、若元 康がそう口にするのならばそれが真実なのだろう。無論、真紅にはそこまで見極める洞察力はないし、彼らのような特殊な力を感知することもできない。だから真紅には空がとんでもないことをやらかしたのだとしかわからなかった。

「放出されたエネルギーの二割、空への攻撃に利用した力だけを吸

収して、落下の力と天の攻撃力だけを銃の楯で受け止める……理論上は不可能じゃない。でも、それは新月に魔力の保管機能が備わっている場合だけ……」

自問のような声が康から漏れ出してくる。半ば呆然とした声音は康でもこの状況を予期しなかったことがはつきりと窺える。

真紅は声を張り上げる。

「下がれ、天！」

空中に取り残された天一はあまりにも無防備だった。

左手の手首だけを動かして、空は銃口を天一へと向ける。それに気づいたとほぼ同時に天一は両腕の筋力だけを使って弾けるように銃弾の軌道から抜け出し、芝の地面へと降り立った。

追撃するように二つの銃口が天一へと向けられる。放たれた弾丸を、実弾の方は刀で弾き、砲撃の方はかわすことでやり過ごす。そうして真紅たちが身を隠す林まで撤退すると、同じように身を隠した。

「はあ……はあ……は、ははは」

その表情は、笑顔だった。

「見たかよ、康、真紅！ あいつ、俺の渾身の一撃止めやがった！
すげえな！」

「本気で喜んでどうするんだよ」

呆れて頭を抱える真紅とは対照的に、天一はからからと憂いなく笑った。

「だってよ、あの空がこんなに戦えるなんて思ってたんだよ。肉弾戦ならまだしも、ここは魔力が支配する空間だ。覚醒した真紅ならわかるけど、空は覚醒とは程遠い位置にいたはずだぜ？」

真紅だってまだ理論を理解し、能力を使いこなせる寸前までしか至っていない。だというのに今の空は魔力などと呼ばれる力を完全に使いこなし、一瞬だけとはいえ天一の攻撃を防ぎきった。

叶の薬とやらが効いているせいなのか、元々その素養があったのかは定かではない。強力な力を使役し、絶え間なく銃弾の雨を降らせる存在は厄介以外の何物でもなかった。

「……馬鹿なこと言ってる暇はないよ。正直、ここは一对一の戦いを楽しみ場合じゃない。それはわかってるよね、天？」

「ん？ ああ、そりゃあな。ほんとはサシで勝負してみたかったが、まあこの際だからしかたがねえ。真紅、力を貸してくれ」

「……もとからそのつもりだ。愛美は下がってる。こんなのに真つ向から挑んだら、命がいくつあっても足りないぞ」

木の陰に身を隠したままの愛美へと声をかけ、真紅は刀を抜き放つ。同時に刀と自分の身体を一体とするイメージを脳裏に描き、刀へと声にならない声を投げかける。

十字の鍔が光を纏い、瞬時に爆ぜる。六つの花弁を持つ鍔となった六花は刀身に薄い膜が形成され、攻撃力、防御力共に向上している。空と同じように能力の向上を前提とした訓練ばかりこなしてきたためか、六花の扱い方にも少しずつなれ、同時に新たな使い方も考案できるほど余裕が生まれている。

「色々を試すチャンスなのかもしれないな……」

六花を右手に掲げ、真紅は木々の隙間から庭の中心にいる空へと視線を向ける。二つの銃口を構えた彼は、けれど今は銃弾の雨を一時中断していて、じっとこちらを見据えている。おそらくはこちらの攻撃に備えているのだろう。理性を失っているわけではないらしい。

こちらもそれなりの戦術を考えねばならなかった。

遠距離タイプの空相手には、こちらの攻撃が一定期間通用しない。近づくまでの時間、真紅と天一の動きならおそらく三秒、その間空の銃撃をもろに浴びることとなり、前進する勢いを殺される結果にならないとも言いきれない。最悪の場合どちらかを標的にして、もう一方が攻撃できる距離まで近づければいい。けれどそれも、天一の攻撃を受け止めたことを考慮する限り確実とは言いづらかった。

正攻法では無理がある。なら

「天、真紅。合図と同時に左右から飛び出して。その後は俺の力で、一秒で空のところへ送ってみせる」

康の能力、空間掌握に任せるのが最良の判断だといえた。

真紅は両手で六花を握り、天一は空間からもう一本不知火を召喚し、両手に不知火を構える。

攻めるのならばチャンスは一度、それ以上いらないといえるほど完璧な攻撃が必要になる。ナイトメアとの戦いのように殺すための攻撃ではなく、相手を屈服させるための攻撃。それが明確な殺意を持った攻撃よりよほど難しいことを真紅たちはよく理解していた。

だからこそ、三人。

康の指が打ち鳴らされる。

周囲の音を失って、自らの攻撃対象を空に限定し、敵目がけて疾駆する。左から出た天一も同じように駆け出し、地を疾駆する。魔力の籠もった銃弾が天一に、実弾が真紅に向けられて放たれる。互いにそれを一発ずつ弾いた瞬間、二人を取り巻く世界は色を失い、漆黒の闇の中へと捕らわれた。

次の瞬間、真紅と天一はそれぞれ空の真横へと移動していて、ほぼ同時に攻撃態勢へと移行していた。

「はああ！」

「つらあ！」

渾身の一撃。少なくとも真紅にとってはそれであり、天一にとってもまた同じであるはずの攻撃。互いに峰打ちながら、その威力を疑う必要など微塵もなかった。

それでも、決めきれない。

「この……っ！」

「受け止められた!？」

左右からの攻撃を受け止め、銃口を二人の眉間に向けて掲げている。その眼光は鈍く、二人の姿を見てはいない。二人を”敵”と判断しているのだ。

次の瞬間、二人の身体はもう一度別空間へと移動していた。すぐに元の林へと転送され、真紅は思わず膝をつく。

「あの速さで、止められる……」

「はは……ありや凄いわ。ナイトメアなんて目じゃない」

刀を杖のように地面へと叩きつけ、真紅は肩で息をする。魔力が増加している空間の中だというのに、一瞬の行動で全てのそれを持つていかれたような、途方もない疲労感が真紅を襲っていた。苦笑いを浮かべている天一もおそらくはかなりの疲労を受けているのだろう。楽しそうだった声音も今は少し曇っている。

「参ったね。これもだめか」

小さく溜め息をついて、康は頭を振る。

近接戦闘において仲間内で最強の天一と真紅、その攻撃を難なくいなした体捌きは見事なものだった。近接武器に対して遠距離武器

の銃でやり過ぎるのは生半可な防御ではなしえないだろう。それを二人同時、それも生粋の剣士である二人の攻撃を防ぎきったのだ。

今の空が普段の空を逸脱している。その判断が固まったことくらいしか、進展はなかった。

「……仕方がない、かあ」

大きすぎる溜め息を吐き出して、康が腰の刀を抜いた。

紫の柄と長方形の鍔を持つ刀。反りが極端にない、一直線の刀身には六花と同じような薄い膜が形成されていた。

「天、選手交代だよ。俺と真紅で彼の動きを止める。だから……」
全力で”、打って”

「……それ、大丈夫なのか？」

「タイミングになれば真紅と俺は退却する。大丈夫でしょ？」

「ちげえよ……空のほうだ」

その顔に浮かんだ表情に、真紅はただ驚いた。

天一の顔に浮かんだのは、躊躇い。

敵だと判断した相手に対し全力を持って攻撃する、それが天一の戦闘スタイルであり、真紅が最も見習おうと思っていた部分だった。二本の刀から放たれる連続の剣技、迷わない太刀筋、かすり傷程度では止まることのない歩み。その全てが朝倉 天一という少年の利点だった。

だからこそ戸惑う。

「大丈夫でしょ。きっと、ね」

「……わかったよ。ああ、わかった。どうせ怨まれるのは俺ですよ」

「……話が見えないんだが？」

「ん？ 大丈夫、大丈夫。真紅はさっき以上に空の動きを止めるよ
う立ち回ればいいんだよ」

「なんだか置いていかれているような気もしないでもないが、真紅
はやれやれと頭を振り、立ち上がった。

空を止めることができるなら、言われたとおりにやってやる。

躊躇いがちな天一を尻目に、真紅は自分の中で全部の力を使うと
決めたのだった。

〔七十七話〕 ある夏の、戦い（中編）（後書き）

七月始まって早々の更新です、ヤッホー、です。
どうも、広瀬です。

本当なら六月の閲覧数をダメ押しするために頑張ったのですが、あれ？ 今月ってもう終わりだっけ？？

という作者のダメダメな部分が発揮されてしまいました。いやあ、残念。

まあ七月の頭に更新できたのは幸いだったかなあと思いつつ、また今日も無駄に後書きを書き続ける次第です。

さて今回はぶっ壊れた空と三人の戦いだったのですが、空があまりにも強すぎる。二人同時に止めるってどれだけだよ。

あまりにも強すぎる空をどうやって止めるのか、いつもどおりのほほんと考えていききたいと思います。

ではでは〜。

〔七十八話〕 ある夏の、戦いゝ後編ゝ（前書き）

降り注ぐ光の雫

その一粒一粒が力であり、そして

決意の、証

〔七十八話〕 ある夏の、戦い 〱 後編 〱

康が前線に出てくるのは真紅が知る限り初めてのことだった。

いつも後方で真紅と天一のフォローばかりしていて、もちろん天一と一対一で戦っているところは知っているが、近接戦闘を見たことは全くなかった。

ともすれば彼の剣技を把握しなければ自分がどれだけ攻勢にまわれればいいのかわからない。

「心配しなくていいよ。俺だってそこまで弱いわけじゃない。思い切り立ち回ってくれてかまわないよ」

「そうか？」

「うん、そう。できるだけ時間を稼がなきゃいけないからね、真紅にも本気で攻撃してもらわなくちゃ」

笑顔でそんな物騒なことをのたまう少年に、背筋が凍るような感覚が訪れる。

天一のように仲間を攻撃する、という行為を覚悟した表情ではない。天一の剣には彼の決意がこもり、それによって力の大きさが変わっていく。けれど康の笑顔には覚悟なんて微塵もなく、ただ、相手を攻撃する、という行為に喜びを感じているようだった。

もしかしたら天一は、わざと康を前線に出さなかったのかもしれない。彼の秘める残忍さ、その片鱗だけでも見せたくはなかったから、刀を握らせたくなかったのかもしれない。

無論、本人に確認するつもりなどなかったが十分に意識しなくてはならないと判断できる。

「それじゃ、行くうか。あっちもどうやら、痺れを切らせたみたいだからね」

楯にしていた大木の一本が軋むような音を立てると共になぎ倒された。数多の銃弾を受けきったそれに感謝すると同時に、確かに時間は残されていないことを実感させられる。

おそらくは残り少ないチャンス、ものにしなければならぬ。

「行くよ。できるだけ時間を稼ぐけど、早くしてね、天」

「……わあつてるよ」

酷く不機嫌そうな声。二本となった不知火を握りながら、天一にはしかし、さっきまでの威勢がまるで感じられない。

一抹の不安を抱えながら、それでも真紅は康と共にもう一度攻撃へと駆け出したのだった。

「相変わらず、酷いこと言いやがるよなあ、あいつは」

容赦のない康の性格に辟易しつつも、それが仕方のないことだとわかっている以上納得するしかなかった。朝倉 天一という一人の事情を省みる時間など、確かに残されていない。

「はあ……やんなきゃダメ、か」

二振りの刃が霞のように消滅する。本来は能力を補助するための代物だったが、これから行うことを考えるとただ邪魔なものでしかない。何もなくなった両手だが手持ち無沙汰になることも無く、その両手を左右へ大きく広げるのだった。

「あんまりやりすぎるといろんな人に嫌われるから、本当はやりたくないんだけどさあ」

嘘だ。そんなもの自分に言い訳しているだけで、単純にその力を使いたくないだけ。力を失っているはずなのに、力を取り戻したいはずなのに、直接戦うための力以外は本当は欲しくなかったのだと天一はよく理解していた。

どうせなら真紅のように、自らの能力を強化する力が欲しかった。身体能力の向上だけなら使い勝手こそよくないだろうが、それでもこんな思いをすることなんて無かったはずだから。

「この空間でだって、本来の力の一割も使えない。なら、心配は無い……か」

言い聞かせる、自分の心に。

言い聞かせる、ここにはいない誰かに。

かつて彼女を、母親を殺した力を天一は両手に集めていく。辛い
ないといえば嘘になる、振り切ったなんて嘘の塊だ。

それでも振り切らずに進むことなんてできないから。かつての選
択と一緒に、歩んでいくことなんてできないから。

ロザリオに戻った不知火を首にかけ、天一は願う。

「ちよつとの間だけ、黙ってみてくれよ、母さん」

不知火の全能力を一定時間停止する。魔力増幅機能と刀の形状を
完全に頭から切り離し、両の拳に力を集めるイメージを強く思い浮
かべる。

貫くイメージ。

降り注ぐイメージ。

それは誰かを退けるためのものではなく、全てを破壊するための
もの。対象を逃すことなど想像することなく、誰が相手だろうと反
撃すら許すつもりは無い。

自分の中に残っている全ての力をぶつける。感情を全て消し去っ
て、天一はただ言葉を紡いだ。

「……空間全てに集う光……一握りだけ、一時だけ、その形を預ける」

少しずつ世界の光を集めていく。周囲の色がゆっくりと闇に包まれ、本来の色を失い始めるのを確認しつつ、天一はさらに言葉を紡ぎ世界を動かしてゆく。

形式なんて関係ない、興味すらない。元々本職の、魔術師なんて呼ばれる奴等とは全く異なった方法で力を手に入れた天一にとつては、言葉だの仕草だので影響を受けるほど安っぽい力なんて必要が無かった。

「光は集い、剣に変わる……一振り、二振り……」

世界に剣を召喚する。十字架のような簡素な形、けれどそれは絶対の破壊力を持つ力の塊であり、突き貫くことに全ての存在をかける。

康たちが戦っている開けた土地の頭上には既に、百以上の剣が召喚されていた。

「ふう……ただでさえ疲れるんだ、いい加減倒れてくれよ！」

力を増幅させるこの空間ですら、この一発が限界だった。光の剣一本ずつに精神を集中し、魔力を霧散させないように気を張らねばならない。魔力の残量、精神力共にギリギリのラインを保っていた。

タイミングを見誤れば真紅たちまで巻き込む場合がある。そのことも精神をすり減らせる原因となっていた。

空を死なせるわけには行かない。仲間を殺すわけには、いかない。

こんな難しい戦い始めてだと思いつながら、天一は声を張り上げた。

「お前ら、下がれ！」

拳を前に突き出して、天一は降り注ぐ剣の雨を作り出すのだった。

六花の袈裟斬りと建御雷の横薙ぎが左右から同時に繰り出される。二丁の銃はそれを紙一重で受け止めると、器用にもその銃口を刀の主たちに向け、躊躇いなく銃弾を射出する。何とか回避することもできるが、その都度数歩後退せねばならず、追撃を受ければさらに数歩、退かなければならなかった。

一対一で戦っていたら、負けていてもおかしくは無い。

近接戦で空に押し負けるといふ事実があまりにも新鮮で、真紅は思わず笑みをこぼしていた。

「余裕だね、真紅」

「はは……どこがだ」

互いに空を挟んで反対側にいるはずだが、声だけははっきりと伝わっている。それが康の力を流用しているのだと感覚で理解しながらも、それを確認するだけの余裕はなかった。

空の狙撃は嫌になるほど正確なものだった。空間を操作できる康には新月を、刀を主体に戦う真紅には実弾を、それぞれの確な位置に打ち込んでくる。

既に二分以上切り結んでいるが、真紅の額には玉の汗が浮かんでいた。

攻防一体となった空の動きは実に見事だ。隙を見つけること自体苦勞するし、そこを攻めようとすればさらに難しくなる。必然的に攻める方法が少なくなり、同時攻撃や波状攻撃を主体で戦うようになっていた。

真紅も、おそらく康も、強がっているもののほとんど余裕が無い。

天一が起死回生の一撃を放つと信じているが、真紅の疲労はかなり溜まっていた。

気を抜けば撃たれる。けれど対峙できるのはあと一回か二回が限度だろう。

そう思った、矢先だった。

「お前ら、下がれ!!」

声が響いた瞬間、鳴り響く銃声の雨をかいくぐって真紅は空の後方へと離脱した。力を使っていなければほとんど蜂の巣になるコースだったが、声を聞くまでは周囲の音を聞くため使っていなかった

し、その分スムーズに力を使えた。

康も自らの周囲を力で覆い、遙か彼方へと転移していた。

光が、空から降ってくる。

まるでオーロラのように、幾重にも連なる分厚い光。その全てが天一の創り上げた剣、不知火のダミーだと真紅は感覚で理解していた。

どれも必殺の威力を持つ、降り注ぐ光の雨。

回避不能なその魔法に、範囲外にいるはずの真紅ですら戦慄を覚えた。

逃げ場など全く無い。この威力では防御もままならない。

なすがままになった空の姿を、真紅は光の外側で見守ることしかできなかった。

〔七十八話〕 ある夏の、戦い（後編）（後書き）

どうも、広瀬です。

最近めっきり暑くなりました、どうにもむしむししてるなあと感じます。まあ元々夏は好きなので、何一つ問題はないのですが。

そういえば、私事なのですが先日駐車場に停めておいた車に同じ大学の方が衝突しまして、後部ドアがへっこんでしまいました。見た瞬間、自分もへこみました。

いやあ、なんていうんですか、事故を見るのは三度目くらいなのですが自分が当事者になるところも精神的にくるものがあるのかと……。

しかもまだ新車の範疇だったので、ダメージが……。

と、事後処理のせいだけっこう前からできていた今回の話をアップするのが遅れてしまいましたとき。

めでたしめでたし。

あれ、言い訳だっけ？ 自分で気づいてるよ！……！

なんとなく後書きが日記に変わり始めている気がする広瀬でした。

ではでは……。

〔七十九話〕 ある夏の、戦いゝ終編ゝ（前書き）

光が、空から降ってくる

貫く力は絶大で、人間なんか簡単に消滅させてしまう

そんな、剣のオーロラ

〔七十九話〕 ある夏の、戦い ― 終編 ―

粉塵が巻き起こる中、愛美はただその光景を眺めることしかできなかった。

光の雨が降り注ぎ、おそらく空は反応することすらできなかっただろう。反応できていたとしても一人の人間に防ぎきれぬ攻撃ではなかったし、逃げ出すことすら出来はしない。

粉塵が少しずつ、風に流されて消えていく。

その先に見えた空の姿に、愛美はただ息を飲んだ。

「……そ、ら……」

空は、立っていた。

両足に突き刺さった白刃は彼に倒れることを許さず、右肩から垂れた腕は皮一枚で繋がっているだけで骨すら完全に切断していた。かろつじて心臓は外しているのか、両胸に刺さった白刃には赤黒い血液が滴り落ち、光の剣を血液の道が伝っていた。

俯いた表情は、生気を感じない。

死んでいるといわれてもおかしくないその姿に、思わず涙がこぼれた。

「だから……言っただろ」

同じように俯いた天一は、まるで悲しみを搾り出すような声で呟いた。

「どうなっても、知らないって、さあ」

愛美の耳に届いたはずの呟きは、しかし理解できるものではなく、ただ目の前の事実を否定しようとする自分がいた。

今にも悲鳴を上げたくなる。泣き叫びたくなる。幼馴染の元へと駆け寄ってしまいそうになる。

けれどそれすら、両足の震えて押さえつけられた。

「……うそ、だよな……空」

考えたことが無いといえば、嘘になる。仲間の誰かが死んでしまう可能性、誰かが大きな負傷をしたとき自分は冷静でいられるのか。

答えはいつも、否だった。

誰だってそうだ。真紅や空はもちろん、天一や康、恵理が同じ状況になったとしても愛美は立っていられないだろう。誰かを失う悲しみなど父を失ったときに乗り越えたはずだった。でも結局は、自分の弱さを痛感させられる。

膝から崩れ落ちた愛美を、脇にいた天一がそつと受け止める。感謝の言葉を述べることもすらできなくて、愛美はただ呆然と立ったままの空へと視線を向け続けた。

「うそだよ……うそ……」

「……愛美」

悔しそうに齒噛みしながら天一は酷く弱々しい声で語りかける。天一だつて仲間を傷つけた痛みがあるはずなのに、愛美はそれにも気づけない。

このまま空が死んでしまえば

壊れそうな愛美の眼前で、一つ、奇妙な光景が広がった。

光の剣を全身に浴びれば、今の空でもただではすまない。

康だつてそんなこと百も承知していたし、何より天一の本気を一番理解しているのは付き合ひの長い康本人だつた。

彼が本気で力を放つ、その行為にトラウマを持っていることだつて知っている。無意識のうちに出力を半分以下に抑え、それでも康たちと対等に戦っていたことも重々理解している。力の蛇口が閉じている今でも

力を使える状況で、天一に勝てる人間がないことを知っていた。

全身から血を流している空の姿を少しだけ離れた場所で睨みながら、康は自らの性格を呪った。

この戦いの最中、康はある妙案を思いついていた。

空の暴走を利用して少しでも早く天一の力を取り戻させることができないだろうか、と。

天一の能力喪失は敵のナイトメア、烏丸 聡司と戦った際に力を吸い取られたのが原因だと天一は言っていた。彼の師匠である老人も、おそらく同じ見解を崩さないだろう。だが康には、それこそが不自然で仕方なく思えていた。

能力は扱う人間の精神力を利用して発動している。生命力を放出しているといっても過言ではない。その容量や出力は人それぞれであり、扱える力の質も千差万別である。その中で共通しているのが大部分の能力者は十六の自然属性に帰属していることと、一度使用方を覚えた人間がそれを失ったとき、それは死ぬときだという真実だった。

本当に力を使えなくなった人間とは生命力が枯渇した状態、すなわち死に際の人間に他ならない。他の能力者なんて数えるほどしかあったことはないものの、理論が間違っていないければそうなるはずだ。

例外は、能力者本人が力を使えないと思いつている場合。

天一が聡司に奪い取られたのは魔力の素、精神力の一部だったのだろうと康は考えている。彼らのような人外が存在、それを創り上

げたものたちならそんな凶悪な理論を創り上げている可能性がある。戦いから数日の間、天一が力を使えなかったのはそこに原因がある。さらに言えば、天一の能力に蓋をしたのは彼の師匠が放った言葉だ。何を意図して天一の能力を封じたのか知らないが、あの老人ならありえなくは無い。

彼の言葉には、言霊が乗っているから。

天一に本気を出させれば”蓋”も少しは開くかと思った。けれどその代償は、大きすぎる。

「ここまでダメージを受けたら……」

康がこの空間にあらかじめ設定していたルール。そのうちの一つは致命傷を負わないこと。どんな魔力でも物理的な攻撃でも、致命傷を受けることはない。空間内に隔離されたもの全てを支配するルールはしかし、天一の力の前に屈してしまった。

出血量や無数の傷を見れば、これが致命傷にならないなんて樂觀は出来ない。

康たちが持っている力がいくら常軌を逸しているといえど、死んでしまった人間を復活させることは絶対にできない。それを知っている康だから、この光景に歯を食いしばることしかできない。

「康……待て」

下を向いていた康の頭上に、冷静な声が響き渡る。それを発したはずの男は未だ片手に刀を握り締め、倒れる前の空を睨み続けている。

「……真紅？」

「アレ、お前の力か？」

刀の切っ先を光の山へと向ける真紅に、思わず視線がそちらへとずれる。

そこには康の予想とはまるで違う光景が広がっていた。

光の刃が全て抜け落ち、前のめりになって静止している空の姿。そのまま倒れるわけでもなく、かといって意識して立っているわけでもない。単純に、その場で静止しているだけ。両足の力なんて残っているはずが無いのに、倒れることを拒絶する彼の姿は、血まみれの人間が取れる姿勢では決してなかった。

その全身を薄い光が包んでいる。

空自身が発光しているわけではなく、光の粒子が隙間無く包み込んでいるような光景は自身が使っているその力よりも神秘的で、康は思わず目を見張っていた。

光の粒子が少しずつ、解けるように空へと呑み込まれていく。呑み込まれる先は全身のいたるところに存在する傷。光はまるで塗り薬のように傷へと染み込み、その傷を最初から無かったかのごとく消滅させていく。

光が全て収まったとき、空の身体は宙に放り出され、地面へとうつぶせに落ちていった。

「……なんだっただ、今の？」

呆けた声を漏らす康とは対照的に、真紅の動きは実に素早く、的確なものだった。

倒れた空へといち早く駆け寄り、何事も無かったかのように担ぎ上げて、呆けて動けない三人を気にすることなく脈を取ったり、呼吸を確認したりしている。

一通りの確認を終えて、真紅は立ち上がっていた。

「……康、空間を解除しろ」

「え？」

「外傷なし、呼吸正常。単純に寝てるだけだ、こいつ」

軽めに、横たわるその身体を蹴ってから真紅はやれやれと溜め息をついた。

康にとってその答えは完全な予想外であり、おそらくは天一にとっても予想外の言葉だっただろう。光の剣を全身に浴びて生きていくこと自体がありえないことなのに、無傷だという。肩透かし、というものとは意味が変わってくるものの、呆けるには十分すぎる理由になるだろう。

「とりあえず保健室にでも運んでおこう。叶に見てもらえば理由くらいはわかるんじゃないか？」

唯一冷静にそんな指示を送る真紅に感心と畏怖の念を抱きながら、康は言われたとおりこの空間を解除すべく力を使うのだった。

〔七十九話〕 ある夏の、戦いゝ終編ゝ（後書き）

はい、お久しぶりです。

広瀬でございます。

まさかまさかの更新期間……あら、三ヶ月近く更新してない！？
忙しいとか関係なくこれはどうなんだと自分で思ってしまっ今日この頃。

いやあ、激動の三ヶ月だった（言い訳）

兎にも角にもここから先、もっと積極的に書いていこうと思います。

ではでは〜。

〔八十話〕 薬（前書き）

人には、それぞれの役割がある
彼女の役割はきつと、彼らを支えることなのだろう

〔八十話〕 薬

保健室の空気というものはどうにも独特で、どこか神秘的なものを含んでいるように思えて真紅は少しだけ苦手意識を持っていた。

元々学校というものを知らなかった真紅には保健室の存在自体が入学までは知らないものであり、入学してからもほとんど使用する機会が無いものだった。そのためその部屋にあるもの全てが珍しく、棚の中に安置された薬や体温計、薄水色のカーテンで仕切られたベツドなどは好奇心の赴くままに弄ってみたいと思っていた。

残念ながら今は、暴れた空のせいで部屋の半分ほどが壊れている。二つほどベツドが蜂の巣になっていたり、薬品が入っていたであろう瓶が粉々になっていたり、保健室の主である教師が見れば卒倒してしまうのではないだろうか。

惨状を無視して空の横たわるベツドの傍らに立つ。

一番窓際のベツドに空の身体を横たえ、窓の方に愛美と天一が、カーテンを背に真紅と康が陣取っている。天一と康はそれぞれ備え付けの椅子に腰掛け、愛美は立ったまま空の表情へと視線を落としている。

一通り空の身体を検査して、窓際に背を預けた葉が小さく溜め息をついた。

「……本当に眠ってるだけね。外傷も……まあ破けた制服を着替えさせれば全くの無傷でしょ。内臓に損傷がある形跡もないし、これ、ほんとにあなたの力じゃないの？」

疑うような声を投げられて、丸椅子に座っていた康が頭をかいた。

「あの空間には確かに一定のルールができてた。でも、死んでも回復できるルールなんて魔力がどれだけあったってできるものじゃない。残念ながら、俺の力ではないよ」

きっぱりと否定する康の表情もどこか困惑気味で、横たわる空に剣の雨を浴びせた張本人に至っては未だ不思議そうに首をかしげている。

真紅だって、正直な話まだ実感ができていない。

明らかに死に体だったはずの肉体が完全に回復する。天一の攻め手に何か不具合があったのだとしたらそこを突破口に色々と考えてもできただろうが、いかんせん、あの”剣のオーロラ”は欠点すら感じる事ができなかった。

空の暴走から始まった今回の騒動は、最初から最後までわからないことだらけだった。

「ともかく、できるだけ原因を調べてみてくれ。あんたが作った薬だ、責任持って解析しろよ」

「はいはい、わかってるわよ。好意が裏目に出ることなんて良くあることだし、落ち込んでなんていませんよ、ええ」

好意の度合いを調節できないのが叶の悪いところなのだろう。そんなことを考えつつ真紅は空へと視線を落とす。

眠り続けるその表情は穏やかで、呼吸も規則的に行われている。

さつきまで無慈悲なまでに暴れていた存在とは、似ても似つかない。陽光が彼の表情を照らして、一瞬だけ眩しそうに眉をしかめたが、それでも起きることは無かった。

ここまで穏やかな表情をされると、こっちまで眠くなってしまう。

「……授業サボって、寝ててもいいか？」

「ダメに決まってるでしょう、不良生徒」

冗談交じりに放った言葉だったが、真紅の身体はボロボロだし精神力はほとんど持っていかれていくかのようになり、授業中に眠ってしまったもおかしくは無い状態だった。

それは天一や康も同じなのか、真紅が叶と言葉を交わしている間に目を閉じて仮眠しているようだった。

「……あんたら、ほんと不良ばかりね」

座りながら眠る二人に気づいて叶は溜め息をついた。

「ああ、そうだ。真紅、一つだけ確認したいんだけど、いい？」

「ん？ なんだ？」

一瞬愛美のほうへと視線を向けた叶は何も言わずに窓枠から背を離し、反対側のドアへと歩き出す。真紅も黙ってその背中に続き、愛美を残して保健室を後にした。

授業中の廊下に出た叶は小さな溜め息と共に白衣のポケットから一本の試験管を取り出す。

白濁の詰まったそれを見て、真紅は背筋に寒いものを感じる。それが何なのかを瞬時に理解して思わず手を伸ばしていた。

叶の手からひったくったそれを光にかざすと、まるで固体のように光を通してくれない。

「それが空に飲ませた精力剤。飲んだすぐに倒れちゃったから味とかは保障しないわよ」

「……一本だけじゃないと思ってたが、今持っているとは思わなかった」

「正直、今にも処分したいところだけどね。まだ使い道がありそうだから、そもいかなないみたい」

試験管を叶に返して、真紅は腕を組む。

叶の開発したそれが何なのか定かでない以上、真紅には口を出すこともできない。彼女の思考を読もうとしても、根本的なものがないなら無理だった。

「使い道、って？」

「空が暴走したとき、一度でも言葉を発した？」

質問に質問で返されて、それでも真紅は思考をめぐらせる。

真紅を追っていたとき、天一の奇襲を防いだとき、そして全身を剣で貫かれたとき。空は呼吸すら乱れていなかった。本来なら上げるはずの苦痛の声も、全くといっていいほど聞こえなかったではないか。

その姿は、まるで

「感情を感じなかった……ナイトメアみたいに、でしょ？」

「どういうことだ？ 空は……」

「ナイトメアではないよね。あれは人間として色々欠陥がある。

私が言えたことじゃないけど……ナイトメアと人間の違いは、結構簡単にわかるもの」

しかし、空の攻撃性、残忍性、様々な面が彼らのそれに酷似していたのも確かだった。

原因がわかって以上、その原理がわからない。

「元々この精力剤は私たちの回復力とか生態データを基に構築したものだから、どこかで間違えて、理性までなくなるように作っちゃったんでしょ。そこさえ直してしまえば……薬として使うことも可能なの」

「なるほど……その間違いは、どれくらいで直せそうなんだ？」

「そう、ね……わからないけど、それほど時間もかからないと思うわ」

「そうか。なら」

薬が出来次第、奴等との戦いを再開できる。

傷の回復力が上がるのなら数で負けているこの状況でも、奴等と戦うことができる。そもそも個々の力だけなら負けているわけではないのだ。ゲリラ的に戦うつもりだったものが、正面きって戦えるようになるのなら願ったりかなったりである。

「こら、変な考え起こさない」
「っ！」

人差し指で額を刺され、思わず変な声が出そうになる。

してやったりという表情をする叶を恨みがましく見つめて、一区切り置いてから溜め息をついた。

「まだ情報が少ないんだから、無茶しちゃダメでしょ？」

「教師みたいなことを言う……」

「教師ですから」

胸を張って嬉しそうな表情をする叶には流石の真紅も言い返せなかった。

「ともかくもう少しの間は大人しくしててよ？ 七夜も何かやって

るみただし、できれば仕掛けるまでは水面下で動きたいんだから」

「わかってる。七夜が何をやってるかなんて興味は無いが、こっちはこっちで、やることもしっかりしているしな」

未だ腰にささっている六花を優しく撫でて、真紅は叶に向き直る。

今、真紅たちがやるべきは守るための手段を充実させること。敵を倒すための手段ではなく、仲間を、誓いを、敵から守りぬぐための手段こそが最も必要なものだった。

「そろそろ戻ろう。天たちにも授業がある。いくらこっちはあなたの弁護があるって言っても、いくらなんでも休みすぎだ」

「あ……そういえば、私の授業の時間、終わってるわ」

「……マジ？」

また他の教師に弁解しなければならぬと思うと、鋭い痛みが頭の右側を走る。

目の前で見せる屈託の無い笑顔が、その痛みを助長させていた。

〔八十話〕 薬（後書き）

おつかれさまです、ひろせです。

今日も今日とて忙しい毎日。あれ？ 大学生って楽だよっていわれてなかったっけ？ 二年前の自分に言い聞かせてあげたいですね。

さてさて今回は繋ぎみたいな回ですが、意外と重要な話かもしれないですね。薬で……ドーピング以外の何物でもない……。

では、次回もさっさと更新するつもりでいますんで。
では～～。

〔八十一話〕 蒼の死神（前書き）

変わっていく自分がいた
変わらない自分がいた

〔八十一話〕 蒼の死神

蒼い、槍。光の中にあつて少々目立つその存在は、けれど闇の中においてはまったく目立つことが無い。むしろ適度に闇へと溶け込み、敵に気づかれること無く命を刈り取る。

まるで死神の鎌のように、畏怖された存在。

かつての仲間たちの中で純粋な戦闘能力ならば工藤 錬に勝るものはいなかった。それと同じように暗殺と分類されるものに関して、氷室 七夜に勝るものは、いなかったのだ。

オールマイティに戦える錬、速さの新、破壊力の健三、暗殺の七夜。

上位に位置づけられる四人の、本来管轄する部分。

いわゆる汚れ役である暗殺が、けれどナイトメアの本来の役割だと七夜はしっかりと理解していた。

力があれば、権力があれば、守りたいものを守ることができる。

ナイトメアにとって暗殺は本業であり、組織には必要不可欠なもの。それを総括する七夜にはある程度の権限が与えられていた。

偵察部隊の統率、暗殺対象の特定、表舞台での対応。特に偵察部隊の統率は七夜にとってこれ以上ないほど都合のいい役割だった。

逃げ延びた叶へと向かうはずの追っ手を統率することで、見当違

い場所を搜索させる。彼女が逃げ延びてから二年の月日が流れた頃、七夜はある組織の女を代わりにして、叶が死んだものだと思わせた。ナイトメアとして生まれた女は、生き返ることができない。その特性を利用して、顔面を粉碎し、血液検査が行われないう人知れず火葬した。

今となつては、七夜の反乱によって偽装もばれているだろう。

直接守ることができるのだから、どうでもいいことなのかもしれないが。

「……それで？ こいつのことを調べればいいんだな？」

薄暗い、蝋燭の光しかない地下の部屋で、七夜はある人物と接触を試みていた。

肩には布に覆われた相棒を担ぎ、黒のスーツを身にまとつて。かつての、ナイトメアとしての姿に似た格好で、七夜はけれど相手が驚くほど優しい表情をしていた。

「ああ。報酬はいつもどおりに」

黒のフードを頭から被った背の低い男に、一枚の写真を手渡す。

男は一度その写真に目を落とすと、ふむ、と息を吐いた。

「……葉山……か、どうしてこいつを？」

写真に写っているのは片腕がなくなった茶髪の男。残った右手で巨大な鎌を軽々と振っている姿は、かつての通り名、”死神”を彷彿とさせるもの。

「他がどう動くかは、何となく想像がつく。でもこいつは、修三だけはどう動くのか、まったくわからないんだ。動かないかもしれないし、率先して動くかもしれない。どっちにしても、警戒だけはしておかなきゃいけないんだ」

「蒼の死神”の勘か……わかった、できる限り探っておこう」

「感謝してる。すまないね、こんな危ない仕事ばかりさせて」

「なに、気にするな。付き合いの長いお得意様だ。これくらいのリップサービス、どうということはないよ」

ナイトメアの暗殺部門統括になってから付き合いが続いている情報屋に頭を下げ、七夜は部屋を後にする。元々世間話をするつもりはなかったが、つい、感謝の言葉が口をついていた。

少しずつ、真紅たちに感化されているかもしれない。

関わりを持った、仲間とも言うべき人物たちへの愛着、その人たちの無事を祈る心。

こんな感情、鍊と叶以外に抱いたことがないはずなのに。今ではそれが普通のことのように、仲間たちの無事を祈り、そのために行動している。

再会したときの叶は随分と人間らしくなったと感じた。もしかしたら同じように、七夜自身も変化を始めているのかもしれない。

「ふ……変化、か」

それも、悪くない。

無感動に敵を殺し、組織のために生き続けることがどれだけ空しいことなのか。それを知ってしまったえば、理解してしまえば、同じように生きることがもうできない。負の連鎖を、悪夢を終わらせて全うな人間として生きたいと、願ってしまったから。

そのためなら、どれだけの力を使ってもかつての仲間を、ナイトメアを解体する。

夜の帳が下りた、裏路地。五人ほどが横一列に歩けそうな開けた場所から、少し進むと小さな通路がちらほらと見える。

扉を開いてそこへ出たが、周りの空気に違和感を覚える。

適度に張り詰め、適度に緩んだ空気。

常人ではわからぬほど微弱な気配は、とても懐かしいものであり、同時に嫌悪すべき類のもの。

後をつけられていたのか、待ち伏せされていたのか。昔から使っている場所だっただけに、組織にもこの情報は流れていただろう。少し配慮が足りなかったか、七夜のあとを継いで下位のナイトメアを統率しているものがあるとは思っていなかった。

布を引き千切り、隠れていた相棒を夜の闇へと解放する。月明かりを反射する切っ先はまるでもう一つの月のように、隠れている敵へとその存在を主張している。

「突破して、まくしかないか……少し骨が折れるな」

このまま突破できたとしても、真紅たちにたどり着かれては厄介だ。いずれ戦闘になるとしても、今はまだ何の準備もできていない。せめて真紅たちの状態が万全になるまでは時間を稼がねばならなかった。

むこうから攻めてくることはほとんどないだろう。なら

「こちらから……突き進む！」

七夜の槍は突撃槍のように突進向きの槍ではない。どちらかといくと七夜の繊細な槍捌きにふさわしい、軽くて鋭い、匠の作った業物。それを踏まえたうえで、七夜は突進を選んだ。

足でかき回せば、さしもの連携も崩すことができる。ちりぢりになったところを各個撃破するだけなら七夜一人でも何とかなる。

槍を前に突き出したまま小さな路地へと突っ込もうとする。

直前、七夜は直進をやめた。

真っ直ぐに向かっていた力を片足だけで右側に反らし、槍を構えたまま回避するような行動を取る。

「……鈍ってはいないみたいだな……安心したぞ、七夜」

直進しようとした路地から聞こえる、低くて冷たい声。

感情を押し殺したものとまるで違う、感情そのものを持たないような残忍な殺気と、それとは対照的な、殺したいと願う、それが叶う前の、歡喜に満ちた気配。

最初、七夜は気配の主は複数だと確信していた。誰が指揮をしていたとしても、指揮官を後ろに置いて、包囲しているのだと。

けれど、勘が完全に外れた。

気配の主はたった一人。それも、今最も出会いたくない相手のもの。

「……意外、だね……直接、それも単身出てくるとは思ってたかったよ」

「お前相手に、まともにやりあえる雑魚なんていねえ。それなら手の空いてる俺が出てくるのは当然の答えだと思っただがな？」

「評価してもらえるのは嬉しいけど、嬉しくないよ……修三」

路地から顔を出したのは、三日月型の巨大な鎌。人間の首程度なら一振りですり取っていくほどの鋭い刃に、七夜は冷たい殺気を感じている。

目で見ると、そこに込められた殺気が嫌というほど伝わってくる。無感動に殺してきた七夜とは対照的に、葉山 修三は喜んで敵の首を狩っていたと聞く。その片鱗を見たような気がして、七夜はただ握る槍へと必要以上に力を込めていた。

「評価もするさ。双子の死神とまで言われた片割れだ。どれほどの

力があつたのか、確かめてみたいと常々思っていた」

「……俺は思わなかったな。片腕を、それも利き腕を失ってもほとんど衰えない実力。本来の力でぶつかり合えば、結果はわかっていた」

もしかしたら修三は戦闘センスだけなら錬と互角だったかもしれない。今となつてはわからないことだったが、片腕を失っても気おされている七夜にとっては、ともかく強敵であることに変わりはない。

槍を突き出して、七夜は体制を整えた。

「それでも……今なら君を倒せるかもしれない」
「そう、だな……楽しみだよ、お前が俺を殺すのが」

修三もまた、鎌を眼前に突き出す。

互いの武器を一度ぶつけ合い、二人だけの戦いが、夜の闇の中で始まるのだった。

〔八十一話〕 蒼の死神（後書き）

はい、おつかれさまです。

なんだかとってもその一言を口走りたくなる広瀬です。

七夜の話ですが、珍しく指が動く動く。ほぼ考えたとおりに展開ができて、大満足です。

次話では戦闘を描こうとおもいますよお。

ところで話は変わるのですが、周りでインフルエンザが流行っております。

まずい、非常にまずい。

ちよつとずつ友達が倒れていく……最後に残った数人……パンデミック！

的なテンションでお送りしております。

いや、マジでインフル怖い。

元々高校時代は二年間で三回もインフルになった自分ですから……インフルエンザ、撲滅！ くらいの気合でなんとかならないかと思ってるんですが。

まあ、なったときは色々放置して寝てることにしますw

ではでは〜。

〔八十二話〕 死神の邂逅（前書き）

二人の死神は、変わっていく
元々一っだった存在

それはけれど、時を帯びて離れていく

いつか、互いを滅ぼすために

〔八十二話〕 死神の邂逅

二人の武器、槍と鎌はまったく違う武器でありながら、同じ特性を持っている。

七夜の蒼い槍は先端の刃に過度の圧力を加え、敵に与える衝撃を極端に上げる。対して修三の大鎌は三日月型の巨大な刃に偏り無く力を加えてやることによって敵の胴体を両断したり、首だけを狙って撥ねることに特化しているものだった。

同じ部分は、使い手と凶器の距離が開いていること。

矛先と手元には互いに一メートルほどの距離があり、互いに互いの攻撃を見切るのは切っ先と刃にだけ集中すればいい。

常人ならばそう判断し、相手の隙をうかがうだろう。

けれど彼ら二人には、その間合いすら武器とすることができる、技量が備わっていた。

「穿て！」

「飛べや！」

七夜の刺突と修三の薙ぎが交錯する。直進と横断、互いに違う勢いはしかし、静止という形を持ってその力を失っていく。

力も身のこなしも、全くの互角。

その事実が七夜を戦慄させる。

五体満足の七夜が、隻腕の修三と互角。それも彼の利き腕は左であり、失ったそれが今なお存在していたら、恐らく、いや、確実に七夜よりも上の実力を持ち合わせているのだろう。

今の七夜よりも力が上なのは、ナイトメアの中でも数少ない。鍊や新、健三だけかもしれない。もしかしたら彼は、その三人以上の実力を持ち合わせていたのかもしれない。

「そら……考え事はよくないぜ、七夜」
「っ！」

己の武器と同じような、三日月型に歪む口元。ぎらぎらと危険な光を宿すその瞳には、邪悪を通り越し、純粋な殺意が存在している。

実力が互角なんて、間違いだ。

彼の残忍さはナイトメアでも頭一つ飛びぬけていることを、七夜はいまさらながらに理解した。

理解したところで、この状況がどうなるわけでもない。

とりあえずはこの危機を乗り越えなければ、理解した意味すら存在しなかった。

「知ってたか？」

拮抗した武器を構えたまま、修三は語りかける。

「……何を？」

瞬間、拮抗がほどけた。

唐突に引かれた力を見逃すことなく、七夜はその矛先を修三の胸元に突き立てる。修三は片足を引くことで体制を反らし、矛先は胸元の服を掠めるだけで、すぐに防御へと転進せねばならなかった。

もう一度、修三の薙ぎを防ぐ。先ほどと同じ状況になってから、修三はさらに邪悪な笑みを浮かべていた。

「さっきまで、俺の服には盗聴器が入ってた。助かったぜ、これで面白い昔話もできる」

「盗聴器？ あんたにか？」

「誰が、とかはなしだぜ？ そんな野暮なこと話すために、壊させたわけじゃねえ」

わざと隙を作り攻撃させる。そういった器用なことまでできるとは、知らなかった。

「さっきの質問に答えてやる。知ってたか？ 錬は確かにナイトメア中最強の”戦士”だった。だがな、俺たちの中で最強の”暗殺者”はあいつじゃなかったんだよ」

外面を気にすること無かった修三が知る、最強の暗殺者。それが誰のことかくらい七夜にはわかっていた。

「それが、あんただって？」

「少なくとも俺あ、他の誰にも負けてる気はしねえ」

だがな、と鎌から力を抜くことなく、修三は語り続ける。

「お前だけは興味があつた。俺より上手く殺すんじゃないか、俺より上手く闇にまぎれることができるんじゃないか。こういう機会を待ってたんだよ、お前とこうして、殺しあうことができるその時を！」

「……狂ってる。狂ってるよ、修三」

「ナイトメアは存在自体が狂っている！ それを知らないわけじゃないだろ、ななやあ！」

一瞬だけ鎌から力が抜け、自分の左側から刃が振りぬかれる。距離をとってその一薙ぎをかわし、反撃に転じる前に槍を防御に回す。回転する槍の腹へと数本のナイフが当たり、甲高い音を立てて地面へ落ちていく。

防御の瞬間、修三の姿を見失った。

見失った姿を探すのではなく、気配で相手の行動を読み取る。首筋に微かな風を感じて、七夜は武器の回転を止めると、前のめりになりながら数メートル前方へと転がった。

立ち上がりざまにまた防御へと転進する。先ほどまで自分がいた場所を巨大な鎌が通過して、三日月の軌跡が七夜の網膜に焼きつく。

「いい勘だ……だがよお、逃げるだけじゃ面白くねえ。攻めるよ、七夜」

「……言われなくても、そのつもりだ」

切っ先を少しだけ下げ、右足を半歩引く。

半身を向けた状態で、七夜はただ相手の動きに目を凝らしていた。

刃の部分だけに気をとられすぎて、他の武装がなんなのかじっくり見る余裕を失っていた。先ほどのナイフを見切ることができなかったし、反撃に転じる余裕など皆無に等しかった。隻腕である修三が懐に隠し持っていた可能性は考えづらいし、鎌の石突か、もしくは両足に隠していたのだろう。

修三ほどの暗殺者を相手にする場合、武装を理解しなければ七夜としても反撃の糸口を見つけにくかった。

一番可能性が高いのは、左足だろう。大鎌を振る際に軸としていた右足に隠していたのであれば、暗器としての役割を果たすことができなかつたはずだ。石突に隠すにはナイフはいかんせん大きすぎる。あと何本隠し持っているかわからないが、左足に暗器があるのはほぼ間違いない。

ともすれば、右足にも何らかの武装があると見て間違いはない。

「……攻める！」

自身に言い聞かせるように、七夜は細く呟いて地を蹴った。

槍と鎌のリーチはほぼ同じ。間合いの優劣はつけづらい。腕力自体もさほど差はないだろう。

なら勝敗を分けるのは、覚悟の差だ。

かつての仲間を殺す、そのことになんら躊躇いのなかった頃の七夜ならどちらが勝ってもおかしくない戦いをするだろう。けれど今は、自分でわかるほど甘くなった自分がいる。

槍の矛先と大鎌の刃が交錯する。けれど前のように止まることなく、直進する力だけで刃を弾き、相手の体勢を崩そうと試みる。

半身を反らすことでいなされ、一瞬だけ背中を見せた後、薄く光る刃が首の高さを駆ける。

軸は、右足。

滑るように一步後退して、相手の間合いから退く。空を切った刃の後にやってくるのは前と同じナイフの雨か。それを退ければ一瞬だけでも隙ができるだろう。

その一瞬を逃すつもりはない。

投げ出された左足の先から、三本のナイフが射出される。完全に外れている一本を無視して、一本を弾き、一本を回避して、もう一度鎌の間合いへと侵入する。一度大振りした直後の身体では、どうやっても隙が生じている。

一撃加えれば、逃げるタイミングを探すことができる。

槍を振りぬこうとした、瞬間

修三の三日月型に歪んだ口元が、目に飛び込んだ。

同時に首筋の毛がちりちりと逆立ち、危険を察知する。けれど既に攻勢に回っていて、どんな危険だろうと回避に移ることができない。

「ばあか」

正面は向いていない。横顔に浮かんだ笑みの正体は 彼の足から伸びた細い糸だった。

「 一ノ型 影崩し 」

急速に近づいてくる気配。糸で繋がった十本近いナイフが、死角から七夜へと向かってくる。

避けられない。そう、直感した。

修三の術中にまんまとはまったしまったのは、後悔してもどうしようもないことだった。逃げることはかり考えて、本当の意図を考えようとしなかったことは次に活かせばいい。

何よりここでダメージを受けてしまえば、この先真紅たちにも迷惑がかかるかもしれない。

出し惜しみしている余裕は、なかった。

「舐めるなよ、修三！」

前進しようとする全身の筋肉を強制的に止め、悲鳴を上げる全てを無視する。左足に全体重をかけることで痛みという警告をそこに集中させると、槍を握る右手にめいっばい力を込めた。

「弾け！」

声と共に、自分の身体を回転させながら槍を振るった。

掠ることさえ許されない。ナイフに毒を塗っている可能性が高いし、先にダメージを受けるのは少々、というかかなり悔しい。これ以上の負けを作らないためにも、全てのナイフを迎撃する必要があった。

自分の目ですら追いきれないほど強引に、槍の防御膜を創り上げる。右腕の筋繊維が干切れることもいとわず、ただ向かってくるナイフを弾き続けた。

同時に糸を断ち切ることで、弾いた後のナイフがもう一度襲ってくるのではないよう警戒する。

最後の一本を弾いてから、勢いそのままに修三へと槍を振るった。

「おっと！」

数メートル後退したのを確認して、七夜は全身の緊張を解く。

糸を断ち切った状態では、遠距離攻撃をしてくることもないだろう。

「流石だなあ。アレを防げたのは……三人目だ」

「他が誰なのか興味があるね」

修三が戦ったことがある人物で、常人離れた身体能力を持っている人間。一人は容易に想像がつく。彼の左腕を奪った、真紅の父親だろう。けれどももう一人が誰なのか、純粹に興味がわいていた。

「一人は白羽のじじいだったな。もう一人は……お前の兄貴分だ」

「っ！ 錬さんに……使ったのか？」

「あっさり弾き飛ばされたがな。この程度じゃまだまだだったことじゃねえのか？ まあ、今となつてはどうでもいいことだ」

三日月型の笑みを浮かべ、大鎌を頭上に掲げる。ここからが本番だと言わんばかりの、抑えることない殺気が七夜の頬を冷たく撫でた。

次の一撃で決めなければ本当に、ここで雌雄を決しなければならぬだろう。

負けるわけにはいかないが、明らかに不利なのは変わらない。

「次で仕留めてやるよ、なな……や？ なんだお前、今は仕事中……」

…ああ!？」

なにやら独り言を口走っているようにも見えるが、耳元のイヤホンから声が聞こえていたのだろう。イラついたように声を尖らせ、最後には小さく舌打ちを漏らしていた。

「ちっ……うぜえやつのお呼びだ。今回は引いてやるよ」

「……なに？」

「引いてやるって言ってんだ！ ああ、イラつく！ 久々に楽しめると思ったのによ。七夜！ てめえ、俺と戦うまで死に戻るんじゃないぞ！」

「あ……ああ」

大鎌を肩にかけ、不機嫌な子供のような表情を見せて、修三は背を向ける。隙だらけのように見えて、実際隙だらけなのだ。が今のうちに攻撃しようとは思えなかった。

何があつたのかはさっぱりだが、引いてくれたのなら無理に戦う必要はないだろう。あの修三が従う相手、というのも気になったがこの好機を逃がすつもりはない。

釈然としないものを感じながら、七夜は蒼い槍を片手に夜の闇へと溶けていくのだった。

大鎌を肩にかけたまま、葉山 修三はささくれ立った気分をどうにかするのに必死だった。

いくら頭の上がらぬ相手で、命令であるといつてもせつかく見つけた獲物をみすみす逃がしてしまったことは修三にとつても齒がゆいものであり、双子の死神とまで呼ばれた片割れと本気で戦える状況という限られた機会を失ったことはナイトメアとしての修三をさらに苛立たせた。

結局”あの方”の指示に従いはしたものの、一つ二つは我が俣を言つても問題は無いだろう。

「糞が……もう少しだったのに」

もう少しで、七夜の本気を引き出すことができたのに。

ナイトメアに関わる生物の中で、最も七夜を評価しているのは、おそらく修三だった。

鍊や叶がナイトメアを離れ、聡司が囚われの身となつてからはほとんど目立つた活動をしなかつた七夜。けれどそれが嵐の前の静けさと同じだと、修三だけは気づいていたのだ。

叶についての偽装、真紅の存在。七夜が隠そうとしていた全ての事象を、修三は見逃した。

その方が、面白いから。

修三は歪んでいる、と七夜は言っていた。けれどそれはナイトメアの宿命であり、それが正常なのだと思っている。

だが、確かに修三は歪んでいる。それも他のナイトメアにはない方向で。

修三にとっての仲間とは、いずれ倒すべき対象でしかなかった。

相手を楽しめるほどの強敵になるまでは静観を決め込み、対等の関係になれば牙をむく。今まで何の兆しもなかった”敵”から攻められる獲物は、実に面白い反応を見せてくれるものだった。

「あれは……いいねえ」

中でも七夜はとても旨そうだ。

戦闘タイプが似ている、武器のリーチもほぼ互角、状況判断もしつかりできている。あれほどの逸材を敵として狩ることができるのなら、修三がナイトメアに残っている意味もあるというものだ。

一対一の殺し合いは、本来自分の領分ではない。それでも、その土俵で戦う意味をしつかりと見出せているあたり、修三は恵まれているのだろう。

意味すら見出せず、ただ崩れていくナイトメアを何人も見てきた。そんなやつらよりは、よほどまじだ。

月の光すら届かない路地まで入って、ようやく修三は鎌を下ろした。

「……遅いぞ」

「るせえよ」

闇の中から聞こえる声は、機械を通したように奇妙な響きを帯びている。自分相手にそんな面倒をする必要もないのだが、それはそれで面白いから無視している。

「どうだった？ お前の獲物は」

唐突に聞かれたものながら、ふむ、随分と気を使った言葉だなと感じていた。

どうだったか、と問われると判断に困る。せつかく戦えるチャンスを潰した張本人にそれを問われるのも奇妙な気分だった。

それでもしいう言うならば

「悪くない、育ち方だったぜ」

そんな言葉くらいしか、思い浮かばなかった。

〔八十二話〕 死神の邂逅（後書き）

はい、お久しぶりです、広瀬です。

七夜と修三の争いは中々書きやすいようで、実は書きづらい。ふむ、どうしたものかと考えた結果が今回のようになってしまいました。もう少し後で出そうと思った”あの方”まで出してしまって、軌道修正が少し必要かもしれません。まあ何とかなるでしょう。

さてさて、そういえばもうすぐテストだなと思う今日この頃。というか……来週だよ!?

何も勉強してない、持ち込みできない。とかつて教科が多い。いや、まずいって。忙しいとか言ってもらえないからね。

というわけでたぶん、更新がさらに遅れます。

平謝り。

ではでは〜。

〔八十三話〕 空の目覚め（前書き）

目覚めは突然に。
激痛と共にやってくる。

〔八十三話〕 空の目覚め

目が覚めたとき最初に感じたのは、全身に走る鋭い痛みと眩暈にも似た揺れ。

首だけはどうかやら動くようで、自分の置かれた状況を理解すべく、空はゆっくりと左右へと目をやった。

まださほど見慣れたとは言い難い、高嶺家の一室。自分用にあてがわれたそこは訓練の後に疲れた身体を休めるだけに使わされていたもので、簡易ベッドと銃の手入れをするための作業台が置かれただけの質素な部屋。台の上には、今は銃が置かれてはおらず、さらに殺風景になっている。

「……………いつてえ……………」

少し腕を動かそうとして、激痛が走る。

まるで全身に針が刺さっているような、ピンポイントで突き刺さってくるような痛みが動かそうとした部分全体へと広がっていく。

「何、だ……………めっちゃ、いてえ」

そもそもどうしてベッドで眠っているのかさっぱりわからない。

確か叶に変な薬を飲まされ、気分が悪くなった。そこまでは覚えていたはずだが、その先を思い出そうとすると偏頭痛のような重い感覚が空の脳を圧迫する。

何か、思い出してはいけないような気がする。

その直感が正しかったように、視界の中に顔を出した少女は驚いたような表情を見せた後、すぐにその表情を泣き顔へと変えてしまった。

「そ……そらあ……」

泣きながら寝そべったままの空へと抱きついてきた少女、愛美。

泣きながら抱きつかれるなんてここ数年無かったことで少しだけ戸惑ったが、それ以上に全身を襲う激痛に、思わず声を上げていた。

「いだい！ 痛い！ ちょっと、離れる、愛美！」

「うわっ！ ご、ごめん！ 大丈夫？」

脳に焼きつきそうな痛みを必死に堪えて、何とか目を開けられるほど回復する。

四肢はほとんど動かせず、首だけは大丈夫なのだが、どうにも視界がはつきりしない。

「俺……どうしたんだ？」

どうして眠っているのか、どうして学校ではなく高嶺の家にいるのか、そもそも今はいつなのか。

そんな疑問が次々と沸いてくるが、愛美はそんな空の心情を知らずに、ただ泣き顔を手で拭いていた。

「あのね、あのね……えつと、真紅がここがいつて……御子柴の家に連れて行ったら、大騒ぎになるから……」

「大騒ぎ？ いったい、何が……」

空の両親なら大抵のことは笑ってやり過ごすことができる。

それを知らない真紅ではないだろう。

承知した上で判断したということは、それなりにやばいことが起こったということなのだろう。自分の身に起こったのがどんなことなのかわからない。正直に言えばさほど気持ちいいものではなく、さらにあけすけに言うとしたら、とつとあつたことを知りたい。

今の愛美相手ではそれも難しいだろう。

そんなことを思っていると部屋のドアが開き、疲れた表情の真紅が顔を見せた。

「ん？ 起きたのか、空」

「ああ。何があったか聞きたいんだけど」

「そうだな……ちょっと待て。伝えていいものなのか、俺の判断じやできない」

「はあ？ いったい何が……」

身を乗り出そうとして、激痛で再度悶絶する。

小さく笑った真紅は腰に挿していた六花を壁に立てかけると、部屋に備え付けられていた内線電話へと手を伸ばした。

番号を押して、受話器を耳に押し当てる。

言葉少なに会話を切ると、真紅は小さく溜め息をつき、ベッドの隣に椅子を寄せて座った。

「いいってさ。精神的ダメージはさほどないだろうから、だと。ほら、愛美。泣いてるだけなら自分の部屋に戻ってた方がいいぞ？」

大丈夫、と首を振って愛美はベッドに腰を下ろした。

上下の揺れが激痛を誘発し、思わず眉をしかめてしまったが、今は自分のみに何があったのか知ることが優先だった。

痛みなど関係なく、空は真紅の言葉へと意識を集中させた。

「簡単に言うと、お前は一回死んだんだ」

「……は？」

真紅の言葉を脳が拒絶する。

当然といえば当然なのかもしれない。

いきなり”お前は死んだんだ”なんて言葉を向けられて、簡単に受け入れられる方がどうかしている。

半ば反応を予想していたように、真紅は言葉を続けていく。

「叶が作った薬のせいだな。致命傷になる傷が一瞬で回復した。自我を失ってたお前は、俺たちに向かって攻撃してきてな。そこで致命傷を受けたんだ。でも、お前はその傷を一瞬で治して、すぐに気を失った。覚えてないだろう？」

黙って頷くしかなかった。

全身の痛みと思い出せない記憶、そして腕や首筋に包帯を巻いた状態の真紅を見てしまったのは、それが冗談でないことくらい簡単にわかる。そもそも真紅が冗談を言うなど、ありえないといつてもよかった。

しかしそうすると、自分は本当に真紅たちへ銃口を向けたことになる。同時に、致命傷を受けていたのだと認めることになるのだ。

混乱、という表現が一番似合うだろう。

「ともかく、その後丸三日眠り続けたんだ。体は動かせないだろうが、心配で付き添ってた愛美の相手でもしてるんだな」

「え？ ちよつと待て、三日？ つかお前、どこに……」

立ち上がった真紅を引きとめようと、空は何とか声を放つ。

けれど真紅は口元をゆがめて笑い、手を上げながら背を向ける。

「お前が寝てる間に、七夜が色々持ってきた。今はその整理とかに時間を割いてるんだ。お前が起きたことも伝えてこないといけなし」

空の静止を聞こうともせず、真紅はさっさと部屋を出て行った。

残されたのは動けない空と、何とか涙を流すまいと必死になって

いる愛美だけ。

相手をしようにも頭を撫でてやることも、優しい言葉をかけてやることもできない。

ただ黙って、愛美が落ち着くのを待つしかできなかった。

「ご、ごめんね？ いきなり泣いちゃって」

「……いや、そりゃいいんだけどさ。さっきの話、マジ？」

「……まじ」

泣きそうな表情で空を見下ろし、愛美は一粒だけ涙をこぼす。

涙はシーツを被った腹部に零れ落ち、純白のそれに吸い込まれていく。

「あの時、空、まるであいつらみたいだった」

あの時といわれても、記憶はない。

真紅たちに攻撃したとき、愛美も近くにいたとしたらその姿を見ていたことになる。

いったいどんなものだったのか聞こうと思ったが、その表情を見る限りさほどまともなものでもないのだろう。大方、理性を失ったゾンビみたいな行動に出たに違いない。

何も聞こうとしない空をよそに、愛美は小さく口を開いた。

「皆に銃口を向けて、躊躇いなく引き金を引いて。怖かったよ、あ

の時の空」

「……そうか」

「……うん」

それ以上、聞いていることができなかつた。

泣き出しそうな幼馴染に、無理矢理語らせることは空の心が許さない。

痛む身体を無理に動かして、全身から汗が吹き出しながらもそつと愛美の頭へと乗せる。柔らかく細い髪をそつと撫でて、空はただ黙って彼女を慰める。

原因は叶の薬だつたとしても、彼女を泣かせてしまったのは自分の責任だ。それが胸を、強く締め付ける。

つたく、どうしてこうも、力がないのか。

自分の無力を痛感しながら、やはり空にはただ彼女を慰めることしかできないのだった。

空の部屋を出て、ドアに背を預けると真紅は大きく息を吐いた。

無事に意識を取り戻してくれた安堵感と、新たに浮上した問題に

対する憂鬱感。同時に襲ってくる二つの感覚に半ば辟易しながらも、真紅はただ腰に挿した刀へと手を預けた。

空が眠っている間に、七夜が敵と交戦した。

七夜が言うには暗殺分野において、現存するナイトメアの中では最強の男、葉山 修三。

巨大な鎌を武器に使う、本物の死神のような男だという。

戦闘タイプで言えば七夜と同じよなものだが、熟練度だけなら七夜より上。暗器の扱いも上手いということから、一対一の戦いは避けなければならぬ。

情報を手に入れたのは良かったが、彼がどうして七夜の消息を探れたのか、そこが一番の問題だった。

もしこの場所が特定されているのだとしたら、予想以上に時間が短いことになる。

真紅はまだ、六花の力を掌握し切れていない。天一は力を戻せず、空に至っては今現在、全く戦うことができずにいる。相手が攻めてきたとき、まともに戦えるのは七夜、康、恵理の三人だけ。

それ以前に、この場所を戦場にする事だけは許してはいけない。

ここを戦場にするということは高嶺家の人間を危険にさらすという事。

京や莊介を守りながら戦うのは、真紅以外にとっても厳しいもの

だろう。

ともすれば、こちらから打って出る必要がある。

「かといって……どうすればいいのかな」

打って出るといっても、前のように企業本社へ侵入することは難しい。本社の周りは警備が厳重になっているだろうし、前回のような妨害装置はそう簡単に作れるものでもなかった。

戦力的には明らかに劣勢。

総戦力をいきなり投入してくることはないだろうが、それでも劣勢は変わらない。

小さく溜め息をついて、預けていた背を離す。

とりあえずは叶の研究の報告を聞かなければならない。三日間で解析したデータを基に、新しい薬を作ったのだという。

その間、叶は学園を休んでいる。おそらくは徹夜したであろうその表情も、まだ若い女性のものとは思えぬものに変わっていた。

その頑張りに応えるためにも、最善の策を考えなければならぬ。

かといって今の自分にできることは、ただ考えることだけ。

実行に移せるほど具体的な対策は、まだまだ出来上がりそうにな

かった。

「ごういうのを、齒がゆい、って言うんだらうか」

自分の無力は知っているつもりだ。

だからこそやれるだけのことをやろうと、決めもした。

「……御子柴くん、目を覚ましましたか？」

右手から現れた無垢な少女の表情に、思わず意表をつかれた。

考え事をしていて、京の近づく気配すら察知できなくなっていた。

驚きを表に出すことなく、真紅は小さく笑って見せた。

「ああ。まだ動くことはできないみたいだけど、意識ははっきりしてるみたいだ」

「よかった……愛美ちゃん、凄く心配していましたから」

「……そう、だな」

空が眠っている間、愛美の行動は付き合いの長い真紅でも驚くものがあった。

倒れた空の部屋に常駐し、時には身体を拭いてやり、時には額をなでてやり、時には手を握ってやり。むしろ付き合いが長いからこそ、彼女の行動に驚いていたのかもしれない。

空と愛美は、確かに仲がいい。

互いにそれなりの家格があり、昔からほとんど一緒に行動していたのだから仲が悪いはずもないだろう。

けれどあんな、想い人を看病する女性、といえる行動を見せたのは今回が初めてだった。

いつも憎まれ口を叩き合っている二人。

兄妹のようなそれが、今は少しだけ崩れているようだった。

愛美の心がどうであれ、真紅には予想できなかった行動である。

「ともかく、空のことは愛美に任せよう。俺たちにもやらなきゃならないことがある」

「そうですね。あ、そういえば、朝倉先生が呼んでいました」

叶が呼び出すのも最近は珍しくない。

京の言葉に小さく頷いて、真紅は歩き出したのだった。

〔八十三話〕 空の目覚め（後書き）

お久しぶりです、広瀬です。

中間テスト期間も半ばが過ぎ、さて少しは時間ができたかなとも思っていたのですが、案外時間がなくて困っています。
ええ、それはもう頭が痛くなるほどに。

たぶん、知恵熱ですね。

ともかく書き溜めていたものは更新しなきゃ、と。
今回も短いですが更新しますよ〜。

それと、もう少し時間ができましたら一気に改編しようかなと思っていますので、色々変わるかもしれないのはご承知ください。

ではでは〜。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2442e/>

星のない夜空の下で

2010年10月15日10時00分発行